

古漢語における疑問目的語の語順変化メカニズム

松江 崇

端書き

本論文は、筆者が中国語で執筆した以下の研究書を日本語に翻訳し、かつ大幅に増補・修正を加えたものである。

- (a) 松江崇. 『古漢語疑問賓語詞序變化機制研究』 総頁数 286 頁. 東京: 好文出版. 2010 年 2 月.

上述の (a) は、以下の既発表論文に基づいた箇所を含む。[] 内は、当該論文が関係する本論文の章である。

- (b) 松江崇. 古漢語における禪母系疑問代詞目的語の語順変化, 『北海道大学文学研究科紀要』第 111 号, 25-49 頁. 2003 年 12 月. —— [第九章の 9.2~9.3, および 9.1 の一部等]
- (c) 松江崇. 上古漢語における人称代詞の“格屈折”をめぐって, 『饕餮』第 13 号, 138-168 頁. 2005 年 9 月—— [第十五章]
- (d) 松江崇. 古漢語における匣母系疑問代詞目的語の語順変化, 『東ユーラシア言語研究』1, 117-139 頁. 東京: 好文出版. 2006 年 3 月. —— [第八章、第十章および第十二章等]
- (e) 松江崇. 上古中期禪母系疑問代詞系統中句法分布的互補現象, 『漢語史学報』6, 71-89 頁. 2006 年 12 月. —— [第九章の 9.1 等]
- (f) 松江崇. 馮勝利氏の韻律文法理論について——古漢語疑問代詞目的語語順変化についての馮説の検討——, 『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』, 100-124 頁. 東京: 好文出版. 2007 年 4 月. —— [第六章]
- (g) 松江崇. 也談早期漢譯佛典語言在上中古間語法史上的價值, 『漢語史学報』8, 114-133 頁. 2009 年 9 月. —— [第三章]
- (h) 松江崇. 略談《六度集經》語言的口語性——以疑問代詞系統為例——, 『東亞經典詮釋中的語文分析』, 129-166 頁. 台北: 台灣學生書局. 2010 年 6 月. —— [第十七章]

本論文作成に際しては、上記論文 (g) (h) の日本語版に相当する下記論文 (i) (j) を収録し、さらに新たに下記論文 (k) (l) に相当する内容の章を増補した。

- (i) 松江崇「早期漢訳仏典言語の上中古間漢語文法史資料としての価値」『饕餮』第 18 号

- (中国人文学会), 112-141 頁, 2010 年 9 月. —— [第三章]
- (j) 松江崇. 『六度集経』言語の口語性について—疑問代詞体系を例として—, 佐藤鍊太郎・鄭吉雄主編『中国古典の解釈と分析—日本・台湾学術交流の記録』, 95-126 頁. 札幌: 北海道大学出版会. 2012 年 3 月. —— [第十七章]
- (k) 松江崇. 上古中期漢語の否定文における代詞目的語前置現象の生起条件, 『木村英樹教授還暦記念 中国語文法論叢』. 東京: 白帝社. 2013 年 5 月. —— [第十六章]
- (l) 松江崇. 漢語語彙史における単音節語と複音節語の「共存/競争」現象について, 『火輪』36, 2-14 頁. —— [第十八章の主要部分]

上述の本論文と既発表論文との対応関係は大凡のものであり、上記研究書 (a) および既発表論文 (b) ~ (l) を本論文へ収録する際、増補・修正を行っている。内容上異なる点を少なからず含むことを付言しておきたい。

なお、本論文の原本とも言うべき (a) に対する本論文における主要な増補・修正箇所は、以下のようにまとめられる。内容上の最も大きな変更点は下記 (2) である。

- (1) 現代中国語で書かれた地の文をすべて日本語に翻訳し、また用例として引用した古文獻の例文には、原則的にすべて日本語訳を付した。
- (2) 言語資料として、上古初期資料 (殷・西周) および近古前期資料 (隋唐・五代) を追加した。それを踏まえて、第十四章~第十七章の「附論」以外のすべての部分において、必要な修正・増補を行った。
- (3) 第七章「先行研究 (2): 他言語における目的語語順変化メカニズムの研究」、第十六章「上古中期漢語の否定文における代詞目的語前置現象の生起条件」、第十八章「結び」を新たな章として追加した。
- (4) (a) の「2. 語料選擇及其相關的問題」に相当する内容を、第二章「文献資料について」と第三章「早期漢訳仏典言語の中古文法資料としての価値」の二章に分けて記述した上で、とりわけ第二章について大幅な増補を施した。
- (5) 中古漢語の主要資料として扱った漢訳仏典のうち『中本起経』『六度集経』『雑宝蔵経』から原文を引用する場合、底本の『大正新修大蔵蔵』所収のテキストに依拠するだけでなく、国際仏教学大学院大学「日本古写本データベース」所収の「金剛寺一切経」(デジタル画像版) との字句の異同を逐一示すこととした (ただし主要資料のうち『過去現在因果経』については「金剛寺本一切経」に未収である)。
また、中古漢語の主要資料として扱った漢訳仏典のうち『大正新修大蔵蔵』所収のテキストと「金剛寺一切経」所収のテキストとで構成が大きく異なる『雑宝蔵経』について、両者の対応関係を提示した (第二章 2.5.3.2 の【図表 2-4】)
- (6) 上古漢語或いは中古漢語の再構音について、(a) では李方桂 1971「上古音研究」(『清華学報』9(1)(2)) の体系に依拠していたものを、本論文では、Schuessler, Axel 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese*, Honolulu University of Hawai'i Press の体系

による再構音に改めた。

- (7) その他、(a) の刊行以降に発表された研究を補うなど、内容を修正し、不適切な用例、単純なミスプリントなどについて、適宜改めた。

また、上記研究書(i)および本論文執筆に際しては、下記の研究費の援助を得ることができた。記して謝意を表す。

- (1) 「上中古漢語における機能語体系の通時変化のメカニズム—新体系の区域拡散の視点から—」(日本学術振興会・科学研究費・若手研究(B)(課題番号 18720094), 2006年度 - 2008年度, 研究代表者: 松江崇)
- (2) 「日中両国資料による中古漢語研究の新展開」(三菱財団・平成 18 年度人文科学研究助成, 2006 年度 - 2008 年度, 研究代表者: 松江崇)
- (3) 「中国語の構文及び文法範疇の歴史的変容と汎時的普遍性—中国語歴史文法の再構成」(日本学術振興会・科学研究費・基盤研究(B)(2)(課題番号 19320057), 2007 年度 - 2010 年度, 研究代表者: 木村英樹)
- (4) 「漢語文法史の視点による早期漢訳仏典言語研究」(日本学術振興会・科学研究費・若手研究(B)(課題番号 21720130), 2009 年度 - 2011 年度, 研究代表者: 松江崇)
- (5) 「中国語文法史の歴史的展開——構文と文法範疇の相関的変遷の解明」(日本学術振興会・科学研究費・基盤研究(B)(課題番号 23320082), 2011 年 11 月 - 2015 年 3 月, 代表者: 大西克也)
- (6) 「漢語語彙史における複音節化現象の総合的研究」(日本学術振興会: 基盤研究(C)(課題番号 25370454), 2013 年度-2016 年度, 研究代表者: 松江崇)
- (7) 「古代中国語方言の動態的研究」(日本学術振興会: 基盤研究(C)(課題番号 18K00532), 2018 年度-2022 年度(予定), 研究代表者: 松江崇)

目次

端書き	i
目次	iv
凡例	x
I部：本論	1
第一章 問題の所在	2
第二章 文献資料について	7
2.1 原則	7
2.2 上古初期の言語資料	8
2.2.1 本論文における上古初期資料の扱い	8
2.2.2 主要資料	9
2.3 上古中期の言語資料	11
2.4 上古後期の言語資料	17
2.5 中古期の言語資料	19
2.5.1 『中本起経』二卷（大正蔵 NO.196）	21
2.5.2 『六度集経』八卷（大正蔵 NO.152）	23
2.5.3 『雑宝蔵経』十卷（大正蔵 NO.203）	30
2.5.4 『過去現在因果経』四卷（大正蔵 NO.189）	32
2.5.5 その他の漢訳仏典	34
2.6 近古前期の言語資料	36
2.6.1 本論文における近古前期の扱い	36
2.6.2 主要資料	37
第三章 早期漢訳仏典言語の中古文法資料としての価値	39
3.1 議論の前提となる諸問題	40
3.2 完了動詞「已」	41
3.2.1 問題の所在	41
3.2.2 本論文の解釈	47
3.3 人称代詞の複数接辞	57
3.3.1 問題の所在	57
3.3.2 本論文の解釈	59
3.4 本章のまとめ	62
3.4.1 早期漢訳仏典特有の文法現象と漢語の口語との関係を判断する基準	62

3.4.2 疑問目的語の語順変化を検討するための資料価値.....	63
第四章 上古中期漢語における目的語前置現象とその例外.....	67
4.1 疑問代詞目的語前置現象.....	67
4.2 「/何/-X」疑問フレーズ目的語前置現象.....	76
4.3 否定文における代詞目的語前置現象.....	81
4.4 その他の目的語前置現象.....	87
4.4.1 代詞目的語「是」の前置現象.....	87
4.4.2 「惟+X」型目的語の前置現象.....	88
4.5 前置疑問目的語の統語的位置に関する問題.....	89
第五章 上古漢語における目的語前置現象発生要因.....	95
5.1 通時的観点からの解釈.....	95
5.2 通時的観点と共時的観点を併せた解釈.....	97
5.3 共時的観点からの解釈.....	98
5.4 本論文の見解.....	99
第六章 疑問目的語語順変化メカニズムに関する先行研究.... ——馮勝利の韻律文法理論	102
6.1 先行研究の概要.....	102
6.2 馮勝利のストレス理論について.....	104
6.2.1 foot と韻律詞(PrWd).....	105
6.2.2 枝分かれストレス規則.....	106
6.2.3 普通ストレス.....	106
6.2.4 韻律衝突.....	107
6.3 疑問目的語語順変化メカニズムについての馮勝利理論の概要.....	108
6.3.1 前置疑問代詞目的語の統語的位置.....	108
6.3.2 語順変化のメカニズム.....	111
6.4 馮勝利氏の韻律文法理論とその前提における問題.....	114
6.4.1 周秦時代の単音節疑問代詞は weak form か?.....	114
6.4.2 馮勝利(2000)の韻律理論と矛盾する言語事実.....	118
6.5 疑問目的語語順変化の過程に対する解釈能力の問題.....	123
6.6 本章のまとめ.....	136
第七章 他言語における目的語語順変化メカニズムの研究.....	138
7.1 本章の目的.....	138
7.2 Lehmann(1973)——「借用」による語順変化のモデル.....	138
7.2.1 基本語順と他の類型論的特徴の含意関係.....	138
7.2.2 原始印欧語の再構と目的語語順変化メカニズムの推定.....	139
7.3 Vennemann(1974)——統語的曖昧性による語順変化のモデル.....	141
7.4 Lass(1994)——韻律構造の変化と類推による語順変化メカニズムのモデル.....	144

7.4.1	英語史における語順の概述.....	144
7.4.2	韻律構造の変化と類推による語順変化のメカニズム.....	145
第八章	通時的観点による疑問目的語語順変化の類型.....	148
第九章	単音節疑問目的語の語順変遷（一）——禪母系疑問代詞目的語.....	150
9.1	上古中期における状況——禪母系疑問代詞の統語的相補分布.....	150
9.1.1	〈一人〉を指示する用法.....	151
9.1.2	〈+人〉を指示する用法.....	155
9.2	上古後期における状況.....	175
9.2.1	語順概況.....	175
9.2.2	語順変化メカニズム.....	177
9.3	中古期における状況.....	182
9.3.1	語順概況.....	182
9.3.2	語順変化メカニズム.....	184
9.4	近古前期における状況.....	186
第十章	単音節疑問目的語の語順変遷（二）——非禪母系疑問代詞目的語.....	188
10.1	上古中期における状況.....	188
10.2	上古後期における状況.....	189
10.3	中古期における状況.....	193
10.3.1	語順概況.....	193
10.3.2	語順変化メカニズム.....	197
10.4	近古前期における状況.....	202
10.4.1	語順概況.....	202
10.4.2	語順変化のメカニズム.....	202
第十一章	複音節疑問目的語の語順変遷（一）——「/何/-X」疑問フレーズ目的語.....	205
11.1	上古中期における状況.....	205
11.2	上古後期における状況.....	207
11.2.1	語順概況.....	207
11.2.2	語順変化メカニズム.....	211
11.3	中古期における状況.....	212
11.3.1	語順概況.....	212
11.3.2	語順変化メカニズム.....	218
11.4	近古前期における状況.....	220
第十二章	複音節疑問目的語の語順変遷（二）——「何 X」疑問代詞目的語.....	224
12.1	上古既出の「何 X」疑問代詞目的語：「何等」「何所」.....	225
12.1.1	「何等」の語順概況.....	225
12.1.2	「何所」の語順概況.....	227

12.1.3 「何等」及び「何所」の語順変化メカニズム.....	233
12.2 中古新出の「何 X」疑問代詞目的語：「何物」「何處」「何許」.....	237
12.2.1 語順概況.....	237
12.2.2 語順維持のメカニズム.....	240
第十三章 結論.....	242
13.1 語順変化の内実.....	242
13.2 語順変化の要因.....	242
13.2.1 質的变化をもたらした要因.....	242
13.2.2 量的変化をもたらした要因.....	246
13.3 語順変化が上中古間に発生した理由.....	246
第十四章 附録：主要資料における疑問代詞体系と疑問目的語一覧.....	248
14.1 上古初期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順状況.....	248
14.1.1 『書経』（西周部分）における状況.....	248
14.1.2 『詩経』（西周部分）における状況.....	250
14.2 上古中期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順.....	253
14.2.1 『論語』における状況.....	253
14.2.2 『孟子』における状況.....	257
14.2.3 『戦国縦横家書』における状況.....	253
14.3 上古後期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順状況.....	263
14.3.1 『史記』（秦漢部分）における状況.....	263
14.4 中古期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順状況.....	273
14.4.1 『中本起経』における状況.....	273
14.4.2 『六度集経』（A部分）における状況.....	278
14.4.3 『雑宝蔵経』における状況.....	284
14.4.4 『過去現在因果経』における状況.....	293
14.5 近古前期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順状況.....	297
14.5.1 『遊仙窟』における状況.....	297
14.5.2 『伍子胥変文』における状況.....	300
14.5.3 『舜子変』における状況.....	302
14.5.4 『降魔変文』における状況.....	304
II部：附論.....	307
第十五章 上古漢語における人称代詞の「格屈折」をめぐって.....	308
15.1 目的.....	308
15.2 Karlgren 以前.....	309
15.2.1 主要な学説.....	309
15.3 格屈折説.....	312

15.3.1 説の概要	312
15.3.2 人称代詞の「格屈折」現象	313
15.3.3 人称代詞の「格屈折」の通時的意味	315
15.3.4 特徴と問題点	315
15.4 重読説	320
15.4.1 概要	320
15.4.2 特徴と問題点	322
15.5 強調説	326
15.5.1 概要	326
15.5.2 鈴木(1987)	326
15.5.3 鄭張尚芳(1987)・潘悟雲(2001)	327
15.5.4 特徴と問題点	329
15.6 「格表示の分裂現象」の観点	331
15.6.1 説の概要	331
15.6.2 特徴と問題点	333
15.7 「格標示の個別的生成」説の可能性	333
15.7.1 禪母系疑問代詞の上古中期における共時的状況	333
15.7.2 禪母系疑問代詞における相補的統語分布の生成過程	335
15.8 小結	337
第十六章 上古中期漢語の否定文における代詞目的語前置現象の生起条件	339
16.1 問題の所在	339
16.2 先行研究	340
16.2.1 記述的研究	340
16.2.2 前置現象の生起メカニズムに関する研究	340
16.2.3 前置目的語の統語的位置	341
16.2.4 合音否定詞をめぐる問題	342
16.3 本論文の仮説	346
16.3.1 原則	347
16.3.2 代詞目的語の前移を阻害する統語成分の存在による例外	351
16.3.3 説明の難しい例外	354
16.4 小結	354
16.5 『論語』『孟子』の否定文における代詞目的語一覧	356
16.5.1 『論語』の否定文における代詞目的語一覧	356
16.5.2 『孟子』の否定文における代詞目的語一覧	357
第十七章 『六度集経』言語の口語性について——疑問代詞体系を例として	359
17.1 問題の所在	359

17.2 『六度集經』について.....	359
17.3 「口語性」による言語成分の分類.....	361
17.4 『六度集經』における疑問代詞体系.....	361
17.4.1 疑問代詞体系概況.....	361
17.4.2 「焉」.....	362
17.4.3 純粹疑問を表す連用修飾語「何」.....	364
17.4.4 「孰」.....	368
17.4.5 「ゼロ疑問代詞」目的語.....	371
17.4.6 「何等」の欠如.....	374
17.4.7 「云何」が述語のみを担う現象.....	376
17.5 小結.....	378
17.6 余論：『六度集經』の上中古間文法史における地位.....	379
第十八章 結び——新形式の「拡散序列」.....	382
18.1 全章の総括.....	382
18.2 疑問代詞・疑問フレーズの新旧交替における「拡散序列」.....	382
18.2.1 機能的条件による拡散序列：純粹疑問から修辭疑問へ.....	382
18.2.2 統語的条件による拡散序列：連用修飾語から連体修飾語へ.....	387
18.2.3 言語的変異成分.....	388
参考文献目録.....	389
[言語資料].....	389
[研究論著].....	391

凡例

1. 漢字字体の使用原則

- (1) 本論文では日本語を表示する場合は、当用漢字を用い、中国語を表示する場合は、一律に繁体字を用いる（中国語を簡体字で表記する先行研究を引用する場合は、繁体字に変更して引用する）。

2. 用例の提示方法

2.1 用例の出典表示

- (2) 用例の出典は、用例の後の（ ）に出典文献名・篇名、及び底本における位置（冊数番号・頁数）を示す。「『論語』「八佾」1-138頁）」であれば、出典は『論語』の「八佾篇」、当該用例が底本である新編諸子集成『論語』（中華書局）の第一冊、138頁にみえるという意味（篇名や冊数番号は省略することがある）。各文献資料の底本は、本論文末の「参考文献目録」の「言語資料」において*を附した版本である。
- (3) 用例の出典が仏教文献の場合、篇名は省略し、底本たる『大正新修大藏經』における位置を頁数よりも細かく指定する。「『中本起經』4-123a）」であれば、『大正新修大藏經』第四冊、123頁上段の意（bは中段、cは下段）。必要に応じて「NO.196」のように大正藏における当該文献の番号を示すことがある。
- (4) 文献のうち『史記』『六度集經』については、原則としてその一部のみを言語資料とし、それぞれ『史記』（秦漢部分）（＝『史記』のうち秦漢の言語を反映した部分。本論文2.4の議論を参照）、『六度集經』（A部分）（＝『六度集經』のうち康僧会の原文に由来すると推定される部分、本論文2.5.2.3の議論を参照）のように表記する。
- (5) 引用用例の字句に「*」と「[]」とを付加し、両符合に挟まれた字句の版本による異同を示すことがある。「聖人、吾*不得而見之矣 [定州漢墓本「弗得而見之矣」]；…」であれば、「*」から「定州漢墓本…」に至るまでの字句「不得而見之矣」について、定州漢墓竹簡本では「弗得而見之矣」に作るという意味（原則として当該の箇所における議論に関わる異同のみを示す）。

版本の名称は通称・略称に従う。仏教文献の底本たる『大正新修大藏經』については、その校勘に用いられた、南宋代の『思溪藏』（「宋本」と略称）、元代の『普寧藏』（「元本」と略称）、明代の『嘉興藏』（「明本」と略称）を併せて「三本」と称することがある。

仏教文献『中本起經』『六度集經』『雜寶藏經』については、日本古写経である金剛寺本との異同を積極的に示す。金剛寺本との校合の際、字が同定できない場合は「■」、一字文の空欄になっている場合は「□」で示す。

- (6) 説明の便宜のため、「□」「▬」「〰〰〰」などにより、引用用例における特定の統語成分を強調することがある。動詞或いは介詞（前置詞）と、それらと直接的な統語関係を

結ぶ目的語からなる構造を強調する場合は、原則として「□」で目的語を表示し、「┌」でその目的語と動目関係を結ぶ動詞、或いは介目関係を結ぶ介詞を表示する。動目構造あるいは介目構造以外を強調する場合は、原則として最も強調すべき統語成分を「□」で、それ以外に強調すべき統語成分を「┌」で示す。

2. 2 用例の日本語訳

- (7) [] 内に示すものが当該用例の日本語訳。日本語訳にあたっては、必要に応じて各種の日本語・現代中国語の訳本・注釈書を参照したが、最終的には本論文による解釈を提示する（よって参照した訳本・注釈書を逐一注記することはない）。
- (8) 日本語訳のなかに下線「┌」を附し、引用用例における強調箇所に対応する箇所であることを示すことがある。ただし、必ずしも引用用例における強調箇所に厳密に対応している訳ではない。
- (9) 他の研究者が引用した用例にも、原則として本論文の解釈による日本語訳をつける。ただし、他の研究者の意図を汲む必要がある場合には、その意図に即した日本語訳をつけることもある。

2. 3 用例の本文

- (10) 出土文献・写本の引用などにおいて、僻字や通仮字の後に（ ）を附し、その字の示す語を表記するのに用いられる、より一般的な字を補うことがある。この（ ）の附加は、原則的として底本に従うが、適宜調整することもある。また、僻字の表示が技術的に困難であり、かつ当該の僻字での表記が重要な意味を持たない場合は、その僻字を表示せず、その代用として【 】内に当該語を示すのに用いられる一般的な字を入れることがある。

3. 記号

3. 1 言語形式を表示する記号

- (11) 統語成分（統語関係）を記号により簡略化して示すことがある。「T」「S」「V」「P」「O」「Ov」「Op」により、それぞれ主題、主語、述語動詞（動詞だけではなく形容詞が述語となったものも含むことがある）、介詞（前置詞）、目的語、述語動詞目的語、介詞目的語（前置詞目的語）を表す。
品詞も簡略記号により示すことがある。「N」「V」「P」「Aux」により、それぞれ名詞、動詞（形容詞を含むことがある）、介詞（前置詞）、助動詞を表す。よって「V」「P」は統語成分を表す場合と、品詞としての動詞・介詞を表す場合とがある。
- (12) 「何 o+V」における「何 o」のように、語あるいはフレーズの直後に小文字の「o」「s」「v」などを附加することがある。これは、当該の語あるいはフレーズが担う統語成分を補足するものである。略称は凡例（11）の記号に准ずる。「何 o」であれば、当該の「何」が目的語を担っていることを示す。他は類推されたい。
- (13) 「V1」のように動詞（形容詞を含むことがある）の後に数字を付加し、動詞の項数を

表すことがある。「V1」は一項動詞、「V2」は二項他動詞、「V3」は三項他動詞という意味。動詞の項の定義については、凡例(33)を参照。

- (14) 統語成分の配列は、原則として統語成分を「+」でつないで表現する。「何+N」であれば、「何」と「N」とが、「何」が前、「N」がその後に配置されるというシンタグマティックな関係にあることを示す。

統語成分の配列を表現する際、とくに修飾構造(偏正構造)を構成する統語成分の配列であることを明示する場合、「-」を用いることがある。「何-N」であれば、「何」と「N」とが修飾構造をなすことを示す。

- (15) 統語的に同一の階層に属する構造を「[]」で示し、階層構造を明示することがある。「何+[所+不容]」であれば、「所」と「不容」とが直接構成素をなし、「何」と「所+不容」とが直接構成素をなすことを示す。

- (16) 上記(14)は、統語レベルにおける文法成分(=統語成分)の配列を示す場合の原則である。語構成レベルにおける文法成分の配列は「+」あるいは「-」を用いず、形態素を直接に並べる方法により示す。「何X」であれば、語構成レベルにおいて「何」が前、「X」がその後に配置されるというシンタグマティックな関係にあること、すなわち「何X」全体で統語成分を形成していることを示す。

- (17) 「∅」は、理論的に仮定されたゼロ形式の形態素(音形式を欠く形態素)を示す。

- (18) 「/何/」という表記により、単音節疑問代詞「何」「安」「奚」「曷」などを包括して示すことがある。

- (19) 「/如(X)何/」という表記により、固定的構文「如(X)何」「若(X)何」「奈(X)何」を包括して示すことがある。「如(X)何」構文については、凡例(27)を参照。

- (20) 「何所<+場所>」「何所<-場所>」のように、疑問代詞「何所」のうち、場所を指示するものと、場所以外の一般事物を指示するものとを区別して示すことがある。両者の違いについては、本論文12.1.2の議論を参照。

- (21) 主に第九章での議論に際して、次のような表記で意味的概念を示すことがある。

「<+人>」により、疑問代詞の指示対象が「人または人の集団」である用法を、「<-人>」により、疑問代詞の指示対象が「人または人の集団」以外である用法を示す(本論文9.1参照)。

「<範囲限定>」により、主題(topic)のうち、意味上、疑問代詞の指示範囲を制限しているものを示す(本論文9.1.1.1参照)。

3. 2 推定音価

- (22) 疑問代詞などの語彙の推定音価を示すことがある。どの研究者の再構音であるのか明記していない場合は、原則としてSchuessler(2009)の体系による上古推定音価(OCM)を示す。

4. 用語・術語の意味内容

4. 1 研究対象である言語の名称

- (23) 本論文の研究対象である漢民族の言語 (Chinese) については、原則として「中国語」ではなく「漢語」と称する。ただし、現代の漢語については、我が国で「中国語」という表現が定着していることから、語史研究の対象として言及する場合を除いて、「現代中国語」あるいは「中国語」と称することがある。

4. 2 漢語史の時代区分

- (24) 漢語史の時代区分を便宜的に次のように定める。

I. 上古漢語 … 殷～西漢

I-1 上古初期漢語 … 殷・西周

I-2 上古中期漢語 … 東周 (春秋戦国)

I-3 上古晩期漢語 … 秦・前漢

II. 中古漢語 … 東漢魏晉南北朝

II-1 中古前期漢語 … 東漢・魏晉

II-2 中古後期漢語 … 南北朝

III. 近古漢語…隋唐五代・宋代

III-1 近古前期漢語 … 隋唐五代

III-2 中古後期漢語 … 宋

IV. 近世漢語…元・明・清 (本論文では近世漢語の下位区分は問題にしない)

- (25) 漢語史の時代区分に関連して、区分名或いは王朝名を用いて「X 期以前」「X 期以降」のような表現をすることがある。その場合、「X 期以前」には X は含まれないが、「X 期以降」には X 期が含まれることとする。

4. 3 言語単位に関する用語 (統語構造・構文・句・フレーズ)

- (26) 上古漢語における基本的な統語構造 (統語関係) として「主述構造」(主語+述語)、「動目構造」(動詞+目的語)、「修飾構造」(修飾語+中心語)、「並列構造」(前項+後項)、「連動構造」(前項動詞+後項動詞) をみとめる。中古漢語以降は、「動補構造」(動詞+補語) が加わる。以上は実質語のみからなる構造であるが、機能語を含む統語構造として、介詞を含む「介目構造」(介詞+目的語)、構造助詞「所」が動詞句・形容詞句に前接され(「所+動詞句・形容詞句」、全体として名詞句相当の統語的機能を備える「「所」構造」(おおよそ太田(1964:27-33・§ 62)の言う「「所」字連語」に相当する) などがある。

- (27) 統語構造のうち、構造全体が特定の意味と結びついているものを構文と称する。例えば、「如(X)何」構文」は、統語構造全体として「(X を) どのようにするか」といった広義の使役的な意味と結びついているため、独立した構文とみなす。他に、「「孰與」構文」(本論文 9.1.1.2)、「「何與」構文」(本論文 14.3.1.1)、「「何如」構文」(本論文 14.4.1.1)、「「孰如」構文」(14.4.2.1)、「「何用」構文」(本論文 14.5.4.1) などがある。

- (28) 「句」は統語構造のうち、構造全体として何らかの共通する統語機能を有するものとする。例えば「動目構造」という統語構造は、全体として主要部たる動詞と共通する統語機能を備えているため、構造全体の品詞性を問題にする場合には「動詞句」と称する。

叙述の便宜上、内心構造からなる「X句」は、「X」と「Xを主要部とする句」の双方を含むこととする。なお、外心構造たる「介目構造」の場合は、「介詞」はその主要部ではないものの、便宜上「介詞句」と称する。

- (29) 「フレーズ」は統語構造のうち、全体として特定の非統語的機能を共有する構造を一括して称するのに用いる。具体的には、疑問代詞をその中に含み、疑問機能を共有する「疑問フレーズ」に用いる（凡例(31)参照）。

4. 4 疑問代詞・疑問フレーズ・疑問目的語

- (30) 「疑問代詞」は、指示対象について何らかの解を求める機能を備えた代詞を指す。但し主語または目的語を担い得るなど、その統語機能が名詞性であるものに限ることとし、専ら連用修飾語のみを担う副詞性のものは含めない。

また「幾」「幾何」などのいわゆる疑問数詞は、名詞性の疑問代詞ともみなし得るが、目的語となった場合も動詞・介詞に前置されず、原則として語順変化の問題と関わらないため、本論文では疑問代詞には含めない。

- (31) 「疑問フレーズ」は、その内部に疑問代詞を含み、「疑問」という機能を共有する名詞性或いは動詞・形容詞性の種々の統語構造を指す。「何+N」の他、「何+V」なども含まれる。

- (32) 「疑問目的語」は、疑問代詞が目的語をと担った「疑問代詞目的語」と、疑問フレーズが目的語を担った「疑問フレーズ目的語」を統括した表現とする。

4. 5 動詞とその項（項数、項構造）に関する用語

- (33) 「一項動詞」「二項動詞」「三項動詞」のように動詞などの述詞（述詞性構造を含む）を、その「項」(argument)の数（＝項数）によって分類することがある。本論文で言う「項」は、当該の述詞を述語とする「最も単純で基本的な文」——これを厳密に定義することは困難であるけれども——において、その述詞が介詞を使わずに直接的に関連し得る名詞性成分のことを指す。例えば「一項動詞」であれば、その動詞を述語とする最も単純で基本的な文において、関連し得る名詞性成分が一つである動詞という意味。他は類推されたい。なお、本論文で言う上述の「項」は、大凡、袁毓林(1998)の提案する「配價層次」(valence hierarchy)における「位」(position)に当たるものである（袁毓林 1998:100）。

また、本論文では「項」の概念を動詞・形容詞だけでなく、介詞に対しても適用することとし、当該の介詞が直接的に関連し得る名詞性成分を、その介詞の「項」と称することがある。

本論文で言う「項構造」は、当該の述詞の各項が種々の文型において担う意味役割

(動作者・受動者など)と統語成分(主語・目的語など)との対応関係を類型化したものを指すこととする。

- (34)「他動詞」「自動詞」のように動詞を、その統語機能に着目して分類することがある。通常目的語を要求するものが他動詞、通常目的語を要求しないものが自動詞である。よって本論文の「他動詞」「自動詞」は、他動性(transitivity)の程度という語彙意味論的な基準により分類したものではなく、統語的な概念である。

I 部：本論

第一章 問題の所在

中国史における後漢・魏晉という時期は、政治的・社会的な大混乱期であったと同時に、言語面においても上古漢語（殷～前漢）が中古漢語（後漢魏晉南北朝）へと変質を遂げた、重要な転換期の一つでもあった。

この後漢・魏晉期において、漢語——一般に「中国語」と呼ばれる漢民族の言語——に如何なる変化が生じたのかについては、すでに少なからぬ記述的研究が蓄積されている。文法項目に関しては、夙に Karlgren(1951)が後漢に成立した『論衡』を資料として上古漢語との間に存在する文法的差異について体系的な記述を行っている。その後、Dobson(1964)、志村(1967)、牛島(1971)、太田(1988)、柳士鎮(1992)、魏培泉(2003)といったすぐれた研究成果が相次いで現れたことにより、上古と中古との間に生じた文法変化の主要項目は基本的に明らかにされたと言ってよい。そのうち言語体系全体に影響が及ぶ重要な文法項目としては、①paradigmatic な面においては複雑な代詞体系・否定詞体系の崩壊が生じたこと、②sintagmatic な面においては複音節語が大量に発生し、さらに動補構造およびアスペクト助詞等が出現したこと、などが挙げられる。そしてまさにこの時期に、音韻面でも大きな変化が生じていたことが重要である。王力(1985:82-83)は、前漢期の音韻体系は先秦期のそれとの差は顕著ではなく、後漢に到ってはじめて変化が大きくなった——主に韻部の音価と韻部所属字の内わけの面で変化が生じた——と指摘し、李方桂(1971:75)は、羅常培・周祖謨(1958)による漢魏晉南北朝期の韻部の分合の研究を踏まえつつ、大凡、漢代の音韻体系は上古音に近いが、南北朝のそれは『切韻』音に近く、三国・魏晉期が変動の鍵となる時期だったと総括している。研究者によってどの音韻項目の変化を重く見るかの違いがあり、この問題についての音韻史研究者の見解は完全に一致しているわけではないものの、後漢あるいは魏晉期を音韻体系の転換期の一つとみることに大きな問題はないであろう。以上を要するに、後漢・魏晉期は、漢語史において文法面・音韻面のいずれの面でも重要な変化が生じた時期であったと言える。

しかし、上中古間において、文法・音韻等の各項目がいったいどのような関連を持ちつつ変化したのか、さらにはそのような変化が如何なる要因に動機づけられたものなのか、といった変化の具体的なメカニズムについては、未だ十分に解明されたとは言いがたい。この観点から極めて重要なことは、早くに Karlgren(1926:44)が、紀元後数世紀には音韻の簡略化の結果として口頭言語での語の同一化・不明確化が生じたため、言語を明瞭化する手段として複合語が多く用いられるようになったと主張していることを考慮するだけでも理解されるはずである¹。Karlgren(1926)の後、多くの研究者がこの語彙の複音節化の現象に注目し、その発

¹ここで紹介した Karlgren 説の内容は、以下の原文に基づく。

A few centuries after Christ, (the exact date is impossible to fix), the spoken language had to procure new expedients which would make the language clear and practicable, in as far as the pruning of words had caused them to become identical and undistinguishable, i.e. incomprehensible to the person addressed. And this gradually took place. The vocabulary was largely changed into compound words

生の要因、出現頻度、内部構造といった問題について検討を加えた（程湘清 1992、許威漢 2001 等）。そしてこの問題を総括・整理した魏培泉(2003:78)は、複音節複合語が急増した要因について、①文明の発達によってより多くの語彙が必要になったこと、②中古では音韻が簡略化し、同音語が大幅に増加したため、複合語により区別せざるを得なくなったこと、③上古に常見される一語多義の現象が（意味上の）精密化を実現するために多くは複合語という手段を利用して区別を行ったこと、という三点を挙げ、これらの要因はいずれも意味の明確化の要求と密接な関係があると指摘している。

このように語彙の複音節化現象については、そのメカニズムが明らかにされたかのようなものであるが、上中古間に生じた変化は複音節語の急増と音韻体系の簡略化だけに限られるわけではない。そして上述の魏培泉(2003)による語彙の複音節化の要因についての分析も、最終的には言語体系全体の変化のメカニズムの中に位置づけてはじめてその妥当性が判断され得ると考える。本論文がこの点を強調するのは、近年盛んになりつつある上中古間の言語変化の総体としての性質を検討する研究に注目しているからである。例えば、梅広(2003)は、使成表現の上中古間における変遷過程を論じたなかで、上古漢語の動詞構造は総合性(synthetic)を備えていたが、上古以降は分析性(analytic)を強める方向に発達したことを指摘した上で、上古漢語は「並列」を統語構造の原則とするタイプの言語であったが、後漢以降、すなわち中古漢語以降は、「偏正」或いは「主従」を統語構造の主体とするタイプの言語へと類型論的な変化を遂げたのだと主張している²。また宋亜雲(2006)は、上古漢語とそれ以降

instead of simple ones, and this was a great step towards making things clearer.

〔紀元後数世紀になると（厳密な時期は確定できない）、語の（音形式の）単純化により、語どうしが同一に、或いは区別不可能にするまでに至っていた——すなわち人が話したことをたやすく理解できなくなってしまっていた——ために、口頭言語は、それ自身を明確で実用的なものとするための新たな手段を手に入れなければならなくなっていた。そしてその手段がしだいに生じてきた。語彙が単純語から複合語へと大規模に変化していったのである。そしてこのことは言葉を明確にしていくための重要な一歩であった。〕

以上の Karlgren 説の主旨を本論文の表現で言い換えると、音韻体系の簡略化により同音語が急増した結果、口頭言語では単音節語の同定が相対的に困難になったため、相互に関連する単音節語どうしを複合することにより、語の意味面での情報を増加させて語の同定を容易にするという手段がとられのだ、ということになる。

²ここで梅広(2003)がいう並列構造・偏正構造とは、狭義のそれではなく、前者はすべての構成素が構造的に同等である構造を概括したもの、後者は内部構造として head を有する統語構造を概括したもの（すなわち「主従」構造）を指す。そして、ある言語は偏正構造による表現を好み、また別の言語は並列構造による表現を好む傾向がみられること、そしてこの傾向が両種の言語的特性を反映したものであると主張する。以上の梅氏の主張の論拠は、上述の使成表現の他、上古漢語において偏正構造の二つの構成要素の間に出現する「意味的に無標」(semantically unmarked)な並列接続詞「而」が本来は並列関係ではない構造を並列構造として処理する機能を備えたものと解釈し得ること、また上古漢語には現代漢語では許容されない所謂 gapping 現象がみとめられることなどである。後者の gapping 現象について補足すれば、現代漢語では「*我打乒乓球，我哥哥網球。」は成立しないが（後節の動詞「打」が平行省略された文は不成立）、上古漢語では「躬自厚而薄責於人」〔自分自身に対しては厳しくとがめ、他人に対しては寛容にする〕（『論語』「衛靈公」4-1098）といった平行省略がみとめられる（前節の動詞「責」が平行省略された文が成立）、ということ踏まえたものである。

の漢語における使成表現や総合的な動詞表現、名詞の連用修飾語用法、動詞・形容詞の名詞化表現などの相違を整理しつつ、漢語が、上古後期以降、総合的な表現から分析的な表現へという方向で発展したことを包括的に論じている³。これらの研究は、表層的で個別的な言語変化のみに固執することなく、言語のより深い内部における変化の分析をも視野に入れたという点で、研究史上、大きな意義をする。かりに、上中古間の言語変化が、漢語の類型論的性質に及ぶほどのものであることが証明されれば、上中古間漢語史研究の成果は、類型論的な言語変化の過程を豊富な文献に基づいてあとづけたものとなり、歴史言語学研究一般、或いは言語類型論に対しても貴重な材料を提供し得るものとなる。漢語史研究は、遡り得る文献言語の時代の古さ、現存する文献言語の絶対量の多さ、そしてそれら文献言語の現代諸方言までの連続性の長さといった点において、様々な言語の歴史的研究のなかでも類い稀な条件を備えている。ただし、上述の梅広(2003)や宋亜雲(2006)の結論は、現状での「見通し」ともいべき性質のものであり、今後、上中古間の重要な変化項目の変遷過程を詳細に記述し、変化項目間の相互関係の解明を試みる研究を集積していった上で、その当否が検討されるべきである。換言すれば、そのような研究が集積されていってはいじめて上中古間の言語変化の総体としての性質が明らかにされ得るのである。その意味で、上中古間の言語変化を総体として捉えるマクロ的研究と、個別の変化項目のメカニズムを検討するミクロ的研究とは、相互補完的な関係にあると言えよう。

本論文は、以上のような問題意識のもとに、上古中期から中古にかけて生じた「疑問目的語」——疑問代詞が目的語をとった「疑問代詞目的語」と、疑問代詞が名詞句或いは動詞句などを修飾した統語形式が目的語となった「疑問フレーズ目的語」が含まれる——の語順変化のメカニズムを解明することを目的とするものである。ここで言う疑問目的語の語順変化とは、具体的には、上古漢語では、疑問代詞目的語および疑問フレーズ目的語が原則として直接的に動目関係を結ぶ動詞或いは介目関係を結ぶ介詞に前置されていたが((1-1)は疑問代詞目的語が動詞に前置、(1-2)は疑問代詞目的語が介詞に前置、(1-3)は疑問フレーズ目的語が動詞に前置)、中古漢語に至ると、多くの疑問代詞目的語および疑問フレーズ目的語が、直接的に動目関係を結ぶ動詞或いは介目関係を結ぶ介詞に後置されるようになった変化のことである((1-4)は疑問代詞目的語が動詞に後置、(1-5)は疑問代詞目的語が介詞に後置、(1-6)は疑問フレーズ目的語が動詞に後置)。本論文は、この語順変化のメカニズムを解明することを目論むものである。

(1-1) 達巷黨人曰：「大哉孔子。博學而無所成名。」子聞之，謂門弟子曰：「吾^何執。執御乎，執射乎。吾執御矣。」(『論語』「子罕」2-570)

³宋亜雲(2006)らの言う「総合」という概念は、本論文では「機能面での総合(性)」或いは「機能的総合(性)」と言い換えることにする。言語類型論で言う「総合的(synthetic)」なる概念はしばしば形態論的特徴を指し、一つの語が単一の語根からではなく複数の形態素から構成されるような言語的性質(一般には接辞の付加による)を言うのみ対して、宋亜雲(2006)ら近年の漢語史研究者の言う総合性は、一般には意味・機能上の概念を指しているからである。

〔達巷のある人が言った「偉大なことよ、孔子は。広く学ばれて、名をなすための専門などはお持ちにならない。」先生はこれを聞くと門下の弟子に言った「私は何をしようか。御者をやろうか、弓矢をとろうか。私は御者をやることにしよう。〕

- (1-2) 鍼子曰：「是不為夫婦，誣其祖矣。非禮也。何以能育。」(『左伝』「隠公八年」1-59)

〔陳鍼子は言った「これは(本当の)夫婦ということにはならない。先祖を欺いており、礼にかなっていない。どうして(子孫を)作ることができようか。〕

- (1-3) 孟子曰：「不仁者可與言哉。安其危而利其菑，樂其所以亡者。不仁而可與言，則何亡國敗家之有。…」(『孟子』「離婁上」1-497)

〔孟子が言った「不仁である者とは、語り合うことができるだろうか。彼らは危険を安全なもののみなし、災害を利益が得られるもののみなし、身を滅ぼす道を楽しんでいる。不仁であっても語り合うことができるのであれば、どうして(彼らが)国を亡ぼし家を没落させるようなことがあるか。…〕

- (1-4) 夫法度之功者謂何等也。養三軍之士，明賞罰之命，嚴刑峻法，富國強兵，此法度也。(『論衡』「非韓」436)

〔そもそも法度の効果とはどのようなことを言うのか。三軍の兵士を養い、賞罰の命令を明確にし、刑や法を厳格にし、国を富ませ兵を強くする。こういったことが法度なのである。〕

- (1-5)*優〔三本、聖語藏本「憂」〕陀夷言：「出城不遠，逢見死人。亦不知其從何而來。太子與我同時見之。太子問言『此為何人』…」(『過去現在因果經』3-631b)

〔優陀夷は(王に)言った「(太子は)城を出て遠く行かないうちに、死人に出くわしました。その者はどこから(その場に)来たのかは分かりませんでした。太子と私は同時にそれを見たのです。太子は(私に)たずねました『これは何者か?』…〕

- (1-6) 舉聲歎曰：「威靈感人，儀雅挺特。本事何師〔金剛寺本(?)〕，乃得斯容。」(『中本起經』4-148a)

〔(優吁は仏をみると)声をあげて賛嘆して言った「その威厳は人を感じ入らせ、その容貌の気高さは並ぶ者がいない。元々どんな師につかえてそのような容姿を持つようになったのでしょうか。〕

この現象を考察の対象とするのは、その具体的なメカニズムが未だ解明されていないために他ならないが、これが直接的・間接的に他の重要な変化項目と密接に関連しており、上述の上中古間における重要な変化項目間の相互影響関係を明らかにする研究の端緒となることが期待されるからでもある。

本論文 I 部では、上古中期(春秋戦国)から近古前期(隋唐五代)にかけての時期の疑問目的語の語順を、それと密接に関連する疑問代詞体系の変遷と併せて包括的に記述し、疑問目的語語順変化のメカニズムを解明することを試みる。まず、問題の所在を提示し(第一章)、

使用する文献資料に関する検討を行い（第二章、第三章）、上古中期漢語における疑問目的語の前置現象の文法体系内における位置と前置現象の生起条件、さらにその発生の要因についての議論を紹介する（第四章、第五章）。そして疑問目的語の語順変化メカニズムに関する有力な先行研究である馮勝利氏の理論の紹介と批判とを行い（第六章）、他言語における目的語語順変化に関する研究を概観した上で（第七章）、各種の疑問目的語の語順概況を示し（第八章）、それぞれの疑問目的語についての語順変化メカニズムを検討していき（第九章～第十二章）、本論文としての結論を述べる（第十三章）。以上の議論は、特定の文献における疑問目的語の悉皆調査に基づくが、その調査結果についても一章を設けて提示することとした（第十四章）。

本論文Ⅱ部は、Ⅰ部で論じた古漢語における疑問目的語の語順変化と関連する重要な文法現象について、個別に論じたものである。第十五章は上古漢語の人称代詞には「格屈折」がみられるとする学説をめぐる議論を紹介したものであり、第十六章は上古漢語の否定文における代詞目的語前置現象の生起条件について論じたもの、そして第十七章は重要な中古漢語資料である『六度集経』の言語の性質について論じたものである。最後の第十八章では、本論文の検討内容を踏まえた上で、今後の本格的な研究が待たれる検討課題について言及し、本論文の結びとした。

第二章 文献資料について

2.1 原則

およそ文献資料に基づいた文法史研究では、特定の時代・地域のもものとされるものが実際に当該の文献成立時の字句を保存する程度——「真実性」(authenticity)——が高いこと、またその言語が当該の文献資料の基礎方言を反映する度合い——「口語性」——が高いことが重要である⁴。このこと自体は自明であるが、問題は、現実に使用し得る文献資料から、相対的に真実性・口語性が高いものを如何に選定するかであろう。文献資料の真実性については、伝統的な文献学的方法による成果が現在でも重要であるが、口語性については文献学的方法のみからでは明確な解答は得られず、当該の文献言語そのものに対する分析を行う必要がある。本論文 2.2～2.3 において後述するように、上古の文献資料については、すぐれた先行研究の集積によって、その言語が一定の口語性を有するものか否かの言語学的研究が蓄積されているが、中古・近古の文献資料の口語性の検討は必ずしも十分とは言えない状況にある。とりわけ中古の文献資料は、その言語が上古漢語を擬古的に模倣した表現——「文言」的表現——を多く含む可能性があり、その言語が上古漢語と相対的に近いため、口語性の判断は相対的に困難と言える。本論文では中古の言語資料として早期漢訳仏典を採用したが、これは言語資料として様々な利点を備える一方、その口語性については上述の問題以外に何らかの非漢語の原典からの「翻訳」であることに起因する諸問題も考慮する必要がある。このように、中古の漢訳仏典言語の口語性については、現存の文献言語を対象とした言語学的分析を新たに行うことが必要であるため、章を改めて詳しく論ずることとする(本論文第三章)。

以上の他、本論文では言語資料を選択する際、当該の言語資料の「均質性」をも重視することとした。かりに研究の目的が上古から近古の漢語文法の概況を記述することであれば、均質性の低い言語資料を用いたとしても、その非均質性の幅が上古から近古の間を超えるものでなければ、大きな問題は生じない。むしろ資料とし得る言語の分量が増加する分、記述される文法項目の「漏れ」が少なくなり、記述の質を高めることに繋がるであろう。しかしながら、研究の目的が特定の文法項目の変化のメカニズムの解明にあるのであれば、言語資料の均質性の高さは必要不可欠な条件となる。当該の文法項目と他の変化項目との時間軸上の先後関係が重要になってくるからである。

以上において言及した「真実性」「口語性」「均質性」は、特定の言語資料の内的性質の間

⁴本論文では、文献資料の真実性について、当該の文献の言語資料としての価値に影響する範囲内でのみ問題とする。例えば、ある撰者の手によるものと伝承されてきたある文献が、別の撰者によるものと疑われる場合でも、その撰者の違いが文献言語の基礎方言(時期・地域)の違いに結びつかない場合は、その文献資料の真実性が低いとはみなさない。なお、本章では、文献資料の口語性の概念を、文献言語の体系全体のレベルで問題としているが、厳密には言語項目ごとに異なり得る。詳しくは本論文十七章の議論を参照のこと。

題であるが、その他に各時期の資料に反映された言語の「基礎方言の連続性」の問題も無視できない。なぜなら、一般にある文法項目の変化メカニズムを論ずる際、ある時期の言語資料Aにある状況Xがみられ、それにつづく時期の言語資料A'にはある状況X'がみられる場合、AとA'の基礎方言の連続性を前提として $X > X'$ という変化過程が推定される。しかし、かりにAとA'の基礎方言に大きな隔たりがあり、両者に連続性が存在しなかった場合、 $X > X'$ という変化過程の推定は極めて危ういものになってしまうからである。古文獻を漢語史研究の言語資料とする場合、基礎方言の連続性の観点から理想的な言語資料が近接する時期に存在していることはむしろ少ないが、可能な範囲で適切な言語資料を選択すべきである。

本論文は、以上の点に留意しつつ、上古初期（西周）、上古中期（春秋戦国期）、上古後期（前漢期）、中古期（後漢魏晋期）、近古前期（隋唐五代）の各時期の言語資料を選択した。これらの言語資料のうち、中心的なものについては、疑問目的語の語順状況についての悉皆調査を行い（その結果は本論文14章「附録：主要資料における疑問代詞体系と疑問目的語一覧」に収録）、他の文献資料を補足的に用いつつ、疑問目的語の語順変化の過程を詳細に記述することを試みる。以下、本論文において採用した上古初期、上古中期、上古後期、中古期、近古前期の言語資料を具体的に紹介していく。

2.2 上古初期の言語資料

2.2.1 本論文における上古初期資料の扱い

上古初期の言語資料は、殷代から西周にかけての漢語史における最古の資料である。当然のことながら、一般に古漢語の現象を検討する際には上古初期資料を無視することはできない。疑問代詞目的語の語順変化については、これが上古後期から中古にかけて生じたものであるために、上古中期の疑問目的語の状況を「起点」として議論を進めることになり、上古初期は自ずと「起点」の前段階を確認する資料という位置づけになろう。しかしながら、本論文では上古初期を上古中期の「前段階」として独立させて記述していくのではなく、第四章において上古中期と状況が異なる場合に注釈のなかにその異同を補足するに止めるなど、上古中期に対する補助的な資料として扱うことにする。その理由は、以下の三点である。

第一点は、疑問目的語の語順という文法項目に限定した場合、結論を先取りして言えば、当該の現象が上古中期以降に生じており、上古初期の状況をとりたてて上古中期の状況の「前段階」として、独立させて詳述する必要性は低いということである。さらに上古初期の状況が上古中期のそれと大きく異なるということもないため、語順変化のメカニズムを解明する際に、上古初期の状況が重要になることも考え難い。

第二点は、上古中期漢語が、甲骨文や西周金文、『詩経』『書経』といった上古初期漢語の直接の子孫であるのかどうかは疑わしいという点である。大西(1988)は、否定詞「弗」「勿」

の分用現象の有無、一人称代名詞「吾」「我」の使い分けの有無、「其」の領格を表す助詞としての用法の有無、「于」に導かれる補語の動詞に対する前置現象の有無などを踏まえ、「先秦時代の中国語は、必ずしも甲骨文・金文・『書経』等に反映されている方言の直系の子孫ではなく、共通の祖語を戴くとしても別系統の方言であり、場合によっては甲骨金文は、先秦一般の言語以上に先へと変化した方言を言語基盤としていたのではなかろうか」（大西1988:240-241）と推定している。よって上古初期の資料における状況を、検証を経ないまま上古中期漢語の「前段階」と位置づけるのは適切とは言えない。

第三点は、次節にみるように、真実性の点で信頼のおける甲骨文・金文といった出土文献には、疑問目的語の語順を論ずるに足る十分な用例を検出し得ないため、真実性・口語性・均質性のいずれの点でも多くの問題を抱える伝世文献を使用せざるを得ないからである。検証に足る十分な用例が無ければ、独立した時期として扱うことは難しい。

2.2.2 主要資料

周知のように、最古の時代の言語を反映する資料は殷代の甲骨文である。しかし、現在知られている範囲では甲骨文に疑問代詞の用例は確認されていない（郭錫良1994:18など）。上古初期の出土資料としては西周以前の金文も重要な言語資料であるが、字釈の段階での研究者間の見解の違いが大きく、確実に疑問代詞であると認定できる用例自体が非常に少ない。例えば、張玉金(2006:318)は、西周の金文にみられる疑問代詞は3例があると指摘するが（調査資料は『殷周金文集成』）、筆者の認定ではこのうち2例のみが疑問代詞の用例であり、いずれも連用修飾語として理由を問う用法（反語的用法も含む）と解釈され、後続する動詞の前置目的語とはみなし得ない⁵。また疑問代詞が連体修飾語となったフレーズが動詞・介詞の目的語となった疑問フレーズ目的語についても、筆者が『殷周金文集成』（修訂増補本）を調査した限りでは、その確実な用例を検出し得なかった。

よって本論文では、伝世文献を資料とすることになるが、上述のように、これらは真実性・口語性・均質性のいずれの点で問題を抱えており、扱いには慎重を要する。本論文では、そのうち『書経』『詩経』における西周以前の部分を主資料とすることとした。

『書経』については、まず各篇の真実性の問題に直面する。東晋期に梅賾により献上された「偽古文尚書」に由来する二十五篇の真実性は、歴代の考証学者の議論の的であり、清代

⁵ 筆者の認定では、『殷周金文集成』所収の疑問代詞は、『毛公鼎』（02841, 2-1541）の「害（曷）」、『曾伯【漆】簠』（04631, 4-3009）の「段（遐）」の各1例だけであり、いずれも理由を問う連用修飾語の用法である（ただし反語的用法）。前者の用例を挙げておく。

・ 𠄎(曷)畏天疾畏(威), 司余小子弗徂(及), 邦【將】害(曷)吉。(『毛公鼎』02841, 2-1541)
〔(しかし) 厳かな上天は突然に威厳と怒りを発せられた。子孫である私めが急ぎ国政に励まなければ、どうして国がよくなることがあろうか。〕

なお、本論文では金文資料については、『殷周金文集成』の他、高澤浩一編『近出殷周金文考釈』（第一集～第四集）所収の金文資料も参照したが、疑問代詞目的語・疑問フレーズ目的語の確実な用例は一例も確認できなかった。

の閻若璩の『尚書古文疏証』以降は偽作とみるのが一般的であるため、資料として扱わない。他の諸篇についても上古中期に大幅な改変がなされ、その言語も書き換えられた可能性が排除できないのであるが、その一方で上古初期の言語を一定程度は保存しているとも考えられる。諸篇のうち真实性・均質性が相対的に高いものを資料とするのが現実的であろう。この点に関して、顧頡剛(1926/1982)は、内容面といくつかの語句を根拠に、『今文書経』各篇のうち、「盤庚」(以上「商書」)、「大誥」「康誥」「酒誥」「梓材」「召誥」「洛誥」「多士」「多方」「呂刑」「文侯之命」「費誓」「秦誓」(以上「周書」)の十三篇は後世の偽作ではないと考えられると結論する。また裘錫圭(1981/1992)は、具体的な語句の対照により、言語面・思想内容面から『書経』などの伝世文献を、甲骨文や金文などの出土資料と広範囲に比較・対照し、「虞夏書」諸篇は後人の偽作、「湯誓」を除く「商書」諸篇は殷代の祖先本を基に周代に大幅な変更が加えられたもの、「大誥」以下の「周書」諸篇はその文字は伝承・刊刻の過程で少なからぬ誤謬が生じているが、大略は本来の面目を保っているもの、との結論を導き出している。本論文は、以上の顧頡剛(1926/1982)ならびに裘錫圭(1981/1992)の議論に基づいた上で、さらに張玉金(2006:7)が、「無逸」「君奭」「立政」「顧命(「康王之誥」を含む)」については「大誥」「康誥」などと内容面・言語面で大きく異なること、「文侯之命」「秦誓」は春秋時期のものであると指摘することを踏まえ、「盤庚(上・中・下)」、(以上「商書」)、「大誥」「康誥」「酒誥」「梓材」「召誥」「洛誥」「多士」「無逸」「君奭」「多方」「立政」「顧命(「康王之誥」を含む)」「呂刑」「費誓」(以上「周書」)を、上古初期の資料として用いることとする。

『詩経』は、大凡、紀元前十一世紀から六世紀頃、すなわち西周初期から東周中期の言語資料とし得ることは衆目の一致するところである。どの部分が西周期のものかは問題であるが、陰法魯(1984:31)は、成立年代から言えば大凡「周頌」「大雅」「小雅」「商頌」「魯頌」「國風」の順になる——各部分に属する個々の篇の成立時期は錯綜しているとも指摘するが——と推定しており、張玉金(2006:3)が、陰氏の推定は、『上博簡』(上海博物館蔵戦国楚竹書)の「孔子詩論」における詩篇の順序が「訟」「大夏」「小夏」「邦風」(順に「頌」「大雅」「小雅」「國風」に相当)であることから裏付けられるとした点は重要である。『詩経』全体の成り立ちの大枠が確認されたと言ってよい。具体的な年代については、張伝璽(1990:23)が、「大雅」は西周期、「小雅」は(西周と)春秋期にも及び、「周頌」は西周初期であるが、「魯頌」と「商頌」はいずれも春秋前中期であるとしている。張玉金(2006)は、張伝璽氏および他の論者の説をも併せて、「周頌」は西周早期或いは前半期、「大雅」の創作時期は西周期、そして「小雅」が西周末期(おそらく春秋期の作品も含む)のものであるとし、その他の「國風」は春秋期(西周時代の作品も含む)、「魯頌」「商頌」なども春秋期であると推定しているが、これが穏当なものであろう。本論文では以上の議論を踏まえて、上古初期の資料として「周頌」「大雅」「小雅」を採用し、「小雅」については、一部は東周のものも含まれることを前提としつつ、この部分のみにみられる現象を慎重に扱うこととする。

その他、『逸周書』および『易経』(卦辞・爻辞)も上古初期の伝世資料として無視できな

い。『逸周書』については、裘錫圭(1981/1992)が言語面から、「世俘」「商誓」の二篇を西周初期のものとして認定するが、体系的な言語面における分析に基づいたものではなく、個別的な語句を根拠としたものである。この他、李学勤(1995)は、この二篇の他、「皇門」「嘗麥」「祭公」「芮良夫」を加えた六篇を西周のものとして認定するが、特に客観的根拠は示されていない。本論文は、李学勤(1995)の認定した範囲で悉皆調査を行ったが、結果として疑問目的語と認定し得る可能性のあるものは極めて少数しか検出し得なかったため、本文編において個別の用例について注で補足的に言及するに止める(資料篇の疑問目的語一覧に加えていない)。『易経』については、卦辞・爻辞あるいは伝(七種)のいずれも特定の個人の手になるものでなく、長期にわたる占筮の材料が蓄積されものとみるのが一般的であろう。成立時期については、卦辞・爻辞の部分を西周初期(張傳璽 1990:10 など)あるいは西周末年(宋祚胤 2000 など)とする見方が有力である⁶。これらの成立時期の認定の根拠は客観的な言語的根拠に基づくものではないが、補助的に用いるのであれば、『易経』の卦辞・爻辞を上古初期の資料とみなすことに大きな問題はないであろう。ただし、実際には疑問目的語として認定し得る用例は稀少であるので(確実な用例は1例)、『逸周書』と同様に本文編において個別的に言及するに止める。

2.3 上古中期の言語資料

本論文では、上述の真实性・均質性・口語性の点から、上古中期の主要資料として伝世文献では『論語』『孟子』、出土文献では『戦国縦横家書』を選定し、疑問目的語の語順についての悉皆調査を行う⁷。『論語』『孟子』は、その機能語体系、個々の機能語の文法機能の特徴などから、いずれも上古中期の魯方言を基礎方言とすると推定される(Karlgren 1926a、同 1951)。他に伝世文献のうち『左伝』『国語』『呂氏春秋』『荘子』『老子』等を補足資料とし、必要な場合は適宜、他の資料をも併用する。

これら上古中期の伝世文献の真实性の問題については、すでに多くの文献学或いは漢語文法史・語彙史の観点による蓄積があり⁸、一般に真实性が高い——少なくともその大部分については——と認定されている。ただしいくつかの資料は、均質性の点では問題を残している。例えば、『左伝』『国語』については、それらが内容的に言及する時期・地域と、文献自体が成立した時期・地域との間に少なからぬ差異があると推定される。文献の原材料とな

⁶ 『易経』の伝(七種)部分は戦国時代から秦漢期と考えるのが一般的である(張傳璽 1990:10 など)。

⁷ 禅母系疑問代詞目的語の語順変化メカニズムを論ずる際には、同じく上古中期の資料であっても、文献によって禅母系疑問代詞の体系が大きく異なり、このことが語順変化のメカニズムと直接的に関わるため、『論語』『孟子』の他、『左伝』『国語』『呂氏春秋』におけるすべての禅母系疑問代詞について調査を行う(本論文 9.1 参照)。

⁸ 早期の代表的な研究に Karlgren(1926a)がある。

った資料の基礎方言も単一ではなく、また原材料と編纂者の基礎方言との間にも時間的・地域的な隔たりが少なからず存在するため、現存の文献言語の均質性が低い可能性が排除できない。しかしながら、実際には **Karlgren(1926a)**が機能語の用法を根拠に両文献の言語が均質的だと指摘するように、これらの文献における言語面での内部差異は、少なくとも文法項目に関してはそれほど顕著ではない。本論文では、ひとまず上述の上古中期文献を上古中期における特定の基礎方言の言語体系を反映するものとして扱うこととし、異質的な部分として言語資料から排除するのは、上古初期資料（『詩経』『書経』等）から直接的に引用したと覚しき部分、および『左伝』の経文の部分（『春秋』）など、形式面からも異質性が明白である部分に限ることとする。

次に、上古中期資料の口語性に関しては、古くから種々の議論があり、基本的には口語から全く乖離した純粋な書面語であったとする立場をとる研究者も少なくない⁹。しかし、**Karlgren(1926a)**が、言語学的な根拠に基づきつつ、『左伝』『論語』『孟子』等が方言を反映するものと主張して以降、少なくとも漢語史研究者の間では、前述の上古中期漢語が一定程度は口語を反映するという見解が主流となっている。具体的には、**Karlgren(1926a)**は『左伝』の真実性を検討するなかで、『左伝』『国語』『論語』『孟子』といった上古中期の諸文献にお

⁹総じて言えば、上古中期文献の言語が口語から全く乖離したものと立場をとる研究者には、狭義の漢語史研究者以外の研究者が多いようである。例えば、中国思想研究者の **Henry Rosemont Jr.**は次のように述べ、中国の古典語は口語とは乖離した一種の人工言語であった可能性に言及している。

That is to say, on this classification the ancient literary language must be seen basically as an artificial language despite the fact that it was the linguistic medium for poetry, philosophy, religious and historical discourse for almost three thousand years.(Rosemont1974:71)

〔すなわちこの分類によれば、古代の書面言語は、ほとんど三千年もの間、詩や哲学、宗教や歴史の談話のための媒体であったという事実にも拘わらず、基本的には人工言語とみなされなければならないのである。〕

同様の見解は、**Karlgren(1926a)**に対する書評である **Forke(1928)**のなかにすでにみられ、そこでは、中国では口語に直接的に基づいた書面語はかつて存在したことはなく、周代においてもすでに書面語は口語とは異なっていたとの見解が示されている（**Forke1928**の内容は、主に **Karlgren1929:177**の紹介に基づく）。

Rosemont(1974)らと類似の意見は、日本の研究者にも広くみられる。中国文学研究者である吉川幸次郎氏は次のように述べ、文献上の上古漢語と当時の口語との不一致性を強調している。その結果（松江注：口頭語には多く表意文字である漢字が用意されていないものがあつた結果）、古代の記載のいとなみは、漢字として表記し得る語だけを、口語の中からつまみあげ、書きつらねるという方法で、成立したと思われる。口語が **AxBy** であり、**A** と **B** のみが漢字をもち、**x** と **y** とは表記すべき漢字が用意されていない場合、ただ **AB** とのみ記載し、**xy** をはぶく方法である。…（中略）…かくして記載語の **AB** は、はじめから口語の **AxBy** とは別のものとして発生し、存在したと思われる。かくして記載語 **AB** が口語 **AxBy** よりも、より簡潔な形であると、意識されたとき、記載語は意識的に、簡潔な上にも簡潔な方向へと。みずからをねりあげて行った。「論語」の文章は、すでにその段階にあり、当時の口語との間に、すくなくとも最も口語的な口語との間に、相当の距離をもっていたと思われる。（吉川 1962/1965:56-57）

このような見解をとる論者に共通してみられることとして、上古漢語には厳格な統語規則が存在しないと前提に立っていること、上古期の口語として現代漢語に近いものを想定していることなどが挙げられる。

ける「若」と「如」、「于」と「於」などの類似の機能を有する機能語のペアの生起条件を検討し、各機能語の生起条件が文献によって異なることを示した上で¹⁰、『左伝』は後世の偽作者が創造し、守り通すことなど不可能なような、均質的かつ魯方言(=『論語』『孟子』)とも『国語』とも異なる一貫した文法を備えているために、一人もしくは同一の方言(および同一の学派)に属する何人かによって書かれたものだと主張したのである。『左伝』と『論語』『孟子』等とが方言差を反映するという事は、それらの文献が口語を反映するという事に他ならない。以上の Karlgren 説は、極めて有力な仮説だと考えるが、他の可能性を積極的に排除し得る、唯一の可能性とはみなせない。なぜなら、氏の根拠とした方言差は、基礎方言の異なる文献に別々の言語形式が存在するという状況を指すのではなく、上述の「若」と「如」、「于」と「於」といった機能語のペアにおける各機能語の生起条件の差異を指している。この時、当該の現象が、当該の機能語体系の通時的変遷過程における「段階」の差異を反映していると解釈することも可能だからである。その場合、当該の現象を方言差異としてではなく、文体(style)の違いとして解釈することも可能となる¹¹。このように、Karlgren 説は絶対的なものではないが、氏の貢献はむしろその原則的な方法——いわば文献資料の文法を精査することによりそれが口語を一定程度反映したものか否かという判断を行うという方法——を提出したことにあり、この方法は、部分的な修正の必要はあるものの、現在でもその意義を失っていない。文献資料間にみられる言語的差異が文体の違いとして解釈される場合でも、それが Karlgren の発見したような複雑な生起条件の違いを反映したものであれば、人為的に作り出されたものとは考え難く、当時の口語から全く乖離したものではありませんからである。

さて、本論文は、上古中期漢語の口語性を考える際、Cikoski(1978a/b)の仮説が決定的な判断材料を提供すると考える。Cikoski 氏は、上古中期の『左伝』『孟子』『荀子』を資料として、Classical Chinese(本論文の上古中期漢語)の動詞には中性動詞(原文「neutral verbs」と能格動詞(原文「ergative verbs」という二種の下位カテゴリーが存在し、それらの動詞から構成される文(自動詞構文・他動詞構文)では、主語の担う意味役割が当該の動詞の属す

¹⁰Karlgren(1926a)の議論は多岐にわたるが、要点は次のように整理できよう。

「若」「如」については、①「もし」(原文「if」)、②「～のようである」(原文“resemble, like, as”)といった意味を表す用法がある。①の用法については、『左伝』では「若」が、魯方言(『論語』『孟子』)では「如」が生起する傾向があり、②の用法については、『左伝』では「如」が、魯方言では「若」が生起する傾向がある(Karlgren 氏は他の用法についても述べるが省略する)。

「于」「於」については、①「～(=人名など)のそばで、に対して」(原文“auprès de(chez, via-à-vis)”)、②「～(=地名など)において、へ」(原文“à”)、③「～(=地名以外の場所)で、の中に」(原文“dans”)といった意味を表す用法がある。①の用法については、『左伝』でも魯方言でも「於」が生起する傾向があり、②の用法については、『左伝』では「于」が、魯方言では「於」が生起する傾向があり、③の用法については、『左伝』では「於」及び「于」が、魯方言では「於」だけが、生起する傾向がある。

¹¹一般に、書面語は歴史的に保守的な言語層を反映するために、言語資料毎の保守性の度合いによって、それらが反映する言語体系(副体系)の通時的位置も変動することになる。

るカテゴリーによって決定されるとする説を提出したのである。その後、大西克也氏が一連の研究（大西 2004・2005・2008）において、Cikoski(1978a/b)の説を補強しつつ、Cikoski 説が基本的には成立し得ることを立証した¹²。Cikoski(1978a/b)の言う中性動詞とは、当該の動詞の目的語の有無が主語の意味役割に影響しない類、すなわち自動詞文型における主語の担う意味役割が、そのまま他動詞文型における主語に継承される類であり、能格動詞とは、自動詞文型における主語の担う意味関係が、他動詞文型における目的語に継承される類である。この Cikoski 説は、直接的には上古漢語にヴォイスと称すべき文法現象が存在することを指摘したものであるが、結果として Cikoski 氏が言語資料とした上古中期文献が、少なくとも一定程度の口語性を有することを証明することに繋がったと考えたい。なぜなら、Cikoski・大西の両氏が指摘する文法現象は、個人の思いつきによって人工的に創造された——すなわち自然言語たる口語から全く乖離した——とは考え難いほど複雑であり、かつ「能格性」という他の自然言語にもみられる言語学的性質の上古中期漢語における反映だと解釈できるからである。

上述の複雑なヴォイス現象に加え、上古中期漢語が一定の口語性を備えていることを裏付けるものとして、合音語(fusional word)の存在、さらには出土資料などに常見される仮借現象の存在が挙げられる。合音語は、「之(*tə) + 於(*ʔa)」→「諸」(*ta) (代詞「之」と介詞「於」を併せた機能をもつ語。「於」(*ʔa)ではなく「于」(*wa)であった可能性もある)、「不(*pə) + 之(*tə)」→「弗」(*pət) (否定副詞)、「毋(*mə) + 之(*tə)」→「勿」(*mət) (否定副詞)のように、複音節（一般に二音節）が一音節に融合する合音によって生じた語であるが（「弗」「勿」については本論文 16.2.4 を参照）、原則として軽読など口語レベルにおける音声現象によって生ずるものである。また仮借は、異なる語（形態素）どうしが同音（或いは近似音）であることを条件に字形が転用される現象であるため、やはり口語との接点のない純粋な書面語のなかで生ずる現象とは考え難い。

以上から、本論文で採用した上古中期資料については、その体系自体が口語とは完全に乖離した「純粋な書面語」であった可能性はほとんどないと結論したい¹³。ただし、本論文で

¹²大西(2004)は上古後期に成立した『史記』を主資料として、様々な限定条件（＝受事が無情物である場合や対偶などの修辞表現が関与する場合を除くといった条件）を付けながらも、比較的単純な主述構造においては、Cikoski(1978)の分類が傾向としては肯定され得ることを証明した。さらに大西(2004)は、能格動詞には意味面での共通性もみられ、「受事」（＝受動者）の状態にある種の変化を引き起こすものが多いことを指摘している。なお、『史記』は内容的には上古初期から上古後期までを含むため、大西氏には上古漢語一般において Cikoski(1978a/b)説が成立し得るか否かを検証する意図があったものと推定される。その後、大西(2005)(2008)では上古中期の出土資料・伝世文献にも比重を置きつつ、中性動詞（大西は「対格動詞」という名称に改める）・能格動詞とが、助動詞「可」「可以」との共起により、その項構造に変化を生ずる条件について論じ、Cikoski 氏の説を補完している。

¹³本論文の主要資料である『論語』についても Cikoski(1978)の説は、基本的には適用し得るものと考えられる。例えば李佐豊(1994b)は、『論語』を含む先秦諸文献における各動詞について、目的語の有無、目的語の種類といった、いわば項構造に関する事項を詳細に記述した研究であるが、『論語』を他の先秦文献とは異なるものとして排除する姿勢はみられない。

言う「口語」は言語集団における最も口語的な層だけを指すのではない。現存する上古中期資料は、総じて言えば語彙面での方言差異が顕著ではないため、それらが反映しているのは各方言における言語共同体(speech community)の「上層」にあたる部分、すなわち正式な会話や書面語の際に用いられる言語層(副体系)であったと推定される¹⁴。

次に、上古中期漢語資料と、本論文で上古後期漢語資料として扱う『史記』(秦漢部分)との基礎方言連続性の問題について言及しておく。上古中期漢語の文法面での方言差については、大西(2003)が戦国時代の出土資料に基づいた近年の研究成果を踏まえた整理を行い、①主語と述語との間に現れる「之」、②等位接続詞「與」と「及」、③時間副詞の「將」と「且」、④語気助詞の「也」と「歟」、⑤反復疑問文という五項目において、秦と東方六国(齊・楚・燕・韓・魏・趙)との間で差異がみられると指摘している¹⁵。しかし、本論文で扱う疑問代詞目的語の語順に限って言えば、反映する方言の違いによる顕著な差異は見出し難い¹⁶。したがって、上古後期の資料たる『史記』(秦漢部分)との基礎方言の連続性の問題は特に考慮する必要がないであろう。ただし、疑問代詞目的語の語順変化メカニズムと密接に関係する疑問代詞の体系については方言差が存在した可能性がある。例えば、「孰>(*duk)、「誰>(*dui)からなる禪母系疑問代詞の体系は、『論語』『孟子』『呂氏春秋』ではこれら二語の交替がある種の格標示機能を果たす体系を形成しているが、『左伝』『国語』ではそのような体系はみられない(本論文 9.1.2.2)。いずれにせよ、このような差異は、原則的には禪母系疑

¹⁴上古中期漢語において反映される方言差が、言語共同体におけるいわば「上層」に相当する部分の方言差であるとする考えは、すでに Karlgren(1929)によって主張されている。関連する箇所は以下の通りである。

Let us first define what we mean by the term dialects. I do not have in view here "des patois", the *t'uhua* dialects of the Chinese peasant villages, dialects of the lowest social strata, but dialects of the type of the ancient Greek dialects, or to take a nearer example, dialects as represented by the languages of an educated Shanghai man and an educated Pekinese. (1929:180)

[まず方言という用語により意味するものを定義しておこう。私がここで考えているのは「俚言」、つまり最も低い社会階層の方言である中国農村の「土話」方言ではなく、古代ギリシャ語、或いはより身近な例をあげれば、教養のある上海紳士や北京市民の言語によって代表される方言のことなのである。]

¹⁵この結果は、松江(2006)が揚雄『方言』所収の語彙について言語地理学的研究を行い、秦晋と東方六国との間に強い言語境界線(=等語線の東)が存在すると結論するのと軌を一にしている。松江(2006)の指摘のうち関連する内容は、①秦晋と楚の間には極めて強い言語境界性があり、また秦晋と代(趙)の間にも明確な言語境界線があること、②楚から齊にかけての楚・陳・宋・魯・齊とつづく地域には決定的な言語境界線はなく、言語的な距離はゆるやかに段階的にひらいてゆく、という二点にまとめられる。無論、秦と東方六国との間に単純な二項対立が存在していた訳ではなく、文法項目によっては、東方六国の間にも差異は存在するはずであるが、この点についてはまだ本格的な研究が展開されていない。

¹⁶ただし、本論文は、上古の疑問代詞目的語の語順に関する方言差が皆無だったと主張している訳ではない。例えば、上古中期において疑問代詞が介詞「於」の目的語となった場合、原則的には後置されるが、上古後期の『史記』では疑問代詞目的語「何」が介詞「於」に前置される現象が、稀少ではあるがみとめられる。これは魏培泉(2004:221:注20)が示唆するように、何らかの方言的現象であった可能性も排除できない(本論文 4.1 注70 参照)。

問代詞体系の通時的変遷過程における「段階」の差異として解釈され得るのであり（本論文 15.7.2）、少なくとも『左伝』『国語』『論語』『孟子』『呂氏春秋』の五文献については、そのいずれが『史記』言語へと連続的に変化したものとみなしても大きな齟齬は生じない。

以上から、本論文では『左伝』『国語』『呂氏春秋』『論語』『孟子』などを上古中期漢語の資料とし、そのうち基礎方言の地域性がはっきりしている『論語』『孟子』を主要資料とすることにしたい。さらに、『莊子』『老子』といった他の代表的な上古中期文献も適宜、補足資料として扱う。なお、『論語』『老子』のように価値の高い出土資料が存在するものについては、底本（中華書局の新編諸子集成）以外にそれらも適宜参照することとし、議論に関わる字句に関する異同ある場合に限り異同を示すこととする¹⁷。

上古中期文献には、伝世文献と異なる内容を持つ出土資料も少なからず存在する。本論文が検討する疑問目的語の語順という文法項目を扱うには、総じてテキストの分量が少なすぎるとい難点はあるものの、言語資料としての価値は極めて高い。本論文では、伝世文献にはない内容を少なからず含む『戦国縦横家書』を主要資料として悉皆調査の対象とする。

『戦国縦横家書』は、1973年に長沙馬王堆三号漢墓より出土した、漢初の紀元前195年前後に写本された文献である。全二十七章から構成されるが、その内容が『史記』『戦国策』にみえるものが十一章、残りの十六章は現存の伝世文献には確認されないという（馬王堆漢墓帛書整理小組 1978:-1-2）。具体的な成書過程については諸説あるが、いずれにしても戦国時代のテキストに由来すると考えられている¹⁸。

『戦国縦横家書』の文字・言語面での特徴については、大西・大櫛(2015)が具体的な現象を挙げつつ概説している。それによれば、まず文字面については、典型的な漢隸が成熟する以前の古隸で書写されており¹⁹、用字法は概ね秦漢期の公文書の標準的なそれと一致するが、例えば三章・四章では一人称代詞の「吾」を表すのに「魚」字が使われるなど、秦漢期の用字の規範に合わない点もみられるという。この「吾」を表す「魚」字については、春秋後期の晋の資料である侯馬盟書において一人称の「吾」を表すのに「虞」と「魚」の組み合わせからなる字があり²⁰、これが省略されたものと考えられるため、三晋（中原）

¹⁷ 『論語』については、定州漢墓竹簡『論語』（字句の異同を示す際は「定州漢墓本」と略称。河北省文物研究所定州漢墓整理小組『定州漢墓竹簡論語』による）、『老子』については、馬王堆漢墓帛書『老子』（高明『帛書老子校注』による）を参照した。

¹⁸ 全二十七章は形式と内容から大きく三部分に分けられる。工藤(1984)は、単独で流布していた種々の戦国の遊説故事のテキストが寄せ集められて帛書に転写されたものが『戦国縦横家書』であり（工藤氏は『韓非子』『史記』『戦国策』『呂氏春秋』など諸文献も、このようなテキストが原資料であると考え）、もともとなったテキストうち、第一部分・第二部分の資料群は一定の集成をへた段階のものであるが、第三部はまだ一定の集成を経ていないものとする。藤田(1993)は、国別でおおまかな年代順に編集された第一・第二部分と、ふたたび国別に輯録された第三部分のグループから構成された、戦国諸国の外交・国策に関する資料を集めた文献であるとする。

¹⁹ この点は、陳昭容(1992)による。

²⁰ 「吾」(*ŋá)、「魚」(*ŋa)、「虞」(*hlâ?)はいずれも上古音が近い。

系の用字の名残りとみなし得ると解釈している。また、言語面のうち文法的特徴については、主述構造が動詞の目的語となった場合、目的語となった主述構造の主語と述語の間に高い頻度で「之」が挿入されるなど、西方地域の秦の言語資料にはない現象がみられるという。また等位接続詞「與」の使用（秦では「及」）、将来を表す時間副詞「将」の使用（秦では「且」）など、秦から前漢にかけての標準的な文章語と異なった特徴が見いだされることも指摘している。以上のことなどから、大西・大櫛(2015)は、『戦国縦横家書』は、漢代の影響を受けつつも、その言語は戦国時代の中原を中心とする東方地域の特徴を色濃く帯びていると考えている。本論文は以上を踏まえつつ、『戦国縦横家書』を上古中期の資料として扱うこととする。

2.4 上古後期の言語資料

上古後期の文法史の資料のうち。疑問代詞目的語の語順を包括的に調査するに足る分量を有するもので、一般に言語の真実性と口語性が高いと認められているものは、司馬遷（紀元前 145-86(?)年）の撰になる『史記』であろう²¹。口語性については、上述のように、大西(2004)が上古漢語にヴォイスと称すべき現象がみられることを検証した際に使用したのが『史記』であることから、その言語は口語と全く乖離したものではないと推定できる。本論文では『史記』を上古後期資料として採用する。

ただし『史記』も均質性の点では問題がある。すなわち、『史記』は内容上、秦漢期以前の部分と、秦漢期の部分とに大別できるが、前者は撰者の司馬遷（或いはその父の司馬談）が当時残されていた何らかの原資料に基づいて著述したと推定されるため、当該の原資料（すなわち上古後期以前の資料）の影響を強く受けた可能性を検討する必要がある。この点については、Karlgrén(1926a)が、現存の『左伝』と『史記』との対応箇所と比較から、①司

²¹司馬遷の経歴、『史記』の成立背景についての根本的資料は、『史記』「太史公自序」と『漢書』「司馬遷伝」である。本論文では司馬遷の経歴について、これら根本資料に踏まえつつ、近年の研究成果主として鄭之洪(1997)の研究成果に基づいた。例えば、司馬遷の生年については種々の議論があるが、具体的な文献上の記載を根拠と有力なものに、王国維(1917)の景帝中元五年（紀元前 145 年）説、桑原(1929)の武帝建元六年（紀元前 135 年）説などがある。王氏は、唐の張守節の『史記正義』が、「太史公自序」の太初元年（紀元前 104 年）の条文に「案：遷年四十二歳」〔案ずるに、司馬遷の年齢は四十二歳であった〕と注をつけるのに基づき、ここから生年を算出した。一方、桑原氏は、唐の司馬貞の『史記索隱』が、「太史公自序」の元封三年（紀元前 108 年）の条文に対して、西晋・張華の『博物志』を引きつつ、「『博物誌』：太史令、茂陵、顕武里、大夫、司馬〔遷〕年二十八。三年六月乙卯。除六百石也。」〔『博物誌』「太史令、茂陵・顕武里の人、大夫である司馬遷、年齢は二十八歳であった。三年六月乙卯の日に、（俸給）六百石を授けられた。」〕と注するのに着目し、「三年六月乙卯」を元封三年六月二日とみとめた上で、司馬遷の生年として建元六年と算出した。本論文では、いずれの説をとっても『史記』言語の性質に影響することはないため、この問題を議論することはせず、かりに鄭之洪(1997)と同様に、王国維説に拠っておく。

馬遷は『左伝』の言語を「意識」していること、すなわち自身にとって簡明な表現へと書き改めていること、②しかしある人物の発言を（直接的に）引用する場合は、『左伝』の言語を踏襲する傾向があること、などを指摘している²²。近年でも、漆権(1984)が、『書経』『左伝』『国語』『戦国策』などと、『史記』におけるそれらに基づいた推定される箇所とを、人称代詞を題材として比較・検討し、原資料の人称代詞が『史記』のそれではしばしば書き換えられていることを指摘している。これらによると、『史記』の秦漢期以前の出来事を記録した部分も、その人物の発話部分を除けば、大部分は上古後期の資料とみなし得るかのようである。ただし漆権(1984)は、同時に、『史記』において原資料の書き換えがなされた際、しばしば書面的色彩の強い語彙が選択される傾向があったとも指摘している。そのことを踏まえれば、原資料を踏まえた秦漢期以前の出来事を記録した部分の言語と、秦漢以降の出来事を記録した部分のそれとは、やはり言語的に均質なものとみなすべきではないであろう。幸い『史記』は、分量が膨大であり、秦漢時代の出来事を記録した部分のみを言語資料としても、言語学的に有意義な調査をなし得る。

以上から、本論文は、漆権(1984)の方法を踏襲し、漆氏の言う「第二部分」（始皇帝期以降の出来事を記録した部分）を『史記』（秦漢部分）」と表記することとし、これを上古後期の主要資料とする。漆氏の言う「第一部分」（始皇帝期前の出来事を記録した部分）は『史記』（非秦漢部分）」と表記することとし、上古後期の補足資料としてのみ扱う。なお、漆氏は、褚少孫（紀元前一世紀の人）²³の補足部分は言語資料としていないが、本論文ではこれを『史記』（秦漢部分）の中にも含める。よって、本論文で言う『史記』（秦漢部分）は、①卷六『秦始皇本紀』～卷十二『孝武本紀』、②『表』と『書』、③卷四十八『陳涉世家』～卷六十『三王世家』、④卷七十三『白起王翦列伝』、⑤卷八十五『呂不韋列伝』～卷一百四『田叔列伝』、⑥卷一百六『呉王濞列伝』～卷一百三十『太史公自序』、またこれ以外の⑦卷八十四『屈原賈生列伝』と卷一百五『扁鵲倉公列伝』における賈誼と淳于意に関する部分、ということになる。そしてこれら『史記』（秦漢部分）以外の部分が、すべて『史記』（非秦漢部分）となる。

『史記』（秦漢部分）の基礎方言は特定し難く、本論文で採用した中古資料との連続性が証明されているわけではない。すなわち、司馬遷（或いは司馬談）自身は、長安の文化圏内にあったと推定される夏陽県（現在の陝西省韓城市）の生まれであり、仕官後も長安が拠点であったため、彼の基礎方言は、単純に考えれば、当時の長安の「上層」言語であったと推

²² 『史記』が原資料と覚しき古文獻から、漢代の人にとって簡明な表現へと意識を行っていることに関しては、古く Chavannes(1895)が『書経』を例として指摘するところである。そこでは、『書経』「舜典」に「納于大麓」とあるが、『史記』では「入山林」と表現していることなどが例として挙げられている（Chavannes 1895:CXXVII）。

²³ 褚少孫の生没年、履歴についても諸説あるが、いずれにせよ紀元前一世紀の人物であるとするのは問題ないと考えられる（Chavannes 1895 等参照）。なお、褚少孫の補足部分を含む、『史記』の撰述状況とその背景については嘉瀬(2005)等を参照のこと。

定される²⁴。しかし例えば二人称代詞「若」が中原地方の人の会話にのみ出現する傾向が顕著であるなど（漆権 1984）、「秦漢部分」も地域性を帯びた様々な原資料の言語から影響を受けていることは確実であり、地域性の点で完全に純粹とは言えない。よって、その基礎方言は長安一帯の方言に限定し得るものではなく、中原地方を含めた広義の北方方言の上層を広く反映するものであったと推定しておくのが穏当であろう。なお、『史記』（秦漢部分）の言語は、例えば二人称代詞「爾」が減少していることがその特徴の一つに挙げられるが（漆権 1984）、この特徴は本論文で採用した中古資料のうち中原・北方地域で成立した早期漢訳仏典に共通に受け継がれていることも²⁵、以上の推定を間接的に支持するものである。いずれにしても、疑問代詞目的語の語順・疑問代詞体系に関して言えば、『史記』（秦漢部分）は、本論文で扱った中古の中原・北方系の資料、或いは江南系の資料とのいずれとも、言語的に連続性を有していると仮定して大きな齟齬は生じない。

なお、本論文では、『史記』のテキストとして中華書局点校本（縮印本、中華書局 1997 年）を採用する。

2.5 中古期の言語資料

中古期は、中古前期（後漢魏晉）と中古後期（南北朝）とに分けられるが、前期と後期との文法面での差異はそれほど顕著ではない。よって本論文では、両者の区分が必要な場合以外は、一括して「中古」という枠で論ずる。

中古の代表的な文法史資料として広く使用されるのは『世説新語』（五世紀中葉に成書）、『三国志』（三世紀後期に成書）、『後漢書』（五世紀成書）などである。多くの先行研究が指摘するように、これらのうちとくに『世説新語』は、真実性が高いだけでなく、口語的表現を多く含む点で、極めて重要である。しかしこれらの資料は、一定程度幅のある時期・地域の「原資料」に基づいて編纂されたと推定されるため、均質性は高いとは言えない²⁶。また、

²⁴但し司馬遷は、出仕前の二十歳の時に淮河・長江流域、齊魯地域などを旅行した経験を持ち、仕官後にも命を受け、雲南などの西南地域をはじめ全国各地を巡回したのである（三十余回も視察の旅に出た武帝に随伴したものが含まれる）。よって長安に滞在しなかった時間も短くはないのであるが、少なくとも仕官後の旅行は、長安の役人たちと同行したものと考えられ、言語的には長安の「上層」の言語が使用される環境にあったと推定される。

²⁵この二人称代詞「爾」が減少或いは消滅しているという現象は、江南地域で成立した早期漢訳仏典には継承されていない（本論文 2.5.2.3 参照）。

²⁶特に史書である『三国志』『後漢書』などは、原資料からの影響が強いと推定される。陳寿の撰になる『三国志』は晋の太康年間（280-289 年）の中期或いは後期の成立であるが、原資料には、三国期の官修の史書である王沈『魏書』と韋昭『吳書』、魚豢『魏略』などの私家版の史書類、さらに曾て蜀に仕えた陳寿自身が蒐集した文献があったと考えられる（章惠康 2000 等参照）。范曄の撰である『後漢書』については、現存の版本のうちの「律曆」「礼儀」「祭祀」「天文」「五行」「郡国」「百官」「輿服」の八志・三十卷は、北宋の真宗乾興元年(1022 年)に、晋の司馬彪『続漢書』三十卷「志」（南朝・梁の劉昭注本）が入れられたものである

文法の通時的変遷という点からすると、後述する早期漢訳仏典（後漢魏晋南北朝期に成書した漢訳仏典）に比して、相対的に古い体系を反映することが少なくない。このことは、本論文で扱う疑問目的語の語順についても同様である。よって、少なくとも疑問目的語の語順を議論する資料としては、『世説新語』の価値は早期漢訳仏典のそれに及ばないと言えよう。本論文では、早期漢訳仏典を中古の主要な文献資料として採用することとし、『世説新語』などは補足資料として扱う。

早期漢訳仏典の文法史資料としての価値は、①非仏教文献においては見出し難い、当時の口語に由来する可能性のある文法項目がみられること、②一般的に言語の均質性が高く、また少なからぬ漢訳仏典は、その成書時期・地域を特定することができること、③『経律異相』などの類書に引用された部分と対照することにより、その言語の真実性が確認できるものが少なくないこと、といったことにある。とは言え、早期漢訳仏典言語は、翻訳言語であるが故に、文法史資料としてどの程度の価値を持つものなのかを確認しておく必要がある。この問題については、次章（本論文第三章）において改めて検討することとし、ここでは次章の議論を踏まえた結果、本論文で採用することとした早期漢訳仏典を具体的に紹介していくことにする。

本論文で選択した早期漢訳仏典は、『阿闍世王経』、『中本起経』、『仏説義足経』、『六度集経』（以上、中古前期）、『太子須大拏経』、『雑宝蔵経』、『賢愚経』、『過去現在因果経』（以上、中古後期）などである。そのうち『中本起経』、『六度集経』を中古前期の主要資料、『雑宝蔵経』、『過去現在因果経』を中古後期の主要資料とする。なお、これら早期漢訳仏典の底本は『大正新修大蔵経』²⁷所収のもの（「大正本」と称する）とし、必要がある場合、その脚注に示された版本間の文字の異同を小字で示す。また主要資料のうち、『中本起経』『六度集経』『雑宝蔵経』については、日本の天野山金剛寺所蔵の日本古写本『金剛寺一切経』所収のテキスト（「金剛寺本」と称する）²⁸を利用した校勘も行い、その結果も適宜、小字で示すこと

（羅炳良 2005 等参照）。また、范曄『後漢書』自体が、後漢・蔡邕『東觀漢記』に依拠したほか、謝承『後漢書』、袁宏『後漢記』、華嶠『後漢書』などにも基づく部分があると考えられる。

以上のような問題があるとはいえ、『世説新語』『三国志』『後漢書』とも、原資料自体が大凡、中古の枠組みに入ることは重要である。

²⁷『大正新修大蔵経』の底本は増上寺所蔵の『高麗蔵』再彫本（＝開宝蔵の覆刻。1236-1251 年）であり、同寺所蔵の南宋代の『思溪蔵』（＝「宋本」）、元代の『普寧蔵』（＝「元本」）、明代の『嘉興蔵』（＝「明本」）を基本的な対校本とした上で、日本の正倉院聖語蔵本、梵語写本などとの校勘をも行った点に特徴がある。ただし、対校本などの種類などは、個別の仏教文献によって異なる。

²⁸『金剛寺一切経』は、平安末期から鎌倉時代後期にかけて断続的に書写されたものを主体として構成されたものとされている（梶浦 2004:1 など参照）。衣川(2007)が指摘するように、今後は大正本に対して日本古写本や敦煌写本を用いた校勘が試みられるべきである。遺憾なことに、本論文では、上述の三種の漢訳仏典について、金剛寺本を校勘に用いただけである。なお、金剛寺本は、国際仏教学大学院大学の日本古写本データベースの画像データのものを利用させていただいた。

とする。

2.5.1 『中本起経』二卷（大正蔵 NO.196）

2.5.1.1 成書時期・地域

『出三蔵記集』第二卷に「中本起経二卷或云太子中本起経。右一部，凡二卷，漢獻帝建安中，康孟詳譯出」〔中本起経二卷或いは太子中本起経とも言う。右一部、全二卷は、漢・献帝の建安年間に康孟詳が訳出した〕とあり、また『歴代三宝記』第四卷には、道安の言葉を引く形で「沙門曇果於迦維羅衛國得此梵本，來至洛陽，建安十二年翻，康孟詳度語」〔沙門の曇果が迦維羅衛國においてこの「梵本」を手に入れ、洛陽に請来した。建安十二年に翻訳されたが、（その際）康孟詳が口頭通訳を行った〕²⁹という記載がみられる。以上から、この文献は、康孟詳らによって建安年間（おそらく建安十二年、すなわち 207 年）に洛陽で翻訳されたと推定される。本論文では『中本起経』を後漢末魏晋期の中原地域の言語資料として扱う。

2.5.1.2 真実性

『中本起経』の真実性については、六世紀に成書された『経律異相』に引用された部分との対照によって考察を行うことにする。以下【図表 2-1】に示したのは、『経律異相』に引用された『中本起経』と、それに対応する現存『中本起経』における箇所である。『経律異相』に引用された『中本起経』は少なくとも 7 箇所みとめられる。

【図表 2-1】『経律異相』所引の『中本起経』と現存『中本起経』の対応部分

	『経律異相』所引の『中本起経』	対応する現存『中本起経』
(1)	卷第三「迦蘭陀長者施佛精舍事一」 「出中本起経上卷」	卷上「度瓶沙王品第四」（一部分） (4-153b:11~153b:27)

²⁹ 仏典の漢訳が行われた「訳場」における翻訳関与者の役割とその名称については、船山 (2013:53-86)が詳細な解説を行っている。船山氏は、主な役割として、訳場の主導者たる「訳主」、音声で示された訳語を文字で筆写する「筆受」（自ら訳語を与える場合もあった）、通訳たる「伝訳」「伝語」「伝言」「度語」といったものがあつたこと、さらに訳場には、経典の講義を伴う訳場と専門家集団による訳場（隋唐以降）とがあり、六朝時代末までは大半は訳者の分業体制があまり細分化されていない前者であり、隋唐以降はほとんどが後者になったことなどを指摘する。

『中本起経』の翻訳における「度語」が具体的に如何なる役割を果たしたのか確定することは難しいが、本論文では非漢語経文を漢語へと口頭で通訳したものと理解しておきたい。なお、早期漢訳仏典では非漢語の経文は写本としてではなく、しばしば来華した僧の頭の中に記憶されたものであつたようである（馬祖毅等 2006:77 などを参照）。

	(53-11a)	
(2)	卷第四「得道師宗一」(後半部分) 「出中本起上卷」 (前半部分は「出十二遊經」) (53-15a:19~15b:24)	卷上「轉法輪品第一」 (4-147c)
(3)	卷第五「受阿耨請三月食馬麥三」 「出中本起經下十誦彌沙塞律略同」 (53-20a~c)	卷下「佛食馬麥品第十三」 (162c~163a)
(4)	卷第七「調達出家九」 「出中本起上卷又出十二遊歷」 (53-35c)	卷上「還至父母品第六」(一部分) (155c:16~27)
(5)	卷第三十「拘藍尼國王后悟法三」 「出中本起經」 (53-160a~c)	卷下「本起該容品第八」 (4-157b~158b)
(6)	卷第三十五「寶稱長者出家見佛悟道一」 「出中本起卷又上出出曜經第十九卷」 (53-187c~188a)	卷上「現變(一作善來)品第二」 (4-149a~c)
(7)	卷第三十八「阿凡和利至心請佛庫中自然備二」 「出中本起下卷」 (53-203a~b)	卷下「度奈女品第十三」 (4-161b~162a)

上述の二種の版本間の具体的な対応状況は以下のものである(例文において「*」を付した字はその後ろに版本上の字句の異同が示されている)。なお、二重下線を引いた部分は二種のテキストの文字が一致する部分である。

・『中本起經』卷上「度*瓶 [三本、金剛寺本「萍」] 沙王品第四」(一部分) (4-153b:11~153b:27)

…有豪長者，名迦蘭陀。心中念言：「可惜我園施與尼捷。佛當先至，奉佛及僧。」
 悔恨前施，永為棄捐。長者至心，臥不安席。先福追逮，福德應全。大鬼將軍名曰半*師
 [三本「帥」、金剛寺本「卯」(?)]，承佛神旨，知其心念。即召闍叉，推逐尼捷：「裸形無恥，不
 應止此。」鬼*師 [三本「帥」、金剛寺本「卯」(?)] 奉敕，搥打尼捷，拖拽器物。尼捷驚怖，馳
 走而言：「此何惡人，暴害乃爾。」鬼*師 [三本「帥」] 答曰：「長者迦蘭陀，當持竹園，作
 佛精舍。大鬼將軍半*師 [三本「帥」] 見敕逐汝輩耳。」明日尼捷共詣長者，深責所以：「何
 故改施令吾等類被*乎 [三本「手」、金剛寺本「手」(?)] 委頓，不謂長者見困如此。」迦蘭陀心*
 喜 [三本「中喜悅」]：「吾願遂矣。佛聖廣覆照我至心。」即答尼捷曰：「此諸鬼*師 [三本「帥」]
 強暴含瞋，懼必作害。不如委去更求其安。」尼捷懟恨，即日恚去。長者歡喜，修立精舍。
 僧房坐具，眾嚴都畢，行詣樹*王祠處 [宋本「下」，元本、明本、金剛寺本「王樹下」]，請佛及僧。

眾祐受施止頓，一時大化普濟，靡不欣樂。

・『経律異相』卷三「迦蘭陀長者施佛精舍事一」(53-11a)

有豪貴長者，名迦蘭陀。追惜我園施與*尼捷^[三本、宮本「尼捷」]，不得奉佛及僧，臥不安*席^[宋本、元本、宮本「席」]。有大鬼將軍，名曰半師，承佛神旨，即召闍叉，推逐*尼捷^[三本、宮本「尼捷」]：「裸形無恥，不應止此。」鬼*師^[宋本、元本、宮本「帥」]奉敕，搗打*尼捷^[三本、宮本「尼捷」]，拖拽器物。*尼捷^[三本、宮本「尼捷」]怖走曰：「此何惡人，暴害乃爾。」鬼*師^[三本、宮内庁図書寮本「帥」]答言：「長者迦蘭陀，當持竹園，作佛精舍。大鬼將軍半*師^[三本、宮本「帥」]見使逐汝輩耳。」明日*尼捷^[三本、宮本「尼捷」]共責數長者。長者心悅：「吾願遂矣。」答*尼捷^[三本、宮本「尼捷」]曰：「此諸鬼神強暴含瞋，懼必作害。不如委去更求所安。」*尼捷^[三本、宮本「尼捷」]忿恨，即日*悉^[三本、宮本「慧」]去。長者修立精舍，僧房坐具眾嚴都畢，行詣樹下，請佛及僧。眾祐受施止頓化濟，靡不欣樂。（「出中本起上卷」）

以上の状況から、『経律異相』が『中本起経』を収録する際、字句の省略或いは調整（書き替え）といった作業が行われたようであるものの、全体的にみれば、二種のテキスト間の対応する部分の字句は相当に一致していることが分かる。よって、現存の『中本起経』言語の大部分は少なくとも南北朝・梁代まで伝承されていた状態を保存したものと推定され、その真実性は十分に高いと考えたい。

なお、金剛寺本は下巻にあたる部分が欠損しているが、現存する上巻所収の物語の対応関係からみて、大正本と同じ系統のテキストであるとみなされる。本論文では金剛寺本の上巻のみをテキストの校合に用いる。

2.5.2 『六度集経』八卷（大正蔵 NO.152）

2.5.2.1 成書時期・地域

『出三蔵記集』第二卷に「六度集経九卷 或云六度無極経或云度無極集或云*雜無極経……右二部，凡十四卷。魏明帝時，天竺沙門康僧會以吳主孫權孫亮世所譯出」〔六度集経九卷。或いは六度無極経、度無極集、雜無極経などとも言う。…右の二部、全十四卷。魏の明帝（＝曹叡）の時代に、天竺の沙門康僧会が、吳主・孫權、孫亮の治世に訳出したものである。〕と記載される。

『六度集経』の訳者の問題については、『歴代三宝記』『開元积教録』などの経録はどれも康僧会だとしており、この点についての疑義はない³⁰。

康僧会の伝は、『出三蔵記集』卷第十三および慧皎『高僧伝』卷第一にみえる。これらに

³⁰ただし巻数の表記に関しては異同がみとめられる。例えば『開元积教録』第二卷には「八卷」と記載されるが、その注には「或九卷」とある。

よれば、祖先は元来は康居の人であったが、代々天竺に住み、父の代に交趾に移ったのであり、康僧会は十歳の時に両親が他界したのちに出家し、赤烏十年（241年、一説には赤烏四年）に呉都・建業に移住し經典の翻訳に従事したという。『六度集経』成書の具体的な地域と時期については、『古今訳経図記』第一巻の「以吳太元二年歲次辛未，於楊都譯」（55-352b）〔吳の太元二年辛未の年に建業において訳出した〕という記載が信じ得るものであれば、252年に建業において成書されたことになる。なお『六度集経』には、サンスクリット等の非漢語の原典に直接的に影響されたと覚しき漢訳仏典特有の表現(朱冠明 2013:32 が言及する話題轉換標識としての「復次」など) がほとんどみられないため、非漢語の原典から逐語的に訳されたものではないと推定される³¹。

2.5.2.2 真実性

下の【図表 2-2】に示したのは、『経律異相』に引用された『六度集経』と、それに対応する現存『六度集経』における箇所である。『六度集経』には『経律異相』に引用された部分が少なくとも 18 箇所ある。

【図表 2-2】『経律異相』所引の『六度集経』と現存『六度集経』との対応部分

	『経律異相』所引の『六度集経』	対応する現存の『六度集経』
(1)	卷第八「躡提和山居遇於國王之所割截四」 「出度無極集第五卷」 (53-40b~c)	卷第五（四四）「忍辱度無極章第三」 (3-25a~c)
(2)	卷第八「常悲東行求法遇佛示道六」 「出度無極集第七卷」 (53-41a~b)	卷第七（八一） (3-43a~c)
(3)	卷第八「題耆羅那賴提者二人共爭令五日闇冥十」	卷第七（八二）

³¹本論文は『六度集経』が非漢語原典からの翻訳でないとは主張しているのではなく、訳語や構文の選択に際して漢語として文意が通じ難いものを排する傾向にあったと推定しているにすぎない。この問題に関連して、李焯(2011:192-193)は『六度集経』の「先内慈仁，和明照大」(3-45a)という一節が、漢語としては解釈し難いものの、内容の関連する仏教混合梵語で書かれた *Mahāvastu* の該当箇所にある記載（「孝敬父母，品貌雙全，又有威嚴或又有帝王之氣」〔父母に孝行を尽くし、人品と容貌のいずれも優れ、威嚴も帝王の風格をも備えている〕）を踏まえれば、文意が理解できると指摘する。一見、本論文の立場と矛盾する事実のようであるが、*Mahāvastu* の該当箇所にしても逐語的に対応しているのではない。むしろ『六度集経』の「先内慈仁，和明照大」が *Mahāvastu* の一段の内容を簡潔に要約していると言えるのであり、ここに『六度集経』の翻訳の実際の一端が垣間見られよう。

	「出度無極集第七卷」 (53-42b~c)	(3-43c~44b)
(4)	卷第八「幼年為鬼欲所迷二十」 「出度無極集第八卷」 (53-45b~c)	卷第八（八五） 「菩薩以明離鬼妻經」 (3-47b~c)
(5)	卷第九「普施求珠降伏海神以濟窮乏六」 「出度無極集第一卷又出賢愚經」 (53-47b~48a)	卷第一（九） (3-4a~5a)
(6)	卷第九「坐海以救估客十一」 「殺身濟賈人經又出度無極集」 (53-48c~49a)	卷第六（六七） 「殺人濟賈人經」 (3-36a~b)
(7)	卷第十「釋迦為薩婆達王身割肉貿鷹三」 「出度無極集第一卷」 (53-50c~51a)	卷第三（二） (3-1b~1c)
(8)	卷第十「為國王身捨國城妻子十一」 「出度無極集第一卷」 (53-54a~b)	卷第一（六） (3-2c~3b)
(9)	卷第十「現為國王身化濟危厄十二」 (出所未標記 [三本、宮本+「出普明王經」]) (53-54c~55b)	卷第四（四一） 「普明王經」 (3-22b~24a)
(10)	卷第十一「為伯叔身意不同故行立殊別二」 「出孔雀王經又出無極集經第五卷」 (53-56c)	卷第五（五二） 「之裸國經」 (3-29c~30a)
(11)	卷第十一「為大理家身濟鼈及蛇狐四」 「出布施度無極經」 (53-57b~58a)	卷第三（二五） (3-15a~16a)
(12)	卷第十一「昔為龍身勸伴行忍七」 「出度無極集第五卷」 (53-58b~c)	卷第五（四八） (3-27c)
(13)	卷第十一「為大魚身以濟飢渴十五」	卷第一（三）

	「出度無極集第一卷」 (53-60c~61a)	(3-1c~2b)
(14)	卷第二十五「薩怛檀王以身施婆羅門作奴九」 「出薩怛檀王經」 (53-139b~c)	卷第二 (一三) 「薩和檀王經」 (3-7a~c)
(15)	卷二十六「怱黑王因母疾悟道大行惠施一」 「出度無極集經第三卷」 (53-140c~141a)	卷第三 (一五) 「布施度無極經」 (3-11b~c)
(16)	卷第三十一「須大拏好施為與人白象詰擯山中七」 「出須大拏經」 (53-164c~166c)	卷第二 (一四) 「須大拏經」 (3-7c~11a)
(17)	卷第四十五「獨母見沙門神足願後生百兒二」 「出度無極集第二卷」 (53-235a~b)	卷第三 (二三) (3-14a~c)
(18)	卷四十五「女人壞潘口常誦經生兒多智為眾人所宗十二」 「出度無極集第六卷」 (53-237b~c)	卷第六 (六六) 「小兒聞法即解經」 (3-35b~36a)

* 「対応する現存の『六度集經』欄の巻数の後の（ ）内は（例えば「巻第五（四四）忍辱度無極章第三」における「四四」）は、大正本につけられた物語番号を表す。

上の二種の版本間における具体的な字句の対応状況は、以下のようである。

・『六度集經』卷三（二三）(3-14a~b)

昔有獨母，為理家賃，守視田園。主人有*惶 [三本、金剛寺本「惶」]，餉過食時，*時 [三本無] 至欲食，沙門從乞，心存：「斯人絕欲棄邪，厥行清真。濟四海餓人，*不 [三本、金剛寺本「弗」] 如少惠淨戒真賢*者 [三本、金剛寺本無]。」以所食分，盡著鉢中，蓮華一*枚 [明本「枝」]，著上*貢 [明本「供」]焉。道人現神，足放光明。母喜歎曰：「真所謂神聖者乎。願我後生百子若*茲 [元本、明本「慈」]。」

母終神遷，應為梵志嗣矣。其靈集梵志小便之處，鹿*滯 [三本「舐」、金剛寺本「覬」] 小便，即感之生，時滿生女，梵志育焉。年有十餘，光儀庠步，守居護火，女與鹿戲，不覺火滅，父還恚之，令行索火。女至人*聚 [三本「婦」]，一*蹠 [元本、明本「跣」] 步*處 [三本、金剛寺本「跡」]，一蓮華生。火主曰：「*爾 [元本、明本「汝」] 遶吾居三匝，以火與爾。」女即順命，華生陸地，圍屋三重，行者住足，靡不*雅 [元本、明本「訝」] 奇。斯須宣聲聞其國王，王命工相，相其貴賤。師曰：「必有聖嗣，傳祚無窮。」王命賢臣娉迎禮備，容華奕奕，宮人

莫如。懷妊時滿，生卵百枚。后妃逮妾靡不嫉焉，豫刻芭蕉爲鬼形像，臨產以髮被覆其面，惡露塗*芭〔三本、金剛寺本無〕蕉，以之*示〔三本、金剛寺本「現」〕『王，眾妖弊明，王*惑〔三本、金剛寺本「或」〕信矣。…』

・『經律異相』卷四十五「獨母見沙門神足願後生百兒二」(53-235a~b)

昔有獨母，賃守田園。主人有事，餉過食時，食至欲食。沙門從乞，以所食分，盡著鉢中，一莖蓮華，又以貢奉。道人即現神足，母喜歎曰：「眞聖人乎。願我後生百子若茲。」母終爲梵志嗣，其神靈集梵志小便之處，鹿舐小便，即感有身，時滿生女，梵志育焉。年至十餘，守居護火，女與鹿戲，不覺火滅，父令索火。女至人*婦〔三本、宮本=娶〕，步一蓮華。火主曰：「爾繞吾居三匝，以火與爾。」女即從命，華生陸*土〔三本、宮本「地」〕，圍屋三重。國王聞之，召問相師。師曰：「必有聖嗣，傳化無窮。」王命賢臣媼迎還宮。懷妊月滿乃生百卵。后妃逮妾靡不嫉焉。…

以上の対応状況から、『經律異相』が『六度集經』を採録する際、省略・調整（書き換え）といった作業が行われたようであるものの、全体的にみれば、二種のテキスト間の対応する部分の字句は相当に一致していることが分かる。このことは、現存の『六度集經』言語の大部分が少なくとも南北朝・梁代まで伝承されていた状態を保存したものであることを証明するに足る。さらに、並列の接続詞「逮」など、他の文献には見出し難い機能語も現存の『六度集經』言語の中に頻出するため、現存の『六度集經』の大部分は康僧会の原文にまで遡り得ると推定してよく、『六度集經』言語の真実性は十分に高いと考えられる。

なお、金剛寺本は、一部が欠損しているものの（大正本の七卷（七四）～（七六）(39a~41a)に相当する部分）、所収の物語はすべて大正本と対応している。大正本と同じ系統のテキストであると考えてよい。本論文では、金剛寺本の欠損部分以外を、テキストの校合に用いる。

2.5.2.3 『六度集經』言語の複層性

上述のように、現存『六度集經』言語の大部分は康僧会の原文を保存したものとみなされる。しかしながら、その一部は康僧会の原文に由来しない異質な部分だと考えられるのである。康僧会の原文に由来する部分と異質な部分とを、人称代詞・近称指示代詞・文末疑問語気詞を指標として分析し、『六度集經』言語内部の複層性を示したものが【図表 2-3】である。

【図表 2-3】『六度集經』言語の複層性

指標（甲）：一人称代詞「吾」或いは二人称代詞「爾」が頻出するか。

指標（乙）：近称指示代詞として「斯」が用いられ、「此」は用いられないか。

指標（丙）：文末疑問語気詞「乎」が用いられ、「耶」は用いられない傾向が強いか。

本論文における分類	均質性に関する性質	具体的な物語	指標（甲）	指標（乙）	指標（丙）
六度集經 (A部分)	典型部分	卷第一（（一）～（一〇））など	+/?	+/?	+/?
	一部に異質成分を含む部分	卷第二（一一） 「波耶王經」	+	-	+
		卷第八（八八） 「阿離念彌經」	+	±	?
六度集經 (B部分)	異質成分を多く含む部分	卷第六（六四） 「仏説蜜蜂王經」	-	-	?
		卷第六（六六） 「小兒聞法即解經」	±	-	±
六度集經 (C部分)	異質だと判断される部分（他の根拠にも基づく）	卷第二（一三） 「薩和檀王經」	±	±	-
		卷第八（八九） 「鏡面王經」	+	?	+

* 「+」は当該の指標に対する肯定、「-」は当該の指標に対する否定、「?」は当該の指標を判断するには資料が不十分であること、「±」は中間的であることを表す。

* 「/」はその左右が選択的關係にあることを示す。

【図表 2-3】の指標（甲）は、一人称代詞「吾」～「我」・二人称代詞「爾」～「汝」が、それぞれ文法レベルの条件によって選択される現象がみられるかを確認するものである。この点は、漢語史上の『六度集經』言語の重要な特徴の一つである。すなわち、『六度集經』以外の他の多くの中古漢訳仏典では、「吾」「爾」はすでに書面語的色彩を伴っており（「吾」「爾」と「我」「汝」とが文体レベルで異なっている）、「吾」「爾」の出現頻度は「我」「汝」より総じて低い（「爾」は消滅していることが多い）。この指標が+であれば、「吾」と「我」、「爾」と「汝」とが、それぞれ文法レベルの条件によって選択されている蓋然性が大きいと言える。指標（乙）は、近称指示代詞として主として「斯」が生起し、「此」がほとんど出現しないという現象がみられるかを確認するものである。この特徴は必ずしも『六度集經』言語の排他的な特徴ではないが（一部の他の中古漢訳仏典にもみとめられる）、やはり『六度集經』言語を特徴づける文法項目の一つである。指標（丙）は文末疑問語気詞「乎」が多く用いられ、「耶」が稀少だという現象がみられるかを確認するものである。この特徴もやはり『六度集經』言語の排他的な特徴ではないが、その言語を特徴づける重要な文法項目である。

さて、【図表 2-3】から「仏説蜜蜂經」「小兒聞法即解經」「薩和檀王經」の文法特徴と『六度集經』(A部分)「典型部分」のそれとは相当に異なっていることが知られる。このうち「薩

和檀王経」については、上記の文法特徴の相違と、以下に挙げる翻訳語彙の相違などを根拠に、康僧会の原文に由来しない異質な部分だと推定される。すなわち「薩和檀王経」では、意味的にサンスクリットの *brahmana* に相当する語として音訳の「婆羅門」が使用されるが（全5例）、『六度集経』の他の部分ではいずれも「梵志」という訳語が使われている（全125例）。さらに、「解曰」を付加して前出の語句に解釈を加えていくという形式も、この「薩和檀王経」のみにみられるものである。以上の点と【図表 2-3】で示した言語の異質性を根拠に、本論文では「薩和檀王経」を異質部分とみなし（『六度集経』(C部分)と称する）、言語資料とはしない。

また上述のように、「仏説蜜蜂経」と「小児聞法即解経」についても、他の部分と異なる文法特徴を備えている。現状では康僧会の原文に由来しない異質な部分だと断言し得る他の確実な根拠があるわけではないが、本論文ではこれらを暫定的に「異質成分を多く含む部分」とみなし（『六度集経』(B部分)と称する）、やはり言語資料とはしない。

「鏡面王経」は、【図表 2-3】の三種の指標に関しては、他の部分と大きな差異は見出せない。しかし、三世紀初あるいは三世紀中葉に、呉の支謙が翻訳した『仏説義足経』と対照すると、『六度集経』所収の「鏡面王経」は、実は『仏説義足経』所収の「鏡面王経」に由来すると推定できる³²。まず、『六度集経』所収の「鏡面王経」に「義足経」という語が見られ、さらに『六度集経』所収の「鏡面王経」と『仏説義足経』所収の「鏡面王経」の偈の字句が一致するのである。さらに、二つの「鏡面王経」ではいずれも人称代詞の複数形式として「X曹」の形式が用いられるが、これは『仏説義足経』の文法体系と符合するものであり、「X等」を用いる『六度集経』の他の部分とは異なっている。以上から、本論文では『六度集経』所収の「鏡面王経」は、康僧会の原文に由来しない異質部分（『六度集経』(C部分)とみなし、言語資料とはしない。

本論文では、以上の『六度集経』(B部分)・『六度集経』(C部分)に分類したもの以外のすべての『六度集経』所収の物語を『六度集経』(A部分)に属するものとみなし、言語資料として用例採取の対象とする。『六度集経』(A部分)のなかにも「波耶王経」や「阿離念彌経」のように、典型的な部分とはやや言語に異質であることが疑われるものも含まれるが、恣意的な資料の改編に陥らないように、明確に異なるもの（上述の『六度集経』(B部分)と『六度集経』(C部分)）以外は、すべて『六度集経』(A部分)とみなすこととした。

³²現存の『六度集経』所収の「鏡面王経」が支謙の『仏説義足経』に由来するという推定が正しいとすれば、これと『六度集経』(A部分)との文法的特徴が一致するのは、康僧会が支謙の原文に対して大幅に手を加えた結果だということになる。

2.5.3 『雑宝蔵経』十卷（大正蔵 NO.203）

2.5.3.1 成書時期・地域

『雑宝蔵経』に関しては、『出三蔵記集』巻第二に、「雑寶藏經十三卷闕…右三部，凡二十一卷。宋明帝時，西域三蔵吉迦夜於北國，以偽延興二年，共僧正釋曇曜譯出，劉孝標筆受。此三經並未至京都。」(55-13b)〔雑宝蔵経十三卷闕…右三部、全二十一卷。宋・明帝（＝劉彧）の時代、西域の三蔵・吉迦夜が北朝において、偽・延興二年に、僧正・釈曇曜と共に訳出し、劉孝標が筆受した。これら三部の経はいずれも都（＝建康）には齎されていない。〕という記載がみられる。この他、『歴代三宝記』『開元釈教録』『大唐内典録』の記載に基づけば、この書は吉迦夜と曇曜が延興二年（472年）に訳出したものだと推定される。本論文では『雑宝蔵経』を南北朝時代に北朝で成書した言語資料だとみなす。

2.5.3.2 真実性

『雑宝蔵経』は『経律異相』には引用されていない。これは恐らくこの経が南朝・梁まで流伝していなかったことによるのであろう（上述の『出三蔵記集』巻二の「此三經並未至京都」という記載を参照）。よってこのことは必ずしも『雑宝蔵経』言語の真実性を低めるものではない。この経の流伝状況については、梁麗玲(1998:18~20)が詳細な検討をしている。梁氏によれば、この書は歴史的には十三巻本、十巻、八巻という三種のテキストがあり、そのうち十巻本と八巻本は隋唐代以降になって現れたものである。十三巻本については、現在はすでに失われてしまっており、現存のものは八巻と十巻の二種のテキストだけである。しかし氏は、同時に、唐代の道世の編になる『法苑珠林』の中に、いくつか『雑宝蔵経』から採録されたことが明示されているながら、現存の八巻本と十巻本にはみとめられない物語があると指摘する。ここから梁氏は、この『法苑珠林』に収められているものこそ早期の十三巻本の内容である可能性があると主張している。この梁氏の説は説得的であるものの、今後、言語面からの具体的な検証が待たれるものと言えよう。本論文では、『大正蔵』所収の十巻本を用いることにする。

『法苑珠林』所引の『雑宝蔵経』と、それに対応する現存『雑宝蔵経』における個所の一覽については、梁麗玲(1998:45~20)がすでに示している。ここでは、これら二種のテキストの具体的な字句の一致状況の一例を補足しておくに止める。

・『雑宝蔵経』巻第一（三）「鸚鵡鸚鵡子共養盲父母縁」(4-449a)

…非但今日，於過去世。雪山之中有一鸚鵡。父母都盲，常取好花果，先奉父母。爾時有一田主。初種穀時而作願言：「所種之穀，要與眾生而共噉食。」時鸚鵡子，以彼田主先有施心，即常於田，採取稻穀，以供父母。是時田主*按〔三本、金剛寺本「案」〕行苗*行〔三本、金剛寺本「稼」〕，見諸虫鳥*揃〔金剛寺本「剪」〕穀穗處，瞋恚懊惱。便設羅網，捕得鸚

鵲。鵲子言：「田主先有好心，施物無吝。由是之故，故我敢來，採取稻穀。如何今者而見網捕。且田者如母，種子如，實語如子。田主如王，擁護由己。」作是語已，田主歡喜，問鵲言：「汝取此穀，竟復為誰。」鵲答言：「有盲父母，願以奉之。」田主答言：「自今已後，常於此取，勿復疑難。」佛言：「鵲樂多果種，田者亦然。爾時鵲，我身是也。爾時田主，舍利弗是。爾時盲父，淨飯王是。爾時盲母 [三本、金剛寺本「母者」]，摩耶是也。」

・『法苑珠林』卷第四十九(53-655b~c)

(又雜寶藏經云)昔過去久遠，雪山之中有一鵲 [三本、宮本「鵲」]。父母都盲，常取好果，先奉父母。當於爾時有一田主。初種穀時而作願言：「所種之穀，要與眾生而共噉食。」時鵲 [三本、宮本「鵲」] 子以彼田主先有施心，常取其穀以供父母。田主行穀見有蟲鳥掬穀穗處，瞋恚懊惱。便設羅網捕得鵲 [三本、宮本「鵲」]。鵲像 [三本、宮本「鵲」] 爾時語田主言：「田主，先有好心布施，故敢來取。如何今者而見網捕。」田主問言：「取穀為誰。」鵲像 [三本、宮本「鵲」] 答言：「有盲父母，願以奉之。」田主語言：「自今以後常於此取，勿生疑難。畜生尚爾，孝養父母。豈況於人。」佛告比丘：「昔鵲像 [三本、宮本「鵲」] 者，今我身是。時田主者，舍利弗是。盲父母者，今我父母淨飯王摩耶夫人是。由昔孝養今得成佛。」 [明本+「卷第六十一終」]

以上の状況から、『法苑珠林』が『雜寶藏經』を採録する際、字句の省略或いは調整（書き換え）といった作業が行われたようであるものの、全体的にみれば、二種のテキスト間の対応する部分の字句は相当に一致していることが分かる。よって、現存の『雜寶藏經』の言語の真実性は相当に高いとみなしてよい。

なお、金剛寺本は八巻本であり、十巻本の大正本と異なる。上述のようにテキストの系統が複数あったことを反映したものであろうが、両者に収められた物語は原則として同じである。以下に示したものは、大正本と金剛寺本との所収の物語の対応関係である。

【図表 2-4】大正本と金剛寺本との所収物語の対応関係

大正本		金剛寺本	
巻数	物語番号	巻数	内容上対応する 大正本の物語番号
巻第一	(一) ~ (九)	巻第一	(一) ~ (九)
巻第二	(一〇) ~ (二四)	巻第二	(一〇) ~ (二四)
	(二五) (二六)	巻第三	(三六) (三七)
巻第三	(二七)	巻第三	(三八)
	(二八)	巻第二	(二五)
	(二九) ~ (三八)	巻第三	(二六) ~ (三五)

	(三九)	卷第三	(三九)
卷第四	(四〇)~(四八)	卷第四	(四〇)~(四八)
	(四九)(五〇)	(卷第五)	欠
卷第五	(五一)~(五三)	卷第三	(五一)~(五三)
	(五四)~(七二)	卷第四	(五四)~(七二)
卷第六	(七三)~(七八)	(卷第五)	欠
卷第七	(七九)~(八一)		欠
	(八二)	卷第六	欠(但し卷第六(八二)の最後の一行が一致)
	(八三)~(九四)		(八三)~(九四)
卷第八	(九五)(九六)	卷第六	(九五)(九六)
	(九七)~(一〇一)	卷第七	(九七)~(一〇一)
卷第九	(一〇二)~(一一〇)	卷第七	(一〇二)~(一一〇)
	(一一一)~(一一五)	卷第八	(一一一)~(一一五)
卷第十	(一一六)~(一二一)	卷第八	(一一六)~(一二一)

*上表は、大正本所収の各物語が金剛寺本のどの巻に収められているのかを示したものであり、物語番号の一致は内容上の一致を意味する。よって巻数は大正本・金剛寺本のそれぞれのものであるが、物語番号は、大正本・金剛寺本のいずれも大正本のものに統一してある。

*金剛寺本は、大正本の(四九)(五〇)(七三)~(八二)に相当する物語を欠くが、これは現存の写本の欠損によるものである。欠損部分は主に巻第五に相当し、大正本の(四九)(五〇)(七三)~(八一)の物語に相当する部分が、金剛寺本の巻第五を構成していたと推定される。

*なお、金剛寺本にも「雑宝蔵経十奢王経第一」のごとく、すべての物語に番号が与えられており、大正本と同じく全部で121の物語が収められていたことが知られる。

2.5.4 『過去現在因果経』四卷(大正蔵 NO.189)

2.5.4.1 成書時期・地域

『過去現在因果経』に関しては、『出三蔵記集』巻第二に「過去現在因果経四卷[三本+「宋元嘉中譯」]。…右十*四[大正本「三」、三本に抛る]部、凡七十*六[大正本「三」、三本に抛る]卷。宋文帝時、天竺摩訶乘法師求那跋陀羅、以元嘉中及孝武帝時宣出諸經、沙門釋寶雲及弟子菩提法勇傳譯。」(55-13a)〔過去現在因果経四卷。宋の元嘉年間(424~454年)に訳出された。…右十四部、全七十六卷。宋の文帝(=劉義隆)の時期に、天竺の摩訶乘法師である求那跋陀羅が、元嘉年間及び孝武帝(=劉駿)期(454~465年)に諸経を遍く翻訳した。沙門の釈宝雲および弟子の菩提法勇が通訳した。〕という記載がある。また第十四卷『求那跋陀羅伝第八』には「…後譙王

鎮荊州，請與俱行，安止辛寺，更創殿房。即於辛寺出無憂王、過去現在因果*及〔宋本、元本、明本〔各〕一卷無量壽…等諸經，凡一百餘卷〕(55-105c)〔後に譙王（＝劉義宣）が荊州を守護するようになると、彼（＝求那跋陀羅）に共に行くことを請うた。（そこで）辛寺にとどまり、王の居室を作った。そして辛寺において無憂王經、過去現在因果經及び一卷無量壽經…等の諸經、全百余卷を訳出した。〕という記載がみとめられる。ここから、この書は求那跋陀羅が劉宋元嘉年間に荊州辛寺で訳出されたと推定できる。本論文では、『過去現在因果經』を南北朝時代に南朝において成立した言語資料とみなすことにする。

2.4.4.2 真実性

『過去現在因果經』には『經律異相』に採録された箇所が少なくとも次の一か所みとめられる。

【図表 2-5】『經律異相』所引の『過去現在因果經』と現存『過去現在因果經』の対応箇所

	『經律異相』所引の『過去現在因果經』	現存『過去現在因果經』
(1)	卷十二「善慧得五種夢請佛解釋*六」 （「出過去現在因*果經第一*卷」） (53-62b)	卷第一（一部分） (4-622c:25~623a7)

以下、当該箇所の具体的な字句の異同状況を示す。

・『過去現在因果經』 卷第一(4-622c:25~623a7)

爾時善慧比丘白普光如來言：「世尊，我於昔日在深山中得五奇特夢。一者夢臥大海。二者夢枕須彌。三者夢海中一切眾生入我身內。四者夢手執日。五者夢手執月。唯願世尊，為我解說此夢之相。」爾時普光如來答言：「善哉。汝若欲知此夢義者，當為汝說。夢臥大海者，汝身即時在於生死大海之中。夢枕須彌者，出於生死得般涅槃相。夢太海中一切眾生入身內者，當於生死大海，為諸眾生作歸依處。夢手執日者，智慧光明，普照法界。夢手執月者，以方便智，入於生死，以清涼法，化導眾生，令離惱熱。*此〔三本「以此」〕夢因緣，是汝將來成佛之相。」

・『經律異相』 卷第十二「善慧得五種夢請佛解釋六」 (55-62b)

善慧比丘白普光如來言：「我昔日在深山中，得五種夢。一者夢臥大海。二者夢枕須彌。三者夢海中一切眾生入我身內。四者夢*手〔宋本「乎」〕執日。五者夢手執月。唯願世尊為我解說。」時佛答曰：「夢臥大海者，汝身即時在於生死大海之中。夢枕須彌者，出於生死得涅槃相。夢大海中一切眾生入身內者，當於生死大海，為諸眾生作歸依處。夢手

執日者，智慧光明普照法界。夢手執月者，以方便*智〔三本、宮本「智慧」〕入於生死，以清涼法化導眾生。」（「出過去現在因*果〔宋本「牙」〕經第一*卷〔三本、宮本「卷中」〕」）

上述の状況から、『経律異相』が『過去現在因果経』を採録する際、字句の省略や調整（書き換え）といった作業が行われたようであるものの、全体的にみれば、二種のテキスト間における対応する個所の字句は相当に一致していることが分かる。よって、現存の『過去現在因果経』の真実性は相当に高いとみなしてよい。

2.5.5 その他の漢訳仏典

本論文では、上述の「主要資料」以外に、中古期において成書した他の漢訳仏典を言語資料として用いる。以下、主要なものについて言及しておく。

(i) 『仏説阿闍世王経』二卷（大正蔵 NO.626）

『出三蔵記集』巻第二に「阿闍世王経二卷安公云出長阿含舊録阿闍*貫〔元本、明本「世」〕経……右十*三〔三本「四」〕部，凡二十七卷。漢桓帝靈帝時，月支國沙門支讖所譯出。其古品*以〔三本「已」〕下至内藏百品凡九經。安公云『似支讖出也。』〔阿闍世王経二卷。安公（=道安）は長阿含言経に由来すると言っている。旧目録では「阿闍貫」（とする）。右十三部、併せて二十七卷は、漢の桓帝・靈帝の時代に月支国の沙門である支讖が訳出した。（上述の）古品から内藏百品までの併せて九経については、道安は「支讖が訳したようである」と言う。〕(55-6b)とあり、訳者は支婁迦讖と比定される。

成立した地域に関しては、梁・慧皎の『高僧伝』巻第一（大正蔵 NO.2059）の支婁迦讖伝に、大月氏の人で、漢の桓帝（在位 147-161）の末年に洛陽に至り、靈帝の光和年間（178-190）に『般若三宝記』などを訳出したとある。『歴代三宝紀』（大正蔵 NO.2034）巻第四等には『阿闍世王経』も洛陽で漢訳されたとあり、これらが正しければ二世紀末に洛陽において訳出されたものと推定できる。ただし、この文献は、上述の『出三蔵記集』巻第二の「古品から内藏百品までの併せて九経」に含まれるため、少なくとも安公すなわち道安は支婁迦讖訳であると断定はしていなかったようである。この『阿闍世王経』の訳者の問題については、宮崎(2007)が、句作りや偈頌の有無、多くの音訳語・意識語などについて支婁迦讖訳『道行般若経』と共通する点があること、しかし同時に、冒頭句や割注、一部の訳語は、支婁迦讖訳であることを疑わせるものであることを指摘した上で、「支讖による翻訳か否かの判断はにわかにはくだしがたい」とし、支婁迦讖訳との判定を留保している。その一方、文法面では、松江(2000)が、一・二人称代詞の体系が他の後漢末・洛陽で訳出された漢訳仏典と共通する特徴を有していることを指摘している。以上から、支婁迦讖その人の関与がどの程度であったかは不明であるが、支婁迦讖あるいはその学派に連なる同時代の人によって、洛陽近辺で翻訳された可能性が高い。

(ii) 『仏説義足經』二卷 (大正蔵 NO.198)

『出三蔵記集』卷第二に「義足經二卷…右三十六部四十八卷。魏文帝時支謙以吳主孫權黃武初至孫亮建興中所譯出」(55-6c~7a)〔義足經二卷…右三十六部四十八卷は、魏文帝の時期、支謙が吳主・孫權の黃武年間(222-229年)から孫亮の建興年間(252-253年)の期間に訳出した〕とあり、訳者は支謙とされている。成書された具体的な場所は不明であるが、『歴代三宝紀』の記載によれば、支謙は吳国に到った後、黃武元年(222年)から建興年間(252~253年)に翻訳に従事したのであり、『衆経目録』卷三「吳黃武年支謙譯」(55-128a)という注釈を考え併せると、『仏説義足經』は三世紀の三国吳国において成書したものと推定される。

(iii) 『太子須大拏經』一卷 (大正蔵 NO.171)

『出三蔵記集』卷第三では失訳とするが、『歴代三宝記』卷第九に「*大〔三本、宮本「太」〕子須大拏經一卷於江陵*辛〔元本、明本「幸」〕*寺〔三本、宮本、聖語藏本「寺出」〕庾爽筆*受〔三本「授」〕。見始興*録〔三本、宮本、聖語藏本無〕及*寶〔聖語藏本「賈」〕唱録……右一十四*部〔三本、宮本、聖語藏本「經」〕合二十一卷。晋孝武世，沙門聖堅於河南國爲乞伏乾歸譯。或云堅公、或云法堅、未詳孰是。」(49-83b~c)〔太子須大拏經一卷、江陵辛寺において訳出された。庾爽が筆受した。始興録および寶唱録にみえる……右十四部、あわせて二十一卷は、晋の孝武帝の世に沙門・聖堅が河南国において(西秦の)乞伏乾歸の為に訳した。(聖堅は)堅公とも法堅とも言うが、いずれが正しいのか詳らかでない〕とあり、訳者は聖堅とされている。ここから、聖堅が四世末或いは五世紀初頭に河南国(=恐らくは現代の甘肅南部の黄河以南の地域)において訳出されたと推定される。

(iv) 『賢愚經』十三卷 (大正蔵 NO.202)

『出三蔵記集』卷第二に「賢愚經十三卷。宋元嘉二十二年出……右一部。凡十三卷。宋文帝時。涼州沙門釋曇學威德，於于闐國得此經*胡本〔三本「梵本」〕，於高昌郡譯出。天安寺釋弘*守〔三本「宗」傳〕(55-12c)〔賢愚經十三卷。南宋の元嘉二十二年(445年)訳出。……右一部、あわせて十三卷は、南宋の文帝の時代に、涼州の沙門である曇學と威徳とが于闐国においてこの經の胡本(=何らかの非漢語の言語か)を入手し、高昌郡において訳出した〔(以上の内容は)天安寺・釈弘守(弘宗)伝〕との記載があり、五世紀半ばに曇學と威徳により高昌郡において訳出されたと推定される³³。翻訳の経緯については『出三蔵記集』卷第九には「賢愚經記」が収められており、これによれば、一対一の原典が想定されるものではなく、かつ中央アジアで編訳されたものということになる³⁴。

³³これによれば『賢愚經』の成書年代は南宋の元嘉二十二年(445年)と断定できそうであるが、『出三蔵記集』卷第九「賢愚經記」の記載などから435年とする説もある。この問題も含め、『賢愚經』の成立に係る問題については、梁麗玲(2002)が詳しい。

³⁴原文は以下のとおり。

なお、以上の漢訳仏典の他に、『百喻經』も文法史研究にしばしば用いられる。この文献は五世紀末の南朝・齊代に求那毘地が訳出したものとされるが、南朝梁代に編纂された『經律異相』に引用された『百句譬喻經』の言語と一致せず（『經律異相』には『百喻經』という書名では引用されない。一般にはこの『百句譬喻經』が現存の『百喻經』に相当するものとみなされている）、現存の『百喻經』言語の真実性の高さは証明されていない。ただし唐代に編纂された『法苑珠林』に引用された『百喻經』言語は、現存『百喻經』のそれと相当に一致する。よって少なくとも唐代における状況は保存していることになる。本論文では、言語現象の具体的な出現時期が積極的に問題となる場合には、『百喻經』は言語資料として用いない。

2.6 近古前期の言語資料

2.6.1 本論文における近古前期の扱い

本論文で言う近古前期とは、隋唐から唐末五代にかけての時期を指す（宋代を近古後期とみなす）。この時期は、疑問目的語の語順変化は基本的にはすでに実現しており、疑問目的語の前置語順は、残存形式として存在しているに過ぎない。ただし、注目に値するのは、この時期には、疑問代詞の語彙体系において、中古以前には見られなかった一群の疑問代詞が出現することであり、それらから構成される疑問目的語の語順が後置に転じた中古のそれを継承するのかが確認しておく必要がある。以上から、本論文では、近古前期資料を、中古の状況が継承されるか否かを確認するための補助資料として位置づけることとする。

近古前期の言語資料は、漢代以前の言語を継承した書面語的色彩の強いものから、口語語彙を多く含む口語的性格が色彩の強いものまで多くのものが存在する。そのなかでも文法・語彙資料としては、敦煌文献（変文等）、禅語録（『祖堂集』など）、そして伝奇などの小説類がとりわけ重要であり、さらに語彙資料に限定するのであれば、広義の唐詩類（王梵志詩などのように口語表現を多く含む詩もある）、『入唐求法巡礼行記』なども貴重な資料と言えよう。

河西沙門釋曇學*威〔三本「威」〕德等凡有八僧，結志遊方遠尋經典。於于闐大寺遇般遮于瑟之會。般遮于瑟者，漢言五年一切大衆集也。三藏諸學各弘法寶，說經講律依業而教。學等八僧隨緣分聽，於是競習*胡音〔三本「梵本」〕折以漢義，精思通譯各書所聞，還至高昌乃集爲一部。… (55-67c)

〔河西の沙門、曇学威德など全部で八人の僧が、志を同じくし各地を巡り遠方まで經典を探し求めていた。于闐の大きな寺で般遮于瑟の大会に遭遇した。般遮于瑟は漢語で言うと「五年一切大衆集」（五年に（一度）すべての信者が集まること）である。各宗派の長老たちは經を説き、律を講じるなど業に従って教えた。（曇）学ら八人の僧は縁に従ってそれぞれ聴講した。そして異民族の言語を競って学び、漢語の意味を分析し、丹念によく考え、聞いたものを記録したものを翻訳し、高昌までもどり（それを）集めて一部とした〕

2.6.2 主要資料

本論文では近古前期の主資料として、唐代初期の『遊仙窟』、唐末五代の『舜子変』『伍子胥変文』『降魔変文』を採用する。

『遊仙窟』は、一般に深州陸沢（現在の河北省深県）の人である唐代の張鷟（字は文成、一説に660-732年）の撰とされる。いわゆる唐代伝奇の一種ともみなし得るが、内容は仙境における男女の一夜の恋愛を描いたものである。言語面では、散文と韻文（詩）とから構成され、その文体には四六駢儷体の影響がみとめられなど、書面語的色彩もかなり強い。また、『詩経』や『論語』などの上古文献を直接引用した、あるいはそれらを踏まえた箇所もみられるため、理想的な言語資料とは言えない。しかしその一方、形容詞が接辞「生」を伴った「太+形容詞+生」（ひどく～だ）、動作の対象を目的語にとり、その動作の持続を表す「V+著+O」（Oを～したままで）、動作の完了を表す「V+却」（～してしまう）、断定の語気を表す文末語気助詞「在」など、近古前期（あるいは中古後期）に新出した口語的な文法項目・語彙をも多く含んでおり（趙金銘1995など）、近古前期のうち、とりわけ唐代初期の文法・語彙資料としての価値は無視できない。本論文では、『詩経』や『論語』などの上古文献を直接引用した、或いはそれらを踏まえた箇所を除外した上で³⁵、近古前期の資料として採用することとした。なお、この文献は中国では散逸したため、日本に伝わる醍醐寺蔵古写本（1344年書写）を用いることになるが、日本独自の字形に由来する問題をも含むため（周一良1991）、字形・用字については適宜調整を行う。

『舜子変』『伍子胥変文』『降魔変文』の三文献は、広義の敦煌変文に属する。唐代の言語資料について、太田(1988:110)が「いったい唐五代の言語資料として最も信用できるのはいうまでもなく敦煌資料である。しかしそれは誤脱も多く難解なもので、その上現在までに公表されているものは多いとはいえない」と指摘するように、敦煌文献は、出土資料であり、後世の改編を受けていない点で、言語資料としての価値は極めて高い。そして上述の太田(1988)が指摘する誤脱の多さや難解さ、公表されている文献の制限といった問題点は、近年の研究により徐々に解消されつつある。例えば、近年の校勘成果を反映した黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』の出版や、難読語彙の解釈に関する一連の唐五代漢語研究の進展と集積によって³⁶、現在では敦煌文献の言語資料としての使用はかなり容易になったと言ってよい。

本論文で主資料とする『舜子変』『伍子胥変文』『降魔変文』は、いわゆる「変文」に分類され得るものであり、口語性が顕著である点で、文法・語彙資料としての価値がとりわけ高い。これら三文献のテキストとしての成立年代、或いは現存の写本の書写年代につい

³⁵ 『遊仙窟』における上古文献を直接引用した、或いは踏まえた箇所のうち、疑問目的語の関わる用例については、本論文 14.5.1.2 の【図表 14-31】および 14.5.1.3 【図表 14-32】の注において言及した。

³⁶ 例えば、江藍生・曹廣順(1997)は、近年の唐五代語彙研究の研究成果を幅広く踏まえて編纂された辞典である。

では種々の議論があり、必ずしも確定していない。ただし、それぞれいくつかの具体的な手がかりが残されていることは重要である。例えば、『舜子変』にはS.4654に五代の「大周廣順四年」(954年)という識語があり(荒見2010:39)、『伍子胥変文』にはテキストに「城父縣」という唐代の具体的地名が出現している(「今城父縣是也」)。また、『降魔変文』については、このテキストはS.4398の裏面に書かれているのであるが、その正面側に「天福十四年五月」(949年)という識語がみえるのである(荒見2010:128-129)。本論文では、各資料の具体的な書写時期・成立時期に関する議論は行わないが、テキストとしてはいずれもおおよそ唐代から五代にかけて成立したものと考えて大過ないであろう

(Mair1989:40-43など)。なお、『降魔変文』の冒頭部分(「蓋聞如來說法」から「述在下文」。底本552頁)は、文体的に他の部分とは大きく異なるため、本論文ではこの部分は資料としないこととする。以上の敦煌変文は、依拠する版本が重要になるが、底本には、近年の校勘成果を反映した黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』を採用し、底本で使用された写本についても可能な範囲で適宜参照する³⁷

³⁷ 『舜子変』については、P.2721、S.4654を、『伍子胥変文』についてはP.2794、P.3213、S.328、S.6331を、『降魔変文』についてはS.5511、S.4398、P.4524を参照し得た。ただし『降魔変文』の重要な版本である羅振玉旧蔵本(『敦煌零拾』本)は目撃し得なかった。これらのうちペリオ本(P.)は『法藏敦煌西域文獻』所収のものに拠り、スタイン本(S.)は、暫定的に画像データベースである拇指數據庫『敦煌變文』(北京愛如生數字化技術研究中心)所収の画像に依拠した。なお、本論文2.6.2における敦煌変文に関する記述は、松江(2014)に基づく。

第三章 早期漢訳仏典言語の中古文法資料

としての価値

早期漢訳仏典——かりに後漢から隋代以前に成立したいわゆる古訳・旧訳の漢訳仏典を指すこととする——を漢語史の資料とすることは、漢語音韻史研究からはじまったと言ってよい。二十世紀初頭に中古音の体系的な再構成を実現して近代中国語学の基礎を築いた B. Karlgren はすでに梵漢対音の重要性を認識していたし、H. Maspero、A. von Staël-Holstein、汪榮宝といった研究者たちは 1920 年代に早くも漢訳仏典のサンスクリット音訳漢字を資料に用いつつ漢語音韻の研究を推し進め、中古音或いは上中古間音史に重要な貢献を行った（儲泰松 1998、耿振生 2004:260-292 など）³⁸。その後、多くの研究者が早期漢訳仏典の音訳漢字を資料として研究を行い、これを主要な資料の一つとして後漢期の音韻体系の再構成を試みた Coblin(1983)のような研究成果も現れた。漢訳仏典の音訳漢字については、その原典がいったいどのような言語のものであったのか——狭義の古典サンスクリットであったのか、ガンダーラ語などの中期インド語、或いはいわゆる仏教混合サンスクリットであったのか——という複雑な問題が不可避であり、漢語音韻史資料としての早期漢訳仏典の音訳漢字をどの程度評価するかは様々な立場があり得る。しかし少なくとも上古と中古の間を埋める音韻資料として重要な価値を持つことは、ほとんどの論者がみとめるところとなっている。

そして早期漢訳仏典を漢語史資料として用いる試みは、音韻史研究だけにとどまらず、語彙史・文法史研究にまで広がった。このうち文法史研究については、後漢末に成立した早期漢訳仏典を言語資料とした Zürcher(1977)が、上古とは異なる中古漢語の文法特徴を体系的に描き出すことに成功して以来、中古漢語文法研究（後漢～隋代）あるいは上中古間文法史研究に漢訳仏典を用いることは、今は常識となったかのようである³⁹。

漢訳仏典の文法史資料としての価値は、①中国の非仏教文献にはみられない語彙・文法形式——それらは当時の口語に由来する可能性がある——が豊富にみられること、②多くの漢訳仏典言語はその均質性が高いこと、③成書時期・地域を特定できるものが少なくないこと、④『経律異相』（南北朝梁代に成立）などの類書に引用された部分と対照することによって、現存言語の信憑性が確かめられるものが少なからず存在すること、などである。このうち①が最も重要であるが、実際には早期漢訳仏典に非仏教文献とは異なる文法現象がみられる場合でも、それを漢語の口語の反映であると認定することは容易なことではない。判断を困難にする要因は一つではないが、最も大きな要因は、漢訳仏典言語が畢竟「翻訳言語」

³⁸汪榮宝の学説とそれをめぐる論争については、慶谷(1980)および慶谷(1997)を参照されたい。

³⁹漢訳仏典を用いた漢語文法史研究の歴史については、朱冠明(2013)、孫錫信・楊永龍(2014:109-118)等を参照のこと。

であり、非漢語の原典言語の文法体系の影響を大きく受けている可能性が排除できないということである。この非漢語原典言語の文法体系から受けた影響の大小が早期漢訳仏典の漢語文法史資料としての価値——具体的には中古文法資料としての価値——を決定づけると言っても過言ではない。

本章は、早期漢訳仏典にみられる二つの特徴的な文法項目をとりあげ、これらが当時の漢語の口語と如何なる関係があったのかを検討する（本論文 3.2、3.3）。さらにその具体的な検討を踏まえ、早期漢訳仏典言語に特徴的な文法現象と漢語の口語との関係を判断するためのいくつかの基準を提出し（本論文 3.4.1）、併せて疑問目的語の語順変化を論ずる際に早期漢訳仏典を言語資料とし得るかどうかの判断を行うこととする（本論文 3.4.2）。

3.1 議論の前提となる諸問題

具体的な検討に入る前に、確認しておくべきいくつかの問題について言及しておきたい。

まず、早期漢訳仏典にのみ、ある文法現象がみとめられ、同時期の非仏教文献では当該の文法現象がみとめられない場合、次のような可能性があり得るということである。

- (i) 当該の文法現象は漢語の口語であった。同時期の非仏教文献は書面語的色彩が強かったため、当該の文法現象は反映されなかった。
- (ii) 当該の文法現象は漢語の口語とは関係がなかった。これが早期漢訳仏典にのみ出現したのは、翻訳時に原典言語の影響を受けたためである。
- (iii) 当該の文法現象は漢語の口語とは関係がなかった。これが早期漢訳仏典にのみ出現したのは、翻訳者が翻訳の際に存在していた既存の漢訳仏典の言語の影響を受けたためである。

ここで(ii)と(iii)の違いを明確にしておく必要がある。 (iii)は早期漢訳仏典の翻訳者が当該の仏典を翻訳した際に、直接には先行漢訳仏典の言語の影響を受けた（模倣した）結果、当該の文法現象が生じた状況を指している。このとき当該の文法現象は、歴史的には漢語の口語に由来するかもしれない（= (i)）、また原典言語の影響に由来するかもしれないが（= (ii)）、直接的には当時の漢語の口語とも当該の仏典の原典言語とも関係はないことになる。

次に、上述のごとく、特に南北朝期以前の早期漢訳仏典の原典言語は狭義の古典サンスクリットとは限らず、往々にしてガンダーラ語などのプラークリット、或いはトカラ語などの中国西域の印欧語系の言語であったという問題がある⁴⁰。一般にこの時期の漢訳仏典の原典

⁴⁰この問題についての議論は、季羨林(1957)が、サンスクリットの反舌音(Mūdhanya)である *t* 或いは *d* が早期漢訳仏典のなかでは来母字（中古漢語では**l*）で音訳されることもあることを指摘したことからはじまるようである。季氏はこの現象は、サンスクリットの *t* 或いは *d* が、俗

言語を特定することは難しい。

もう一つは、仏典の漢訳に際し、翻訳者によって異なる方針を採ることがあり得たという問題がある。このことは、「文」派と「質」派の論争として知られる論争を想起するだけでも、容易に窺われよう。例えば、三国時代の『法句経序』には、撰者（未詳。丘山 1983:95-96:注4等によれば支謙）が竺天炎の翻訳した『法句経』五百偈に音訳語が過多であること、文章が「文雅」でないことを批判した記載がみとめられる（丘山 1983 など参照）。この両派における「文」ないし「質」の内実が何なのかについては様々な説があるけれども、いずれにせよ意識・直訳といった翻訳方法或いは文体・文章表現に関わる立場の違いを反映したものであると考えられる⁴¹。

上述のような問題があるという前提で、以下、早期漢訳仏典に特徴的な文法現象が口語と如何なる関係にあるのかを検討していく。具体的には、(甲) 動作行為の完了を表す完了動詞「已」、(乙) 人称代詞の複数接辞、の二項目をとりあげる。

3.2 完了動詞「已」

3.2.1 問題の所在

中古期の非仏教文献において、「畢」「竟」「訖」「已」などの「完了する／終結する」意味を有する動詞が他の動詞句の後に生起し、おおよそ動作行為の〈完了〉を表わす形式が増加することは、すでに多くの研究者に指摘されている（太田 1988、馮春田 1992、柳士鎮 1992

語たるプラークリットでは ! に変化してしまっただけの結果であると考えた。そしてこの現象に注目して、漢訳仏典の原典言語に関する次のような時代区分を提案している（この季羨林 1957 の説の存在は、橋本 2004、馬祖毅等 2006 に教えられた）。

第一期（後漢から南北朝）は、あらゆる t d が来母字で音訳される。この時期の漢訳仏典は、その原文のほとんどがサンスクリットではなく、プラークリット或いは混合サンスクリットであった（何らかの古代中央アジア言語からの転訳も多い）。

第二期（南北朝から隋代）は、ある時には t d が来母字で音訳されるが、またある時には異なる字で音訳される。この時期の漢訳仏典の原文は、多くがプラークリット或いは混合サンスクリットであったが、サンスクリット化（Sanskritisierung）が進んだものも多かった。

第三期（隋代以降）は、この時期以前の音訳を踏襲した少数のもの以外は、 t d が来母字で音訳されることはない。この時期の漢訳仏典の原文は、純粋なサンスクリットであった。

以上の季羨林(1957)の説は、現代の中国語学からみれば、議論の生ずる箇所もあろうし（たとえば現在では中古来母は主に上古の *r に由来するとみなす考えも有力である）、また近年のインド学からも修正されるべき箇所もあるのかもしれない。しかしながら、漢訳仏典とその原語との対応関係の大枠を言語学的根拠に基づいて提出した功績は大きいと言えよう。漢訳仏典の言語の問題に関する、近年の中国学・インド学の成果を踏まえた詳しい解説は、辛嶋(1994:3-12)、平田(1994)等を参照されたい。

⁴¹丘山(1983:86)は「文」と「質」とは意識と直訳ではなく、それぞれ「文雅な文体・表現」と「質実な文体・表現」を意味すると考える。

など)⁴²。本論文では、これら完了／終結の意味を有し、他の動詞句の後に生起し動作行為の〈完了〉を表わすために用いられた「畢」「竟」「訖」「已」などの動詞を「完了動詞」と称する。完了動詞のうち、中古期の非仏教文献においては、「畢」「竟」の出現率が「訖」「已」よりも高い。

- (3-1) 存講時為何上佐，正與審共食，語云：「白事甚好，待我食畢作教。」食竟，取筆題白事後云…（『世説新語』「政事」1-213~214）

〔虞存は当時、何充の上級補佐であった。ちょうど虞審と一緒に食事をしていたとき（彼に）に言った「（上申書）はたいへんよく書かれている。私が食べ終わったら回答しよう。」食事が終わると筆を執り、上申書のあとに（次のように）書き付けた…〕

- (3-2) 亮乃北行見備，備與亮非舊，又以其年少，以諸生意待之。坐集既畢，眾賓皆去，而亮獨留，備亦不問其所欲言。（『三國志』「蜀書」「諸葛亮伝」裴注引「魏略」913）

〔諸葛亮はそこで北へ赴いて劉備と会った。劉備は諸葛亮と旧知ではなく、また彼が年若いために、書生に対する態度で彼を遇した。会合が終わると、賓客たちはみな去ったが、諸葛亮は独り留まった。劉備はやはり彼が言いたいことを尋ねようとはしなかった。〕

- (3-3) 何晏注『老子』未畢，見王弼，自説注『老子』旨。何意多所短，不復得作聲，但應諾諾。（『世説新語』「文学」1-237）

〔何晏は『老子』に注釈してまだ完成しないうちに、王弼に会うと、王弼は自ら『老子』に注釈した主旨を説いた。何晏の見解は不足しているところが多く、何も言えず、ただうなずいて答えるばかりであった。〕

- (3-4) 桓玄為太傅，大會，朝臣畢集，坐裁竟，問王楨之曰：「我何如卿第七叔。」（『世説新語』「品藻」2-646）

〔桓玄が太傅であった時、盛大な会合を催し、朝臣たちがことごとく集まった。席が定まったばかりの時、王楨之にたずねて言った「私は（君の）七番目の叔父と比べてどうだろうか。〕

⁴²本論文が動作行為の「完了」を表すと表現した形式は、論者により名称が異なる。太田(1988)は「完了態」、馮春田(1992)は「完成貌（句式）」と表現している。柳士鎮(1992)は専用の名称は用いていないようだが、これを「時態表示法」（アスペクト（時制）表示法）であるとみなした上で、単独で用いた場合は「表示動作的過去時態」（過去時制を表す）という機能を、副詞「已」「既」と併用した場合は「表示動作的完成」（動作の完了を表す）という機能を備えているとみなす。本論文で用いた「完了」という表現は、「動作・行為が何らかの限界点まで達成されたこと」を広く指すものであり、「perfective」或いは「perfect」に厳密に対応する用語ではない（この点については、本論文 3.2.2 における「完了動詞 b」に関わる議論も参照のこと。）なお、このような完了動詞の出現は上古漢語に遡る。梅祖麟(1999:289)は次のような上古漢語の例を挙げる。

・乃出詔書為王讀之。讀之訖，曰：「王其自圖。」（『史記』「吳王濞列伝」2836）

〔（弓高侯は）詔書を出して王（＝膠西王）に読んで聞かせた。読み終わると言った「王には自らご決断くださいますよう。〕

- (3-5) 時天暑熱，植因呼，常從取水自澡^訖，傅粉。(『三國志』「魏書」「王粲傳」裴注引「魏略」603) (馮春田(1992) 所引の用例)

[その時、夏の暑いさかりであった。そこで曹植は従者を呼んで水をもってこさせ、自分で体を洗い終わると、おしろいをつけた。]

- (3-6) 先為賓設膳，食^已，驅以刀杖。(『論衡』「解除」4-1041)

[まず客のために食膳を設け、食べ終わると刀剣や棍棒で追い払う。]

これら完了動詞は往々にして複文の前節末に生起し、前節における動作行為が完了したことを表し、後節の内容を導入する機能を有する⁴³。このためであろうか、馮春田 1992 などの一部の研究者は、「V(+O)+完了動詞」という形式のうち、「V(+O)」部分の音節数が多いものについては、この完了動詞を述語ではなく一定程度「虚化」——この場合一般言語学で言う「文法化」(grammaticalization)を指した表現であろう——を経たある種の「補語」とみている。馮春田 1992 の言うところの「補語」の内実は必ずしも明確ではないが、いずれにせよ非漢訳仏典におけるこれらの完了動詞が文法化を経た機能語ではなく、実質語であることは、①「完了する」「終結する」という動詞としての語彙的意味を保存しており、②完了動詞が「畢」「竟」「訖」「已」のいずれか一つの形式に統一されることがなく、③動作の完了表現が期待される場合もこれらが出現することはむしろ少なく⁴⁴、④「V(+O)+完了動詞」という構造において副詞が生起する場合、完了動詞が「畢」「竟」「訖」であれば、直接に副詞の修飾を受けることができる(用例(3-2)の「既」、(3-3)の「未」、(3-4)の「裁」などが完了動詞を修飾した副詞)、といった点から明らかであろう⁴⁵。蔣紹愚(2001)が指摘するように、これらの完了動詞は、統語的には依然として「V(+O)」を主語とする文(或いは節)の述語動詞とみなされるべきものである。

ところが、早期漢訳仏典、とりわけいわゆる本生経・比喻経など叙述性の強い漢訳仏典においては、機能的に現代北京語の「V 了(+O), 再…」[～すると/して…]の「了」に相当するような「已」が極めて多くみとめられる。この「已」の特徴としては、①意味の漂白化(bleaching)が顕著なもの(=瞬間動詞に付き、動作行為の〈実現〉を表すかのようなもの)

⁴³完了動詞の「前節における動作行為が完了したことを表し、後節の内容を導入する」機能については、梅祖麟(1999)が戦国前漢に新出した完了動詞「已」(梅氏は「完成貌句式」と表現)の機能を分析した上で、その存在を指摘している。

⁴⁴「～し終わる(と)」といった表現が要求される文脈では、多くの場合には「既 V(O)」 「已 V(O)」が生起する。

⁴⁵本論文では「文法化(grammaticalization)」の概念について、「何らかの言語単位・言語現象が、特定の文法的意味を表す文法形式へと変化していく現象」という意味で用いる。文法化を生ずる言語単位・言語現象には多様なものが含まれ得るが、典型的には実質語が機能語へと変化していく現象が挙げられる。その場合、実質語において、何らかの統語論的、意味論的条件の下で、意味面では語彙的意味の漂白化(bleaching)と文法的意味の獲得、統語機能面では自由度の低下による統語カテゴリーの転移(脱範疇化 decategorization)が生ずる。また、しばしば音声面での浸食(erosion)もみられることになる。

もみとめられること（用例(3-7)）、②パラディグマティックな面において「已」に統一される傾向が明白であること、③少なからぬ早期漢訳仏典においては、動作行為の完了あるいは実現が期待される文脈における「已」の出現率が高いこと、④「V(+O)+已」という構造において副詞が生起する場合、当該の副詞が完成動詞「已」の直前には生起し得ず（「V(+O)已」構造の前に生起する。用例(3-8)~(3-11)の「既」）、直接には副詞の修飾を受けられないこと、などがあげられる。

(3-7) 爾時善慧仙人，在於山中得五奇特夢。…得此夢^已，即大驚悟，心自念言…。(『過去現在因果經』3-621b-c)

[そのとき善慧仙人は山中で五つの奇妙な夢を見た。この夢をみると大いに驚いて目を覚まし、心に念じて言った…。]

(3-8) 太子年至二萬九千歲，捨轉輪王位，啟其父母，求欲出家。既不聽^已，乃至三請，猶尚不許。(『過去現在因果經』3-621b)

[太子は年が二万九千歳になると、転輪王の位を捨て、父母に上申して出家することを求めた。それが聞き入れられないと、何度も懇願したが、それでも許されなかった。]

(3-9) 昔有一人，為王所鞭。既被鞭^已，以馬屎*拊[三本「傳」]之，欲令速差。(『百喻經』4-547a)

[昔ある人がいて、王に鞭打たれることとなった。(その人は) 打たれ終わると、馬糞を(打たれたところに)つけ、(傷を)早く治そうとした。]

(3-10) 王時欣然歎未曾有，既還國^已，厚加爵賞，大賜珍寶，封以聚落。(『百喻經』4-553a)

[その時、王は喜んで未曾有なことだと賛嘆した。帰国すると爵位と恩賞を厚くし、大いに宝物を与え、集落を領地として封じた。]

(3-11) 爾時遠人既受敕^已，堅彊其意，向師子所。(『百喻經』4-553a)

[その時、遠来の男は王の勅命を受けると、決意を固め、獅子のところへ向かった。]

このような漢訳仏典における完了動詞「已」は、一定程度の文法化の段階を経て、機能語に近づいているとみなし得る。そして漢語文法史の立場から言えば、このような文法現象が漢語の口語を反映したものか否かという点が重要となる。もしこれが当時の漢語の口語を直接に反映したものであるならば、我々は従来語られてきた漢語におけるアスペクト助詞の生成史を再検討する必要性が生じてくるからである。この早期漢訳仏典における完了動詞「已」は、近年、早期漢訳仏典言語の文法研究が進むに伴い、研究者の注目を集めるようになったが⁴⁶、未だ見解の一致をみていない。例えば、朱慶之(1993)は、この現象を漢訳仏典

⁴⁶ 蔣紹愚(2001)によれば、Harbsmeier(1989). The Classical Chinese modal particle yi, *Proceedings of the Second International Conference on Sinology, Section on Linguistics and Paleography, Taipei, Academia Sinica* がすでに「V(+O)+已」における「已」がサンスクリットの影響により生ま

言語にみられる「原典言語の影響」という視点から議論を展開し、「V 已」がしばしばサンスクリットの過去分詞——過去時、完成体、被動態を表すという文法機能を有する——と対応していると指摘し、漢訳仏典における「已」は過去および完成という文法機能を表すために用いられており、サンスクリットの過去分詞屈折語尾-ta/-na に影響されて生じたものだと主張している⁴⁷。

これに対して辛嶋(2000)は、三世紀後期の笈法護訳『正法華經』などの漢訳仏典とサンスクリット本との対応関係を体系的に調査し、これらの漢訳仏典における「V 已」の大多数がサンスクリットの絶対分詞 (Absolute, Gerund) に対応していること、また機能面でもサンスクリットの絶対分詞は同一行為者の行う二つの行為の第一番目の動作行為を表すため、漢訳仏典の「V 已」と対応する(現代漢語の「…了以後」[～した後…]に相当する)ことを指摘し、完了動詞「已」はサンスクリットの絶対分詞を翻訳したものだとする説を提出した⁴⁸。

れたものだという説を提出しているとのことである(筆者未確認)。

⁴⁷朱慶之(1993)の関連する原文は以下の通り。

在對勘材料裡，我們發現這種「已」大量使用與原本有直接的關係，例如梵語的過去分詞常常被譯成漢語的「V 已」：……像以上所舉的過去分詞就有過去時、完成體、被動態的語法意義，譯語中的「已」正是用來表示其中過去和完成兩種語法意義的。但是就「地道」的漢語而言，句子成份間的語法關係主要靠詞序 (word order) 表示，語法關係助詞在當時很不發達，像這種時態助詞「已」在同期中土文獻很少見到。反之，梵語用屈折詞綴表示語法意義，每個充當句子成份的詞都有自己的語法標誌，如過去分詞的-ta/-na 使每個詞的語法意義本身就表現得十分明顯(朱慶之 1993:380)

〔(梵漢) 對照資料から、このような「已」の大量の使用は原典と直接的な関係があることが見出される。例えばサンスクリットの過去分詞は、しばしば漢語の「已 V」に訳されている。…(中略) …以上挙げた過去分詞は過去時・完成体・受動態という文法機能を備えているが、訳語における「已」はまさに過去と完成という二種の文法機能を表すためのものなのである。しかし「純粹」な漢語について言えば、文成分の間の文法関係は、主に語順によって表されており、文法関係(を表す)助詞は当時においては未発達であり、この時態助詞「已」は同時期の中国文献にはほとんど見られない。それに対して、サンスクリットは屈折語尾によって文法機能を表すのであり、文成分を担う語のそれぞれがいずれも各々の文法標識を備えている。例えば過去分詞の-ta/-na は、当該の語の文法機能そのものを明確に表しているのである。〕

⁴⁸辛嶋(2000)の関連する原文は以下の通り。

在漢梵對比時，我們就發現這些「已」大多數與梵語的絕對分詞(或叫獨立式; Absolute, Gerund) 相對應。……在梵語裡絕對分詞一般表示同一行為者所做的兩個行為的第一個(「……了以後」)，相當於漢譯佛典的「……已」。筆者認為，把絕對分詞翻譯成漢語時，漢譯佛典的譯者往往使用「已」一詞。在梵語佛典裡出現了大量絕對分詞，這就造成漢譯佛典裡「……了以後」的意思的「已」大量出現。(辛嶋 2000:513)

〔梵漢を対照すると、これらの「已」の大多数は梵語の絶対分詞(独立式とも言う。Absolute, Gerund) と対応していることが見出される。…(中略) …サンスクリットにおいて絶対分詞は一般に同一の行為者の行う二つの行為の第一番目のもの(「～してから」)を表し、漢訳仏典の「～已」に相当する。…(中略) …筆者は、絶対分詞を漢語に翻訳する際、漢訳仏典の訳者はしばしば「已」という語を用いたのだと考える。サンスクリット仏典には大量の絶対分詞が出現するが、このことが漢訳仏典の「～してから」の意味の「已」の大量の出現につながったのである。〕

この他、萬金川(2006)は、『金剛經』「法會因由分」の笈多漢訳本(A.D.590年成立)と Conze 校

この辛嶋(2000)の説は、豊富な言語事実に基づいた信頼性の高いものであるが、漢語文法史の立場からは、次のような二つの疑問が浮かび上がってくる。

- (i) 「已」以外にも、完了動詞には「畢」「竟」「訖」などがあり、非仏教文献においては「已」の出現率はむしろ低い。それにも拘わらず、なぜ早期漢訳仏典の翻訳者たちは、一律に「V 已」によってサンスクリットの絶対分詞(あるいは過去分詞)を表したのだろうか。
- (ii) 上述のごとく早期漢訳仏典の原典言語は必ずしもサンスクリットではない。しかし完了動詞「已」は早期漢訳仏典において相当普遍的にみられる。原典言語が非サンスクリットである何らかの屈折言語であった場合、その言語の何らかの動詞屈折語尾を翻訳するのに「已」が用いられたことになるが、なぜ複数の翻訳者たちが悉く「已」を用いたのだろうか。

これらは、つまりは「なぜ何らかの屈折語尾を表現する時、「已」が用いられなくてはならなかったのか」という問題だと言い換えてもよい。この点は漢語文法史の観点から回答を与える必要がある。

漢語史研究者である蔣紹愚氏は、漢訳仏典にみえる「V 已」と漢語の口語との関係について本格的な検討を試みた一人である。まず蔣紹愚(2001)において、辛嶋氏の研究を踏まえつつ、『世説新語』、『齊民要術』、『洛陽伽藍記』、『賢愚経』、『百喻経』を資料として詳細な分析を行い、後漢魏晋南北朝期の「V(+O)已」の「已」は、「持続動詞(+O)+已」における仏教伝来前に存在していた漢語固有の「已」(=已1)と、「非持続動詞+(O)+已」におけるサンスクリットの絶対分詞を翻訳した「已」(=已2)との二種類に分けるべきであると指摘した。この蔣紹愚(2001)の指摘は、漢訳仏典にみえる「已」のアスペクト機能が非仏教文献におけるそれとは異なる点を明確にした点で、大変重要である。

その後、蔣紹愚(2007)では「已2」と漢語との関係(さらに「已2」と「了2」との関係)について『仏本行集』、『根本一切有部毗奈耶破僧事』、『王梵志詩』、『六祖壇経』、『遊仙窟』、『寒山拾得詩』、『入唐求法巡礼行記』、敦煌変文、『祖堂集』などを資料として検討を行い、『仏本行集』、『根本一切有部毗奈耶破僧事』における「已」はサンスクリットの絶対分詞とは用法上異なる点があることを指摘した。そして「已2」は「言語接触」によって生まれたものであり、初めは漢訳仏典という書面語のなかにのみ存在していたが、出現率が高いため、しだいに翻訳者の口語にも影響を与えて彼らの口語として取り入れられた結果、元来の

訂サンスクリット本とを資料として対照研究を行い、漢語の「V 已」にはサンスクリットの絶対分詞に対応するものと過去被動分詞に相当するものがあること、そしてサンスクリットの両分詞が必ずしも「V 已」に対応するわけではないこと指摘し、「V 已」の使用は、原典言語であるサンスクリットよりも漢語側の制約を受けていると主張する。萬金川(2006)の主張は具体的な対応関係を言語事実に即して提示しており、一定の説得力がある。しかし六世紀末の笈多訳『金剛経』における状況が、どの程度、早期漢訳仏典一般の状況を代表し得るかは不明である。

「已2」から用法の拡大が生じたと主張した。すなわち、サンスクリットからの翻訳によって生まれた「已2」が漢訳仏典の翻訳者の口語にまで使用域を拡大し、それに伴いサンスクリットの絶対分詞に対応しない用法をも獲得したということである⁴⁹。

以上の蔣紹愚(2001)(2007)の議論は非常に示唆に富むものであるが、本論文が辛島(2000)或いは朱慶之(1993)に対して呈した上記①②の疑問——なぜ「已」が用いられなくてはならなかったのかという疑問——に対する明確な回答は、蔣氏の一連の研究の中にも見出すことができない。以下、この問題について検討していく。

3.2.2 本論文の解釈

具体的な検討を行う前に、完了動詞の前に位置する動詞句の意味構造について整理しておく。今、かりに日本語・英語の動詞を題材に「行為の連鎖」(action chain)の観点から提示された影山(2001)による動詞の意味構造モデルに基づけば、すべての動詞句の意味範囲は、理論上「〈行為〉→〈変化〉→〈(結果)状態〉」という意味構造の枠内で表すことができることになる。例えば、ある動詞句の意味範囲は〈行為〉から〈(結果)状態〉のすべての過程を覆うが、ある動詞句の意味範囲は〈行為〉のみ、またある動詞の意味範囲は〈(結果)状態〉のみを覆うといったように、具体的な意味範囲は動詞句によって異なり得る。しかし、これらはすべて「〈行為〉→〈変化〉→〈(結果)状態〉」という枠内で処理することができる、ということである。

本論文では、この影山(2001)のモデルを参考にしつつ、完了動詞を二類に分ける。第一類は、その前の動詞句の意味範囲が〈行為〉を覆わない完了動詞である。つまりその前の動詞句の意味範囲が〈(結果)状態〉だけを覆っているか、或いは〈変化〉と〈(結果)状態〉だけを覆っている完了動詞である。第二類は、その前の動詞句の意味範囲が〈行為〉を含む

⁴⁹なお、蔣紹愚(2007)はさらに六～八世紀の「已2」が民衆の言語にまで拡大したか否かについても議論を進めている。文献資料の制約により明確な回答はできないとしながらも、漢訳仏典の翻訳者、説法者の言語からしだいに一般の民衆の言語にも浸透していったと考えているようである。関連する原文は以下の通り。

我們找不到6—8世紀與佛教無關而又反映口語的材料，所以對此無法作出肯定的回答。……但『六祖壇經』的材料能給我們啟發。…他向大眾宣講用「已2」，肯定大眾也能聽懂，可見當時大眾的語言中也有「已2」。我們可以想像，由語言接觸（翻譯）而產生的「已2」，首先出現在漢譯佛典書面上，然後擴展到佛典的譯經者或閱讀者（聽者）的口頭語言中，然後通過這些人和大眾的語言交流，逐漸進入全民語言中。（蔣紹愚 2007/2013:283）

〔六～八世紀の仏教と無関係で、かつ口語を反映した資料は見出し難いため、このこと（＝「已2」が一般の民衆に浸透していたかということ）についての明確な回答を提示することはできない。…しかし『六祖壇經』のデータは我々に啓発を与えてくれる。…彼（＝慧能）は大眾に対して教義を説く際に「已2」を用いたのであるから、大眾もきっと聞き取れたはずである。当時の大眾の言語にも「已2」があったことが分かる。我々は、言語接触（翻訳）によって生まれた「已2」は、まず漢訳仏典の文章上に現れ、その後仏典の訳経者と読者（或いは聞き手）の口頭言語の中まで拡大し、それからこれらの人と大眾との言語的交流を通じて、しだいに全民衆の言語にまで浸透していったと想像することができよう。〕

完了動詞である。かりに前者を「完了動詞 b 類」と称し、「已 b」「畢 b」「竟 b」「訖 b」のように表記し、後者を「完了動詞 a 類」と称し、「已 a」「畢 a」「竟 a」「訖 a」のように表記する⁵⁰。この本論文による完了動詞の分類は、一見、その前の後接する動詞句の意味構造に依拠したものようであるが、実際には完了動詞そのものの機能差を反映させることを意図したものである。すなわち、実例を検討すると、完了動詞 a 類は、〈行為〉(＝前の動詞句の表す行為)の〈完了〉を表し、完了動詞 b 類は、〈(結果)状態〉(＝前の動詞句の表す結果状態)の〈実現〉を表すという各類の完了動詞の意味機能の差異が見出されるのである(用例(3-12)～(3-32)を参照のこと)⁵¹。さらに、この完了動詞の分類が、仏教文献と非仏教文献

⁵⁰本論文で言うところの完了動詞「已」には、以下のように文末に位置して「停止しない、やまない」という意味を表す「不已」「無已」における「已」は含まれない。

・斯父方終，終則為牛，累世屠戮，受禍無已。(『六度集經』3-37c)

〔この者の父はまさに死のうとしているが、死ねば牛となり、何代も屠殺され、禍を受けること限りない。〕

なお、本論文で言うところの「已 a」と「已 b」とは大凡、蔣紹愚(2001)の言う「已 1」と「已 2」に相当するが、完全に同じではない。例えば、蔣紹愚(2001:311-312)は「坐已」「起已」「殺已」などにおける「已」を「已 2」に分類し、これら持続できない瞬間動詞・状態動詞の後ろの完了動詞は、漢土文献(＝本論文の言う非仏教文献)に出現しないと考えている。しかし実際には、以下のように「坐/起/殺+完了動詞」という形式が非仏教文献のなかにもみとめられるのである。

・王丞相請先度時賢共至石頭迎之，猶作疇日相待，一見便覺有異。坐席竟，下飲，便問人云：「此為茶，為茗。」(『世說新語』「糝漏」3-1069)

〔王丞相は先に(江南に)渡ってきた当時の名士をさそい、共に石頭まで彼を出迎えた。やはり以前のようにもてなしをした。しかし一目見ると何かおかしいことに気づいた。席に着き終わり、茶が出されると、(任育長が)人にたずねていった「これは茶ですか、それとも茗ですか。〕

・尚書左丞郗詵與舒書曰：「公久疾小差，視事是也，唯上所念。何意起還臥，曲身迴法，甚失具瞻之望。公少立巍巍，一旦棄之，可不惜哉。」(『晋書』「魏舒列傳」1187)

〔尚書左丞の郗詵が魏舒に書翰を与えて言った「貴公は久しく病に伏したのち、少しく回復すると任についたのは正しいことであり、まさに陛下が望まれたためです。(ところが)どのようなつもりで(病から)起き上がるとまた(病と称して身を)臥して、身分を落として常理に反することをされようとするのか。(これは)衆人の望みに背くことです。貴公は若くして高い地位についたのに、一日にしてそれを捨てるとは、全く惜しいことではないか。〕

・稜謂已死，因出外告彪諸將，言已殺訖，欲與求富貴。(『南史』「張彪列傳」1566)

〔伯稜は彼(＝張彪)がすでに死んだと思い、外へ出て張彪の諸将に(張彪を)をすでに殺したと言い、(諸将と)結託して富貴を求めようとした。〕

本論文は、これら「坐/起/殺+完了動詞」が非仏教文献に出現し得るのは、「坐」「起」「殺」などが、その意味範囲に〈行為〉を含む動詞であるからだと考える。本論文の分類に従えば、これらの動詞に後接した完了動詞は a 類に分類されることになり、非仏教文献にも出現し得る類となる。

⁵¹ なお、本論文で言う完了動詞 a 類の文法機能については、その多くが量的な完了を表すものであるため、Bybee et al.(1994:57)の言う *completive* ('to do something thoroughly and completely' 何かを余すところなく、完全に行うこと)に相当する可能性がある(この点は大西克也氏のご教示による)。Bybee et al.(1994)は、過去あるいは完了に関する概念について、*completive* の他、*anterior* (参照時よりも前に起こり、参照時と関連する事態を表示する)、*resultative* (過去の動作の結果として存在する状態を表示する)、*perfective* (事態が時間的に限界づけて捉えられたものであることを表示する)、*past* (発話時よりも前に起こった事態を指す)といった分類を

という文献の種類における生起状況の差異にも対応することが重要である。完了動詞 a 類は非仏教文献にも仏教文献にもみられるが、完了動詞 b 類は仏教文献のみに見出されるのである⁵²。以下に具体例を挙げておく。

[完了動詞 a 類]

- (3-12) 即時如其數菩薩與文殊師利俱行。忽以在沙*阿^{三本、宮本「呵」}刹土其處而坐。其處者謂，室中所以能容者，是菩薩威神故。悉共坐^已，文殊師利說其法。(『阿闍世王經』15-397a)

[そのような(二万二千)数の菩薩たちは直ちに文殊師利と共に出発した。するとたちまち沙阿国のとある場所において腰をおろしていた。そこにいた者たちは、(これほど多くの菩薩が)部屋に入ることができるのは、菩薩の威神力のためだと思った。

(菩薩たちが) すべて座についてしまうと、文殊師利は説法をした。]

- (3-13) 文殊師利為王及宮中臣下諸人說法^已，各令安隱，便從坐起，與諸菩薩比丘僧俱而出宮門。(『阿闍世王經』15-402c)

[文殊師利は王や宮中の臣下、(一般の)人々に法を説き、すべての人を安らかにすると、座より立ち上がり、菩薩、比丘たちとともに宮殿の門を出た。]

- (3-14) 是三兒相將來至佛前。其怛薩阿竭呼侍者沙竭：「汝乃見是三兒而持白珠來者不。…」語適^竟，是三兒已到。前為怛薩阿竭作禮，各各以其白珠散佛上。(『阿闍世王經』15-395a)

[この三人の子供はつれだって仏の前まで来た。タターガタ(=仏)は侍者の沙竭を呼んで(言った)「おまえは三人の子供が白連珠を持って近づいてくるのが見えるか。…」仏がちょうど言い終ったとき、その三人の子供が到着した。(子供たちは、タターガタの)前に進み、タターガタに礼をし、それぞれ白連珠を仏の頭上に放りあげた。]

- (3-15) 王*即^{三本、金剛寺本無}案先王遺令：「若佛入國，當自出迎。迎之者，得福無量。」即便敕嚴車千乘、馬萬匹、從人七千，嚴^畢升車，出宮趣城。(『中本起經』4-152a)

[王はすぐに先王の遺令に従って、「もし仏が国に入ったら、自ら(王宮を)出て迎

提示している。

⁵² 「已 b」は漢訳仏典ではなくとも、仏教関係の文献であれば出現し得ることに注意されたい(例えば用例(3-27)の『高僧法顕伝』を参照のこと)。その他、非仏教文献においても絶無ではない。しかし、本論文による調査の限りでは、その場合でも、内容が仏教と関連するなど(下例を参照)、間接的には仏教と何らかの関わりのある文献に限られる傾向がある。

・朗等乃悟是得道冥士以試人也。病者曰：「隔房比丘，是我和尚。久得道慧，可往禮觀。」法朗等先嫌讀經沙門無慈愛心，聞^已乃作禮悔過。(古小説鈎沈『冥祥記』1-326)

[朗(=法朗)たちはやっと得道の冥士が彼らを試しているのだと分かった。病気だった者が言った「隣室の比丘はわが師です。道慧を得て久しい方だから、拝謁してきなさい。」法朗らは、はじめは読経していた沙門に慈愛心がないのを嫌っていたのだが、(それを)聞くと、礼拝して過ちを悔いた。]

えなければならない。彼を迎えたものは、福を得ること限りない。」すぐに命令を發して千台の車、万匹の馬、七千人の従者を整えさせ、整えおわると車に乗り、王宮を出て城にむかった。]

- (3-16)*該 [三本「該」] *容 [元本、明本「容齋」] 有長老青衣，名曰度勝。…路由精舍，每過修敬。減省香錢，合集寄聚，便行飯佛及比丘僧。佛為說法，*盡 [大正藏本「書」，三本「盡」] 心不忘。施訖還宮，過肆取香。〔『中本起經』 4-157b〕

[該容には年老いた下女がおり、名を度勝といった。… (度勝がお香を買いに行く) 道は精舎を經由しており、通るたびに恭しく敬意を表した。香を買う金を減らし、(それを) 貯め集めると、仏・比丘僧に食べ物を施した。仏が彼女のために法を説くと、懸命に忘れないようにした。施しを終えて王宮に帰るとき、市に立ち寄って香を手に入れた。]

- (3-17) 善明心獨而言：「天尊威變弘廣乃爾。食訖，行*盥 [三本、宮本「水」]，當問此意」*水盥 [已畢] [三本、宮本「行澡水畢」]，如伸臂頃，佛與大眾恍惚而還在精舍坐。〔『仏説成具光明定意經』 15-452b〕

[善明は独り心の中で言った「天尊(=仏)の威神による変化がこれほど偉大だとは。食べ終わったら、手を洗い、その道理をおたずねしよう。」手を洗い終えると、腕を伸ばすほどの間に、仏は大眾と共にたちまち精舎に帰って座していた。]

- (3-18) 王敕大臣悉將是人去示其象，臣即將到象廄，一一示之令捉象。有捉足者尾者尾本者腹者脅者背者耳者頭者牙者鼻者。悉示 [已] 便將詣王所。〔『仏説義足經』 4-178b〕

[王は大臣に命じてこれらの人(=目しい)たちを悉く引き連れ、彼らに象を知らしめた。臣下はすぐに象の厩舎までいき、一人一人象をつかませた。足をつかんだ者、尾をつかんだ者、尾の根元をつかんだ者、腹をつかんだ者、脇をつかんだ者、背をつかんだ者、耳をつかんだ者、頭をつかんだ者、牙をつかんだ者、鼻をつかんだ者がいた。みなに分からせると、(彼らを) 引きつれて王の所にやってきた。]

- (3-19) 太子左*手 [三本「右」] 持水澡道士手，右手牽象以授與之。八人得象，即呪願太子。呪願 [畢已]，累騎白象歡喜而去。〔『太子須大拏經』 3-419c〕

[太子は左手で水をとって道士たちの手を洗い、右手で象を牽いて彼ら(=道士たち)に与えた。八人は象を手に入れると、太子のために祈りを捧げた。祈り終えると、白象に縄をつけて乗り、喜んで去ろうとした。]

- (3-20) 國王敬重頂骨慮人抄奪，乃取國中豪姓八人，人持一印，印封守護。清晨八人俱到各視其印，然後開戶。開戶 [已]，以香汁洗手，出佛頂骨置精舍外高座上以七寶圓碓。〔『高僧法顯傳』 51-858c〕

[国王は頂骨(=仏頂骨)を大切にしている。人に強奪されるのを慮り、国中の豪族八人を選び、一人に一印を持たせ、封印して守らせている。朝早くに八人はみな自分の印を点検し、しかる後に戸を開くのである。戸を開き終えると、香汁で手を洗い、仏頂骨を出し、七宝の円板を(その下に)用いて(?)精舎の外の高座に置く。]

- (3-21) 是時善慧五百弟子，共相謂言：「今日國王及諸臣民，悉皆往詣普光佛所。大師今者亦當已去。我等宜應往彼禮敬。」作此言^已，即共俱行。（『過去現在因果經』3-622a）

[このとき、善慧の五百人の弟子は、互いに言い合った「今日、国王と臣民はことごとく普光仏のところをたずねている。（しかし）大師（＝善慧）はもうすでに去ってしまったはずだ。われらはそこ（＝普光仏のところ）に赴き、礼拝して敬意を示すべきである。」このように言うと、みなすぐに出発した。]

- (3-22) 譬如有入，因其飢故，食七枚煎餅。食六枚半^已，便得飽滿。（『百喻經』4-549c）
[例えば、ある人がいて、腹が減ったために七枚のナンを食べることにした。（しかし）六枚と半分まで食べ終わると、もう満腹してしまった。]

[完了動詞 b 類]

- (3-23) 文殊師利為諸菩薩說是阿惟越致法輪時，菩薩悉得羅毘拘速三昧（漢言者名曰日光明花）。得是三昧^已，其菩薩身一毛者，放億百千光明。（『阿闍世王經』15-389c~399a）

53

[文殊師利は菩薩たちにその阿惟越致法輪を説いた時、菩薩たちはみな羅毘拘速三昧（漢語では日光明花という）を得た。この三昧を得ると、それらの菩薩の身体じゅうの毛から何億百千の光線が放たれた。]

- (3-24) 當是諍時，我當往現身變化，有踰於眾，令眾肅然。便為斷說，是別正者，牽經開語，令俱歡喜^已，便化去。（『仏説成具光明定意經』15-456a）

[(集まった人々が) このように争っているおりに、私が（そこに）赴き姿を現し変化して衆人を凌駕し、みなを肅然とさせる。（とるべき）説を決めて、正しいものを辨別し、経を引用して言葉を解説し、（みなを）歡喜させると、変化して去っていく。]

- (3-25) 佛為廣説經法，惟閻聞經^竟，起叉手白佛言…。〔『仏説義足經』4-176c〕⁵⁴

[仏は（惟閻に）広く経を説いた。惟閻は経を聞き終わると、立ち上がって両手を胸の前で合わせ、仏に言上した。…]

⁵³古漢語における獲得を表す「得」は、獲得の行為そのものを表すものではなく、「獲得した状態になる」ことを表し、意味範囲は変化と結果状態だけを覆うと考えられる。太田(1958:229)は「いったい『得』は古代語である物が手に入ることを意味し、非恣意的な動詞である」と表現する。太田(1958:229)が引用する次の例文を参照されたい。

・求則^得之，舍則失之。（『孟子』「告子上」2-757）

[求めればこれを得、すてればこれを失う。]

⁵⁴周知のように古漢語の「聞」は「聞こえる」という意味であるため、主体的な行為はその意味範囲に含まれないと考えられる。例えば次の例文を参照のこと。

・心不在焉，視而不見，聽而不^聞，食而不知其味。（『禮記』「大学」15-1867）

[心が為すべき事になれば、見たとしても見えず、聞いたとしても聞こえず、食べたとしてもものの味が分からない。]

- (3-26) 意始如之，帝釋即化為苑池樹木，非世所睹，即去眾寶衣化為袈裟。王到^已，太子*五〔金剛寺本「吾」〕體投地，稽首如禮。（『六度集經』3-20c）
 〔(墓魄太子の) 思いがちょうどここに至った時、帝釈が園林、池、樹木をつくり出した。(どれも) この世でみられないほど(すばらしいもの) だった。(帝釈は太子の) すべての宝衣を取り去ると(それを) 袈裟に変えた。国王が(太子のもとに) 到ると、太子は五体投地し、稽首して礼を尽くした。〕
- (3-27) 法顯住此國二年，更求得彌沙塞律藏本，得長阿含雜阿含，復得一部雜藏。此悉漢土所無者。得此梵本^已，即載商人大舶上可有二百餘人。（『高僧法顯傳』51-865c）
 〔法顯はこの国に二年滞在し、さらに求めて弥沙塞蔵の書を手に入れ、また長阿含・雑阿含（の書）を得、また一部の雑蔵（の書）を得た。これらはことごとく漢土にはないものである。これらの梵本を手に入れたら、すぐに商人の大船に乗ったが、船上には二百余人がいた。〕
- (3-28) 然婆羅陀素與二兄和*睦〔三本「穆」〕恭順，深存敬讓。既還國^已，父王已崩，方知己母妄興廢立，遠擯二兄。嫌所生母所為非理，不向拜跪。（『雜寶藏經』4-447b）
 〔しかし婆羅陀は、元々二人の兄と睦まじく、(彼らに) 恭順であり、深く敬意を払っていた。(婆羅陀が) 国に帰ると、父王はすでに崩御しており、母が妄りに(王位の) 廢立を行い、二人の兄を排斥したことを知った。(婆羅陀は) 生母の行いの非道たることを憎んで、(彼女に対して) 拜跪しなかった。〕
- (3-29) 橋陳如言：「解^已，世尊。知^已，世尊。」以於四諦，得解知故，故名阿若橋陳如。（『過去現在因果經』3-644c）
 〔橋陳如は(仏に) 言った「理解しました、世尊よ。分かりました、世尊よ。」四聖諦によって理解し得たが故に、(橋陳如は) 阿若橋陳如と名づけられた。〕
- (3-30) 諸臣答言：「太子祖王有一良弓，今在王庫。」太子語言：「便可取來。」弓既至^已，太子即牽以放一箭。（『過去現在因果經』3-628c）
 〔臣下たちは答えた「太子の祖王が良弓を持っておられました。今は王宮の庫にあります」太子は言った「すぐに持って来るように。」弓が到着すると、太子はすぐに(それを) ひき一矢を放った。〕
- (3-31) 昔有愚人，至於他家。主人與食，嫌淡無味，主人聞^已，更為益鹽。（『百喻經』4-543a）
 〔昔、愚人がおり、他の家を訪れた。(その家の) 主人が食事を供したが、(愚人は) 味が薄いのを嫌がった。主人は (このことを) 聞くと、塩を加えてやった。〕
- (3-32) 爾時小兒信其語故，即擲水中，龜得水^已，即便走去。（『百喻經』4-557c）
 〔その時、子供はその人の言葉を信じたため、(亀を) 水中に投げ捨てた。亀は水を得るとすぐに逃げ去っていった。〕

以下、【図表 3-1】に、二世紀から五世紀に成立した各文献言語における完了動詞の状況をまとめておく⁵⁵。なお、完了動詞 a 類と b 類の区別は、調査者の主観的な判断を完全には排除できないため、用例数は目安に過ぎない⁵⁶。

【図表 3-1】中古文献における完了動詞

文献 ()内は 翻訳者	文献の 種類・字数 a)	成書時期 基礎方言	已 (a:b) ^{b)}	畢 (a:b)	竟 (a:b)	訖 (a:b)	(複音節形式) (a:b)
阿闍世王経 (支婁迦讖(?))	漢訳仏典 約 25000 字	二世紀末 洛陽地域	11 (8:3)	0	2 (2:0)	0	0
仏説成具光明 定意経 (支曜)	漢訳仏典 約 10000 字	二世紀末 洛陽地域(?)	8 (4:4)	8 (7:1)	2 (2:0)	1 (1:0)	已畢 1(1:0) 畢竟 1(1:0)
中本起経 (曇果・康孟詳)	漢訳仏典 約 23000 字	三世紀前半 年 洛陽地域	13 (9:4)	12 (12:0)	3 (3:0)	3 (3:0)	0
仏説義足経 (支謙)	漢訳仏典 約 22000 字	三世紀 洛陽地域 (?) ^{d)}	4 (3:1)	2 (2:0)	35 (34:1)	0	
六度集経	漢訳仏典	三世紀	6	22	11	0	訖畢 1(1:0)

⁵⁵ 【図表 3-1】の中には最初期に仏典の漢訳を行った安世高の漢訳仏典が含まれていない。本論文の調査によれば、一般には安世高が翻訳したと認定されている『陰持入経』(大正蔵 NO. 603)においても「已」「畢」「竟」などの単音節完了動詞(完了動詞「訖」は存在しない)、「已畢」「已竟」などの複音節完了動詞の存在が確認される(但しこれらは完了動詞の並列ではなく、副詞「已」が「畢」「竟」を修飾しているのかもしれない)。以下に例文を示す。

・爲*得[宋本、明本「得徳」]道弟子，便解下五結[已畢]。何等爲五。…(『陰持入経』15-179c)
〔得道弟子となり、五下分結(=十結のうち下位の五つの束縛)を解きおわる。その五種(の束縛)とはどのようなことを言うのか。…〕

『陰持入経』のデータが【図表 3-1】に見えないのは、遺憾ながら、筆者の読解力の限界により、完了動詞を含む多くの文の構造および正確な意味を理解することができなかつたためである。

⁵⁶ 意味範囲が〈行為〉から〈結果状態〉まで覆う動詞であっても、特定の談話的条件の下では〈行為〉を含まないことがある。例えば、「受」の意味範囲は〈行為〉〈変化〉〈結果状態〉を覆うと推定され、完了動詞 a 類に属すると考えられる。しかしその目的語が抽象物の場合、文脈によっては〈行為〉を含まないかのような用例がみられる。このような場合は完了動詞 b 類に属することになる。下例を参照されたい。

・佛告阿難：「假使女人欲作沙門者，有八敬之法，不得踰越，當以盡壽，學而行之。…」賢者阿難受佛語[已]，熟諦便作禮而出。(『中本起経』4-158c-159a)

〔仏が阿難に言った「もし女性が沙門になりたいのであれば、八敬の法があり、(これを)踏みはずしてはならない。寿命を尽してこれを学んで実行すべきである。」…賢者阿難は仏の言葉を拝受し、じっくりと見極めると礼をして出ていった。〕

(康僧會)	約 74000 字	建業地域	(4:2)	(22:0)	(11:0)		訖竟 1(1:0)
高僧法顯傳 —	非漢訳・ 仏教文献 約 14000 字	五世紀 —	42 (24:18)	2 (2:0)	1 (1:0)	11 (11:0)	
雜寶藏經 (吉迦夜、曇曜)	漢訳仏典 約 74880 字	五世紀 (北朝)	171 (55:116)	0	5 (5:0)	13 (12:1)	已竟 2(2:0) 已訖 3(3:0)
過去現在因果經 (求那跋陀羅)	漢訳仏典 約 48000 字	五世紀 (南朝)	176 (69:107)	5 (5:0)	5 (5:0)	2 (2:0)	畢已 3(3:0) 訖已 2(2:0) 已畢 7(7:0) 已竟 1(1:0) 畢竟 1(1:0) 已訖 1(1:0) 畢訖 1(1:0)
百喻經 (求那毘地)	漢訳仏典 約 21000 字	五世紀末 (南朝)	48 (18:30)	0	5 (5:0)	1 (1:0)	已竟 1(1:0)
世説新語 —	非仏教文献 約 62000 字	五世紀 —	0	18 (18:0)	11 (11:0)	4 (4:0)	

a) 仏教文献の字数の計算方法は、『大正藏』の一頁を約 1440 字として換算するというもの。

b) 例えば「已(a:b)」列に「11(8:3)」とあれば、当該の文献には完了動詞「已」の用例が 11 例あり、そのうち 8 例が完了動詞 a 類、3 例が完了動詞 b 類であることを表す。他は類推されたい。

本論文では、【図表 3-1】から看取される次の(i)~(iii)の現象に着目し、それらをどのように解釈すべきかという推定を提出しておきたい。

- (i) 後漢の漢訳仏典(『阿闍世王経』『仏説成具光明定意経』『中本起経』)においては、「已」が他の完了動詞よりも出現率が高く(「畢」も高いがこれについては後述する)、かつ「已 b」の出現率が他の完了動詞 b 類よりも高い。
- (ii) 三世紀の『六度集経』『仏説義足経』における「已」の出現率は後漢に比して少なく、むしろ「竟」が増加している。
- (iii) 五世紀以降においては、『雜寶藏経』『過去現在因果経』『百喻経』などの漢訳仏典では「已」、とりわけ「已 b」の出現率が大幅に上昇している。これに対して、非仏教文献である『世説新語』の状況は全く異なり、「已」はほとんど無い。

上記(i)については、「已」が他の完了動詞よりも機能語に近づいていることを示唆する現象であり、当時の漢語の口語を何らかのかたちで反映したものであると推定しておく。こ

の推定の根拠は以下の二点にある。第一点は、「已」が他の完了動詞よりも機能語に近づいているかのごとき現象が、後漢期の異なる翻訳者により訳された複数の漢訳仏典言語に共通してみとめられるからである。もし、この現象が漢語の口語とは全く無関係だったとすると、後漢期の複数の翻訳者が原典言語の何かしらの屈折語尾（例えばサンスクリットの絶対分詞に相当する語尾）を表現する際に、偶然にも一律に「已」を採用したことになる。このような蓋然性は極めて小さい。第二点は、後漢の漢訳仏典において、「已」は他の完了動詞とは異なる文法規則の支配を受けており、かつその文法規則が成書時期の近い非仏教文献においても——極めて稀少であるけれども——みとめられるからである。具体的には、「V(+O)+已」という構造に、副詞「既」が生起する場合、「既」は直接完了動詞の前に生起することはなく、必ず「既+V(+O)+已」という語順になるという規則が見いだされる。以下に、晋代の非仏教文献の用例を挙げておく。

(3-33)長老傳云：…既行刑^已，其血青黃，緣旛竹而上，極標，又緣旛而下云爾。（『搜神記』「東海孝婦」149）（馮春田 1992 所引の用例）

[長老が伝えて言うには「…刑を執行すると、彼女（＝周青）の血は青黄色であり、（その血が）旗竿をつたって上がり、頂点まで上ると、また竿をつたって下ったという。】

他の完了動詞の場合は、「既+V(+O)+畢/竟/訖」の語順も、「V(+O)+既+畢/竟/訖」の語順もあり得る点が重要である。このように、完了動詞のうち「已」を伴った「V已」という形式の場合だけは直接「既」の修飾を受けることができずに「既+V(+O)+已」の語順となり、他の完了動詞の場合は、「既+V(+O)+畢/竟/訖」の語順も、「V(+O)+既+畢/竟/訖」の語順もあり得るといった複雑な文法規則は、人為的に生み出されたものとは考え難く、自然言語に由来する可能性が高いと考える。よって上述の「已」が機能語に近づいているという現象は、漢語の口語の何らかの反映であると推定するのである。すなわち、当時の漢語の口語において「已」の文法化の程度が他の完了動詞よりも高く、最も抽象的であったからこそ、翻訳者たちはみな「已」を原典言語の何らかの屈折語尾を翻訳するのに用いたのだと考えるのである。

なお、『仏説成具光明定意經』『中本起經』においては、「畢」の出現率もほとんど「已」と同じほどであり、一見すると「已」と同程度に文法化されているかのようなようである。しかしながら実際の用例を検討してみると、完了動詞「畢」の例はほとんどが「禮畢（礼拝しおわり）」「嚴畢（整えおわり）」などの固定的な表現に限られ、「已」が多様な動詞句に後接し得るのとは異なっている。よって完了動詞「畢」が「已」と同様に文法化されていたとは必ずしもみとめられない。

ただし、上で述べた「後漢期の漢訳仏典における完了動詞「已」は当時の漢語の口語を何らかのかたちで反映したものである」ということは、必ずしも漢語の口語を直接的に反映し

ていることを意味しない。例えば、「已 b」は非仏教文献言語にはまずみられないが、これは何らかの屈折言語たる原典言語の影響を受け、漢語の口語に存在していた「已 a」が用法の面で「拡大されて」用いられた結果であるかもしれないからである。つまり、「得(+O)已 b」、「聞(+O)已 b」などという表現は当時の漢語の口語に存在しなかったのであるが、翻訳者が原典言語において意味的に「得ると」「聞くと」に相当する分詞形式を翻訳する際、漢語の完了動詞のなかでは「已」の文法化の程度が相対的に高かったために、動詞屈折語尾を表現する手段として「已」を用い、結果として、「得(+O)已 b」、「聞(+O)已 b」といった表現が生じた、という可能性も排除できないということである。

上記(ii)の現象については、これが実際の口語の状況を反映しており、完了動詞としての「已」は三世紀には衰退の傾向にあったと考えたい。そして、この時期に「竟」の文法化が進行し、その程度が「已」を越えるほどに達していた可能性が高いと推定しておく。

上記(iii)の現象に関しては、当時の漢語の口語と直接的な関係はないと考えておきたい。「已」が三世紀には衰退し始めていたにも拘らず、仏教文献では五世紀に突如として急増しているが、この現象が口語的要素を多く含む『世説新語』などに全く反映されていないからである。仮に「已」が俗語的であったから『世説新語』には反映されなかったのだと考えると、三世紀に文法化が進行した「竟」の方は、その現象が出現頻度として一定程度は『世説新語』に反映されている現象を合理的に説明し難くなる。よって(iii)の現象は当時の漢語の口語とは直接的な関係はなく、「漢訳仏典文体」の影響を受けた結果、生じたものである可能性が高いと考える。ここで言う漢訳仏典文体とは、漢訳仏典が集積されていくに伴い、大凡五世紀の鳩摩羅什の時代に成立した漢訳仏典独自の書面言語を指す。この文体の構成成分の来源については、五世紀以前の漢語の口語における文法現象も含み得るし、またある種の原典言語の影響に由来する文法現象をも含み得るであろう。元々は原典言語の影響より生じた可能性もある完了動詞「已 b」は、この漢訳仏典文体に吸収された可能性が高い。五世紀以降の漢訳仏典においては、「已」がしばしば「四字格」、「六字格」を構成するための音節数調整の機能を担っているかのような例が頻出するが、この現象も、以上の「已」が当時の口語と乖離していたとする推定を支持するものであろう⁵⁷。

以上を要するに、五世紀以前の早期漢訳仏典において「已」が文法化されている現象は、原則として口語を反映したものと考えられる。しかし、用法の面では口語よりも拡大されたものである可能性が排除できず、さらに五世紀以降の仏教文献に「已」が頻出する現象は、当時の口語とは関連がなかったと考えられる、ということになる。

⁵⁷この時期になると、苻堅や姚興が大規模な「訳場」を組織したように、翻訳の組織化・分業化が顕著になることにも注意すべきである（馬祖毅 2006:93 等参照）。原典に忠実に翻訳するという立場をとる翻訳者の場合には、例えばサンスクリット語の絶対分詞を翻訳する際、漢訳仏典文体を構成する要素として確立していた「已」を用い、機械的に「V 已」と翻訳することによって絶対分詞などを表現した可能性が考えられる。

3.3 人称代詞の複数接辞

3.3.1 問題の所在

上古中期・後期の人称代詞（「吾」「我」「汝」「爾」等）は、原則としてそれ自身で複数を表すことが可能であり、現代北京語のように複数を表す場合だけに接辞を付加した有標形式を用いることにより、単数と複数の区別が表示されることはない⁵⁸。それが、上古後期になると、「儕」「曹」「屬」「等」「輩」などの「同類」「たぐい」「やから」といった意味を表す形態素が代詞に後接されて複数を表すかのような例が散見されるようになる。しかし一般には、これらの形態素は名詞とみなされており、複数接辞とはみとめられていない。なぜなら、これらが人称代詞に後接された場合でも、①元来の名詞として有する「同類」「たぐい」といった語彙的意味との連続性が強く、②いずれかの形態素に統一されるという、パラダイグマティックな面における形式の統一化が実現しておらず、③人称代詞が複数を表す場合でもこれらの形態素が後接されることはむしろ稀であってその使用が義務的でないためである。

ところが中古の早期漢訳仏典の中には、人称代詞の複数接辞とみとめてもよいような例が多く出現する。例えば松江（1999）は、同じく三世紀に成立した『六度集経』『仏説義足経』において、前者で人称代詞に後接される「等」と、後者で人称代詞に後接される「曹」とが、意味の抽象化、形式の統一化、使用の義務化という点において変化がみとめられ、一定程度の文法化の過程を経て複数を表示する接辞に近づいていると指摘する⁵⁹。

(3-34)鳥曰：「爾等奚求乎。」曰：「人王亡其正妃，吾等尋之。」（『六度集経』3-27a）

〔鳥が言った「お前たちは何を探し求めているのか。」（猿たちが）言った「人間の王が后を見失ってしまったので、我々が彼女を捜しているのだ。」〕

⁵⁸ただし上古初期漢語では、人称代詞の生起条件に、単複の意味論的な区別が関わっていたとする説が有力である。例えば、陳夢家(1956)は甲骨文における一人称代詞のうち、「余」「朕」は単数を、「我」は多数を表すという使い分けがあり、西周期では「我」が主格・目的格となった場合には単数をも表すようになると指摘する。さらにこれを承けた大西(1992a)は、西周金文における「余」「朕」と「我」の用法を検討し、「我」は単数にも用いられるが口語的であった点で「余」「朕」とは異なっていたと指摘する。いずれにしても、上古初期であっても、単複の区別が分析的な有標形式によって義務的に標示されるということはなかったようである。

⁵⁹松江(1999)の統計によれば、『六度集経』『仏説義足経』における人称代詞の複数接辞の状況は次のようにまとめられる。下表の見方は次のようである、例えば『六度集経』「等」の「吾（複数）」欄における「27/43」は、『六度集経』には複数を表す「吾」が43例あり、そのうち「吾等」という形式をとるものが27例あることを表す。他は類推されたい。

	吾（複数）	我（複数）	爾（複数）	汝（複数）
『六度集経』「等」	27/43	2/2	24/42	4/6
『仏説義足経』「曹」	0	21/26	0	7/7

- (3-35) 王則問其所以。云：「池中有物。觸怖我等。」(『六度集經』 3-28c)
 [王はそこで(子供たちが大声をあげた)わけをたずねた。(二人の子供が)言うには「池の中に何かがあって(それが)あたって僕たちを怖がらせるのです。]
- (3-36) 便共教女言：「…如是我曹共殺汝，埋著祇樹間。…」(『仏説義足經』 4-178b)
 [(梵志たちは)すぐにそろって女を諭して言った「…このようにして我々はみなでおまえを殺し、祇園精舎のなかに埋めて…]
- (3-37) 王即召眾梵志問：「汝曹自共殺好首不。」(『仏説義足經』 4-177a)
 [王はすぐに梵志たちを召してたずねた「お前たちがみなで好首を殺したのか。]
- (3-38) 王復言：「…子曹皆是佛近親。佛當有顧念在諸釋，我終不得子曹勝。」(『仏説義足經』 4-188b)
 [王はまた言った「…彼らはみな仏の近親だ。仏はきっと諸釈に愛顧の念があろうから、私は結局彼らに勝つことはできないのだ。]

注意すべきは、人称代詞に後接された「等」「曹」などの形態素は、同時期(中古期)の非仏教文献にもみとめられるものの、その用法は必ずしも漢訳仏典におけるそれと同じではない、ということである。すなわち、意味の抽象化、形式の統一化、使用の義務化といった点において、漢訳仏典におけるものほど複数接辞に近づいてはいないのである⁶⁰。

このような早期漢訳仏典言語と非仏教文献言語との乖離をいかに解釈すべきかについて、朱慶之(1992)は次のような説を提出した。すなわち、漢訳仏典が翻訳された際、原典言語における人称代名詞の双数形式・複数形式について、漢語では人称代詞に「等」「曹」を付加した形式によって、単数形式から区別して表現する方法が採用された結果、漢語の口語に存在はしていたが、しかしおそらくは臨時的な組み合わせにすぎなかった「吾等」「汝曹」な

⁶⁰例えば五世紀に成立した『世説新語』においては「吾等」「吾曹」「我等」「我曹」「汝曹」などは存在しない。以下のように「汝等」(2例)、「爾等」(1例)、「爾曹」(1例)がみられるだけである。

- ・庾夫人云：「汝等近過我餘年，我養之，不忍見行此事。」(『世説新語』「仇隙」 3-1089)
 [庾婦人(=桓脩の母)は言った「お前たち、もう我が余生の終わりの時期に近づいているのだ。私があの子(=桓玄)を育てたのだ。(お前たちが)そんなことをするのを見るに忍びない。]
- ・周伯仁母冬至舉酒賜三子曰：「吾本謂度江託足無所，爾家有相，爾等並羅列吾前，復何憂。」(『世説新語』「識鑒」 2-471)
 [周伯仁の母は冬至の日に酒盃を三人の息子に与えて言った「私は元々長江を渡っても身を寄せるところなどが無いと思っていた。しかし、お前たちの家(=周家)は運に恵まれ、お前たちはどの子も(こうして)私の前に座っている。私は何を憂えようか。]
- ・每語子弟云：「勿以我受任方州，云我豁平昔時意。今吾處之不易。貧者士之常，焉得登枝而捐其本。爾曹其存之。」(『世説新語』「德行」 1-51)
 [しばしば子弟に言った「私が州刺史になったからといって、昔からの志を捨てたと思うな。いまでも私はその境地にあって変わってはいない。清貧というのは士の本分なのだ。どうして高い枝にのぼったら、その根本を忘れてもよいということがあろうか。お前たちもこのことを覚えておくように。]

どの形式が頻出することになったのだ、という説である⁶¹。

この朱慶之(1992)の説に対して、松江(1999)は、①サンスクリットにせよ、パーリ語にせよ、人称代名詞の「数」による形態変化は、単数・双数・多数の三項対立であるが、漢語側は二項対立であり一対一では対応しないこと、②後漢洛陽地域の漢訳仏典においては、訳者が誰かに関わらず「曹」「等」「輩」が同時に生起するときに必ず「曹」「等」「輩」の順に生起するという厳密な文法規則が存在すること、③これらを漢語文法史の流れの中においた場合、漢語の口語だと仮定しても十分合理的に解釈できること、といった点から、「曹」「等」「輩」が人称代名詞に後置され複数を表す現象は、当時の漢語の口語を反映したものだと主張した。

3.3.2 本論文の解釈

まず、松江(1999)が朱慶之(1992)に対する反論の根拠として挙げた「②後漢洛陽地域の漢訳仏典においては、訳者が誰かに関わらず「曹」「等」「輩」が同時に生起するときに必ず「曹」

⁶¹朱慶之(1992)の原文は以下の通り。朱氏は、サンスクリットでは、名詞の「数」の変化は屈折語尾のみで表わされるが、代名詞の「数」の変化はしばしば語形全体の違いにつながることを強調している。

晉代以後、大凡在該用複數人稱代詞的地方，譯文都用「～等」有時也有「～曹」……「等」の使用頻率很高，僅表示複數的語法意義，對於人稱代詞「～等」我們不得不承認其為人稱代詞的複數形式。我們同時還得承認佛典譯文多「～等」或「～曹」、人稱代詞單複數一般被有意區別開來的現象同樣與原本語言有關。仍以梵語為例，除了不變詞，梵語大多數詞都有數的變化，例如陽性名詞 *bhānu*（太陽）的主格單、雙、複三數的變化形式依次是 *bhānus/bhānū/bhānavas*。如果說其他詞類的變化僅在後綴而有規律可循的話，代詞的變化往往各是各樣，而且「面目全非」，如第一人稱代詞 *mad* 主格單、雙、複的變化形式依次是 *aham/āvām/vayam*。由於原文對不同的數在詞性上區別明顯，佛典翻譯家也設法在譯語上有所體現。他們採用了漢語已有的但可能不過是臨時組合的「吾等」「汝曹」等表示雙數和複數，使一種個別的语言現象成為普遍的語言現象，造成了佛典譯文在語法上的又一特色。

〔晉代以降、およそ複数の人称代名詞を用いるべきところでは、訳文はどれも「～等」用いており、時には「～曹」などもみられる。「等」の使用率はとても高く、複数という文法機能だけを表しているため、人称代詞「～等」については、人称代詞の複数形式であると認めないわけにはいかない。我々は同時に、「～等」或いは「～曹」の多いこと、人称代詞の単数・複数が一般に有意味に区別されている現象も、同様に原典言語の文と関係があることをみとめないわけにはいかない。ここでもサンスクリットを例にとると、不変化詞を除き、サンスクリットの大多数の語はいずれも「数」の変化がある。例えば、男性名詞 *bhānu*（太陽）の主格の単数・両数・複数の変化形式は、順に *bhānus/bhānū/bhānavas* である。もし他の品詞の変化が語尾にのみあり、従うべき規則が見出されるものだとすれば、代名詞の変化は往々にして各様であり、その上「面目一新」してしまうものである。例えば一人称代名詞 *mad* の主格・単数・両数・複数の変化形式は順に *aham/āvām/vayam* である。原文が「数」の違いに応じて品詞の上での区別が明確であるので、仏典の翻訳家も何とか訳語に反映させようとしたのである。彼らは、漢語にすでに存在していたが、おそらくは臨時的な組み合わせに過ぎなかった「吾等」「汝曹」などを採用して両数と複数を表現したのであり、個別的な言語現象を普遍的な言語現象にせしめ、仏典訳文の文法面でのさらなる一大特徴を生み出したのである。〕

「等」「輩」の順に生起するという厳密な文法規則が存在する」という点について、調査の範囲を広げて確認してみたい。今、改めて後漢から隋以前の仏教・非仏教文献について調査すると、上述の「曹」「等」「輩」の配合規則に明確に反する例は見出し難いという結果が得られた。すなわち、これらが代詞に付加されて複数を表す場合、仏教文献、非仏教文献に関わらず、必ず①「曹」②「等」③「輩」という順序に従って生起するのである。

- (3-39) 第二夫人白王言：「大夫人，非我凡庶小人輩也。王應當稱隨其意，而忽拒逆喜怒惡言待之。此乃天人，王*令〔三本、宮本「今」去大夫人者，我曹等七十一人何所依恃耶。」（『経律異相』「孤獨母女為王所納出家悟道」53-126c）

〔第二夫人は王に言上した「第一夫人は、我らのような平凡な小人の類ではありません。王は彼女の気持に従うべきなのに、（彼女を）おざなりにし、気持に逆らい、悪言によって彼女に対してしまいました。彼女は天人です。王がもし第一夫人を追放してしまつたら、我ら七十一人のようなものは何を頼りにできましょうか。〕

- (3-40) 爾時大眾見二如來在七寶塔中師子座上，結加趺坐。各作是念：「佛座高遠，惟願如來，以神通力，令我等輩俱處虛空。」（『添品妙法蓮華經』9-168a）

〔その時、衆人は二人の如来が七宝塔の獅子座にあり、足を組み座っているのが見た。それぞれこのように念じた「仏の座は高く遠い。願わくば如来が神通力を以て我らをみな虚空に居らしめんことを。〕

- (3-41) 斐素心戀京兆，其家人從者見斐病甚，勸之言：「平原當自勉勵作健。」斐曰：「我心不願平原，汝曹等呼我，何不言京兆邪。」（『三国志』「魏書」任蘇杜鄭倉伝）裴注引「魏略」514）

〔顔斐は平素より京兆（の地）を思い続けていた。彼の家族や従者は顔斐の病がひどくなるのを見ると、彼を励まして言った「平原さま、がんばって健康をとり戻してください。」顔斐は言った。「私の心は平原（の地）を願っていない。おまえたちは私を呼ぶのにどうして『京兆』と言わないのか。〕

- (3-42) 又別咨瑾曰：「…逮丕繼業，年已長大，承操之後，以恩情加之，用能感義。今叡幼弱，隨人東西，此曹等輩，必當因此弄巧行態，阿黨比周，各助所附。…」⁶²（『三国志』「吳書」張顧諸葛歩伝）1234）

〔（孫権は）また特別に諸葛瑾だけにたずねて言った。「…曹丕が（曹操の）事業を継いだときには、年齢すでに高く、曹操の後を継承した後、恩情を彼ら（＝陳長文ら）に加えることによって、恩義を感じさせることができた。今、曹叡は年若く、他人に従って右往左往している。これらの輩（＝陳長文ら）はきつとこれを利用し策を

⁶²この例の「此曹等輩」における「此」は、人物を指示しているものの、人称代詞ではなく指示代詞とみるべきであるが、このことは複数接辞「曹」「等」「輩」の配合規則の問題には関わらないので、敢えて挙げておく。なお、中古漢語では「等輩」が単独で名詞的に用いられる用例がみられるため、「此曹等輩」の構造は「〔此曹〕〔等輩〕」である可能性がある。

弄して、派閥を作り、それぞれが自分の仲間を助けるに違いない。…」]

以上から、複数を表す「曹」「等」などの形態素が人称代詞に付加される配列において、自然言語に由来するであろう複雑な文法規則が見出されるために、これらが文法化を経て複数接辞に近づいているという現象は、原則として漢語の口語を反映したものだとする⁶³。

しかし、松江(1999)の主張するように、この現象に原典言語の影響がなかったとは断言し難いようである。本論文は、複数接辞の出現頻度については、早期漢訳仏典における状況が、当時の実際の口語よりはるかに高いものであった可能性も排除できないと考える。すなわち、朱慶之(1992)の主張するように、原典言語が単数・双数・複数の形式的対立を備えた何らかの屈折言語であった場合、早期漢訳仏典の翻訳者達は、双数形式と多数形式を「我曹」「吾等」などの「曹」「等」を付加した形式として表現し、単数形式を「我」「吾」などの「曹」「等」を付加しない形式として表現した可能性も排除はできないということである。その場合、「曹」「等」を付加した有標形式は、漢語の口語に由来するものの、その出現率に関しては、原典の言語の影響によって、実際の口語よりも高められたものだということになる。換言すれば、実際の漢語の口語が用法と出現率の面で「拡大されて」漢訳仏典に反映されたということになる。

⁶³なお、この現象について、王雲路教授が、「曹」(中古平声)、「等」(中古上声)、「輩」(中古去声)という配合規則と声調との間に相関関係があるのではないかという見解を口頭で示されたことがある(シンポジウム「日中両国資料による中古漢語研究の新展開」(於札幌市・北海道大学、2007年8月31日)における筆者の発表(松江崇「也談早期漢譯佛典語言在上中古語法史上的價值(稿)」)に対するコメント)。これは注目すべき観点である。この点に関しては、つとに丁邦新(1975)が『論語』『孟子』『詩経』における並列語構成成分間の順序と声調との間に相関関係があることを指摘している。丁邦新(1975)によれば、これらの文献における二音節の異調並列語411条を分析した結果、二音節並列語において平声字は常に第一成分に用いられ、入声字は常に第二成分に用いられる、平・入声字がない場合、上声字が常に第一成分となる、つまりは「平上去入」の順序が正しく並列語成分となった場合の先後と一致することになる。この丁邦新(1975)の説は上述の王雲路氏の見解を支持するものと言えよう。

本論文も、この現象に声調が関与している可能性を全く否定するものではない。しかしながら、少なくとも『六度集経』『仏教義足経』の漢訳された三世紀においては、「輩」の意味的な抽象化の程度は明らかに「曹」或いは「等」よりも低い(松江1999など)。上述の丁邦新(1975)の指摘した現象は、典型的には各形態素の自立性が等しい並列構造(意味的・機能的には先後関係に必然性のない構造)についてみられるものであり、本論文は「曹」「等」「輩」の配列順序を決定する要素として、まずは文法化の程度の相違という意味・機能面での差異を重視することにしたい。

3.4 本章のまとめ

3.4.1 早期漢訳仏典特有の文法現象と漢語の口語との関係を判断する基準

本章では、早期漢訳仏典にみられる二種の特徴的な文法現象がいずれも漢語の口語と関係があったと考えた。この推定が正しければ、非仏教文献にはみられない口語的文法現象を反映するという点で、早期漢訳仏典の中古文法資料としての価値の大きさが確認できる。その一方で、上述の二種の文法現象については、当該の漢訳仏典の成立した当時の口語における状況とは、用法や時代性、出現頻度の面で「ずれ」が生じていた場合もあったことを指摘した。具体的には、五世紀以降の仏教文献における「已」は同時期の口語とは直接的な関係がなかったと考えられること、また五世紀以前の漢訳仏典における「已」についてもその特殊用法（「已 b」）は口語を反映したものではなかった可能性が排除できないこと、さらに漢訳仏典における人称代詞の複数接辞についても、出現頻度の面では、当時の口語がいわば「拡大され」て映し出されたものであった可能性が高いことを指摘した。よって早期漢訳仏典に特殊な文法現象がみられる場合には、本論文で行ったような検討を経た後に、はじめて漢語の口語との関係が推定され、漢語文法史の枠組みの中に正しく位置づけられることになると言えよう。

以下、本章のまとめとして、五世紀以前に成立した早期漢訳仏典に特殊な文法現象がみられた場合、それが漢語の口語と関係があるか否かを判断するための具体的な基準を整理しておきたい。

- (i) 当該の特殊な文法現象の中に自然言語に由来するとみなされる複雑な文法規則が見出される場合、その文法現象は漢語の口語と何らかの関係があったと推定できる。
- (ii) 当該の文法現象が、同時期の複数の翻訳者により訳された多くの漢訳仏典に共通してみとめられる場合、その文法現象は漢語の口語を反映したものである可能性が高い。

しかし、当該の文法現象が漢語の口語と関係があると推定される場合でも、当時の漢語を直接的に反映したものであるのか、原典言語の影響を受け、出現頻度や用法の面で「拡大され」たものなのかを判断するには、以下の基準による検討が必要である。

- (iii) 原典言語に当該の文法現象と対応する文法現象が存在しない場合、その文法現象が原典言語の影響を受けたものである可能性は低い。

ただし、五世紀以降に翻訳された漢訳仏典については、上記の三つの基準だけから判断することは難しい。本論文 3.2.2 で既述したように五世紀の鳩摩羅什の時代に成立した「漢訳

仏典文体」の影響を強くうけたものである可能性が高いからである。この漢訳仏典文体は、文献言語の同時代性を阻害する——すなわち文献言語を当時の口語と乖離させる——という点では、漢代以降における所謂「文言」と同じであり、かりに上述の三種の基準に符合したとしても、それが当該の漢訳仏典成立当時の漢語の口語にもとづく文法現象であるとは必ずしも認定できない。今後、この「漢訳仏典文体」に対する知見を集積し、口語との関係をより多角的に検討していくことが課題となろう。

3.4.2 疑問目的語の語順変化を検討するための資料価値

以上、早期漢訳仏典の中古法資料としての価値について検討してきた。本節では、本論文が研究対象とする疑問目的語の語順変化という文法現象を検討する際、原典言語の影響という問題が生じ得るかどうかを確認しておく。

本論文 I 部の本章以降の章でも言及するように、早期漢訳仏典と中古の非漢訳仏典文献とでは、その言語における疑問目的語の語順は原則的には同様の傾向にあるものの、全体的には早期漢訳仏典の方が、「より新しい」状況を反映している。すなわち通時的に新しい後置の語順をとるものが、早期漢訳文典の方が相対的に多くみられるのである。本論文ではこの「早期漢訳仏典の方に相対的に多くみられる」という現象は、原典言語の影響を受けたものではあり得ず、漢語の口語を反映したものだとする。それは、①前置と後置という語順の違いが、明確に漢語側の疑問目的語の種類が何であるかという条件によって決定されており（本論文 3.4.1 における(i)の条件に符合）、②かつその条件が複数の早期漢訳仏典にも非漢訳仏典にも共有されており（本論文 3.4.1 における(ii)の条件に符合）、さらに③原典言語として予想される印欧諸語にこの現象と直接的に対応する文法現象が想定し難いからである（本論文 3.4.1 における(iii)の条件に符合）⁶⁴。今、上述の①②について補足すれば、中

⁶⁴例えば、サンスクリットの疑問代名詞√kim-について言えば、「格」「数」「性」によって形態変化し、人以外の事物と人のいずれを指示することも可能である。これが、漢語の「何」「所」「何所」「何等」「誰」「如」「若」といった疑問目的語と一対一に対応し、それに応じて語順変化したということはあるまい。

ただし、早期漢訳仏典にみえる疑問代詞のなかには、原典言語の影響を受けて生じたとも推定されているものも存在する。例えば、遇笑容(2003)は、中古漢訳仏典における「云何」の用法を検討し、①漢土文献（原文は「中土文献」）における「云何」の使用率は漢訳仏典に比して大幅に少ないこと、②漢訳仏典には「云何」を取り去ってもその文が疑問文であることにはかわりないような「云何」があることを指摘する。その上で、漢訳仏典の「云何」はサンスクリットの kim の機能と完全に対応するため、訳経に携わった西域僧が翻訳に際して仏典の原文を忠実に漢語に訳した結果、「云何」の特殊な用法が出現することになり、漢訳仏典と漢土文献における「云何」に用法上の差異が生ずるようになったと主張している。

この遇笑容(2003)の説については、本章において他の文法現象について行ったような詳細な検討の後にその可否を判断することができよう。いずれにせよ「云何」は目的語とはならないので、疑問目的語の語順の問題には関与しない。

古期の大多数の早期漢訳仏典においては、「何」「所」「何所<-場所>」(＝場所以外の一般事物を指示する「何所」)が動詞目的語となった場合には上古式の「疑問目的語+V」という前置の語順を保つが(用例(3-43)~(3-45))、「誰」「何等」が動詞或いは介詞目的語となった場合には「V/P+疑問目的語」という後置の語順に転じているという現象が確認される(用例(3-45)~(3-47))。そしてこの現象は、原則的には非仏教文献言語にも共通してみられるのである((3-48)~(3-51))。ただし、非漢訳仏典には、「誰」が動詞或いは介詞の前に生起するという「保守的な」語順もみとめられる((3-52))⁶⁵。これは非漢訳仏典には相対的に文言の影響が強く、保守的な語順を多く残したものと解釈するのが自然であろう。

以上を要するに、早期漢訳仏典における疑問目的語の語順は、原典言語の影響を受けたものとは考え難い。そして、通時的により「新しい」状況——当時の口語により近い状況だと推定される——を反映している点において、早期漢訳仏典は、疑問目的語語順変化メカニズムを検討する中古文法資料として高い価値を備えていると考えられる。

- (3-43) 時毘摩天化作其弟，至其兄邊。兄瞋弟言：「何不墾殖，來此何為。」(『雜寶藏經』4-491c)

[その時、毘摩天は弟に変身し、兄のところに行った。兄は弟を叱って言った「どうして野良仕事をしないのだ。こんなところに来てどうするのか。」]

- (3-44) 既到家已，其婦問言：「三年客作，錢財所在。」其夫答言：「我所得財，今已舉著堅牢藏中。」(『雜寶藏經』4-468a)

[(画師が)家に着くと、その妻が問うた「三年手伝い仕事をして、(あなたが稼いだ)お金はどこにあるのですか。」夫は答えて言った「私が得た金は、今はすでに堅牢な藏の中にしまっている。」]

- (3-45) 王抱兩孫摩捫其身，問兩兒言：「汝父在山中，何所飲食，被服何等。」(『太子須大拏經』3-423b)

[王は二人の孫を抱きかかえ、彼らの体を手でさすった。(王は)その二人の子供にたずねた「お前たちの父は山中で生活しているというが、いったいどんなものを飲み食いし、どんなものを着ているのか。」]

⁶⁵漢訳仏典のなかにも目的語となった「誰」が動詞に前置された用例も絶無ではないが、極めて少ない。本論文の調査で確認できたのは以下の用例のみである。三世紀の『六度集経』における例であるが、「誰」と文法関係を結ぶ動詞が「化」(教化する)という他動性の強い動詞であり、また『六度集経』が江南方言を反映する可能性があることなどが(松江 2010:242-260)、例外的語順を生ぜしめた要因であるのかもしれない。

・菩薩伯叔自相謂曰：「吾之本土，三尊化行。人懷十善，君仁臣忠，父義子孝，夫信婦貞，比門有賢，吾等將復誰化乎。…」(『六度集経』3-37a)

[菩薩の兄弟は互いに言った「我らの本国は三宝の教化が行われ、人々は十善を心に抱き、君主は仁慈で臣下には忠義があり、父には正義があり子供は孝行であり、夫には信があり妻は貞淑であり、家々には賢者がいる。我々はこの上に誰を教化するというのか。…」]

- (3-46) 曼氐復言：「…今亦不見兒，兒亦不來附我，為持與誰乎。今不見之我心摧裂。早語我處。莫令我發狂。」（『太子須大拏經』3-422c）
 [曼氐はさらに言った「…今子供たちが見当たらず、子供たちも私に駆け寄ってくることをしない。いったい（彼らを）誰に与えてしまったのですか。今あの子たちが見えないために、私の心は張り裂けそうです。はやく居場所を教えてください。私を狂わせないでください。】
- (3-47) 常悲菩薩仰視報曰：「當由誰聞斯尊法乎。以何方便，之何國土，厥師族名。」（『六度集經』3-43b）
 [常悲菩薩は（仏を）仰ぎ見て応えた「どなたからそのような尊法を聞いたらいいのでしょうか。どのような方法によって、どの国に行く（べきで）しょうか。その師の族名は（何でしょうか）。】
- (3-48) 顧長康拜桓宣武墓，作詩云：「山崩溟海竭，魚鳥將何依。」（『世說新語』「言語」1-175）
 [顧長康（顧愷之）が桓宣武（桓温）の墓を参拝した。詩を作っているには「山は崩れ大海は竭き、魚や鳥は何処に身をよせるところがあるのか。】
- (3-49) 周侯詣丞相，歷和車邊。和覓蝨，夷然不動。周既過，反還，指顧心曰：「此中何所有。」（『世說新語』「雅量」1-431）
 [周侯（周顛）が丞相（王導）を訪れようとして、顧和の車の傍らを通り過ぎた。和は虱をとっており平然とした様子で全く動こうとしない。周は通り過ぎたあとで、また引き返すと、顧の胸をさしてたずねた「この中には何があるのか。】
- (3-50) 至門，方詳父死，號踊慟絕，良久乃蘇。問母：「父所遺言。」母曰：「汝父臨終，恨不見汝。」（『宋書』「孝義余齊民伝」2256）（張永言 1992:422 所引の用例）
 [(余齊民は) (家の) 門に到着した。父の死を詳しく知ると、慟哭して気絶し、しばらくしてやっと目覚め、(次のように) 母にたずねた「父上の言い遺したことは何ですか」母は言った「父上は臨終のとき、お前に会えないことを悔やんでおられたよ。】
- (3-51) 後劉繇亡於豫章，士眾萬餘人未有所附，策命慈往撫安焉。左右皆曰：「慈必北去不還。」策曰：「子義捨我，當復與誰。」（『三国志』「呉書」「太史慈伝」1188-1189）
 [後に劉繇が豫章で死去し、(配下の) 兵士や民衆一万余が依るべきところが無くなると、孫策は太史慈に命じて(豫章に) 行かせ、彼らを安撫しようとした。(孫策の) 側近のものはみな言った「太史慈はきっと北に去って戻らないでしょう。」孫策は言った「子義(=太史慈)は私を捨てて、いったい誰につき従うというのか。】
- (3-52) 權謂齊曰：「今定天下，都中國，使殊俗貢珍，狡獸卒舞，非君誰與。」（『三国志』「呉書」「賀齊伝」引『呉書』1379）
 [孫權は賀齊に言った「今、天下を平定し、中原に都を置き、異俗の国々に珍しいものを貢がせ、猛獣を従えて舞わせようとするならば、あなた以外に、い

たい誰と力を合わせるべきだろうか。』

第四章 上古中期漢語における目的語前置現象とその例外

周知のように、上古から近古までのいずれの時期においても、古代漢語の他動詞文の基本語順はSVO型であるが、上古漢語においては、様々な条件によって目的語がそれと文法関係を結ぶ動詞・介詞に前置され、SOV型語順を示すことがあった。

この目的語前置現象が生じた具体的な条件とその類型については、多くの議論があり、研究者の見解は必ずしも一致していない。本章では周法高(1957)、王力(1957)、楊伯峻・何樂士(1992)などを見解を参考にしつつ、上古中期におけるこの現象を、①疑問代詞目的語前置現象、②「何/-X」疑問目的語フレーズ前置現象、③否定文における代詞目的語前置現象、④その他の目的語前置現象(代詞目的語「是」の前置現象、「惟+X」型目的語の前置現象、「之」「是」などに照応指示された目的語の前置現象)、という類型に整理した上で、具体的を挙げつつその内実を紹介していく。さらに、生起する頻度が高く、上古漢語文法の体系内で重要な位置を占める上記①～③の現象については、上古中期の『論語』『孟子』における悉皆調査の結果をも併せて示す⁶⁶。本章を設けた意図は、本論文が扱う疑問目的語前置現象(上記①②に相当)が上古漢語の目的語前置現象全体において如何なる位置を占めるものなのかを確認するところにある。

4.1 疑問代詞目的語前置現象

この現象は、疑問代詞が動詞或いは介詞の目的語となり、動目関係を結ぶ動詞或いは介詞に前置され、主語と動詞或いは主語と介詞との間に位置するものを指す⁶⁷。

⁶⁶ 上古初期における目的語前置現象については、主に『書経』(西周部分)・『詩経』(西周部分)における①～③の条件に符合する用例の出現状況を本章の注に示していくこととする。ここで上古初期の目的語前置現象の状況について概観すれば、大凡、本章の本文で挙げた上古中期の①～④の状況に符合すると言ってよい(詳細は後述する)。しかし下例のように、特定の標識を伴わずに名詞目的語ないし代詞目的語が前置される現象も少なからずみられる点が特徴的である。

・貞：其克乎(呼)。(『甲骨文合集』片号 16247 : 6-2238) (齊航福 2015:56 所引の例)

[占った「克を召喚する」と。]

・民獻有十夫予翼。(『書経』「大誥」3-407)

[ここに賢者十人がいて私(=わが周)を補佐している。]

なお、上の甲骨文の用例は、字積・構造解釈に議論のあるものが少なくないが、齊航福(2015:55)によれば、甲骨文における無標の名詞目的語の前置は全部で65例認定されるという。また同氏は、甲骨文には無標の代詞目的語の前置現象は存在しないと指摘する。

⁶⁷ 以下に示したものが、上古中期漢語に常見される疑問代詞である。これらは指示対象と声母の種類によって三系列に分類することができる。王力(1983)によれば、このうち禪母系は人を指示し、匣母系は物を指示し、影母系は場所を指示する。ただし、王氏自身もみとめるように、このような指示対象の規定は厳密なものではなく大凡の傾向にすぎない。

(4-1) 叔孫曰：「…雖怨季孫，魯國何罪。叔出季處，有自來矣，吾又誰怨。然鮒也賄，弗與，不已。」（『左伝』「昭公元年」4-1205）

〔叔孫は言った「…季孫は恨めしいが、魯国にどんな罪がありましたでしょうか。私が国外に（使者として）出て、季は国にあって守るとするのは、以前からこのようにしてきたはずだ。私は（殺されても）誰を恨もうか。しかし（晋の）鮒は賄賂を好む（男だ）。（彼に賄賂を）渡さなければ、おさまらないだろう。〕

(4-2) 子貢曰：「貧而無諂，富而無驕，何如。」子曰：「可也。未若貧而樂，富而好禮者也。」（『論語』「学而」1-54）

〔子貢が言った「貧乏であっても諂わず、裕福であっても驕らないというのはいかがでしょうか。」先生は答えられた「よしい。（しかし）貧乏であっても（道を）楽しみ、富裕であっても礼を好む者には及ばない。〕

(4-3) 子疾病，子路使門人為臣。病間，曰：「久矣哉，由之行詐也。無臣而為有臣。吾誰欺。欺天乎。…」（『論語』「子罕」2-600）

〔先生の病気が重くなった。子路は門下の者を（孔子の）下男のごとく仕えさせた。（孔子は）病が癒えると言った「長いことだね。仲由がこのような小細工をしているのは。（見栄のために）下男などいないのに、それがいるかのごとくして。（いったいそんなことで）私が誰を欺くというのか。天を欺くというのか。…〕

禪母系：孰(*duk)、誰(*dui)

匣母系：何(*gâi)、奚(*gê)、曷(*gât)、胡(*gâ)、盍(*gâp)

影母系：惡(*ʔâ)、安(*ʔân)、焉(*ʔan)

本論文の上古初期資料における疑問代詞体系は以下のである。

禪母系：誰(*dui)（本論文で使用した資料以外には「疇」(*dui)もみられる）

匣母系：何(*gâi)、曷(割/害)(*gât)、胡(*gâ)

影母系：安(*ʔân)

以母系：台(*lə)

上古初期の疑問代詞目的語の語順も基本的には上古中期と同様であり、原則として動詞・介詞に前置される（上古初期資料における疑問代詞目的語の語順の一覧は本節注 68 を参照）。

・王曰「嗟。四方司政典獄，非爾惟作天牧。今爾何監，非時伯夷播刑之迪。其今爾何懲。惟時苗民匪察于獄之麗。…」（『書経』「周書」「呂刑」423）

〔王は言った「ああ、各地の行政・裁判を司る官吏たちよ。お前たちは上天のために臣民を治めているのではないのか。今、お前たちは何を範とするのか。伯夷が広めた刑法の道ではないのか。今、お前たちは何を教訓とするのか。苗民が法に拠らずに判決を下したことはないのか。…〕

ただし異なる点もある。「誰」が動詞目的語となり、前置された場合、「誰(=Ov)+云+V」の形式で有標化された用例がみられるのである

・既克有定，靡人弗勝。有皇上帝，伊誰云憎。（『詩経』「小雅」「正月」2-667）

〔（騒乱が）平定されてしまえば、機会に乗じてのさばる人もいなくなる。偉大な上帝は、いったい誰を憎んでいるだろうか。〕

なお、上古初期において疑問代詞目的語が後置語順をとる条件については、上古中期とは大きくは異ならず、動詞・介詞および目的語となる疑問代詞の語彙的な異同に止まる傾向がみられる。具体例は本節 4.1(i)～(iii)の注 68～71 を参照されたい。

(4-4) 子路曰：「衛君待子而為政，子將奚先。」子曰：「必也正名乎。」（『論語』「子路」4-885）

〔子路が言った「衛君が先生に頼んで政治を任されたら、先生は何を先になさるおつもりですか。」先生は言われた「きっと名分を正すだろう。」〕

(4-5) 四月甲辰，鄭公子忽如陳逆婦媯。辛亥，以媯氏歸。甲寅，入于鄭。陳鍼子送女。先配而後祖。鍼子曰：「是不為夫婦，誣其祖矣，非禮也，何以能育。」（『左伝』「隱公八年」1-54）

〔四月甲辰の日、鄭の公子忽は、陳に行き婚約した媯氏を迎えた。甲寅の日に媯氏をつれて帰国の途につき、甲寅の日に鄭に入った。陳の大夫の鍼子は媯氏を送った。（しかし公子が媯氏と）床を共にしてから先祖に報告すると、鍼子は言った「これでは夫婦ということにはならない。先祖を欺いてしまった。非礼である。どうして（子孫を）生み育てることなどできようか。〕

『論語』『孟子』における疑問代詞目的語の語順の状況は、次の【図表 4-1】【図表 4-2】のようにまとめられる⁶⁸。

【図表 4-1】『論語』における疑問代詞目的語の語順

目的語	前置		後置	
	動詞	介詞	動詞	介詞
何	59 [如 a21, 謂 9, 有 7, 為 a5, 患 2, 加 2, 傷 2, 先 2, 言 2, 懼 1, 述 1, 以 1, 憂 1, 怨 1, 執 1, 誅 1]	8 [以 5, 為 c3]	23 [云 1, 如 b22]	-

⁶⁸ 上古初期の状況は次のようにまとめられる（具体例は 14.1.1.2 および 14.1.2.2 を参照）。
・『書経』（西周部分）・『詩経』（西周部分）の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	6/8	0/3	0/0(12)	0/0(3)
誰	0/2	0/0	0/0	0/0
曷(割/害)	1/0	0/0	0/0	0/0
胡	0/0	0/2	0/0	0/0(1)
安	0/1	0/0	0/0	0/0
伊何	0/0	0/0	0/0(1)	0/0

* 「/」は 2 資料の区分を表す。「6/8」であれば、『書経』（西周部分）の用例が 6 例、『詩経』（西周部分）の用例が 8 例あることを表す。

* 「()」内数字は、通時的に無意味な用例の出現頻度である。「0(3)」であれば、通時的に有意な用例が 0 例、無意味な用例が 3 例であることを表す。

奚	4 [為 a1,自 1, 取, 1 先 1]	1 [為 c1]	-	-
焉	2 [貪 1,往 1]	-	-	-
惡	-	1 [乎 1]	-	-
孰	-	2 [與 2]	-	-
誰	7 [毀 1,譽 1,怨 1, 欺 1, 與 2, 為 c1*]	1 [以 1]	2 [為 b2]	-

*縦の最左列は目的語となった各疑問代詞であり、その右の列に示された数字は、最上行および第二段の行に示された条件に符合する用例数を示す。[] 内はその用例数の内訳であり、動詞・介詞の種類およびその個々についての用例数を補足したもの。例えば、最左列の疑問代詞「焉」が、最上行「前置」・第二段「動詞」と交叉する欄には、「2 [貪 1,往 1]」とあるが、これは「焉」が目的語として前置された用例が 2 例あり、その内訳は動詞「貪」・「往」の目的語となった用例が 1 例ずつあることを表す。

*「如 b」は／如 (X) 何／構造における「如」を表し、「如 a」はそれ以外の動詞用法の「如」を表す。なお「如 b」のうち 1 例については、定州漢墓本では「如」ではなく「若」に作る（「陽貨篇」の用例）。

*「為 b」は准繫辞としての用法を、「為 a」はその他の動詞用法を示す。「為 c」は「～のために」という意味を表す介詞用法を示す。ただし「為 c」には、介詞用法の意味を保持しつつ臨時的に述語動詞として用いられたもの（「～のためにする」という意味を表す）をも含まれる。

* 動詞「云」が目的語「何」をとった「云何」の用例は、出土資料たる定州漢墓本では「曰何」に作る。

* 『詩経』『書経』等の上古初期文献を直接引用した個所は資料としない。

【図表 4-2】『孟子』における疑問代詞目的語の語順

語順 目的語	前置		後置	
	動詞	介詞	動詞	介詞
何	46 [如 a14,之 2,脩 1,有 3,患 1,謂 9,事 3,使 2,慊 1,,言 1, 為 a2,畏 1,傷 1,取 1,難 1, 為 c1, 以 1,加 1]	36 [以 21,由 1, 為 c14]	25 [如 b25]	-
奚	4 [冠 1,取 2,有 1]	3 [為 c3]	-	-

焉	1 [往 1]	-	-	-
惡	6 [在 5,為 a1]	4 [乎 4]	-	-
誰	3 [敬 2,先 1]	3 [與 3]	-	-

*表の見方は【図表 4-1】と同様。

*『詩経』『書経』等の上古初期文献を直接引用した箇所および「夏諺語」を直接引用した部分は資料とはしない。

【図表 4-1】【図表 4-2】から、『論語』『孟子』における疑問代詞目的語は原則として前置されること、しかし同時に後置される例外が存在することが確認される。例外の類型は次のごとく整理できる。

(i) 疑問代詞が准繫辞「為」の目的語を担う場合

上古中期の判断を表す動詞「為」（「～である」）は、意味的に主語と目的語の一致を指定する繫辞に准ずるものとみなすことができる。文法的には疑問代詞が准繫辞としての「為」の目的語になった場合、前置されず後置の語順となる⁶⁹。

(4-6) 長沮曰：「夫執輿者為誰」[定州漢墓本「誰子」]。子路曰：「為孔丘。」（『論語』「微子」4-1267）

[長沮、桀溺の二人が並んで田を耕していた。孔子がそこを通り過ぎたとき、子路に渡し場をたずねさせた。長沮は言った「あの馬車の手綱を執っているのは誰です。」子路が言った「孔丘です。」]

(ii) 疑問代詞が介詞「於」或いは「于」の目的語を担う場合

疑問代詞が介詞「於」或いは「于」の目的語を担った用例は『論語』『孟子』にはみられないが、他の上古中期資料の中にはみとめられる⁷⁰。

⁶⁹ 上古中期においては、二つの名詞句（A、B）の一致の指定は「A、B（也）」のように「為」を用いずに表すことが多く、意味的には「為」は判断・認定の意味合いを強く持つため、純粋な繫辞とはみなさない。

上古初期の准繫辞には「維」がある。疑問代詞が目的語となった場合、やはり「維」に後置される。

・之子於釣，言綸之繩。其釣維何，維魴及鱖。。（『詩経』「小雅」「採芣」2-805）

[あなたが釣りをするのなら、私はあなたのために釣り糸をよりあわせましょう。釣れたのは何であるか。（釣れたのは）魴と鱖。]

⁷⁰ 上古初期においても、疑問代詞が介詞「於」或いは「于」の目的語となる時、原則としてこれらの介詞に後置される。

(4-7) 「…日出多偽，士民安取不偽。夫力不足則偽，知不足則欺，財不足則盜。盜竊之行，於誰責而可乎。」(『莊子』「則陽」4-903)

〔「…(君主たる者が) 日常的に多くの偽りをなすようになれば、どうして士民が偽りをなさないことがあろう。力が不足していれば偽り、知が不足していれば欺き、財が不足していれば盗むのである。窃盗という行いについては、誰に対して責めるべきであらうか。〕

(iii) 疑問代詞が「/如(X)何/」構文における第二目的語を担う場合

本論文で言う「/如(X)何/」構文とは、「如(+X)+何」、「若(+X)+何」、「奈(+X)+何」などの形式で、「(Xを) どのようにするか」といった意味を表す統語構造の総称である。この構造は、原則として「何」の部分¹を他の名詞・代詞にかえることができない。この内部を統語的にどのように分析するかについては諸説あり、太田(1964)は「如(=動詞)(+X)(=第一目的語)+何(=第二目的語)のごとく分析するが、郭錫良(2007)は「如(=介詞)(+X)(=介詞目的語)+何(=述語)のごとく分析する。いずれの分析がより適切かを判断するのは難しいが、本論文では、仮に太田(1964)の分析に従い、この構造における「何」を疑問目的語に含めておく。いずれにせよ「/如(X)何/」は、以下の(iv)で言及する「謂(X)何」——この「何」は動詞「謂」の第二目的語と分析され得る——との統語構造上の類似性を有しており、仮に上古中期の「如」が介詞に近いものだったとしても、歴史的には動詞に由来する蓋然性が大きい。

(4-8) 子曰：「道之將行也與，命也。道之將廢也與，命也。公伯寮其如命何。」(『論語』「憲問」4-1024)

〔道が行われるのも天命だし、道が廢れるのもまた天命である。公伯寮ごときが一体

・哀我人斯，王何從祿。(『詩經』「小雅」「正月」2-666)

〔哀れむべき私が民は、どこに向かったら幸せが手に入るだろうか。〕

この条件は上古中期以降にも受け継がれていく。しかし非常に稀少であるけれども、上古後期の『史記』の中には次のような前置用例もみとめられるのである。

・二世曰：「夫虞、夏之主，貴為天子，親處窮苦之實，以徇百姓，尚何於法。…」(『史記』(秦漢部分)「秦始皇本紀」271)

〔二世が言った「…かの虞、夏の君主は、天子という高貴な身分にあっても、自らは窮乏する状況に身を置き、民衆のために(自らを)犠牲にしていた。(このようなやり方は) どうして見習うところがあるか。…〕

・召入，至于殿下，有詔問之曰：「何於治北海，令盜賊不起。」(『史記』(秦漢部分)「滑稽列傳」3210)

〔(北海郡太守は武帝に) 召見されて(宮中に) 入り、殿堂の下に至った。武帝は太守に下問して言った「どうやって北海郡を安定させ、盜賊が現れないようにするつもりか。、〕

上に挙げた一番目の用例については、魏培泉(2004:221:注20)が言及している。魏氏は、断言は避けながらも、秦方言では語順が異なっていたという方言的現象であった可能性に触れている。

天命をどうするというか。]

なお、「何」が「/如(X)何/」構文以外の統語的環境において動詞「如」の目的語となった場合は、前置規則に従って「如」の前に位置する。例えば、下例の「如」は「～のようである」という意味の二項動詞であるが、目的語となった「何」は「如」に前置されている。

- (4-9) 子貢曰：「貧而無諂，富而無驕，何如。」子曰：「可也。未若貧而樂，富而好禮者也。」（『論語』「学而」1-54）

[子貢が言った「貧乏であっても諂わず、裕福であっても驕らないというのはいかがかでしょうか。」先生は答えられた「よろしい。（しかし）貧乏であっても（道を）楽しみ、富裕であっても礼を好む者には及ばない。」]

(iv) 疑問代詞が「謂(X)何」の第二目的語となった場合

「謂(+X)+何」は、「(Xのことを) 何と言う」という意味を表す統語構造（動詞句）である。この構造における「謂」は、「謂」元来の語彙的意味（＝「言う」）を備えているために実質語たる動詞だとみなされる。よって「謂(＝動詞)(+X)(＝第一目的語)+何(＝第二目的語)」のように分析されるであろう。

- (4-10) 且而里克見丕鄭，曰：「夫史蘇之言將及矣。優施告我，君謀成矣，將立奚齊。」丕鄭曰：「子謂何。」曰：「吾對以中立。」（『国語』「晋語二」277）

[早朝、里克は丕鄭に会って言った「あの史蘇の予言が実現することになりましょう。優施が私に言うには、国君の計略は決定しており、奚齊を立てるとのことです。」丕鄭は言った「あなたは（優施に）何と言ったのですが。」（里克は）言った「私は中立を守ろうと答えました。」]

- (4-11) 里克告丕鄭曰：「三公子之徒將殺孺子，子將何如。」丕鄭曰：「苟息謂何。」對曰：「苟息曰：『死之。』」（『国語』「晋語二」289）

[里克は丕鄭に言った「三公子の一党が奚齊を殺そうとしています、あなたはどうしますか。」丕鄭は言った「苟息は何と言いましたか。」「苟息は『彼（＝太子）のために死ぬ』と言いました。」]

なお、「何」が「謂」の第一目的語となった場合は、「謂」に前置される。

- (4-12) 晉侯謂伯瑕曰：「吾所問日食，從矣。可常乎。」對曰：「不可。六物不同，民心不壹，事序不類，官職不則，同始異終，胡可常也。詩曰『或燕燕居息，或憔悴事國。』其異終也如是。」公曰：「何謂六物。」（『左伝』「昭公七年」4-1297）

[晋侯は伯瑕に言った「私がたずねた日食の占いは、（お前の答えの）とおりになっ

た。これはいつものことなのか。」伯瑕は答えて言った「それは無理というものです。六物が同じではないからです。民心も一様でないし、ことの順序も同様ではなく、官僚の（良し悪しも）一定でなく、ことの始めは同じでも結果は違うこともあります。どうしていつものことであり得ましょうか。『詩経』にも『ある人は家でのんびりと安らぎ、ある人は疲れきりながら国につくす。』とあります。結果の違いとはこのようなものです」と答えた。晋侯は「六物とは何なのか」とたずねた。]

(v) 疑問代詞が動詞「云」の目的語となった場合

「(～と) 言う」という意味を表す動詞「云」が疑問代詞目的語を伴った場合、その疑問代詞は前置されない⁷¹。

(4-13) 子夏之門人問交於子張。子張曰：「子夏*云何」[定州漢墓本「曰何」]。對曰：「子夏曰『可者與之，其不可者拒之。』」(『論語』「子張」4-1302)

[子夏の門人が人との交際について子派に問うた。子張は言った「子夏は何と言ったか。」(子夏の門人は) 答えて言った「子夏が言われるには『よい者であればこれと交際し、もしよくない者であればこれを断るように。』」とのことでした。]

(vi) 非疑問用法の疑問代詞「何」が動詞「無」の目的語となった場合

このような例は、『論語』『孟子』の中には存在しないが、『荀子』など他の上古中期資料のなかにみとめられる。ただし、総じて稀少である⁷²。

⁷¹ 上古初期の『詩経』にも「云何」はあるが、語彙（一語化）化されており、「云何」で「なんと（～であることか）」「どうして」といった意味を表す。

・隰桑有阿，其葉有沃。既見君子，云何不樂。(『詩経』「小雅」「隰桑」2-809)

[湿地の桑は柔らかで美しく、その葉はつややかなさま。あなたに会うことができたからには、うれしくないことなどありましようか。]

なお、本文で挙げた『論語』の用例(4-13)における「云何」は、用例中に注記したように、出土資料たる定州漢墓竹簡本では「曰何」に作ることに注意されたい。

⁷² 今本『荀子』には版本上の問題が多く存在することには注意すべきであり、本論文で挙げた(4-14)(4-15)の個所もまさにそのような問題を孕んでいる。例えば、王天海『荀子校釈』の注によれば、用例(4-14)については、『羣書治要』では当該の「無何」を含む「曰是何也曰無何也」の八字が欠けており、『韓詩外伝』ではこの八字の箇所を「何也」という二字に作る(『荀子校釈』691頁)。また(4-15)における「無何」については、古逸叢書景刻南宋台州本では「無佗」に作る(『荀子校釈』693頁)。後者の個所については、王天海氏が韓詩外伝などを根拠に、「無佗」は「無何」と作るべきであると主張しており(『荀子校釈』693頁)、本論文でもそれに従うが、いずれにせよ例文の信憑性に問題なしとは言えないであろう。

それにもかからず、本論文は上古中期において非疑問用法の「何」が動詞「無」の後置目的語となった用例は存在したと考える。その理由は、上古後期の『史記』にも同様の用例がみとめられるからである。

・漢中尉至，王視其顔色和，訊王以斥雷被事耳，王自度無何 [集解：如淳曰：「無何罪。」]，不發。(『史記』(秦漢部分) 3084)

(4-14) 星隊木鳴，國人皆恐，曰：「是何也。」曰：「無何也」〔楊倞注：假設問答。無何也，言不足憂也。〕（『荀子』「天論」2-313）

〔星が墜ち、木が鳴ったりすると、國中の人が恐れて言う「これはどうしたことか。」（それに対しては）このように答えよう「別段どうということはないのだ。」〕

(4-15) 雩而雨，何也。曰：無何也，猶不雩而雨也。（『荀子』「天論」2-316）

〔雨乞いをして雨が降るといふは、どういうことか。（それに対しては）どうということはない、雨乞いをしなくても雨が降るのと同じようなものだ、と答えよう。〕

上述の状況から、上古中期漢語における疑問代詞目的語前置現象には少なからぬ例外が存在するが、これらの例外の出現は全く無秩序なものではなく、何らかの規則性が見出されることが知られる。よって例外は少なからず存在するものの⁷³、上古中期において疑問代詞目

〔漢の中尉が到着すると、（淮南）王は彼の態度が穏やかであり、また（中尉は）王に雷被を罷免したいきさつをたずねただけであったので、王は何ら大きな罪はないと考え、事（＝太子の計画）を起さなかった。〕

なお、『史記』には下例のような「居無何」〔ほどなくして〕というフレーズも多くみられる。これは一見、非疑問用法の疑問代詞「何」が動詞「無」の目的語になったとも解釈できそうである。しかし魏培泉(2004:263)は、このフレーズ内の「無何」がいずれも「無幾何」の簡略形式であるとみなしており、本論文でもこの見解に従うこととする。

・參聞之，告舍人趣治行，「吾將入相」。居無何，使者果召參。（『史記（秦漢部分）』「曹相國世家」2029）

〔曹參はこのこと（＝蕭何が亡くなったこと）を聞くと、近臣にすぐに旅支度をさせて（言った）「私は朝廷に入り宰相となるだろう。」ほどなくすると、果たして使者が曹參を呼び寄せに来た。〕

⁷³上古中期において上述(i)～(vi)の条件に符号しない疑問代詞目的語前置現象の例外は極めて稀少である。しかしながら皆無とは言えない。以下の用例は、そのような(i)～(vi)の条件に符合しない例外である。

・將戰，吳子呼叔孫，曰：「而事何也。」對曰：「從司馬。」（『左伝』「哀公十一年」4-1663）

〔「事何」は「どんなこと担っているのか」の意〕

〔まさに戦争になろうという時、呉王は叔孫を呼んで言った「お前はどんな職務を担当しているのか。」（叔孫は）答えて言った「司馬でございます。〕

以下の前置の用例と比較されたい。

・惠伯曰：「…且夫易，不可以占險，將何事也。且可飾乎。…」（『左伝』「昭公十二年」4-1337）

〔「何事」は「何をするのか」の意〕

〔惠伯は言った「…そもそも易というものは危険なことについては占ってはならないのです。あなたはいったい何をしようとしているのですか。（下にあつて）恭しくしないことなどできましようか。〕

なお、次の用例における「何」は「問」と直接動目関係を構成するものではなく、動詞「問」の補文目的語における述語であり、疑問目的語前置現象の例外ではないと考える。すなわち次の用例における「問何」の階層構造は「問+ [Ø+何]」と分析すべきものである。

・公都子曰：「外人皆稱夫子好辯，敢問何也。」（『孟子』「滕文公下」1-446）

〔「問何」は「（そのことは）どうしてであるのか」の意〕

〔公都子は言った「他の人はみな先生のことを議論がお好きだと言っております。敢えておた

的話が前置されるという規則の存在自体が否定されることにはならない。

これら疑問代詞目的語前置現象の例外が、如何なる条件によって何故に出現するのかという問題の解明は、本論文では保留しておきたい。ただ、これら例外が生ずるのは、動目構造を構成する疑問代詞または動詞（或いは介詞）が非典型的なものである場合であることが多いという点は、確認しておくに値する。まず、上述(i)~(vi)については、動詞あるいは介詞が非典型的なものである。(i)の准繫辞「為」は、統語機能面では他動詞に属するが、語彙的意味は相当に希薄であり、他動性(transitivity)あるいは動作性(activity)といった典型的な他動詞が有する意味特徴をほとんど備えていない。また、(ii)の介詞「於」「于」は、文法化の程度が非常に高く、動目構造の間にも生起し得るといふ、介詞としては特殊な用法をも備えている。(iii)(iv)の「/如(X)何/」構文、「謂(X)何」については、疑問目的語「何」は第二目的語であるために、動詞と「何」との統語関係は緊密なものではない。(v)の動詞「云」は、その目的語は一般的には引用語句からなる補文であるため、やはり動詞との関係は緊密ではない。(vi)については、「何」がここでは「非疑問用法」といふ疑問焦点の存在しない非典型的な用法に用いられているとみなされる。

以上から、例外の出現には、動詞（或いは介詞）の文法化の程度および動詞（或いは介詞）と疑問代詞目的語との間の結合度の度合いなどが関連していると推定される⁷⁴。

4.2 「/何/-X」疑問フレーズ目的語前置現象

これは、疑問代詞「何」或いは他の単音節疑問代詞が名詞句或いは動詞句などを修飾した統語形式(=「/何/-X」)が目的語となり、動目関係を結ぶ動詞或いは介詞に前置される現象を指す⁷⁵。そして「/何/-X」が動詞目的語となった場合、一般に「之」が「/何/-X」型疑問目

ずねしますが、(それは) どうしてなのでしょう。」]

ただし、次の用例における「何」は動詞「問」の前置目的語である。

・然明曰：「是將死矣。不然，將亡。貴而知懼，懼而思降，乃得其階。下人而已，又何問焉。…」(『左伝』「襄公二十四年」4-1093)

〔「何問」は「何をたずねるのか」の意〕

〔然明は言った「彼(=程鄭)は死ぬことになる。そうでなければ、逃亡するだろう。高位にあると恐れを知り、恐れが生ずると位を下げたいと願うようになり、ようやく相応しい位が得られることになる。(位を下げることなどは)他人の下につくことにすぎないのに、改めて何をたずねるというのか。…〕

⁷⁴漢語における動詞とその目的語の結合度の問題については、孫朝奮・彭睿(2005)等を参照のこと。

⁷⁵上古初期において「/何/-X」疑問フレーズが目的語となった用例は少ない。本論文で資料とした『書経』(西周部分)・『詩経』(西周部分)における用例は、「於」に後置された下例のみである。この語順が、上古初期の一般的語順を反映したものか、「於」の性質により例外語順が生じたものであるのか確定することは難しい。

・瞻烏爰止，於誰之屋。(『詩経』「小雅」「正月」2-666)

〔カラスがどこにとまっているのかを見る。どの家に行ったのだろうか。〕

的語と動詞との間に生起し、目的語を照応指示する機能を果たし、「/何/-X+之+V」という統語形式をとる。原則として目的語を照応指示する有標のマーカが生起するという点では、『惟+X』型目的語の前置現象（本論文 4.4.2）と共通性がみられることになるが、「何-X」が介詞目的語となった場合には、原則的には介詞との間に「之」は生起しないようである（用例(4-21)を参照）。

- (4-16) 公曰：「姜氏欲之，焉辟害。」對曰：「姜氏何厭之有。…」(『左伝』「隱公元年」1-12)

[莊公は言った「(母である) 姜氏がそれ (=弟の共叔段が京の地に先王の定めた制度に合わない長大な城を築いたこと) を望んだのだ。どうして (そのような) 危害を避けることができようか。」(祭仲は) は応えて言った「姜氏が満足することなど ありましようか。…」]

- (4-17) 鄭公曰：「夫事君者，不為外内行，不為豐約舉，苟君之，尊卑一也。且夫自敵以下則有讎，非是不讎。下虐上為弑，上虐下為討，而況君乎。君而討臣，何讎之為。若皆讎君，則何上下之有乎。…」(『国語』「楚語下」524)

[鄭公は言った「国君に仕える際、国の内と外によって異なる行いをしてはならず、国君の盛衰によって異なるふるまいをしてはならない。かりにも (その人を) 国君としたからには、尊卑は (いつでも変わらず) 同じである。その上、そもそも対等の身分より下の者には仇があり得るが、そうでなければ仇にはならない。目下が目上を殺害するのは「弑」とされるが、目上が目下を殺害するのは「討」とされるのだ。まして国君であるからにはなおさらではないか。国君として臣を討ったところで、どんな仇があり得ようか。もし (そのような人が) いずれも国君を仇とするならば、目上と目下にどんな区別があり得ようか。…」]

- (4-18) 蘧啟彊曰：「…君將以親易怨，實無禮以速寇，而未有其備，使群臣往遺之禽，以逞君心，何不可之有。」(『左伝』「昭公五年」4-1269)

[蘧啟彊は言った「…わが君は、(わが国と) 親しいもの (=晋) を憎むものに変え、誠に非礼な (方法) によって敵をすぐにも招きよせようとしておいでです。しかし

しかし本論文は、上古初期においても、「/何/-X」疑問フレーズは、原則として前置されていた可能性が高いと考える。第一には、上例の「於」は、通常は動詞用法と解釈すべきものであるが、その前に動詞が省略された介詞用法であるとも解釈し得るからであり (介詞「於」の目的語は上古中期でも後置される)、第二には、上古初期の層を反映したと思しき他の資料に、前置された用例がみとめられるからである。以下の『逸周書』の用例において、「何寢」は目的語として動詞句「能欲」に前置されていると解釈できる。とはいえ、当該の篇は裘錫圭(1981/1992)や李学勤(1995)が認定する西周以前部分には含まれておらず、上古初期の資料としては信憑性の高いものではないため、確定的とは言えない。

・王曰「…我*來所定天保 [盧文昭校訂「未定天保」], 何寢能欲。」(『逸周書』「度邑」1-471)
[王は言った「…私は天意に従い国都を定めることもしていないのに、どうして眠りたいなどと思えようか。」]

防備は整えておられません。(わが) 群臣を彼ら (=晋に) 送りとどけ、捉えさせることによって、わが君の心が満たされるのであれば、(それが) どうしていけないことがありましようか。」]

- (4-19) 莊子曰：「河上有家貧恃緯蕭而食者，其子沒於淵，得千金之珠。其父謂其子曰：『取石來鍛之。夫千金之珠，必在九重之淵而驪龍領下。子能得珠者，必遭其睡也。使驪龍而寤，子尚奚微之有哉。』…」（『莊子』「列禦寇」4-1061）

[莊子は言った「河のほとりに家が貧乏で葦を織って生計を立てている者がいた。その家の子が（川の）淵にもぐり、千金の（に値する）珠を手に入れた。（すると）父がその子に言った『石を取ってきてそれを打ち砕いてしまえ。そもそも千金の珠は、必ず幾重もの（深い）淵の、黒龍の顎の下にあるものだ。お前がこの珠を手に入れたのは、きっとその黒龍が眠っていた（時に）めぐりあったからだ。もし黒龍が目覚めてしまえば、いったいお前にどんな（身体の）欠片が残っていようか。』…」]

- (4-20) 秦，貪戾之國也，而无親，蠶食魏氏，盡晉國，勝暴子，割八縣，地未⁷⁶畢入而兵復出矣。夫秦何厭之有（哉）。（『戦国縦横家書』第十五章 3-78）

[秦は貪欲・凶暴な国です。親しくするものなどなく、魏国を少しずつ侵略し、晋国を悉く占領しつくし、（韓の）暴鸞を破って八県を割譲させました。それらの土地をまた全部は併合し終わらないうちに、再び（兵を）出しています。そうであれば、どうして秦が（領土の拡張を）満足することなどありましようか。]

- (4-21) 宋穆公疾，召大司馬孔父而屬殤公焉，曰：「先君舍與夷而立寡人，寡人弗敢忘。若以大夫之靈，得保首領以沒；先君若問與夷，其將何辭以對。…」（『左伝』「隱公三年」1-29）

[宋の穆公が病気になった。大司馬の孔父を引見し、かれに殤公 (=與夷) のことを託して言った「先君 (=宣公) は（その子の）與夷をさしおいて私を立てられました。私はそのことを決して忘わけにはいきません。もし大夫たちの力のおかげで、首を保ったまま無事にあの世に行くことができたとしても、（もし與夷を擁立しなければ）宣公が與夷のことを問うたら、（私は）いったいどのような言葉で答えたらよいのでしょうか。…」]

「/何/-X」疑問フレーズ目的語は、原則的には動目関係・介目関係を結ぶすべてが動詞或いは介詞に前置される。前置現象の例外の出現頻度という点では、疑問代詞目的語前置現象より低い。『論語』『孟子』においては、「/何/-X」疑問フレーズ目的語はそれぞれ3例と4例出現し、これらは例外なく前置されている。大部分は「/何/-X_o+之+V」という疑問目的語を照応指示する「之」の生起した統語形式をとるが、1例は「之」が生起していない（用例(4-25)）

⁷⁶ 「○」は原文において字を消去してある個所を表す

- (4-22) 唐棣之華，偏其反而。豈不爾思。室是遠而。子曰：「未之思也，夫何遠之有。」
 (『論語』「子罕」 2-632)
 [「唐棣の花、ひらひらと翻る。豈に爾を思わざらんや。室、これ遠きのみ。」先生が言われた「やはり彼を思っていない。もし本当に彼を思いつめているのならどうして遠いなどということがあろうか。」]
- (4-23) 子欲居九夷。或曰：「陋，如之何。」子曰：「君子居之，何陋之有。」(『論語』「子罕」 2-605)
 [先生が東方の夷狄の地に住まおうとされた。ある人が言った「品のないところですが、このことをどうされるのですか。」先生が言われた「君子がそこに住めば、どうして下品なことがあろうか。」]
- (4-24) 孟子曰：「不仁者可與言哉。安其危而利其菑，樂其所以亡者。不仁而可與言，則何亡國敗家之有。…」(『孟子』「離婁上」 1-497)
 [孟子が言った「不仁である者とは、語り合うことができるだろうか。彼らは危険を安全なもののみなし、災害を利益が得られるもののみなし、身を滅ぼす道を楽しんでいる。不仁であっても語り合うことができるのであれば、どうして(彼らが)国が亡ぼし家を没落させるようなことがあろうか。…」]
- (4-25) 孟子曰：「恥之於人大矣，為機變之巧者，無所用恥焉。不恥不若人，何若人有。」(『孟子』「盡心上」 2-887)
 [孟子が言った「恥じる心というものは人にとって重要である。臨機応変のごまかしをすることに巧みな者は、恥じる心を持つことがないのだ。人に及ばないのを恥とも思わぬ者が、どうして人に及ぶことがあろうか。」]
- (4-26) 齊宣王問卿。孟子曰：「王何卿之問也。」王曰：「卿不同乎。」[趙岐注：「王問何卿也。」](『孟子』「萬章上」 2-728)
 [齊の宣王が卿に関してたずねた。孟子が言った「王はどのような卿についておたずねなのか。」王が言った「卿(の種類)によって異なるということがあるのか。」]

上述の状況は以下の【図表 4-3】のようにまとめられる。

【図表 4-3】『論語』『孟子』における「/何/-X」疑問フレーズ目的語の語順

論語				孟子			
前置		後置		前置		後置	
動詞	介詞	動詞	介詞	動詞	介詞	動詞	介詞
3	0	0	0	4	0	0	0

*最上行は文献名、第二行は目的語の語順、第三行は当該の疑問フレーズ目的語が動詞目的語が介詞目的語かを、最下行は当該の条件に符合する用例数を表す。

上述のように、『論語』『孟子』においては、「/何/-X」疑問フレーズ目的語が動詞に後置された用例はみとめられないが、上古中期漢語において後置の用例が皆無であるとまで断定することは難しい。例えば、下例のごとく一見、後置の用例とも解釈できそうなものが存在するからである⁷⁷。

(4-27) 何謂貴大患若身。吾所以有大患者，為吾有身，及吾無身，吾有[何患]。故貴以身為天下，若可寄天下。（『老子』「十三章」）⁷⁸

〔「大きな患難を重んじること、わが身を重んじるがごとし」とはどのようなことを言うのか。自分に大きな患難があるのということは、自分に（執着すべき）身体があるからだ。自分に（執着すべき）身体がなければ、どのような患難があり得ようか。故に、自分の身体を天下のためにつくすことを重んじるのであれば、天下を託すことができるのである。〕

(4-28) 孟印令秦得其所欲，秦亦令孟印得其所欲，責以償矣，尚有[何責]。（『呂氏春秋』「応言」2-1221）

〔孟印は秦王にその欲するもの（＝土地）を手に入れさせ、秦王もまた孟印にその欲するもの（＝官職）を手に入れさせたのであり、（両者の）責務はそれによって償われている。他にいかなる責務などあろうか。〕

しかし、上の用例(4-27)(4-28)については、疑問目的語と文法関係を結んでいるかにみえる「有」(*wəʔ)が、実は動詞ではなく、副詞「又」(*wəh)の通仮字であると解釈することも、十分に可能であり（魏培泉 1999:288-289:注 20 がすでにその可能性に言及している）、これらを「何-X」疑問フレーズ目的語前置現象の例外とみなすのは、必ずしも適切ではない。いづれにしても、たとえこれらを例外と認定したとしても、そのような用例は極めて稀少で特殊なものであったとは言い得る。

⁷⁷上古初期にも同様の用例がみられる。(4-27) (4-28)と同様に、「有」(*wəʔ)が、副詞「又」(*wəh)の通仮字であると解釈することも可能である。

・王曰：「…昔在盟津，帝休辨商，其有[何國]。…」（『逸周書』「商誓」1-462）

〔王（＝武王）は行った「…昔（私は）盟津の地にあったとき、上帝がよき命令を下し、商に懲罰を加えようとされた。（商という国に）ほかにどんな国があるというのだろう。…〕

⁷⁸この用例における「有何患」という字句は、馬王堆出土の帛書『老子』の中にも見出すことができる（日本語訳は用例(4-27)と同じ）。

・何胃（謂）貴大椀（患）若身。吾所以有大椀（患）者，為吾有身也，及吾無身，有[何椀]（患）。故貴為身於為天下，若可託（託）天下矣。（『老子』〔甲本〕「道經」11）

・何胃（謂）貴大患若身。吾所以有大患者，為吾有身也，及吾無身，有[何患]。故貴為身於為天下，若可橐（託）天下口。（『老子』〔乙本〕「道經」96）

4.3 否定文における代詞目的語前置現象

この現象は、「不」「未」「莫」等の否定詞（否定副詞）が生起した文において、否定詞に修飾された統語構造内の代詞目的語が述語動詞或いは介詞に前置されること、すなわち否定文において代詞目的語が述語動詞或いは介詞に前置されることを指す。

- (4-29) 有子曰：「其為人也孝弟，而好犯上者，鮮矣。不好犯上，而好作亂者，未之有也。…」〔『論語』「学而」1-10〕

〔有子が言った「その人柄が孝行・悌順でありながら、目上に逆らうのを好むような者はほとんどない。目上に逆らうのを好まないのに、乱を起こすのを好むような者はめったに無い。…〕

- (4-30) 子曰：「不患人之不己知，患不知人也。」〔『論語』「学而」1-58〕

〔先生が言われた「人が自分を理解してくれないのは気につけない。人を理解していないのを気につけるだけだ。〕

- (4-31) 子路、曾皙、冉有、公西華侍坐。子曰：「以吾一日長乎爾，毋吾以也。居則曰：『不吾知也。』如或知爾，則何以哉。」〔『論語』「先進」4-797~798〕

〔子路と曾皙と冉有と公西華とが（先生に）陪席していた。先生が言われた「私はお前たちよりも年長のゆえに、誰も私を用いようとしない。（お前たちは）平素『だれも私のことを理解してくれない。』と言っているが、もし誰かがお前たちを理解してくれたら、どのようにするつもりか。〕

- (4-32) 子曰：「莫我知也夫。」子貢曰：「何為其莫知子也。」〔『論語』「憲問」4-1019〕

〔先生が言われた「私を理解してくれるものなどいない。」子貢が言った「どうして先生のことを理解する人がいないのです。〕

- (4-33) 曰：「…予三宿而出晝，於予心猶以為速，王庶幾改之。王如改諸，則必反予。夫出晝而王不予追也，予然後浩然有歸志。…」〔『孟子』「公孫丑下」1-307〕

〔（孟子は）言った「…私は三夜滞在してから昼晝をたち去ったが、私の気持ちとしてはそれでも早すぎたほどで、王がお考え直くださることを心に念じていた。もし王が考え直してくださるのなら、きっと私を呼び戻すにちがいない（と考えていた）。ところが（私が）昼晝をたち去ってからも、（王は）私を追い戻そうとはされなかつたのであり、そこで私は思い残すことなくきっぱりと（国へ）帰る気持ちになったのだ。…〕

- (4-34) 穆公問曰：「吾有司死者三十三人，而民莫之死也。誅之，則不可勝誅。不誅，則疾視其長上之死而不救，如之何則可也。」〔『孟子』「梁惠王下」1-157〕

〔「莫之死」は「彼らのために死ぬ者はいない」意。この「死」は「～のために～する」という他動用法の一種（いわゆる為動用法）〕

〔（鄒の）穆公がたずねて言った「（今度の鄒と魯の衝突で）わが方には役人で戦死

した者は三十三もいたのに、民衆はだれ一人として役人のために命を投げ出したものはなかった。彼ら（＝民衆）を殺そうとすれば、（多すぎて）殺しきれない。（彼らを）殺さなければ、むざむざ上の者が死ぬのを見ていながら救おうとしなかったのである（ので、全く許されないことだ）。いったいどうしたらよからうか。】

- (4-35) 道之大如天，其廣如地，其重如石，其輕如羽，民之所以知者寡，故曰何道之近，而莫之與能服也。近而就遠，何以費力也。（『管子』「白心」2-810）

〔道の大きいことは天のようであり、その広いことは地のようであり、その重いことは石のようであり、その軽いことは羽根のようである。民衆は道と共にありながら、（そのことを）知る者は少ない。故に、どうして道は近くにあるのに、それと共にあって（それに）従うことができるものはいないのか、と言うのだ。（道は）近いのに遠くに（それを）探し求める、どうしてそのような無駄なことをするのか。〕

この否定文における代詞目的語前置現象は『論語』、『孟子』にそれぞれ 12 例、36 例みられる。

例外の出現頻度の点では、疑問代詞目的語前置現象、「/何/-X」疑問フレーズ目的語前置現象に比して明確に多い。下に示した用例は、『論語』、『孟子』にみられる例外である。これらの文では、文中に否定詞が生起していながら代詞目的語が前置されていない。

- (4-36) 子曰：「狂而不直，侗而不愿，忼忼而不信，吾*不知之矣〔定州漢墓本「弗智之矣」〕。（『論語』「泰伯」2-545）

〔驕り高ぶっているのに率直でなく、幼稚であるのに素朴でなく、誠実な様子であるのに信用を重んじない。私はどうしてそのようであるのか分からない。〕

- (4-37) 子曰：「鄙夫可與事君也與哉。其未得之也，患得之；既得之，患失之。苟患失之，無所不至矣。」（『論語』「陽貨」4-1222）

〔先生がいわれた。「さもしい男と共に君に仕えることなど、どうしてできようか。地位を得ないうちには、それを手に入れられないことを気にかけるし、手に入れてしまえば、それを失うことを心配する。失うことを心配することになれば、どんなことでもやりかねなくなる。〕

- (4-38) 孟子曰：「…凡有四端於我者，知皆擴而充之矣，若火之始然，泉之始達。苟能充之，足以保四海。苟不充之，不足以事父母。…」（『孟子』「公孫丑上」1-232~235）

〔孟子は言った「…凡そ四つの芽生えが自分に具わっている者は、それを大きく育てるということを理解してしまえば、ちょうど火が燃え出したばかりのようであり、泉が湧きだしたようである。もしもそれを大きく育てることができれば、天下を安んずることができるほどになるが、もし大きく育てることができなければ、父母に（満足に）つかえることさえできないのである。…〕

(4-39) 曰：「…有諸内，必形諸外。為其事而無其功者，髡未嘗觀之也。…」〔『孟子』「告子下」2-831〕⁷⁹

〔(淳于髡は) 言った「… (このように) 何かが内にあれば、必ずそれは外にあらわれてくるものです。何か事を為して何の功績もあらわれないなどということは、私は未だ嘗て見たことはありません。…」〕

『論語』『孟子』の否定詞文における代詞目的語の語順は、以下の【図表 4-4】【図表 4-5】のようにまとめられる⁸⁰。

【図表 4-4】『論語』の否定文における代詞目的語前置現象

	莫		未		不		弗		毋		未	
	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置
吾	0	0	0	0	2	0	0-	0	1	0	0	0

⁷⁹ 用例(4-39)は、否定詞「未」と動詞「觀」の間に副詞「嘗」が存在する。否定文における他の副詞の存在と代詞目的語との関係については、本稿 16.3.2.3 において論ずる。

⁸⁰ 上古初期の状況は、次のようにまとめられる。

・『書経』(西周部分)・『詩経』(西周部分)の否定文における代詞目的語の語順

	莫		不		勿		弗		無		罔	
	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置
我	1/2	0/0	0/16	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	4/0	0/0	0/0	0/0
予	0/2	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
印	0/0	0/0	1/0	1/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
朕	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	1/0	0/0	0/0	0/0	0/0
汝	0/0	0/0	1/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
爾	0/0	0/0	2/1	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
之	0/2	0/1	0/0	1/1	0/0	2/0	0/0	0/0	0/0	0/1	0/0	1/0
是	0/0	0/0	1/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
時	0/0	0/0	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
茲	0/0	0/0	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
邇	0/0	0/0	0/0	1/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0

* 最左列に示したのは代詞目的語、最上行に示したものは否定詞、上から第二段目の行に示したのが代詞目的語の前置・後置の別。これらが交叉する欄に、当該の否定詞文に当該の代詞目的語が生じた場合の前置・後置の各語順の用例数を示す。

* 「/」は2資料の区分を表す。「1/2」であれば、『書経』(西周部分)の用例が1例、『詩経』(西周部分)の用例が2例あることを表す。

					[以 1 知 1]				[以 1]			
我	1 [知 1]	0	0	0	1 [與 1]	0	0	0	0	0	0	0
予	1 [違 1]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
爾	0	0	0	0	1 [思 1]	0	0	0	0	0	0	0
之	3 [違 2 知 1]	0	6 [見 1 能行 1 思 1 學 1 有 1 有得 1]	2 [及 1 得 1]	0	6 [得 2 節 1 食 1 欲觀 1 {與 1}]	1 [*畔 1]	3 [*得而見 2, *知 1]	0	0	1 [難 1]	0
己	2 [知 2]	0	0	0	3 [知 3]	2 [如 2]	0	0	0	0	0	0
是	0	0	0	0	0	2 [若 2]	0	0	0	0	0	0
茲	0	0	0	0	0	1 [在 2]	0	0	0	0	0	0

* 最左列に示したのは代詞目的語、最上行に示したものは否定詞、上から第二段目の行に示したのが代詞目的語の前置・後置の別。これらが交叉する欄に、当該の否定詞文に当該の代詞目的語が生じた場合の前置・後置の各語順の用例数を示し、さらに[]内に当該の代詞目的語と動目関係を結ぶ具体的な動詞・介詞とその用例数とを示した。例えば、「不」「前置」と「吾」の交叉する欄は「2[以 1,知 1]」であるが、これは「不+吾 o+V」という代詞目的語前置形式が 2 例存在し、そのうち動詞が「以」「知」であるものが各 1 例存在するということを表す。他は類推されたい。

* 表中に示した否定詞および代詞の上古推定音価は以下のようなものである。

否定詞：[m-系]「莫」(*mâk)「未」(*məs)、母」(*mət)、「末」(*mât)、; [p-系]「不」(*pə)、「弗」(*pət)。

代詞：第一人称代詞「吾」(*ŋâ)、「我」(*ŋâi?)、「予」(*la?)、第二人称代詞「爾」(*ne?)、第三人称代詞「之」(*tə)、再帰代詞「己」(*kə?)、指示代詞「是」(*de?)、「茲」(*tsə)。

* []内に示したもののうち{ }を附加したのは、動詞ではなく介詞であるもの。

* 「*」を加えたものは、底本ではなく、定州漢墓本『論語』に拠って判断した用例である。いずれも否定詞「不」と「弗」の相違に関わるもの。元来「弗」であった箇所が、伝世本において「不」に書き換えられた可能性については、大西(1988)による指摘がある。本論文Ⅱ部第十六章(16.1.注 218)を参照のこと。

* 「吾斯之未能信」(公冶長)は否定文における代詞目的語前置現象とはみなさない。また、「可與言而不與之言, *仁不能守之」[定州漢墓本「仁弗守」](衛靈公)は版本上の問題があるため用例に含めない。

【図表 4-5】『孟子』の否定文における代詞目的語前置現象

	莫		未		不		勿		弗		無不	
	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置
我	0	0	0	0	2 [愛 1, 足 1]	0	0	0	0	0	0	0
予	0	0	0	0	1 [追 1]	0	0	0	0	0	0	0
之	13 [敢櫻 1, 禁 1, 能違 1, 能禦 3, 欺 1, 死 1, 為 1, 行 2, 禦 1, 致 1]	0	15 [見 1, 盡 1, 聞 2, 先 1 學 1, 有 8 知 1]	2 [觀 1, {與 1}]	1 [教誨 1]	6 [充 1, 得(亟) 見 1, 將 1, 可知 1, 往見 1, {與 1}]	0	1 [毀 1]	0	0	0	1 [求 1]
是	0	0	0	0	0	4 [若 2, 如 1, 為 c1]	0	0	0	1 [若 1]	0	0

* 表の説明は【図表 4-4】を参照のこと。

* 表中に示した否定詞および代詞の上古推定音価は以下のようである。

否定詞：[m-系]「莫」(*mák)、「未」(*mäs)、「勿」(*mät)、「無」(*ma)；[p-系]「不」(*pə)、「弗」(*pət)。

代詞：第一人称代詞「我」(*ŋâi?)、「予」(*la?)、第三人称代詞「之」(*tə)、指示代詞「是」(*de?)。

* 『詩経』等の上古初期文献から直接に引用した部分は資料としない。

* 「為 c」は「～のために」という意味を表す介詞用法を表すが、ここではその意味を保持しつつ臨時的に述語動詞として用いられたものを指す(「～のためにする」という意味を表す)。

この否定文における代詞目的語前置現象に関する本格的な記述的研究に周廣午(1959)が

ある。周氏は先秦十六文献を中心として、先秦から六朝・唐代文献までにおよぶ膨大な資料における当該現象の悉皆調査を行った上で、代詞目的語の語順と否定詞および代詞目的語の種類との関係に着目しつつ分析を行い、以下のような傾向が存在すると指摘した(周廣午 1959:180)⁸¹。

- (i) 「不」字文は、代詞目的語後置文の用例数が、前置文のその三倍近く存在し、(数的に)優勢である。
- (ii) 「未」字句および「莫」字句は、前置文の方が優勢であるが、後置文も相当数みとめられる。
- (iii) 全体の(通時的な)変遷傾向について言えば、「不」字文の代詞目的語の位置は、前置・後置が同時に並存する状況から後置に帰していく趨勢にあり、先秦末期に到ると基本的には後置語順になったと言ってよい。しかし「莫」字文、「未」字文などの代詞目的語の位置はこれとは異なり、基本的には前置を保持したまま継承されていた。
- (iv) その他の「弗」字文、「勿」字文、「毋(無)」字文などの用例は、いずれも後置が前置よりも多く、かつその差も相当に大きい。

周氏の指摘した上述の傾向は非常に重要であるが、しかしあくまでも傾向であって前置現象の生起条件とは言い得ない。本論文は、この否定文における代詞目的語前置現象は、当該の否定文が表す事態の事象構造と深く関係していると考え。予め結論から述べると、当該の否定文が非有界的事態を表す場合には前置現象が生ずるが、それが有界的事態を表す場合には後置の語順をとる、というのが原則的な生起条件だと考える。ただし、この現象には、以上の原則だけでなく、統語レベルでの条件も関係しており、当該の否定文が非有界的事態を表す場合でも、一定の条件のもとでは後置の語順となることがあるなど、その具体的な生起条件は複雑であったと考える。以上の説を提出した根拠については、本論文Ⅱ部・第十六章において詳しく論ずることにしたい。

⁸¹ 原文は以下のとおり。

- (1) 在否定詞“不”字的句子裏，代詞賓語順序句，比逆序句的數量幾乎多到三倍；竟佔優勢。
- (2) 在否定詞“未”字和“莫”字的句子裏，逆序句式佔最大優勢，不過順序句也有相當的數量。
- (3) 就整個的發展傾向講，“不”字句的代賓位置，是由順序逆序同時並存而歸趨於順序；到了先秦末期，可說基本上順序了。那“莫”“未”等字句的代賓位置，卻是相反的，基本上是保持著逆序句式而繼承下來的。
- (4) 其他如“弗”“勿”“毋(無)”等字的句例，都是順序的多於逆序的，同時距離還相當大。

4.4 その他の目的語前置現象

4.4.1 代詞目的語「是」の前置現象

上古中期漢語では、疑問代詞以外の代詞が目的語を担った場合、否定文に現れる場合を除いては、名詞目的語と同様に原則として述語動詞或いは介詞に後置される。ところが裘錫圭(1979)は、代詞「是」が目的語となった場合については、①西周・春秋時代の金文では、「是」が目的語となった(或いは目的語となったかのような)二十余の例文において、目的語「是」がいずれも前置されており、②凡そ時代の確かな西周・春秋時代の作品(例えば『詩経』と『書経』における時代の確かな各篇)においては、目的語として用いられた「是」のすべてが前置されている、という二点を指摘したのである。そして求氏は、これらの事実に拠りつつ、西周・春秋時代(但し春秋晩期は或いは除外せねばならないかもしれないとする)において目的語「是」が目的語となった場合、必ず動詞或いは介詞の前に置かれたという規則を見出すことができると指摘する(裘錫圭 1979:441)。

裘錫圭(1979)の挙げた言語事実は信頼性のあるものであり(用例(4-40)など)、本論文も上古初期或いは上古中期初頭の特定の方言では、目的語の「是」が前置されるという現象が存在した可能性は排除できないと考える。しかし、少なくとも上古中期漢語の『論語』『孟子』の段階においては、「是」が目的語となった場合でも、その多数は動詞或いは介詞に後置されており、裘氏の主張する規則は当て嵌まらない。すなわち、『論語』『孟子』においては、介詞「以」の目的語となった場合には多くが前置されるものの⁸²(用例(4-41))、他の動詞・介詞の目的語となった場合にはほとんどが後置され、前置された用例は数例に止まるのである(用例(4-42)(4-43)はそのような稀少例の一つ)⁸³。介詞「以」の目的語となった以外の場合に前置される条件は明らかではないが、いずれも目的語に焦点が置かれるような文脈に生起しており、上古中期では何らかの談話的、語用論的条件を満たした場合のみ前置されたものと考えられる。

(4-40) 葛之覃兮，施于中谷，維葉莫莫。是刈是漙，為絺為綌，服之無斃。(『詩経』「国風」「周南」「葛覃」 1-19)

[葛の蔓は谷中に延びて、その葉はくろぐろと茂る。これを刈り、これを煮て(糸とって)、目の細かい布を織り、目の粗い布を織る。これをいつまでも厭うことなく着る。]

⁸² 「是」が介詞「以」の目的語となった場合、前置の「是以」の用例は、『論語』では2例、『孟子』では16例みられ、後置の「以是」の用例は、『孟子』に1例みられるだけである(『論語』には用例なし)。

⁸³ 「是」が介詞「以」以外の目的語となったとみなし得る確実な用例は、『孟子』に5例みとめられるだけである(『論語』には用例なし)。いずれも前置目的語「是」がその直後に「之」を伴った形式である。

(4-41) 子貢問曰：「孔文子何以謂之文也？」子曰：「敏而好學，不恥下問，是以謂之文也。」（『論語』「公治長」1-325）

〔子貢が（孔子に）たずねて言った「孔文子はどうして『文』と（いう諡で）呼ぶのでしょうか。」先生は言われた「聡明で学を好み、下の者にたずねるのを恥としなかった。そのために彼を『文』と呼ぶのだ。〕

(4-42) 徐子曰：「仲尼亟稱於水，曰：『水哉，水哉！』何取於水也？」孟子曰：「原泉混混，不舍晝夜。盈科而後進，放乎四海，有本者如是，是之取爾。…」（『孟子』「離婁下」2-563）

〔徐子（＝徐辟）がたずねた「孔子は何度も水を称えて『水よ、水よ！』と言われましたが、水からどんなことを（教訓として）取っておられたのでしょうか。」孟子は言った「水源のある水は滾々と流れて、昼夜を問わずとどまることがない。窪んだ所があればそれを満たしてから先へ進み、海まで流れていく。およそ源があるものはこのようなのであり、（孔子は）まさにこの点を（教訓として）取られたのである。…〕

(4-43) 咸丘蒙曰：「…詩云：『普天之下，莫非王土；率土之濱，莫非王臣。』而舜既為天子矣，敢問瞽瞍之非臣，如何。」曰：「是詩也，非是之謂也；勞於王事，而不得養父母也。曰：『此莫非王事，我獨賢勞也。』…」（『孟子』「萬章上」2-637）

〔咸丘蒙が言った「…『詩經』に『あらゆる天下で、王の土地でないものはなく、地の果てに至るまでも、王の臣下ではないものはない』とあります。舜はすでに天子となっていたのです。敢えてお聞きしますが、瞽瞍が臣下ではないというのは、いったいどういうことなのでしょう。孟子は言った「この詩はそのようなことを言ったものではない。（作者は）ながく国家の事業に苦しめられ、父母を養うことができなくなってしまったのである。（この詩は）『これら（の労役）はどれも王の事業でないものはないのに、私だけがこれほどまで苦しめられるとは』ということを使ったものである。…〕

4.4.2 「惟+X」型目的語の前置現象

この現象は、焦点を明示する機能を有する「惟」「唯」などを伴ったフレーズ（主に名詞句）が目的語となり、動詞或いは介詞に前置されたものである。この目的語はしばしば「之」「是」などの代詞に照応指示される。

(4-44) 孟武伯問孝，子曰：「父母，唯其疾之憂。」（『論語』「為政」1-83）

〔孟武伯が孝についてたずねた。先生は言われた「父母にはただその子供の病気のこ

とだけを心配させるようにしなさい。』⁸⁴

4.4.3 「之」「是」などに照応指示された目的語の前置現象

上古中期において上述した条件には当て嵌まらないにも拘わらず、目的語がそれを照応指示する「之」或いは「是」を伴って、動詞或いは介詞に前置されることがある。

(4-45) 及漢，楚康王卒。公欲反。叔仲昭伯曰：「我楚國之為，豈為一人行也。」(『左伝』「襄公二十八年」3-1152)

〔(襄公が) 漢水まで行ったときに、楚の康王が亡くなった。襄公は帰ろうとしたが、叔仲昭伯が言った「我々は楚國のためにしているのです。まさか(楚王) 一人のために来たというのでしょうか。〕

上述した目的語前置現象のうち、疑問代詞目的語前置現象(本論文4.1)と「/何/-X」疑問フレーズ目的語前置現象(本論文4.2)は、目的語が疑問詞(=疑問代詞・疑問フレーズ)であることを生起条件とする統語レベルの現象であるとみなしてよい。目的語が前置される頻度が非常に高く、前置の例外は存在するものの、それらの例外が何らかの文法条件に符合する場合にのみ生じたものであることが看取されるからである。本論文では、これら二種の目的語現象を併せて「疑問目的語前置現象」と称する。

一方、「否定文における代詞目的語前置現象」については、本論文は、当該の否定文が表す事態の事象構造という意味的要素と深く関係しており、基本的には統語レベルでの規則ではないと考えている(第十六章を参照)。また、「その他の目的語前置現象」としてまとめた三種の目的語前置現象も、少なくとも上古中期の段階では、やはり統語レベルでの規則ではないと考えられる。以上の点から、疑問目的語前置現象は、上古中期漢語の体系において、他の目的語前置現象とは異なる位置を占めていると言えよう。

4.5 前置疑問目的語の統語的位置に関する問題

本章では上古中期漢語における主要な目的語前置現象の具体的な用例および生起条件などについて紹介してきた。ここでは、『論語』『孟子』における前置された疑問目的語の統語的位置について、先行研究を参照しつつ整理を加えた結果を提示することにより、本章のまとめとしたい。

上古中期の疑問代詞目的語の統語的位置については、魏培泉(1999)、馮勝利(1994)(2000)等で論じられている。本論文はそのうち魏培泉(1999)の研究が詳細であり、かつ言語事実に符

⁸⁴「父母唯其疾之憂」の「其」が何を指すかについては古くより二系統の説ある。一つは、父母自身を指すとする『論衡』「問孔篇」の王充説、及び『淮南子』「説林訓」の高誘説、もう一つは、父母の子を指すとする馬融注にみられる説である。本論文は、大西(2019:272-273)の議論を踏まえ、後者に従う。

合していると考え。魏氏は、GB理論の枠組みを利用し、上古中期の疑問代詞・関係代詞・量化子(quantifier)といった生成文法で言う「演算子」(operator)の統語的位置、および焦点の位置について検討を加えた上で、これらの演算子の統語的位置には共通点が見出されること、しかし同時に相違点も存在することを指摘する⁸⁵。具体的には、魏氏はまず関連副詞(「亦」「又」「尚」「且」「猶」「乃」「焉」「遂」等)と法相副詞(modal adverb)(「果」「固」「誠」「信」「實」「其」「將」「且」「殆」「庶」「庶幾」「意」「意者」「或者)の二類の副詞について、これらと主題・主語及び述語との統語的位置の関係を検討し、その上で、これらの副詞の位置を基準としながら、疑問代詞目的語および否定文における代詞目的語の統語的位置について次のように整理している(魏培泉 1999:267~270)。

- (i) 疑問代詞目的語が前置される場合、それが単独の疑問代詞であるのか疑問代詞を含むフレーズであるのかに拘わらず、(同一文中に否定詞があるとき)必ずそれ(松江注: =否定詞)を超えてその前まで移動する。すなわち前置された疑問代詞目的語が否定詞の後に位置する用例はみとめられない。この点からすると、疑問代詞目的語の移動位置は、否定文の代詞目的語よりもさらに前方であることになる。
- (ii) 疑問代詞目的語は介詞句の前にも移動し得る⁸⁶。一方、否定文の動詞目的語についてはそのような用例はみとめられない。
- (iii) 否定文の代詞目的語と同じように、疑問代詞目的語も法相動詞(modal verb)(「能」「得」「敢」「肯」「嘗」など)及び控制動詞(control verb)(「忍」「知」など)の前に位置することができる。
- (iv) いくつかの副詞(例えば関連副詞「亦」「又」「尚」、法相副詞「其」「將」「且」など)については、疑問代詞目的語がこれらを超えて前置されることはできないが、否定文の代詞目的語もこれらを超えることはできない。

疑問代詞目的語の位置についての魏氏の結論は「疑問代詞は移動したか否かに拘わらず、最後は動詞の前に位置しなければならず(それ自身が述語であるものは考慮しない)、かつ否定詞の後には位置することができない。語彙的意味を備えた語で疑問代詞の前に位置し得るのは、一般に主題と主語だけである。さらに疑問代詞と主題・主語との間に存在し得るのは、通常は文副詞だけであり、このうち最も常見されるものは関連副詞と法相副詞である。疑問代詞主語と疑問代詞目的語は、この点での振舞いが大体一致している。たとえ前者の統語上の位置が後者よりも高いと証明できる証拠があったとしても、である」(魏培泉 1999:284)

⁸⁵魏培泉(1999:285)は先秦漢語の文の構成要素の前後関係について次のように結論する。

題目(主題、主語) > 演算子(疑問代詞、関係代詞、量化子) > その他(動詞及び他の修飾語或いは補充語)。

⁸⁶魏培泉(1999:290)は、介詞句のうち「以」句について、疑問代詞がそれを超えて前置された例がみとめられること、しかし「於」句については、疑問代詞がそれを超えて前置された例はみとめられないことを指摘する。

⁸⁷というものである。

魏氏のこの結論は、本論文が『論語』『孟子』の疑問目的語に対して行った悉皆調査によっても支持される。下に示したのは、『論語』『孟子』において疑問目的語が介詞句や各種の副詞と共に起した用例である。

(4-46) 曰：「梓匠輪輿，其志將以求食也；君子之為道也，其志亦將以求食與。」曰：「子何以其志為哉。…」(『孟子』「滕文公下」1-429)

〔(彭更は) 言った「大工や車輪・車台工については、(その職につく) 動機がそれによって食を求めるところにあります。君子が道を行うというのも、その動機はやはり食を求めるところにあるのでしょうか。」(孟子が) 言った「お前は人の(行いの) 動機ばかり論じてどうするのか。…」〕

(4-47) 對曰：「…王如好貨，與百姓同之，於王何有。」(『孟子』「梁惠王下」1-137)

〔(孟子は) 答えて言った「…王がもし財貨を好んでも、民衆と一緒にそれを享受されるのであれば、王政を行うのにどんな不都合がありますか。』〕

(4-48) 子路曰：「衛君待子而為政，子將奚先。」子曰：「必也正名乎。」(『論語』「子路」4-885)

〔子路が言った「衛君が先生に頼んで政治を任されたら、先生は何を先になさるおつもりですか。」先生は言われた「きっと名分を正すだろう。』〕

(4-49) 子曰：「人而無信，不知其可也。大車無輓，小車無軌，其何以行之哉。」(『論語』「為政」1-126)

〔先生が言われた「人として信用を重んじなければ、どうしていけばよいのか分らない。牛車に輓(=輓の前端に横木をとめる差し込み器具)がなく、馬車に軌(=輓と同様、輓の前端に横木をとめる器具)がなければ、いったいどうやってそれを動かすことができようか。』〕

(4-50) 衛公孫朝問於子貢曰：「仲尼焉學。」子貢曰：「文武之道，未墜於地，在人。賢者識其大者，不賢者識其小者。莫不文武之道焉。夫子焉不學。而亦何常師之有。」(『論語』「子張」4-1335)

〔衛の公孫朝が子貢にたずねて言った「仲尼は誰のところで学んだのか。」子貢が言った「周の文王、武王の道は、決して全く滅びたのではなく、世に存在しています。賢明な者はその重要な内容を理解しており、賢明でない者も枝葉末節のことは理解しています。文王、武王の道のないところなどありません。先生が学ばれなかったことがありますでしょうか。それゆえ、その上どうして誰か決まった師などがありまし」〕

⁸⁷原文は以下のとおり。

疑問代詞無論是否經過移位，最後都得位在動詞前(本身就是謂語者可不論)而且不能在否定詞後。具有詞彙意義的詞能在疑問代詞前的一般只有主題及主語，而能介乎疑問代詞和主題、主語間的通常也只有全句副詞，最常見的是關連副詞和法相副詞。疑問代詞主語和疑問代詞賓語在這方面的表現大體一致，即使有證據可以證明前者在句構上位置比後者高。(魏培泉 1999:284)

ようか。』]

上述の状況は以下のようにまとめられる。

【図表 4-6】『論語』『孟子』における疑問目的語の統語的位置

(i) 疑問代詞が動詞目的語となった場合				
主題・主語	+ 「於」句 「將」 「亦」 「又」 「其」	+ 疑問代詞目的語	+ 「以／用」句	+ <u>述語動詞</u>

(ii) 疑問代詞が介詞目的語となった場合				
主題・主語	+ 「其」	+ 疑問代詞目的語	+ <u>介詞</u>	+ 述語動詞句

(iii) 「何/-X」型疑問フレーズが動詞目的語となった場合				
主題・主語	+ 「亦」	+ 「何/-X」疑問フレーズ目的語	+ 之	+ <u>述語動詞</u>

*各枠は統語的位置を表すが、(i)～(iii)のそれぞれが独立したものと理解されたい。よって上下間の枠の位置が一致していても、その中の統語成分が同一の統語的位置を占めることを表すわけではない。

*疑問目的語は□で囲み、それと直接に文法関係を結ぶ動詞・介詞に_____を付した。

*『論語』『孟子』においては、補文の述語動詞目的語となった疑問代詞が補文の外まで前移した用例は存在しない。

疑問目的語の位置について、最後に一点補足しておきたい。それは疑問目的語と助動詞或いは否定詞との統語的な位置関係についてである。『論語』『孟子』では、動詞目的語となった疑問目的語が助動詞或いは否定詞と同一文中に共起する用例は存在しないが、他の上古中期文献にはそのような用例もみとめられる。その場合、疑問目的語は、以下のごとく原則として助動詞・否定詞に前置されるのである。

(4-51) 管仲對曰：「昔者臣盡力竭智，猶未足以知之也，今病在於朝夕之中，臣奚能言。」
桓公曰：「此大事也，願仲父之教寡人也。」管仲敬諾，曰：「公誰欲相。」公曰：「鮑叔牙可乎。」（『呂氏春秋』「貴公」1-45）

〔管仲は応えて言った「以前、私は力を尽くし知恵をしぼりましたが、それでもそのような人（＝国家を託すべき人）を知るに至っていません。今、（私の）病は明日をも知れぬ状態にあります。その私がどうして（そのような事）議論できましょ

うか。」桓公は言った「これは大事なのだ。願わくはこの私にお教えいただきたい。」管仲は恭しく応諾して言った「わが君はいったい誰を宰相とすることを望んでおられるのですか。」桓公は言った「鮑叔牙でよいであろうか。』」

- (4-52) 王送知罃，曰：「子其怨我乎。」對曰：「二國治戎，臣不才，不勝其任，以為俘馘。執事不以鼙鼓，使歸即戮，君之惠也。臣實不才，又誰敢怨。」(『左伝』「成公三年」2-813)

〔(楚の) 共王は晋に帰ることになった知罃を見送って言った「あなたはおそらく私を怨んでいるでしょうね。」(知罃は) 応えて言った「(晋と楚の) 両国が干戈を交えました。わたしは不才にして、任を果たすことができず、(あなたたちの) 捕虜となってしまいました。(ところが)(貴方の) 役人たちは(わたしを殺して) 血を太鼓に塗るということはせずに、帰国して処刑を受けるようにしてくださいました。これはあなたの恩恵です。わたしは全くの不才でして、いったい誰を怨んだりできましようか。』〕

- (4-53) 季文子曰：「…在周頌曰：『畏天之威，于時保之。』不畏于天，將何能保。…」(『左伝』「文公十五年」2-614)

〔季文子は言った「…周頌にも『天のご威光を恐れ敬い、ここにこれ(=福祿)を保つ』とある。天の威光を恐れ敬わなければ、いったい何を保つことができようか。…」〕

- (4-54) 左尚謂司馬悍曰：「周不聽，是公之知困而交絶於周也。公不如謂周君曰：『何欲置』」(『高誘云：置，立也。欲立誰為太子也。令人微告悍，悍請令王進之以地』)(『戰國策』「西周」「謂齊王曰」129)

〔左尚が司馬悍に言った「(そのようにして) もし周が聞き入れなかったら、あなたは追い詰められ、西周との交わりを断たざるを得ないでしょう。むしろ周君にこのように言うてはどうでしょうか『どなたを(太子に) 立てようとされていますか。誰かを通じてこっそり私に教えてください。私が齊王にお願いして、その方に土地を送るようにしてもらいましょう。』〕

- (4-55) 林不狃之伍曰：「走乎。」不狃曰：「誰不如。」曰：「然則止乎。」不狃曰：「惡賢。」徐步而死。(『左伝』「哀公十一年」4-1660)

〔林不狃の部下が言った「逃げますか。」林不狃は言った「私が誰に及ばないというのか。」(部下が) 言った「それなら止まりましようか。」林不狃は言った「(そんなことをしても) 何になろうか。」(そして) ゆっくりと歩いて退き、戦死した。〕

- (4-56) 史嚳曰：「虢其亡乎。吾聞之，國將興，聽於民，將亡，聽於神。神，聰明正直而壹者也，依人而行。虢多涼德，其何土之能得。」(『左伝』「莊公三十二年」1-253)

〔史嚳は言った「虢は滅びるでしょう。私は、国がまさに盛んになるとときには、民衆(の声) に従い、国がまさに滅びようとするときには、神(の声) に従うものだと聞いています。神は英名で心正しくあられ、専一にして二心がないものであって、人(の行いに) 応じて事を行うのです。虢は徳を欠くことを多いのに、どうして土地

を得ることができましようか。]

(4-57) 故知知一，則若天地然，則何事之不勝，何物之不應。(『呂氏春秋』「論人」1-162)

[よって道を得る（道理）を悟れば、あたかも天地と同じようである。そうすれば、いったいどのような事をなし遂げられず、どのような物に対応できないであ
らうか。]

第五章 上古漢語における目的語前置現象発生要因

本論文は、疑問目的語の語順変化メカニズムを明らかにすることを目的とするものであり、上古漢語において疑問目的語が何ゆえに動詞・介詞に前置されたのかという前置現象そのものの発生要因の解明は、その任に含めていない。しかしこの問題は疑問目的語の語順変化と全く無関係ではあり得ないため、本章において目的語前置現象の発生要因に関する先行研究を紹介すると同時に、現時点でのこの問題に対する本論文の見解を示しておきたい。

上古漢語における目的語前置現象——疑問目的語前置現象や否定文における代詞目的語前置現象などがその中心である——の発生要因について議論する際、通時的な観点と共時的な観点をいずれからの解釈も可能である。さらに、以下にみるようにこれら二種の観点を併用した解釈も提唱されている。

5.1 通時的観点からの解釈

この立場に立つ研究者に王力、俞敏、西田龍雄、Nicholas C. Bodman などの諸氏がいる。

王力(1958/2004:413-426)は、上古漢語において目的語が動詞の前に位置するという構造は、特定の条件の下でのみ許容されるのであり、概括的に言えば、その条件は前置目的語が代詞でなければならないことであると指摘している。その上で、「原始時代の漢語は、おそらく以下のような状況であったのだろう。代詞が目的語となる場合、本来はその通常的位置は動詞の前であった（フランス語と同じように）。ところが先秦時期になると、言語の変遷により三種の状況に分化したのである」⁸⁸と述べている。王氏がここで言う先秦漢語の三種の状況とは、次のようなものである。

第一には、旧形式が消失してしまい、若干の痕跡をとどめているにすぎない状況である。これには「民獻有十夫予翼」(『書経』「大誥」3-407)〔ここに賢者十人がいて私(=わが周)を補佐している〕などの「代詞+動詞」という形式、或いは「葛之覃兮……是刈是獲，為絺為紵」(『詩経』「国風」「周南」「葛覃」1-19)〔葛の蔓は…それを刈り、これを煮て(糸とって)、目の細かい布を織り、目の粗い布を織る。〕などの「是+動詞/介詞」という形式、さらに「山木自寇也、膏火自煎也」(『莊子』「人間世」1-186)〔山の木は(用途があるために)自らに對してあだをなし、油の火は自らを追い詰める〕などの「自」を代詞目的語として動詞の前に置く形式などが含まれる。王氏は、これらが痕跡とみなされる理由として、先秦時期に至ると固定的形式を除いて一般に用いられなくなってしまったことをあげる。

⁸⁸原文は以下のとおり。

在原始時代的漢語裏，可能的情況是這樣：代詞作為賓語的時候，正常的位置本來就在動詞的前面（像法語一樣）。到了先秦時代，由於語言的發展，這種結構分為三種情況：

第二には、完全に旧形式を保存している状況である。この状況が成立する条件は二つある。一つめの条件は、目的語が疑問代詞だというものであり、二つめの条件は、目的語は名詞であるけれども、それを照応指示（原文「複指」）する代詞があるというものである。例えば「日居月諸，下土是冒」（『詩經』「邶風」「日月」1-144）〔太陽よ、月よ、地上を（光で）照らし覆う〕のようなものがそれであるが、その他、代詞でなく介詞が照応指示の機能をはたしているものも含まれる。

第三には、旧構造と新構造とが同時に存在している状況である。すなわち「胡能有定。寧不我顧」（『詩經』「邶風」「日月」1-144）〔（あの人）はどうして落ちていらられるのでしょうか。なんと私のことを気にかけてもいない〕、「爾不許我，我乃屏璧與珪」（『書經』「金縢」3-395-396）〔…おまえ（＝占いの用いる亀）がもし私（が願いを實現することを）を許さないのであれば、私はその璧と珪（＝玉製の礼器）とを捨ててしまおう〕のような状況である。

上述の王氏の説は、原始漢語における SOV 構造の生起を目的語が代詞の場合に限定しており、原始漢語における一般の名詞目的語の語順までも SOV 語順であったかどうかについては明確には述べていない。しかしながら少なからぬ研究者、とりわけシナ・チベット語比較研究に従事する研究者は、原始漢語はおそらく SOV を基本語順とする言語であり、上古中期にみられる疑問代詞目的語前置現象や否定文における代詞目的語前置現象などの代詞目的語前置現象を、原始漢語の痕跡だとみなしている。

例えば、西田(2000)は、秦漢漢語（本論文で言う上古中期・後期漢語）の来源は SVO 型の「商（殷）語」と SOV 型の「周語」との二系統に分けられると考える。その上で、秦漢漢語は、SOV 型の周語と SVO 型の商（殷）語とが合併し、商語の影響により SVO 型を示すようになったとする仮説を提出した。西田氏は、この説を踏まえて、秦漢漢語にみられる否定文における代詞目的語前置現象は周語の SOV 型語順が保存されたものとみなすのである（西田 2000:76）。Bodman(1980:40)も西田氏の見解に賛同しており⁸⁹、上古中期漢語の否定文における代詞目的語前置現象は、原始漢語における SOV 型語順の残存だとみなすべきだと考えている。

梅祖麟氏も原始漢語は SOV 型の言語だったと考えている。梅祖麟(1997)は Norman(1988)の提示した七つの言語類型——①形態素が単音節であるか、②声調を有するか、③複子音声母を欠くか、④形態変化を欠く、或いは形態変化が貧弱であるか、⑤量詞を用いなければならないか、⑥A-N（形容詞一名詞）型の語順か、⑦SVO 型の語順か——に基づいて、アジア地域における十八種の言語を検討した上で、漢語については、原始（原文「遠古」）漢語と現代漢語のそれぞれに対して検討を行い、語順の問題にも言及している。そして先秦漢語には、①目的語を担う疑問詞の前置および否定詞の後の代詞目的語の前置、②前に否定詞がない場合における目的語の前置（最も多い用例は目的語が代詞「是」「之」により照応指示

⁸⁹しかし、上古漢語（OC）の来源とその形成過程の問題については、Bodman 氏の見解（Bodman1980:40）と西田氏のそれ（Nishida1976、西田 2000）とは、異なるところがある。

されたもの)、③介詞「於」「焉」の介詞目的語に対する後置、といったような SOV 型の痕跡がみられると主張する。このうち①が本論文で言うところの疑問目的語前置現象と否定文における代詞目的語前置現象に相当することになる。

5.2 通時的観点と共時的観点を併せた解釈

この立場にたつ研究者に、兪敏氏、馮勝利氏などがある。兪敏(1981:81-82)はシナ・チベット比較言語学の観点から、次のように指摘する。

原始漢語とチベット語とはどちらもシナ・チベット祖語の特徴を保存している。すなわち、目的語が前で動詞が後ろであり、中心語が前で修飾語が後ろである。漢民族が中原地域に進出した後、なぜであるのかは分からないが（被征服民族の影響か？）語順がひっくり返ってしまったのだ。（そして）目的語が強調される場合だけに、古い語順が保存されたのである。代詞は出現頻度が高いため、代詞を用いた文は保守性を備えている。目的語自体がこの保守しようとする力の影響を受けただけでなく、その後ろの修飾語（名詞・代詞を指す）までも共に保存されてきたのであった！⁹⁰

兪氏は、目的語前置現象について通時的な観点から解釈するだけでなく、上古漢語では目的語が強調された場合にのみ前置語順をとることも指摘している。ここから、兪氏の説は、通時的観点と共時的観定の双方を併せた解釈とみなすことができる。

馮勝利(2000)も原始漢語は SOV 型であり、後に周秦（上古中期）漢語の SVO 型へと変化したのだと考えている。そしてこの語順変化が発生した順序は、目的語の性質により決定されたのだとする。具体的には、①実質語（原文「實詞」）、②代詞、③否定詞+代詞、④疑問代詞、の順に語順変化が生じたと考えるのである。馮氏の説の特徴は、「ストレス位置の転移」という観点から語順変化のメカニズムを解釈する点にある。馮勝利(2000:222～223)は次のように主張する。

SOV から SVO に至る変化は、普通ストレスが動詞の左側から動詞の右側へと転移したことを意味する。…（中略）…この点を理解すれば、どうして実質語と代詞とがこの変化のなかで異なる状況を呈したのか、容易に理解することができよう。なぜな

⁹⁰原文は以下のとおり。

原始漢語跟藏語都保留漢藏母語的特點：止詞在前、動詞在後；中心詞在前、修飾語在後。漢人入中土以後、也不知道為什麼（受被征服的民族影響?），詞序演變得顛倒過來了。只有在止詞遇上強調的時候，老詞序才保存下來。代字出現頻率高，所以用代字的句子更保守。不光止詞本身受這股保守力量影響，連它後頭的修飾語（指名代詞）也一塊保存下來了！

ら代詞は発音の点で一般に実質語よりも軽読される。目的語の位置の代詞はとりわけそうである。これは人類言語の一般的特徴なのであり、代詞は韻律面では「弱形式」(weak form)と呼ばれる。よってストレス位置の転移の際、実質語は韻律上の「重形式」(strong form)であるため、すぐに後置され、SVO 言語の「後重」(後ろが重い) という要求に対応することになったのである。しかしながら、代詞は「軽い」ために、反応は鈍く、右側(松江補：動詞の右側)への移動は自立語よりも遅れたのである。⁹¹

馮氏はこのような考えに基づいた上で、疑問代詞目的語前置現象と否定文における代詞目的語前置現象について分析を行い、これら二種類の前置現象は、再分析の操作を経た後、SVO 型の周秦漢語体系において別々の共時的現象として出現することになったのだと考える。注意すべきは、馮氏が周秦漢語体系においてこれら二種の前置代詞の統語的位置が異なると考えている点である。すなわち、疑問代詞の前移は一種の語用論レベルでの「焦点移動」とみなされ得るものであり、前置疑問代詞は V' の中に位置しているが、否定文における代詞の前移は韻律レベルの要求により当該の代詞とその前にある否定副詞とが一つに合併したために発生したものであり、この前置代詞は V' の中に位置していないということである。この馮氏の説については、次章(本論文第六章)において、詳しく検討することにした。

5.3 共時的観点からの解釈

上述の研究者たちは原則的には上古中期にみられる各種の目的語前置現象が、原始漢語における SOV 型語順と関連があるという立場をとっている。しかしこのような通時的な視点を導入する考えに反対し、純粹に共時的な文法現象として各種の前置現象を解釈しようとする立場もある。

例えば、鈴木(1976)は、発話の重点の「強調表現」という観点から上古漢語における各種の目的語前置現象を解釈する説を提出している。鈴木氏は、「漢語においては、その発話の中において話し手がその重要な点としているところを、特に強く表そうという表現法が、きわめて発達して来ている」(鈴木 1976/1994:71)との認識のもと、上古漢語において発話の重点を強調する表現法には、前置、後置、その他、の三種があったとした上で、疑問代詞目的語前置現象については、「疑問の文において、その疑問の中心となる疑問詞を強く表そうとするために、それで特に通常の語順を変えて、その疑問代詞を強調することが多かった」

⁹¹原文は以下のとおり。

從 SOV 到 SVO 的變化意味著普通重音從動詞的左邊轉到了動詞的右邊。…了解了這一點，我們不難理解為什麼實詞跟代詞在這場轉變中會出現不同的情況。因為代詞在讀音上一般比實詞輕，實語位置上的代詞尤其如此。這是人類語言的一般特點，所以代詞在韻律上叫做「弱形式」(weak form)。因此，在重音轉移的時候，實詞是韻律上的重形式 (strong form)，所以率先後置去滿足 SVO 語言後重的要求。然而代詞因為輕，所以反映遲鈍，因而右移比實詞慢。

(鈴木 1976/1994:76) ことによると解釈し、疑問代詞目的語を前置することによる強調表現とみなす一方、否定文における代詞目的語前置現象は、「賓語に対する動作の方を強調するために、その賓語が代詞である場合、その基本構造としての語順を変えて、その強調しようとする動詞の方を後置するということも、よく行われていた」(鈴木 1976/1994:89) のだと解釈し、通常は重読されることのない代詞が目的語となった場合に、動詞の方を後置により強調した表現であるとみなしている。なお、鈴木氏は後者の動詞の後置による強調が肯定文にあまりみられないのは、動賓関係(=動目関係)である当該の構造が、動詞の後置によって主述関係との間に曖昧性が生じるためであろうとも述べている。

徐傑・李英哲(1993)は、漢語における「疑問」「否定」そして「焦点(focus)」といった非線形的文法範疇(原文「非線性語法範疇」)に関する諸問題を論じたものである。そのなかで各言語において焦点が文法化される形式の類型に注目し、現代漢語のように焦点標識の付加により焦点位置を表示する第一類、ハンガリー語や上古漢語のように焦点成分の前置が行われる第二類、そして現代英語のように焦点標識の付加に加えて焦点成分の前置が行われる第三類、といったように整理できると主張する。以上のように、徐傑・李英哲両氏は、上古漢語を現代ハンガリー語と同じく焦点成分を動詞の前に移動して焦点位置を表示する言語だとみなした上で、上古漢語にみられる疑問代詞目的語前置現象と否定文における代詞目的語前置現象とは、いずれも焦点成分を動詞の前まで移動するという「焦点」に対する文法化の操作によって生じた現象であると考えている。そして二種の代詞目的語の前置現象については次のように解釈する。疑問代詞はレキシコン(lexicon)において焦点標識[+F]を備えており、当該の疑問代詞を含む文では自動的に強式焦点を担うことになるため、原則的にはすべて前置される。一方、否定文の代詞目的語は、否定詞自体はレキシコンの中においてやはり焦点標識[+F]を備えているけれども、それは文における元来の焦点を強化するものであり、必ずしも代詞目的語に焦点をもたらすものではない。結果として、否定文の代詞目的語は、文の焦点が代詞目的語にある場合のみに前置され、焦点が代詞目的語にはない場合は後置されるという状況を呈するのだ、と解釈するのである。

ここで、注意すべきは、否定文における代詞目的語前置現象の解釈について、鈴木(1976)と徐傑・李英哲(1993)との主張がほぼ正反対だと言い得ることである。すなわち、否定文において代詞目的語が前置された場合、鈴木(1976)は動詞の方に焦点——鈴木氏の表現では「発話の重点」——が置かれていると考えているが、徐傑・李英哲(1993)は代詞目的語の方に焦点が置かれていると考えていることになる。

5.4 本論文の見解

上述の各種の目的語前置現象について、その前置メカニズムを解釈すること——それらの目的語が如何なる要因により前置されているのかを合理的に解釈すること——は、本論

文の任には含めていない。ここでは本論文が把握し得た言語事実を踏まえた「見通し」を示しておくに止めたい。

本論文は、原則的には王力(1958/2004)と同様に、原始漢語（上古初期以前の漢語）における代詞目的語の基本語順はSOV型であった可能性が高いと考える。そのように仮定しておくこと、以下の二種の状況を容易に解釈し得ると考えるからである。

第一には、上古初期から中期にかけて、代詞目的語の語順には明らかに「前置から後置へ」という趨勢——その内実は前置条件の縮小と前置される代詞目的語の種類減少である——がみられるということである⁹²。例えば、上古初期では肯定文における無標の名詞目的語（＝その前に焦点標識「唯」が付加されることもなく、また「之」「是」で照応指示されることもない名詞目的語）もしばしば動詞の前に位置するが、上古中期になるとそのような現象は極めて稀少となる。また、「不」否定文における代詞目的語の語順では、上古を通じて前置と後置とが並存しているが、上古初期から上古中期になると後置が優勢となる傾向が明白となる。

第二には、上古中期漢語に、原始漢語において代詞目的語がSOV型であったことを窺わせるある種の「痕跡」が存在するということである。例えば、上古中期のうち春秋時期に属する『論語』では、自称代詞的な意味を表す「自」が他動詞の前に位置する時、意味的には他動詞の論理目的語を担い（「自分自身を（～する）」）、当該の他動詞はその動詞の後に目的語を伴うことがない。よってこの「自」を当該の他動詞の前置された代詞目的語とみなすことも可能となるが、その場合、この「自」の語順は上古中期の文法体系においては極めて特異なものとなり、共時的観点からでは合理的に解釈することが難しい。そこで通時的観点を取り入れ、これを原始漢語においてSOV語順であった代詞目的語の痕跡だとみなすのが一つの有力な解釈となる⁹³。

本論文は、上述の状況を合理的に解釈するためには、原始漢語における代詞目的語の基本語順はSOV型であったと仮定するのが自然であると考え。そしてこの立場に立つと、上古中期にみられる代詞目的語の前置現象は、原始漢語における代詞目的語の基本語順が保存されたものという通時的な解釈がなされることになる。ただし、上述のように疑問代詞目的語と否定文の代詞目的語とは統語的な位置が異なり（本論文4.5）、少なくとも共時的には完全に同一の文法現象であるとはみなし難い。この点について、本論文は、これら二種の目

⁹² ただし、同じく上古初期に属する資料であっても目的語前置現象には相違もみられる。例えば、齊航福(2015: 55)によれば、甲骨文においては、無標の名詞目的語の前置現象は存在するものの、無標の代詞目的語の前置現象はみとめられないという。甲骨文の用例は、個々の文の構造解釈に多くの議論があるため、齊航福(2015)の指摘には一定の留保が必要であるが、かりにこれが事実であれば、同じく上古初期でも、甲骨文と他の資料では目的語前置現象の生起条件が異なっていたことになる。

⁹³ なお、同じ上古中期でも、戦国時期に属する『孟子』に至ると、「自」と文法関係を結ぶ他動詞が目的語を伴うことができるようになる。この場合、「自」の前置語順を原始漢語の痕跡とみなす立場では、「自」が再分析(reanalysis)を経て副詞へと変化したという解釈をとることになる（以上の説は、表現は異なるものの、大凡、太田1964の見解に基づく）。

的語前置現象においては SOV 型の語順が保存されるに至った要因が異なることによるのではないかと推定しておく。疑問代詞目的語前置現象では、疑問代詞は原則的には文のなかで焦点を担う成分であり、その統語的位置は「 $\text{惟} + \text{X}_o + \text{V}$ 」等の焦点を担う前置目的語(=X_o)の位置と同じく否定副詞の前である。よって、疑問代詞目的語が上古中期まで前置語順を保持した原因は、それが文のなかで原則的に焦点を担う成分であることと関係している可能性が高い。焦点を担う成分というものは機能的に有標性が高いと言える。有標性の高い文法成分が通時的に保守的な振る舞いをすることは十分に考えられよう。

一方、否定文における代詞目的語前置現象では、目的語の統語的位置は否定詞の直後という焦点位置からは外れた位置にある。本論文第十六章で述べるように、上古中期において否定文の代詞目的語の前置現象が生じるのは、原則として当該の文の表す事態の事象構造が非有界的である場合に限られたのである。非有界性の認知的特性の一つに内部構造の均質性があるのであるから(沈家煊 1995 等)、ある文が非有界的事態を表す場合、その事態の事象構成に関与する個々の事物——代詞目的語の指示対象も含まれる——が際立ちを与えられることなく、事象全体が均質的な連続体として表現される傾向が強いことになる。否定文の代詞目的語は、このように代詞目的語に際立ちが与えられないという条件の下で、動詞前の非焦点位置に止まることを動機づけられ、少なくとも上古中期までは前置の語順を保存することになった可能性があるろう。

第六章 疑問目的語語順変化メカニズムに関する先行研究

——馮勝利の韻律文法理論

6.1 先行研究の概要

古漢語における疑問目的語語順変化に関する先行研究は、そのほとんどが記述的研究であり、語順変化の過程の記述については、すでに少なからぬ成果が蓄積されている。例えば、王力(1958)、太田(1988)等の漢語文法史の概説書においては、章や節を立ててこの問題に対する言及があり、長尾(1989)や Meisterernest(2001)のごとき専論もある。以下、先行研究のうち、代表的な研究成果について振り返っておきたい。

漢語文法史の本格的な概説書として萌芽期のものに属する王力(1958/2004:365-366)では、後漢の「明月何皎皎」「涉江採芙蓉」(『古詩十九首』)や『論衡』における動詞目的語「誰」「何」、介詞目的語「何」などの後置例を挙げ、南北朝以降では疑問代詞目的語が後置されるという変化が口語においては完成していたと指摘する。また、太田(1988)は疑問目的語を語彙ごとに分けて論ずる態度をとり、上古中期の『孟子』と中古前期(後漢)の趙岐注との対照から、「誰」は上古では前置されていたが、中古では後置されていること、「何」は中古でも上古式の前置が一般的であったが、「謂何」のような後置例も出現していること、中古では「何」が連体修飾語となった名詞句(本論文の表記では「何-X」)が目的語となった場合は後置語順をとること(中古後期の『賢愚経』における「何處」の例をあげる)、中古において「何」が介詞目的語となる場合は、前置・後置のいずれもあり得るが、前者は「何」と介詞との複合が緊密で意味が転化している場合が多いこと、などを指摘する。太田氏の記述は、分量としては大きなものではないが、通時的に重要な現象を記述した精確な研究であり、現在においても参照価値の高いものである。

長尾(1989)は、上古の『論語』、中古の『妙法蓮華経』(五世紀初頭、鳩摩羅什訳)における疑問代詞目的語の語順を記述、比較している。そして『論語』では疑問代詞目的語「誰」「孰」「何」「奚」「惡」がすべてOV型(すなわち前置語順)をとり、『妙法蓮華経』では「誰」「何」がいずれもVO型(後置語順)をとることを指摘する。そして三世紀後半に訳された『生経』ではOV型とVO型とが混在している現象に着目し(OV型の例として「汝何所求」[お前は何を求めているのか]、「卿何從來」[あなたはどこから来たのか]等を挙げる)、これを『論語』から『妙法蓮華経』へと変化していく中間的段階を示すものとみなしている。以上の長尾氏の研究は、従来それほど詳細に記述されていない『妙法蓮華経』における疑問目的語の語順状況の記述を試みたという点で一定の価値があるものの、記述自体も不十分な点がみられ、また中古における疑問目的語の語順状況に対する認識も正確さを欠くという点で(例えば『妙法蓮華経』が成立した五世紀でも一部の疑問目的語は一貫して前置を保つ

ていたはずである。本論文 6.4 等で後述)⁹⁴、疑問目的語の語順変化の記述研究として十全なものとは言えない。

Meisterernest(2001)は、上古中期の『国語』、上古後期の『史記』『淮南子』、中古前期の『論衡』、『国語』韋昭注などを資料として、疑問目的語「何」「誰」「奚」「孰」、疑問目的語「何/-X」の語順について網羅的な調査をしている。各文献における前置・後置の具体的な用例数を示したこと（但し介詞の疑問代詞目的語や「何/-X」などが前置語順をとる場合の用例数は示されない）、『史記』においては「何-X」が動詞目的語となった場合に前置語順をとるものの、すでに後置語順も 10 例みられることを指摘したことなどが記述研究としての成果であると言えよう。

魏培泉(2004)は、上古から中古にかけての代詞の変遷を包括的に記述した著書であり、疑問目的語の語順変化についても、一節を割いて言及している。まず実際に疑問目的語の語順変化に関わるのは「誰」と「何」であることを確認した上で、後漢から魏晋にかけては、「誰」の後置例が「何」のそれよりもはるかに多く、語順変化は「誰」の方が「何」よりも早かったかのようであるが、「何」は連体修飾語として「何+N」構造（本論文の表記では「何-N」）を構成するようになっており、この「何+N」の後置の時期は、「誰」とほぼ一致することを指摘する。そして中古の「何+N」や「誰」の後置語順こそが当時の実際の疑問目的語の語順を反映したものであらうと主張している。魏氏はさらに、後漢においては「何」が単独で目的語となった場合に後置語順もみとめられるが、その多くは「以何」「用何」「従何」「自何」のような介詞句においてみられるものであり、介詞目的語の前置語順は、固定化された形式が修辞目的で使用されたものにすぎないと考えている。

魏培泉(2004)は、記述研究としてはもっとも詳細なものと言える。前漢の『史記』にすでに純粹疑問を表す「誰」および「何+N」の後置例がそれぞれ 2 例みられること（ただし「誰」については『漢書』の異文ではいずれも後置されている）、語順変化は前漢代に生じていたことは疑いないこと、などを例証した点が重要である。さらに、疑問目的語の語順について記述する際、語順変化の過程に方言差があった可能性を考慮したり、早期の後置例は版本による相違の問題がつきまとうけれども、上古の前置用例に対して中古の注釈が後置用例を用いて意味解釈したものは信憑性が高いことを指摘したりするなど、方法論上の貢献も無視できない。しかし、語順変化の生じた前漢以降の前置語順については、書記上の習慣あるいは語彙化による語順の固定化の結果だとする以上の分析はなく、前置と後置を決定づけた言語学的な条件の検討を積極的に試みてはいない。

⁹⁴長尾(1989)が言語資料とした『妙法蓮華經』においても「何所」は目的語として前置されている。『生經』の前置目的語「何所」だけをとりあげ（長尾 1989:46、用例 100）、それを中間的段階の反映とみなすのは適切とは言えない。

・…『若言欲何所作，便可語之，雇汝除糞，我等二人亦共汝作。』…（『妙法蓮華經』 9-262a）
〔須菩提ら三人の発言のなかに出てくる長者の発話〕…「もし（その男が）『何をするのか』と問うたなら、その男にこのように言え。『お前を雇って糞尿の汲み取りをするのだ。我々二人もお前と一緒にやる。』…〕

以上、疑問目的語の語順変化の記述的研究について紹介してきたが、疑問目的語の語順変化の「メカニズム」に対する本格的な先行研究は、事実上、馮勝利氏による一連の研究のみであると言ってよい。馮氏は、漢語文法の共時的・通時的研究の双方の領域において、韻律文法の観点から、斬新な説を精力的に提出し、広く注目を浴びている研究者である。例えば、十数年来のアメリカにおける漢語文法研究（主に現代漢語の理論的研究）を紹介した木村(2002)は、馮氏の研究について、「文法のすべてが意味と統語関係の対応によってのみ成り立つわけではなく、プロソディーと統語関係の相互作用によって成り立つものも少なくないとの立場に立ち、自らの主張を裏づけるさまざまな事象の発掘と分析に取り組んでいる」と概括している（木村 2002:299）。この木村氏による紹介は、馮氏の現代文法研究について述べたものであるが、それはそのまま馮氏の歴史文法研究についても当て嵌まる。すなわち馮氏は、文法の史的变化に関して、統語論だけでは——氏の統語論は生成文法の枠組みに基づく——そのメカニズムの解明が難しい種々の現象について、韻律文法の観点から新たな解釈を精力的に提出している。歴史文法研究において、馮氏の理論は、「なぜ」「どのように」当該の文法変化が生じたのかという変化の具体的なメカニズムを解明することを試みている点に価値がある。

馮氏の歴史文法理論が特に注目されるのは、ここ数年、自身の立場をさらに推し進め、韻律構造の変化が一連の文法変化を引き起こしたとする大胆な仮説を提唱し始めている点にある。例えば、馮勝利(2005:253～269)では、上古早期（周秦以前）から上古晚期（周秦）に類型学上の重大な変化が生じたとし、①foot（本論文 6.2.1 において後述）の類型がモーラ foot から音節 foot に変化したこと、②普通ストレス（本論文 6.2.3 において後述）の類型が、SOV 型から SVO 型に変化したことを挙げ、この間に生じた一連の変化を（実際は中古期に生じた変化も含む）、これら韻律構造の変化によって統一的に解釈しようと試みている。

本章では、馮氏による疑問目的語語順変化現象についての説を検討していく。この問題について、氏は馮利(1994)および馮勝利(1996)において論じている。これらの論文の内容は、修正が加えられつつ、氏の韻律理論を包括的に紹介した著作である馮勝利(1997)或いは馮勝利(2000)の中に収録されている。本章では、より新しい学説を反映してであろう馮勝利(2000)の内容に基づきつつ（必要に応じて馮勝利 2005 も参照する）、その所説の問題点を指摘する。

6.2 馮勝利のストレス理論について

馮勝利(2000)は、上中古間に生じた疑問目的語の語順変化は SOV 型の原始漢語が SVO 型の周秦漢語へと変化する間に生じた「ストレス転移」に起因するのだと考える。よって、馮氏の学説の是非を検討する前に、氏の韻律文法理論のうち、ストレス転移説に関わる理論的概念について触れておく必要がある。なお、馮氏の韻律理論で採用された概念の多くは、

Lieberman& Prince(1977)の韻律理論に由来するものである。ただし、それらは馮氏により定義や内容に修正を加えられているため、以下においては、馮氏自身の定義・内容を確認しておくことにする。

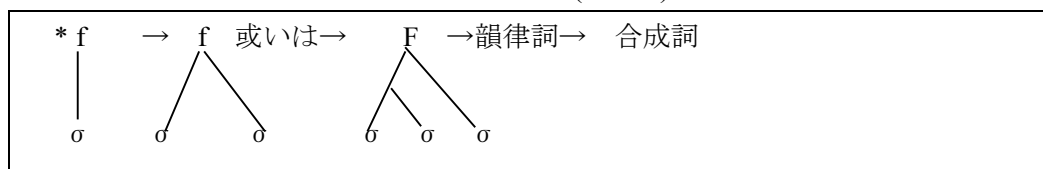
6.2.1 foot と韻律詞(PrWd)

馮氏は、Lieberman& Prince(1977)に基づき、韻律上の「軽重」——ストレスにおける「弱読」(=「軽」)・「強読」(=「重」)の概念を指す——は相対的な関係であるとする相対強弱の原則(Relative Prominence Principle)の立場をとる。そして一組の「軽重」の組み合わせを、韻律現象における最小の独立単位である foot と定義する。一つの foot は、二分法原則を遵守せねばならないため、原則的には二項からなることになり、韻律上の head が一つだけ存在しなければならないという条件が関わる。

foot には、日本語のようにモーラ(原文「韻素」)を単位とするものと、現代漢語のように音節を単位とするものが想定されている。そして漢語においては、この基本的には二音節からなる一つの foot が、韻律体系における最も基本的な単位である韻律詞(PrWd)となる。

なお、このように漢語の foot は二音節を標準とするが、三音節 foot についてもその存在をみとめている(「超 foot」と称する)。その上で漢語の合成語(合成詞)は必ず一つの韻律詞でなければならないと仮定する。以上は、下図のごとく整理される。

【図表 6-1】現代漢語の foot・韻律詞：馮勝利(2005:6)



*「σ」は音節、「f」は foot、「F」は「超 foot」を表す。

「 f」は韻律詞とはならないことを表す。

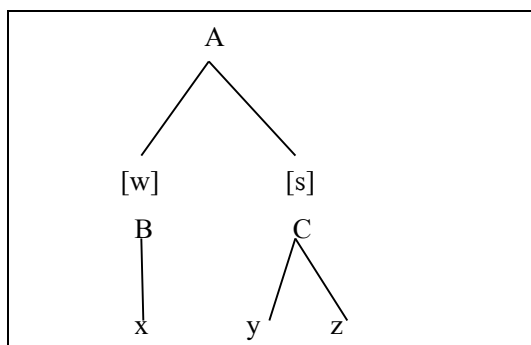
馮氏は、以上の概念を多くの言語現象の説明に適用する。一例としては、現代漢語の「電影院」「造紙場」のごとき[2+1]形式は一語たり得るが、「小雨傘」「紅燈籠」のごとき[1+2]形式はフレーズであって一語とはみなし得ない(「*紅小雨傘」、cf.「紅小豆」)という現象への援用が挙げられる。その際、前提としてさらに設けられる仮説が、foot が実現される方向が、語構成論レベルと統語論レベルでは異なり、前者は右向 foot (これを「自然 foot」と呼ぶ)、後者は左向 foot (「非自然 foot」と呼ぶ)であるというものである。そして[2+1]形式は右向 foot、[1+2]形式は左向き foot であるために、前者は語構成論レベルの構造であり、後者はフレーズを構成する統語論レベルの構造だと説明されることになる⁹⁵。

⁹⁵以上の説は、馮勝利(1998)において提出されたものであり、それ以前の氏の説とは、ほとんど正反対と言えるほど異なっている。馮氏は、このように短期間で自らの見解を変更することに躊躇しないようであり、その意味で氏の学説の変遷については注意を払う必要がある。

6.2.2 枝分かれストレス規則

上述のごとく foot は二項対立の形をとる。そのとき二項のどちらにストレスが置かれるかは、当該の foot が示す語彙・統語範疇によって定まるとされる。しかし、二音節以上からなる構造について、それを二項に分けた時、その内の一項が枝分かれ構造である場合には、枝分かれしている方にストレスが付与されなければならないという規則を設ける。これが枝分かれストレス規則である(この規則は、Zec&Inkelas1990 の議論を踏まえたものである)。

【図表 6-2】 枝分かれストレス規則



*[w]は弱読を、[s]は強読を表す。

6.2.3 普通ストレス

馮氏は、Rochemont(1986)の議論に従い、焦点(focus)の類型を、(A)語彙焦点ストレス(Lexical Focal Stress)、(B)構造焦点ストレス(Structural Focal Stress)、(C)対比焦点ストレス(Contrastive Focal Stress)、(D)狭域焦点ストレス/問答焦点(Narrow Scope Focal Stress)、(E)広域焦点ストレス/普通ストレス(Wide Scope Focal Stress/ Nuclear Stress) に分類する立場をとり、これらと文におけるストレスの類型について整理を加えている(馮勝利 2000:57-64 等)。そして(E)に相当する「普通ストレス」(核心ストレス(Nuclear Stress)或いは正常ストレスとも呼ばれる)とは、文全体が焦点となるものであり、文中の個別の成分が強調される状況ではない場合に得られるストレス形式だと考える。

この「普通ストレス」という概念は、元々は Liberman& Prince(1977)によって提出されたものであり、当該の論文は英語の普通ストレス規則を検討したものである。具体的には次のような普通ストレス規則が仮定されている。

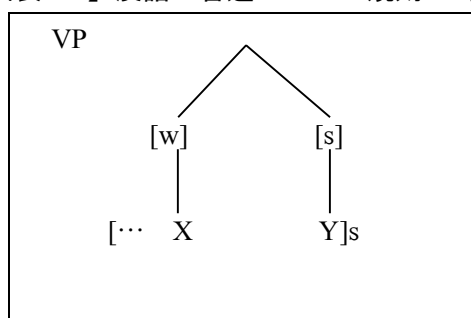
【図表 6-3】 核心ストレス規則 (Nuclear Stress Rule) : Liberman& Prince(1977)

In a configuration [c A B c]
NSR: If C is a phrasal category, B is strong.

以上のように、Liberman& Prince(1977)による英語の普通ストレス規則では、ストレス領域を構成する文末の任意の句範疇において最末尾の成分にストレスが付与される。馮氏は

これを漢語へ適用するために、ストレス領域を主要動詞句に限定し、さらに主要動詞の後には一つのストレスしか置かれてはならないという制限を加えた。馮氏の考える漢語におけるストレス付与の具体的操作は、次のようなものである。①まず最後尾の主要動詞を探し当て、さらにその動詞の項(Argument)を探し当てると、動詞とその動詞が支配する成分によって最後尾の韻律領域が構成される。②左から右方向に向かって、当該の韻律領域の最後の成分に普通ストレスを付与する(馮勝利 2000:64 など)。

【図表 6-4】 漢語の普通ストレス規則：馮勝利(2000:63)



*Xは文の最後尾の主要動詞

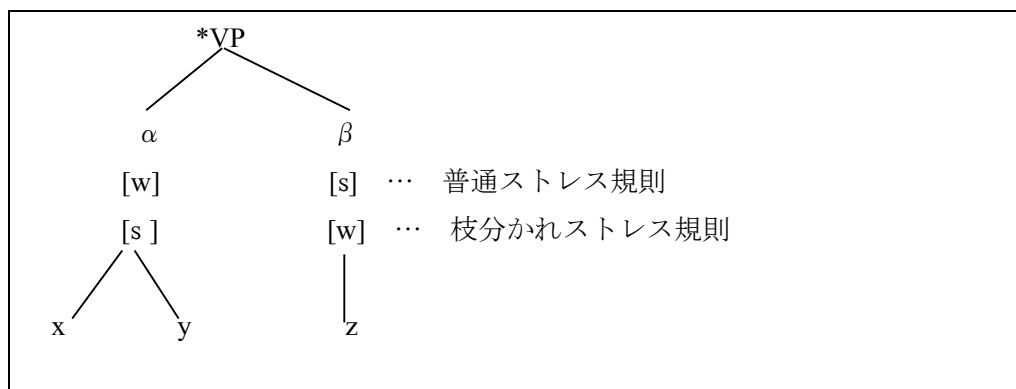
*図中の[w]は弱読、[s]は強読を表す。馮氏は「軽」「重」という標記を用いることもあるが、本論文では一律に[w][s]という表記を用いる。以下逐一断ることはしない。

例えば、「張三想买毛衣。」[張三はセーターを買いたいと思っている]であれば、最後尾の主要動詞は「買」であり、「買」が「X」となり、「買」が支配する「毛衣」が「Y」となる。よって「買毛衣」が最後尾の韻律単位 [XY] となる。そしてストレスは最後尾の韻律単位の最後尾の成分、すなわち「毛衣」に置かれなければならないことになる(馮勝利 2000:64)。なお「他走了。」[彼は立ち去った]のごとく動詞が自動詞である場合、「Y」が空位になるので、ストレスは動詞「X」(すなわち「走」)に付与されることになる。

6.2.4 韻律衝突

以上の韻律規則どうしが矛盾した場合、統語的には許容されるはずの文も非文になると考える。これを「韻律衝突」(P-Conflict)と呼ぶ。例えば、【図表 6-5】のツリーの中の α と β は二つの姉妹節点である。この $[\alpha \beta]$ について、規則・甲(この場合は「普通ストレス規則」)が「弱読(W)—強読(S)」であることを要求する一方、規則・乙(この場合は「枝別れストレス規則」)はこれについて「強読(S)—弱読(W)」であることを要求する。このような場合、いずれの規則も成立しないため、 $[\alpha \beta]$ は削除されなければならない(馮勝利 2000:66 など)。結果としてこの文は非文となると考えるのである。

【図表 6-5】 韻律衝突



*馮勝利(2000:65)にみえる図に基づくが、ストレス規則の名称を日本語に訳した他、説明の便宜のため「 α 、 β 」を加えるなどの修正を施した。

馮氏はこれを、多くの現代漢語における共時現象の説明に用いる。例えば、「讀報」(新聞を読む)、「閱讀報刊」(新聞雑誌類を読む)、「讀報紙(新聞を読む)」或いは「選課」(授業をとる)、「選擇課程」(授業をとる)、「選課程」(授業をとる)は成立するが、「*閱讀報」(新聞をよむ)或いは「*選擇課」(授業をとる)は非文となる現象に対して、非文となる文は、上図で言えば「[x 讀 y][報 z]」「[選 x 擇 y][課 z]」のように対応し、韻律衝突を起こすために成立しないのだと主張するのである(馮勝利 2000:114~120)。

6.3 疑問目的語語順変化メカニズムについての馮勝利理論の概要⁹⁶

6.3.1 前置疑問代詞目的語の統語的位置

馮勝利(2000)は、先秦漢語において疑問代詞目的語が前置されるとき、それが動詞に直接附着される「疑問代詞目的語+動詞」という語順をとるのが原則だと考える。副詞が共起する場合は、「酌則誰先?」「果誰知?」「果安在?」⁹⁷のように「副詞+疑問代詞目的語+動

⁹⁶疑問代詞目的語語順変化のメカニズムに関する馮勝利氏の研究には、専論として馮利(1994)、Feng(1996)があり、それらは修正を加えられながら馮勝利(1997)および馮勝利(2000)といった概説書に収められる。実は、この問題に対する馮氏の一連の説には、大きな相違点・修正点が見られ、大まかに言えば馮利(1994)、馮勝利(1997)が旧説、Feng(1996)・馮勝利(2000)が修正後の新説と分類し得る(必ずしも発表年代と説の新旧とが対応しない原因は不明だが、馮勝利 1997 が概説書であり、論文の Feng 1996 よりも発表が遅れたのかもしれない)。本論文では原則として新説に属する馮勝利(2000)にみられる説を対象として検討を行うこととし、氏の他の論文との相違点については、それが重大な場合のみ注の中で指摘するに止める。

⁹⁷これら三例には出典が明記されない(馮勝利 2000:211)。「酌則誰先?」は『孟子』「告子上」(2-746)の用例で、「お酌をする場合(同郷の年長者と兄との)どちらを先にするか」という意味だと考えられるが、「果誰知?」「果安在?」については、未だ出典を確定できていない。二例のうち後者は「結局のところ何処にいるのか(あるのか)」といった意味であろうが、前者についてはその具体的な意味も不明である。

詞」の語順となり、疑問代詞目的語と動詞とが分離しないため(「*酌誰則先?」「*誰果知?」「*安果在?」)、疑問代詞目的語はV'の内にあると考える⁹⁸。ただし、「且誰不食?」〔(樂羊という男は、我が子の肉すら食ったのですから)他に誰(の肉)を食わないことがありますでしょうか。〕(『韓非子』「説林上」1-479)、「將何能保?」〔どうして(幸福を)保つことができようか〕(『左伝』「文公十五年」2-614)のように動詞と疑問代詞目的語とが否定詞や助動詞で隔てられた例の存在はみとめる。表層構造におけるこのような両者の文型の生成を実現するため、以下のような疑問代詞目的語の統語操作を考える⁹⁹。

⁹⁸ここで馮氏が言うところの「副詞」には「不」等の否定詞が含まれていない点は注意を要する。この他、馮氏は、上古漢語に常見される「何獨弗欲」〔どうして(あなただけ)欲しがらないのか〕(『左伝』「襄公二十八年」3-1150)等の「何+Adv+V」構造における「何」については、疑問代詞目的語ではなく、副詞性の疑問詞と解釈しており、このような「何」はV'の外に現れ得ると考えている。

なお、馮氏は、疑問代詞目的語と否定文の前置代詞目的語の統語的位置は全く異なると考える。すなわち、もし文中に副詞がある場合、否定文における前置代詞目的語は原則的には副詞の前に生起することや、また代詞目的語が補文のなかの動詞の目的語を担っていても、二つの動詞を超えて主文の否定詞に後接することなどから、否定文の前置代詞目的語はV'の外にあると考えられるとしている。

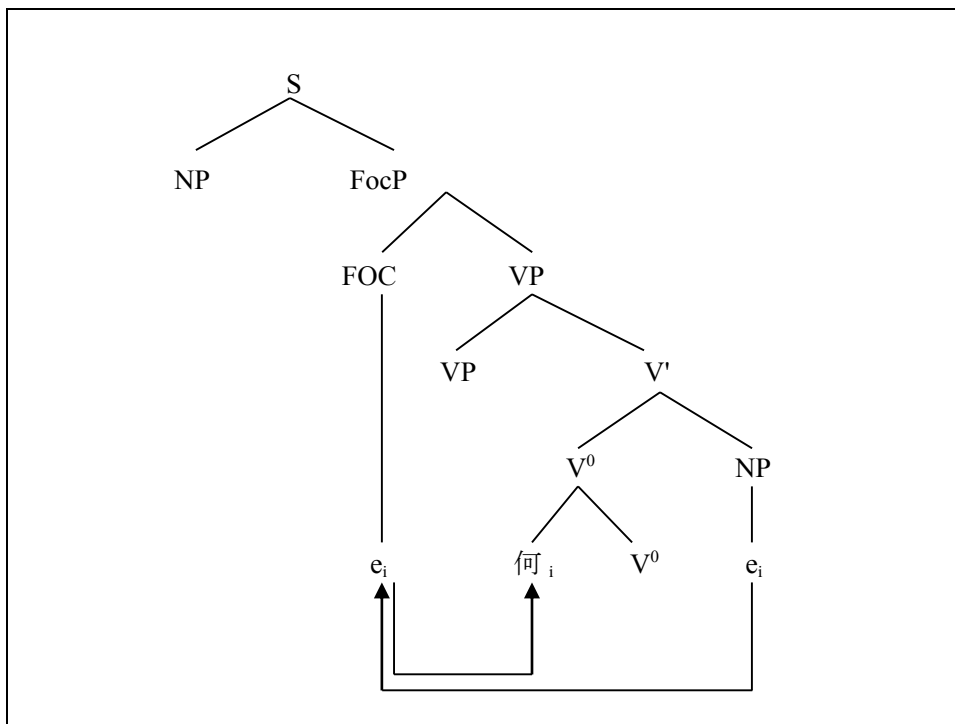
⁹⁹このように新説の馮勝利(2000)では、疑問代詞目的語が前置されるのを、SVOであるD構造からの焦点移動によって説明している。しかし、旧説の馮利(1994)では、以下のごとく新説とは全く異なる立場をとり、新説の採用するような焦点移動説を批判している。馮利(1994)は、まず疑問代詞目的語前置現象をどのように解釈するかについて、想定される三種の説に言及する。

第一の説は、「你什麼都/也不吃。」のように現代漢語でも目的語提前は可能であるので、古漢語の目的語前置現象も奇とするに足りず、漢語は古代より現代まで一貫してSOVとSVOとのいずれの語順もあり得る言語だとする考えである。馮氏はこれに対して、現代漢語(北京語)の表層構造においては確かに少なからず目的語の前置現象がみとめられるけれども、現代漢語の場合「我什麼都吃」「我都什麼吃」「他什麼不懂?!」「他不什麼懂?!」のごとく前置目的語は副詞によって動詞と隔てられなければならないため、古漢語の疑問代詞目的語前置現象とは統語的位置が異なり、同一視すべきではない、と主張する。

第二の説は、「古語残留説」である。これは我々が現在目睹し得る目的語の「倒置」現象を、歴史時代以前のSOV型漢語の遺留と考えるものである。この立場をとる代表的な研究者に俞敏氏がいる。俞氏は漢蔵語比較研究の観点から、古漢語にみえる「桑柔」〔柔らかない桑の木〕(『詩経』「大雅」「桑柔」2-941)、「區夏」〔華夏の領土〕(『左伝』「哀公十三年」(経文)4-1675)、「室於怒市於色」〔家で怒ると、街に出ても怒った顔色をする〕(『左伝』「昭公十九年」)といった「倒置」的語順に注目し、「原始漢語とチベット語(「蔵語」)はシナ・チベット祖語の特徴を保存している。つまり目的語が前、動詞が後;中心語が前、修飾語が後である。漢人が中土に進入してのち、何故かは分からないが(被征服民族の影響をうけたか?)、順序が転倒してしまったのだ。」と結論する。

第三の説は、「特殊規則」あるいは「移動」説である。これは、古漢語には後に失われた特殊な(共時)規則があり、その規則によりSVO型の基底構造から目的語が動詞の前まで移動するというものである。馮利(1994)はこの説には、二点の克服し難い問題があると指摘する。まず、移動される成分の着地点(landing position)の問題をあげる。すなわち、現在の統語研究からすれば、如何なる言語の移動位置も統語上の厳格な要求があり、landing positionは必ずINFLの外の位置でなければならず、さもなければnon-argumentの位置に着地しなくてはならない。しかし古漢語の疑問代詞目的語の位置はnon-argumentであると未だ証明されてはおらず、さらに、いわゆる疑問代名詞移動(Wh-movement)は、統語上、固定的な一つのlanding

【図表 6-6】 疑問代詞目的語の統語的位置 (馮勝利 2000:228)



すなわち、D 構造では動詞の後部に位置していた単音節の疑問代詞目的語が、まず焦点移動により V' と主語との間の焦点位置(FOC)に移動し¹⁰⁰、さらに動詞との間に否定詞や助動詞がなければ、接語化(cliticization)によって、V'内の動詞直前まで移動し、「接語(clitic)+V」形

position がなければならぬはずであるが、古漢語の疑問代詞は目的語となった場合以外には、移動操作が機能せず、疑問代詞を受け入れる統一的な統語位置がない、という点を問題として指摘している。

以上のことから、馮利(1994)は、第二説「古語残留説」を支持する。しかしながら、SVO と SOV とが同時に共存している状態は、言語の基礎構造としては、理論上、存在不可能であるため、唯一残された解釈は、原始漢語は SOV 型言語であり、SOV から SVO の転換においては、あるものは早期に変化し、あるものは変化が遅れたと考えるしかない、と主張する。すなわちまず実詞 (= 実質語) が後置され、その次が代詞、さらに否定文の代詞が後置され、最後に疑問代詞目的語が後置されることにより語順転換が完了したと考えるのである。

馮勝利氏が、以上のような自説を新説では破棄した理由は不明である。或いは馮利(1994)の旧説では「且誰不食?」「將何能保?」などの疑問代詞目的語が否定詞や副詞によって隔てられる例を解釈することが難しいことによるのかもしれない。

なお、もう一点触れておかなければならないのは、本論文において先に旧説の馮利(1994)と新説の馮勝利(2000)とを「異なる立場」だと表現したことについてである。実は馮勝利(2000)においても、上で紹介した旧説と類似の説明を繰り返しているのである(馮勝利 2000:213-221)。ところが最終的には、「残留の SOV 構造(疑問代詞目的語)は新たな体系の中で「再分析」の処理をされなければならない、そうしてはじめて引き続き発生し得たのである」(馮勝利 2000:220)と結論し、共時規則としては焦点移動説を採用している。馮氏自身が明言しているわけではないが、氏の学説に大きな修正があったと考えざるを得ない。

¹⁰⁰馮勝利(2000)は疑問文の焦点類型は「狭域/問答焦点(Narrow Scope Focus)」に属すると考えている。

式を構成する、というものである。後者の接語化については、周秦漢語では新興の二音節 *foot* が確立しつつあったことが前提となっている。すなわち、周秦では、疑問代詞目的語と動詞とがともに単音節であることが絶対多数であり、それら自身では独立の *foot* を構成することができない。また単音節疑問代詞が韻律上、弱形式(*weak form*)であることから、接語化が生じるのだと考えるのである(この場合、ストレスは疑問代詞目的語の後ろの動詞に置かれることになる)。

6.3.2 語順変化のメカニズム

馮勝利(2000)は、疑問目的語の語順変化は韻律構造の変化により動機づけられたものと考えている。その核心部分を要約すると以下のようにまとめられよう。

- (i) SVO 型言語である周秦漢語において見られる目的語の「倒置」現象は、SOV 型であった原始漢語の遺留である。周秦漢語の状況から推して、SOV 型から SVO 型への語順変化は、[実詞 > 代詞 > 否定詞 + 代詞 > 疑問代詞] の順で進行したと考えられる。
- (ii) 代詞が動詞に後置されるのが遅れたのは、それが韻律上の *weak form* であったためである。この時期にはすでに SVO 型の普通ストレス規則が成立しており、普通ストレスは動詞 V の後にあった。よって *strong form* たる実詞は、「後重」という SVO 型ストレスの要求を満たすために、いち早く語順の変化を生じた。しかし代詞は *weak form* であるため、ストレス構造の変化に対する反応が鈍く、語順変化が遅れた¹⁰¹。
- (iii) 疑問代詞目的語前置現象は原始漢語の遺留であるが、周秦漢語においては焦点移動という共時規則に再分析されており、D 構造からの疑問目的語の移動によって生じたものとみなされる。単音節疑問代詞は韻律上、*weak form* であるがゆえに、二音節 *foot* の要請を受け、接語化(*cliticization*) によって動詞に附着した。以上が、単音節疑問代詞目的語が前置される「旧規則」である。一方、「何 N」型疑問目的語は、韻律上 *strong form* であるので、「之」を挟んではじめて前置を保ち得た。
- (iv) 周秦漢語の「何 N」疑問目的語は、それが韻律詞であるが故に、繰り返し使用されることにより固定化され始め、漢代以降に至ると大量の「何 N」二音節疑問代詞が出現することとなった。これらは韻律上 *strong form* であるので、普通ストレスが置かれる動詞の後に出現し得た。この「何 N」疑問目的語がとり得た語順は次の三種がある。
 - (甲) [[wh N]+ Pro+ V]
 - (乙) [[wh N]+ Pro+ Neg/Aux+ V]
 - (丙) [V+ [wh+ N]]¹⁰²

¹⁰¹馮氏は否定文の代詞目的語が一般の代詞よりも語順変化が遅れた理由についても言及するが、本章ではこの問題には触れないこととする。

¹⁰²(甲) ~ (丙) の統語形式の表記は、本論文の筆者が原文には無い「+」を補うという修正を施したものである点に注意されたい。これは他の部分との表記の一貫性を保つための処置であ

- (v) 上述(甲)(乙)(丙)はいずれ可能である。しかし、SOVからSVOに転換してゆく大勢によって、またそのことによってもたらされるストレスの後方への移動によって、(丙)型が当時の韻律構造に最もふさわしいものとなり、二音節疑問目的語が後置される趨勢となった。以上が、二音節疑問代詞(或いは二音節疑問固定フレーズ)目的語が後置される「新規則」である。
- (vi) 上述「新規則」と「旧規則」との競争の勝敗は、以下の二種の要因によって決定付けられることとなった。それは、①新興の韻律構造により、二音節疑問フレーズが不断に固定化・語彙化される方向が保証・強化されていたこと、および②SVO型へと向かう語順変化の強大な力により、ストレスが動詞の後にあることが要求されていたことである。このように、新興の韻律構造の保護のもと、旧規則が淘汰され、新規則に取って代わられた。その結果、語順変化が実現することとなった¹⁰³。

以上の馮氏の理論が成立し得るためには、周秦漢語の単音節疑問代詞が韻律上の **weak form** であるということが不可欠な前提となる。馮勝利(2000)では、単音節疑問代詞が **weak form** である理由として以下の六点を挙げる(馮勝利 2000:229~232)。

- (i) 周秦漢語はSVO言語である。SVO型言語においては、普通ストレス規則によりストレスは動詞の後でなければならないため、「疑問目的語+動詞」という形式においては疑問代詞が動詞より弱く読まれたと推定できる。
- (ii) 周秦漢語の「疑問目的語+動詞」という形式については、その絶対多数が、単音節動詞に単音節疑問代詞が付加された形式である。すなわち多くは二音節 **foot** の形式で出現している。このとき、疑問代詞の音節が動詞のそれより長いことはほとんどない。反対に、動詞の音節が疑問代詞のそれより長いことは可能である(「孰法焉」「誰立焉」の如く)。このことから疑問代詞が上述の形式においては、韻律上、弱読の特徴を有していたことが証明される。
- (iii) もし疑問成分が二音節であれば「疑問目的語+之+動詞」という形式が採用される。つまり「*何罪有」のごとき「何 N+V」の形式は存在しない。なぜなら「[何罪]有」の

る。

¹⁰³馮勝利(2000)では、単音節疑問代詞目的語が中古に至って後置されるようになるメカニズムについて、積極的に言及していない。しかし旧説の馮利(1994)においては、この問題について以下のような主張が提出されている。すなわち「ある言語において、その基本語順が転換する時期にあつては、韻律構造上、新たに成立したストレス位置は必ず実現されなければならない。しかし、その構造転換が完全に達成されると、ストレス位置の実現が義務的ではなくなる。漢語においてはSOVからSVOに徹底的に転換したのは漢代であり(先秦漢語はSVO型の韻律構造が成立したばかりの時期)、このときを待ってはじめて単音節疑問代詞が動詞の後に出現できるようになった」という主張である。馮氏が後に以上の主張を修正したのか否かは、本論文では不明とせざるを得ない。少なくとも馮勝利(2000)では、専ら漢代以降における疑問代詞の二音節化の現象が強調されている。

ストレス構造は、枝分かれストレス規則によれば「[何罪(s)]有(w)」のはずであるが、これは普通ストレス規則と衝突するために非文となるからである。一方、「[何罪][之有]」のストレス構造は、枝分かれストレス規則によっては強弱が指定されないので、普通ストレス規則によるストレスを実現し得る（「[何罪(w)][之有(s)]」）。「何+V」及び「何 N+Pro+V」¹⁰⁴形式が普遍的にみられること、また「何 N+ V」形式が存在しないことによって、この時期の疑問代詞を用いた疑問文におけるストレスは疑問代詞ではなく、動詞性成分の方にあると考えることができる。

- (iv) 疑問代詞目的語の後置過程における「何+N」形式の出現状況も上記の主張の根拠となる。魏培泉の研究によれば、疑問代詞目的語の後置例がみられる早期の文献においては、「何 N」は一般にすべて動詞に後置されている。ここから単音節「何」と二音節（或いは多音節）「何 N」の文法位置について、以下の二種類の相補分布を帰納することができる。

4-1 疑問代詞目的語後置以前における「何+V」と「何 N+之+V」との相補分布。すなわち単音節「何」は必ず動詞に直接附着されなければならないが、「之」によって隔てられることができないが（*何之有）、二音節（多音節）の「何 N」は動詞に直接附着することができず（*何罪有）、必ず「之」によって隔てられなければならない。これは疑問目的語が動詞に直接附着し得るか否かについての相補分布である。

4-2 疑問代詞目的語の後置が実現した初期における「何+V」と「V+何 N」との相補分布。すなわち単音節「何」は動詞の前に現れ得るが、二音節（多音節）の「何 N」は必ず動詞の後に出現しなければならない。これは疑問代詞目的語の位置が動詞の前か後ろかに関する相補分布である。

上述の二種の相補分布は、動詞の前の疑問代詞目的語の位置が「弱読」の位置であったということを十分に証明するものである。動詞の前の位置が弱読であったために、二音節形式の疑問代詞目的語がこの位置に出現することができなかったのである。

- (v) 上述の例が動詞に前置された疑問目的語の位置が弱読の位置であったことを証明するものならば、以下の例は疑問代詞それ自身がこの時期には弱読形式(weak form)であったことを証明するものである。すなわち、「何不」→「盍」、「奈何」→「那」のごとき合音は、「何不」や「奈何」が何らかの音声的な弱化の過程を経たために成立したものと考えられる。よって「何」が音声上、弱読の性質を有していたと証明することができる。

- (vi) 先秦漢語の疑問代詞は一般に単音節形式であり、「何物」「何等」のごとき二音節疑問代詞は漢代以後になって発展したものである。言い換えれば、これら韻律上の「強読形式」

¹⁰⁴原文は「何+N Pro+V」であるが、他の箇所との表記の整合性を考えて、本論文では表現を修正した。馮勝利(2000)の表記法は、この箇所以外も多く一貫していないため、必要に応じて断りなく訂正した箇所がある点に注意されたい。ただし、実質的な内容の差異に関わる疑いがあるものは、原文の表記を保留しておいた。

(二音節)の疑問代詞は「wh V」が「V wh」に変化した後になって出現したものである。よって「wh V」が「V wh」に変化する以前には、漢語に強式疑問代詞はなかったことになる。この事実も、先秦の単音節疑問代詞が弱読であったことに重要な根拠を与えるものと言ってよい。

以上のごとき馮勝利氏の理論は、何故に中古以降になって疑問目的語が後置されるようになったかについて具体的な説明を試みており、疑問目的語語順変化メカニズムについてはじめての本格的な理論とみなし得る。しかしながら本論文は、この馮勝利氏の理論は根本的な問題を孕んでおり、成立し得ないと考えている。

以下、理論およびその前提となっている事実に対する疑義（本論文 6.4）と言語事実に対する解釈力（本論文 6.5）の二点から検討していきたい。

6.4 馮勝利氏の韻律文法理論とその前提における問題

本論文は、馮氏の韻律文法理論の最大の欠点は、疑問目的語の語順変化の過程を十全に解釈することができない点にあると考えている（本論文 6.5）。しかし、それだけでなく、そもそも馮氏の韻律文法理論自体、或いはその前提とされている言語事実にも問題が少なくないと考える。以下、本節ではそのような点について検討を加える。

6.4.1 周秦時期の単音節疑問代詞は weak form か？

6.4.1.1 weak form 仮説の根拠の検討

まず、上述の馮勝利(2000)の理論の核心である「周秦の疑問代詞は weak form である」という仮定について検討したい。上述したように、この仮定は馮氏の疑問目的語語順変化に関する理論の中でも極めて重要な位置を占めており、もしこの仮定が成立しなければ、氏の疑問目的語語順変化に関する理論全体が成立しない。

ここでまず確認しておきたいのは、現代漢語（標準語）においては、疑問代詞が疑問用法に用いられる場合、その統語的位置がどこであるのかに拘わらず、原則としては強読されるということである（陳文芷 1981）。これは疑問代詞が焦点を担うことからしても極めて自然な現象であり、漢語以外の他の言語にも広くみられる現象である。よって上古漢語（馮氏という周秦漢語）における疑問代詞が、強読され得ない weak form であったと主張するのであれば、何らかの積極的な根拠が必要であろう¹⁰⁵。ところが馮氏の挙げる根拠の六点（本論文

¹⁰⁵ Feng (1996 : 347)では、“What do you KNOW?”のように疑問詞が焦点でありながらストレスは別の位置におかれることがあり得ると主張している。しかしこれは特定の状況ではストレスが置かれないこともあり得るということにすぎず、英語の疑問代名詞が原則として weak form であることを証明するものではない（無論、馮氏も英語の疑問代名詞が weak form だと主張しているわけではない）。なお、馮勝利(2000)ではこの主張に触れていない。

6.3.2)のうち、(v)で挙げられる「合音」現象以外は、すべてSVO型の普通ストレス規則、枝分かれストレス規則といった馮氏の韻律文法理論が、氏の仮定するそのままの形で上古漢語にも適用し得ることを前提として、かつそのことを積極的な「根拠」として証明が展開されている。極めて輪の狭い循環論であり、まずこの点が問題であろう¹⁰⁶。

そしてその馮氏の唯一の具体的な根拠は、疑問代詞の関与が推定される二例の合音形式だけなのであり、極めて零細であると言わざるを得ない。またその二例はいずれも「何」に関わるものであり、上古漢語において前置される他の単音節疑問代詞がすべて **weak form** であったことを主張する根拠としては十分とは言えない。さらに、その二例にしても必ずしも「何」が **weak form** であったことの決定的な根拠とはみなせない。例えば、これらの合音形式に、上古推定音価を付してみると、「何**gâi*」+「不**pə*」>「盍**gâp*」¹⁰⁷、「奈**nâs*」+「何**gâi*」>「那**nâi*」となる。これらにおいて疑問代詞「何」は、前者では合音の前部の音節を担っているが、合音後の音形でもその声母と主母音が保存されている。また後者では合音の後部の音節を担っているが、合音後の音形でもやはりその主母音と韻尾とが保存されている。いずれの場合も、「何」の音節の核たる主母音が合音後の音形にも保存されているのであり、これらの合音形式の存在自体をみとめたとしても、「何」が **weak form** であったことを確実に証明するものとはみなせないであろう¹⁰⁸。

¹⁰⁶本論文では馮氏の理論を検討する際、馮氏の説が韻律理論や生成文法の枠組みの中で妥当性を有しているかという理論内部の問題には極力触れていない。本論文が、そもそもこれらの言語理論とは多くの前提を共有しない立場をとっており、有益な議論を展開するのは難しいと考えるからである。しかしこのことは、馮氏の学説について、韻律理論の枠内における疑問点がないことを意味するものではない。例えば、疑問用法の疑問代詞を用いた文は、馮勝利(2000)による焦点の種類では「問答焦点(Narrow Scope Focal Stress)」に分類されるはずである。「普通ストレス(Nuclear Stress)」が機能するのは、「文中の特定の成分が焦点とはならない」ことが条件のはずであるから、どうしての周秦漢語の疑問詞疑問文では普通ストレス規則が機能することになるのか、筆者には理解が難しい。

なお、馮氏韻律文法理論の理論的問題については、Feng(1996)の疑問代詞目的語の統語的位置に関する所説を批判した魏培泉(1999)が、①一般の言語について言えば、疑問標識は文境界、少なくともそれに接近した位置に出現しなければならないが、Feng(1996)のモデルでは、疑問代詞目的語は最終的には、相当に階層の低い位置に置かれることになってしまうこと、②Fengは疑問代詞目的語が焦点であることは認めるけれども、表層構造においては、大多数の疑問代詞が最終的に焦点位置を離れてしまうこと、などの問題点を指摘している。

¹⁰⁷「不」字は『廣韻』に複数の音が記載されている。すなわち、平聲尤韻・甫鳩切[弗也。…又甫九・甫救二切]、上聲有韻・方久切[弗也。…又甫鳩・甫救二切]、入聲物韻・分勿切[與弗同。又府鳩・方又二切]。平・上・去・入のうちいずれが上古漢語の否定副詞に由来する音であるかは簡単な問題ではないが、いずれの音であっても本論文の論旨には影響しない。ここでは、仮に『廣韻』甫鳩切にもとづいて否定副詞「不」の上古音を**pə*と推定しておく。

¹⁰⁸後者の「那**nâi*」に関しては、他の語からの合音の可能性もある。例えば、楊秀芳(2005)は「若何」が省略・合併を経て生成された可能性が高いと考えている。この楊秀芳(2005)の説に基づいた場合でも、「何」の主母音と韻尾とが「那」の音形のなかに保存されていることになる。

6.4.1.2 weak form 仮説に不利な言語事実

馮勝利(2000)の理論によれば、周秦漢語では、単音節疑問代詞目的語が動詞に後置されて文末に位置することはないはずである。ところが実際には、単音節疑問代詞が動詞「云」や准繫辞としての「為」および介詞「於 / 于」の目的語を担う場合、また / 如(X)何 / 構造の第二目的語 (= 「何」) を担う場合などには動詞に後置される。よって馮氏の言う周秦漢語において単音節疑問代詞目的語が文末に位置した用例も決して稀少ではないのである。

- (6-1) 長沮、桀溺耦而耕，孔子過之，使子路問津焉。長沮曰：「夫執輿者為誰」[定州漢墓本「誰子」]。子路曰：「為孔丘。」(『論語』「微子」4-1265~1267)
[長沮、桀溺の二人が並んで田を耕していた。孔子がそこを通り過ぎたとき、子路に渡し場をたずねさせた。長沮は言った「あの馬車の手綱を執っているのは誰です。」子路が言った「孔丘です。」]
- (6-2) 子曰：「道之將行也與，命也。道之將廢也與，命也。公伯寮其如命何。」(『論語』「憲問」3-1024)
[道が行われるのも天命だし、道が廢れるのもまた天命である。公伯寮ごときが一体天命をどうするというか。]
- (6-3) 既而大叔命西鄙、北鄙貳於己。公子呂曰：「國不堪貳，君將薙之何。…」(『左伝』「隱公元年」1-12)
[しばらくすると大叔は、命令を出して(鄭の莊公の管轄である)西境と北境の二つの邑を自分に属させしめた。(すると)公子呂は(莊公に)言った「(一つの)國に二つの政權が存在することなど許されません。わが君はこのことをどうされるおつもりでしょうか。…」]
- (6-4) 子夏之門人問交於子張。子張曰：「子夏云何」[定州漢墓本「曰何」]。對曰：「子夏曰：『可者與之，其不可者拒之。』」(『論語』「子張」4-1302)
[子夏の門人が人との交際について子派に問うた。子張は言った「子夏は何と言ったか。」(子夏の門人は)答えて言った「子夏が言われるには『よい者であればこれと交際し、もしよくない者であればこれを断るように。』とのことでした。」]

実は、これら単音節疑問代詞が目的語として後置される文については、馮氏もその存在をみとめており、馮勝利(2000)の注の中で簡単に触れている。しかし、「先秦の後置される疑問目的語の出現は、厳格な言語環境の下に限られることに注意されたい。少数の固定的形式、例えば『謂…何』、個別の動詞『云』、個別の介詞『于』などである。よって、総体的に言えば、この時期の疑問代詞目的語は一般的に前置規則を厳格に遵守していたのである。…(中略) …何故に単音節疑問代詞が先秦の少数の固定形式と個別の動詞或いは介詞のもとで先

に後ろに移動したのかについては、さらなる研究が待たれる」¹⁰⁹として、これらに対する韻律文法からの解釈は与えられていない。これら単音節疑問代詞目的語が後置された文の存在は、馮氏の韻律理論に不利な言語事実だとみなされよう。

もう一点、言及しておきたいのは、単音節疑問代詞が単独で述語となった文の存在である。そもそも文の中核たる述語を単独で担った成分が **weak form** であったなどという仮定は、よほど積極的な理由がなければ、受け入れ難いものである。さらにこのような文について、周秦における二音節 **foot** と普通ストレス規則の成立を前提に議論を進める馮勝利(2000)の理論では、どのようなストレス付与が想定されているのか、明確な言及がない。

(6-5) 「宗廟會同，非諸侯而何。赤也為之小，孰能為之大。」(『論語』「先進」3-814)¹¹⁰

〔宗廟や(国家間の)会合に関する事が、諸侯(のすること)ではなくて、何であるろうか。もし赤(=公西赤)でさえも(祭祀や国家間の会合の)末端のとり仕切り役を担うにすぎなければ、いったい誰が重要なとり仕切りの役目を担い得ようか。〕

(6-6) 萬章問曰：「『詩』云『娶妻如之何，必告父母。』信斯言也，宜莫如舜。舜之不告而娶，何也。」(『孟子』「萬章上」2-618)

〔万章がたずねて言った『詩経』曰く『妻を娶るときにはどのようにするのか。必ず父母に言わなければならない』この言葉を信じることについて、舜に及ぶ者はいないはずです。舜が父母にも言わずに結婚したのは、どういうことでしょうか。〕

(6-7) 曰：「…子濯孺子曰：『今日我疾作，不可以執弓，吾死矣夫。』問其僕曰：『追我者誰也。』…」(『孟子』「離婁下」2-581~582)

〔(孟子は)言った「…子濯孺子は言った『今日、私は病の発作がおこってしまい、弓をとることができない。私は死ぬことになるだろう。』(そして)自分の御者にたずねて言った『私を追っている者は誰か。』…〕

そして以上のように、上古中期漢語において単音節疑問代詞が動詞に後置された例、あるいは単独で述語となった例は、少数の例外として処理することが可能なほど稀少ではない。

¹⁰⁹原文は以下のとおり。なお「(個)」は、ミスプリントによる脱落とみて、本論文の筆者が付け加えたもの。

…注意、先秦的一些後置疑賓只能出現在限定很嚴的語言環境中：少數固定格式如「謂…何」、個別動詞如「云」、個別介詞如「于」等。因此，就總體而言，這一時期的疑問代詞賓語，一般都嚴格地遵守前置的規則。…至於為什麼單音節疑賓語在先秦少數固定形式跟(個)別動詞或介詞中首先後移，仍有待進一步研究(馮勝利 2000:246:注3)

¹¹⁰用例(6-5)は、「非諸侯」が述詞化されており、「非諸侯而何」全体が主語「宗廟會同」に対する述語を担っているとの解釈もあり得よう。

【図表 6-7】『論語』『孟子』における単音節疑問代詞の位置

	非文末		文末 (准文末を含む)	
	論語	孟子	論語	孟子
何	92	145	22(2)	48(34)
誰	10	9	2(0)	3(3)

*文末例における () は准文末の例 (内数)。ここで言う准文末とは、単音節疑問代詞がその直後に助詞「哉」「也」「矣」などの文末助詞を伴って文終止した場合を指す。

*「何」「誰」が補文末に位置するものは、上表から除外する (『論語』『孟子』に「何」の例が 1 例ずつある)。

*『詩』云として『詩経』から直接引用される部分は除外する (『孟子』に「誰」の文末例が 1 例ある)。

【図表 6-7】から、例えば『孟子』では、「何」が目的語或いは述語となり、文末或いは准文末に位置する例が、全体の用例数の四分の一近くにもものぼることが知られる。さらに、付言しておきたいのは、【図表 6-7】で示した文末の単音節疑問代詞は、『詩経』『楚辞』においては他の語と押韻可能であり¹¹¹、「之」「我」「女(汝)」などの代詞のように、直前の語に押韻箇所を譲るといった現象は、少なくとも両文献においてはみとめられない¹¹²。以上は単音節疑問代詞を weak form と仮定する説にとっては不利な言語事実とみなしてよい。

6.4.2 馮勝利(2000)の韻律理論と矛盾する言語事実

以下、6.4.2.1 から 6.4.2.5 に示すように、馮氏の韻律理論が正しければ存在し得ない形式、或いはそれが存在することについて何らかの説明が必要な形式が、実際の文献言語には少なからず見出される。

6.4.2.1 「複音節疑問代詞目的語+単音節 V」

馮勝利(2000)の理論によれば、周秦において SVO 型の普通ストレス規則は成立していたのであるから、「何 N+V」といった「複音節疑問代詞目的語+単音節 V」という形式は、

¹¹¹王力(1980)によれば、「何」の押韻例は『詩経』には 23 例、『楚辞』には 4 例ある。

¹¹²もう一点、興味深いのは、下例のごとく、単音節疑問代詞「何」が准文末に位置する場合、文末の助詞ではなく「何」の方が押韻を担っているかのような例が見出されることである。かりにそうであれば、「何」を weak form とみなし難い理由の一つに加えてよいであろう。ただし、下例の箇所の押韻認定は、論者によって見解が異なり、王力(1980)は「何」と「為」の押韻とみとめるものの、Baxter(1999)は押韻箇所とはみとめていない (() 内の韻部は王力 1980 による)。

・出自北門，憂心殷殷。終窶且貧，莫知我艱。(文部)

已焉哉。天實為之，謂之何哉。(歌部)

・王事適我，政事一埤益我。我入自外，室人交徧頌我。(錫部)

已焉哉。天實為之，謂之何哉。(歌部) (『詩経』「国風」「邶」「北門」1-198~201)

「韻律衝突」を起こすが故に、周秦漢語以降決して存在し得ないはずである。しかし実際には、中古漢語におけるそのような例を探し出すことは、それほど困難なことではない。

- (6-8) 周侯詣丞相，歷和車邊。和覓蝨，夷然不動。周既過，反還，指顧心曰：「此中何所有。」（『世說新語』「雅量」1-431）¹¹³

〔周侯（＝周顛）は丞相（＝王導）を訪問しようとして、和の車のそばを通った。顧和は虱とりをしつつ平然として動こうとしなかった。周顛は通り過ぎた後、また引き返して、顧和の胸を指さして言った「この中には何があるのか。」〕

- (6-9) 始出城門，見於路傍人眾聚看。即便問曰：「此諸人輩為何所看。」（『過去現在因果經』3-628c）

〔（太子が親族たちとともに）やっと城門を出ると、道端に人々が集まって何かをながめているのが見えた。（太子は）たずねて言った「これらの人々は何を見ているのか。」〕

- (6-10) 於是王師白太子言：「大王見使尋求太子，欲有所說。」太子答*曰〔三本〔言〕〕：「父王遣*汝〔三本〔汝來〕〕，欲何所道。」（『過去現在因果經』3-636c）

〔そして王の軍は太子に言上した「大王は今、使者を派遣し太子を探しておられます。おっしゃりたいことがあるからです。」太子は答えて言った「父王はお前たちを遣わせて、どんなことをおっしゃりたいのだろうか。」〕

- (6-11) 王怪在水甚久，便令使者按視，釋摩男在水中何等住。如王言往按視之，見釋摩男在水底死。（『仏説義足經』4-189a）（太田 1988:25 所引の用例）

〔王は（釈摩男が）池の中にいるのが甚だ長いことを訝しく思って、使者に釈摩男が水中でどのようなことをしているのか調べさせた。（使者が）王の命令に従って調べに行くと、釈摩男が水底で死んでいるのが目に入った。〕

6.4.2.2 動詞性成分よりも長い疑問目的語

周秦漢語において「何-X」疑問目的語が前置されるとき、この「何-X」の音節数の方が、それと文法関係を結ぶ述語動詞句（「述語動詞句」にはその動詞に前置された疑問目的語を照応指示する「之」を含めることとする）の音節数よりも多いことがある¹¹⁴。このようなと

¹¹³場所以外の事物を指す疑問代詞「何所」がその後ろに動詞を伴った「何所V」という形式については、上古中期においては、「何（＝倒置された述語）＋所V（＝主語）」と分析できるものが少なくない（本論文 12.1.2 参照）。しかし中古における「何所」は、用例(6-10)のように助動詞と動詞との間に位置するので、一語だとみなし得る。

¹¹⁴用例(6-12)～(6-16)の例文については、「何」がXの連体修飾語ではなく、述語動詞句全体を修飾する連用修飾語である可能性も排除できない。孫良明(1998)は、「何PV（松江注：Pは名詞成分を表す）」形式には二種あり、一つは「何」が反語を表わしVの連用修飾語を担っているものであり（(6-12)など）、もう一つは「何」が疑問を表しPの連体修飾語を担っているものであると考えている。この孫良明(1998)の分析は客観的に検証することが難しく、本論文ではその説の是非について論じない。いずれにしても、たとえ用例(6-12)～(6-16)の「何」が連体修飾

き、何故に「韻律衝突」を生じないのか、馮勝利(2000)には明確な言及がない。また、用例(6-16)のように、二音節疑問目的語が「之」等を用いずに前置されたものは、馮勝利(2000)の理論に対する明確な反例となるであろう。

(6-12) 孟子曰：「不仁者可與言哉。安其危而利其菑，樂其所以亡者。不仁而可與言，則何亡國敗家之有。…」(『孟子』「離婁上」1-497)

[孟子が言った「不仁である者など、語り合うことができるだろうか。彼らは危険を安全なものとし、災害を利益が得られるものとし、身を滅ぼす道を楽しんでいる。不仁であっても語り合うことができるのであれば、どうして国が亡び家が没落されるようなことがあるか。…」]

(6-13) 鄭公曰：「夫事君者，不為外内行，不為豐約舉，苟君之，尊卑一也。且夫自敵以下則有讎，非是不讎。下虐上為弑，上虐下為討，而況君乎。君而討臣，何讎之為。若皆讎君，則何上下之有乎。…」(『国語』「楚語」524)

[鄭公は言った「国君に仕える際、国の内と外によって異なる行いをしてはならず、国君の盛衰によって異なるふるまいをしてはならない。かりにも(その人を)国君としたからには、尊卑は(いつでも変わらず)同じである。その上、そもそも対等の身分より下の者には仇があり得るが、そうでなければ仇にはならない。目下が目上を殺害するのは「弑」とされるが、目上が目下を殺害するのは「討」とされるのだ。まして国君であるからにはなおさらではないか。国君として臣を討ったところで、どんな仇があり得ようか。もし(そのような人が)いずれも国君を仇とするならば、目上と目下にどんな区別があり得ようか。…」]

(6-14) 蘧啟疆曰：「…君將以親易怨，實無禮以速寇，而未有其備，使群臣往遺之禽，以逞君心，何不可之有。」(『左伝』「昭公五年」4-1269)

[蘧啟疆は言った「…わが君は、(わが国と)親しいもの(=晋)を憎むものに替え、誠に非礼な方法によって敵をすぐにも招きよせようとしておいでです。しかし防備は整えておられません。(わが)群臣を彼ら(=晋に)送りどけ、捉えさせることによって、わが君の心が満たされるのであれば、(それが)どうしていけないことがありますでしょうか。」]

(6-15) 子大叔曰：「…今執事有命曰：『女何與政令之有。必使而君棄而封守，跋涉山川，蒙犯霜露，以逞君心。』…」(『左伝』「襄公二十八年」3-1143)

[子大叔は(楚国の人に)言った「…いま(楚の)執事から命令があつて『どうしてお前などが(鄭の)国の政令に参与できることがあるか。必ずお前の君主をして国境の防備を破棄させ、山を越え川を渡り、霜や夜露をかえりみずに進ませ、楚

語でなく、述語動詞句を修飾するものだったとしても、用例(6-12)(6-15)などでは「何」を除いた目的語の音節数が述語動詞構造「之有」よりも長いことになるため、馮勝利(2000)理論に対する反例とみなし得ると考える。

君の心を満足させるように。』…」]

- (6-16) 孟子曰：「恥之於人大矣，為機變之巧者，無所用恥焉。不恥不若人，**何若人有**。」
（『孟子』「盡心上」2-887）

〔孟子が言った「恥じる心というものは人にとって重要である。臨機応変のごまかしをすることに巧みな者は、恥じる心を持つことがないのだ。人に及ばないのを恥とも思わぬ者が、どうして人に及ぶことがあるのか。」]

6.4.2.3 「単音節疑問代詞目的語+之(是)+V」

馮勝利(2000)の理論によれば、単音節疑問代詞は接語化によって直接動詞に附着して二音節 foot を構成するはずである。確かに単音節疑問代詞目的語が「之」など（「是」「云」などを含む前置目的語に対する前方照応指示成分）を挟んで動詞に前置された例は稀少である。しかし下例のようなものを考慮すると、そのような例が皆無であるとは言い切れないであろう。また下例のうち用例(6-17)(6-18)は、動詞部分も単音節であり、馮勝利(2000)の理論に対する明確な反例となる¹¹⁵。

- (6-17) 晏子曰：「燕，萬乘之國也。齊，千里之塗也。泯子午以萬乘之國為不足說，以千里之塗為不足遠，則是千萬人之上也。且猶不能殫其言于我，況乎齊人之懷善而死者乎。吾所以不得睹者，豈不多矣。然吾失此，**何之有也**。」（『晏子春秋』「內篇雜上」2-360）¹¹⁶

〔晏子は言った「燕は戦車一万台を有する（大）国である。齊は（そこから）千里の道のりがある。泯子午は戦車一万台を有する国（=燕）であっても自説を説くに足らないとみなし、千里の道でも遠いとするに足らないとした者であり、千人万人の上（に位置づけられる人）である。（そのような泯子午であっても）私に対しては自分の言うべきこと尽くすことができなかつたのだ。ましてやこの齊の人で心に善を抱きながら死んでしまった者はなおさらであろう。（また）私が会うことができなかつた者も、多くないはずはなかろう。しかしながら私は彼らを失ってしまったの

¹¹⁵ 上古初期資料にも同様の用例がみられる。

・ 損。有孚。元吉。无咎。可貞。利有攸往。**何**之用，二簋可用享。（『易経』「損」200）

〔損の卦。捕虜を得る。始めから吉。災難はない。占問するのに適している。遠方に出て何かを行うのに有利である。何によって祭祀をするのか。二つの簋で祭るのがよい。]

¹¹⁶ この「何之有」の箇所は、底本（呉則虞『晏子春秋集釋』中華書局、1962年）所引の注によれば種々の議論がある。例えば于省吾はこの「之」を「以」のごときものとみなして「どうして齊人で心に善を抱きながら死んでしまった者がいるのだろうか」（原文「謂何以有齊人之懷善而死者也」）という意味だとする。また張純一は「何功之有也」に作るべきだとする。これらの説は、具体的な版本における言語事実に基づくものではなく、前置の「何」が直接「之」によって照応される形式が稀少であることを踏まえたことに基づく意味解釈と言えよう。しかし本論文の用例(6-18)(6-19)にみられるように、このような統語形式も絶無とは言えないはずである。

だ。(いま齊の国に) いったい何がある (=どんな人材が残っている) だろうか。」]

- (6-18) 文執(摯)見齊威王, 威王問道焉, 曰:「寡(寡)人聞子大夫之博於道也寡(寡)人已宗廟之祠, 不段(暇)其聽, 欲聞道之要者, 二、三言而止。」文執(摯)合(答)曰:「臣為道三百編, 而卧最為首。」威王曰:「子澤(繹)之, 卧時食何氏(是)有。」文執(摯)合(答)曰:「淳酒毒韭。」(馬王堆漢墓帛書『十問』「文執(摯)見齊威王」)

[文摯が齊の威王に拝謁した。威王は彼に(養生の)道についてたずねて言った「私は医者であるあなたが(養生の)道に博く通じておられると聞いていたが、今、すでに齊の王位をついでおり、あなた(の教え)を聞くいとまが無かった。(そこで(養生の)道の要点についてお聞きしたい。簡単な説明だけでやめていただきたいのだが。」文摯は答えて言った「私めは(養生の)道に関する三百編(の著作)を著しましたが、眠ることを最も重要だとみなしています。」威王は言った「そのことについて説明していただきたい。眠る(直前の)時、食べるべきものには、どのようなものがあるでしょうか。」文摯は答えて言った「芳醇な酒と味の濃いニラです。」]

- (6-19) 見溫季子, 季子曰:「誰之不如, 可以求之。」(『国語』「晋語六」389)

[(趙文子は) 溫季子に挨拶に行くとき、季子は言った「いったい(あなたが)誰に劣るといえるのでしょうか。それ(=高い官職)を求めてもよいでしょう。」]

6.4.2.4 「助動詞+疑問代詞目的語+動詞」の語順に対する解釈

馮勝利(2000)に理論においては、疑問代詞目的語は、まず「焦点移動」によってVPの前の焦点位置(FOC)に移動し、もし疑問代詞目的語と動詞の間に助動詞がなければ、さらに「付着移動」によって動詞に付着する。よって馮氏の理論によれば、前置された疑問代詞は必ず助動詞の前に位置するはずである。ところが、実際は上古後期(前漢代)以降になると「助動詞+疑問代詞目的語+動詞」という語順が出現するのである(本論文10.2参照)。この語順をとる形式の存在は馮氏の理論に基づいては解釈し難いと考えられる。

- (6-20) 二世曰:「…且朕少失先人, 無所識知, 不習治民, 而君又老, 恐與天下絕矣。朕非屬趙君, 當誰任哉。…」(『史記』(秦漢部分)「李斯列傳」2559)

[二世皇帝は言った。「…その上、朕は若くして父君を亡くし、何の見識もなく、民を治めるすべをも身につけていない。さらにそなたも年老いてしまっており、自分が天下と断絶してしまうのを恐れているのだ。朕は趙高に託さずして、いったい誰に任せればよいのか。…」]

- (6-21) 袁盎等入見太后, 太后言欲立梁王。「梁王即終, 欲誰立。」太后曰:「吾復立帝子。」(『史記』(秦漢部分)「梁孝王世家」2091)

[袁盎らが太后の宮殿に入って謁見した。「太后は梁王を(太子に)立てたいとおつ

しゃいますが、梁王がもし亡くなられたら、誰を立てようとお考えなのか。」
 太后が言った「私はやはり帝の子を立てたいと思う。」]

(6-22) 既出市，桓又遣人問欲何言，答曰：「昔晉文王殺嵇康，而嵇紹為晉忠臣。從公乞一弟以養老母。」（『世説新語』「德行」1-57）

〔(企生を) 刑場に引き出すと、桓公は再び人を派遣して(企生に) 何か言いたいかどうかたずねさせた。(企生は) 答えて言った「昔、晋の文王は嵇康を殺しましたが、(その子である) 嵇紹は晋の忠臣となりました。(私は) あなたに第一人(の命)を乞いたいと思います。(それによって) 年老いた母を養わせていただきたいのです。〕

6.4.2.5 疑問代詞が介詞目的語となった場合

上述のように、馮勝利(2000)の普通ストレス理論は主要動詞句に対して設定されたものである。しかし上古中期においては、疑問代詞および「何-X」疑問フレーズが介詞目的語となった場合も、それと文法関係を結ぶ介詞の前に位置していたのであり(本論文 4.1 及び 4.2 参照)、またそれが上古後期以降になると、少なくとも一部は介詞の後ろへと語順変化するのである(本論文 6.5 などを参照)。動詞目的語の場合と並行する現象であるのは明らかであるにも拘わらず、馮勝利(2000)はこの重要な介詞目的語となった疑問目的語の語順変化について詳しい解釈を提示していない。

6.5 疑問目的語語順変化の過程に対する解釈能力の問題

本論文は、馮勝利(2000)の理論の最大の欠点は、実際の疑問目的語の語順変化の過程を十全には解釈できない点にあると考える。本節では、中古漢語における疑問目的語の語順の状況に基づいて、馮勝利(2000)の理論が疑問目的語の語順変化の過程に対する解釈能力を欠いていることを指摘したい。下に示した【図表 6-8】【図表 6-9】は、いずれも中古期の資料における疑問目的語の語順状況である。【図表 6-8】は中古前期の状況を、【図表 6-9】は中古後期の状況を反映するものである。以下、それぞれの表に示した疑問目的語の具体的な用例を併せて挙げておく。

【図表 6-8】『中本起経』『六度集経』(A 部分)における疑問目的語の語順

	前置				後置			
	動詞目的語		介詞目的語		動詞目的語		介詞目的語	
	中	六 A	中	六 A	中	六 A	中	六 A
何	28	52	7	15	0	0	2	5
奚	1	1	0	0	0	0	0	0

胡	0	2	0	1	0	0	0	0
安	0	3	0	0	0	0	0	0
焉	0	1	0	0	0	0	0	0
誰	0	1	0	0	0/(1)	1/(2)	1	2
若	1	0	0	0	0	0	0	0
如	1	5	0	0	0	0	0	0
那	1	0	0	0	0	0	0	0
所	3	3	0	1	0	0	0	0
何等	0	0	0	0	2/(1)	0	0	0
何所<+場所>	0	0	1	0	0	0	1	1
何所<-場所>	1	1	0	0	0	0	0	0
何物	0	0	1	0	4	0	0	1
何許	0	0	0	0	1	0	0	0
何-X	0	6	0	0	10/(2)	16	2	5

*表中の「中」は『中本起経』を、「六A」は『六度集経』（A部分）を指す。

*表中の数字は用例数を表す。例えば「後置」「動詞目的語」『中』列の「誰」と交わる欄に「0/(1)」とあるのは、通時的に有意な後置例が0例と通時的に無意味な例が1例あるという意味である。

*「/如(X)何/」構文の「何」については、これを固定的な構造とみなして、表中には示さない。

*表に挙げた疑問代詞以外に、以下のようにいわばゼロ形式の疑問代詞（ゼロ疑問代詞）が目的語を担っているものとみなし得るものがあるが、ゼロ形式であるがゆえに統語的位置が不明であるので、上表には示さない（下例ではゼロ疑問代詞目的語と動目関係を結ぶ動詞・介詞に二重下線を付す）。

・獵士素知太子*迸[元本、明本「屏」]逐所由，勃然罵曰：「吾斬爾首，問太子爲乎。」（『六度集経』（A部分）3-9b）

〔獵師は元々太子が放逐されたことの次第を知っていたので、顔色を変えて罵った「お前の首を斬ってやろうか。太子のことを聞いてどうするのか。」〕

・兒曰：「昔為王孫，今為奴婢。奴婢之賤，緣坐王膝乎。」（『六度集経』（A部分）3-10c）

〔(太子の) 子供は言った「以前は王の孫でしたが、今は(バラモンの) 奴隷です。奴隷という卑しい身分にありながら、どうして國王様の膝に座れましょうか。」(王は) バラモンにたずねた「どうやってこの子たちを手に入れたのか。〕

*「何所<+場所>」とは「何所」が<起点><目的地><地点>といった<場所>を表すものを指し、「何所<-場所>」とは、<場所>以外の一般の事物を表すものを指す。この両者は中古漢語において語順が異なることがあるため、本論文では両者を異なる二つの語とみなしておく（本論文 12.1.2 参照）。

「何」

(6-23) 佛告眾人：「且自觀身，觀他何為。色欲無常，合會有離。如*泡[金剛寺本「雹」]如沫，愚者戀著，殃禍由生。身為苦器，眾生皆然。」（『中本起経』 4-149c）

[何＝動詞目的語：前置]

〔仏は（鹿園に集まっていた）人々を戒めて言った「まずは自分の身をよく観察することだ。他のものなどを見てどうしようというのだ。色欲（＝色かたちのある、欲望の対象）は、恒なるものではなく、一つに集まれば離散するのであり、泡やあぶくのようなものだ。愚者は（色欲に）執着するが、災いはそのことによって生ずるのだ。

（そもそも）身体は苦しみを入れる器であり、衆生みなそうなのである。〕

- (6-24) 樹神人現顔華非凡，謂阿群曰：「爾為無道，以喪王榮。今復為元酷，將欲何望乎。」
（『六度集經』（A 部分）3-22c）

[何＝動詞目的語：前置]

〔樹神が人の姿を現した。容貌は輝いており凡人と違っていた。（彼は）阿群に言った「お前は無道を行ったが故に、国王という栄華を失ったのに、今またさらにこの上なく残酷なことをして、いったい何を望んでいるのか。〕

- (6-25) 梵志暮還，奉齋不餐。婦怪而問：「不審何恨。」答曰：「不悲。吾齋故耳。」婦重質之。「何從齋來。」（『中本起經』4-156c）

[何＝介詞目的語：前置]

〔バラモンは暮れになってから帰り、齋（＝正午過ぎに食事をとらないという禁）を奉じて食事をしなかった。（彼の）妻は訝しんでたずねた「いったい何が不満なのかしら。」（バラモンは）答えて言った「怒るな。私は齋を守っているだけだ」。妻は重ねて彼を問いただした「どうして齋を守って帰ってくるようになったのですか。〕

- (6-26) 抗聲哀曰：「象以其牙，犀以其角，翠以其毛。吾無牙角光目之毛，將以何死乎。」
（『六度集經』（A 部分）3-24c）

[何＝介詞目的語：後置]

〔睽は声を張りあげて号泣して言った「象であつたらその牙のために、犀であつたらその角のために、カワセミであつたらその羽毛のために（殺されるの）であろうが、私は牙も角も光り輝く羽毛もないのに、いったい何のために死ぬというのだろうか。〕

「奚」

- (6-27) 便*答〔三本「告」〕之曰：「吾是子親摩因提也。」問曰：「卿生何許。奚為此問。」
（『中本起經』4-156b）

[奚＝動詞目的語：前置]

〔（空中の声）が彼（＝善温）に答えて言った「私はあなたの親戚、摩因提です。」（善温は摩因提に）たずねて言った「君は何処で生まれたのか。この場所で何をしているのか。〕

「胡」

- (6-28) 王即遣使者，就*誥〔三本「語」〕之曰：「象是國寶，惠怨胡為。不忍加罰，疾出國去。」
（『六度集經』（A 部分）3-8b）

[胡＝動詞目的語：前置]

[王はすぐに使者を派遣して、彼(＝太子)を戒めて言った「象(＝勇猛な白象)は国の宝だ。敵に与えていったいどうするのか。(しかしお前を)厳罰に処するのは忍びない。はやくこの国から出ていくように。』]

「安」

- (6-29) 妻數有言，*愛婦 [三本「婦愛」、金剛寺本「婦*□(?)」] 難違，即用其言，到葉波國。詣宮門曰：「太子安之乎。」(『六度集經』(A部分) 3-9b)

[安＝動詞目的語：前置]

[(バラモンの)妻は何度も(葉波国の太子の二人の子供を奴隷として譲りうけに行くように、バラモンに)言った。愛妻には違い難く、(バラモンは)妻の言うことを受け入れて、葉波国にたどり着いた。王宮の門まで行き、言った「太子はどこに行かれたのか。』]

「焉」

- (6-30) 常悲菩薩從定寤，左右顧視，不復*視 [金剛寺本「視」] 諸佛，即復心悲，流淚且云：「諸佛靈耀自何所來。今逝焉如。」(『六度集經』(A部分) 3-43c)

[焉＝動詞目的語：前置]

[常悲菩薩は禪定から覚めると、左右を顧みたら、すでに諸仏は見えなかった。心悲しみ、涙を流しながら言った「あの諸仏の靈光は何処から来て、今どこに行ってしまったのか。』]

「誰」

- (6-31) 婦還睹太子獨坐，慘然怖曰：「吾兒如之，而今獨坐。…今兒不來，又不睹處。卿以惠誰。可早相語。…」(『六度集經』(A部分) 3-10a)

[誰＝動詞目的語：後置]

[(太子の妻は小屋に)帰り、太子が独りで坐っているのを目にすると、悲しみ怖れて言った「私の子供たちはどこに行ってしまった、(あなたは)今、一人で座っているのですか。…今、子供たちが(私のところに)来ることもないし、(彼らの)居場所も分かりません。あなたはいったい(子供たちを)誰に布施してしまったのですか。はやく私に教えてください。』]

- (6-32) 憂陀自念：「今為弟子，無緣復還。王須消息，因誰報命。」(『中本起經』 4-154b)

[誰＝介詞目的語：後置]

[憂陀は考えた「今(仏の)弟子となり、復命する機会がなくなってしまった。(しかし)王は知らせを待っておられる。いったい誰から(王に)ご報告すればよいだろうか。』]

「若」

- (6-33) 樹神人現，問梵志曰：「道士那來，今若*行耶 [三本「欲行」。] 同聲答曰：「欲詣神池澡浴，望仙。今日飢渴，幸哀矜濟。」(『中本起經』 4-157a)

[若＝動詞目的語：前置]

〔樹神は人の形となって現れ、(五百人の)バラモンたちにたずねて言った「道士たちはどこから来て、今どこに向かっているのか。」(バラモンたちは)声を揃えて答えて言った「靈妙なる池に赴いて沐浴し、不死の身になろうとしていたのです。(しかし)今日、飢え乾いてしまいました。どうか(我らを)哀れんでお助けください。」]

「如」

- (6-34) 哀慟呼天，動一山間，云：「吾子如之，當如行求乎。」(『六度集經』(A部分)3-10a)

[如＝動詞目的語：前置]

〔(太子の妻は)大声で嘆き悲しみ天に訴え、山じゅうを震動させた。(そして)言った「私の子供たちはどこへ行ってしまったのでしょうか、どこへ行って探すべきなのでしょう。」]

「所」

- (6-35) 阿耆達見阿難*來 [三本無]，意猶未悟，即問阿難：「如來今為所在。」阿難報曰：「世尊在此，爾來三月。…」(『中本起經』4-163a)

[所＝動詞目的語：前置]

〔阿耆達は、阿難がやってくるのを見ると、悟ることができないまま、阿難にたずねた「如来は今どちらにおられるのか。」阿難は(阿耆達に)告げて言った「世尊がこの地にいらっしゃってから、(すでに)三ヶ月になるのだ。…」]

- (6-36) 太子聞之，欣然馳迎，猶子睹親，稽首接足，慰勞之曰：「所由來乎。苦體如何。欲所求索，以一腳住乎。」(『六度集經』(A部分)3-8a)

[所＝介詞目的語：前置]

〔太子はそのこと(＝八人のバラモンが片足で宮門に立っていること)を聞くと、いそいそと(彼らを)迎えに走って行った。あたかも子が親に会うかのようなであった。〕

〔太子は)稽首して(頭をバラモンたちの)足につけ、彼らをねぎらって言った「どこからいらっしゃったのですか。お疲れではないでしょうか。どんなものを求めて片足で立っておられるのですか。」]

「何等」

- (6-37) 王問*憂 [三本「優」] 陀：「吾子在宮，茵*褥 [宋本、元本「蓐」，明本「褥」] 綉縵，錦繡細軟。今所坐具，皆有何等。」(『中本起經』4-154b)

[何等＝動詞目的語：後置]

〔王は憂陀にたずねた「我が子(＝悉達)は宮殿にいた時、敷物は、ゆったりとしており、美しい絹織物で作られ、きめ細かく柔らかであった。今(悉達が)座するための座具には、どのようなものがあるのか。」]

「何所<+場所>」

- (6-38) 二人俱前，相逢中路，便問頰*陞 [三本、金剛寺本「俾」]：「*章 [金剛寺本「彰」(?)] 服反

常，何所從出。豈有師宗可得聞乎。」(『中本起經』 4-153c)

[何所<+場所>=介詞目的語：前置]

〔(頗陞と優波替とは) 二人とも前に進んで行き、道の真中で出会った。(優波替は) 頗陞にたずねた「(あなたの) 柄の入った礼服はあまり見ないものだが、(それは) どこから来たものなのか。(あなたには) 有名な導師がいるのではないか。〕

- (6-39) 常悲菩薩從定寤，左右顧視，不復*視 [金剛寺本「視」] 諸佛，即復心悲，流淚且云：
「諸佛靈耀自何所來。今逝焉如。」(『六度集經』(A 部分) 3-43c)

[何所<+場所>=介詞目的語：後置]

〔常悲菩薩は禪定から覚めると、左右を顧みだが、すでに諸仏は見えなかった。悲しみ、涙を流しながら言った「あの諸仏の靈光はどこから来て、今どこに行ってしまったのだろうか。〕

「何所<-場所>」

- (6-40) 一龍重曰：「化為小蛇耳。若路無人，尋大道戲。逢人則隱，何所憂乎。」(『六度集經』(A 部分) 3-27c)

[何所<-場所>=動詞目的語：前置]

〔一方の龍が(もう一方の龍に) 言った「小さな蛇に変化すればいいじゃないか。もし路上に人がいなければ、大きな道に沿って遊んでいこう。人に会ったらすぐに隠れれば、何も心配することなどないよ。〕

「何許」

- (6-41) 便*答 [三本「告」] 之曰：「吾是子親摩因提也。」問曰：「卿生何許，奚為此問。」(『中本起經』 4-156b)

[何許=動詞目的語：後置]

〔(空中の声) が 彼 (=善温) に答えて言った「私はあなたの親戚、摩因提です。」(善温は摩因提に) たずねて言った「あなたは何処で生まれたのか。この場所で何をしているのか。〕

「何物」

- (6-42) 王問*憂 [三本、金剛寺本「優」] 陀：「吾子在宮，若其*澡 [金剛寺本「洗」] 浴，八種香汁。
*若 [三本「於」] 今澡浴，皆有何物。」(『中本起經』 4-154c)

[何物=動詞目的語：後置]

〔王は憂陀にたずねた「我が子は宮殿にあっては、沐浴するときには、八種類のよい香りのする液体が用意されていた。今、沐浴するときには、どんなものがあるのか。〕

- (6-43) 王問憂 [三本、金剛寺本「優」] 陀：「悉達在家，吾為作床，精寶四種。於今*所坐 [三本、金剛寺本「坐床」]，何物用作。」(『中本起經』 4-154c)

[何物=介詞目的語：前置]

〔王は憂陀にたずねた「シッダルダが家にいるときには、私が(彼の) ために座具を用意していた。美しい珠が四種類つけられたものだった。今、座るところはどんな〕

ものを用いてつくっているのか。]]

「何-X」

(6-44) 昇背隨焉，半*谿 [三本、金剛寺本「溪」。鰲曰：「吾妻思食爾肝，水中何樂之有乎。」

(『六度集經』(A部分) 3-19c)

[何-X=動詞目的語：前置]

[(彌猴はスッポンの) 背にのると、彼 (=スッポンは) につき従って行った。溪流の半ば (まで下ったところ) で、スッポンは言った「(じつは) 私の妻が君の肝を食べたがっているのだよ。(そもそも) 水中にいったいどんな音楽があるというのか。)]]

(6-45) 王問憂 [三本、金剛寺本「優」] 陀：「悉達今者欲領何國。」(『中本起經』 4-154c)

[何-X=動詞目的語：後置]

[王は憂陀にたずねた「シッダルダは今、どの国を導こうとしているのか。」]

(6-46) 親驚怛曰：「吾子何罪而殺之乎。子操仁惻，蹈地常恐地痛，其有何罪而王殺之。」

(『六度集經』(A部分) 3-24c)

[何-X=動詞目的語：後置]

[(睽の) 親は驚き悲しんで言った「いったい我が息子にどんな罪があつて (王は) 彼を殺したのでしょうか。あの子は節操・仁愛・真心があり、地面を踏むと地が痛がることを恐れるほどでした。いったいどんな罪があつて、王は彼を殺したのでしょうか。」]

以下は、中古後期の資料における状況である。

【図表 6-9】『雑宝藏經』『過去現在因果經』における疑問目的語の語順

	前置				後置			
	動詞目的語		介詞目的語		動詞目的語		介詞目的語	
	雑	過	雑	過	雑	過	雑	過
何	11	6	48	6	5	0	5	12
胡	0	0	2	0	0	0	0	0
安	1	0	0	0	0	0	0	0
誰	0	0	0	0	3(6)	1	3	0
所	1	0	3	0	0	0	0	0
何處	0	0	0	0	4	1	3(1)	0(2)
何等	0	0	0	0	3	7	0	0
何所<+場所>	1	2	0	0	0	0	0	1
何所<-場所>	3	3	0	0	0	0	0	0
何物	0	0	0	0	4(1)	0	0	0

何許	0	0	0	0	2	3	0	0
阿誰	0	0	0	0	0/(1)	0		
何-X	0	0	0	0	45/(3)	5/(7)	37	7
何等-X	0	0		0	3	6/(1)	0	0

*表中の「雑」は『雑宝蔵經』を、「過」は『過去現在因果經』を指す。

*表における符号の意味は【図表 6-8】に準ずる。

*次の例の「何處」は。前置目的語ではなく、連用修飾語とみなす。その理由については、本論文 12.2.1 を参照。

- ・帝釋及三十三天聞佛教已，即至佛所，頂禮佛足，在一面立。白佛言：「世尊，當何處坐。」佛言：「坐此座上。」(『雑宝蔵經』 4-476c)

[帝釈および三十三天は仏の教えを聞き終わると、すぐに仏のところに来た。仏足の下に拝礼し、傍らに立ち、仏に言上した。「世尊よ。(私は) どこにすわるべきでしょうか。」仏は言った「この座にすわりなさい。】

「何」

- (6-47) 時毘摩天化作其弟，至其兄邊。兄瞋弟言：「何不墾殖，來此何為。」(『雑宝蔵經』 4-491c)

[何 = 動詞目的語：前置]

[その時、毘摩天は弟に変身し、兄のところに行った。兄は弟を叱って言った「どうして野良仕事をしないのだ。こんなところに来て何をするのか。】

- (6-48) 從者答曰：「此老人也。」太子又問：「何謂為老。」(『過去現在因果經』 3-629c)

[何 = 動詞目的語：前置]

[(太子の) 從者は(太子に) 答えて言った「それは老いた人です。」太子はさらにたずねた「「老いた」とはどういうことか。】

- (6-49) 眾人見其聰明福德，而勸之言：「汝父在時，常入海採寶。汝今何為不入海也。」(『雑宝蔵經』 4-450c)

[何 = 介詞目的語：前置]

[周囲の人たちは彼(=慈童女)が聡明で(日頃の)行いが良いのをみると、彼に勧めて言った「お前の父は、生きていた頃、しばしば海に出て財宝をとっていた。お前は今、どうして海に出ていかないのか。】

- (6-50) 心懷驚怪而往問佛：「年少沙門，汝此樹間有四方石及*大[三本、聖語藏本「以」]石槽。從何而來。」(『過去現在因果經』 3-648c)

[何 = 介詞目的語：後置]

〔(迦葉は) 驚き怪しんで仏のところへ赴き、たずねた「年若い沙門よ、この樹間には四角形の石と大きな石の水槽とがある。(これは) どこから来たものなのか。」〕

「胡」

- (6-51) 時尊者祇夜多即語王言：「貧道今者，未堪為王作福田也。胡為躬自枉屈神駕。」
〔『雑宝蔵経』 4-484a〕

〔胡 = 介詞目的語：前置〕

〔その時、尊者・祇夜多は王に言った「私めは、今はまだ王のために福田（＝供養する人に功德をもたらす人）となるに値しません。(それなのに) どうして自ら身分を顧みずに（私の）前に進まれたのか。」〕

「安」

- (6-52) 王問長者子言：「誰教汝此語。」答言：「我父教我。」王言：「汝父安在。」〔『雑宝蔵経』 4-455c〕

〔安 = 動詞目的語：前置〕

〔王は長者の息子にたずねて言った「誰がお前にその言葉を教えたのか。」(長者の息子は) 答えて言った「父が私に教えてくれたのです。」王は言った「お前の父は何処にいるのか。」〕

「誰」

- (6-53) 弟答言：「適有一敷屨，不截半與，後更何處得。」兄問言：「*更欲〔三本、金剛寺本「欲更」〕與誰。」〔『雑宝蔵経』 4-456c〕

〔誰 = 動詞目的語：後置〕

〔弟は答えて言った「わずか一枚の敷物があるだけになってしまったので、半分に切って（父に）渡さないと、後にどこで手に入れるのですか。」兄は問うて言った「この上さらに誰に渡すつもりか。」〕

- (6-54) 得此夢已，即大驚*悟〔元本、明本「寤」〕，心自念言：「我今此夢非為小緣。當以問誰。宜入城内，問諸智者。」〔『過去現在因果経』 3-621c〕

〔誰 = 動詞目的語：後置〕

〔(善慧仙人は) これらの夢（＝五つの珍しい夢）を見ると、吃驚して目覚め、心のなかで考えた「私が今これらの夢をみたのは、とるにたらない縁によるのではない。（これらの夢が意味することを）誰にたずねるべきであろうか。城内に入り、賢者たちにたずねるべきである。〕

- (6-55) 時有釋女，名曰電光。…瞋恚呵罵耶輸陀羅：「汝於尊長所親，何以自損。悉達太子出家學道，已經六年。生此小兒，甚為非時。從誰而得。…」〔『雑宝蔵経』 4-496b〕

〔誰 = 介詞目的語：後置〕

〔その当時、シャカ族の女性がおり、名前を電光と言った。…（彼女は耶輸陀羅が子供を分娩しそうになったのを聞くと）怒り憤って耶輸陀羅を罵った「あんたは長

老たちからもかわいがられているというのに、どうして自分自身を毀損するようなことをするのか。悉達太子は出家して道を学んでからすでに六年になる。(そうであれば) その赤子が産まれるというのは、(太子の子としては) 全くあり得ない時期ではないか。あんたは誰とその子をもうけたのか。…」]

「所」

- (6-56) 既到家已，其婦問言：「三年客作，錢財所在。」其夫答言：「我所得財，今已舉著堅牢藏中。」(『雜寶藏經』4-468a)

[所=動詞目的語：前置]

〔(画師が) 家に着くと、彼の妻が問うて言った「三年手伝い仕事をして、(あなたが稼いだ) お金はどこにあるのですか。」夫は答えて言った「私が得た金は、今はすでに堅牢な蔵の中にしまっている。〕

- (6-57) 婦言：「我是君婦賴提。」夫怪而問之：「所以卒爾。」(『雜寶藏經』4-458a)

[所=介詞目的語：前置]

〔妻は(夫に) 言った「私はあなたの妻の賴提ですよ。」夫は(妻が美しく変身したことを) 訝しんでたずねた「どうして突然こんなふうになったのか。〕

「何處」

- (6-58) 彼二比丘，而問之言：「汝識尊者祇夜多不。」答言：「我識。」彼比丘言：「今在何處。」(『雜寶藏經』4-483c)

[何處=動詞目的語：後置]

〔その二人の比丘は、彼(=出会った比丘)に問うて言った「あなたは尊者・祇夜多をご存知か。」答えて言った。「存じております。」その比丘が言った「今、どこにおられるか。〕

- (6-59) 于時迦葉忽見如來，心大驚喜，即問佛言：「汝近七日遊行何處而不相見。」(『過去現在因果經』4-649a)

[何處=動詞目的語：後置]

〔その時、迦葉は如来が来るのをみると、大いに驚き喜んで、仏(=如来)にたずねて言った「お前はこの七日間どこに行っており、(私に) 会いに来なかったのか。〕

「何等」

- (6-60) 昔日有一婆羅門，事摩室天，晝夜奉事。天即問言：「汝求何等。」婆羅門言：「我今求作此天祀主。」(『雜寶藏經』4-492b)

[何等=動詞目的語：後置]

〔昔、一人のバラモンがいた。摩室天に仕え、日夜祭っていた。天神が問うて言った「お前は何を求めているのか。」バラモンは言った「私は今、祭主になることを望んでおります。〕

- (6-61) 太子含笑而問之言：「以此與我，欲作何等。」(『過去現在因果經』3-628b)

[何等=動詞目的語：後置]

〔太子は笑いに湛えながら彼(=弓の師)にたずねて言った「こんなもの(=小弓)を私に与えて、いったいどうするつもりか。〕

「何所<+場所>」

- (6-62) 善慧仙人聞斯語已，舉體毛豎，心大歡喜，踊躍無量。便與外道分別而去。外道問言：「師何所趣。」(『過去現在因果經』3-621c)

[何所=動詞目的語：前置]

〔善慧仙人はその言葉(=普光菩薩が世に現れたという外道たちの言葉)を聞くと、身体中の毛が逆立ち、心に大いなる歡喜を覚え、何度も躍り上がって喜んだ。(そして)外道たちと別れて去って行った。外道たちは(善慧仙人に)たずねて行った「師よ、どこに行かれるのか。〕

- (6-63) 爾時車匿聞此言已，…思惟良久，流淚而言：「大王慈敕如是之嚴，且又今者非遊觀時，又非降伏怨敵之日。云何於此後夜之中，而忽索馬。欲何所之。」(『過去現在因果經』3-632a)

[何所=動詞目的語：前置]

〔その時、車匿はこの言葉(=太子が発した、愛馬をつれて来るようにという言葉)を聞くと…長い間考えて、涙を流して行った「大王の(後継ぎができなければ出家しけはならないという)勅命はあのように嚴重なものであった。今は遊覽に出る時間ではなく、また敵を征服する日でもない。(太子は)どうしてこのような夜更けに突然馬を探しておられるのか。いったいどこに行こうとされているのか。〕

- (6-64) 于時迦葉忽見如來相好莊嚴，心大歡喜而作是言：「年少沙門，從何所來。」(『過去現在因果經』3-646a)

[何所=介詞目的語：後置]

〔その時、迦葉は如來の顔つきが重々しく嚴肅であるのを見て、心に大いなる喜びを覚え、このように言った「年若い沙門よ、どこから来たのか。〕

「何所<-場所>」

- (6-65) 梟聞聲已，便出*語[三本「聞」]言：「*今爾[三本「爾今」]何故破傷頭腦，毛羽毀落，來至我所，悲聲極苦，欲何所說。」(『雜寶藏經』4-498c)

[何所=動詞目的語：前置]

〔梟は声を聞くと、すぐに(巢穴から)出てきてたずねた「お前は今、何故にその頭を怪我して、羽毛も欠け落ち、私のところにまで来たのか。悲しい鳴声は苦しいのであるが、何を言おうとしているのか。〕

- (6-66) 時*優[三本、聖語藏本「憂」]陀夷即答王言：「…太子獨自在於樹下，遙見一人，剃除鬚髮，著染色衣，來太子前而共言語。言語既畢，騰虛而去，竟亦不知何所論說 …」(『過去現在因果經』3-632a)

[何所=動詞目的語：前置]

〔その時、優陀夷は王にすぐに答えて言った「…太子は一人で木の下にいと、遠

くに髪と髭を剃り、袈裟を着ている人を見かけました。(彼は)太子の前まで来ると、(太子と)言葉を交わしました。(そして)話し終わると、虚空に上って去って行きました。結局、どんなことを議論していたのか分かりませんでした。…]]

「何物」

(6-67) 王遣人問：「為生何物。」(『雑宝蔵経』 4-452c)

[何物=動詞目的語：後置]

[王は部下をやったたずねさせた「(鹿女夫人は) どんなものを生んだのか。」]

(6-68) 問獵師言：「汝須何物而射於我。」答言：「我無所須。梵摩達王募索汝牙，故來欲取。」(『雑宝蔵経』 4-454a)

[何物=動詞目的語：後置]

[(白象は) 獵師に問うて言った「お前は何が必要で私を射たのか。」(獵師は) 答えて言った「私自身は何も必要ではない。梵摩達王がお前の牙を(人を)募って探し求めているが故に、(それを)手に入れようとして来たのだ。」]

「何許」

(6-69) 其夫答言：「我所得財，今已舉著堅牢藏中。」婦時問言：「堅牢之藏，今在何許。」夫言：「乃在僧中。」(『雑宝蔵経』 4-468a)

[何許=動詞目的語：後置]

[夫は答えて言った「私が得た金は、もうすでに堅牢な藏の中にしまつてある。」妻は問うて言った「その堅牢な藏とは、今どこにあるのですか。」夫は言った「実は僧人のところにある。」]

(6-70) 時白淨王，愛念情深，語車匿言：「我今當往尋求太子。不知即時定在何許。…」(『過去現在因果経』 3-636a)

[何許=動詞目的語：後置]

[その時、白淨王は(太子に対する)愛情の念が深く、車匿に言った「私は今まさに太子を探しにいこうと思うのだが、(太子が)今どこにいるのか分からない。…」]

「何-X」

(6-71) 慈童女問言：「我作何福，復作何罪。」(『雑宝蔵経』 4-451b)

[何-X=動詞目的語：後置]

[慈童女は(獄卒に)たずねて言った「いったい私がどんな福を為し、またどんな罪を為したというのでしょうか。」]

(6-72) 即便問言：「…欲有所問，唯願見答。汝今大師其名何等。有所教*誠[宋本、聖語藏本「戒」]，演說何法。」(『過去現在因果経』 3-652a)

[何-X=動詞目的語：後置]

[[舍利弗の発話のなか] (私(=舍利弗)は阿捨婆耆に)すぐにたずねて言った「…おたずねしたいことがあり、お答え願いたい。あなたの師はなんという名であるの

か。どんなことを教え戒めているのか。どんな法を説いているのか。」¹¹⁷

- (6-73) 諸比丘疑怪，白佛言：「世尊，以何因縁繫屬於他。復以何縁得阿羅漢。」
〔『雜寶藏經』 4-450c〕

〔何-X=介詞目的語：後置〕

〔比丘たちは（その迦旦遮羅という老婦人が出家の後、阿羅漢となることを得、比丘尼の中で最もよく仏典を理解するようになったことを）訝しんで、仏に言上した「世尊よ、（迦旦遮羅は）どんな因縁によって他人に（使用人として）従属させられ、またどんな縁によって阿羅漢（となることを）を得たのでしょうか。〕

- (6-74) 迦葉後來見佛已坐，即便問言：「年少沙門，從何道來而先至此。」〔『過去現在因果經』 3-647b〕

〔何-X=介詞目的語：後置〕

〔迦葉は（仏の）後に到着し、仏がすでに座っているのを見た。（そこで）すぐにたずねて言った「年若い沙門よ、どの道からやって来て、この場所に（私より）先に着いたのか。〕

「何等-X」

- (6-75) 見諸女人共聚齋食，問言：「汝等今作何等吉會。與汝親厚，而不命我。」〔『雜寶藏經』 4-474a〕

〔何等-X=動詞目的語：後置〕

〔（その婆羅門である女は）女たちがみな集まり、仏事を修めて僧に食事を供しているのを目にすると、たずねて言った「あなたたちは今、どんなおめでたい集会を行っているのですか。（私は）あなたたちと随分親しいのに、私に教えてくれないなんて。〕

- (6-76) 又復問言：「此阿一字，有何等義。」師又默然亦不能答。〔『過去現在因果經』 3-628a〕

〔何等-X=動詞目的語：後置〕

〔（太子は）さらに（師である跋陀羅尼に）たずねて言った「この「阿」という字には、どのような意味があるのですか。」師はやはりおし黙って、答えることができなかった。〕

【図表 6-8】～【図表 6-9】から次のことが看取される。

¹¹⁷用例(6-72)の「有所教誡」の意味と構造を合理的に解釈することは難しい。本論文ではかりに「所」は動詞「教誡」（「所 o+教誡 v」）の疑問代詞目的語であり、その「所+教誡」構造が動詞「有」の目的語となっているものと解釈した上で、日本語訳を与えておいた。ただし以上の解釈は確実性を欠くために、この箇所の「所」は【図表 6-9】の疑問代詞目的語の用例数に含めていない。

- (i) 中古期では、単音節疑問目的語のうち「誰」のみが後置に転じているのであって¹¹⁸、「安」「奚」「胡」「焉」「所」「如」「若」「那」などはいずれも前置の位置を保っている。ただし「何」の語順は複雑であり、動詞目的語となった場合は多くは前置を保つ一方、介詞目的語となった場合は前置と後置の双方の語順がみとめられる（『過去現在因果経』では介詞目的語「何」は後置語順が多くなっている）。
- (ii) 「何 X」或いは「何-X」、「何等-X」などの複音節疑問目的語については、その大部分が動詞或いは介詞の後に位置する。ただし「何所<-場所>」のように基本的には前置を保つという例外もある。

以上のような疑問目的語の語順状況は、中古の他の文献における状況と基本的に符合しており、これら四文献における個別的な現象ではない。さて、馮勝利(2000)の理論によれば、単音節疑問目的語は **weak form** であるので動詞の後に位置することができず、複音節疑問目的語は **strong form** であるので動詞の後ろの位置に適していたはずである。しかし、上でみたように、実際には、単音節疑問目的語「誰」は動詞に後置されるのが一般的であり、複音節疑問目的語「何所<-場所>」の方は原則的に動詞に前置されるのである。このことから、上古中期から中古期にいたる間の疑問目的語の語順変化は、疑問目的語の音節数だけを条件にしているわけではないことが知られる。

そもそも馮勝利(2000)の理論では、単音節疑問目的語の語順変化に対して十分な説明がなされていないのであるが（本論文 6.3.2 の注 103 を参照）、単音節の「誰」が疑問目的語のなかで最も早く後置に転じていること、複音節の「何所<-場所>」が中古期を通じて前置を保ち続けていることに注目するだけでも、馮勝利(2000)の理論が少なくともそのままのかたちでは成立し得ないことは明らかであろう。

6.6 本章のまとめ

以上から、馮勝利(2000)が提出した疑問目的語語順変化のメカニズムに関する仮説は、それが前提とする韻律理論自体についても問題なしとはみなし難く（本論文 6.4）、何よりも上中古間における疑問目的語の語順変化の過程を合理的に解釈することができないため（本論文 6.5）、受け入れがたいと結論したい。

このことは、上古中期の疑問目的語の前置現象あるいは上中古間の疑問目的語の語順変化に、韻律あるいは韻律構造の変化が全く関与しなかったということ直接的に意味するものではない。しかし本論文の第八章から第十三章にかけて述べていくように、疑問目的語語順変化については、韻律あるいは韻律構造の変化との関連を想定しなくとも、そのメカニ

¹¹⁸中古期では、「誰」が動詞目的語となった場合、多くが動詞或いは介詞に後置される。『六度集経』（A 部分）における動詞目的語「誰」の前置例は少数の用例に属する（本論文 9.3.1）。

ズムを解釈することは十分に可能だと考える。また、馮勝利(2000)が韻律理論により解釈を行った上古漢語の様々な共時的な現象も、韻律理論によらない説明も可能である。例えば、馮勝利(2000)がしばしば言及する「疑問代詞目的語の後置以前における「何+V」と「何N+之+V」との相補分布」、すなわち単音節疑問目的語「何」が目的語として動詞に前置される場合は動詞の前に直接に付着するが、複音節疑問目的語「何N」(本論文で言う「何X」と「何-X」の一部に相当)が目的語として動詞に前置される場合は、動詞との間にそれを照応指示する「之」「是」が生起するという現象にしても(本論文 6.3.2)、次のように純粹に文法レベルでの解釈も可能だと考える。すなわち、「何N」が目的語として動詞に前置された場合に「之」などが生起するのは、「何N」という構造が統語上は名詞句に相当することに起因するということである。上古中期漢語においては、名詞などの実質語が動詞に前置されるSOV型の語順をとる場合、一般にはそれを照応指示する「之」「是」がその名詞目的語と動詞の間に生起する必要があった(本論文の例文(4-44)(4-45)などを参照)。このように、SVO型を基本語順とする言語において、その基本語順からはずれた語順(=SOV型)が出現する場合に、何らかの形式による有標化が必須となるのは、通言語的な観点からしても不自然な言語現象ではない。一方、上古漢語の単音節疑問代詞は、閉じた体系をなす機能語に近い性質を持つものであり、統語機能の面でも名詞とは大きく異なっている¹¹⁹。機能語が実質語と異なる独自の統語的なふるまいを示すこともまた通言語的に一般的な言語現象であり、上古漢語の単音節疑問代詞は機能語に近い性質を有するが故に、「之」「是」を介さずに動詞或いは介詞に前置されることが可能であったのだと考えたい。

¹¹⁹例えば上古中期漢語では、「何」は原則として他動詞文の主語を担い得ず(本論文 10.1)、「孰」は目的語となるのが稀少であり、「誰」が主語となるのに制約がある文献言語も少なくない(本論文 9.1.2.2、【図表 9-5】参照)。他の単音節疑問代詞も統語的にある種の偏りを示すものが少なくない。

第七章 他言語における目的語語順変化メカニズムの研究

7.1 本章の目的

本章は、他言語における目的語の語順変化メカニズム——とりわけ OV 型から VO 型への語順変化メカニズム——に関する主要な先行研究について、如何なる議論がなされていたのかを概観するものである。本論文はあくまでも漢語史内部の言語事実から疑問目的語が OV 型から VO 型へと転じた語順変化のメカニズムを帰納的に解明することを試みるものであり、他言語における語順変化の研究成果を漢語史における現象に直ちに適用しようとする意図はない。本章を設けた意図は、本論文で提出する漢語史における疑問目的語語順変化のメカニズムの仮説が、歴史言語学一般において如何なる位置づけになり得るのかを確認するところにある。

如上のような目的のために、本章でとりあげる先行研究は、個別の言語の語順変化を論じたものではなく、個別の言語を題材にしつつも、言語の普遍性を視野にいれた類型論的観点を含むものを主とする。ただし、実際には、一定量の文献資料により語順変化の過程が客観的に確かめられ、なおかつそのメカニズムを論じた先行研究の蓄積がある言語は多くはなく、印欧語などに偏る傾向があるのは否めない。本章では、「類型論的業績を代表する 1970 年代の業績」(清水 2012:2)とも称される Lehmann(1973)と Vennemann(1974)、さらに韻律構造の変化という観点から英語史における OV 型から VO 型への語順変化メカニズムを解説した Lass(1994)をとりあげることにする。

7.2 Lehmann(1973)——「借用」による語順変化のモデル

7.2.1 基本語順と他の類型論的特徴の含意関係

Lehmann(1973)は、第一義的には類型論的観点から、各種の言語における種々の文法的・音韻的特徴どうしの含意関係 (implication) を論じたものである。本論文との関係から重要なことは、それに止まらず、見出された含意関係を根拠としつつ原始印欧語などの古代語の言語特徴の推定を行い、その上で動詞と目的語の基本語順の変化のメカニズムに関するモデルを提出していることである。

議論の核心となるのが、動詞と目的語の基本語順と、形態論的特徴との含意関係である。すなわち、日本語、トルコ語、ケチュア語などの OV 言語は膠着的であるが、古典ヘブライ語、ポルトガル語などの VO 言語は屈折的であったという関係性である。そして、このことは、「否定」や「使役」といった文の命題全体を限定する範疇——「一致」や「ダイクシス」に関わるものではなく命題的な範疇——を標示する言語成分が、動詞の位置を基準として

目的語名詞の反対側に置かれるという原則と関連していると指摘する¹²⁰。日本語のような OV 言語においては、「否定」や「使役」を表す成分は動詞語根の後ろに接尾辞として置かれ、ヘブライ語のような VO 言語においては動詞語根の前に置かれることが期待されるというのである。

基本語順と他の統語現象との関係については、OV 言語では疑問標識がしばしば文末におかれ（日本語の「か」など）、否定標識も文成分として動詞に後置される傾向があると指摘する（日本語の「ない」など）。そしてこのような統語的配列によって、OV 言語において文の命題全体を限定する範疇成分が動詞の後に置かれるとき、動詞に対して接尾辞などの形式でゆるやかに添加され、膠着的になるのだという。その他、名詞とその修飾語との語順についても議論を進め、VO 言語では名詞の修飾成分が名詞に後続し、OV 言語では名詞の修飾成分が名詞に先行すると言う。この現象については、動詞の目的語がしばしば名詞であるため、目的語名詞の位置を基準として、その修飾語が動詞とは反対側に配列されたものと解釈している。

以上の文法的な含意関係の他、OV 語順をもつ膠着的言語の多くが備える音韻的特徴として、①母音末尾型の音節構造（「C (C) V」構造）、②母音調和、③ピッチ・アクセントなどを挙げる。しかし基本語順と音韻的特徴の間に因果関係を見出すことには慎重な態度を採っている。

7.2.2 原始印欧語の再構と目的語語順変化メカニズムの推定

Lehmann(1973)は、以上のような含意関係を古代語の再構成に応用することも試みている。例えば原始印欧語 (PIE) の基本語順について、Lehmann(1973)は OV 型を推定する。周知のように、現存する印欧語族の基本語順は OV 型と VO 型の双方(ケルト語派などは VSO 型)がみられ、初期の文献言語であるサンスクリットや古典ギリシア語などにも VO 型と OV 型のいずれもが見出される。Lehmann(1973)が、それらの祖語として OV 型を推定するのは、一つには、リグ・ヴェーダ言語の比較構文において、相対的に古い部分に OV 言語に優勢な形式（比較基準が形容詞に先行する）が、新しい部分に VO 言語に優勢な形式（比較基準が形容詞に後続する）がみられるからであり、もう一つには、他の初期の印欧語方言において、OV 言語に優勢な後置詞構造がみとめられるからである。そしてこの推定に立つと、初期の印欧語に関係節構造 (relative construction) を標示する関係代名詞が存在しなかったという問題、さらにインド・イラン系言語に再帰代名詞が存在しないという問題も、それらが OV 言語には一般に存在しないという類型論的な含意関係と符合するために、難なく解決されるのだとする。

¹²⁰ Lehmann(1973)は、「一致」「ダイクシス」などの範疇に関わるマーカーは異なる配置原則に従うと指摘する。例えば、「一致」に関わる「数」「性」のマーカーは、VO 言語でも動詞語幹の前に置かれることはないという。なお、テンスやアスペクトは、意味的には命題的範疇と考えられるが、Lehmann(1973)は、これらが VO 言語においてしばしば動詞接辞として後置されるため、命題全体を限定する範疇とは区別して扱うべきとの立場をとっている。

さて、以上のような議論の後、目的語の語順変化のメカニズムにも言及している。Lehmann(1973)は、類型論的特徴のうち、VO型かOV型かという基本語順が本質的であり、基本語順が変化すれば、屈折的・膠着的・孤立的という形態的特徴も変化すると考えているようである。本論文の理解によれば、Lehmann(1973)は、基本語順と類型論的特徴の変化について、以下のような主張をしている¹²¹。

- (1) **基本語順の変化**：VO型かOV型かといった基本語順の変化は、言語接触における「借用」によって生ずる。
- (2) **形態的特徴の変化**：OV言語は膠着語的形態へと向かう傾向があり、VO言語は屈折的形態を経て、孤立的形態へと向かう傾向がある。後者については主語の位置が関係しており、VO型の含意関係によれば命題の限定成分は動詞の前に置かれることになるが、必ずしも動詞の直前ではなく主語よりも前に置かれる可能性があるからである¹²²。

そして上の(1)の典型的な例として、南アジアのオーストロアジア語族に属するムンダ語(Munda)の例を挙げる。ムンダ語は、ドラヴィダ諸語と隣接する相対的に西の地域に分布しているが、OV型の語順であり、名詞修飾語が名詞に先行し、形態的には膠着的である。一方、同じくオーストロアジア語族に属するクメール・ニコバル諸語(Khmer-Nicobar languages)は、VO型の語順であり、名詞修飾語が名詞に後続し、形態的には孤立的である(ただし接頭辞を備える)。これらのことを踏まえた上でLehmann(1973)は、ムンダ語が複合語においてはVO語順を持ち、名詞修飾語が名詞に後続する場合もあり、なおかつ接頭辞も持つといったVO型の特徴も備えていること、それに対してクメール・ニコバル諸語は一貫したVO語順であることに着目し、ムンダ語のOV型語順がおそらく隣接するドラヴィダ諸語から借用したものであり、本来はVO型の語順であったと推定している。この推定によれば、ムンダ語の膠着的形態は、OV型語順の借用の後に生じたものということになる。

以上のように、Lehmann(1973)のモデルでは、「目的語の語順変化」は、「借用」という言語体系の外的要因による変化でしか想定されておらず、基本語順の異なる言語との言語接触により生ずるということになる。

¹²¹ Lehmann(1973)は、7.2.2の(1)(2)の他、現在知られている言語では、語形変化的(declensional)なものから膠着的なものへと変化した例、或いは初期にはVO型であったと推定されるものがOV型へと変化した例は少ないことを指摘している。ただしこれは、類型論的言語変化の原則を主張したのではなく、経験的に言語事実を述べたものにすぎない。

¹²² 命題の限定的成分が主語の前に置かれた場合、それは動詞の接頭辞的な成分ではあり得ず、自律的な語彙として表現されることを踏まえていると考えられる。

7.3 Vennemann(1974)——統語的曖昧性による語順変化のモデル

Vennemann(1974)の立場は、類型論的観点から基本語順と形態的特徴との間に共時的な含意関係をみとめている点で、Lehmann(1973)と共通する立場にたつものと言える。しかしながら、Vennemann(1974)による目的語語順変化のモデルは、目的語の語順変化の主要な要因を言語体系内に求めている点で、Lehmann(1973)のそれとは本質的に異なるものである。

Vennemann(1974:350)は、主語 (S)・目的語 (O)・動詞 (V) の基本語順について、(S)OV 型、(S)VO 型といった表現をせず、定動詞が平叙文の主節末尾に位置するものを SXV 型或いは XV 型 (一般に言う SOV 型に相当)、然らざるものを SVX 型或いは VX 型 (一般に言う SVO 型に相当) とする枠組みを用いつつ論を進める¹²³。これは、基本語順として、動詞と目的語の語順のみならず、副詞と動詞、主要動詞と助動詞といった統語成分の関係を包括した演算子(operator)と演算項(operand)の語順を基準することを意図したものである (動目構造では動詞が演算項、目的語が演算子に相当する)¹²⁴。そして、Greenberg(1996:96)の普遍性 41 「もしある言語において、支配的語順のなかで動詞が名詞主語と名詞目的語のいずれにも後置されるのであれば、その言語はほとんどいつも格体系を備えている」¹²⁵を引用しつつ、動詞の前に二つの名詞句が並ぶ SXV 型 (SOV 型) では、S と O との曖昧性を回避するための明確で統一的な形態的区別——典型的には格体系——が必要とされると指摘する。一方、VX 型 (VO 型) をとる言語は、S と O を標示する統一的な格体系を欠くなど、V の位置により S と O とが区別されることを前提にした体系をもつ傾向があると指摘する。すなわち、SVX 型は、S と V という二つの名詞句の間に V が挿入されることにより、S と O とが標示されていると考えるのである。その上で、S と O を標示する形態のある SXV 型言語は、時間の経過とともに音韻面においてその形態が弱化的になることになり、もし同様の

¹²³ Vennemann(1974)は、この他、VSX 型にも言及し、これが SVX 型に由来する可能性を指摘するが、VSX 型の生成の問題は、古漢語の疑問代詞の語順とは関連性が薄いため、本論文でこの問題について検討することはしない。

¹²⁴ Vennemann(1974)のこのような基本語順の考えは、以下の A の演算子(operator)と B の演算項(operand)の語順が、原則として一つの言語において一貫するとの見解に基づいている。Vennemann(1974:345-346)では、次のような項目を挙げ、A が B に先行する言語を XV 型言語、と、B が A に先行する言語を VX 型言語としている。

A	B
目的語(Object)	動詞(Verb)
副詞(Adverb)	動詞(Verb)
主要動詞(Main Verb)	助動詞(Auxiliary)
主要動詞(Main Verb)	法助動詞(Modal)
名詞修飾語(Noun modifier)	名詞(Noun)
比較の基準項(Standard of comparison)	比較級の形容詞(Comparative adjective)
名詞句(Noun phrase)	接置詞(Adposition)

¹²⁵ Greenberg(1996:96)の原文は以下のようである。

Universal 41. If in a language the verb follows both the nominal subject and nominal object as the dominant order, the language almost always has a case system.

機能を備えた代用成分を発展させなければ¹²⁶、SVX 型言語へと語順が変化していくのだと考えている。

Vennemann(1974)の上述の仮説において重要な点は、印欧語史などの言語史にみられる言語事実を踏まえた上で、SXV 型言語における S と O との統語的曖昧性が如何なる状況において生ずるかを明確にしつつ、話題化などによる有標語順が生起することによって SVX 型への変化が引き起こされるというモデルを提出していることである¹²⁷。具体的には、SXV (SOV) 型では、目的語名詞 (O) が話題化されれば T (=話題) SV 語順となるが、このような有標語順をとる時、品詞レベルでは、無標の語順である SXV 語順と同じく「NP NP V」となり、主語と目的語とを明確に区別する他の何らかの手段がなければ、無標語順 (=SXV) と有標語順 (=TSV) との間に統語的な曖昧性が生ずることになると指摘するのである。そしてこの統語的な曖昧性を回避するために、まず T の後に定動詞 (V) が移動した TVX 型が出現し、さらにこの TVX 型において、V の前に置かれ得る T が主語名詞 S に限定される——話題となり得るものには主語名詞に限らず他の名詞・代名詞・副詞などがあつたと考えられている——ことにより、SVX 型への変化が生じたと推定するのである。

Vennemann(1974)のモデルが周到なのは、ロマンス語や英語などの状況を踏まえ、上述の TVX 型から SVX 型への変化として二種類の経路を考えていることである。一つは、定動詞が話題に直接に後接する TVX 型の T が主語名詞 (S) に限定されることにより、直接的に SVX 型となるという経路であり、このタイプは S と V の間に後接語的代名詞目的語(proclitic object pronouns)が生起し得る (ロマンス語など)。もう一つは、一度 TVX 型となり、次に定動詞 (V) の位置が第二番目の節位置に固定化されるという変化が生じ、そのあとで T が主語名詞 (S) に限定されて SVX 型となるという経路であり、このタイプは定動詞 (V) が第二番目の節位置に固定されているために、S と V の間に後接語的代名詞目的語が生起し得ない (英語など)。以上は、【図表 7-1】のようにまとめられる。

¹²⁶ そのような言語がもし新たに S・O を標示する形態を発展させた場合は、XV 型に戻る変化が生ずると考えている

¹²⁷ ここでの Vennemann(1974)の議論は、SXV 型言語が SXV 語順しか持たないのであれば、第一名詞は主語、第二名詞は目的語といったように、たとえ形態的手段が弱体化していたとしても、語順による S と O との標示が機能するはずだということを前提にしていると考えられる。なお、Comrie(1989/1992:228)は、多くの SOV 型言語は動詞の結合価 (動詞の名詞項) の配列順の自由度が高く、語順による主語と目的語とを弁別する機能が不十分であり、両者の弁別が格体系の存在に一定程度、依拠していると指摘する。

【図表 7-1】 Vennemann(1974:361)の SXV 型から SVX 型への語順変化モデル

[基本語順]	SXV →	TVX	→	TVX
		動詞が話題に後接		動詞第二語順
	(T が S に限定される変化)	↓		↓
		SVX		SVX
[後接語的代名詞目的語の付加]		有		無
[例]		ロマンス語		英語

* Vennemann(1974:361)の図を基に、適宜説明を補った。

* 「後接語的代名詞目的語」(proclitic object pronouns)は動詞 V に前置される。

SXV 型から SVX 型への変化に話題化が関わっているという仮説は、現代ドイツ語や古英語の散文のように、平叙文の主節では定動詞が第二位置に置かれ、従属節では定動詞が最終位置(節末)に位置するというタイプの TVX 型言語の存在によっても支持されるという。これはすなわち、主節は TVX 型へと変化した後も、話題化の生じにくい従属節に SXV 語順が保存された現象と解釈できるということであろう¹²⁸。また定動詞と主要動詞とが目的語などを挟み込む形となるいわゆる「柰構造」は、TVX 型の平叙文の主節における構造に由来すると考えている。

そして如上のように SXV 型から SVX 型への間に TVX 型を経過したと仮定した上で、その TVX 型語順をとっている間に、形態的に接尾辞が衰退する一方、接頭辞や前置詞的形態素などが発達し、接尾辞的な膠着的形態から孤立的な形態へと向かう変化が生じるのだと推定している¹²⁹。

上に紹介してきた Vennemann(1974)のモデルの核心は、①SOV 型から SVO 型への語順変化に、S と O との統語的曖昧性が関わっていると考え、②その統語的曖昧性は、SOV 型における話題化による有標語順(OSV)によって引き起こされると考えること、という二点にあると考える。そしてこのうち、すくなくとも①の観点については、現在でも少なからぬ言語史・言語学の概説書に肯定的に継承されているようである¹³⁰。

¹²⁸ Vennemann(1974)は TVX 型言語の特徴として、いわゆる「柰構造」(sentence brace)が挙げられると主張する。この「柰構造」については、次節 7.3 の Lass(1994)のモデルの説明を参照されたい(ただし Lass(1994)の「柰構造」の英語原文は clausal brace である)。

¹²⁹ Vennemann(1974:371)は、類型論的变化の総括として、基本語順と形態特徴との対応関係と、変化の方向性に関するモデルを提出しているが、このモデルの紹介とその妥当性の検討は行わない。

¹³⁰ 例えば、歴史言語学・言語類型論の概説書である松本(2006:146)は、印欧語史における OV 型から VO 型への語順変化に関して、「その主たる要因としてしばしば指摘されたのは、語尾の弱化あるいは摩滅という形でおこる格組織の衰退である。例えば、近代のロマンス諸語や英語

7.4 Lass(1994)——韻律構造の変化と類推による語順変化メカニズム

ムのモデル

7.4.1 英語史における語順の概述

以上、紹介してきた Lehmann(1973)・Vennemann(1974)は、特定の言語を対象にしたものではなく、類型論的研究である。これに対して本節で取り上げる Lass(1994)は英語史の概説書であり、そのなかで語順変化に言及している。本論文で個別言語の語順変化を扱った Lass(1994)に言及する理由は、英語史における目的語の語順が OV 型から VO 型へという漢語における疑問代詞目的語と同様の変化を遂げたものであること、そして Lass(1994)の説が韻律構造の変化という観点を含み、本論文第六章で検討した馮勝利氏による漢語疑問代詞目的語の語順変化のモデルと共通する面を持ち合わせているからである。なお、この Lass(1994)のモデルは、言語体系内に変化の要因を求めている点で Vennemann(1974)のそれと共通性を備えているが、統語的曖昧性にその主要な要因を求めない点で、両者には本質的な差異があると考えべきである。

以下、Lass(1994)の説を紹介するにあたり、予め目的語の語順変化が生じた原始ゲルマン語 (Proto-Germanic) から八世紀から十世紀の古英語までの段階の史的変遷を概観しておく必要がある (以下の原始ゲルマン語から古英語までの記述は、原則として Lass1994 に拠る)。原始ゲルマン語の基本語順については種々の議論があるが、基本的には原始印欧語 (Proto-Indo-European) の SOV 型の語順を継承していたと考えられている。古英語 (Old English) に近い段階としては三世紀から七世紀の北西ゲルマン語 (Northwest Germanic) 資料が確実なものであるが、そこでは他動詞節は OV 型 (主に SOV 型。一部 OVS 型を含む) が約 70%、SVO 型が 20% であって (他は動詞が文頭に位置する語順)¹³¹、原始ゲルマン語

にみられる S-V-O 語順の固定化が、「主格」・「対格」の形態的区別の消失と密接に関連することは確かであろう。しかしこの2つの現象のはたしてどちらが原因でどちらが結果であるかは、容易にはきめがたい」として、格屈折体系の弱化と語順変化のいずれが「因」でいずれが「果」であるのかは保留しつつも、SOVV型からSVO型への語順変化にはSとOとの統語的曖昧性が関わるとする立場を取っている。

その他、例えば、英語史の概説的テキストある Culpeper(2015:72)では、英語史においてOV型がVO型へと変化した現象は、何千年もの時間をかけつつ格変化の消失という現象と相伴って進行したことを指摘した上で、このような現象の一因と考えるものとして、SVO語順ではSとOとが明確に隔てられているために曖昧性の生ずる可能性が低く、当該の成分が如何なる役割を果たしているのかを示す格標示の必要性が低いことを挙げている。Culpeper(2015)は英語史における格屈折の消失と、それによって生じた統語的曖昧性がOV型への語順変化を引き起こしたと明確に主張しているわけではないが、この語順変化の背景にSとOの統語的曖昧性があることは示唆していると言える。

¹³¹ 前置詞—後置詞の対立では前置詞型であり、前置修飾—後置修飾の対立では4:1で後置修飾型が優勢である。

以来の OV 型語順の優勢は明白である。ところが八世紀から九世紀の初期古英語の段階に至ると、この状況に変化が見られ、両語順の出現頻度の差異が縮小する。例えば八世紀中葉のキャドモンの賛歌 (Caedmon's Hymn) のノーサンブリア方言版では、主節に生じた他動詞構文 4 例のうち、OV 型と VO 型とがいずれも 2 例ずつと拮抗し¹³²、九世紀の Martyrology 断片では、OV 型が 17 例、VO 型 (ただし動詞先行型命令文を含む) が 14 例となり、大凡 1.5 : 1 の比率となっている¹³³。ただしこのような古英語の段階における変化で重要なことは、OV 型から VO 型への変化が主節に限られ、従属節については OV 型が保たれるという傾向がみられることである。九世紀の West Saxons の王、Alfredian 時代の散文では、話題化のない主節の多数はすでに VO 型でとなっているが、従属節は OV 型を保つ傾向があった。この語順のパターンは、現代ドイツ語あるいはオランダ語に類似する。そしてその後、十一世紀から十七世紀の中英語 (Middle English) の段階に至ると従属節においても VO 型への移行が生じ、十八世紀以降の現代英語 (Modern English) では主節と従属節とを問わず、完全に (S)VO 型となった。

7.4.2 韻律構造の変化と類推による語順変化のメカニズム

Lass(1994)によれば、上述のような英語史における語順変化に主として関わるのが、「動詞第二位語順」(verb-second order)と「枠構造」(clausal brace/Satzlammer)という二つの言語現象である。

「動詞第二語順」は、平叙文において動詞あるいは助動詞が原則として文頭から数えて第二番目の位置におかれる現象である。主にゲルマン語派——ただし現代英語を除く——にみられ、言語によって主節のみでみられる場合と、従属節でもみられる場合とがある。現代英語は動詞第二語順ではないため、XSVO (X は副詞のような、任意の統語成分) のような語順が許容されるが、ドイツ語やスウェーデン語のように、主節が動詞第二語順の言語では、先頭のスロットを主語以外のものが占めていれば、動詞は文頭から第二番目の位置に移動することになる。この動詞第二語順への傾向は初期の古英語においてみられ、さらに古サクソン語 (Old Saxon)、9 世紀以降の古高地ドイツ語 (Old High German) などにもみられる。ただし古英語における動詞第二語順の傾向は、後に他のゲルマン系の言語にみられる現象ほど厳格なものではなかったという。

「枠構造」は古代の西ゲルマン語 (West Germanic) 方言に広くみられる。これは、主節が定形の助動詞と非定形の動詞 (不定詞、分詞) を含み、助動詞が第二番目の位置に現れた場合、主要動詞はそれに隣接せずに、節の末尾にくるというものである。この時、助動詞と主要動詞は、他の節構成素をはさみこむかたちになる。この現象は、時期としては八～九世

¹³² 前置修飾—後置修飾の対立では、2 : 1 で前置修飾が支配的となっている。

¹³³ 古英語は、前置詞—後置詞の対立では基本的には前置詞型であり、前置修飾—後置修飾の対立ではすでに前置修飾的となっているが、後置修飾もみられる。

紀の西ゲルマン語群系統に属する言語（現代ドイツ語など）にみられる¹³⁴。

これら動詞第二位語順と枠構造とがそれぞれどのように生じたのかについては多くの議論があるが（Stockwell1977 など）、両者が密接な関係にあることは明らかである。そしてこれらの生起を、いずれもヴァッカーナーゲルの法則（Wackernagel's Law）¹³⁵を反映したものとする説が有力である。ヴァッカーナーゲルの法則とは、初期の印欧諸語において、クリティック（clitics）——前接語的不変化詞（enclitic particles）や代名詞目的語などのようなアクセントの置かれない「軽い」要素（＝韻律上の弱形式）が含まれる——が主節において第二番目の位置に引き寄せられる傾向があったとするものである。

そしてこの法則を踏まえると、英語史における OV 型から VO 型への語順変化は、元々クリティックが配置されていた第二番目の位置に、「軽い」動詞類などの他の統語成分——コピュラあるいはテンス／アスペクト・助動詞など——をも入ることになったのが、その発端であると考えられることになる¹³⁶。その変化の結果として、一部の定形動詞が第二番目の位置おかれ、非定形である主要動詞が元の句の末尾に残るといった状況が生じるようになった。ここからさらに、助動詞ではない主要動詞をも第二番目の位置に入ることが許容されるようになり、動詞第二語順が主節において生じたと推定するのである。そして、助動詞を含む節についても、現代英語やイディッシュ語（中・東欧のユダヤ人で話されていたドイツ語に近い言語）のように、助動詞と主要動詞とがともに第二番目に位置する状況がもたらされたと考えることになる。以上を要するに、Lass(1994)の説は次のように整理されよう。

- (1) 韻律上の弱形式であるクリティック（clitics）が、文頭から第二番目の位置に生起するようになる（ヴァッカーナーゲルの法則）。
- (2) 第二番目の位置にコピュラ・助動詞など「軽い」定形の動詞類が生起するようになる（助動詞と節末の主要動詞とが枠構造を形成するようになる）。
- (3) 第二番目の位置に主要動詞も受容されるようになり（動詞第二語順）、さらに助動詞と主要動詞が共起する場合でも両者が隣接して第二番目の位置に生起し得るようになる。
- (4) 文頭の第一番目の位置は、主語だけに限られず話題化された統語成分が置かれる位置であったが、第二番目の動詞位置が主語に続く統語的位置へと再分析され¹³⁷、SVO型の語順が実現した。

¹³⁴ ただし枠構造は、初期の北西ゲルマン語にはほとんどみられないという。

¹³⁵ Wackernagel(1892)が最初に指摘したとされる。ヴァッカーナーゲルの法則の内容の解説は、Lass(1994)の記述を参考にした。

¹³⁶ Lass(1994)は、古英語においては、一般的に助動詞が主要動詞の後ろに置かれていたと仮定している。

¹³⁷ Lass(1994)自身は「第二番目の動詞位置が主語に続く統語的位置へと再分析された」とは明言していない。本論文の筆者が、前後の記述から Lass(1994)がこのようなプロセスを前提にしていると推定したにすぎない。

如上の説は、まず韻律上の弱形式が、それが担う統語的役割に拘わらず第二位置に置かれていたという状況を仮定した上で（ヴァッカーナーゲルの法則）、その後、韻律構造の変化と類推が生じた結果、主要動詞までも第二位置に生じ得るようになり、固定化されるに至ったとする説だと整理できよう。よって韻律構造の変化と類推による語順変化モデルとみなし得る。

Lass(1994)は以上の説明を絶対的なものとは考えていないようであり、Stockwell(1977)のように、動詞第二語順が、話題化された副詞により導かれる動詞第一語順の文から生じたとする説にも言及している¹³⁸。この説によれば、上記のモデルの(3)までがプロセスが異なってくることになる。

本論文は以上のLass(1994)による説明の是非を論ずる材料を持ち合わせてはいない。しかし漢語の疑問代詞目的語の語順変化に関する馮勝利氏の理論と比べると、「韻律構造が変化した」という理論の前提が、少なからぬ言語現象によって裏付けられている点が異なることは指摘できる。まず、主節の第二番目の位置が弱形式に限られるというヴァッカーナーゲルの法則は、ギリシア語、ヴェーダ言語、ヒッタイト語といった複数の初期印欧語において確認され（モデル(1)の段階）、さらに主節の第二番目の位置に許容される統語成分が、韻律上の弱形式から徐々に非弱形式まで拡大する現象も、文献上の言語事実として一定程度は観察され得るものである（モデル(2)(3)の段階）。本論文は以上のLass(1994)の説自体の是非を論ずることはその任としないが、少なくとも馮勝利氏の説と異なり、「韻律構造の変化」という大前提を支持する少なからぬ言語現象を認め得る点で、信頼性がより高いものであると考える。

¹³⁸ Stockwell(1977)らの立場では、動詞第一語順は古ゲルマン語においては通常の語順ではなかったが、「V+S(+O)」という構造があったとき、副詞の移動が「Adv+V+S(+O)」という語順を生み出し、この構造が動詞第二位語順のモデルとして働いたことにより、動詞第二位語順が一般化したと考えるのである。

第八章 通時的観点による疑問目的語語順変化の類型

古漢語における疑問目的語の語順変化について、第四章で述べた上古中期の『論語』『孟子』の状況（【図表 4-1】【図表 4-2】【図表 4-3】）と、第六章で述べた中古前期の『中本起経』『六度集経』の状況（【図表 6-8】）、及び中古後期の『雑宝蔵経』『過去現在因果経』の状況（【図表 6-9】）とを対照すると、次の二点を見出すことができる。

- (i) 疑問目的語の語順変化の進行過程は、疑問目的語の種類によって異なる。例えば、上古中期の『論語』『孟子』においてすでに出現し、中古後期の『雑宝蔵経』『過去現在因果経』まで保たれていた「何」「誰」のうち、「誰」は語順変化を生じたが、「何」の方は少なくとも動詞目的語となった場合は基本的には前置規則を保ち続けた（但し「何」が介詞目的語となった場合には後置に転じた用例が少なからず存在する）。
- (ii) 疑問目的語の語順変化の進行は、疑問目的語の語彙的交替と密接に関連している。疑問目的語のうち、すでに上古中期の『論語』『孟子』に見え、中古後期の『雑宝蔵経』『過去現在因果経』まで保たれたものは、「何」「誰」などに限られる。中古までの間に、新たに大量の複音節「何 X」疑問代詞が出現し、疑問目的語体系の語彙的交替が進んだが、これら新出の疑問目的語の多くは一貫して後置語順を示している。

上述の二点は、基本的には他の上古・中古期の文献においても——疑問目的語によってはその語順の状況が同時代でも文献によって異なることがあるにせよ——見出すことができる。以下に、上古中期から中古期にかけて出現した疑問目的語を、語順変化の進行過程の類型によって、甲・乙・丙の三類に分類して整理しておく。

甲類：少なくとも中古期までは一貫して動詞に前置された疑問目的語。構造上は単音節のものが主であり、上古中期・後期からみられる「安」「胡」「何」の他、中古期に新出した「如」「若」「所」などもこの類に属する。複音節のものには「何所<-場所>」（=場所ではなく一般の事物を問う「何所」）がある。「何」もこの類に分類し得るが、やや特殊であり、介詞目的語になった場合には、中古期においてしばしば後置の語順をとる。

乙類：上古後期以前は動詞或いは介詞に前置され、原則として中古期以降になって後置に転じた疑問目的語。すなわち実際に語順変化を生じた疑問目的語である。「誰」がこの類の典型であり、「何等」もこの類に分類され得る。

丙類：上古後期以降になって出現し、一貫して動詞或いは介詞に後置された疑問目的語。構造上は複音節であり、「何罪」（どんな罪）のような「何」が名詞の修飾語となった「何-X」型の疑問フレーズがこの類の典型である。さらに「何-X」疑問フレーズが一語化

した「何物」「何許」といった「何 X」疑問代詞も、多くはこの類に属する。

上に示した疑問目的語の語順変化の状況には、近古前期の疑問目的語は含まれていない。近古前期には形式的には単音節の「甚」が新たに丙類に加わる、或いは「甚」「何」以外の非禪母系単音節疑問目的語がほぼ消失する、といった重要な語彙交替が生ずるものの（本論文 10.4 参照）、語順類型としてはやはり上述の甲類・乙類・丙類の枠組みのなかで考えることができる。

さて、上に示した疑問目的語の語順変化の状況は、従来、文法史の概説書等に広く紹介されてきたものとは異なる点に注意されたい。例えば、王力(1958/2004:426)は「南北朝以降に到り、この疑問代詞目的語と否定文における代詞目的語の後置の発展は、口語において完成した。これより以降、およそ書面言語で先秦時代のような代詞目的語を前置する形式を使用したものは(古文作家など)擬古に過ぎず、口語を反映したものではない」と述べている¹³⁹。このように従来の多くの研究では、中古期の口語では、原則としてすべての疑問目的語がすでに後置に転じていたと推定している。その場合、中古以降にみられる前置語順は擬古的現象にすぎないことになろう。しかし、本論文は、中古期になってから出現した「如」「若」「所」などの疑問目的語も一貫して前置語順を保っていることから、疑問目的語の前置規則自体は中古期を通じて口語から消失してはいなかったと考える。以下の第九章から第十二章にかけて論じるように、語順変化を生じた疑問目的語には、それぞれ後置へ転じた積極的な要因があったと考えられる。

本論文は、上古中期から近古前期にかけて出現した疑問目的語について、まず形式の点から分類した上で、それぞれの語順変化の進行過程を記述し、そのメカニズムを解明することを試みる。以下、第九章では禪母系単音節疑問代詞目的語の語順変化を、第十章では非禪母系単音節疑問代詞目的語の語順変化を、第十一章では複音節「何-X」疑問フレーズ目的語の語順変化を、第十二章では複音節「何 X」疑問代詞目的語の語順変化を論じていく。

¹³⁹王力(1957-58)の当該の部分は、主に唐宋時代の擬古文を念頭において述べられているようであるが、この箇所では挙げられる用例などから、王氏が南北朝期(=中古後期)の口語では後置の語順が完成していたとみていたと推定される。原文は以下の通り(なお王力 1957-58 では「X 以降」という表現は「X」を含むようである)。到了南北朝以後、這種疑問代詞賓語和否定詞中代詞賓語後置的發展已經在口語中完成了。從此以後、凡是在書面語言運用先秦時代那種代詞賓語前置的結構的(如, 古文作家), 那只是仿古, 而並不反映口語。(王力 1958/2004:426)

第九章 単音節疑問目的語の語順変遷（一）

——禪母系疑問代詞目的語

本章では、禪母系疑問代詞目的語の語順変化のメカニズムを論じていくが、論述の便のため、以下に予め結論を述べ、本章での議論の道筋を示した上で、具体的な検討に入ることとしたい。

本論文は、禪母系疑問代詞目的語の語順変化を促した主要な要因は、「誰+V2/3」（V2は二項動詞、V3は三項動詞の意）という構造に内在する「統語的曖昧性を解消しようとする欲求」だと考える¹⁴⁰。すなわち語順変化が発生する前には、「誰+V2/3」構造における統語的曖昧性——「誰」が主語なのか目的語なのかという曖昧性——が、「孰」と「誰」の交替による、ある種の格標示体系によって回避されていたのであるが、上古後期以降はこの格標示体系が崩壊していったために統語的曖昧性が増加することになり、結果としてその統語的曖昧性を回避するために語順によって主語と目的語とを標示する手段が取られるようになり、目的語が後置に転ずるようになったのだと考えるのである。

以下、本論文 9.1 において、上古中期では禪母系疑問代詞「孰」と「誰」によるある種の格標示体系が見出されることを論証し、そのことを踏まえた上で、本論文 9.2～9.4 において禪母系疑問代詞目的語の語順変化メカニズムを解明することを試みる。

9.1 上古中期における状況——禪母系疑問代詞の統語的相補分布

本節では、上古中期の『左伝』『国語』『論語』『孟子』『呂氏春秋』を資料として、禪母系疑問代詞「孰」「誰」の統語的・談話的機能について、共時的・通時的な面からの分析を加える。まず、人または人の集団（以下、〈+人〉と表現する）を指示する場合と、それ以外の事物を指示する場合（以下、〈-人〉と表現する）とに分けて分析を行い、『論語』『孟子』『呂氏春秋』における特定の文型においては、「孰」或いは「誰」が〈+人〉を指示する場合、「孰」は主語しか担わないが、「誰」は目的語のみを担う傾向が顕著であり、両者が統語的な相補分布を示していることを指摘し、さらにそのような文型においては「孰」と「誰」の交替が格標示機能を担っていたという仮説を提出する。以上のように、指示対象が〈+人〉であるのか〈-人〉であるのかに分けて分析を進めるのは、「孰」「誰」の統語的・談話的機能が、〈+人〉か〈-人〉かによって異なるためである。【図表9-1】は参考のために、「孰」「誰」の上古中期五文献における出現数を、指示対象

¹⁴⁰太田(1988:28)はすでに、上古時期において「誰」は主語となり得るけれども、何らかの生起条件上の制限があったであろうことを示唆している。

(〈+人〉 / 〈-人〉) に分けて示したものである¹⁴¹。

【図表 9-1】上古中期五文献における禅母系疑問代詞の用法別出現数

	左伝		国語		論語		孟子		呂氏春秋	
	孰	誰	孰	誰	孰	誰	孰	誰	孰	誰
全用例数	26	129	33	63	16	12	24	12	27	13
〈+人〉を指示	10	129	24	63	13	12	13	12	24	13
〈-人〉を指示	16	0	8	0	3	0	11	0	1	0

* 指示対象が国名の場合、原則として〈+人〉とみなすが、当該の文脈において人または人の集団と解釈し得ない場合はその限りではない。

下例の「孰」の指示対象は二つ。一つは「身」（「わが身」のこと、すなわち〈+人〉）であり、もう一つは国名の「梁」である。ここでの「梁」は、前後の文脈から、国を構成する要素のうち「国土」の側面に際立ちが与えられていると解釈されるため、〈-人〉とみなす。このような場合、「孰」の指示対象が〈+人〉なのか〈-人〉なのかを判定し難い。上表では「全用例数」にのみ算入する。

・又曰：「梁孰與身重。」（『呂氏春秋・覽部・應言』2-1222）

〔（魏敬は魏王に）また言った「梁と王ご自身とはいずれが大切でしょうか。」〕

* 下例については統語構造の解釈が難しい。上表ではこれらも「全用例数」にのみ算入する。

・國人誦之曰：「貞之無報也。孰是人斯，而有是臭也。…」（『国語』「晋語三」304）

〔国人はこのことを吟誦して言った「正しい礼に従ってもよい報いが得られない。いったい誰がこのような悪臭を出させるのか。…」〕

・戎人見暴布者而問之曰：「何以為之莽莽也。」指麻而示之。怒曰：「孰之壤壤也，可以為之莽莽也。」（『呂氏春秋』「覽部」「知接」2-978）

〔戎人が布をさらす者を見かけてたすねて言った「何を用いて（そのような）長いものを作ったのか。」〕

〔布をさらしていた者は）麻を指して戎人に示した。（戎人は）怒って言った「いったいこんな乱雑な物のうちどんな物が、長いものを作る材料とされ得ることがあろうか。〕

9.1.1 〈-人〉を指示する用法

9.1.1.1 談話レベルにおける生起条件

上記五文献において、禅母系疑問代名詞が〈-人〉を指示する場合、「孰」だけが生起し、「誰」は出現しない。そして「孰」が生起する場合、さらに談話レベルでの生起条件の制限を受ける。すなわち原則として複数項目の中から一つを選択するという用法——呂叔湘(1944)の言う「多中択一」（多くの中から一つを選ぶ）という用法——に限られる。また、多くの場合「孰」の指示範囲を制限する語句が主題（topic）となっている。本論文ではこのような主題を「〈範囲限定〉」と称することにする。上記文献において、「孰」の生起した文に

¹⁴¹ 【図表 9-1】では「誰」が〈-人〉を指示する用例は存在しないが、例えば上古初期の『詩経』などには、「誰」が〈-人〉を指示しているとみなされる例も散見される。

〈範囲限定〉が現れる割合は、『左伝』では100%、『国語』では約88%、『論語』では約65%、『孟子』では約82%である（『呂氏春秋』では〈一人〉を指す「孰」は1例しかない）。以下に示す用例において二重下線を付したものが〈範囲限定〉である。〈範囲限定〉の形式には、単純な名詞句のほか、複数の動詞句が接続詞（「與」など）を介して結合した「V1 與 V2」形式のものなどもみられる。

- (9-1) 子家子曰：「…或欲通外内，且欲去君。二三子好亡而惡定，焉可同也。陷君於難，罪孰大焉。…」〔『左伝』「昭公二十五年」4-1466〕

〔子家子は言った「…ある者は、外部（＝魯の家臣）と連絡をとろうと、わが君のもとを離れ（て奔走す）るつもりであるが、あなたたちは逃亡するのを好んで、（わが君の君位を）安定させるのを好まない。（そのようでは）どうして（好むものと憎むものとを、我々のなかで）同じにできましようか。君主を困難に陥れることについては、*これより大きい罪などありましようか（＝罪としてどんなものがこれより大きいでしょうか）。…〕

- (9-2) 又曰：「我，家臣也，不敢知國。凡有季氏與無，於我孰利。」〔『左伝』「昭公二十五年」4-1464〕

〔（叔孫氏の司馬鬷戾が、叔孫氏の家臣たちに）さらに言った「私は叔孫氏の家臣です。国家のことは分からないが、季氏がいるのといないのとでは、我々にとってはどちらが有利であろうか。〕

- (9-3) 鄭厲公見虢叔，曰：「吾聞之，司寇行戮，君為之不舉，而況敢樂禍乎。今吾聞子頽歌舞，不思憂也。夫出王而代其位，禍孰大焉。…」〔『国語』「周語上」28〕

〔鄭の厲公が虢叔に会って、言った「私は次のように聞いております。司寇が死刑を執行すれば、君主はそのために豪華な食事をとることをしない、と。ましてや禍を楽しむようなことをするでしょうか。今、私が聞きますに、子頽は歌舞をして、憂いを感じないそうです。そもそも王を追放してその位に代わるとは、*これより大きな災いがありましようか（＝災いとしてどんなものがこれより大きいでしょうか）。…〕

- (9-4) 吳王懼，乃合大夫而謀曰：「越為不道，背其齊盟。今吾道路修遠，無會而歸與會而先晉，孰利。」〔『国語』「吳語」546〕

〔（越が反乱を起こしたという知らせをきくと）吳王は恐れて、大夫を集めて議論し、（そして）言った「越は道に違い、同盟に背いた。今、我々の帰路は大変遠い。同盟国と会合せずに帰ると、会合して晋に盟主を譲ると、いずれが有利であろうか。〕

- (9-5) 子夏聞之曰：「噫，言游過矣。君子之道，孰先傳焉。孰後倦焉。…」〔『論語』「子張」4-1319〕

〔子夏はそのことを聞くと「ああ、言游は間違っている。君子の道において、

いったいどんなことがらについて先にして教え、どんなことがらについて後にして
なおざりにするといふのだろうか。…」]

- (9-6) 任人有問屋盧子曰：「禮與食孰重。」曰：「禮重。」(『孟子』「告子章句下」2-805)
〔任国の人が、屋盧子にたずねて言った「礼と食とではどちらが重要か。」(屋盧子が
言った「礼の方が重要だ。』〕

以下に示したものは、五文献にみられる〈範圍限制〉を欠く用例である。

- (9-7) 「…有帶甲五千人，將以致死，乃必有偶，是以帶甲萬人事君也。乃即傷君王之所
愛乎。與其殺是人也，寧其得此國也，其孰利乎。(『国語』「越語上」568)¹⁴²
〔(越王は大夫文種を呉に使者として派遣し、彼を通じて呉王に言った)「…武装した
兵五千が(私、越王に) 殉ずるつもりになれば、きっと一人が二人にも匹敵しましよ
う。そうなれば武装した一万人が(越の) 君主に尽くすこととなります。(もし戦え
ば) 呉君の愛する民衆を殺すことになるでしょう。(越の) 民衆を殺すよりは、むし
ろこの(越の) 国(を服従させることを) 手に入れた方がよいのではないでしょう
この両者のいずれに利があるでしょうか。』〕
- (9-8) 孔子謂季氏：「八佾舞於庭，是可忍也，孰不可忍也。」(『論語』「八佾」1-136)
〔孔子が季氏のことを言った「(天子のみに許された) 八佾の舞がその廟の庭で舞わ
れている。こんなことが耐えられるのであれば、いったいどんなことが耐えられな
いだろうか。』〕
- (9-9) 孟子曰：「…不失其身而能事其親者，吾聞之矣。失其身而能事其親者，吾未之聞
也。孰不為事。事親，事之本也。…」(『孟子』「離婁章句上」1-524)
〔孟子が言った「…自分の身を正しく守って、よくその親につかえることができた者
は、私も聞いたことがある。しかし自分の身を正しく保たないで、よくその親につ
かえることのできた者など、私は聞いたことがない。(いったい君主につかえるのも、
親につかえるものも、皆つかえることであって) どれがつかえることでないとい
うのか。親につかえることは、その根本なのである。…』〕

これらの用例は形式上の〈範圍限制〉を欠いているが、少なくとも用例(9-7)(9-9)について
は、文脈から「孰」の指示範圍が意味的に限定されていると考えることができる。「孰」が
〈一人〉を指示する場合、その絶対多数が「多中択一」の用法であると言える。

注意すべきは、『左伝』においては、「孰」が〈一人〉を指示する16例のうちすべての用

¹⁴²もし用例(9-7)における「與其殺是人也，寧其得此國也」が形式上の〈範圍限制〉とみなし得
るのであれば、『国語』において「孰」が〈一人〉を指示する場合、『左伝』の場合と同じくそ
のすべての用例に〈範圍限制〉が出現することになる。この場合、『国語』において〈一人〉を
指示する「孰」は、『左伝』におけるそれと同じく、統語上は主述述語文の第二主語しか担い得
ないことになる。

例に例外なく形式上の〈範囲制限〉が現れていることである。これが偶然でなければ、『左伝』における「孰」は単独で文の主語を担うことができず、主述述語文の第二主語（小主語）のみを担うものであったことになる。その場合、『左伝』における「孰」の生起条件は統語レベルでの制限をも受けていたことになる。

9.1.1.2 統語レベルにおける文法分布

「孰」が〈一人〉を指示する場合の統語的分布は【図表 9-2】のようにまとめられる。

【図表 9-2】「孰」が〈一人〉を指示する場合の統語的分布

	主語（第二主語）	「孰與」構文
左伝	16(16)	0
国語	8(7)	0
論語	3(2)	0
孟子	11(9)	0
呂氏春秋	0	1

*最左列は文献名、最上行は「孰」の担う文法成分を表す。数字は当該の用例の出現頻度。なお、

() 内は主述述語文の第二主語になった頻度を表す。

*「孰與」構文とは次のように「X 孰與 Y (+之) (+A)」(A は形容詞を表す)の形式で、「X」と「Y」とを比較した場合いずれがAか、或いは「XはYと比べてどうであるか」といった構文的意味を表す構造を指す。この「孰」がどのような統語成分であるのかについての判断は保留しておきたい。

・又曰：「梁孰與身重。」(『呂氏春秋』「覽部」「應言」2-1222)

〔(魏敬は魏王に) また言った「梁と王ご自身とはいずれが大切でしょうか。〕〕

【図表 9-2】から、「孰」の担う統語成分は主語に限定されていること、またその多くが主述構造のうちの第二主語となったものであることが知られる。これに関して次の二点を指摘しておきたい。第一点は、上古漢語において疑問代詞が目的語となる場合、一般にはそれと動目関係を結ぶ述語動詞或いは介詞の前に位置するため、往々にしてそれが主語であるのか目的語であるのかを認定することが難しいということである。この認定方法については、本論文の 9.1.2.2 において詳細に論ずることとする。第二点は、上述のように「孰」が『左伝』のなかで主語になる場合、主述述語文の第二主語に限られるということである。この点からすれば、『左伝』の「孰」は太田(1964)が言うところの『其』字結構における「其」と類似していると言えよう。『左伝』において〈一人〉を指示する「孰」は、典型的な主語ではなく、統語論的には連用修飾語に近い非典型的な主語だった可能性が高い¹⁴³。

¹⁴³この点に関連しては、魏培泉(1999)が、GB 理論の枠組みにより、上古中期漢語（魏氏は「先秦漢語」と表現。同論文では主に戦国時代の資料を使用している）の疑問代詞の統語的位置について論じている内容が参考となる。魏培泉(1999:272)は、主題主語や副詞との語順などから、

9.1.2 〈+人〉を指示する用法

9.1.2.1 談話レベルにおける生起条件

〈+人〉を指示する場合、「孰」と「誰」のいずれもが生起し得る。

「孰」が〈+人〉を指示する場合、形式上の〈範囲限定〉の生起は、『左伝』『国語』『論語』『孟子』『呂氏春秋』の五文献のいずれにおいても義務的ではない。「孰」が主語となった文に〈範囲限定〉が生起する割合は、『左伝』『国語』では50%、『論語』『孟子』では約31%、『呂氏春秋』では約60%である¹⁴⁴。「孰」が〈+人〉を指示する場合、それが〈一人〉を指示する場合に比べ、当該の「孰」を主語とする文に〈範囲限定〉が生起する割合が少ないことが知られる。注目すべきは、〈範囲限定〉を欠く「孰」が主語となった文において、意味上の範囲限定をも欠いている用例が存在することである。

- (9-10) 驪姫曰：「…凡民利是生，殺君而厚利眾，眾孰沮之。殺親無惡於人，人孰去之。…」(『国語』「晋語一」265)

[孰：〈範囲限定〉有り]

[驪姫は言った「…凡そ民の利益が生ずるとき、君種を殺しても民衆を厚く利するならば、民衆は誰が彼を阻むでしょうか。親を殺しても人々に憎まれなければ、人々のうち誰が彼を去るでしょうか。…」]

- (9-11) 於是羊舌職死矣。晉侯曰：「孰可以代之。」(『左伝』「襄公」三年3-927)

[孰：〈範囲限定〉無し]

[この時、羊舌職が死んだ。晋侯は言った「誰なら彼に代えて（中軍の尉の補佐役に任命しても）よいか。」]

- (9-12) 或曰：「孰謂鄆人之子知禮乎。入太廟，每事問。」(『論語』「八佾」1-183)

[孰：〈範囲限定〉・意味上の〈範囲限定〉いずれも無し]

[ある人が言った「いったい誰があの鄆人の子を礼に通曉していると言うのか。太廟に入るたびに、どんなことでもたずねようとする。」]

- (9-13) 夷吾告冀芮曰：「呂甥欲納我。」冀芮曰：「子勉之。國亂民擾，大夫無常，不可失也。非亂何入。非危何安。幸苟君之子，唯其索之也。方亂以擾，孰適禦我。」

「孰」「誰」の一般に主語とされている用法は、主語とみなすべきできではなく、連用修飾語に近いものであると指摘している。ただし、魏氏のこの議論は、『左伝』と他の上古中期の文献における「孰」の用法の違いを踏まえたものではなく、また「孰」が〈一人〉を指す場合に限定したものではない。

¹⁴⁴各文献における〈+人〉を指示する「孰」の出現数は、【図表9-1】を参照のこと。なお、『呂氏春秋』の「孰」を主語とする文は、文中に生起する〈範囲限定〉のうち8例が、以下のように「非+N」という特殊な形式をとる。

・皆曰：「此不下九石，非王其孰能用是。」(『呂氏春秋』「論部」「壅塞」2-1580)

[(宣王の臣下たちは) みな言った「これは(=宣王の弓)九石を下まわらない重さがあります。王でなければ誰がこれを用いることができますでしょうか。」]

大夫無常，苟衆所置，**孰**能勿從。…」（『国語』「晋語二」293）

[孰：〈範囲限定〉・意味上の〈範囲限定〉いずれも無し（？）]

〔夷吾が冀芮に言った「呂甥が私の帰国を受け入れようとしている。」冀芮は言った「努力してください。国が混乱し民衆はかき乱されており、大夫たちは定見がありません。（このよい機会を）逃してはなりません。動乱がなくてどうやって（後を継ぎ争いに）参入することができますでしょうか。（民衆に）に危難がなければどうして（彼らを）安んずることができますでしょうか。幸にもあなたは国君の息子であり、そのために（彼らは）あなたを迎え入れようとしているのです。今、国が混乱し民衆はかき乱されているときに、いったい誰が我々を防ぐことができますでしょうか。大夫たちは定見がなく、もしみな（あなたを国君に）立てたら、いったい誰が従わないことができますでしょうか。…」]

(9-14) 校人出，曰：「**孰**謂子産智。予既烹而食之，曰得其所哉。得其所哉。」（『孟子』「萬章上」2-627）

[孰：〈範囲限定〉および意味上の〈範囲限定〉いずれも無し]

〔その池守は（子産との面会場所から）退出して言った「誰が子産を聡明など言ったのか。わしがもう（その魚を）煮て食べてしまっているのに、『それ（＝その魚）はすむべき場所にかえった、すむべき場所にかえった』などと言っていたぞ。』]

以上から、「孰」が〈十人〉を指示する場合は、「多中択一」（多くの中から一つを選ぶ）の用法に限られないことが知られる。

次に、「誰」が〈十人〉を指示する場合、〈範囲限定〉の有無は全く随意的である。本論文で資料とした五文献の「誰」を含む文において、〈範囲限定〉が出現する比率は15%を超えることはなく、また意味上の〈範囲限定〉を欠いていると思われる文も多くみられる。よって「誰」も「多中択一」の用法に限られない¹⁴⁵。

(9-15) 平子稽顙，曰：「子若我何。」昭子曰：「**人誰**不死。子以逐君成名，子孫不忘，不亦傷乎。將若子何。」（『左伝』「昭公二十五年」4-1466）

[誰：〈範囲限定〉有り]

〔季平子は頭を地面にすりつけて言った「あなたは私をどうするおつもりか。」叔孫昭子は言った「人であれば誰が死なないことがあるだろうか。あなたは主君を追放したことにより名を成すのであれば、子孫は（そのことを）忘れることはないでしょう。痛ましいことではありませんか。あなたをどうしたらよいだろうか。』]

¹⁴⁵ 「誰」が〈範囲限定〉を伴う比率は、『左伝』では約12%、『国語』では約13%、『論語』では8%前後、『孟子』『呂氏春秋』では0%である。「誰」の各文献における出現頻度については【図表9-1】を参照されたい。

- (9-16) 「郷人長於伯兄一歳，則誰敬。」曰：「敬兄。」(『孟子』「告子上」2-74)
 [誰：〈範囲限定〉無し、意味上の〈範囲限定〉有り]
 [(孟季子が公都子にたずねた)「同郷の人で、あなたの長兄より一歳年長の人
 いた場合、あなたは(その同郷の人と兄との) どちらを敬するか。」「兄の方を敬
 します。」]
- (9-17) 穎考叔曰：「敢問何謂也。」公語之故，且告之悔。對曰：「君何患焉。若闕地
 及泉，隧而相見，其誰曰不然。」(『左伝』「隱公元年」1-15)
 [誰：〈範囲限定〉・意味上の〈範囲限定〉いずれも「無し」]
 [穎考叔は言った「恐れながらお尋ねしますが、(それは)どのようなことか。
 」「莊公は彼にその理由を話し、後悔していると伝えた。(穎考叔は) 答えて言
 った「何を憂えることがありますでしょうか。もし地面を掘り黄泉に達し、地下道で
 お会いになったら、いったい誰がそのとおりでない(=「黄泉でなければ会わな
 い」というかつての言葉どおりではない) などと言うか。」]
- (9-18) 子曰：「吾之於人也，誰毀誰譽。*如有所譽者 [定州漢墓本「若有所譽者」]，其有所
 試矣。…」(『論語』「衛靈公」4-1107)
 [誰：〈範囲限定〉・意味上の〈範囲限定〉いずれも無し]
 [先生が言われた「私は他人に対して、誰を誇り誰を褒めたというのか。もし褒
 めるものがあるとすれば、それは(その人を) 試してからのことだ。…」]

以上のから、禅母系疑問代名詞が〈+人〉を指示する場合、〈-人〉を指示する場合に比
 べて、「孰」と「誰」との談話レベルでの機能差異は顕著ではないと言えよう。

ただし、本論文は、「孰」と「誰」の両者の談話機能が完全に同一だと主張しているの
 ではない。両者を含む文において〈範囲限定〉が出現する比率には一定の差異がみられるの
 であり、これは「孰」と「誰」の何らかの談話機能の差異を反映したものである可能性が高い。

9.1.2.2 統語レベルにおける文法分布

禅母系疑問代名詞が〈+人〉を指示する場合、「孰」「誰」のいずれも生起し得るが、両者の
 統語的分布における差異は大きい。以下の【図表 9-3】にその具体的な統語的分布を示した。
 なお、【図表 9-3】では主語と目的語との区別を保留している。これは往々にして両者を区別
 することが難しいためであるが、この点については、本節で具体的に検討を加えていく。

【図表 9-3】「孰／誰」が〈+人〉を指示する場合の統語的分布

		主語／目的語	連体修飾語	連用修飾語	述語	「孰與」構文	不明
孰	左伝	10	0	0	0	0	0
	国語	24	0	0	0	0	1
	論語	13	0	0	0	0	0
	孟子	13	0	0	0	0	0

	呂氏春秋	24	0	0	0	1	2
誰	左伝	113	6(5)	0	4	-	0
	国語	57	2(2)	0	3	-	0
	論語	11	1(1)	0	0	-	0
	孟子	9	0	0	3	-	0
	呂氏春秋	12	1(0)	0	0	-	0

*上表の統語分布は、文レベルではなく句レベルでの統語分布を示したものである。

*「連体修飾語」欄の（）内の用例数は、「孰/誰」が連体修飾語となり中心語との間に「之」が生起した用例数を示す。

*各文献における『詩経』『書経』など上古初期漢語を引用した部分は、用例数に含めない。

*「孰與」構文については、【図表 9-2】の注を参照。

【図表 9-3】から、禪母系疑問代詞が〈+人〉を指示する場合、「孰」と「誰」とでは、その統語分布に大きな差異がみとめられ、「誰」が述語、連体修飾語を担うことができるが、「孰」はそれが不可能であることが知られる。

上述のように、【図表 9-3】では「孰/誰」が主語なのか目的語なのかという判断を保留している。この点については、以下において具体的に考察していくが、その前に「孰/誰」が述語動詞或いは介詞の前に位置した時、主語であるのか目的語であるのかを判別し難い原因を、以下の二点に整理しておきたい。

第一に、上古においては疑問代詞が目的語となった場合、原則として直接的な統語関係を結ぶ述語動詞或いは介詞の前に置かれるため、単純な「孰/誰+V」という統語形式——当該の「孰/誰」以外に主語や目的語が生起していない「孰/誰+V」形式——においては、当該の「孰/誰」が主語なのか目的語なのか判別し難いということである（用例(9-19)を参照）。また「孰/誰+P+VP」という統語形式においても、やはり「孰/誰」が主語なのか介詞の目的語なのか（場合によってはさらに動詞の目的語なのか）判別し難いことになる（用例(9-20)を参照のこと）。

第二に、「孰/誰」を含む文において、もし文中に「孰/誰」以外に主語が生起していれば、理論的には統語的曖昧性は存在しないかのようであるが、しかし当該の主語は主題 (topic) であるかもしれず、もしそうであれば、文中の「孰/誰」は主語である可能性も目的語である可能性も存在することになる。すなわち、「S/T+孰/誰+V」という統語形式は、「S+孰/誰 o+V」であるのかもしれない、また「T+孰/誰 s+V」であるのかもしれない、さらには「T+孰/誰 o+V」であるのかもしれないということである（用例(9-21)(9-22)を参照のこと）。

以下に、上記二点に関わる例文を示しておく（日本語訳は、「孰/誰」が主語なのか目的語なのかを先取りして示してある）。

(9-19) 萬乘之主，人之闇之亦甚矣。而無所鏡，其殘亡無日矣。孰當可而鏡。其唯士

乎。(『呂氏春秋』「達鬱」2-1383)

[万国の君主ともなれば、人が阿ることが一層甚だしくなる。しかし(彼は自分自身の欠点を)鏡として移すものがなく、滅亡は間近となろう。如何なる人が鏡となって(君主の欠点を)映すことができるのか。おそらく賢士しかいないであろう。]

- (9-20) 桀溺曰：「子為誰。」曰：「為仲由。」曰：「是魯孔丘之徒與。」對曰：「然。」曰：「滔滔者天下皆是也，而誰以易之。且而與其從辟人之士也，豈若辟世之士哉。」(『論語』「微子」4-1268)

[桀溺が言った「あなたは誰か。」(子路は)言った「仲由です。」(桀溺は)言った「魯の孔丘の門弟だろうか。」(子路は)答えて言った「そうです。」(桀溺は)言った「滔々たる流れにつき従うものは、天下に満ち溢れている。いったい誰とともにその流れに逆らうというのか。まあ(あなたも)人を避ける(孔子のような)人に従うよりは、いっそ世間を捨てる(我々のような)人に従ったほうがよいではないか。]

- (9-21) 伍參言於王曰：「晉之從政者新，未能行令。其佐先穀剛愎不仁，未肯用命。其三帥者，專行不獲。聽而無上，眾誰適從。此行也，晉師必敗。…」(『左伝』「宣公十二年」2-730)

[伍參は莊王に言上した「晋の執政者たちはまだ(任期の)日が浅く、いまだ命令を(十分には)実行させることができません。副将の先穀は頑固で不仁であり、命令に従おうとしません。さらに上・中・下三軍の將軍は、自分の考えで行おうとしてもそれができず、(兵士たちは)(命令を)聞こうとしても、(従うべき)総帥がいません。兵たちはみないったい誰につき従っていけばよいというのでしょうか。この戦いは、晋軍はきっと負けるでしょう…]

- (9-22) 周威公見而問焉，曰：「天下之國孰先亡。」(『呂氏春秋』「先識」2-956)

[周の威公は(屠黍に)会い、たずねて言った「天下の国ではどの国が最初に滅びるだろうか。」]

上述の統語環境における「孰/誰」は、主語であるのか目的語であるのかを判別することは困難であるけれども、主語か目的語のいずれかであることは確実である。以下においては、このような統語環境にある「孰/誰」が主語か目的語かを判別してくことを試みる。

[方法(Ⅰ)] 文中に生じた目的語の数と述語動詞の項数による判別

以下、目的語が生起している場合と然らざる場合とに分けて議論を進めていきたい。

まず、述語動詞の後に目的語が生起しており、かつ述語動詞の項構造が明確である場合である。このとき、当該の「孰/誰」が原則として主語であるのか目的語であるのかが、述語

動詞の項数により判断され得ることになる¹⁴⁶。例えば、「孰/誰+V+O」という統語形式の場合、もしこのVが三項他動詞でなければ（二項他動詞であれば）、当該の「孰/誰」は主語でしかあり得ず、目的語ではあり得ない（例文(9-23)～(9-27)を参照のこと）。

- (9-23) 孔子退，揖巫馬期而進之，曰：「吾聞君子不黨，君子亦黨乎。君取於吳，為同姓，謂之吳孟子。君而知禮，孰不知禮。」（『論語』「述而」 2-496）

〔孔子が退出すると、（司敗は）揖巫馬期に会釈し、（揖巫馬期を）前に進ませて言った「私は、君子はひいきをしないと聞いていたが、君子でもひいきをするのでしょうか。魯君は吳国から娶られたが、同じ姓であるために、彼女のことを吳孟子と呼ばれたのです。この君主が礼をわきまえていたとすると、*礼をわきまえない人などおりましたか（=いったい誰が例をわきまえない人になりましたか）。〕

- (9-24) 「今王發政施仁，使天下仕者皆欲立於王之朝…天下之欲疾其君者，皆欲赴愬於王，其若是，孰能禦之。」（『孟子』「梁惠王上」 1-92）

〔孟子は言った〕「今、もし王が政治を改革し仁徳を施行されれば、天下の士大夫はみな王の朝廷（=齊）に仕えたいとのぞみ……天下の自らの君主を快く思わぬものは、みな王のもとへ来て、訴えたがるようになるでしょう。もしこのようになったら、いったい誰がそれをとめることができますか。〕

- (9-25) 居二年，中山果亡。威公又見屠黍而問焉，曰：「孰次之。」屠黍不對。（『呂氏春秋』「覽部」「先識」 2-956）

〔二年ほどして中山国が果たして滅亡した。（周の）威公はまた屠黍に会い、彼に言った「どの国がこれ（=中山国）につづくのだろうか。」屠黍は答えなかった。〕

- (9-26) 慶鄭曰：「棄信背鄰，患孰恤之。無信，患作；失援，必斃。是則然矣。」（『左伝』「僖公十四年」 1-348）

〔慶鄭は言った「信義を行わず、隣国に背けば、災難があつたとしても誰がその人たちを憐れむでしょうか。信義がなければ、災いがおこり、（他からの）援けを失えば、必ず滅亡します。このこと（=晋が不作だった秦に米を与えなかったこと）まさにそのようなこと（=信義を行わなかったこと）なのです。〕

- (9-27) 重館人告曰：「…晉不以固班，亦必親先者，吾子不可以不速行。魯之班長而又先，諸侯其誰望之」〔韋昭注：誰敢望與魯為比也。…〕（『国語』「魯語上」 154）

¹⁴⁶本論文 9.1.2 で言う項数には、当該の動詞・介詞が〈一人〉を指示する場合のみ担い得る項を含めない。例えば、〈～し得る〉という意味を表す「能」は単独で述語動詞を担う場合、目的語を要求するが、その目的語は一般に動詞句であり、〈一人〉となる。よって〈～し得る〉意味の「能」は、本来は二項他動詞であるけれども、本論文 9.1.2 においては一項自動詞とみなして議論を進める。このような処理を行うのは、専ら〈一人〉を指示する項は、基本的には、文中の「孰/誰」の統語的曖昧性の程度に影響を与えることはないと考えからである。

〔重邑の館の付き人が（魯の臧文仲に）言った「…晋は元々の爵位によってではなく、きっと先に到着するものを（自分に信服した）親しいものとみなすでしょう。あなたは大急ぎで行かなければなりません。魯の爵位は高い上に、その上先んずれば、諸侯の中で誰がそれ（=わが魯と同等の爵位）を望むでしょうか。〕

ただし、文中に目的語を伴っていない介詞が生起している場合¹⁴⁷、たとえ述語動詞がその項数を満たす名詞句を伴っていたとしても、方法（I）だけでは当該の「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのかは判別し難いことになる。なぜなら、当該の「孰/誰」が主語であるのか介詞の目的語であるのか判別し難いからである（用例(9-28)を参照）。

(9-28) 曰：「…在於王所者，長幼卑尊皆薛居州也，王誰與為不善。在王所者，長幼卑尊皆非薛居州也，王誰與為善。」（『孟子』「滕文公下」1-439）

〔（孟子が宋の戴不勝に）言った「…宋王のそばにいる者が、長幼・地位の尊卑を問わず、みな薛居州のごとき（りっぱな）人であったなら、*宋王はいったい誰とともに不善をなすというのでしょうか／王たる者のうちいったい誰が（彼らと）ともに不善をなすというのでしょうか。しかし宋王のそばにいる者が、長幼・地位の尊卑を問わず、みな薛居州のごとき（りっぱな）人でなかったなら、*宋王はいったい誰とともに善をなすというのでしょうか／王たる者のうちいったい誰が（彼と）ともに善をなすというのでしょうか。〕

次に、「孰/誰」を含む文の述語動詞の後に目的語が生起していない場合、方法（I）では当該の「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのか判別し難い。理論的に言えば、「孰/誰＋V」という統語構造において、もし述語動詞が一項自動詞であれば、当該の「孰/誰」は主語だと判別され得ることになる。しかし実際には、上古漢語には自他両用の動詞が少なからずあり、述語動詞が一項であるのか二項であるのを判断することも困難である。よって「孰/誰」を含む文の述語動詞の後に目的語が生起していない場合、方法（I）の段階では述語動詞が一項であるのか二項であるのかの判断を保留しておくことにする。

以上を整理すると、方法（I）では次の二つの状況下では当該の「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのか判別し難いことになる。第一には、「孰/誰」を含む文中にその項を満た

¹⁴⁷その他、もし文中に他の述語動詞があり、その項が満たされていない場合も、方法(I)によっては文中の「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのか判別し難いことになる。実際の用例が少ないこともあり、本論文ではこのような文は分析の対象とはしないこととした。

・對曰：「…天子親春禘郊之盛，王后親繰其服，自公以下至於庶人，其誰敢不齊肅恭敬，致力於神。…」（『国語』「楚語下」520）

〔（観謝父は）答えて言った「天子自ら禘郊の祭りに用いるきびをつき、王后自ら祭服の糸を繰ります。公卿から庶民まで、いったい誰が厳肅に恭しく神のために力を尽くさないでしょうか。〕

していない述語動詞・介詞が生起している場合であり、第二には文中に項数を判断し難い述語動詞が含まれる場合である。本論文ではこれらの二種の状況に符合する文を、「統語的曖昧性の高い構造」と呼ぶことにする。以下、用例(9-29)～(9-32)がその具体的な例文であり(日本語訳は「孰/誰」が主語か目的語かの解釈を先どりして付しておく)、【図表 9-4】において、『左伝』『国語』『論語』『孟子』『呂氏春秋』五文献におけるすべての「統語的曖昧性の高い構造」を挙げておく。

- (9-29) 季康子問政於孔子。孔子對曰：「政者，正也。子帥以正，孰敢不正。」(『論語』「顔淵」 3-864)
 [季康子が孔子に政治についてたずねた。孔子がこたえて言った「政治とは、正すということなのである。あなたが率先して正されたら、誰が正さないことがありますでしょうか。」]
- (9-30) 子曰：「吾之於人也，誰毀誰譽。*如有所譽者 [定州漢墓本「若有何譽者」]，其有所試矣。…」(『論語』「衛靈公」 4-1107)
 [先生が言われた「私は他人に対して、誰を誇り誰を褒めたというのか。もし褒めるものがあるとすれば、それは試すことがあってからのことだ。…」]
- (9-31) 其母曰：「盍亦求之。以死，誰懟。」對曰：「尤而效之，罪又甚焉。且出怨言，不食其食。」(『左伝』「僖公二十四年」 1-418)
 [彼(=介之推)の母は言った「どうしてあの方(=晋公)に褒美を求めないのですか。そのために死んでしまったら、いったい誰を怨めばよいのですか。」(介之推は) 答えて言った「(他人を) 非難しながら彼らを真似るなどというのは、その罪は彼らより大きくなります。その上、私は恨みごとを言いました。あの方(=晋公)の禄をいただくべきではありません。」]
- (9-32) 魯饑，臧文仲言於莊公曰：「…今國病，君盍以名器請糴于齊。」公曰：「誰使。」(『国語』「魯語上」 148)
 [魯に飢饉が起こった臧文仲が莊公に言った「…今、国家は災難あっております。わが君はどうして宝器(を贈ること)によって齊に穀物の買い入れを請わないのでしょうか。」莊公は言った「誰を使者にしようか。」]

【図表 9-4】『左伝』『国語』『論語』『孟子』『呂氏春秋』における「統語的曖昧性の高い構造」一覧

文献	疑問代詞	用例
左伝	孰	父與夫孰親(桓公十五年) / 趙衰、趙盾孰賢(文公七年) / 無民孰戰(成公十五年) / 晉大夫與楚孰賢(襄公二十六年) / 孰可使也(襄公二十六年)
	誰	欲禦我誰與(莊公二十七年) / 未知其誰立焉(閔公二年) / 誰敢不服(僖公四年) / 吾誰適從(僖公五年) / 公子誰恃(僖公九年) / 以死誰懟(僖公二十四年) / 其誰不知

		(僖公三十二年) / 誰敢攜貳 (文公七年) / 眾誰適從 (宣公十二年) / 將以誰任 (宣公十三年) / 又誰敢怨 (成公三年) / 其誰敢德 (成公三年) / 將誰先 (成公三年) / 晉大夫其誰先亡 (襄公十四年) / 誰敢不勉 (襄公二十一年) / 誰敢不雄 (襄公二十一年) / 將誰愬乎 (襄公二十七年) / 吾又誰怨 (昭公一年) / 人誰不死 (昭公二年) / 吾將又誰與爭 (昭公四年) / 誰敢不至 (昭公四年) / 將誰福哉 (昭公十年) / 誰與居邑 (昭公十三年) / 誰與同惡 (昭公十三年) / 將以誰罪 (昭公十八年) / 誰與之立 (昭公二十五年) / 人誰不死 (昭公二十五年) / 吾誰敢怨 (昭公二十七年) / 將誰讎 (定公四年) / 君將誰與 (定公十三年) / 人誰不死 (定公十四年) / 誰不如 (哀公十一年) / 誰敢不懼 (哀公十二年)
国語	孰	王問魯大夫孰賢 (周語) / 其咎孰多 (周語) / 孰不惑焉 (晉語) / 諸姬其孰興 (鄭語) / 姜、嬴其孰興 (鄭語) / 二國孰賢 (楚語)
	誰	誰使 (魯語) / 吾誰鄉而入 (晉語) / 誰長 (晉語) / 誰代 (晉語) / 其誰不傲懼於君之威 (晉語) / 吾誰使 (晉語) / 公子誰侍於晉 (晉語) / 其誰能侍乎 (晉語) / 雖欲禦我誰與 (晉語) / 誰之不如 (晉語) / 其誰怨 (晉語) / 欲作亂者誰與 (晉語) / 晉國其誰不為子從 (晉語) / 吾誰與歸 (晉語) / 誰不可喜 (晉語) / 而誰不可懼 (晉語)
論語	孰	女與回也孰愈 (公冶長) / 師與商也孰賢 (先進) / 君誰與不足 (顏淵) / 君孰與足 (顏淵) / 孰敢不正 (顏淵)
	誰	則誰與 (述而) / 非夫人之為慟而誰為 (先進) / 誰毀 (衛靈公) / 誰譽 (衛靈公) / *又 [定州漢墓本「有」] 誰怨 (堯曰) / 吾誰欺 (子罕) / 而誰以易之 (微子) / 吾非斯人之徒而誰與 (微子)
孟子	孰	則王以為孰勝 (梁惠王上) / 吾子與子路孰賢 (公孫丑上) / 然則吾子與管仲孰賢 (公孫丑上) / 王以為與周公孰仁且智 (公孫丑下)
	誰	夫誰與王敵 (梁惠王上) / 王誰與為不善 (滕文公下) / 王誰與為善 (滕文公下) / 君誰與守 (離婁下) / 則誰敬 (告子上) / 酌則誰先 (告子上) / 則誰敬 (告子上)
呂氏春秋	孰	人孰不說 (懷寵) / 天下之國孰先亡 (先識) / 子與我孰賢 (執一) / 子與我孰賢 (執一) / 子與我孰賢 (執一) / 子與我孰賢 (執一) / 則問樂騰與王孫苟端孰賢 (舉難) / 孰當可而鏡 (達鬱) / 其孰不與者 (無義)
	誰	寡人將誰屬國 (貴公) / 公誰欲相 (貴公) / 寡人將誰為君 (制樂)

上記【図表 9-4】に掲げた「統語的曖昧性の高い構造」用例については、以下の方法 (Ⅱ) (Ⅲ) によって主語であるのか目的語であるのか判別していく¹⁴⁸。

¹⁴⁸ 当該の「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのか判別する方法としては、本論文で提示した方法 (Ⅰ) (Ⅱ) (Ⅲ) 以外にも、副詞「其」「將」「又」との統語的位置関係に基づくものがあり得る。この方法は、方法 (Ⅰ) によって当該の「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのかが判別された用例について、「孰/誰」と副詞「其」「將」「又」との統語上の先後関係を調査すると、「孰/誰」が目的語となった場合 (実際には「誰」の用例しか存在しないが)、必ず副詞「其」「將」「又」の後に位置するという事実注目したものである。すなわち、この事実が

[方法(Ⅱ)]「孰/誰」が文中で担う意味役割と述語動詞の項構造による判別

方法(Ⅰ)において動詞の項を考慮した判別を行ったが、そこでは項数だけを扱い、なおかつ当該の動詞が一項か二項かの区別は保留しておいた。この方法(Ⅱ)では、述語動詞の項構造全体に基づいて判別を行っていく。具体的な手順は、①まず当該の述語動詞の項構造(述語動詞が助動詞を伴っており、かつその助動詞が述語動詞の項構造を変更させ得るものである場合、「助動詞+述語動詞」全体の項構造を扱う)を推定し、②文脈から「孰/誰」が担う意味役割を判断し、文中の述語動詞の項構造に照らして、「孰/誰」の担う意味役割が

副詞と「孰/誰」との原則的な位置関係を反映したものであれば、今度はこのことを手がかりにして、方法(Ⅰ)によっては判別できない「孰/誰」を判別し得ることになる。例えば、「孰/誰」と副詞「其」「將」「又」とが共起するとき、「孰/誰」がこれらの副詞の前に位置していれば、それは目的語ではあり得ず、主語だと判別される。ただし「孰/誰」がこれらの副詞の後に位置する場合は、目的語と主語のいずれの可能性もある。このような疑問代詞目的語と副詞との統語的な位置関係については、夙に魏培泉(1999)が、疑問代詞目的語は関連副詞「亦」「又」「尚」および法相副詞「其」「將」「又」の前に位置することができないことを指摘している(次の用例を参照のこと)。

・又誦之，曰：「…子産而死，誰其嗣之。」(『左伝』「襄公三十年」3-1182)

[誰=主語]

〔(民衆は) 今度は彼(=子産)をたたえて言った「…子産がもし亡くなったら、いったい誰が彼を継ぐのだろうか。〕

・乃請諸楚曰：「…能是二者，又何患焉。不靖其能，其誰從之。…」(『左伝』「昭公元年」4-1206)

[誰=主語]

〔(趙孟は) 楚に願い出て言った「…この二つのことができたなら、何を憂えることがありましょうか。賢人を大切にしなければ、いったい誰が従いましょうか。〕

・對曰：「…不然，夷吾不佞，其誰能恃乎。」(『国語』「晋語二」297)

[誰=目的語]

〔(冀芮は) 答えて言った「…もしそうでなかったら、夷吾は不才ですから、誰をたのみにできましょうか。〕

以上の「孰/誰」と副詞「其」「將」「又」との統語的位置の違いを利用した判別方法は有力なものであるが、実際には本論文で言う「統語的曖昧性が高い構造」に副詞「其」「將」「又」が生じた用例は存在せず、「孰/誰」の判別に利用するすべがないため本文では用いなかった。

なお、これらの副詞類と「孰/誰」との統語的位置関係について、二点補足しておきたい。

第一点は、目的語となった「孰/誰」がすべての副詞の後に位置するわけではないということである。例えば、否定副詞「不」との関係では、目的語「誰」はかならずその前に位置する(この点についても、すでに魏培泉 1999 が指摘している。用例(9-35)などがその例である)。

第二点は、もし副詞「先」の統語的位置についても、目的語となった「孰/誰」より前に位置するという原則が適用できるのであれば、以下の「統語的曖昧性が高い構造」における「孰/誰」は、副詞「先」の前に位置しているために主語だと判別し得るということである。個別の副詞と「孰/誰」などの疑問代詞との統語的位置関係については、今後さらに詳細に検討していく必要がある。

・周威公見而問焉，曰：「天下之國孰先亡。」對曰：「晉先亡。」(『呂氏春秋』「先識」2-956)

〔周の威公は(屠黍に) 会い、たずねて言った「天下の国ではどの国が最初に滅びるだろうか。」(屠黍は) 答えて言った「晋が最初に滅びるでしょう。〕

・秦伯問於士鞅曰：「晉大夫其誰先亡。」對曰：「其欒氏乎。」(『左伝』「襄公十四年」3-1010)

〔秦伯は士鞅にたずねて言った「晋の大夫のうち誰が滅びるだろうか。」(士鞅は) 答えて言った「おそらく欒氏でしょう。〕

主語と目的語のいずれが担うべき意味役割と一致するののかという点から判別していく、というものである。

この方法は、調査者の主観に基づく程度が方法（Ⅰ）よりも高いと言える。上古漢語の動詞にはその項構造が明らかでないものも少なからず存在するため、しばしば限られた用例から当該の述語動詞の項構造を推定せねばならないからであり、また当該の文脈において「孰/誰」が担う意味役割を判断する場合にも、調査者の主観的判断を完全に排除するのは難しい。

以上のような問題はあるにせよ、方法（Ⅱ）によれば、大部分の「統語的曖昧性が高い構造」における「孰/誰」についても、それが主語なのか目的語なのかを判別できることになる。

- (9-33) 其母曰：「盍亦求之。以死，誰懟。」對曰：「尤而效之，罪又甚焉。且出怨言，不食其食。」（『左伝』「僖公二十四年」 1-418）

[誰＝目的語]

[彼（＝介之推）の母は言った「どうしてあの方（＝晋公）に褒美を求めないのですか。そのために死んでしまったら、いったい誰を怨めばよいのですか。」（介之推は）答えて言った「（他人を）非難しながら彼らを真似るなどというのは、その罪は彼らより大きくなります。その上、私は恨みごとを言いました。あの方（＝晋公）の禄をいただくべきではありません。』]

- (9-34) 齊侯曰：「以此眾戰，誰能禦之。以此攻城，何城不克。」對曰：「君若以德綏諸侯，誰敢不服。…」（『左伝』「僖公四年」 1-292）

[誰＝主語]

[齊の桓公は言った「この大軍勢で戦えば、いったい誰がそれに敵することができようか。この大軍勢で城を攻めたら、どんな城が落ちないというのか。」（屈完は）答えて言った「あなた様が徳を以て諸侯を治められたら、誰が心服しないでしょうか。…』]

- (9-35) 林不狃之伍曰：「走乎。」不狃曰：「誰不如。」曰：「然則止乎。」不狃曰：「惡賢。」徐步而死。（『左伝』「哀公十一年」 4-1660）

[誰＝目的語]

[林不狃の兵たちが言った「逃げましょうか。」林不狃は言った「（我々が）誰に敵わないというのか。」（兵たちは）言った「それなら止まり（抗戦し）ましょうか。」林不狃が言った「（そんなことをして）どこが賢明といえようか。」ゆっくり歩いて（退き）、戦死した。]

- (9-36) 「郷人長於伯兄一歲，則誰敬。」「敬兄。」（『孟子』「告子章上」 2-746）

[誰＝目的語]

[(孟季子が公都子にたずねた)「同郷の人で、あなたの長兄より一歳年長の人が出た場合、あなたは（その同郷の人と兄との）どちらを敬するか。」「兄の方を

敬します。』

しかしながら、方法(Ⅱ)によっても判別し難い用例も存在する。それは、文中の述語動詞が以下の(A)(B)(C)のいずれかのタイプに属する動詞である場合である。

(A)タイプの動詞とは、自動他動両用の動詞で、かつ自動用法の主語の担う意味役割が、他動用法の目的語の担う意味役割と一致する、いわゆる能格動詞(ergative verbs)である¹⁴⁹。

(9-37)「郷人長於伯兄一歳、則誰敬。」曰：「敬兄。」「酌則誰先。」曰：「先酌郷人。」

(『孟子』「告子上」2-746)

〔(孟季子が公都子にたずねた)「同郷の人で、あなたの長兄より一歳年長の人が出た場合、あなたは(その同郷の人と兄との)どちらを敬するか。」「兄の方を敬します。」「(宴会の席で)お酌をする場合、どちらを先にしますか。」「(兄より年長者の)同郷の人の方です。〕

(B)タイプの動詞とは、「X(=目的語の指示対象)と共にする」という意味を表す「與」である。この場合、当該の「孰/誰」の担う意味役割が、主語が担う動作者であるのか目的語が担う共同者であるのか、文脈からは判別し難い。

(9-38) 治區夫曰：「非也。若見費人，寒者衣之，飢者食之。為之令主，而共其乏困，費來如歸，南氏亡矣。民將叛之，誰與居邑。…」(『左伝』「昭公十三年」4-1343)

〔治區夫は言った「(そのようなやり方は)は間違っています。もし費の人を見つけたら、こごえている者には衣服を着せ、飢えている者には食べさせ、かれらの(よい)主人となり、彼らの不足しているものを供給してやれば、費の人たちが(季氏に)もどってくることは家に帰るようなもので、南氏は滅びるでしょう。民が背いたら、* (南氏は) いったい誰と一緒に(費の)町に住むのでしょうか/ *いったい誰が (南氏と) 共に (費の) 町に住むのでしょうか。…〕

(C)タイプの動詞とは、助動詞「可」を伴った二／三項他動詞である。

(9-39) 文子言於晉侯曰：「晉為盟主，諸侯或相侵也，則討而使歸其地。今烏餘之邑，皆討類也，而貪之，是無以為盟主也。請歸之。」公曰：「諾。孰可使也。」對曰：「胥梁帶能無用師。」晉侯使往。(『左伝』「襄公二十六年」3-1125)

〔(趙) 文子は晋侯に言った「晋は盟主です。諸侯が侵略しあえば、(それらを)討伐し、侵略した土地を返還するようにさせなければなりません。今、烏余の(攻めとった)城邑は、いずれもこのような討伐すべき類のものです。しかしそれらを際

¹⁴⁹上古漢語における能格動詞については、Cikoski(1978)、大西(2004)等を参照のこと。ただし、具体的にどの動詞を能格動詞と認定するか、といった問題については、必ずしも定論が得られているわけではない。

限なく手に入れようとすれば、このようなものは盟主となることはできません。もとかえしてやりましょう。」晋侯は言った「よろしい。(ところで) *誰を使者としたらよいだろうか/ *誰なら使者となることができようか。」と言った。(趙文子は) 答えて言った「胥梁帯なら軍隊を用いずに(うまく)できるでしょう。」晋侯は彼を使者として行かせた。]

(A) (B) タイプの動詞を有する用例における「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのかを判別するために、本論文では方法(Ⅲ)を用いる。なお(C) タイプの動詞については、判別を保留しておく¹⁵⁰。

[方法(Ⅲ)] 表現のレベルでの判別¹⁵¹

ここで言う「表現のレベルでの判別」というのは、文脈からみて、当該の文の述語動詞の前に、新たに主語(ただしこの主語には主題(topic)は含まれないものとする)を補い得るか否かによって判別するということである。すなわち、主語を補い得るのであれば、当該の文の「孰/誰」は目的語だと判別され、主語を補い得ないのであれば、当該の文の「孰/誰」は主語だと判別されるという方法である。この方法は、方法(Ⅱ)によりも一層、主観的要素が強い点と、そもそも主語を補い得るか否かの判断が比較的容易な用例にしか適用できないという欠点がある。

主語を補い得るかどうかの判断が比較的容易である用例をみてみたい。下例(9-40)において、発話者の子路が問うているのは、「先生は誰と行動をとともにされたいのか」という対話者「子」(=先生自身)の意志である。そうであれば、述語動詞「與」の主語は「子」と考えるのが自然であり、「誰」の前(「∅」の箇所)に、主語「子」を補って理解することができる。結果として「誰」は目的語だと判別されることになる。

(9-40) 子路曰:「子行三軍, 則(∅) 誰與。」(『論語』「述而」2-451)

[子路は言った「先生が三軍を率いるのであれば、誰とともにされますか。」]

¹⁵⁰これは、「可 V2/3」が「可以 V2/3」の省略形式である可能性が排除できないためである。すなわち、「可 V2/3」と「可以 V2/3」とでは、後者の項構造は基本的には述語動詞「V2/3」と一致するのに対し、「可 V2/3」のそれは「可」の項構造変更機能により、「V2/3」から規則的に変更されたものとなる(具体的な変更規則は、当該のVが能格動詞か非能格動詞かによって異なる。大西2005を参照)。このように「可 V2/3」と「可以 V2/3」の項構造が異なるにも拘わらず、「可以 V2/3」から「以」が省略されることがあり得るために、当該の「孰/誰」を含む文における「可 V2/3」が、本来の形式なのか「可以 V2/3」の省略形式なのかを判断することが極めて難しいのである。結果として、「孰/誰」を含む文の述語動詞が「可 V2/3」の場合、当該の「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのかが判別し難いことになる。

¹⁵¹本論文で言うところの「表現のレベル」とは朱德熙(1985)の言う「表達層面」に相当するものである。日本語の訳語は、朱德熙(著)中川・木村(編訳)(1986)の日本語訳に拠った。

この方法により、以下の用例における「孰/誰」についても、主語であるのか目的語であるのかの判別を行った。

- (9-41) 「郷人長於伯兄一歳，則誰敬。」曰：「敬兄。」「酌則誰先。」曰：「先酌郷人（『孟子』「告子上」2-746）

[誰＝目的語]

〔(孟季子が公都子にたずねた)「同郷の人で、あなたの長兄より一歳年長の人が出た場合、あなたは(その同郷の人と兄との)どちらを敬するか。」「兄の方を敬します。」「(宴会の席で)お酌をする場合、どちらを先にしますか。」「(兄より年長者の)同郷の人の方です。〕

- (9-42) 公曰：「寡人有子，未知其誰立焉。」（『左伝』「閔公二年」1-269）

[誰＝目的語]

〔(晋侯は)言った「私には子供が何人もいるが、まだ誰をたてるかを決めていない〕

- (9-43) 周威公見而問焉，曰：「天下之國孰先亡。」對曰：「晉先亡。」（『呂氏春秋』「先識」2-956）

[孰＝主語]

〔周の威公は(屠黍に)会い、たずねて言った「天下の国ではどの国が最初に滅びるだろうか。」「(屠黍は)答えて言った「晋が最初に滅びるでしょう。〕」

- (9-44) 鄭舒問於賈季曰：「趙衰、趙盾孰賢。」對曰：「趙衰，冬日之日也。趙盾，夏日之日也。」（『左伝』「文公七年」2-562）

[孰＝主語]

〔鄭舒は賈季に言った「趙衰と趙盾とはどちらが賢明な人であるか。」「(賈季は)答えて言った「趙衰は冬の太陽のような人で、趙盾は夏の太陽のような人です。〕

しかし以下の用例(9-45)～(9-47)をはじめとする8例については、この方法(Ⅲ)によっても判別し難い。本論文ではこれら8用例については、「孰/誰」が主語であるのか目的語であるのかを保留しておくことにする。

- (9-45) 士蒍曰：「不可。虢公驕，若驟得勝於我，必棄其民。無眾而後伐之，欲禦我，誰與。」（『左伝』「莊公二十七年」1-236）

〔士蒍は言った「いけません。虢公はおごっています。もし何度も我々に勝つようなことがあれば、きっと(彼の)民を顧みなくなるでしょう。民衆が(彼から)離れたのちに征討すれば、われわれを防ごうとしても、*いったい誰と共にする(＝防ぐ)のでしょうか/いったい誰が(虢公と)共に行動するのでしょうか。〕

- (9-46) 宣子曰：「同惡相求，如市賈焉，何難。」對曰：「無與同好，誰與同惡。…」（『左伝』「昭公十三年」4-1351）

〔韓宣子が言った「(人々が楚君の無道という) 憎しみを同じくして互いに必要とし合うのは、市場で売買をするようなものです。どうして難しいことはありませんか。」(叔向は) 答えて言った「(子干と) 好むものを同じくする者などはありません。*いったい誰が (彼と=子干と) 憎しみを同じくするのでしょうか／(子干が) いったい誰と 憎しみを同じくするのでしょうか。…」〕¹⁵²

(9-47) 冶区夫曰：「非也。若見費人，寒者衣之，飢者食之。為之令主，而共其乏困，費來如歸，南氏亡矣。民將叛之，誰與居邑。…」(『左伝』「昭公十三年」4-1343)

〔冶区夫は言った「(そのようなやり方は) は間違っています。もし費の人を見つけたら、こごえている者には衣服を着せ、飢えている者には食べさせ、かれらの(よい) 主人となり、彼らの不足しているものを供給してやれば、費の人たちが(季氏に) もどってくることは家に帰るようなもので、南氏は滅びるでしょう。民が背いたら、* (南氏は) 誰と一緒に (費の) 町に住むのでしょうか／*いったい誰が (南氏と) 共に (費の) 町に住むのでしょうか。…」〕

以上の方法 (I) ~ (III) により、『左伝』『国語』『論語』『孟子』『呂氏春秋』における〈+人〉を指示する「孰/誰」について、その大部分が主語であるのか目的語であるのか判別されることになる。その結果は【図表 9-5】のようにまとめられる。

【図表 9-5】上古中期の各文型における「孰/誰」(〈+人〉) の統語的曖昧性

	左伝		国語		論語		孟子		呂氏春秋	
	孰	誰	孰	誰	孰	誰	孰	誰	孰	誰
孰/誰=S										
I A: (T+) 孰/誰 (+P+O) +V1/2 : (T+) 孰/誰 (+P+O) +V3 (+O)	4	13	8	4	1	0	4	1	10	0
I B: (T+) 孰/誰 +P+V1/2 : (T+) 孰/誰 +P+V3 (+O)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

¹⁵² 用例(9-46)の「誰與同惡」という表現は『史記』にもみられる。『史記』の当該箇所については、後漢末の服虔が「言無黨於内，當與誰共同好惡」と注をつけている。ここから服虔は「誰」を介詞「與」の目的語と解釈していたことが知られる。ただしこのことにより『左伝』原文の構造解釈を確定し得るわけではないであろう。

・宣子曰「同惡相求，如市賈焉，何為不就。」對曰「無與同好，誰與同惡。…」(『史記』「楚世家」1710)

〔韓宣子が言った「憎しみを同じくするものが必要とし合うのは、市場で売買をするようなものです。どうして成就しないことはありませんか。」(叔向は) 答えて言った「(子比と) 好むものを同じくする者などはありません。*いったい誰が (彼と=子比と) 憎しみを同じくするのでしょうか／(子比が) いったい誰と 憎しみを同じくするのでしょうか。…」〕

I C: (T+) 孰/誰 (+P+O) +V2+O : (T+) 孰/誰 (+P+O) +V3+O+O	5	72	4	5	5	0	7	2	11	6
I D: (T+) 孰/誰 +P+V2+O : (T+) 孰/誰 +P+V3+O+O	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
孰/誰 = Ov										
II A: (T/S+) 孰/誰 (+P+O) +V1/2 : (T/S+) 孰/誰 (+P+O) +V3 (+O)	0	17	0	7	0	7	0	3	0	3
II B: (T/S+) 孰/誰 +P+V1/2 : (T/S+) 孰/誰 +P+V3 (+O)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
孰/誰 = Op										
III B: (T/S+) 孰/誰 +P+V1/2 : (T/S+) 孰/誰 +P+V3 (+O)	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0
III D: (T/S+) 孰/誰 +P+V2+O : (T/S+) 孰/誰 +P+V3+O+O	0	1	0	1	0	1	0	2	0	0

* ()は当該の文法成分の有無が随意的であることを表す。

* 文型の I、II、III は「孰/誰」が担う文法成分が主語であるか目的語であるかの区別を表す。I の各文型は「孰/誰」が主語となったもの。II の各文型は「孰/誰」が述語動詞目的語となったもの。III の各文型は介詞目的語となったもの。

* 文型 A、B、C、D は各文型に含まれる統語的曖昧性の程度の区別を表す。

文型 A は、V が他の目的語 (= 「孰/誰」以外の目的語) を伴っていない (或いは V3 が一つだけ他の目的語を伴っている) 文型 (但し文中に目的語を伴っていない P があれば下述の文型 B とみなす)。形式上は文型 I A と文型 II A とは明確な区別がないため、両文型は統語的曖昧性を含んでいる。

文型 B は、V が他の目的語を伴っておらず (或いは V3 が一つだけ他の目的語を伴っており)、かつ介詞 P をも目的語を伴っていない文型。形式上は、文型 II B、III B とは明確な区別がなく、これらは文型 A よりも大きな統語的曖昧性を含んでいる。

文型 C は、V が目的語を伴っており (或いは V3 であれば、それが二つの目的語を伴っており)、かつ P がある場合はこの P も目的語を伴っている文型。すなわち統語的曖昧性が生じ得ない文型である。

文型 D は、V が目的語を伴っているが (V3 であれば二つの目的語を伴っているが)、P は目的語を伴っていない文型。当該の「孰/誰」が主語であるのか介詞目的語であるのかという統語的曖昧性を含んでいる。

* 「孰/誰」が連動文に生起し、かつ第一の述語と第二の述語とが属する文型が異なる場合、これを資料とはせず、上表には含めない。

* 表中の述語動詞、介詞の項数には〈一人〉を指示するものは含まれない。

* 理論上は、II A、II B、III B、III D の文型においては、T と S が同時に生起し得る。この場合「孰/誰」は目的語と判別され、統語的曖昧性は存在しないことになる。しかし実際には、五文献においては、そのような文は存在しないため、別に文型を設けて表に示すことはしない。

【図表 9-5】より次の二点が看取される。

第一点は、『論語』『孟子』『呂氏春秋』の文型 I A・文型 II A という統語的曖昧性を有する文型において、「孰」は専ら主語となり、「誰」は主として目的語となるという相補的语法分布がみられるということである。上述したように、「孰」と「誰」とは談話レベルにおける機能差異は顕著ではなく、「孰」と「誰」との主要な機能差異は統語レベルにあったと考えられる。ここから本論文は、『論語』『孟子』『呂氏春秋』における「孰/誰+V2」「孰/誰+V3(+O)」(=文型 I A・II A の一部) のような統語的曖昧性の高い文型においては、「孰」と「誰」の交替が格標示機能——具体的には「孰」による主語標示、「誰」による目的語標示——を担っており、この格標示体系の存在により統語的曖昧性が軽減されていたと考える。

なお、『孟子』における文型 I A において、「孰」による主語標示、「誰」による目的語標示の例外が 1 例みとめられる (用例(9-48))。しかしながら、格標示体系を有する言語においても、特定の条件のもとでは格標示分裂(split)という現象が生じ、格標示の例外が生じ得ることが知られている (山崎 1991 等を参照)。よって少数の例外の存在は、上述の「孰」と「誰」の交替による格標示の存在を積極的に否定する材料とはなり得ないとする。

(9-48) 孟子對曰：「…彼陷溺其民，王往而征之，夫誰與王敵。…」(『孟子』「梁惠王上」1-68)

[誰=主語]

[孟子は (梁の恵王に) 答えて言った「…彼ら (=秦王や楚王) は自国の民衆を (惨状に) 陥れています。王が彼らを征討に赴けば、いったいだれが王を敵としましょうか。」]

ただし『論語』『孟子』『呂氏春秋』の三文献における状況も全く同じというわけではない。『論語』『孟子』においては、文型 I C のような統語的曖昧性の低い文型においても、「孰」による主語標示、「誰」による目的語標示の例外が相当に少なく、例外は以下に挙げた『孟子』における 2 例 (用例(9-49)(9-50)) だけである¹⁵³。一方、『呂氏春秋』における例外はそれほど稀少ではない。すなわち、『論語』『孟子』における「孰」「誰」の交替による格標示のシステムは、『呂氏春秋』のそれよりも完全な格標示体系に近づいていると言える。

(9-49) 「…對曰：『…誠如是也，民歸之，由水之就下，沛然誰能禦之。』」(『孟子』「梁

¹⁵³実際には、『論語』にも下例のごとく「誰」が主語を担った例外的用例が 1 例存在するのであるが、述語部分が複数の述語動詞から構成される連動構造であるために、【図表 9-5】の資料とはされていない。いずれにせよ、『論語』における「孰」と「誰」の交替による格標示の例外が稀少であるという大勢には影響しないであろう。

・子曰：「誰能出不由戸。何莫由斯道也。」(『論語』「雍也」2-399)

[先生が言った「誰が出て行く時に戸口を通らないことがあるのか。(それなのに) どうしてこの道 (=私の教えるこの道) を通る者がいないのだろうか。」]

惠王上」1-73)

[誰=主語]

〔(孟子が言った)「…(私は)それに答えて言った『…本当にそのようにすれば、民衆は彼に帰し、まるで水が低い方へ流れるかのようでしょう。勢いが激しければ誰がそれを止めることができますよ。…』〕

(9-50) 孟子曰：「…孔子曰『為此詩者，其知道乎。能治其國家，誰敢侮之。』…」(『孟子』「公孫丑上」1-224)

[誰=主語]

〔孟子が言った「…孔子が言った『この詩を作った人は道理がわかっていることよ。自身の国をよくおさめることができれば、いったい誰がその人を侮るといのか。』… 〕

第二点は、【図表 9-5】から、『左伝』『国語』における状況は、『論語』『孟子』『呂氏春秋』におけるそれとは異なっているということである。『左伝』『国語』の文型ⅠA・文型ⅡAという統語的曖昧性の高い文型においては、「孰」はやはり目的語を担い得ないが、「誰」は目的語だけでなく主語となった用例も多く、統語上の相補分布はみとめられない

本論文は、『左伝』『国語』の「孰/誰+V2」「孰/誰+V3(+O)」(=文型ⅠA・ⅡAの一部)のような統語的曖昧性の高い文型においては、統語的曖昧性を排除する単一の文法形式は存在しなかったと考える。ただし、このことは『左伝』『国語』の「孰/誰+V2」「孰/誰+V3(+O)」において、その統語的曖昧性を軽減する如何なる手段も存在しなかったことを意味するものではない。詳細な検討を行うと、次のような規則ないし傾向が見出されるのである。

まず、「誰」と動詞との間に如何なる統語成分も存在しない場合、「誰」は目的語であり、主語ではないという規則が見出される。

(9-51) 其母曰：「盍亦求之。以死，誰懟。」對曰：「尤而效之，罪又甚焉。且出怨言，不食其食。」(『左伝』「僖公二十四年」1-418)

[誰=目的語]

〔その母(=介之推の母)は言った「そうしてこれ(賞与)を求めようとしないのか。このまま死んでしまったら、誰を恨むことができようか。」(介之推は)答えて言った「(人)を咎めておきながら、これ(=人)に倣うとすれば、その罪は彼らよりも重い。その上(私は)恨み言を言いました。(わが君からいただく)禄を食べることはしません。〕

(9-52) 叔孫曰：「…雖怨季孫，魯國何罪。叔出季處，有自來矣，吾又誰怨。然鮒也賄，弗與，不已。」(『左伝』「昭公元年」4-1205)

[誰=目的語]

〔叔孫が言った：「…季孫を恨んでみても魯国には何の罪があろうか。私は(使者と

して)国を出て、季孫は国を守る。これは従来ずっとこうであったのだ。(いまさら)誰を恨もうか。しかしながら王鮒は賄を好む者だ。与えなければ満足しないだろう。]]

- (9-53) 秦穆公許諾，反使者，乃召大夫子明及公孫枝，曰：「夫晉國之亂，吾誰使，先若夫二公子而立之，以為朝夕之急。」(『国語』「晋語二」294)

[誰=目的語]

[秦の穆公は(梁由靡の願いを)許して、使者(=梁由靡)を帰した。そして大夫の子明と公孫枝とを呼び寄せて言った「晋国の動乱について、私は誰を使者としたらよいだろうか。まずあの二公子の一人を選んでその者を(継承者として)立てるのが、緊急事である。]]

- (9-54) 穆公問冀芮曰：「公子誰恃於晉。」(『国語』「晋語二」297)

[誰=目的語]

[穆公が冀芮にたずねた「公子(=夷吾)は晋では誰を頼りにしているか。]]

次に、「誰」と動詞との間に副詞、助動詞、介詞句などの統語成分がある場合、「誰」は目的語と主語のいずれでもあり得るが、「誰」が主語となる場合は、その大部分が「誰不(敢)V2/3」或いは「誰敢 V2/3」という形式をとり、強い反語の語気を伴うという傾向が見出される(用例(9-55)(9-56))¹⁵⁴。『左伝』『国語』の「孰/誰+V2」「孰/誰+V3(+O)」(=文型 I A・II A の一部)のような統語的曖昧性の高い文型において「誰」が主語になる場合、モダリティの面で何らかの制限を受けていた可能性が高い。以上から、『左伝』『国語』の「孰/誰+V2」「孰/誰+V3(+O)」(=文型 I A・II A の一部)のような統語的曖昧性の高い文型においては、統語的な手段のみならず、モダリティ面での制約とも併せた複合的な手段により、統語的曖昧性が軽減されていたと考える。

- (9-55) 蹇叔曰：「… 師之所為，鄭必知之，勤而無所，必有悖心。且行千里，其誰不知。」(『左伝』「僖公三十二年」1-490)

[誰=主語]

[蹇叔は言った「…(わが)軍の行動は、鄭はきっと察知するでしょう。苦勞してもその甲斐がないとなれば、きっとよからぬ心をおこすでしょう。それに千里も行

¹⁵⁴下例は例外であり、「誰」が主語を担うにも拘わらず、反語的ニュアンスを伴わず、純粋な疑問を表している。ただし、この用例の述語動詞「亡」は自他両用で、自動詞用法の主語の担う意味役割と他動詞用法の目的語の担う意味役割とが一致するタイプのいわゆる能格動詞である。下例の「亡」は自動詞用法であろうが、自動用法と他動用法のいずれに解しても(すなわち「誰」を主語と解しても目的語と解しても)意味的に大きな対立が生じないことが、このような例外を生じさせる原因であるのかもしれない。

・秦伯問於士鞅曰：「晉大夫其誰先亡。」對曰：「其欒氏乎。」(『左伝』「襄公十四年」3-1010)
[秦伯は士鞅にたずねて言った「晋の大夫のうちまず誰が減びるだろうか。」(士鞅は)答えて言った「おそらく欒氏でしょう。]]

軍すれば、いったい誰が察知しないでしょう。』]

(9-56) 齊侯曰：「以此眾戰，誰能禦之。以此攻城，何城不克。」對曰：「君若以德綏諸侯，誰敢不服。…」(『左伝』「僖公四年」1-292)

[誰 = 主語]

[齊の桓公は言った「この大軍勢で戦えば、いったい誰がそれに敵することができようか。この大軍勢で城を攻めたら、どんな城が落ちないというのか。」(屈完は)答えて言った「あなた様が徳を以て諸侯を治められたら、誰が心服しないでしょうか。…」]

さて、以上では、「孰/誰」が主語を担う場合と述語動詞目的語を担う場合とを検討してきたが、これらが主語と介詞目的語を担う場合についても、「誰」のみが介詞目的語を担うという傾向がある点を確認しておきたい(【図表 9-5】ⅢB・ⅢD 参照)。なお本論文の五文献の範囲では介詞が項を欠いた文において「孰」が主語となった用例(=【図表 9-5】ⅠB・ⅠD)は存在しない。

但し、「孰」が介詞目的語を担わないという点については、例外が存在するとの立場もあり得る。例えば、本論文では判断を保留したものに下例(9-57)があり、この「孰」はしばしば介詞「與」の目的語であるとみなされている(周法高 1959/1990:282 など)。しかし古漢語の概説書や『論語』の訳注書などでは、どのような構造なのかを明示しないまま、「孰與」が意味的には反語を表す現代標準語の「怎麼」(どうして)に相当すると解説されることが多い(湯可敬主編 1992:371 など)。「孰」を介詞「與」の目的語と分析する構造解釈では自然な意味解釈を施すのが困難なためだと思われる。また、魏培泉(2004:202:注 4)は、『鹽鐵論』「末通」に「君雖欲足，誰與之足乎」という語句がみられ、この語句が『論語』「顔淵」の当該の用例(本論文の用例(9-57))を説明したものであれば、『論語』「顔淵」の当該の用例についても、前置された目的語は必ずしも「孰」ではなく、「君」であるのかもしれない、と指摘する¹⁵⁵。魏氏の分析では、「孰」はおそらく主語とみなされており、そうであれば【図表 9-5】にみられる相補的統語分布の傾向に符合することになる。しかし魏氏の構造解釈でも、自然な意味解釈を行うのは容易ではないと思われる。以上から、本論文では用例(9-57)の「孰」が如何なる統語成分であるかについては保留することとし、【図表 9-5】からは除外しておいた。

いずれにしても、少なくとも『左伝』『国語』『論語』『孟子』『呂氏春秋』の五文献においては「孰」が目的語を担う明確な用例は存在しないということになる¹⁵⁶。

¹⁵⁵魏培泉(2004:202:注 4)の原文は以下のとおり。

此例恐怕不無問題。『鹽鐵論』「末通」有「君雖欲足，誰與之足乎？」如果『鹽鐵論』的文字是在解釋『論語』，那麼『論語』中「與」的提前賓語未必是「孰」，而可能是「君」了。

¹⁵⁶上古漢語全般において「孰」が目的語を担うことは極めて稀であると言える。ただし、絶無という訳ではなく、上古後期の前漢代にはいくつかの用例がみとめられる。例えば、王海棻(1987:96)は、『公羊伝』において「孰」が動詞或いは介詞の目的語を担い得ると指摘する。

(9-57) 曰：「二，吾猶不足，如之何其徹也。」對曰：「百姓足，君孰與不足。百姓不足，君孰與足。」『塩鉄論』「未通章」では「不足」の下に「乎」字有り。『漢書』「谷永伝」所引の文では「與」を「予」に作る。『後漢書』「楊震傳」所引の文では「孰」を「誰」に作る。』（『論語』「顔淵」3-851）¹⁵⁷

〔(哀公が有若に) 言った「二割（の税）でも、私は足りないのに、どうして徹（＝一割の税）でよいことがあるのか。」（有若が答えて言った）「庶民が豊かであれば、どうして君主が窮乏することがありましようか。庶民が窮乏していれば、どうして君主が豊かとなることがありましようか。』¹⁵⁸

9.2 上古後期における情況

9.2.1 語順概況

上古後期の言語を反映する『史記』（秦漢部分）においても、「孰」「誰」のうち「誰」だけが目的語を担い得る。このとき、目的語となった「誰」は、多くが下例のように前置を保つ¹⁵⁹。

(9-58) 訊曰：已矣，國其莫我知，獨堙鬱兮〔索隱：「漢書」作「壹鬱」，意亦通。〕其誰語。鳳漂漂其高遶兮，夫固自縮而遠去。（『史記』（秦漢部分）「屈原賈生列傳」2494）

〔終章：すべては終わってしまった。国に私を理解するものがいなければ、ひとり憂鬱として、いったい誰と語るというのか。鳳凰は空高く飛び去り、自ら身を引き遠くへと去る。〕

(9-59) 安國曰：「…今大王列在諸侯，*悅〔索隱：「悦」，『漢書』作「誅」〕一邪臣浮説，犯上禁，撓明法。天子以太后故，不忍致法於王。太后日夜涕泣，幸大王自改，而大王終不覺寤。有如太后宮車即晏駕，大王尚誰攀乎。」（『史記』（秦漢部分）「韓長孺列傳」2860）

〔(韓) 安国が (梁孝王に) 言った「…現在大王は諸侯に列せられておられますの

¹⁵⁷この用例の「君孰與不足」という字句は、敦煌写本ペリオ 2620『論語集解』、或いは書道博物館蔵の敦煌写本『論語鄭氏注』のなかにも見出すことができる（前者は『敦煌「論語集解」校證』514頁による）。なお、書道博物館蔵の敦煌写本『論語鄭氏注』では「孰」を「熟」に作る。

¹⁵⁸用例(9-57)の日本語訳は、仮に湯可敬(1992:371)による「孰與」の意味解釈を踏まえた上で、筆者が訳したものである。

¹⁵⁹なお、上古後期においては、目的語となった「誰」の統語的位置が上古中期から変化していることも注意を要する。すなわち、上古後期においては、当該の文に一部の助動詞が生起している場合、目的語「誰」はこれらの助動詞と述語動詞との間に位置するようになっている。この問題については、本節注 159 において改めて言及する。

に、一人の悪辣な臣下の妄言に惑わされ、皇帝陛下の禁令を犯し、明法をかき乱しておられます。陛下は皇后（を思いやる）ために、あなたを法にてらして処罰するのが忍びないにすぎません。皇后は日々、夜むせび泣き、大王が自ら悔い改めることを望んでおられましたが、大王は結局、目を覚ますことはありませんでした。もし皇后が突然お亡くなりになったら、大王は他に誰を頼るおつもりでしょうか。]]

ただし「誰」が兼語・三項動詞の目的語・介詞目的語となった場合には、後置に転じた用例が出現している。

- (9-60) 已而呂后問：「陛下百歳後，蕭相國即死，誰代之。」上曰：「曹參可。」（『史記』（秦漢部分）「高祖本紀」391）

[誰＝兼語]

〔やがて呂后がたずねた「陛下、百年の後、もし蕭相国が亡くなれば、誰に彼を引き継がせましょうか。」高祖は言った「曹参がよい。』〕

- (9-61) 於是上亦問左丞相平。平曰：「有主者。」上曰：「主者誰。」平曰：「陛下即問決獄，責廷尉；問錢穀，責治粟内史。」（『史記』（秦漢部分）「陳丞相世家」2061）

[誰＝三項動詞目的語]

〔そこで帝はさらに左丞相陳平に問うた。陳平は言った「管理者がいます。」帝が言った「管理者とは誰のことを言うのか。」陳平は言った「陛下、もし獄の判決をおたずねなら廷尉をお問い詰めください。金銭穀粟についておたずねなら、治粟内史をお問い詰めください。』〕

- (9-62) 於是王乃使人馳而往問泉陽令曰：「漁者幾何家。誰為豫且。豫且得龜，見夢於王，王故使我求之。」（『史記』（秦漢部分）「龜策列傳」3130）

[誰＝三項動詞目的語]

〔そこで王は飛脚を立て、泉陽の長官に問わせた「漁夫は幾人いるか。予且と称するのはどのような者か。予且が亀を捕らえ、（それが）王の夢に現われたので、王が私をしてこの者を探させているのだ。』〕

- (9-63) 「…今復六國，立韓、魏、燕、趙、齊、楚之後，天下游士各歸事其主，從其親戚，反故舊墳墓，陛下與誰取天下乎…」（『史記』（秦漢部分）「留侯世家」2041）¹⁶⁰

¹⁶⁰用例(9-63)には、下のような『漢書』の異文があり、そこでは「誰與」に作る。『史記』における後置の語順と『漢書』における前置の語順とのいずれが上古後期の状況を正確に反映したものかは、判断が難しい。

・良曰：「…今乃立六國後，唯無復立者，游士各歸事其主，從親戚，反故舊，陛下誰與取天下乎。…」（『漢書』「張陳王周列傳」2030）

〔張良は（漢王に）言った「…今、もし六国の子孫を封ずれば、それ以上は封ずることのできる者が（余地がないために）いなくなってしまい、遊士はそれぞれ帰国して主君に仕え、それぞれ自身の主君のもとに帰って仕え、親戚と団欒しようとして、旧地に帰るでしょう。そうなれば、陛下はいったい誰とともに、天下をおとりになるのでしょうか。…』〕

[誰=介詞目的語]

〔(張良が漢王に言った)「…いまもし六国を復興して、韓・魏・燕・趙・斉・楚の子孫を封ずれば、天下の遊士はそれぞれ自身の主君のもとに帰って仕え、親戚と団欒しようとして、郷里の先祖の墓(のもと)に帰るでしょう。そうなれば、陛下はいったい誰とともに、天下をおとりになるのでしょうか。…〕

以上の状況は、下表のようにまとめられる。

【図表 9-6】『史記』(秦漢部分)における禪母系疑問代詞目的語の語順

	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
孰	0	0	0	0
誰	5	0	3/(5)	1

*()内は通時的に無意味な用例数(上古中期の段階ですでに後置されていた文法条件と符合する用例数)。

9.2.2 語順変化メカニズム

本論文 9.1 でみたように、上古中期においては、目的語となった「誰」は原則として動詞の前に位置していた。動詞に後置される例外的語順の用例は極めて少なく、『左伝』『国語』『論語』『孟子』『呂氏春秋』の五文献における明確な例外は、「誰」が兼語を担った以下の用例のみである。この『呂氏春秋』の用例(9-64)は、上古後期に出現する「誰」の後置例の先駆ともみなし得よう。

(9-64) 後三年，民又誦之曰：「…我有子弟，而子産誨之。子産若死，其使誰嗣之。」(『呂氏春秋』「樂成」 2-999)

〔三年すると、民衆はまたこのように唱えた「…私には子弟がいるが、子産が導いてくれた。子産がもし死んでしまったら、いったい誰に彼(=子産)を継がしめようか。〕

上述のように、上古後期になると、歴史的に有意味な目的語「誰」の後置例が出現しはじめる。そのメカニズムを考える際には、上古中期から後期にかけて「誰」が生起する文法条件に大きな変化があったことを踏まえておく必要がある。すなわち上古後期では「誰」が主語を担い得る条件が拡大し、「誰」の主語としての出現頻度が増加したのである。主語となった「誰」の増加により、上古中期の『論語』『孟子』等にみられた「孰」による主語標示・「誰」による目的語標示という格標示機能が大幅に弱化されることになった。その結果、一

部の文型において、目的語となった「誰」が述語動詞の後に移動することとなったと考えるのである（用例(9-60)～(9-63)の4例）。換言すれば、上古後期では「孰」と「誰」の交替による「誰」の目的語標示機能が弱化したため、後置という語順上の手段によって目的語を標示した用例が出現しはじめたと考えるのである。

しかしながら、上古後期の二項他動詞目的語の用例では、目的語となった「誰」は前置の語順を保っている。ここで注目すべきは、上古後期において、「誰」が主語となった場合、述語動詞句の末尾に構造助詞「者」が生起するという現象がみられることである（用例(9-67)～(9-69)など）。この「者」の統語的な役割は、直接的には述語動詞句を名詞化しているであろうが、それによって「誰」を主語とし「VP+者」を述語するある種の判断文が構成されていることになる。この判断文は、機能的には分裂文(cleft sentence)に相当する文型だとみなし得るため、この「者」が付加された動機は、動詞述語文を判断文に変換し、機能的に分裂文に相当する文を形成することによって、「誰」を焦点としてとりたてることにあったと考えられる。そしてこの時、構造助詞「者」のスコープの範囲が述語句（「VP+者」のVP）の範囲にとどまる点を利用して、統語上、述語句の外にある「誰」が主語であることを標示するという、間接的な格標示が行われていたのだと考えたい。この推定は、①上古後期における「誰」が動詞述語文の主語を担った場合、その多くには述語句末に「者」が生起するという現象、②「孰」が動詞述語文の主語を担った文には、その述語句末に「者」が生起する頻度が低い——そもそも「孰」は主語を担う用例が主で目的語を担う用例が稀少であることに注意されたい——という現象などから支持される¹⁶¹。

このように、上古後期では、「誰」が動詞述語文の主語を担う場合には述語句末に「者」が生起し、「誰」が目的語を担う場合には「者」が生起しない、という間接的な格標示が行われていた。このことにより、「誰」が生起した文のうち、述語動詞が二項他動詞であるものなど、述語句の項構造が比較的単純なものについては、「誰」の統語的曖昧性が低くおさえられ、目的語となった場合でも前置の語順を維持し得ていたのだと考える。

しかし、この「者」の付加による格標示は、複雑な述語構造を有する文型に対しては十分な格標示機能を果たし得なかったようであり、上述のように「誰」が目的語でも兼語・三項動詞目的語・介詞目的語を担った文型においては——これらの文型では述語動詞句が動詞と一つの目的語だけからなる単純な構造ではあり得ない点に注意されたい——「誰」が述語動詞に後置され、語順による格標示の方法がとられることになった。これら複雑な述語動詞

¹⁶¹統語関係の表示は文末の「者」の機能の一つにすぎない。上述のように、この「者」は機能的には分裂文に相当する文を形成するために、述語動詞を名詞化するのが主機能である。この点については、すでに魏培泉(2004:227)が、「『誰…者』型は判断文の一種である。これは『誰』とその後ろの部分とを半分に分割するものであるから、機能的には『分裂文』(cleft sentence)とみなすことができる。この文は『誰』を前景化し、情報の焦点とするものである」(原文「『誰…者』式一種斷語句，它把『誰』和後頭部分分成兩半，就其功能可算是『分裂句』(cleft sentence)。這種句子把『誰』凸顯出來，成為訊息的焦點)」と指摘している。ただし、魏氏が統語的に、「誰」とその後ろの名詞化された動詞句とのいずれを主語とみていたかは必ずしも明らかではない。

句を有する文型において、「者」の付加による格標示機能が十全に機能しないのは、述語動詞句が複雑であればあるほど、その末尾の「者」のスコープの範囲がどこまでなのかという統語的曖昧性が増加するからであろう¹⁶²。

【図表 9-7】『史記』(秦漢部分)の各文型における「孰/誰」(〈+人〉)の統語的曖昧性

	孰	誰
孰/誰=S	+ {者}	
I A: (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) (+P+O) +V1/2 : (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) (+P+O) +V3 (+O)	6{0}	5{4}
I B: (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) +P+V1/2 : (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) +P+V3 (+O)	0	0
I C: (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) (+P+O) +V2+O : (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) (+P+O) +V2+O+O	14{2}	9{7}
I D: (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) +P+V2+O : (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) +P+V3+O+O	0	1{1}
孰/誰=Ov	+ {者}	
II A: (S+) 孰/誰 (=Ov) (+Aux) (+P+O) +V1/2 : (S+) 孰/誰 (=Ov) (+Aux) (+P+O) +V3 (+O)	0	4{0}
II B: (S+) 孰/誰 (=Ov) (+Aux) +P+V1/2 : (S+) 孰/誰 (=Ov) (+Aux) +P+V3 (+O)	0	0
誰=Op	+ {者}	
III B: (S+) (+Aux) 孰/誰[=Op]+P+V1/2 : (S+) (+Aux) 孰/誰[=Op]+P+V3 (+O)	0	0
III D: (S+) (+Aux) 孰/誰[=Op]+P+V2+O : (S+) (+Aux) 孰/誰[=Op]+P+V3+O+O	0	0

*表中の符号の意味は【図表 9-5】の注釈を参照のこと。

*{ }内は文末に「者」が付加される用例数である。例えば「句式 IA」の「誰」に対応する欄は「5{4}」であるが、これは「誰」が句式 IA に出現する例が 5 例あり、そのうち文末に「者」を伴うものが 4 例あるという意味。

*下の用例は述語の部分複数の述語動詞句からなる連動構造である。このような用例は上表では扱わない。

・道中人笑之，東郭先生應之曰：「誰能履行雪中，令人視之，其上履也，其履下處乃似人足者乎。」(『史記』)

¹⁶²上古後期において文中に助動詞が存在する場合、当該の助動詞が「欲」或いは「當」であれば、目的語となった「誰」はこれらの助動詞の後に位置する(用例(9-71)(9-72))。このことも、「誰」の統語的曖昧性を低下させる役割を担っていた可能性がある。この助動詞と疑問代詞目的語の統語的位置については、本論文 10.2 において改めて論ずる。

(秦漢部分)「滑稽列伝」3208)

[道行く人はそれ(=東郭先生の様子)を笑った。東郭先生はそれに応じて言った「いったい(他の)どんな者が、履をはいて雪道を歩いて人目をひかせ、足の甲だけが履で、足の下は人の足のようである、といったことなどできましようか。」]

[文型 I A]

- (9-65) 蒯通曰：「…夫以足下之賢聖，有甲兵之眾，據彊齊，從燕、趙，出空虛之地而制其後，因民之欲，西鄉為百姓請命，則天下風走而響應矣，孰敢不聽。…」(『史記』(秦漢部分)「淮陰侯列伝」2624)

[蒯通が(韓信に)言った「…あなたの賢才と聖徳によって、数多くの部隊を擁し、強大な斉国を占有し、燕・趙を帰順させ、(劉邦と項羽に占拠されていない)空白の地に出兵し、彼らの後方を牽制し、民衆の願望に応じて(劉邦と項羽とが争っている)西方に向かい、(彼らに戦いを止めて)庶民の命を救うようにしたならば、天下にその噂がすぐに伝わり、みな呼応して立つでしょう。(そうなれば) 誰があなたに聞き従わないでしょうか。」]

- (9-66) 隨何曰：「…夫漢王戰於彭城，項王未出齊也，大王宜騷淮南之兵渡淮，日夜會戰彭城下，大王撫萬人之眾，無一人渡淮者，垂拱而觀其孰勝。…」(『史記』(秦漢部分)「黥布列傳」2600)

[隨何が(淮南王に)言った「…さらに漢王が彭城で楚軍と戦ったとき、項王がまだ斉を離れなかつたのであり、その時、大王はことごとく淮南の兵を率いて淮水を渡り、日夜城の城下で戦うべきでありましたのに、大王は数万の大軍を擁しながら、一兵たりとも淮河を渡るものがなく、傍観してどちらが勝つかをうかがっておられました。…」]

- (9-67) 廷尉以貫高事辭聞，上曰：「壯士。誰知者，以私問之。」中大夫泄公曰：「臣之邑子，素知之。此固趙國立名義不侵為然諾者也。」(『史記』(秦漢部分)「張耳陳餘列傳」2584)

[獄官が貫高の様子や言葉を報告した。高祖は言った「まさに壮士である。彼を知っているのは誰か。私的な関係によって彼に(陰謀の実情を)問うのだ。」中大夫の泄公が言った。「私の同郷人です。平素より存じております。彼はもともと趙国で名誉・道義を重んじ、諾言に背くことのない人物でした。」]

- (9-68) 武安侯時為太尉，乃逆王霸上，與王語曰：「方今上無太子，大王親高皇帝孫，行仁義，天下莫不聞。即宮車一日晏駕，非大王*當¹⁶³誰立者。」(『史記』(秦漢部

¹⁶³用例(9-68)の「當」については、以下の『漢書』の異文に従って「尚」に作るべきであると考えられる。ここを助動詞「當」とみなせば、文中の「誰」を動詞「立」の主語と分析することは難しいからである。

・安初入朝，雅善太尉武安侯，武安侯迎之霸上，與語曰：「方今上無太子，王親高皇帝孫，行仁

分)「淮南衡山列傳」3082)

〔武安侯は当時、大尉であり、覇上で淮南王を迎えた。(武安侯は)王に言った「今のところ天子には太子がなく、大王は高皇帝の親孫であられる。仁義を行われていることは、天下に知らぬものがないほどです。もし天子が世を去られるようなことがあれば、大王でなくて、(天子として)立つべきものなど他に誰がおりますでしょうか。。〕

- (9-69) 高祖曰：「然。吾念之欲如是，而群臣誰可者。」堯曰：「御史大夫周昌，其人堅忍質直，且自呂后、太子及大臣皆素敬憚之。獨昌可。」(『史記』(秦漢部分)「張丞相列傳」2679)

〔高祖が言った「その通りだ。私がこの問題を考えた時にも、そのようにしたいと思った。しかし群臣のなかで誰が(その任に)ふさわしいだろうか。」趙堯は言った「御史大夫の周昌という者は、剛毅で忍耐強く、実直・不屈であり、その上、呂后や太子をはじめ大臣たちも平素より皆これを敬い畏れております。周昌だけがふさわしいでしょう。〕

- (9-70) 傳曰：「子産治鄭，民不能欺；子賤治單父，民不忍欺；西門豹治鄴，民不敢欺。」三子之才能誰最賢哉。辨治者當能別之。(『史記』(秦漢部分)「滑稽列傳」3213)
〔古書に曰く「子産が鄭を治めると、民は(彼を)欺くことができなくなった。子賤が單父を治めると、民は(彼を)欺くのが忍びなくなった。西門豹が鄴県を治めると、民は(彼を)欺く勇氣がなくなった。」三子の才能のうち、いずれが最も賢明であろうか。政治というものを分かっている者であれば、判別できるはずである。〕

[文型ⅡA]

- (9-71) 袁盎等入見太后：「太后言欲立梁王，梁王即終，欲誰立。」太后曰：「吾復立帝子。」(『史記』(秦漢部分)「梁孝王世家」2091)

〔袁盎らが太后の宮殿に入って謁見した。「太后は梁王を(太子に)立てたいとおっしゃいますが、梁王がもし亡くなられたら、誰を立てようとお考えなのですか。」太后が言った「私はやはり帝の子を立てたいと思う。〕

- (9-72) 二世曰：「…且朕少失先人，無所識知，不習治民，而君又老，恐與天下絕矣。朕非屬趙君，當誰任哉。且趙君為人精廉彊力，下知人情，上能適朕，君其勿疑。」(『史記』(秦漢部分)「李斯列傳」2559)

義，天下莫不聞。宮車一日晏駕，非王尚誰立者。」(『漢書』「淮南衡山濟北王伝」2146)

〔安(=淮南王劉安)がはじめて入朝したとき、もともと大尉武安侯と関係がよかったため、武安侯は安を覇上において出迎え、(彼に)語って言った「ちょうど主上(=武帝)には太子がありません。王は高皇帝の実の孫であり、行いが仁義にかなっておられること、天下に知らぬ者はありません。主上に万が一のことがあれば、王でなければ他に誰が立つというのでしょうか。〕

〔二世皇帝は言った。「…その上、朕は若くして父君を亡くし、何の見識もなく、民を治めるすべをも身につけていない。さらにそなたも年老いてしまっており、自分が天下と断絶してしまうのを恐れているのだ。朕は趙高に託さずして、いったい誰に任せればよいのか。…〕

- (9-73) 安國曰：「…今大王列在諸侯，*悅〔索隱：「悅」，『漢書』作「誅」〕一邪臣浮説，犯上禁，撓明法。天子以太后故，不不忍致法於王。太后日夜涕泣，幸大王自改，而大王終不覺寤。有如太后宮車即晏駕，大王尚誰攀乎。」（『史記』（秦漢部分）「韓長孺列伝」2860）

〔（韓）安国が（梁孝王に）言った「…現在大王は諸侯に列せられておられますのに、一人の悪辣な臣下の妄言に惑わされ、皇帝陛下の禁令を犯し、明法をかき乱しておられます。陛下は皇后を思いやるために、あなたを法にてらして処罰するのが忍びないにすぎません。皇后は日々、夜むせび泣き、大王が自ら悔い改めることを望んでおられましたが、大王は結局、目を覚ますことはありませんでした。もし皇后が突然お亡くなりになったら、大王は他に誰を頼るおつもりでしょうか。〕

- (9-74) 訊曰：已矣，國其莫我知，獨埋鬱兮〔索隱：『漢書』作「壹鬱」，意亦通。〕其誰語。鳳漂漂其高遶兮，夫固自縮而遠去。（『史記』（秦漢部分）「屈原賈生列伝」2494）

〔終章：すべては終わってしまった。国に私を理解するものがいなければ、ひとり憂鬱として、いったい誰と語るといふのか。鳳凰は空高く飛び去り、自ら身を引き遠くへと去る。〕

9.3 中古期における情況

9.3.1 語順概況

多くの中古文献においては、目的語となった「誰」が一般に動詞あるいは介詞に後置されるようになっている。『阿闍世王経』『修行本起経』『中本起経』『太子須大掣経』『雜宝藏経』『賢愚経』といった中原地域或いは北方地域において成立した口語性の強い漢訳仏典においては、目的語「誰」は原則的にすべて後置される。

- (9-75) 便復以衣次第與諸比丘，一一不見，盡索五百人。悉亦不現，但聞其音。言：「其有現者以衣與之。」王阿闍世熟自思念：「諸菩薩比丘僧悉亡。當以衣與誰。」（『阿闍世王経』15-402b）

〔（阿闍世王は）その衣をこんどは比丘たちにわたそうとしたが、（比丘たちは）次々と消えてしまい、五百人がすべていなくなってしまった。（彼らは）ことごとく消えてしまったが、（彼らの）声だけは聞こえてきた。（その声が）言うには「もし姿を現している者があれば、その衣をその者に与えなさい。」阿闍世王は考え込んで、思

いをめぐらすには「菩薩や比丘僧たちはことごとくいなくなってしまった。(私は)この衣を誰に与えるべきであろうか。]]

- (9-76) 期運之至，當下作佛。於兜術天上興四種觀。觀視土地，觀視父母：「生何國中，教化之宜先當誰。…」(『修行本起經』3-463a)
〔(能仁菩薩は) …期が熟したため、(地上に) 下って仏となることにした。兜術天で四種觀をおこし、(生まれるべき) 場所を觀察し、(生まれるべき) 父母を觀察した。「どの国に生まれ、教化の方法としては、まず誰を救うべきだろうか。…」〕
- (9-77) 曼坻復言：「…今亦不見兒，兒亦不來附我，為持與誰乎。今不見之我心摧裂。早語我處。莫令我發狂。」(『太子須大掣經』3-422c)
〔曼坻はさらに(太子に) 言った「…(それなのに) 今、あの子たちも見当たらないし、あの子たちが私に近寄ってくることもありません。いったい(あの子たちを) 誰に与えてしまったのですか。今、あの子たちが見当たらずに、私の心ははりさけそうです。はやく私に(あの子たちの) 居場所を教えてください。私をおかしくさせないでください。〕
- (9-78) 諸王臣集，勸令嗣位。太子固辭云：「不能當。」諸臣各曰：「大王已崩，唯有太子。更無兄弟，今言不肯。推讓與誰。」(『賢愚經』4-363c)
〔(施陀尼彌王に従っていた小国の) 王と臣下たちは集まって、(太子に父王の) 王位を継ぐように説いた。太子は固辞して言った「(私は王位に) つくことはできない。」臣下たちは口々に言った「大王は崩御され、(今は) 太子しかいおられない。他にご兄弟もないのに、(王位につくことを) 首肯しようとされない。いったい誰に(王位を) 譲るおつもりなのか。〕
- (9-79) 憂陀自念：「今為弟子，無緣復還。王須消息，因誰報命。」(『中本起經』4-154b)
〔憂陀は考えた「今(仏の) 弟子となり、復命する機会がなくなってしまった。(しかし) 王は知らせを待っておられる。いったい誰から(王に) ご報告すればよいだろうか。〕
- (9-80) 阿難語言：「汝從誰得鉢，還與本處。」於是持鉢，逐佛至尼拘*屢〔金剛寺本「婁」〕精舍。(『雜寶藏經』4-485c)
〔阿難は(難陀に) 言った「おまえは誰からこの食器をもらったのか。元の場所に返しなさい。」そこで(難陀は) 食器を持ち、仏につき従って尼拘屢精舍まで来た。〕

江南において成立した『六度集經』(A部分)においても、目的語となった「誰」は動詞あるいは介詞に後置されることが多い。ところが『六度集經』(A部分)では動詞目的語となった「誰」が前置された用例も1例存在する。さらに他の中古文献における目的語「誰」の前置例も皆無ではない。

- (9-81) 菩薩伯叔，自相謂曰：「吾之本土，三尊化行，人懷十善，君仁臣忠，父義子孝，

夫信婦貞，比門有賢。吾等將復誰化乎。…」(『六度集經』(A部分) 3-37a)

[菩薩の兄弟は、互いに言った「我々の本国は三宝の教化が行われ、人々は心に十善を抱き、君主は仁をそなえ、臣下は忠義であり、父は正義をそなえ、子は孝行であり、夫は誠実さをそなえ、妻は貞淑であり、家々には賢人がいる。我々はこのうえ誰を教化するというのだろうか。…」]

- (9-82) 御者曰：「徐君已死，尚誰為乎。」季子曰：「前已心許之矣，可以徐君死故負吾心乎。」(『論衡』「祭意」 4-1066)

[御者が言うには「徐の君主はすでに死んでしまいました。(あなたは)誰のためににそのように(=剣を除君の墓の上につるすこと)なさるのか。」季子は言った「以前に、すでに心のなかでこのこと(=除君剣をおくこと)を受け入れていたのだ。除君が亡くなったからといって私の心にたがうことができようか。」]

- (9-83) 權謂齊曰：「今定天下，都中國，使殊俗貢珍，狡獸卒舞，非君誰與。」(『三国志』「吳書」「賀齊伝」引『吳書』 1379)

[孫権は賀齊に言った「今、天下を平定し、中原に都を置き、異俗の国々に珍しいものを貢がせ、猛獣を従えて舞わせようとするならば、あなた以外に、いったい誰と力を合わせるべきだろうか。」]

9.3.2 語順変化メカニズム

中古では中原地域或いは北方地域において次の二つの変化が生じたと考えられる。すなわち、①主語となった「孰」がほぼ完全に消滅し、「孰」「誰」の交替による格標示が完全に崩壊した結果、「誰」の主語としての出現頻度が大幅に上昇した。そして②「誰」が主語を担った場合に述語句末に「者」が生起する「誰 s+V(+O)+者」という統語形式も衰退し始めたという二つの変化である。本論文は、これら①②の変化によって「誰+V2/3」という統語形式における統語的曖昧性——「誰」が主語なのか目的語なのかという曖昧性——が増大した結果、その統語的曖昧性を減少させるために目的語となった「誰」が動詞或いは介詞に後置されるようになったのだと考える。このようにして語順によって統一的に主語・目的語を標示するという現代漢語と同様の状況が出現することになったのである。用例(9-84)(9-85)は、以下の【図表 9-8】における「文型 IA」のうち主語が「誰」のものである。

- (9-84) 自見定是天身，心生歡喜，常念塔寺，以天眼觀：「所作塔寺，今誰料理。」(『雜寶藏經』 4-473b)

[(その長者は) 自らが間違いなく天人の身であるのを知り、心に喜びが生じた。ずっと塔寺のことが気にかかっていたので、天眼によって観察した「(私が) 作った塔は、今、誰が管理しているのだろうか。」]

- (9-85) 世尊念曰：「吾本發心，誓為*群[金剛寺本「君」(?)]生。梵釋請法。甘露當開，誰應先聞。…」(『中本起經』 4-147c)

〔世尊は考えた「私は元々発心し、衆生の為に行うことを誓った。(しかし) 梵天・帝釈天も(私に) 説法を請うている。甘露(のごとき説法) が開かれようとしているが、(説法を) まず誰が聞くべきであろうか。…〕

しかしながら、江南で成立した『六度集経』(A部分) では「孰」は消失していない。三世紀の江南では、上述の①②の変化が完結してはいなかった可能性が高い。そのために目的語「誰」が動詞の前に生起することがあり得たのであろう(用例(9-81)を参照)¹⁶⁴。以上の状況は、【図表 9-8】のように整理できる。

【図表 9-8】中古の「孰/誰+VP」構造の統語的曖昧性

	中	六A		雑	過
	誰	孰	誰	誰	誰
孰/誰=S	{+者}				
I A: (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) (+P+O) +V1/2 : (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) (+P+O) +V3 (+O)	3{0}	4{0}	2{1}	3{0}	2{2}
I B: (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) +P+V1/2 : (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) +P+V3 (+O)	0	0	0	0	0
I C: (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) (+P+O) +V2+O : (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) (+P+O) +V2+O+O	2{0}	13{2}	8{3}	23{4}	3{1}
I D: (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) +P+V2+O : (S+) 孰/誰[=S] (+Aux) +P+V3+O+O	0	0	0	0	0
孰/誰=Ov	{+者}				
II A: (S+) 孰/誰 (=Ov) (+Aux) (+P+O) +V1/2 : (S+) 孰/誰 (=Ov) (+Aux) (+P+O) +V3 (+O)	0	0	1{0}	0	0
II B: (S+) 孰/誰 (=Ov) (+Aux) +P+V1/2 : (S+) 孰/誰 (=Ov) (+Aux) +P+V3 (+O)	0	0	0	0	0
誰=Op					
III B: (S+) (+Aux) 孰/誰[=Op]+P+V1/2 : (S+) (+Aux) 孰/誰[=Op]+P+V3 (+O)	0	0	0	0	0
III D: (S+) (+Aux) 孰/誰[=Op]+P+V2+O : (S+) (+Aux) 孰/誰[=Op]+P+V3+O+O	0	0	0	0	0

¹⁶⁴目的語となった「誰」の前置用例がみとめられる文献のうち、少なくとも本論文で扱ったものについては、いずれも「孰」を保つ点が注目される。例えば目的語「誰」の前置例は、『六度集経』(A部分) の他、『論衡』『三国志』などにみえるが(用例(9-82)(9-83))、これらの文献はいずれも主語となった「孰」を保存している。これらの文献の基礎方言においても、9.3.2冒頭で述べた①②の変化が完結してはいなかった可能性が高い。

*記号の意味については、本論文 9.1.2.2【図表 9-5】の注釈を参照のこと。

*「孰/誰」が目的語として動詞・介詞に後置された用例は、上表では扱っていない。

*「孰/誰」が名詞述語の主語となった場合、統語的曖昧性は生じないため、上表からは除外してある。

9.4 近古前期における状況

近古期においては、上古後期から中古期にみられた変化が一層進展している。すなわち、①「孰」がほぼ完全に消失し、②目的語「誰」は完全に後置語順となっている。本論文が資料とした近古前期の四資料において、通時的に有意味な目的語「誰」の前置用例は存在しない。禅母系単音節疑問代詞目的語の後置への語順変化はほぼ完成したと考えられる。

(9-86) 十娘答曰：「得便不能與，明年知有^{*}誰[□]〔陽明文庫本「何處」〕。」(『遊仙窟』51-387~388)
〔十娘は答えて言った「好都合なのに、それに対応できないようなら、来年は誰が
いるでしょうか。」〕

(9-87) 渡江欲至南岸，子胥乃問船人曰：「先生姓何名^{*}誰[□]，鄉貫住在何州縣。」(『伍子胥
變文』8)

〔川をわたり南岸に着きそうになると、子胥は漁師にたずねて言った「あなたは姓
は何と申され、名は何とおっしゃいますか。お生まれはどこの州県でしょうか。」〕

なお、近古に至ると、禅母系疑問代詞「誰」から派生した「阿誰」「誰人」「誰家」などの複音節がみられるようになる（一部は中古からある）¹⁶⁵。これらが目的語となった通時的に有意味な用例は、本論文で資料とした四文献には存在しないが、他文献の用例も含めても、通時的に有意味な前置の用例は確認されない（以下は通時的に無意味な後置の用例）。

(9-88) 喚得園人來借問：「園主當今是^{*}阿誰[□]，我今事切須相見，火急具速莫遲違。」(『降
魔變文』555)

〔(須達は) 園丁を呼び出して問うた「今、庭園の主人はどなたですか。私は今、

¹⁶⁵ この他、禅母系疑問代詞から派生した「阿誰」「誰家」などが連体修飾語となった疑問フレーズが目的語を担った用例もみられる。本論文の近古四資料でもいずれも後置されている（通時的に無意味な用例が2例）。

・瞽叟喚言舜子：「…阿孃上樹摘桃，樹下多埋惡刺，刺他兩腳成瘡，這個是^{*}阿誰不是[□]。」(『舜子變』201)

〔瞽叟は舜子を呼びつけて行った「…母さんが木に登って桃を摘んだ時に、木の下に沢山の悪辣なほど鋭いトゲを埋め、母さんの両足を刺して傷を作った。それはいったい誰の過ちだ。〕

・「…佛是^{*}誰家種族[□]。先代有沒家門。學道諮稟何人。在身有何道德。…」(『降魔變文』560)
〔(王は須達たずねた) 仏とはどの家の氏族であるのか。先祖に名家はあるのか。道を学ぶのにどの人に教えを請い、どの人から授かったのか。どんな道徳を身につけているのか。〕

切迫した事情があつて是非ともお会いする必要がある。至急、速やかにとりつきいただき、遅れたり断られたりすることのないようにされたい。」 〕

第十章 単音節疑問目的語の語順変遷（二）

——非禪母系疑問代詞目的語

本論文第八章において既述したように、非禪母系単音節疑問代詞が動詞目的語となった場合は、上古から近古前期まで一貫して前置される。本章ではまずこの点を確認した上で、主として非禪母系単音節疑問代詞が介詞目的語となった場合の語順変化のメカニズムを論じる。またそれ以外にも、上古中期の動詞目的語としての非禪母系単音節疑問代詞が文に重大な統語的曖昧性をもたらさなかった原因（本論文 10.1）、上古後期の前置動詞目的語となった非禪母系単音節疑問代詞の統語的位置の変化（本論文 10.2）、近古前期における非禪母系疑問代詞目的語の語彙交替（本論文 10.4）といった、非禪母系単音節疑問目的語の語順と密接に関わる問題についても論じていく。

10.1 上古中期における状況

本論文 4.1 において述べたように、上古中期においては、「何」「奚」「焉」「惡」などの非禪母系単音節疑問代詞が目的語となった場合、特殊な動詞・介詞の目的語となった場合（4.1(i)～(vi)）以外は、原則としてすべて動詞或いは介詞の前に位置した（『論語』『孟子』の状況は【図表 4-1】【図表 4-2】参照）。ここで確認しておくべきことは、「/何/+V/P」という非禪母系単音節疑問代詞が目的語となった構造に、どうして統語的曖昧が内在しないのかという点であろう。第九章で論じたように、本論文では禪母系単音節疑問代詞目的語に関しては、「誰+V/P」構造に内在する統語的曖昧性が語順変化を引き起こしたと考えるからである。

上述のように、非禪母系単音節疑問代詞が動詞目的語となった場合は、上古から中古・近古前期まで一貫して前置の語順を保ったが、その原因は、これらの疑問代詞が原則的に二/三項他動詞の主語を担い得ないために（周法高 1959/1990:218 注 3 等）¹⁶⁶、文中において動詞に前置された場合でも、これが主語なのか目的語なのかという統語的曖昧性が生ずることがほとんどなかったためだと考える。二/三項他動詞の主語を担い得るか否かという共時的な文法機能の差異が、非禪母系単音節疑問代詞と禪母系単音節疑問代詞との間に、動詞目

¹⁶⁶古漢語の非禪母系単音節疑問代詞が二/三項他動詞の主語となることが極めて稀な原因は不明であるが、本論文では、これらが意味的に〈実体性〉を欠けているためであると推定しておく。この推定は、現代普通話における疑問代詞を分析した木村(2008)が、「什麼」が特定の条件下のもとでのみ主語となり得ることを指摘した上で、その原因を〈実体性〉が欠けていることに求めたことを踏まえたものである。

の語としての語順の通時的な変遷の違いを生み出したとも言える¹⁶⁷。以下、上古後期以降の具体的な状況について検討を加えていく。

10.2 上古後期における状況

上古後期においても、非禪母系単音節疑問代詞目的語は、その大多数が前置の語順を保っており、『史記』（秦漢部分）では、動詞目的語にせよ介詞目的語にせよ、通時的に有意味な後置語順の確実な用例はみとめられない¹⁶⁸。

¹⁶⁷非禪母系単音節疑問代詞（「/何/」と標記する）は原則として二/三項他動詞の主語は担い得ないが、連用修飾語は担い得る。よって単純な「/何/+V」という統語形式においては、この「/何/」が前置目的語なのか連用修飾語なのかという統語的曖昧性が存在するかのようである。そうであれば、この統語的曖昧性が非禪母系単音節疑問代詞目的語の語順変化を引き起こす要因とならなかった理由を説明する必要がある。

この点について、本論文は、「/何/+V」における「/何/」が目的語なのか連用修飾語なのかという統語的曖昧性が、意味上重大な差異もたらすことが稀であったからだと考える。例えば、統語的には、下例の「何+V」はいずれも動目構造と分析され得ると考えるが（意味解釈は「何を～するのか」）、修飾構造と解釈しても（意味解釈は「どうして～するのか」）、意味上は重大な相違が生ずることはない。

・入曰：「伯夷、叔齊何人也。」曰：「古之賢人也。」曰：「怨乎。」曰：「求仁而得仁，又何怨。」（『論語』「述而」2-462）

〔（子貢は孔子の部屋に）入ると（孔子に）言った「伯夷と叔齊はどのような人ですか。」（孔子は）言った「古の賢人だ。」（子貢は）言った「（互いに譲って君主の地位を捨てたことを）悔やみ怨んででしょうか。」（孔子は）言った「仁を求めて仁を得たのだ。*何を悔やみ怨むというのか／どうして悔やみ怨むことがあるのか。〕

・司馬牛憂曰：「人皆有兄弟，我獨亡。」子夏曰：「商聞之矣。『死生有命，富貴在天。』君子敬而無失，與人恭而有禮，四海之内，皆兄弟也。君子何患乎無兄弟也。」（『論語』「顔淵」3-830）

〔司馬牛がふさぎこんで言った「人にはみな兄弟があるのに、わたしだけにはいない。」子夏は言った「わたしはこのように聞いている。『生死は宿命によるのであり、富や地位も天に定められている。』君子はただ慎み深くして間違いを犯さず、人と交わるのに恭しく礼を守っていけば、天下の人がみな兄弟となる。君子は*兄弟のないことについて何を憂うことがあるのか／兄弟のないことをどうして憂えようか。〕

また、太田(1964/2002:55-56)は、そもそも「何」の副詞用法は、その前置目的語の用法に由来すると指摘している。このような変化が生じ得るのも、目的語を担った場合と連用修飾語を担った場合との間にしばしば意味的な連続性が存在するからであろう。無論、両者の用法との間に意味上、重大な相違が存在する場合もあり得ようが、総じて出現頻度が低かったために、その語順に影響を与えることはなかったのだと考える。

¹⁶⁸何樂士(1992:83)は、『史記』には下のような「何」の後置例が2例みられるとする。

・王先生曰：「天子即問何以治北海令無盜賊，君對曰何哉。」（『史記』（秦漢部分）「滑稽列伝」3210）

〔王先生は言った「もし天子がどのように北海を治めた結果、盗賊がいなくなったのか、とおたずねになったら、あなたはどのようにお答えになりますか。〕

・穰苴曰：「將在軍，君令有所不受。」問軍正曰：「馳三軍法何。」正曰：「當斬。」（『史記（非秦漢部分）』「司馬穰苴列伝」2158）

(10-1) 上曰：「文成食馬肝死耳。子誠能修其方，我何愛乎。」(『史記』(秦漢部分)「孝武本紀」462)

〔主上(=孝武皇帝)は(欒大に)言った「文成は馬の肝臓を食べて死んでしまったにすぎない。あなたが本当に彼(=文成)の方術をまとめることができるのであれば、私は何を惜しむことがあろうか。〕

(10-2) 乃與使者馳而問豫且曰：「今昔汝漁何得。」豫且曰：「夜半時舉網得龜。」(『史記』(秦漢部分)「龜策列傳」3230)

〔(泉陽の長官は)使者とともに馬をとばして(豫且を探し当て)豫且にたずねた「昨夜、お前は漁をして何を捕まえたか。」豫且は言った「夜半時に網をあげると亀がかかっていました。〕

(10-3) 烏江亭長檣船待，謂項王曰：「江東雖小，地方千里，眾數十萬人，亦足王也。願大王急渡。今獨臣有船，漢軍至，無以渡。」項王笑曰：「天之亡我，我何渡為。」(『史記』(秦漢部分)「項羽本紀」336)¹⁶⁹

〔穰苴は(使者に)言った「将たる者は陣中であつては、君命でもきかないことがある。」さらに軍法官にたずねて言った「馬を軍營のなかで馳せることは、軍法では何に当たるか。」軍法官は言った「斬罪に当たります。〕

しかし、本論文は、この2例は、通時的に有意味な目的語「何」の後置例であるとは必ずしもみなせないと考える。上例「君對曰何哉」については、動詞「曰」の目的語は、多くは直接引用された語句であり、この点で「云」と共通する特徴を有する(汪維輝 2003/2007を参照)。もし目的語が直接引用語句であれば、動詞との文法関係は間接的であるために、上古中期であってもそれは動詞の後に置かれたはずであり(本論文 4.1を参照)、必ずしも疑問代詞目的語の通時的語順変化を反映したものとは言えない。その次の例の「馳三軍法何」については、この「何」は目的語ではないという可能性が排除できない。例えば、下例における「(皆)斬」は「法」の目的語とみなすことはできない(統語構造の分析は難しいが、「法」は「(皆)斬」の主語あるいは連用修飾語である可能性が高い)。本論文は「馳三軍法何」における「何」も、「法」の目的語ではない可能性が高いと考える。

・會天大雨，道不通，度已失期。失期，法皆斬。(『史記』(秦漢部分)「陳涉世家」1950)

〔(陳勝・吳広らは)大雨に遭遇し、道が不通となった。すでに(漁陽までの到着の)期限を過ぎていた。期限に遅れると、法に照らせばみな斬罪であった。〕

¹⁶⁹ 本論文では、用例(10-3)のような「何+X+為」構造は、動詞「為」の目的語「何」が前置された「何+以+X+為」から、「以」が省略された形式だと考える。「以」の省略が許容される点で構造全体が構文化しているとも言えるが、依然として「何」は「為」の目的語とみなし得ると考える(Xと「為」は連用修飾関係にあるとみなす)。同様の構造は、上古中期にもみられる。

・小儒曰「未解裙襦，口中有珠。詩固有之曰『青青之麥，生於陵陂。生不布施，死何含珠為。』」(『莊子』「雜篇」「外物」4-927~928)

〔小儒が言った「まだ死者の肌着を脱がしていません。口の中に珍珠があります。」(大儒が言った)「古詩に「青々とした麦が墓の辺りに生い茂る。生きて施しをせずに、死んで珍珠を啜えてどうする」というのか。〕と言う。…〕

この「何+X+為」或いは「何+以(+X)+為」といった形式については、「為」の品詞性や統語構造めぐり多くの議論が積み重ねられてきた(木津祐子氏・成田健太郎氏のご教示による)。楊樹達(1928/1983:368)などが「何+以+X+為」における「為」を疑問を表す文末助詞の用法(「語末助詞，表疑問」としていたのに対し、朱運申(1979)はこれらの構造における「為」を動詞だと主張し(「何」は前置目的語とみなす)、論争が引き起こされた。その後、多くの論者は、朱

〔烏江の亭長が船を岸につけて待っており、項王に言った「江東は小さなところですが、土地の周囲は千里あり、民衆は十萬を数えます。王たるに十分(なところ)です。願わくば、大王には急いでお渡りくださらんことを。いま私だけが船をもっており、漢の軍隊が来たとしても、渡るすべがございません。」項王は笑って言った「天が私を滅ぼそうとしているのに、渡ってどうするのというのか。…」〕

ただし、上古後期における単音節疑問代詞目的語の統語的位置には、上古中期のそれと異なる点がある。上古中期においては、述語動詞が助動詞を伴う場合、単音節疑問代詞目的語は助動詞の前に位置したが、上古後期における状況は複雑であり、単音節疑問代詞目的語と助動詞・動詞との統語的位置関係は助動詞の種類によって異なる。例えば、助動詞が「能」であれば、上古中期と同じく「能」の前に位置するが(用例(10-4))、助動詞が「欲」であれば、「欲」の後ろ・述語動詞の前に位置する(用例(10-5)~(10-6))¹⁷⁰。なお、単音節疑問代詞目的語と介詞句・副詞との統語的位置関係は、本論文 4.5 (【図表 4-6】)で既述した上古中期における状況からの変化はみとめられない(用例(10-7)(10-8)(10-10)(10-11))。

(10-4) 上召諸將問曰：「布反，為之奈何。」皆曰：「發兵擊之，阬豎子耳。何能為乎。」
(『史記』(秦漢部分)「黥布列傳」2604)

〔主上(=高祖)は諸將を引見してたずねて言った「(黥)布が叛いた。どうしたらよいか。」(彼らは)みな言った「出兵して彼(=黥布)を攻撃し、あの小僧を穴埋

氏説に批判的な態度をとり、一般にはこれらの構造における「為」(の少なくとも一部)は語気助詞であるとみなされている(王紅生 2018・張儒 2000 など参照。また日本でも西田 1981 などの議論がある)。しかし本論文は、用例(10-3)をはじめとする上古中期・後期のほとんどの「何+X+為」「何+以(+X)+為」については、「為」は動詞であり、「何」は依然として前置目的語と分析し得ると考える。賈齊華(2003:450)が指摘するように、少なくとも上古中期では、同様の構造が他の疑問代詞・動詞の組み合わせの場合にもみられるからである(「奚以汝適」『莊子』「内篇」「大宗師」など)。ただし下例のように、上古後期における、X部分の音節数が多く、「何」が副詞「乃」などに前置された「何+ad+X+為」構造については、「何」が再分析を経て副詞化しており、文末の「為」が動詞性を失っている可能性も排除できないと考える。

・黥數質責湯於上前，曰「…非苦就行，放析就功，何乃取高皇帝約束紛更之為。…」(『史記』(秦漢部分)「汲鄭列傳」3107)(賈齊華 2003:450 所引の用例)

〔汲黯は何度も主上(=武帝)の御前で張湯に詰問・叱責して言った「…苦勞して事を成就させようとせず、恣に(律令を)を破り、(自分の)功となそうとしている。高祖の(定めた)規則・制度を乱すようなことをしてどうするというのか。…」〕

¹⁷⁰本章では、非禪母系単音節疑問代詞目的語の統語的位置の通時的変化を論じているが、本論文の調査によると禪母系単音節疑問代詞目的語(「誰」)にも同様の統語的位置の変化が生じたと考えられる(本論文 9.2.2、用例(9-71)などを参照)。なお、本論文の調査の範囲では非禪母系疑問代詞目的語と助動詞「當」とが同一の文中に生じた用例は存在しないが、禪母系単音節疑問代詞目的語(「誰」と助動詞「當」とが同一文中に共起した用例は存在し、そこでは「誰」が「當」の後ろ・述語動詞の前に位置している(用例(9-72)参照)。

めにするだけです。(彼に) 何をすることができましようか。』]

- (10-5) 大宛聞漢之饒財，欲通不得，見騫，喜，問曰：「若欲何之。」(『史記』(秦漢部分)「大宛列伝」3158)

[大宛は漢は資源財物が豊富だと聞いており、(漢と) よしみを通じようとしていたが、実現できないでいた。(そこで) 張騫と面会すると、喜び、(彼に) たずねて言った「おまえはどこに行こうとしているのか。』]

- (10-6) 壺遂曰：「…今夫子上遇明天子，下得守職，萬事既具，咸各序其宜，夫子所論，欲以何明。」(『史記』(秦漢部分)「太史公自序」3299)

[壺遂は言った「…今、あなた(の時代)は上は聖明な天子にめぐまれ、また下は官職を守ることができます。万事すでに整っており、(世の人々も) みな相応しい地位についております。あなたが論じておられることは、それによって何を明らかにしようとするものなのですか。』]

- (10-7) 上曰：「百金中民十家之産，吾奉先帝宮室，常恐羞之，何以臺為。」(『史記』(秦漢部分)「孝文本紀」433)

[主上(=文帝)は言った「百金は中流の民の十家の家財に相当する。私は先帝の(遺された) 宮室をうけたまわり、これを辱めることになるのを常に恐れているのだ。露台など(作って) 何をするというのか。』]

- (10-8) 所忠視其書不經，疑其妄書，謝曰：「寶鼎事已決矣，尚何以為。」(『史記』(秦漢部分)「孝武本紀」467)

[所忠はその(=木簡の) 文章(の内容)が常軌に反しているのを見て、それが偽作されたものではないかと疑い、(公孫卿の要求を) 謝絶して言った「宝鼎の件はすでに解決しています。これ以上どうするというのでしょうか。』]

- (10-9) 面質呂嬃於陳平曰：「鄙語曰『兒婦人口不可用』，顧君與我何如耳。無畏呂嬃之讒也。」(『史記』(秦漢部分)「陳丞相世家」2060)

[(太后は) 陳平に対して面と向かって呂嬃(の言)を問いただして言った「俗言に『子供と婦人の言は用いるべきでない』と言います。(私のそなたに対する態度は) そなたが私に対してどのよう(な態度)であるか、ということ次第です。呂嬃の讒言など恐れることはありません。』]

- (10-10) 上方與晁錯調兵筭軍食，上問袁盎曰：「君嘗為吳相，知吳臣田祿伯為人乎。今吳楚反，於公何如。」(『史記』(秦漢部分)「吳王濞列伝」2830)

[主上(=景帝)はちょうど晁錯と兵力や軍の食糧を数え、計画をたてていた。(主上は) 袁盎にたずねた「そなたはかつて吳の宰相であったが、吳の臣の田祿伯の人となりを知っているだろうか。いま吳・楚が反乱を起こした。そなたの見るところ(事態は) どのようであるだろうか。』]

- (10-11) 高祖已從豨軍來，至，見信死，且喜且憐之，問：「信死亦何意。」呂后曰：「信言恨不用蒯通計。」(『史記』(秦漢部分)「淮陰侯列伝」2629)

〔高祖は（征討のために向かった）豨（＝陳豨）の軍のところから還ってきた。（都に）到着すると、信（＝韓信）が死んだのを知り、喜びつつも彼を憐れんで、たずねた「信が死んだ時、どんなことを言ったか。」呂后は言った「信は蒯通の計略を用いなかったことが恨めしいと言いました。〕

10.3 中古期における状況

10.3.1 語順概況

上述のように動詞目的語となった非禅母系単音節疑問代詞は、中古においても一貫して前置の語順を保っている。本章では、介詞目的語となった非禅母系単音節疑問代詞の語順を検討していく。そのうち「何」が介詞目的語となった場合の語順状況は相当に複雑であり、前置と後置のいずれもあり得た。以下に、まず前置を保つ用例を挙げる。

(10-12) 佛言：「彼人長衰。甘露當開，不得受聞。生死往來，**何**緣得息。五道輪轉，痛矣，奈何。」（『中本起經』 4-147c）

〔「何緣」は〈手段・方法〉を問う〕

〔私は言った「かの人（は）年老いて亡くなってしまったのか。甘露（のごとき説法）が開かれようとしているのに、（それを）聞くことができないとは。冥界の往来というものを、どうやって止めることができようか。五道に転生を繰り返すのは痛ましい。（しかしこのことを）いったいどうすることができようか。〕

(10-13) 疾邁見道士若茲，叩頭問曰：「**何**由致此。」道士具*陳〔三本「説」〕厥所由然。（『六度集經』（A部分） 3-28b）

〔「何由」は〈理由〉を問う〕

〔（蛇は）急いでやって来ると、道士がこのようなことになっている（＝首から下を地面に埋められている）のを見て、叩頭してたずねた「どうして、こんなことになったのですか。」道士はつぶさに事の顛末を説いた。〕

(10-14) 王答言：「我先作惡，喻彼熱鑊，今修諸善，慚愧懺悔，更不為惡，**胡**為不滅。…」（『雜寶藏經』 4-484c）

〔「胡為」は〈理由〉を問う〕

〔（月氏国の）王は（臣下たちに）答えて言った「私は以前、悪をなしたのは、その（七日間ずっと沸かせた）熱い釜に喩えられよう。今、多くの善をなし、（過去のことを）懺悔して、これ以上悪をなさないこととしたのに、どうして（過去になした悪を）滅せられないことがあるか。…〕

(10-15) 諸臣答言：「…不知**何**緣忽有病人。非是我等之罪咎也。」（『過去現在因果經』 3-630b）

〔「何縁」は〈理由〉を問う〕

〔臣下たちは（王に）答えて言った「…どうして突然、病人が現れたのか分かりません。（このことは）我々の過失ではありません。〕

中古において注目すべきは、以下のように介詞に後置される目的語「何」の用例が出現したことである。

「以何」

- (10-16) 抗聲哀曰：「象以其牙，犀以其角，翠以其毛，吾無牙角光*目〔三本「目」〕之毛，將以何死乎。」（『六度集經』（A部分）3-24c）

〔「以何」は〈根拠となる事物〉を問う〕

〔睞は声を張りあげて号泣して言った「象であつたらその牙のために、犀であつたらその角のために、カワセミであつたらその羽毛のために（殺されるの）であろうが、私は牙も角も光り輝く羽毛もないのに、いったいどんなことのために死ぬというのだろうか。〕

- (10-17) 獼猴索果；狐化為人，得一囊糗；獺得大魚。各曰：「可供一月之糧。」兔深自惟：「吾當以何*供〔三本、金剛寺本「供養」〕道士乎。」（『六度集經』（A部分）3-13c）

〔「以何」は〈対象〉を問う〕

〔獼猴は果実を探し、狐は人に化けて一袋の麦焦がしを手に入れ、カワウソは大きな魚を捕まえた。（そして）それぞれ言うには「（これであの道士の）一ヶ月分の食料とすることができる。」兔は深く考えた「私はどんなものを道士に供することができるのか。〕

- (10-18) 佛行見之，即往到邊，而問言曰：「汝於今*日〔三本、金剛寺本「者」〕，以何為苦。」別人答言：「我最苦餓。」（『雜寶藏經』4-482a~b）

〔「以何」は〈根拠となる事物〉を問う〕

〔仏は、彼（＝王法を犯し手足を截たれ、道端に捨てられていた者）を見ると、（彼の）近くに行き、たずねて言った「お前は今日、どのようなことで苦しんでいるのか。」その手足を截たれた者が答えて言った「私は飢えに最も苦しんでおります。〕

- (10-19) 其弟見己，倍懷嫉妒。…而語之言：「汝父輔相，先看我厚。今彼比丘至止已來，不知以何幻惑汝父。今於我薄。…」（『雜寶藏經』4-460c）

〔「以何」は〈手段・方法〉を問う〕

〔弟は（大臣が兄に送った千万錢に値する布を）みると、以前にも増して嫉妬し…彼女（＝大臣の娘）に言った「お前の父である大臣は、はじめは私を手厚く遇してくれていた。（それが）今、あの比丘（＝兄）がやって来て以来、どうやってお前の父を惑わせたのか分からないが、今は私に対して冷たくなってしまったのだ。〕

(10-20) 於是菩薩，則自思惟：「過去諸佛，以何為座，成無上道。」即便自知以草為座。
（『過去現在因果經』 3-639c）

〔「以何」は〈対象〉を問う〕

〔そこで菩薩は深く思考をめぐらせた「過去の諸仏は、何を座具として、無上道を完成したのであろうか。」（すると）たちどころに（過去の諸仏は）草を座の敷物としたことが分かった。〕

「從何」

(10-21) 迦葉遊觀見池邊兩石，怪而問佛：「今此池邊兩石妙好。此從何*出 [三本、金剛寺本「來」。]」（『中本起經』 4-151b）

〔「從何」は〈起点・経由点〉を問う〕

〔迦葉は池のほとりの二つの石を見かけると、訝しんで仏にたずねた「今、この池のほとりに美しい二つの石がありますが、これはどこから出てきたものなのでしょう。〕

(10-22) 佛已到北方鬱單*曰 [三本「越」] 取自然粳米。迦葉未至，已坐其床。迦葉問佛：「復從何來。」（『中本起經』 4-150c）

〔「從何」は〈起点・経由点〉を問う〕

〔仏は北の鬱單曰に行くと、天然の粳米を手にとった。（そして）迦葉がまだ到着しないうちに、（仏は）すでに自身の腰掛けに座っていた。迦葉は仏にたずねた「こんどはどちらから来られたのでしょうか。〕

(10-23) 爾時菩薩至第三夜，…又觀三有業從何而生，即知三有業從四取。又觀四取從何而生，即知四取從愛而生。又復觀愛從何而生，即便知愛從*受 [聖語藏本無] 而生。…（『過去現在因果經』 6-642a）

〔「從何」は〈起点・経由点〉を問う〕

〔その時、菩薩は第三夜に至り、…さらに三有業（＝三界における生存のありかたを定める業）は何から生まれるのかを觀ずると、すぐに三有業は四取（＝対象を取って離さない四種の煩惱）からであることが知られた。さらに四取はどこから生まれるのかを觀ずると、すぐに四取は愛（＝対象に対するあくなき欲望）から生ずるのだと知られた。さらに今度は、愛はどこから生ずるのかを觀ずると、すぐに愛は受（＝苦・楽・不苦不樂などの印象・感覺）から生ずるのだと知られた。…〕

(10-24) 心懷驚怪而往問佛：「年少沙門，汝此樹間有四方石及*大 [三本、聖語藏本「以」] 石槽。從何而來。」（『過去現在因果經』 3-648c）

〔「從何」は〈起点・経由点〉を問う〕

〔（迦葉は）驚き怪しんで仏のところへ赴き、たずねた「年若い沙門よ、この樹間には四角形の石と大きな石の水槽とがある。（これは）どこから来たものなのか。〕

「因何」

(10-25) 深生歡喜，更問餘義：「貪嫉因何而生。何因何緣，得生貪嫉。何因緣生，何因緣

滅。」(『雑宝蔵経』 4-477a)

「[因何]は〈原因となる事物〉を問う]

[(帝釈は)心に深い喜びを生じ、さらに(仏に)関連する道理についてたずねた「貪りや嫉みは何によって生ずるのでしょうか。どんな因・どんな縁によって貪りや嫉みが生じ得るのでしょうか。どんな因縁によって生じ、どんな因縁によって滅するのでしょうか。」]

- (10-26) 深生歡喜，更問餘義：「覺觀因何而生，何緣增長，云何而滅。」「覺觀從調戲生，緣調戲增長，無調戲覺觀則滅。」(『雑宝蔵経』 4-477b)

「[因何]は〈原因となる事物〉を問う]

[(帝釈は)心に深い喜びを生じ、さらに(仏に)関連する道理についてたずねた「あるものについてあれこれと思考をめぐらすことは何によって生じ、何によって増加し、どのようにして滅するのでしょうか。」(仏は答えて言った)「あるものについてあれこれと思考をめぐらすことは、心が揺れ動くことによって生じ¹⁷¹、心が揺れ動くことによって増加する。心が揺れ動くことがなければ、あるものについてあれこれと思考をめぐらすことも滅するのだ。」]

- (10-27) 深生歡喜，更問餘義：「調戲因何生長，云何而滅調戲。」(『雑宝蔵経』 4-477b)

「[因何]は〈原因となる事物〉を問う]

[(帝釈は)心に深い喜びを生じ、さらに(仏に)関連する道理についてたずねた「心が揺れ動くことは何によって生じて増加し、どのようにして心が揺れ動くことを滅するのでしょうか。」]

「自何」

- (10-28) 王召軍師戰士數萬，尋捕妖賊，未知所之。道過佛所，曰：「王自何來，身蒙塵土。」(『六度集経』(A部分) 3-23b)

「[自何]は〈起点・経由点〉を問う]

〔王は戰士数万にもおよぶ軍隊を招集し、(多くの無辜の人を殺した)賊を搜索して捕らえようとしたが、(その賊は)どこに行ったのかわからなかった。(王が)道すがら仏のおられたところを通り過ぎた時、(仏が王に)言った「王はどちらから来られたのか。身体中が塵をかぶっておられるが。」]

- (10-29) 還山睹鳥，呼名曰：「鉢」。鳥問曰：「自何來耶。」曰：「獵者所來。」(『六度集経』(A部分) 3-28b)

「[自何]は〈起点・経由点〉を問う]

〔(道人が)山中に帰ると(以前、救出したことのある)カラスを見つけたので、名

¹⁷¹ 用例(10-26)(10-27)の「調戲」という語は、意味を解釈するのが非常に難しい。ここではサンスクリット語 *auddha-ka=ukrtya-āvaraṇa* に対応するとされる漢語「掉悔蓋」(心の平安をみだす煩惱、五蓋の一つ)が、「掉戲蓋」「調戲蓋」とも表記されることがある点を踏まえ(『佛光大辭典』4585頁)、かりに「心が揺れ動くこと」と訳しておく。ただし、この処置には「戲」字の合理的な解釈がなされていないなど問題が少なくないことを認めざるを得ない。

前を呼んで「鉢」と言った。カラスはたずねた「どこから来られたのですか。」(道人は) 言った「獵師のところから来たのだ。」]

『中本起経』、『六度集経』(A部分)、『雑宝蔵経』、『過去現在因果経』における介詞目的語となった「何」の語順は、【図表 10-1】のようにまとめられる。

【図表 10-1】中古における介詞目的語「何」の語順

文献 \ 介詞	以		緣		因		從		自		為		由	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
中本起経	0	0	4	0	2	0	1	3	0	0	0	0	0	0
六度集経 (A部分)	5	2	9	0	0	0	1	1	0	2	0	0	1	0
雑宝蔵経	29	2	7	0	0	3	0	0	0	0	7	0	5	0
過去現在因果経	0	1	4	0	0	0	1	11	0	0	1	0	0	0

*各介詞の「前」「後」欄は、当該の介詞がそれぞれ疑問代詞目的語前置型、疑問代詞目的語後置型に用いられた用例数を表す。

10.3.2 語順変化メカニズム

上述のように、非禅母系単音節疑問代詞目的語については、介詞目的語となった「何」の一部分だけが語順変化を起こしたのである。ここではそのメカニズムについて論じていく。

まず、上記の中古四資料において「何」が介詞目的語となった用例を検討すると、以下の三点が見出される。

- (i) 「以何」「從何」「因何」といった疑問代詞目的語後置型の介詞句には、それらと対応する疑問代詞目的語前置型の介詞句が存在する。すなわち、「以何」「從何」「因何」と同じ介詞・疑問代詞目的語の組み合わせによる「何以」「何從」「何因」といった疑問代詞目的語前置型の介詞句がみとめられる。
- (ii) 同一の介詞・疑問代詞目的語から構成される介詞句のうち、疑問代詞目的語前置型は二種以上の意味を備えている。例えば、「何以」には〈根拠となる事物〉〈手段・方法〉〈対象〉を問う意味と、〈理由〉を問う意味とがあり、「何從」には〈起点・經由点〉を問う意味と、〈理由〉を問う意味とがある。「何因」には〈原因となる事物〉〈手段・方法〉を問う意味と、〈理由〉を問う意味とがある。そしてこれらの意味のうち、それぞれ最後に挙げた意味(「何以」「何從」「何因」の〈理由〉を問う意味)は、前置型の介詞句が固定化を経て、全体として一語化した後、語彙全体として獲得した抽象的な

意味であると推定される¹⁷²。

(iii) 疑問代詞目的語後置型の介詞句の有する意味は、疑問代詞目的語と介詞の組み合わせによる構造が元来有していたと推定される意味である。

以下に示すものは、上述の用例(10-16)～(10-29)として示した疑問代詞目的語後置型(「以何」「従何」「因何」「自何」)に対応する前置型の用例(「何以」「従何」「何因」「何自」)である。

「何以」

(10-30) 於是富姓妻問曰：「君住吾前，含笑不止。吾屬搏兒，意興由子，子何以笑。」
(『六度集經』(A部分) 3-37c)

[「何以」は〈理由〉を問う]

[そこで裕福な家の妻は(商人に)たずねて言った「あなたは私の前に立ち止まって、笑いを含んだままでいる。私は先ほど子供を殴りましたが、その気持ちはあなたによって起こされたのですよ。どうして笑っているのですか。」]

(10-31) 輔臣問曰：「天王疾篤，若在不諱，將有遺命乎。」王曰：「如有問，王何以喪身。答如所睹，以貪獲病，遂致喪身。…」(『六度集經』(A部分) 3-22b)

[「何以」は〈理由〉を問う]

[宰相がたずねて言った「天王の病気は重うございます。(御身に) 万が一のことがあった場合のために、何かご遺命がおありでしょうか。」王は言った「もし『王はどうして身を滅ぼしたのか。』とたずねるものがあれば、(お前たちの) 見た通りに答えなさい。(私は) 貪りの心によって病を得、身を滅ぼすに至ったのだ。…」]

(10-32) 王曰：「太子眾寶布施都盡，今處深山，衣食不充，何以惠子。」(『六度集經』(A部分) 3-9b)

[「何以」は〈対象〉を問う]

[王は(太子を尋ねてきたバラモンに) 言った「太子はすべての財宝をすべて布施

¹⁷²志村(1967:265)ではすでに「以何」と「何以」との意味が異なり、前者は具体的事物に用いられることが指摘されている。太田(1988:29)も疑問代詞目的語が前置された介詞句は「結合のしかたが緊密で、意義も転化しているばあいが多い」と指摘している。

なお、本論文で「以何」の「〈根拠となる事物〉を問う」とした用法と「何以」の「〈理由〉を問う」とした用法、あるいは「因何」の「〈原因となる事物〉を問う」とした用法と「何因」の「〈理由〉を問う」とした用法とは、それぞれ極めて近く、意味上、連続体をなすものと言えよう。しかし各後置形式の表す意味(=〈根拠となる事物〉を問う意味、〈原因となる事物〉を問う意味)は、疑問の焦点が事物そのものにある点で、〈理由〉だけを問うものとはニュアンスが異なる。例えば用例(10-18)では、手足が断たれた相手が苦しんでいる理由自体は自明であり、その上で「どんなことのために一番苦しんでいるのか」を問うている。また、用例(10-28)では、「あれこれと思考をめぐらすこと」自体の理由を問うているのではなく、そのような状況を生ぜしめた原因となる事物を問うているのである。

して無くしてしまったのです。今は深い山奥に住んでおり、衣食さえも十分でない
ほどです。いったい何をあなたに布施するというのでしょうか。】

「何從」

(10-33) 梵志暮還，奉齋不食。婦怪而問：「不審何恨。」答曰：「不恚。吾齋故耳。」婦
重質之：「何從齋來。」(『中本起經』4-156c)

〔「何從」は〈理由〉を問う〕

〔バラモンは暮れになってから帰り、齋(=正午過ぎに食事をとらないという禁)
を奉じて食事をしなかった。(彼の)妻は訝しんでたずねた「いったい何が不満な
のかしら。」(バラモンは)答えて言った「怒らないでくれ。私は齋を守っているだ
けだ」。妻は重ねて彼を問いただした「どうして齋を守って帰ってくることになっ
たのですか。】

「何因」

(10-34) 賢者阿難見*伯母〔宋本「母人」〕大愛道如是，即問言：「瞿曇彌，何因弊衣徒跣，
面垢衣塵，疲勞悲啼。」(『中本起經』4-158b)

〔「何因」は〈理由〉を問う〕

〔賢者阿難は伯母の大愛道がこのような状況であるのを見て、(彼女に)たずねて
言った「瞿曇彌よ、どうしてぼろぼろの衣服に裸足(といういでたち)で、顔は垢
だらけで衣服は塵にまみれ、疲れきった様子で泣いておられるのか。】

(10-35)*該〔三本「該」〕容聞說佛聲，悚然心歡*喜〔三本「即」〕自念曰：「吾心喜踊，何因得
聞無量法乎。」即*告〔三本「報」〕度勝：「*試〔三本無〕為我*說〔三本「說之」〕」度勝
白曰：「身賤口穢，不敢便宣如來尊言。」(『中本起經』4-157c)

〔「何因」は〈手段・方法〉を問う〕

〔該容は(度勝の)仏のことを語る声を聞くと、身震いして心躍り、「私の心は喜び
に躍っている。どうしたら無量の法を聞くことができるだろうか。」と考えた。(そ
こで)すぐに度勝に言った「私に(仏法を)説いてみてくださらないか。」度勝は
言上した「(この)身は卑しく口は汚れております。とても如来のお言葉を述べる
ことなどできません。】

疑問代詞目的語後置型の「自何」(=用例(10-25)(10-26))と対応する前置型の「何自」は、
『中本起經』、『六度集經』(A部分)、『雜寶藏經』、『過去現在因果經』の中古四文献には存
在しないが、以下のように上古後期の『史記』(秦漢部分)のなかにはみとめられる。

「何自」

(10-36) 唐以孝著，為中郎署長，事文帝。文帝輦過，問唐曰：父老何自為郎。家安在。」
〔(索隱)按：崔浩云「自，從也。帝詢唐何從為郎。】(『史記』(秦漢部分)「張
釋之馮唐列傳」2757)

〔「何自」は〈理由〉を問う〕

〔唐（＝馮唐）は孝行なことで知られており、中郎署長となり、文帝に仕えていた。文帝が車に乗り（中郎署を）通りがかったとき、唐にたずねて言った「ご老体はどうして（まだ）郎をつとめておいでなのか。家はどこか。〕

- (10-37) 田叔取其渠率二十人，各笞五十，餘各搏二十，怒之曰：「王非若主邪。何自敢言若主。」（『史記』（秦漢部分）「田叔列伝」2777）

〔「何自」は〈理由〉を問う（反語用法）〕

〔田叔は彼ら（＝魯王に財産を奪われたと訴え出た者たち）の首領二十人を捕えて、それぞれ五十ずつ鞭で打ち、他の者は二十ずつ手で打ち、彼らに怒って言った「（魯）王はお前たちの主君ではないのか。どうして自分たちの君主を誹謗するのか。〕

- (10-38) 安陵富人謂袁盎曰：「吾聞劇孟博徒，將軍何自通之。」（『史記』（秦漢部分）「袁盎鼂錯列伝」2744）

〔「何自」は〈理由〉を問う〕

〔安陵の富裕な者が袁盎に言った「私は、劇孟は博徒だと聞いています。（それなのに）將軍はどうして彼とつきあっておられるのですか。〕

疑問代詞目的語前置型の「何自」には〈理由〉を問う用法があることが知られる。

さて、以上の状況に基づき、本論文は、疑問代詞目的語「何」後置型の介詞句を出現せしめた直接的な要因は、「意味的曖昧性を回避しようとする欲求」であったと推定する。すなわち、疑問代詞目的語「何」前置型の介詞句が固定化の過程を経て一語化し、抽象的な派生的意味を獲得したために、元来それが有していた意味（当該の介詞と疑問代詞目的語とが文法関係を結ぶことで直接的に得られる意味）を表現する必要がある場合は、疑問代詞目的語「何」を後置することにより、前置型と明確に区別するようになったのだと考えるのである。以上の仮説は、他の多くの中古文獻における語順の状況をも説明し得る。

「何以」

- (10-39) 梁王、趙王，國之近屬，貴重當時。裴令公歲請二國租錢數百萬，以恤中表之貧者。或譏之曰：「何以乞物行惠。」（『世説新語』「德行」1-26）

〔「何以」は〈理由〉を問う〕

〔梁王と趙王は宗室の近親であり、当時、官位の高さと俸禄の多さで世に聞こえていた。裴令公（＝裴楷）は毎年、二人の王に租税数百万を請い、親戚のうちの貧しい者にめぐんでいた。ある人が皮肉って言った「どうして（他の人に）請うてまでして、施しをするのか。〕

「以何」

- (10-40) 魏明帝為外祖母築館於甄氏。既成，自行視，謂左右曰：「館當以何為名。」侍中繆襲曰：「陛下聖思齊於哲王；罔極過於曾、閔。此館之興，情鍾舅氏，宜以『渭

陽』為名。」(『世説新語』「言語」1-86)

[「以何」は〈根拠となる事物〉を問う]

[魏の明帝は母方の祖母のために甄家の所有地に屋敷を建てた。(それが)完成すると、彼は自ら赴いて視察し、左右の者に言った「この館は何にちなんで名をつけるべきだろうか。」侍従の繆襲が言った「陛下の聖なるお考えは(古代の)賢王と並ぶほどであり、孝行心は曾参・閔子騫を超えておられます。この館の建設は、母君の家へのお思いに由来するのでしょうかから、『渭陽』と名付けられるのがよいでしょう。』]

「何從」

(10-41) 太子言:「我*已[宋本「以」]許之, 何從得止。是婆羅門耳, 非是鬼也。終不噉汝。汝便*隨[底本「逐」、三本に従う]去。」(『太子須大拏經』3-422a)(太田 1988:29 所引の用例)

[「何從」は〈理由〉を問う]

[太子は(子供たちに)言った「私はすでにそのこと(=バラモンに子供達を与えること)を聞き入れてしまったのだ。どうしてやめることなどできようか。その人はただのバラモンであって、化け物などではない。決してお前たちを食べたりはしない。(彼に)従って行きなさい。』]

「從何」

(10-42) 道逢一人, 問擔蛇人:「汝從何來, 體履佳不。」其人默然不答彼問, 再三問之不出一言。(『賢愚經』4-369c)

[「從何」は〈起点・経由点〉を問う]

[(蛇を担いだ者は)道すがら一人の人に出くわした。(その人は)蛇を担いだ者にたずねた「お前はどこから来たのか。普段の暮らしぶりはよいのか。」その人(=蛇を担いだ者)は黙ったまま彼の問いに答えなかった。さらに(その人は)二度三度とたずねたが、(蛇を担いだ者は)一言も答えなかった。]

なお、上述したように非禪母系単音節疑問目的語のうち「何」以外のものは、介詞目的語となった場合でも語順変化を生じなかった。これは、既述したように、「何」以外の非禪母系疑問代詞目的語は、中古では出現頻度の面でも、介詞との結合の幅の面でも相当に衰退しており、介詞目的語「何」にみられたような抽象的意味と具体的意味との対立が形成されなかったことによると考えられる。

10.4 近古前期における状況

10.4.1 語順概況

近古期の非禪母系単音節疑問目的語の特徴は、その語彙体系において、中古以前から存在する「何」以外の非禪母系単音節疑問目的語がほとんど消失する一方、新たに「甚」系統の語彙が出現したことである。そしてこの「甚」は目的語となった場合に原則として後置される(用例(10-43))。本論文で扱った四文献における用例は少ないが(下の1例のみ)、他の文献言語の用例を参照しても、専ら動詞・介詞に後置されている。

- (10-43) 瞽叟喚言舜子:「阿耶暫到遼陽, 遣子勾當家事, 緣^甚於家不孝。…」(『舜子変』201)

[瞽叟は舜子を呼んで言った「父さんはしばらく遼陽に行ってしまうから、おまえに家事をきりもりさせると言っただろう。それにどうして家で不孝なふるまいをするのか。…」]

動詞目的語「何」は、中古期における状況と大きな違いはなく、多くは前置を保つ(用例(10-44)(10-45))。しかし一部は、後置へと転じている(用例(10-46))。

- (10-44) 僕因問曰:「主人姓望何處。夫主^何在。」十娘答曰:「兒是清河崔公之末孫, 適弘農楊府君之長子。…」(『遊仙窟』17-116~117)

[私はそこで(十娘に)たずねて言った「奥方の姓はどちらの出自で、ご主人はどこにおられるのでしょうか。」十娘は答えて言った「私は清河の崔公の末孫で、弘農の楊府君の長男に嫁ぎました。…」]

- (10-45) 子尚臨死之時, 仰面向天嘆而言曰:「吾當不用弟語, 遠來就父同誅, 奈何, 奈何。更知^何道。…」(『伍子胥変文』2)

[子尚は死に臨んで、頭をあげて天に向かって言った「私はあのとき弟の意見を用いず、遠くからやってきて父と共に殺されることになったしまった。このことをどうすることができようか、どうすることができようか。いまこれ以上、何を言うことができようか。…」]

- (10-46) 渡江欲至南岸, 子胥乃問船人曰:「先生姓^何名誰, 鄉貫住在何州縣。」(『伍子胥変文』8)

[川をわたり南岸に着きそうになると、子胥は漁師にたずねて言った「あなたは姓は何と申され、名は何とおっしゃいますか。お生まれはどこの州県でしょうか。」]

10.4.2 語順変化のメカニズム

近古前期における非禪母系単音節疑問目的語は、中古に生じた後置の現象が一層強まっ

ている。この現象は、非禅母系単音節疑問目的語自体の語彙交替、さらにはそれと介目関係を結ぶ介詞の語彙交替によってもたらされたものと解釈できる。

まず、非禅母系単音節疑問目的語自体の語彙交替については、上述のように近古前期新出の「甚」が原則として介詞に前置されることがなく、一貫して後置の語順を呈したのがその例である。

また、介詞の語彙交替については、介詞目的語「何」の語順と関わることになる。上述のように、「何」に関しては、①中古にみられた、同一文献において同一の介詞の目的語となった場合に前置・後置が併用される現象が著しく減少し、②近古新出の介詞の目的語となり後置される用例が出現した、といった変化が見出される（後述の【図表 10-2】を参照）。そして「何」が近古新出の介詞の後置目的語となった介詞句は、疑問代詞目的語と介詞の組み合わせによる構造が元来有している意味を表している（用例(10-47) (10-48)）。

このことから、中古にみられた介詞目的語「何」の語順による意味的曖昧性の回避の機能が、そのまま近古にも継承されていきながら、さらに後置語順の介詞が新たな語彙に交替することにより、意味的曖昧性を回避する機能が一層強化されている——語順と語彙の選択という二重の手段により意味的曖昧性が回避されている——と言える。

上述①の前置・後置併用の現象の消失に関して、後置語順を基本とする新たな介詞（「將」「憑」）の用例を挙げておく。

- (10-47) 子胥答曰：「下官身是伍子胥，避楚逃逝入南吳。慮恐平王相捕逐，為此星夜涉窮途。蒙賜一餐堪充飽，未審將何得相報。…」〔『伍子胥變文』4〕

〔「將何」は〈手段〉を問う〕

〔伍子胥は（川で出合った女に）答えて言った「私は伍子胥と申します。楚から逃れ南の呉に入ります。平王に捕えられるのを恐れたため、夜をも道を急ぎ、力尽きてしまっておりました。このたびは食事を賜り、空腹を満たすことができました。どんなものであなたに報いことができますでしょうか。…〕

- (10-48) 須達情地悼惶，抽身數步之外，遂屈帝子向前：「…家依長子，國仗忠臣，船因水而運行，唇附齒而相託。唇疏齒路（露），水涸船停。有君闕臣，社稷憑何安立。…」

〔「憑何」は〈抛り所となる事物〉を問う〕

〔『降魔變文』557〕

〔須達は恐れ戦いて数歩下がり、太子に身を屈してその前に進み出ると（言った）「…家というものは長男が抛り所となるのであり、国は忠臣によって成り立ちます。船は水によって進み、唇は齒についてもたれあっています。唇が離れては、齒があらわになってしまいます。水が涸れば、船が止まってしまいます。君主がいても臣下が欠くのであれば、国は何に抛ってしっかりと立つことができますか。〕

また、上述①②に関して、介詞目的語「何」の語順状況を表にまとめておく。

【図表 10-2】近古前期における介詞目的語「何」の語順

介詞 文献	因		從		為		由		將		憑	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
遊仙窟	2	0	0	2	2	0	1	0	0	0	0	0
伍子胥変文	1	0	0	2	3	0	1	0	0	1	0	0
舜子変	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
降魔変文	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

*各介詞の「前」「後」欄は、当該の介詞がそれぞれ疑問代詞目的語前置型、疑問代詞目的語後置型に用いられた用例数を表す。

第十一章 複音節疑問目的語の語順変遷（一）

— 「/何/-X」疑問フレーズ目的語

11.1 上古中期における状況

本論文 4.2 において述べたように、上古中期においては、「/何/-X」疑問フレーズが目的語となる場合、原則として動詞或いは介詞の前に位置した。そしてこの時、一般には「之」が目的語と動詞との間に生起し、直前の「/何/-X」疑問フレーズを照応指示し、動目関係を明示する機能を果たしていた。本章では「/何/-X」疑問フレーズ目的語の語順変化を論じていくが、まずこれと密接に関連する現象として、上古期では「/何/-X」疑問フレーズの出現率そのものが中古以降に比べて極めて低かったということを確認しておきたい。その要因としては、以下の二点が考えられる。

- (i) 「/何/-X」疑問フレーズは、意味的には〈事物の種類・性質〉を問う（「どんなX」の意）ものであるが、上古中期においては、そのような意味を表す場合でも、特に疑問の焦点が〈事物の種類・性質〉に置かれるのでなければ、「/何/-X」疑問フレーズではなく、「何」「奚」などの非禪母系単音節疑問目的語が生起するのが一般的であった。
- (ii) 純粹疑問文において〈事物の種類・性質〉を問う場合に、「/何/-X」疑問フレーズが目的語を担うこともあったが、その時、しばしば述語動詞が生起しない（述語動詞がゼロ形式となる）「/何/-X o+Øv」 という統語形式が生起した。

上述の二点について、具体的な状況を補足しておく。

まず上述の(i)に関しては、次のような用例が挙げられる。

(11-1) 「許子冠乎。」曰：「冠。」曰：「奚冠。」曰：「冠素。」（『孟子』「滕文公上」1-369）

〔（孟子は言った）「許子は冠をつけているのか。」（陳相は）言った「つけておられます。」（孟子は）言った「どのような冠であるのか。」（陳相は）言った「白絹のものをつけておられます。」〕

用例(11-1)は孟子と陳相との対話である。孟子が陳相に許行（＝許子）のことをたずねた場面であり、孟子は陳相にまず許行が冠をつけるのか否かを問い、冠をつけることを確かめた後に、それが「どんな冠」であるのか——すなわち〈事物の種類・性質〉——を問うている。この時、〈事物の種類・性質〉を問うているにも拘らず、目的語としては「/何/-X」疑問

フレーズではなく、単音節疑問代詞「奚」が生起している。これは、上古における「冠」という述語動詞の機能面での総合性の高さ起因するものだと考える。この時期の「冠」の意味は「(かぶり物を) つける」であり、一般にその目的語は冠などの何らかのかぶり物に限定された。よって「/何/o+冠」(この場合は「奚冠」)という形式を用いさえすれば、「かぶり物のうち何をつける」という〈事物の種類・性質〉を問う表現となり得たのであろう。「冠」以外にも上古漢語における動詞には機能的総合性が高いものが多く存在するために、そのことが「/何/-Xo+之+V」という統語形式の出現率を低下させる要因となっていたと考える。「/何/-Xo+之+V」が用いられるのは、特に〈事物の種類・性質〉に疑問の焦点がある場合に限られる傾向があったようである。

次に、上述(ii)については、以下のような用例が挙げられる。

- (11-2) 萬章曰：「敢問交際何心也。」[趙岐註：問交接，道當執何心為可者] (『孟子』「萬章下」2-697)

〔萬章が言った「(人との) 交際についてはどのような心がまえ (を持つべき) でしょうか¹⁷³。〕[趙岐注：交際のことを問うている。どのような心がまえを持っていたらよいのかと言っているのだ。〕]

- (11-3) 及入，勃鞞求見，公辭焉，曰：「驪姬之讒，爾射余於屏內，困余於蒲城，斬余衣袂。又為惠公從余於渭濱，命曰三日，若宿而至。若干二命，以求殺余。余於伯楚屢困，何舊怨也。…」[韋昭注：…數見困，有何舊怨。] (『国語』「晋語四」347)

〔文公が帰国して位につくと、勃鞞は謁見を願い出たが、文公は断って言った。「驪姬が讒言した時、お前は屏の内で私に向かって弓を射、私を蒲城で囲んで、服のたもとを斬った。さらに(晋の) 惠公のためわしを渭水の岸边まで追跡し(殺そうとし)、(惠公は) 三日でやって来るように命じたのに、お前は一晚でやって来た。お前は二度の(献公・惠公) の命を受けて、私を殺そうとした。私は何度もお前に苦しめられたが、どんな旧怨があるというのか。…」[韋昭注：…何度も苦しめられたのは、どんな旧怨があるのだろうか〕]

- (11-4) 及行，飲以酒。壽子載其旌以先，盜殺之。急子至，曰：「我之求也，此何罪。請殺我乎。」又殺之。(『左伝』「桓公十六年」1-146)

〔(急子が) 出発するに時になると、(寿子は急子に) 酒を飲ませた。寿子が彼(=急子) の旗を車に立てて先に出発すると、賊はそれを殺した。急子がやって来て言った「このわたしを殺そうとしていたのだろう。彼(=寿子) に何の罪がある

¹⁷³この箇所に対して朱熹は「際，接也。交際謂以禮儀幣帛相交接也。」〔「際」とは「受け取る」ということである。交際とは礼儀に基づいて贈り物を受け取り合うことである。〕と注をつける。仮にこの説に従えば、萬章の問いは「互いに贈り物を受け取り合うというのは、どのような心持ちなのでしょう。」といった意味となる。

うか。私を殺しなさい。」賊はさらに彼（＝急子）を殺した]

(11-5) 夏，師及齊師圍郟。郟降于齊師。仲慶父請伐齊師。公曰：「不可。我實不德，齊師何罪。罪我之由。…」〔『左伝』「莊公八年」1-173〕

〔夏、(魯)軍が齊軍と郟を包圍した。郟は齊軍に投降した。(魯の大夫の)仲慶父は齊軍を攻撃することを申し出た。莊公は言った「それはならない。(郟が魯ではなく齊に投降したのは)私がまことに不徳であるからだ。齊軍に何の罪がある。罪は私が招いたものなのだ。…〕

例えば用例(11-2)については、「何心」と動目関係を結ぶ何らかの動詞が省略されていると解釈できる(中古期に属する後漢の趙岐は「執」(持つ)という動詞を補いつつ意味解釈する)。他の用例についても同様であり、意味上は当該の「/何/-X」疑問フレーズと動目関係を有する何らかの動詞の存在を想定し得るものの、それは実際には文中に生起していない。ここで重要なことは、これら述語動詞が省略された「/何/-X_o+Ø_v」という統語形式は純粹疑問にも反語・感嘆にも常用されるが、述語動詞が生起した「/何/-X_o+之+V」という統語形式は反語・感嘆用法が優勢であり、純粹疑問を表す場合には、前者の統語形式が生起することが多かったということである¹⁷⁴。上古中期における、このような述語動詞の省略現象の頻出も、「/何/-X_o+之+V」という統語形式の出現頻度を低下させる要因の一つであったと推定される。

11.2 上古後期における状況

11.2.1 語順概況

上古後期においても、「/何/-X」疑問フレーズが目的語となった場合、その多くが前置の位置を保っている。この時、上古中期と同様、「/何/-X」疑問フレーズと述語動詞との間には「之」が生起するのが原則である。

(11-6) 項羽曰：「將戮力而攻秦，久留不行。今歲饑民貧，士卒食芋菽，軍無見糧，乃飲酒高會，不引兵渡河因趙食，與趙并力攻秦，乃曰『承其敝』。夫以秦之疆，攻新

¹⁷⁴但し、上古中期における「/何/-X_o+之+V」という統語形式は、修辭疑問専用の形式というわけではない。下例は、純粹疑問の用例である。

・齊宣王問卿。孟子曰：「王何卿之問也。」王曰：「卿不同乎。」曰：「不同；有貴戚之卿，有異姓之卿。」〔『孟子』2-728〕

〔齊の宣王が卿についてたずねた。孟子は答えた「王はどの卿についておたずねですか。」王が言った「卿に違いなどあるのか。」孟子は言われた「違います。(王の)親族である(王室と同じ姓の)卿もいれば、(王室とは)異姓の卿もいます。〕

造之趙，其勢必舉趙。趙舉而秦彊，何敞之承。…」(『史記』(秦漢部分) 項羽本紀) 305)

[項羽は言った「將軍たちは力を合わせて秦を攻撃しているのに、(宋義は) 長く(ここに) 留まり出発しようとしな。今年(農作物の) 作柄が悪くて民は貧しく、士卒は山芋や豆を食べており、軍隊にはもう用意された食糧がない。それなのに(宋義は) 酒を飲んで大きな宴を開いている。兵を率いて河を渡り趙の食糧に頼って(趙と) 力をあわせて秦を攻めようとはしないのだ。(そして) なんと『彼らの疲れに乗ずる』などと言っている。そもそも秦の強大さをもって、新たに出来たばかりの趙を攻めたら、その勢いは必ず趙を攻め落とすことになるだろう。趙が攻め落とされれば秦はさらに強くなる。いったいどんな疲れに乗ずるというのか。…」]

- (11-7) 毅對曰：「…夫先主之舉用太子，數年之積也，臣乃何言之敢諫，何慮之敢謀。」(『史記』(秦漢部分)「蒙恬列傳」2568)

[蒙毅は答えていった「…先主が太子を用いるのは、長年の熟慮があつてのことです。私など、どんなことをお諫めするのでしょうか、どんなはかりごとを立てるといのでしょうか。」]

- (11-8) 趙高曰：「人臣當憂死而不暇，何變之得謀。」(『史記』(秦漢部分)「李斯列傳」2553)

[趙高は(二世皇帝に) 言った「臣下たちは(自らの) 死を心配することだけだとまがない状況でありますのに、どんな反乱を謀ることができましようか。」]

- (11-9) 李斯恐懼，重爵祿，不知所出，乃阿二世意，欲求容，以書對曰：「…群臣百姓救過不給，何變之敢圖。…」(『史記』(秦漢部分)「李斯列傳」2554-2557)

[李斯は恐れ、また(自分の) 爵位・俸祿を重んじていたが、どうしてよいのか分からなかった。(そこで) 二世皇帝の気持ちに阿ることによって許しを得ようとして、上書して答えた「…群臣・庶民は(自らの) 過失を埋め合わせることにいとまがなく、どんな反乱を謀ることができましようか。…」]

- (11-10) 周曰：「三尺安出哉。前主所是著為律，後主所是疏為令，當時為是，何古之法乎。」(『史記』(秦漢部分)「酷吏列傳」3153)

[杜周は言った「そもそも三尺の(竹簡に書かれた) 法律などというものは、どこから生まれたのだろうか。前代の君主が正しいとみなしたことが書かれて律となり、後代の君主が正しいとみなしたことが条ごとに述べられて令となったのである。(つまりが) 時宜にかなうことが正しいとされるのであり、どうして古代の法に則る必要があろうか。」]

- (11-11) 遺詔曰：「…朕既不敏，常畏過行，以羞先帝之遺德；維年之久長，懼于不終。今乃幸以天年，得復供養于高廟。朕之不明與嘉之，其奚哀悲之有。…」(『史記』(秦漢部分)「孝文本紀」434)

〔(文帝の臨終前の) 遺詔に言うには「…朕は聡明でないので、過失を犯して先帝の遺徳を辱めることを常に恐れていた。年月が長くなると、(自分がよい) 終わりを全うできないことを恐れるようになった。今、幸いにも天寿を全うして、高廟でまた(高祖に) お仕えすることができる。朕は不明であるのに、このようなよい結果を受けるのであるから、いったいどうして悲しみ嘆くことがあるというか。〕

上述の「/何/-X_o+之+V」という統語形式はいずれも反語・感嘆を表すものであり、本論文の調査の範囲では純粹疑問を表す確実な用例が存在しない。ここから本論文は、上古後期において「/何/-X」疑問フレーズが前置目的語となった「/何/-X_o+之+V」という統語形式は、機能の限定が生じており——上古中期からすでに反語・感嘆用法が優勢であったがその傾向が一層進展しており——専ら反語・感嘆などの修辭疑問だけを表す構文へと変化していたと推定したい。そしてこのような環境の下で、以下のように「/何/-X」疑問フレーズ目的語の後置型が出現してきたのだと考える。

(11-12) 「…自伏羲作八卦，周文王演三百八十四爻而天下治。越王句踐放文王八卦以破敵國，霸天下。由是言之，卜筮有何負哉。…」(『史記』(秦漢部分)「日者列伝」3218)

〔(司馬季主が言うには)「…伏羲が八卦を作り、周の文王が(これを) 推し広げて三百八十四爻とし、(これを用いて) 天下が治まった。越王句踐は文王の八卦にならい、それによって敵を破り、天下に覇者となった。このようなことから言えば、卜筮にどのような(天地の道理に) そむくところがあるというのでしょうか。…〕

(11-13) 二年，東擊項籍而還入關，問：「故秦時上帝祠何帝也。」對曰：「四帝，有白、青、黃、赤帝之祠。」(『史記』(秦漢部分)「封禪書」1378)

〔(漢高祖) 二年、(高祖は) 東進して項籍を撃つと、戻って関中に入り、(臣下に) たずねた「昔、秦の時代、上帝としてどのような天帝を祭ったのか。」(臣下は) 答えて言った「四帝で、白帝、青帝、黄帝、赤帝の祠があります。〕

本論文は、用例(11-12)が通時的に有意味な「/何/-X」疑問フレーズ目的語の後置例であるのか否かについては、保留しておきたい。「負」は動詞・名詞両用の語であるため、当該の「何負」が修飾構造ではなく動目構造である可能性(「何」が、動詞「負」の前置目的語であり、「有」が副詞「又」の仮借字である可能性)が排除できないからである¹⁷⁵。

¹⁷⁵次の用例における「何+負」は、動目構造である可能性が高い。

・斯乃上書曰：「…此四君者，皆以客之功。由此觀之，客何負於秦哉。…」(『史記』(秦漢部分)「李斯列伝」2541~2542)

〔李斯は上書して言った「…これら四人の(秦の) 君主は、みな外客(の力)によって成功し

用例(11-13)は「/何/-X」疑問フレーズ目的語が後置された通時的に有意義な用例とみなし得る。「帝」は動詞・名詞両用の語ではないため、「何+帝」は修飾構造(すなわち「何-帝」と解釈する他ない。また「故秦時上帝祠何帝也」という字句は『漢書』の対応箇所にもみとめられるため、当該の後置語順が信憑性の高いことも重要である¹⁷⁶。ここで「/何/-X」疑問フレーズの語順変化のメカニズムを考える際に注目されるのは、この文が反語・感嘆ではなく純粋疑問を表していることである(話し手には「秦の時代に何らかの天帝を祭った」という行為自体を否定する意図はない)。この点については本論文 11.2.2 で再度、言及する。

上古後期における「/何/-X」疑問フレーズ目的語の語順状況は【図表 11-1】のようにまとめられる。

【図表 11-1】『史記』(秦漢部分)における「/何/-X」疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
	/何/-Xo+之+V	/何/-Xo+P	V+/何/-Xo	P+/何/-Xo
「何-X」疑問フレーズ	6	0/(1)	2	0
「奚-X」疑問フレーズ	1	0	0	0

* ()内の数字は通時的に無意味な用例の出現頻度である。「0/(1)」であれば、通時的に有意義な用例が0例で、通時的に無意味な用例が1例あるという意。

* 「何-X」が介詞「以」の目的語となった以下のような用例は、通時的に有意義な用例であるのか判断しがたい。介詞「以」の目的語は、疑問目的語であるか否かに拘わらず「以」の前に置かれることがあるからである。

・又使徐福入海求神異物，還為偽辭曰：「…於是臣再拜問曰：『宜何資以獻。』…」(『史記』(秦漢部分)「淮南衡山列伝」3086)

〔(伍彼の淮南王安に対する発言)(昔、秦は)さらに徐福を東海に派遣して神仙や珍奇な物を探させました。(徐福は)帰ってから偽りの話を作って言うには「…そこで私が(海神に)再拜してたずねた『どんな礼物を携えて献上すればよろしいでしょうか。』…〕

* 下の用例における「何-X」について、目的語とみなすべきか主題とみなすべきかについては保留しておきたい。表中の用例には含めない。

・子夏答曰：「…夫敬以和，何事不行。…」(『史記』(秦漢部分)「樂書」1224)

〔子夏が文侯に答えて言うには「…そもそも慎み敬って調和すれば、実行できないことなどあるでしょう

たのです。このことから分かりますのは、外客が秦に対していったい何を裏切ったのか(裏切ったことなどなかった)、ということです。…〕

¹⁷⁶ 『漢書』における記載は以下のとおりである(訳は『史記』の対応箇所である用例(11-13)を参照)。

・二年(冬)，東擊項籍而還入關，問：「故秦時上帝祠何帝也。」對曰：「四帝，有白、青、黃、赤帝之祠。」(『漢書』「郊祀志」1210)

か。…」]

11.2.2 語順変化メカニズム

「/何/-X」疑問フレーズ目的語の後置語順出現のメカニズムを検討する前に、ここで上古中期から上古後期までの〈事物の種類・性質〉を問う各種の統語形式を整理しておきたい（【図表 11-2】）。

【図表 11-2】上古期の〈事物の種類・性質〉を問う統語形式

機能	時期	上古中期	上古後期
		論語 孟子	
純粹疑問	(1)/何/-X _o +Ø _v		(1)/何/-X _o +Ø _v
	(2)/何/-X _o +之+V *（少数）		—
	(3)/何/ _o +V		(3)/何/ _o +V *（多数）
	—		(4) V+何/-X _o *（少数）
修辭疑問	(2)/何/-X _o +之+V		(2)/何/-X _o +之+V
	(3)/何/ _o +V		(3)/何/ _o +V

*（1）～（4）の数字は統語形式或いは構文の形式を分類したもの。同一の番号のものは同一の統語構造を有する。

上表に示した状況を踏まえて、本論文は、「/何/-X」疑問フレーズ目的語の語順変化メカニズムを次のように推定しておきたい。すなわち、上古後期において〈事物の種類・性質〉を問う「/何/-X_o」疑問フレーズが述語動詞の論理目的語となった時、この時期には「/何/-X_o+之+V」が修辭疑問専用の構文となってしまうため、純粹疑問として〈事物の種類・性質〉を問う場合は、「V+何/-X_o」という後置語順の形式をとって出現することとなったのだと考えるのである。用例(11-13)に即して言えば、この用例は純粹疑問を表すものであるために、上古中期では「何_o+之+祠_v」という形式で表現されるべきところ、上古後期ではこの形式として生起することができず、結果として「祠_v+何_o」という後置語順の形をとって出現したということである。

仮に、以上の推定が正しいとすれば、「/何/-X」疑問フレーズ目的語の語順変化には、「/何/-X_o+之+V」が修辭疑問のみを表す構文へと変化するという「統語形式の構文化による機能の限定」、および純粹疑問を表す「何」の一部が「何-X」に取り替えられるという「単音

節疑問代詞の複音節化」の二種の変化を背景としつつ、純粹疑問と修辭疑問との「意味的曖昧性を回避しようとする欲求」により引き起こされたと考えられる

11.3 中古期における状況

11.3.1 語順概況

中古文献においては、純粹疑問を表す「何-X」疑問フレーズ目的語の多くが動詞或いは介詞に後置されるようになってきている¹⁷⁷。例えば『中本起経』『雑宝蔵経』において「何-X」疑問フレーズが目的語となった場合、原則としてすべて後置の語順をとっている。同様の状況は、中古期の他の文献にも広くみとめられる。

- (11-14) 舍利弗心念：「佛本*作〔底本「從」，三本、圖書寮本、聖語藏本に從う〕何等而文殊師利言當念故恩乎。」*則〔元本、明本「即」〕問佛：「文殊師利本有何功德而置怛薩阿竭。」（『阿闍世王経』15-392c）

〔舍利弗は「元々（過去世において）仏がどんなことをなされたために、文殊師利が『昔の恩を思いおこされよ』とおっしゃったのだろうか」と考え、仏にたずねた「文殊師利は元々（過去世において）どのような功德があつて怛薩阿竭（=仏）に（あのような）話をしたのでしょうか。」¹⁷⁸〕

- (11-15) 舉聲歎曰：「威靈感人，儀雅挺特。本事何*師〔金剛寺本は他字に作るか（不明）〕，乃得斯容。」（『中本起経』4-148a）

〔（優呵は仏をみると）声をあげて賛嘆して言った「その威嚴は人を感じ入らせ、その容貌の気高さは並ぶ者がいない。元々どんな師につかえてそのような容姿を持つようになったのでしょうか。〕

- (11-16) 王問*憂〔三本、金剛寺本「優」〕陀：「吾子在宮，士眾衛侍。今者侍從，*復〔三本、金剛寺本「皆」〕有何人。」（『中本起経』4-154c）

〔王は憂陀にたずねた「我が子は宮殿にあつては、多くの衛士がつき従い、警護していた。今、つき従っている者には、どのような者がいるのか。〕

- (11-17) 迦葉問佛：「大道人從何徑來。」（『中本起経』4-150c）

〔迦葉は仏にたずねた「大道人はどのような道をとつて来られたのですか。〕

- (11-18) 七日安隱，相師見過七日，怪其所以。問王言：「作何功德。」答言：「更無所作，唯一破塔。以泥補治。」（『雑宝蔵経』4-469a）

¹⁷⁷上古では「何-X」疑問フレーズ目的語」と表現していたが、中古では、原則的にはこの形式に「何」以外の疑問代詞が生起することがないため、「何-X」疑問フレーズ目的語」と表現しておく。

¹⁷⁸用例(11-14)の「置怛薩阿竭」の箇所は意味解釈が難しい。本論文ではかりに「置」を「（言葉を）なげかける」といった意味の動詞と解釈しておく。

〔七日間たっても（王は）平穩だった。占い師は七日（無事に）過ぎたことを知ると、どうしてこのようであるのか訝しく思い、王にたずねて言った「いったいどのような功德を積まれたのですか。」（王）は答えて言った「特に何かことをしたわけではない。ただ、あるぼろぼろの仏塔があったので、泥を用いて修復しておいただけだ。〕

(11-19) 得過七日，婆羅門見，怪其所以，而問之言：「汝修何福。」比丘答言：「我無所修，唯於昨日，入僧*房〔三本、金剛寺本「坊」〕中，見壁有孔。補治而已。」（『雜寶藏經』4-469a）

〔七日過ぎた後、バラモンは（七日で死ぬと思っていたその比丘に）会った。（そこで）どうしてそのようであるのか（＝無事であるのか）訝しく思い、彼にたずねて言った「あなたはどんな福德を積んだのか。」比丘は答えて言った「私はとくに何も（福德など）積んでいない。ただ昨日、寺の中に入った時、壁に穴があるので、なおしておいただけです。〕

以上の状況は、中古期の中原地域或いは北方地域の有力方言を反映したものと考えてよい（江南方言の状況については後述する）。これら、『中本起經』『雜寶藏經』における「何-X」疑問フレーズ目的語の後置用例はそのほとんどが純粹疑問を表しているが（上述の用例は(11-14)～(11-19)はいずれも純粹疑問）¹⁷⁹、これらの文献には上古後期にみられた修辭疑問を表す「何/-Xo+之+V」構文が存在しない。そうすると、『中本起經』『雜寶藏經』に反映された中古期の中原地域或いは北方地域の有力方言において反語・感嘆などの修辭疑問はどのような形式により担われていたのか、という問題が生じてくる。この点について、本論文は、次のように「何 ad+V+Xo」という反語を表す統語形式があり、これが上古後期の「何/-Xo+之+V」構文の機能を継承するものであったと考える¹⁸⁰。

¹⁷⁹ 「何-X」疑問フレーズ目的語が明確に反語・感嘆などの修辭疑問を表す用例は、『中本起經』においては歴史的に有意な後置例 10 例のうち 1 例、『雜寶藏經』においては歴史的に有意な後置例 101 例のうち 3 例みられる。『雜寶藏經』の用例を 1 例挙げておく。

・女人答言：「女人還在*女〔三本、金剛寺本「汝」〕前而裸小便，有何等恥。一國都是女人，唯大力士是男子耳。若於彼前，應當慚愧。於汝等前，有何羞恥。」（『雜寶藏經』4-487a）

〔（その）女はこたえて言った「女が女の前で裸になり小便をしたとしてもどんな恥がありましようか。國中すべてが女（も同然）で、ただあの力持ちだけが男なのです。もしあの人の前なら恥じるべきですが、あんたたちの前で何を恥ることなどありましようか。〕

¹⁸⁰ なお、「何 ad+V+Xo」という統語形式に関連して、中古期には反語を表す「何有…」という形式が常見される点を補足しておきたい。例えば、方一新・王云路(2006:103)は『百喻經』における「何有不作最下重屋而得造彼第二之屋」の個所に対する注釈において、「『何有』は『あに…ならんや、どうして…ことがあるか。』ということである。『何有』は漢魏六朝文献における反語を表す常用の統語形式である」（原文：「何有：豈有；哪裡有。『何有…』是漢魏六朝文献中表示反詰的常見句式）」と指摘する。本論文は、この「何有…」も「何 ad+V+Xo」という統語形式の一種であると考えている。

- (11-20) 佛知迦葉*心已降伏 [三本「内心已伏」、金剛寺本「心已伏」]，* [金剛寺本「他」(?)] 便告迦葉：「汝非羅漢，不知真道。何為虛妄自稱貴乎。」(『中本起經』 4-151c)
 [仏は迦葉が心服したことを知ると、迦葉に言った「お前は羅漢ではなく、眞の道を理解していない。(それなのに) どうして偽って、自らを尊者だと称するのか。」]
- (11-21) 時彼佞臣懼王加害，而白王言：「世界之中，何有羅漢。王信空語，用自苦惱。」(『雜寶藏經』 4-495c)
 [その時、佞臣たちは王が(自分たちに)危害を加えるのを恐れて、王に言った「この世に羅漢などいるのでしょうか。王はありもしない話を信じて、自分で自分を苦しめておいでです。」]
- (11-22) 國內愚者共嗤佛語，乃上聞於王，令王*惑意 [三本「意惑」]，便謂夫人。夫人字末利，便告之曰：「瞿曇可笑，反論失理。何有恩愛而生憂悲*耶 [三本無]。」(『中本起經』 4-160a)
 [国の愚者たちは、みな仏の言ったこと嘲笑し、王に言上して王の心を惑わしめた。(王は) 婦人に(そのことを)話した。夫人は末利という名であった。(王が) 彼女に言うには「瞿曇はばかげている。論理に反し、道理を失っている。どうして恩愛があるために憂いや悲しみが生ずることなどがあろうか。」]
- (11-23) 和*上 [三本「尚」] 答言：「…更相殘殺，*冤 [三本、金剛寺本「怨」] 家不息，輪轉五道，無有終竟。*反 [三本、金剛寺本「返」] 覆尋之，何補身瘡*拷 [三本「考」] 楚之痛。…」(『雜寶藏經』 4-459c)
 [和尚は(沙羅那に) 答えて言った「…互いに殺し合えば、仇がなくならず、五道(=五つの迷いのある世界)を輪廻し、終わりというものがない。繰り返しのことを考えてみるがよい。いったい身体が傷つき責め打たれる痛みをどのようにしてやわらげるというのか。」]
- (11-24) 兒言：「不敢怨大王，亦不畏婆羅門。古是大王孫，今為人奴婢。何有人奴婢而就國王抱。是故不敢耳。」(『太子須大拏經』 3-423b)
 [(祖父たる国王に抱きつかない理由を問われて) 子供(=太子の子供)は(国王に) 言った「大王を恨んでなどおりませんし、また(現在の主人たる)バラモンを怖がっているわけでもありません。昔は大王の孫でしたが、今は人の奴隷です。奴隷たる身で国王に近づき抱きつくことなど、どうしてできましようか。そのためにできないにすぎません。」]

なお、「何 ad+V+Xo」という修辭疑問を表す統語形式は、上古後期の「/何/-Xo+之+V」構文の機能を継承するものではあるけれども、両者の文法機能が完全に等しいというわけではない。例えば上述の用例(11-22)~(11-24)は、目的語(=Xo)の音節数が六音節から七音節と相当に多く、その内部構造も複雑であるが((11-22)の「恩愛而生憂悲」、(11-24)の「人

奴婢而就國王抱」は「而」が生起した連動構造。但し後者は特殊な主述構造と解釈する余地もある)、これほど長く複雑な目的語(=Xo)が「/何/-Xo +之+V」で表現された用例は、本論文の調査の範囲では存在しない。「/何/-Xo +之+V」では、目的語(=Xo)が長く複雑であれば、「之」の照応指示するスコープの範囲に大きな曖昧性がもたらされるため、上古・中古を通じてこの統語形式の形では表現できなかつたと考えられる。そうであれば、「何ad+V+Xo」という反語を表す構文の出現は、目的語としての音節数を増加させようとする欲求と関係があったと推定される。

以上は、中古の中原地域あるいは北方地域の有力方言における状況であるが、三世紀に江南の建業で成立した『六度集経』(A部分)における状況はこれらとは異なっている。すなわち『六度集経』(A部分)では「何-X」疑問フレーズが目的語となる場合、前置と後置の両方の語順がみとめられるのである。そしてこの時、原則として前置語順は反語・感嘆などの修辭疑問を表し、後置語順は多く純粹疑問を表わしている¹⁸¹。

[何-X：前置]

- (11-25) 昇背隨焉，半*谿[三本、金剛寺本「溪」。驚曰：「吾妻思食爾肝，水中何樂之有乎。」
 (『六度集経』(A部分) 3-19c)

[(彌猴はスッポンの)背にのると、彼(=スッポンは)につき従って行った。溪流の半ば(まで下ったところ)で、スッポンは言った「(じつは)私の妻が君の肝を食べたがっているのだよ。(そもそも)水中にいったいどんな音楽があるというのか。」]

- (11-26) 詣闕自告*云[三本「曰」]*其[三本「某」]犯盜：「唯願大王以法相罪。畢之於今乞後無尤。」王*告曰[三本「曰」]：「斯自然之水，不寶之物。何罪之有乎。」(『六度集経』(A部分) 3-30a)

[(バラモンは)宮門に行き自首をし、自分が盗みを犯したと言った「大王には法に照らして罪を定められんことを願います。」王は言った「それは天然の水であり、貴重な物ではありません。(それを飲んだからと言って) どんな罪があるというのでしょうか。」]

- (11-27) 曰：「夫身即四大也，命終四大離。靈逝變化，隨行所之，何賂之有。…」(『六度集経』(A部分) 3-36c)

[(子供は)言った「そもそも身体というのは(地・水・火・風の)四大(から成り立

¹⁸¹ 『六度集経』(A部分)における後置された「何-X」疑問フレーズ目的語が明確に修辭疑問を表す用例は次の1例のみである(この例では反語)。

・阿難質曰：「飛行皇帝逮彼尊天，其德巍巍。何故不免於罪乎。」世尊曰：「禍福非真，當有何常。…」(『六度集経』(A部分)3-35b)

〔阿難は(世尊に対して)問いただして言った「飛行皇帝も、かの天神も、その徳は高々と聳えるほどでしょうに、どうして罪を逃れられなかつたのでしょうか。」世尊は言った「禍福などというものは真ではない。どうして不変(の禍福など)があるのか。」]

っているの)であり、命が尽きれば四大が離散してします。霊魂は(身体から)去って変化し、(その人の)業の向かうところから従っていくのです。どうして賄賂など(の必要が)ありましようか。]

- (11-28) 商人又曰:「…夫眾生之心, 其為無恒, 古憎今愛, **何常**之有。斯皆一世見而不知, 豈況累劫。…」(『六度集經』(A部分) 3-37c)

[商人また言った「…そもそも衆生の心というものは、恒常ということがない。以前の憎しみも現在では愛情となる。どうして恒常であるものなどであろうか。このことが一つの世のことであったとしても、(衆生は)見て分かることがない。ましてや無数の劫にわたることであったならなおさらである。…」]

[何-X: 後置]

- (11-29) 妻驚而起, 視太子淚出, 且云:「將有**何罪**, 乃見*迸[元本・明本「屏」]逐, 捐國尊榮, 處深山乎。」(『六度集經』(A部分) 3-8b)

[(太子の)妻は(太子の話を知ると)驚いて立ち上がり、太子を見て涙を流しながら言った「(あなたに) いったいどんな罪があつて、追放されてこの国での尊い位と榮譽を捨て去り、山奥に住まわされることになるのでしょうか。]

- (11-30) 執手入宮, 並坐而曰:「賢者說**何書**, 懷**何道**, 而為二儀之仁, 惠逮眾生乎。」(『六度集經』(A部分) 3-15c)

[(王は菩薩の)手を取り宮殿に入ると、並んで座り(菩薩に)言った「賢者はどんな書を説き、どんな道を心に抱いておられるために、天地の(間に遍く)仁をなして、その恵みが衆生におよぶまでになったのか。]

- (11-31) 親驚怛曰:「吾子何罪而殺之乎。子操仁惻, 蹈地常恐地痛, 其有**何罪**而王殺之。」(『六度集經』(A部分) 3-24c)

[(睽の)親は驚き悲しんで言った「いったい我が息子にどんな罪があつて(王は)彼を殺したのでしょうか。あの子は節操・仁愛・真心があり、地面を踏むと地が痛がることを恐れるほどでした。いったいどんな罪があつて、王は彼を殺したのでしょうか。]

- (11-32) 王*寤[三本「悟」]曰:「分國不受, 豈當盜哉。」問:「子何國人, 以**何見**為沙門乎。何從獲珠。行高乃然, 忽罹斯患, 將以何由。」(『六度集經』(A部分) 3-28c)

[王は悟って言った「(この道士は)国土を分け与えられるのも受け入れないのに、どうして盗みなどするだろうか。」(そして王は道士に)たずねて言った「あなたはどこの国の人で、どんな考えによって沙門となったのか。どうやって珠を手に入れたのか。行いがこのようにりっぱであるのに、突然このような災難に遭ったのは、いったいどんな理由があるのか。]

興味深いことに、中古期の江南地域でも、五世紀に成立した文献における状況は、三世紀の『六度集經』(A部分)とは異なっている。例えば、『過去現在因果經』では、「何-X」疑

問フレーズ目的語については、基本的には上述の『中本起経』『雑宝蔵経』の状況に近く、すべてが後置語順をとる。ただし、反語を表す形式については、「何 ad+V+Xo」の出現が非常に少ない点で異なる。これは、『過去現在因果経』においては、連用修飾語としての「何」の用法自体が既に衰退していることによるのであろう。この文献では、反語を表す機能は「云何」などの他の複音節疑問代詞によって担われている（用例(11-33)参照）。

(11-33) 于時太子答車匿言：「我違父母，及捨國土，遠來在此，爲求至道。云何當復受此餉耶。」（『過去現在因果経』3-639a）

[そこで太子は匿言に答えて言った「私は父母に背き、国土を捨て、はるかこの地に来たのは、至道を求めるためである。どうしてその食糧を受け取ることができようか。」]

なお、『過去現在因果経』と同じく五世紀の南朝で成立した『世説新語』では、「何-X」疑問フレーズ目的語の後置語順が存在する一方（用例(11-34)(11-35)）、前置語順も並存している（用例(11-36)(11-37)）。また反語・感嘆などの修辞疑問を表す統語形式として、「何 ad+V+Xo」構文をも並存している。これは『中本起経』『雑宝蔵経』に反映された中古の中原地域あるいは北方地域の方言における状況と、『六度集経』（A部分）に反映された三世紀の江南・建業における状況との中間的状態とみなし得よう。『世説新語』と『過去現在因果経』における状況の違いをどのように解釈するかについては次節で論ずることにしたい。

(11-34) 客有問陳季方：「足下家君太丘，有何功德而荷天下重名。」（『世説新語』「德行」1-12）

[何-X：後置・純粹疑問]

[ある人が陳季方（＝陳譙）にたずねた「御尊父の太丘さまは、いったいどのような功績・徳行があつて天下における（このような）高い名声を得ておられるのでしょうか。」]

(11-35) 主簿白：「羣情欲府君先入廡。」陳曰：「武王式商容之間，席不暇煖。吾之禮賢，有何不可。」（『世説新語』「德行」1-1）

[何-X：後置・修辞疑問]

[主簿の役人は（陳蕃に）言った「皆の心情としては、あなた様にまず役所に入らせていただきたいのですが。」。陳蕃は言った「（周の）武王は商容に対して敬意を示すために、暖かい席に座るいとまもなかった。私が賢者に対して礼を尽くすのに何の不都合があろうか。」]

(11-36) 王爽與司馬太傅飲酒。太傅醉，呼王為「小子」。王曰：「亡祖長史，與簡文皇帝為布衣之交。亡姑、亡姊，伉儷二宮。何小子之有。」[何-Xo + 之 + V]（『世説新語』「方正」1-405）

[何-X：前置・修辭疑問]

〔王爽が司馬太傅（＝司馬道子）と酒を酌み交わした。太傅は酔って、王爽のことを「小僧」といった。王爽は言った「(私の) 亡き祖父長史（＝王蒙）は、簡文皇帝（＝司馬昱）と平民どうしのような親しい交わりがあった。(私の) 亡き姑と亡き姉は、それぞれ皇后となった。(それなのに) どうして「小僧」などと言えるのか。〕

(11-37) 簡文崩，孝武年十餘歲立，至暝不臨。左右啟「依常應臨。」帝曰：「哀至則哭，**何常**之有。」（『世說新語』「言語」1-171）

[何-X：前置・修辭疑問]

〔簡文帝が崩御し、孝文帝が十余歳で（皇帝に）立てられた。（しかし）日が暮れるまで、声をあげて泣く弔い礼をしなかった。左右の者が奏上した「常規に従い、声をあげて泣かれるべきです。」（孝文）帝は言った「哀しみが感じられたらその時に声をあげて泣くことにしよう。（このようなことに）どんな常規があるというのか。〕

上述の中古における「何-X」疑問フレーズ目的語の語順の状況は、【図表 11-3】のようにまとめられる。

【図表 11-3】中古における「何-X」疑問フレーズ目的語の語順

	前置		後置	
	何-Xo+之+V	何-Xo+P	V+何-Xo	P+何-Xo
中本起經	0	0	10	1
六度集經（A 部分）	7	0	15	6
雜寶藏經	0	0	43	38
過去現在因果經	0	0	6	7

*表中の数字は当該の統語形式の出現頻度を表す。

11.3.2 語順変化メカニズム

中古期に至ると、上古後期に出現した「/何/-X」疑問フレーズ目的語の後置語順が急増した。この後置語順の急増を促した要因として、①上古から中古にかけて生じた語彙の複音節化の傾向により、非禪母系単音節疑問代詞「/何/」が複音節の「何-X」にとり替えられるという語彙交替が発生し、上古後期に出現した純粹疑問を表す目的語後置型の「V+何-Xo」の出現頻度が急増したこと¹⁸²、そして②上古後期の修辭疑問を表す目的語前置型の「/何/-

¹⁸² 11.3.1 の注 175 において既述したように、『中本起經』『雜寶藏經』などの中古文獻においては、後置された「何-X」疑問フレーズ目的語が明確に修辭疑問を表す用例も皆無ではない。これは、中古の「何 ad+V+Xo」という統語形式の機能が、上古後期の修辭疑問を表す「何-Xo+之

Xo+之+V」構文については、「/何/-X」疑問フレーズの音節数に一定の限界があったため、「何-X」疑問フレーズ自体の多音節化・複雑化の進展とともに、この構文の出現頻度が減少していき、この構文が担っていた機能が「何 ad+V+Xo」などの他の統語形式に代替される傾向が生じたこと、という二点が考えられる。

ここで上記①の点について補足しておきたい。本論文 11.1(i) で指摘したように、上古漢語ではしばしば述語動詞の機能的総合性が高く、非禪母系単音節疑問代詞（「/何/」）が目的語となった「/何/o+V」という統語形式で〈事物の種類・性質〉を問い得たのであるが、上記①で指摘するように、語彙の複音節化の趨勢を受けて「何-X」という〈事物の種類・性質〉を問う有標形式へと取り替えられたのである。この場合、機能面からみれば、有標形式の使用により、語彙の意味の明晰性を増加させようとする欲求も関与した可能性もある。

なお、介詞目的語となった「何-X」疑問フレーズの後置例も出現しているが、これは動詞目的語となった「何-X」疑問フレーズの語順への類推によるものと考えられる。

以上、中古期の中原地域或いは北方地域の有力方言を反映する『中本起経』『雑宝蔵経』における状況をもとに語順変化メカニズムを論じてきた。本論文 11.3.1 において述べた三世紀江南の建業で成立した『六度集経』（A 部分）における状況は、同時期の中原地域、および北朝地域の有力方言における状況とは異なり、上古後期の『史記』（秦漢部分）における状況と中古の『中本起経』『雑宝蔵経』における状況の過渡的な段階にあると解釈できる。これは『六度集経』（A 部分）の反映する三世紀建業方言では、上述の語順変化メカニズムの進展が、中原地域或いは北方地域方言よりも緩慢であったと考えることで、矛盾無く説明することができよう（【図表 11-4】参照）。また五世紀の南朝で成立した『過去現在因果経』は、むしろ中原地域或いは北朝地域の有力方言を反映した資料の状況に近いが、これは本論文 17.6 で言及するように、南朝の四世紀以降の文献言語にしばしば中原方言の影響が強くみられるのと平行する現象であり、三世紀中葉以降に永嘉の乱等の政治・社会的事件を経て中原方言の影響を大きく受けた結果である可能性がある。なお、『過去現在因果経』と同じく五世紀の南朝で成立した『世説新語』は、『六度集経』（A 部分）と『過去現在因果経』との中間的な状況を示していると言ってよいが、これは『世説新語』の言語が全体的に保守的な傾向を有することによるものと推定される。類似の現象は、二人称代詞や人称代詞の接辞など、他の言語項目についてもみとめられる（松江 2000 など参照）。

【図表 11-4】上古後期から中古における〈事物の種類・性質〉を問う統語形式

	上古後期	中古	中古
	史記（秦漢部分）	六度集経（A 部分）	中本起経

+V」構文のそれと完全に一致するものではないため、「何-Xo+之+V」構文の機能の一部が「何-X」疑問フレーズ目的語の後置語順によって担われるようになったことによるのであろう。いずれにしても、修辞疑問を表す「何-X」疑問フレーズ目的語の後置語順は出現頻度が極めて低く、語順変化を促した主要な役割を担っていたとは考え難い。

			雑宝蔵経 過去現在因果経
純粹疑問	(1)/何/-X o+Øv	(1)何-X o+Øv	(1)何-X o+Øv
	(3)/何/o +V * (多数)	(3) /何/o +V * (多数)	(3) /何/o +V
	(4) V+何-Xo * (稀少)	(4) V+何-Xo	(4) V+何-Xo * (増加) ^(a)
修辭疑問	(2)/何/-Xo +之+V	(2)何-Xo +之+V	(5)何 ad+V+Xo ^(b)
	(3)/何/o +V	(3)/何/o +V	(3)/何/o +V * (少数)

* (1)~(5)の数字は統語形式或いは構文の形式を、形式から分類したもの。同一の番号のものは同一の統語構造を有する。

* (a) 『雑宝蔵経』では純粹疑問を表す統語形式のうち、「(4) V+何-Xo」が「(3) /何/o +V」よりも圧倒的に多くなっている。『中本起経』や『過去現在因果経』では、純粹疑問を表す統語形式のうち、出現率自体は「(3) /何/o +V」の方が「(4) V+何-Xo」よりも多いものの、「(3) /何/o +V」は「何謂」「何爲」などの固定的な表現が多い。これら固定的表現を除くと、両者の出現頻度はほぼ拮抗するか（『中本起経』）、むしろ後者の方が多くなる（『過去現在因果経』）。

* (b) 『過去現在因果経』には「(5)何 ad+V+Xo」はほとんど存在しない。

11.4 近古前期における状況

近古前期においては、「/何/-X」疑問フレーズ目的語は、原則として動詞・介詞に後置される語順のみをとる。よって語順そのものは中古に生じた変化が完成した状態を保っている。また反語的な場合でも後置されている用例もみられ（(11-40)）、語順変化がほぼ完了したことが確認される。

(11-38) 桂心啞啞然低頭而笑。十娘問曰：「笑何事。」桂心曰：「笑兒等能作音聲。」
（『遊仙窟』 46-369）

〔桂心がくすくすと俯いて笑った。十娘はたずねて言った「何を笑っているのですか。」桂心が答えた「わたしたちでも上手に音楽を奏でられたのを笑ったのです。〕

(11-39) 伍奢聞之忿怒，不懼雷電之威，被發直至殿前，觸聖情而直諫。王即驚懼問曰：「有何不祥之事。」（『伍子胥變文』 2）

〔伍子胥はそのこと（=王が太子の妻となるべき者を横取りしようとしたこと）

を聞くと激怒して、雷電の威力をも恐れない様子で、髪振り乱してまっすぐ殿前に進むと、王に逆らうのものともせず、直言しようとした。王は驚き恐れてたずねて言った「どんな不祥なことが起こったのか。」]

(11-40) 妻答曰：「君莫急急路遙長。縱使從來不相識，錯相識認有何方（妨）。…」(『伍子胥変文』6)

[妻は（伍子胥に）答え言った「どうか急がないで下さい。旅路は長いのですよ。たとえあなたと何の知り合いでもなく、（知人と）見間違えていたとしてもどんな不都合がありましようか。…」]

【図表 11-5】近古前期における「何-X」疑問フレーズ目的語の語順

	前置		後置	
	/何(X)/-Xo+之+V	/何(X)/-Xo+P	V+/何(X)/-Xo	P+/何(X)/-Xo
遊仙窟	0	0	2(1)	0
伍子胥変文	0	0	11(0)	1(0)
舜子変	0	0	3(2)	2(0)
降魔変文	0	0	8(2)	1(0)

*表中の数字は当該の統語形式の出現頻度を表す。

*「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である。例えば、『遊仙窟』の動詞目的語の後置欄に、「2(1)」とあるのは、通時的に有意義な後置用例が2例、通時的に無意味な後置用例が1例であることを表す。

*『遊仙窟』には、以下のように、前置の「何-X」疑問フレーズ目的語がみとめられるが、上古文献である『論語』の「未之思也。夫何遠之有。」[思い焦がれてはいないのだ。(本当に思い焦がれていたなら) どうして遠いなどということがあろうか] (『論語』「子罕」2-632)の箇所を踏まえたものであるため、資料とはしない。

・五嫂笑曰：「張郎心專，賦詩大有道理。俗諺曰：『心欲專，鑿石穿。』誠能思之，何遠之有。」(『遊仙窟』32~33-239~241)

[五嫂は笑って言った「張さまは切に思っていて、(作った)詩がずいぶん大げさですね。世俗のことわざで『切に思えば、岩をも通す』と申します。もし本当に思い焦がれているのであれば、どうして遠く離れるなどということがありましようか。]

ただし、「何-X」疑問フレーズ目的語そのものの形式に注目すると、中古からの変化は少くない。第一点は、「甚」が用いられた「甚-X」疑問フレーズ目的語が生じているということである。本論文で用いた近古四資料のなかでは『舜子変』に出現する(合計4例)。

(11-41) 後阿嬢見舜子跪拜四拜，五讀(毒)嗔心便豈(起)「又不是時朝節日，又不是遠來由喜，政(正)午間跪拜四拜，學得甚媿(鬼)禍述(術)靡(魅)！」(『舜子

変』200)

〔継母は舜子が四度跪礼するのをみると、すぐに悪辣な怒りの気持ちが生じて(言った)「節句の日でもなく、遠くからお祝いのために来たのでないのに、昼間に跪拝を四度行うとは、どんな陰険で怪しげな呪術を学んだのか」〕

- (11-42) 後阿嬢又見舜子，五毒惡心便起。「…夜夜伴涉惡人，不曾歸來宅裏。買(賣)卻田地莊園，學得甚崇禍術魅，大杖打又(不)殺，三具火燒不死。…」(『舜子変』202)

〔継母はまた舜子(の様子)をみると、すぐに悪辣な怒りの気持ちが生じて(瞽叟に言った)「…(先妻の子の舜は)夜な夜な悪党とつるんで、家に帰ってきたことなどないのです。田畑も地所も売ってしまい、どんな恐ろしく怪しげな呪術を学んだのか、大きな杖で叩いても死なず、三つの松明でも焼き殺せない…」〕

- (11-43) 瞽叟便即與大石填塞。後母一女把著阿耶：「殺卻前家歌(哥)子，交與甚處出頭。」(『舜子変』202)

〔瞽叟がすぐに大石で(井戸を)塞ごうとすると、継母の娘が父を引き留めて(言った)「兄さんを殺してしまったら、(兄さんを) どこから出すというの。〕

第二点は、「何 X」疑問代詞あるいは「何-X」疑問フレーズがさらに他の統語成分を修飾した「[何(-)X]-X」という構造が、動詞あるいは介詞の目的語になった形式がみられることである。これらの形式の出現は、複音節化の傾向が、中古から一層進んだことを端的に示すものであろう((11-44)は「何所-X」、(11-45)(11-46)は「何物-X」、(11-47)は「[何-X]-X」の用例)。

- (11-44) 魚(漁)人息棹身迴，乃報子胥言曰：「君莫造次，大須三思。一惠之餐，有何所直。…」(『伍子胥変文』8)

〔漁師は棹を止めて振り返ると、子胥に告げて言った「はやまったことをしてはなりません。よくお考えください。(私は)一食を恵んだだけのことで、どれほどの値段でありましょうか。…〕

- (11-45) 遂作悲歌而嘆曰：…先生恨胥*何勿(何物)事，遂向江中而覆船。(『伍子胥変文』9)

〔そこで(伍子胥は)悲歌を作って嘆いて言った「…あなたは、私のどんなことを恨んで河に舟をひっくり返したのか。〕

- (11-46) 范蠡啟王曰：「吳國賢臣伍子胥，吳王令遣自死。…今有佞臣宰彼，可以貨求必得。」王曰：「將何物貨求。」范蠡啟言王曰：「宰彼好之金寶，好之美女，得此物必是開路，更無疑慮。」(『伍子胥変文』16)

〔范蠡は王に言上した「吳国の賢臣伍子胥は、吳王に自殺させられました。…今は、佞臣の宰彼がいるだけです。(彼は)賄賂で求めれば必ず味方になります。〕

(越) 王は言った「どのような物で求めようか。」(范蠡は) 王に言上するには「宰彼は金や宝を好み、美女を好みます。これらの物が(彼の) 手に入れば必ず道が開けるのは、全く疑いのないことです。」]

(11-47) 乃喚:「遊人且住。劍客是何方君子、何國英才, 相貌精神、容儀聳幹。…」
(『伍子胥変文』3)

〔(女は伍子胥に近寄ると) 声をかけた「旅のお方、しばらくお待ち下さい。あなたはどちらの君子・どの国の英才でいらっしゃるのですか。力みなぎるご様子、堂々としたお姿でいらっしゃいます。…」]

第十二章 複音節疑問目的語の語順変遷（二）

——「何 X」疑問代詞目的語

「何 X」疑問代詞は、その大部分の出現が中古期以降のことであり、「何-X」疑問フレーズなどの疑問フレーズが固定化し、一語化を経て発生したものである。具体的には、次の四種の来源がある。

【図表 12-1】「何 X」疑問代詞の来源

	来源	「何 X」疑問代詞の例
(i)	「何-X」疑問フレーズ	何物 何處 何故
(ii)	「何 o+P」疑問フレーズ	何縁 何以
(iii)	「何+助詞」疑問フレーズ	何者
(iv)	その他	何如 ¹⁾ 何以故

*1) 「何如」は、以下のように述語となり、〈比較〉を表す構文的意味を持つ構造である。

・又告五人：「汝觀*吾 [三本、金剛寺本「我」] 身，何如樹下。」五人答佛：「爾時憔悴，今更光澤。…」(『中本起經』4-148a)

〔(仏は) さらに五人に言った「お前たち、私の様子をみるに、(鹿園の) 木の下 (に居た時) と比べてどうであるか。」五人は仏に答えた「あの時は憔悴していたのに、今は光り輝やくようです。…」〕

*形式上は「何 X」疑問代詞とは異なるが、「何如」と同様に動目フレーズを来源とする複音節疑問代詞に「云何」がある。

・未入城門，王阿闍世聞文殊師利旦到，從菩薩二萬二千五百人，其比丘者五百人俱。王自念：「吾作五百人具。今當云何供，當坐何所。」(『阿闍世王經』15-399c)

〔(文殊師利が) まだ城門をくぐらないうちに、阿闍世王は明け方に文殊師利がやって来ること、(そして文殊師利は) 二万二千五百人の菩薩を従え、五百人の比丘とともに (いる) ことを知った。王は考えた「私は五百人分席しか用意しなかった。今、どのようにもてなしたらよいだろうか。どこに座っていたらよいだろうか。〕

以上のうち、目的語となり得るのは、大部分が(i)に属する疑問代詞である。以下においては、これら「何 X」疑問代詞目的語の語順について、①上古既出の特殊な「何 X」疑問代詞目的語（「何等」「何所」）（本論文 12.1）、②中古新出の「何 X」疑問代詞目的語（「何物」「何處」「何許」など）（本論文 12.2）、に分けて論じていく。

12.1 上古既出の「何 X」疑問代詞目的語：「何等」「何所」

「何等」と「何所」とは、いずれも疑問代詞目的語の前置規則が存在していた上古期に出現した複音節疑問代詞であるため、中古期以降に出現した大多数の「何 X」疑問代詞とは、目的語としての語順の変遷において異なるところがある。以下、それぞれについて具体的に検討していく。

12.1.1 「何等」の語順概況

「何等」は上古後期に出現した「何-等」という修飾構造フレーズが語彙化を経て一語となったものと推定される。しかし、この一語化が生じた際、「等」が〈ともがら・類〉という語彙的意味を保存した名詞的な成分のままであったのか、すでに意味面での漂白化(bleaching)が進行し、統語カテゴリーの転移が生じて接尾辞に近いものとなっていたのかは判断し難い¹⁸³。

疑問代詞「何等」の早期の用例は、以下の『史記』(秦漢部分)「三王世家」における褚少孫による補作部分にみえる。

(12-1) 曰：「子當為王，欲安所置之。」王夫人曰：「陛下在，妾又何等可言者。」(『史記』(秦漢部分)「三王世家」2115)(魏培泉 2004 所引の用例)

〔(武帝が王夫人に)言った「息子は王として封ぜられるべきである。(お前は)彼をどこに封じたいか。」王夫人は言った「陛下がいらっしゃるのに、わたしめなど*申し上げる言うことなどありませんか(どんなことを申し上げられましよう

¹⁸³一般に、上古後期にはすでに「等」が接辞として人称代詞・人称名詞の後ろに付加され、〈複数〉という文法的意味を表す用法がみられるとされている。

例えば、楊伯峻、何樂士(1992:131)は、「多数」を表す以下のような「等」の用法が、漢代かそれ以降に広まったと指摘する。ただし、本論文は、これらの用例における「等」は、必ずしも〈複数〉という文法的意味を表すものではなく、〈～及びその他〉という語彙的意味を表すものとの解釈が可能であり、完全に文法化されて〈複数〉を表す接尾辞となった確実な例とはみなし得ないとする。

・高祖以亭長為縣送徒酈山，徒多道亡。自度比至皆亡之，到豐西澤中，止飲，夜乃解縱所送徒。曰：「公等皆去，吾亦從此逝矣。」(『史記』(秦漢部分)「高祖本記」347)

〔高祖は亭長の身分で県のために人夫を酈山に送りどけようとしたが、彼らの多くが道中で逃亡してしまった。(高祖は)到着することには誰もいなくなってしまうだろうと考え、豊邑の西の沢に着くと、(そこに)留まって酒を飲み、夜になると送ってきた人夫を解き放ち自由に言った「君たちはみな立ち去るがよい。私もここから逃げ出そう。」〕

・功臣皆曰：「臣等身被堅執銳，多者百餘戰，少者數十合，攻城略地，大小各有差。…」(『史記』(秦漢部分)「蕭相國世家」2015)

〔功臣たちはみな(高祖に)言った「私たちは、身に甲冑をつけ、手に鋭利な武器を持ち、多い物は百余戦、少ない者でも数十合、いずれも城を攻め土地を奪っています。(もちろん)功勞の大きさはそれぞれ異なっておりますが。…〕

か)。』]

しかし、上古後期では「何等」が二/三項他動詞の目的語となった確実な用例は見出し難く、その語順状況は不明である。中古期に至ると「何等」が二/三項他動詞の目的語を担った用例が確認されるようになる。その際、大多数の用例では後置語順をとっている。

(12-2) 夫法度之功者謂何等也。養三軍之士，明賞罰之命，嚴刑峻法，富國強兵，此法度也。〔『論衡』「非韓」2-436〕

[何等：後置]

[そもそも法度の効果とはどのようなことを言うのか。三軍の兵士を養い、賞罰の命令を明確にし、刑や法を厳格にし、国を富ませ兵を強くするといったことが、法度なのである。]

(12-3) 舍利弗心念：「佛本*作〔大正本「從」，三本、圖書寮本、聖語藏本「作」〕何等而文殊師利言當念故恩乎。」〔『阿闍世王經』15-392c〕

[何等：後置]

[舍利弗は考えた「仏が前世においてどんなことをなされたために、文殊師利が『昔の恩を思いおこされよ』とおっしゃったのだろうか。』]

(12-4) 是二兒各各有是願己，復共問一兒：「若願何等。」即報言：「我欲如佛，其光明無輩。如師子獨步，常有眾而隨我。」〔『阿闍世王經』15-395a〕

[何等：後置]

[二人の子供は各々そのように願いを言い終わると、ともに残りの一人にたずねた「君はどんなことを願うのか。」(そのたずねられた子供は)すぐに答えて言った「僕は仏のようにになりたい。その輝きは比べられるものがないほどで、獅子のように抜きんでた存在で、いつも僕に従う衆生がいるようでありたい。』]

(12-5) 爾時帝釋還復本形，住在王前，語大王曰：「今作如是難及之行，欲求何等。今汝欲求轉輪聖王帝釋*魔〔三本「梵」〕王。三界之中，欲求何等。」〔『賢愚經』4-352a〕

[何等：後置]

[その時、帝釈天は(鷹の姿から)元の姿に戻り、国王の前に立ち、国王に言った「今このような困難極まる行をおこなうのは、何を求めているのか。今、そなたは転輪聖王や帝釈魔王になりたいのか。三界の中においてどんな(存在となる)ことを求めているのか。』]

しかし少数ではあるが、中古前期(後漢魏晋期)において「何等」が目的語となり前置語順をとった用例も散見される(用例(12-6)(12-7))。ここから、本論文は、「何等」が出現した最初期(上古後期)においては、目的語「何等」は前置語順をとっていた可能性が高い——ただし一定の文法条件の下でのみ前置語順をとっていた可能性も含む——と考える。その

後、語順変化が生じて、大多数の用例において後置語順をとるようになったと推定する。「何等」は近古以降も少なからず用例があるが、衰退の傾向が顕著であり、「甚」系など近古新出の事物を問う疑問代詞がそれに換わって勢力を増してくることになる。

- (12-6) 王怪在水甚久，便令使者按視，釋摩男在水中何等作。如王言往按視之，見釋摩男在水底死。(『仏説義足經』4-189a) (太田 1988:25 所引の用例)

[王は(釈摩男が)池の中にいるのが甚だ長いことを訝しく思っ、使者に釈摩男が水中でどのようなことをしているのか調べさせた。(使者が)王の命令に従って調べに行くと、釈摩男が水底で死んでいるのが見えた。]

- (12-7) 王復失笑。夫人言：何等笑。(『旧雜譬喻經』4-514c) (太田 1988:25 所引の用例)¹⁸⁴

[王は(蛾が壁に沿って相争って地面に落ちるのを見て)また思わず笑った。婦人は言った「何を笑ったのですか。」]

12.1.2 「何所」の語順概況

「何+所」という統語形式は、以下のように上古中期文献にすでにみえる。

- (12-8) 子夏之門人間交於子張。子張曰：「子夏云何。」對曰：「子夏曰：『可者與之，其不可者拒之。』」子張曰：「異乎吾所聞。君子尊賢而容眾，嘉善而矜不能。我之大賢與，於人何所不容。…」(『論語』「子張」4-1302)

[子夏の弟子が子張に交際についてたずねた。子張は言った「子夏は何と言ったか。」(弟子が)答えて言った「子夏は『(交際)すべき人とは交際し、(交際)すべきでない人は断るように』とおっしゃいました。」子張が言った「(それは)私が(先生から)聞いていることとは違う。君子は賢人を尊重する一方で大衆をも許容するのであり、善人を称える一方で無能な者をも憐れむのである。自分が大賢人であれば、どうして人に対して許容できないことがあるうか。…」]

- (12-9) 遂劫南蒯曰：「群臣不忘其君，畏子以及今，三年聽命矣。子若弗圖，費人不忍其君，將不能畏子矣。子何所不逞欲。請送子。」(『左伝』「昭公十四年」4-1364)

[(季氏の家臣の司徒老祁、慮癸は)そこで南蒯を脅して言った「臣下たちは自分たちの主君(=季氏)のことを忘れてはいません。(しかし)今にいたるまであなた

¹⁸⁴ 『旧雜譬喻經』の訳者については、『大正藏』では康僧會とされているが、疑義が提出されている。例えば遇笑容・曹廣順(1998)は『六度集經』と『旧雜譬喻經』の文法特徴を分析し、言語的には『旧雜譬喻經』は『六度集經』と同じ訳者が翻訳したものではあり得ないこと、ただし翻訳された時期はそれほど離れていないことを指摘する。本論文の筆者も、偈の押韻状況、目的語となった「何等」の語順、「誰 VP 者」型の分裂文(cleft sentence)といった点から『旧雜譬喻經』の漢語史上の位置づけを論じ、その主要部分は三～四世紀の言語を反映するものと推定している(松江 2015)。

を恐れていたため、三年間、あなたに従ってきました。あなたがもし彼らのために善処しなければ、費人はかれらの主君（＝季氏）に対して冷酷になることができずに、あなたを恐れなくなるでしょう。あなたならどんな所でも思い通りにできないことなどないでしょう。（あなたを）お送りさせてください。』

(12-10) 桓公為司徒，甚得周眾與東土之人，問於史伯曰：「王室多故，余懼及焉，其何所可以逃死。」（『国語』「鄭語」460）

〔鄭の桓公は（周の幽王の）司徒であり、西周の民衆と周土以東の人々に深く敬愛されていた。（彼が）史伯にたずねた「（西周の）王室は災いが頻繁に起こり、私は自分に（その災いが）及ぶことを恐れています。いったいどんな所なら死を免れることができるのでしょうか。』

上例の「何+所」という統語構造をどのように分析するかについて、研究者の見解は一致していない。

例えば、太田辰夫氏は、用例(12-8)の「何+所」は、用例(12-9)のそれとは全く異なる構造だと考える。すなわち、前者では「何」と「所」とは直接的な統語関係になく、「何（＝倒置された判断文賓語）+〔所+不容〕（＝主語）」という構造における「何」と「所」とが並んだものにすぎないが（太田 1964:55）¹⁸⁵、後者は連体修飾語「何」が〈場所〉を表す名詞「所」を修飾した修飾構造だとみなすのである（太田 1988:98-99）。

これに対して、尹君(1989)は、古漢語における「何+所」構造を、①「何（＝前置目的語あるいは前置補語）+所（＝語気副詞）」、②「何（＝主語）+所（＝語気副詞）」、③「何（＝連用修飾語）+所（＝語気副詞）」、④名詞性修飾フレーズ（この場合、「所」は〈場所〉義を有する名詞。本論文の表現では「何-所」疑問フレーズ）の四種に分類した上で、用例(12-8)の「何+所」は②に属するものであり、用例(12-9)のそれは④に属するものであると主張する。

本論文は、基本的には太田(1988)の分析が妥当だと考える。尹君(1989)の分析は、「所」が単独で語気副詞となった用例の裏付けも確実ではない上に、そもそも統語的にこれほど低い階層に位置するものを語気副詞と分析するにはよほど積極的な根拠が必要だと考える。本論文では、用例(12-8)の「何+所」は、前置された述語である「何」と、その主語に相当する「所+V」構造（太田 1964:27-33 の言う「所字連語」）を構成する機能語「所」が表層構造において並列されたにすぎないものであり、用例(12-9)(12-10)における「何+所」は、「何」が〈場所〉の意味を表す名詞性形態素「所」を修飾した構造であると分析しておく。すなわち、用例(12-8)のようなものは、述語となった疑問代詞の前移により構成された修辭疑問を表す特殊構文とみなすのである。実際、意味・機能の面では、用例(12-8)のような「何+所」は構文的意味として反語・感嘆といった修辭疑問を表すために、純粹疑問に用いられ

¹⁸⁵太田(1989)の用例(12-8)についての見解は他の多くの研究者と一致する。例えば、南開大学中文系語言学教研組(1960)（尹君 1989 によれば、この説は、編者のうち馬漢麟氏の見解によるもの）、王力主編(1981)など、いずれも同様の説を採用している。

ることではないが、用例(12-9)(12-10)のような「何所」は純粹疑問にも用いられることがあり(用例(12-10))、原則として〈場所〉を指示する用法に限られるという違いがみられる¹⁸⁶。

以上、上古中期における「何+所」について述べてきたが、本論文の調査の限りでは、一語化した「何所」が目的語となった確実な用例は確認されていない(用例(12-8)の「何+所」は一語ではなく、用例(12-9)(12-10)のそれは連用修飾語を担ったものと分析する)。よって目的語となった「何所」の語順については——そもそも目的語としての用法が存在したのかということも含めて——不明とせざるを得ない¹⁸⁷。

上古後期においても、これら上古中期にみられた二種の「何所」が引き続き存在している。〈場所〉を指示しない「何所」については、上古中期と同じく「何(=述語)+[所+V](=主語)」と分析することが可能である(用例(12-11))。ただし、このような分析が成り立つためには、述語となった「何」の前移現象が存在していることが前提となる。この点については、上古後期においても、『史記』(秦漢部分)に用例(12-12)(12-13)のように、「何(=述語 1)+[主語 2+之+述語 2](=主語 1)」と分析され得る文型がみとめられるため、述語「何」の前移現象は引き続き存在していたと考えられる(『史記』(秦漢部分)には全部で10例みとめられる)。

さて、上古後期において注目すべきは、「何所」が目的語を担った用例がみとめられることである。前置語順をとる用例(12-14)(12-15)がそれであり、これらの「何所」は動詞「為」「歸」の論理目的語にあると同時に、その前に動作者を表す主語が立ち、なおかつ修辭疑問ではなく純粹疑問を表しているため、後続する動詞の目的語である可能性が高い。このうち用例(12-14)は、用例(12-8)のような修辭疑問を表す特殊構文に由来すると推定される。よって、上古後期では、用例(12-8)のような特殊構文における前置された述語である「何」の一部は、再分析(reanalysis)により「所」と一語化し、一つの疑問代詞となっていたと考えられる。なお、用例(12-16)は介詞「於」の目的語であるが、「於」の疑問目的語は上古中期でも後置されていたために、これは通時的に有意義な用例ではない。

(12-11) 信再拜賀曰：「…今大王誠能反其道：任天下武勇，**何**所不誅。以天下城邑封功臣，**何**所不服。以義兵從思東歸之士，**何**所不散。…」(『史記』(秦漢部分)「淮陰侯列伝」2612)

[何+所：前置述語+[所+V]]

[韓信は二度礼拝して(漢王を)称えて言った「…今、大王がもし彼(=項王)の

¹⁸⁶用例(12-8)の意味的な特徴として全量性を伴うことが先行研究において指摘されている。例えば、王力主編(1981/1998:370)は「この表現は意味的には全量性を伴う。「何所不容」の意味は「無所不容」[松江注「容れるところがない」の意]である」(「這種說法在意思上帶有周邊性，『何所不容』的意思是「無所不容」)と指摘する。この全量性の意味は、この種の「何+所」が構文的意味として表す反語・感嘆の意味に由来するものであろう。

¹⁸⁷ 本論文で調査した上古初期資料においても、「何所」の目的語としての確実な用例は見出し難い。

道と反対のこゝろを行ひ、天下の武勇の者を任用されるなら、誅殺できない敵などありましようか。天下の城邑によつて功臣を封ぜられたら、帰服しない者がなどありましようか。正義の軍隊として東歸を願う士（の心）にそわれるのなら、瓦解しない敵などありましようか。…」]

- (12-12) 夜聞漢軍四面皆楚歌，項王乃大驚曰：「漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。」（『史記』（秦漢部分）「項羽本紀」333）

[何：前置述語]

〔夜間、漢軍が四面から楚歌をうたうのが聞こえた。項王は大いに驚いて言った「漢はすでに楚地をことごとく手に入れてしまったのだろうか。なんと楚人の多いことか。〕

- (12-13) 太史公曰：「吾聞之周生曰：『舜目蓋重瞳子。』，又聞項羽亦重瞳子。羽豈其苗裔邪。何興之暴也。…」（『史記』（秦漢部分）「項羽本紀」338）

[何：前置述語]

〔太史公が言う。私は周生が『舜の目はおそらく（瞳が二つある）重瞳であった』と言うのを聞いたことがあり、項羽もまた重瞳であったと聞いている。項羽はまさか彼（＝舜）の子孫であったのだろうか。（項羽が）勃興することの何とすさまじいことか。…〕

- (12-14) 馮驩曰：「聞君好士，以貧身歸於君。」孟嘗君置傳舍十日，孟嘗君問傳舍長曰：「客何所為。」（『史記』（非秦漢部分）「孟嘗君列傳」2359）

[何所：動詞目的語]

〔馮驩は言った「あなたが士を好まれると聞きまして、貧乏という理由だけあなたに身を投じたのです。」孟嘗君は馮驩を（食客のために）下等宿舎に十日間置いた。（それから）孟嘗君は宿舎の長にたずねた「あの客は何をしているのか。〕

- (12-15) 曰：「王知天下之所歸，則齊國可得而有也。若不知天下之所歸，即齊國未可得保也。」齊王曰：「天下何所歸。」曰：「歸漢。」（『史記』（秦漢部分）「酈生陸賈列傳」2695）

[何所（〈場所〉を指示）：動詞目的語]

〔（酈生は齊王に）言った「王が天下（の人心）の歸するところを知っておられるなら、齊の国は保たれましよう。もし天下（の人心）の歸するところをご存じでないのなら、齊の国は保たれないでしょう。」齊王は言った「天下（の人心）はどこに歸するののか。」酈生は言った「漢に歸します。〕

- (12-16) 帝曰：「雖然，意所欲，欲於何所王之。」王夫人曰：「願置之雒陽。」（『史記』（秦漢部分）「三王世家」2115）

[何所（〈場所〉を指示）：介詞目的語]

〔武帝は（王夫人に）言った「そうではあるが（＝武帝がいるのに王夫人が言うべきことはないといつても）お前の気持ちでは、彼（＝王夫人の息子）をどこ

に王として封じたいのか。」王夫人は言った「彼を洛陽に封じてくださればと望んでおります。】

中古に至ると、上古中期において〈場所〉以外を指示していた「何+所」が一語化して一つの疑問代詞となったことが、明確に看取できるようになる。中古では、〈場所〉以外を指示する「何所」が動詞の論理目的語に相当する意味役割を担い、当該の動詞に前置された場合、用例(12-18)のように、その前に助動詞「欲」が生起し得るからである。この助動詞「欲」の直後、述語動詞の直前という統語的位置は、上古後期から中古における前置された疑問代詞目的語「何」が生起する統語的位置と同一であり（本論文 10.2 参照）、〈場所〉以外を指示する「何所」が「何」などの前置疑問目的語と同じ統語的カテゴリーに合流したことを示す現象だとみなすことができよう。この種の「何所」は、近古においても原則として前置を保っている（用例(12-19)）。

(12-17) 一龍重曰：「化為小蛇耳。若路無人，尋大道戲。逢人則隱，何所憂乎。」（『六度集經』（A 部分） 3-27c）

〔一方の龍が（もう一方の龍に）言った「小さな蛇に変化すればいいじゃないか。もし路上に人がいなければ、大きな道に沿って遊んでいこう。人に会ったらすぐに隠れれば、何を心配することがあるの。】

(12-18) 時天帝釋來到王前，而問王言：「大王今者勇猛精進，不憚苦痛，為於法故。欲何所求。欲作帝釋轉輪王乎，為欲求作魔王梵。」（『賢愚經』 4-350b-c）

〔その時、帝釈天が王の前にやって来て王にたずねて言った「大王は今、勇敢に精進し、苦痛を恐れないのは、（すべて）法のためである。（あなたは法を聴くことによって）何を求めているのか。帝釈天や転輪王になろうとしているのか。魔王や梵天になろうとしているのか。】

(12-19) 舍利既見毒龍到，便現奇毛金翅鳥。…肋骨粉碎作微塵，六師莫知何所道。（『降魔變文』 566）

〔舍利弗は毒龍をみると、ただちに美しい羽毛の金翅鳥を現出した。…（金翅鳥によって毒龍の）肋骨が粉々に砕け散って塵となり、六師は何を言うべきか分からない。】

本論文では、用例(12-17)～(12-19)のように〈場所〉以外を指示する、一語化した「何所」を「何所（-場所）」と標記し、〈場所〉を指示する「何所」を「何所（+場所）」と標記することとしたい。これは、上述のように、「何所（-場所）」と「何所（+場所）」とは来源が異なり、中古・近古において目的語となった場合の語順も異なるからである。「何所（-場所）」は原則的には前置語順をとるが、「何所（+場所）」であれば前置と後置のいずれの語順もあり得る。

「何所（+場所）」の語順は非常に複雑である。前述のように上古の明確な用例が少なく、

元来の語順を確定することは難しいが、(12-15)のような用例から推して前置されていた可能性が高い¹⁸⁸。これが中古前期に至ると、『中本起経』『阿闍世王経』『仏説義足経』等の洛陽地域の方言を反映する文献では、多く後置語順に転じている（ただし『中本起経』にはこの傾向の例外たる前置例も1例みとめられる）。しかし洛陽地域以外では、前置の語順を保つことが多く、中古後期の『雑宝蔵経』（五世紀・北朝）、『賢愚経』（五世紀・高昌郡）などの中古後期の北方地域——恐らくは非洛陽方言——の方言を反映する文献では、動詞目的語となった場合は前置語順をとることが多い（ただし『賢愚経』にはこの傾向の例外たる後置例が1例みとめられる）¹⁸⁹。そして近古には「何所〈+場所〉」自体が衰退し、「何處」などの疑問代詞に語彙交替していく。

[中古前期・洛陽方言]

- (12-20) 文殊師利問摩訶迦葉：「今早欲到何所。」則言：「欲行分衛故。」（『阿闍世王経』15-399a）

[何所〈+場所〉：後置（動詞目的語）]

〔文殊師利は摩訶迦葉にたずねた「今（こんなに）早くに、どこに行こうとされているのか。」（摩訶迦葉は）言った「乞食に行こうとしているのです。〕

- (12-21) 未入城門，王阿闍世聞文殊師利旦到，從菩薩二萬二千五百人，其比丘者五百人俱。王自念：「吾作五百人具。今當云何供，當坐何所。」（『阿闍世王経』15-399c）

[何所〈+場所〉：後置（動詞目的語）]

〔（文殊師利が）まだ城門をくぐらないうちに、阿闍世王は明け方に文殊師利がやって来ること、（そして文殊師利は）二万二千五百人の菩薩を従え、五百人の比丘とともに（いる）ことを知った。王は考えた「私は五百人分席しか用意しなかった。今、どのようにもてなしたらよいだろうか。どこに座ってもらえばよいだろうか。〕

- (12-22) 鉢所過諸佛刹，其佛侍者皆問佛：「是鉢從何所來。」（『阿闍世王経』15-393a）

[何所〈+場所〉：後置（介詞目的語）]

〔鉢が通り過ぎた仏国土では、（それぞれの仏国土の）仏の従者たちがみな（それぞれがつかえる）仏にたずねた「この鉢はどこから来たのでしょうか。〕

¹⁸⁸ ただし用例(12-15)における「何所」は「どの国」かを問うものであるが、ここでの「国」は実体的な場所というよりも組織としての性格が強く、場所を指す典型的な用例ではない。上古において「何所〈+場所〉」の目的語の用例が少ないのは、実体的な場所を指す場合には影母系「焉」などが用いられていたためであろう。

¹⁸⁹ 『過去現在因果経』は南朝において成立したのであるが、この資料の目的語「何所〈+場所〉」の語順状況は、『中本起経』『阿闍世王経』『仏説義足経』等の洛陽方言を反映する資料と、『賢愚経』などの北方の非洛陽方言地域の資料との中間的な様相を呈している（『雑宝蔵経』も非洛陽方言である可能性が高い）。すなわち、『過去現在因果経』においては、「何所〈+場所〉」が動詞目的語となった2例はいずれも前置語順をとるが、介詞目的語の1例は後置語順をとるのである。なお、『六度集経』（A部分）において「何所〈+場所〉」が介詞目的語となった1例も、後置語順をとっている（本論文 6.5【図表 6-8】【図表 6-9】を参照のこと）。

(12-23) 王謂言：「女行來常在何所。」共對言：「常往來沙門瞿曇所。」(『仏説義足經』4-176c)

[何所 (+場所)：後置 (動詞目的語)]

[王は(バラモンたちに)言った「その女がよく行き来していたのはどこのですか。」(バラモンたちが)ともに答えていうには「しばしば沙門・瞿曇のところに行き来していました。」]

[中古後期・北方(非洛陽方言系)方言]

(12-24) 時城中有盲婆羅門，坐街道邊，聞多人眾行步駛疾，即問行人：「此多人眾，欲何所至。」(『賢愚經』4-390b)

[何所 (+場所)：前置 (動詞目的語)]

[当時、城中に盲目のバラモンがいた。大通りの道端に座っていると、沢山の人々の足取りが、馬が駆けるかのように速いのが聞こえてきたので、道行く人にたずねた「これら沢山の人々は、どこに行こうとしているのか。」]

(12-25) 太子聞之甚大歡喜，便出迎之前為作禮，如子見父。因相勞問：「何所從來。行道得無勤苦。欲何所求索，*用翹[底本「用」]一腳*為[大正本「為翹」]乎。」(『太子須大掣經』3-419b)

[何所 (+場所)：前置 (介詞目的語)]

[太子はそのこと(=宮門に杖を携え、片足をあげて立っている八人の道士がいること)を聞くと大いに喜んで、彼らを出迎え、その前で礼拝した。その様子は子が父に会うかのようなようであった。(そして)彼らを慰労してたずねた「どこからいらっしやったのですか。(長い)道のりを歩いてこられてきつとお疲れでしょう。どんなものをご所望なのでしょう。どうして一方の足をあげておられるのですか。」]

(12-26) *曼[明本「漫」]坻便還至太子所，問太子：「兩兒為何所在。」(『太子須大掣經』3-422c)

[何所 (+場所)：前置 (動詞目的語)]

[曼坻は(夫である)太子のところに戻ると、太子にたずねた「(私の)二人の子はどこにいるのですか。」]

(12-27) 鄰比問言：「汝父母為何所在。」(『雜寶藏經』4-455b)

[何所 (+場所)：前置 (動詞目的語)]

[近所の者が(その貧乏人の息子に)たずねて言った「お前の父母はどこにいるのか。」]

12.1.3 「何等」及び「何所」の語順変化メカニズム

上述のように、目的語となった「何等」「何所(+場所)」の上古における元来の語順は、い

ずれも前置だった可能性が高い。他の疑問代詞目的語と同様に、上古期に存在していた疑問目的語の前置規則に支配され、動詞或いは介詞に前置されていたのであろう。ところが中古期に至ると語順変化が生じ、本節で後述するような要因により後置語順に転ずることになった。ただし「何所〈+場所〉」の語順変化には方言差が存在したようであり、洛陽方言ではすでに中古初期にこの語順変化が生じていたが、洛陽地域以外の多くの地域ではこの変化は中古を通じて生じなかった。そしてこれら「何等」「何所〈+場所〉」は近古に至ると出現頻度が下がって衰退していき、それぞれ「甚」系疑問代詞、「何處」などにその機能を譲っていった。一方、「何所〈-場所〉」は上古後期（遅くとも中古初期）に再分析を経て一語の疑問代詞として成立した後、目的語としての語順は近古まで一貫して前置を保った。

以下においては、如上のような語順状況が生じた要因を考慮しつつ、そのメカニズムを論じてみたい。

まず、中古に至って目的語「何等」「何所〈+場所〉」の語順変化を生ぜしめた主な要因は、元々後置語順であり、中古に大量に新出した他の「何 X」疑問代詞目的語（「何物」「何許」など。12.2 参照）への類推であったと考える。そして「何等」「何所〈+場所〉」と「何所〈-場所〉」とで語順変化の有無が異なるのは、これらの疑問代詞目的語の第二形態素——「等」または「所」——の接尾辞化の程度が異なっていたことと関係すると解釈したい。すなわち、「何等」の「等」、「何所〈+場所〉」の「所」はいずれも実質語たる名詞に由来し、中古に至ってもその性質を一定程度、保存しており、完全に接尾辞化されたものではなかった¹⁹⁰。一方、「何所〈-場所〉」の「所」は、直接的に名詞に由来するものではなく、「所」構造¹⁹¹を構成する機能語「所」に由来するものであったために、「何所」が語彙化した上古後期の時点で、すでに典型的な接尾辞となっていたのである。目的語となった「何等」「何所〈+場所〉」は、語彙の意味・語構造、文法機能といった点において、他の「何 X」疑問代詞目的語との相似度が「何所〈-場所〉」よりも高かったために、他の「何 X」疑問代詞目的語への類推が働き易く、語順変化を生ずるに至った——本論文 12.2 で後述するように大多数の「何 X」疑問代詞目的語は、原則として発生時点ですでに後置語順をとっていた——と推定するのである。以上のような語順変化の過程は、疑問代詞目的語の共時面での機能差異が、通時面での変遷過程に反映されたものと解釈することができよう（【図表 12-2】を参照）。

¹⁹⁰ なお、「何所〈+場所〉」の「所」は「場所」の意味を保存しており、全く接尾辞化していないようであるが、太田(1988:16)が指摘するように、中古期には名詞に後接し、「～に対して」「～に」といった意味を表す用法をも獲得していたため（「～のところ」という典型的な場所の意味で用いられることもあるが）、一定程度は接尾辞化していたと考えられる。

・夫人於尊^所，不應生惡*意^{三本無}。（『雜寶藏經』4-498c）（太田(1988:16)所引の例）
〔そもそも人は両親に対しては、悪意を生じてはならない。〕

¹⁹¹ 本論文で言う「「所」構造」は、構造助詞「所」が動詞句・形容詞句に前接され、当該の動詞句・形容詞句が名詞句化された以下のような構造を指すこととする。これはおおよそ太田(1964:27-33・§ 62)の言う「「所」字連語」に相当する。

・君子無^所争^所。必也射乎。（『論語』「八佾」1-153）〔君子は争うものがない。あるとすればきっと射の礼だろう。〕

【図表 12-2】 目的語「何等」「何所〈+場所〉」「何所〈-場所〉」の語順の類型

疑問目的語の種類	何 X (〈何-X〉 (「何物」など))	何等	何所〈-場所〉
		何所〈+場所〉	
Xの接尾辞化の程度	低 ←……………→ 高		
語順の変遷	後置	前置→後置	前置
		前置(→後置)	

* 「何 X (〈何-X〉)」とは、「何-X」フレーズに由来する「何 X」疑問代詞を指す。

【図表 12-2】に示した状況が顕著に見出される例として、同一の文献言語において「何等」と「何所〈-場所〉」とが異なる語順をみせる用例をあげておく。用例(12-28)は『太子須大掣経』における状況を、用例(12-29)(12-30)は『賢愚経』における状況を示したものである。

(12-28) *王抱〔三本「王抱两兒」〕兩孫摩捫〔三本「摩捫」〕其身，問兩兒言：「汝父在山中，何所飲食，被服何等。」(『太子須大掣経』 3-423b)

[何所〈-場所〉：前置(動詞目的語)，何等：後置(動詞目的語)]

[王は孫二人を抱きよせ、彼らの身体を撫でると、二人にたずねて言った「お前たちの父親は山中にあって、どのようなものを飲み食いし、どのようなものを(衣服として)着ていたのか。」]

(12-29) 爾時帝釋還復本形，住在王前，語大王曰：「今作如是難及之行，欲求何等。今汝欲求轉輪聖王帝釋魔王。三界之中，欲求何等。」(『賢愚経』 4-352a)

[何等：後置(動詞目的語)，何等：後置(動詞目的語)]

[その時、帝釈は元来の姿に戻り、王の前に立つと彼に言った「(あなたは)今このような苦行を行い、何を求めているのか。あなたは今、轉輪聖王、帝釈、魔王(となること)を欲しているのか。三界の中で、どんなものを求めているのか。」]

(12-30) 時天帝釋來到王前，而問王言：「大王今者勇猛精進，不憚苦痛。為於法故，欲何所求。欲作帝釋轉輪王乎，為欲求作魔王梵。」(『賢愚経』 4-350c)

[何所〈-場所〉：前置(動詞目的語)]

[その時、帝釈天は王の前に来て、彼に問うて言った「大王は今、果敢に精進され、どんな苦痛をも怖れていない。仏法のためであろうが、何を求めているのか。帝釈、轉輪王となることを欲しているのか。それとも魔王、梵王となることを欲しているのか。』]

【図表 12-2】では、「何等」と「何所〈+場所〉」とが、いずれも前置から後置に転じた類型に分類されており、両者の語順変化の進行過程の差異については言及されていない。これは、両者の語順変化の順序の関係が複雑であり、容易には一般化し難いことによる。例えば、洛

陽地域以外で成立した多くの中古文献資料においては、「何等」は後置語順を、「何所〈+場所〉」は前置語順をとっている。しかし『仏説義足經』などの文献——この文献の基礎方言は三世紀の洛陽方言である可能性が高い——においては、これとは逆に「何等」は前置語順を、「何所〈+場所〉」は後置語順をとっている。以上の現象は、「何等」と「何所〈+場所〉」との語順変化の進行過程が、方言によって異なっていたことを意味するものである。

なお、【図表 12-2】に示した語順の類型によると、同一の疑問代詞目的語は、一つの共時態の中での語順が一つであるのが原則であるかのようである。しかし、実際には同一の疑問代詞目的語が、一つの資料のなかで前置の後置のいずれの語順をもとり得ることがある。例えば、以下の用例(12-31)では、同一の資料のなかで、「何所〈+場所〉」が目的語となった場合に、前置と後置のいずれの語順をも出現している。

(12-31) 各作是言：「汝諸聖子，今者捨我，欲何所去，…汝等今者捨背於我，欲詣何所，…汝速迴環，今何所詣，捨離我等。…」(『仏本行集經』3-882a) (太田 1988:99 所引の用例)

[何所〈+場所〉：前置(動詞目的語)，何所〈+場所〉：後置(動詞目的語)，何所〈+場所〉：前置(動詞目的語)]

[(羅刹女たちは商人たちがみな馬王と去ってしまったのを見て) それぞれこのように言った「聖者たちよ、いま私を捨てて、どこに行こうとしているのですか。…あなたたちは今、私を捨てて裏切り、どこまで行こうとしているのですか。…すぐにもどって来ててください。今どこまで行ってしまい、私たちを捨て去ったのでしょうか。…」]

このような現象が生じ得るのは、主に前置と後置とで意味的に大きな違いが生じないという統語的環境に限られる。用例(12-31)の場合、動詞が移動動詞であり、疑問代詞目的語「何所〈+場所〉」は動作の到着点を表すのであるから、意味的に主語と紛れることはない。上述のように目的語「何所〈+場所〉」の語順変化は、他の「何 X」疑問代詞目的語への類推によると考えられるのであるが、このような類推による語順変化は、必ずしも意味的に動機付けられていない点で、消極的な要因である——これに対して、本論文第九章で論じた禪母系疑問代詞目的語「誰」の語順変化を促した「統語的曖昧性の軽減」という要因は、意味的に動機付けられた積極的な要因である——と言えよう。このように「何所〈+場所〉」の語順変化が、意味的な要求に基づかない消極的な要因に促されたものであり、前置と後置が混在していても意味上の混乱をもたらすことがなかったために、一つの文献内部において前置と後置の二種の語順が並存することが許容されたのだと解釈しておきたい。

12.2 中古新出の「何 X」疑問代詞目的語：「何物」「何處」「何許」

12.2.1 語順概況

「何物」「何處」「何許」などの大多数の「何 X」疑問代詞は、中古以後に「何-X」疑問フレーズが一語化することにより生じたものである。本論文第十一章で論じたように、「何-X」疑問フレーズ目的語は中古期には原則的には後置語順をとっていたのであるから、「何 X」疑問代詞は、それが発生した時点で、目的語としての語順は後置だったと考えられる¹⁹²。

「何物」

- (12-32) 王問*憂_[三本、金剛寺本「優」]陀：「悉達在國，栴檀蘇合，以塗子身。今*者為道，為_[金剛寺本無]有_[何物]。」(『中本起經』4-154c)
〔王は憂陀にたずねた「悉達は国にいた時には、(芳香のする)栴檀・蘇合を彼の身に塗っていた。今、道を為すとき、(身につけている香には) どんなものがあるのか。〕
- (12-33) 王曰：「已受彼歸信重天地，何心違之乎。當以_[何物]令*汝_[三本、金剛寺本「爾」]置鴿歡喜去矣。」(『六度集經』(A部分)3-1c)
〔王は(鷹に)言った「(私は)すでにそれ(=鳩)の帰順を受け入れたのだ。(私の)信用は天地よりも重い。どうして彼(の気持ち)に背くことなどできようか。どんなものをもってすれば、お前に鳩を捨てさせ、喜んで飛び去らせることができようか。〕
- (12-34) 王聞其語，信以為然，益增憂惱，即問之言：「若禳厭時，當須_[何物]。」(『雜寶藏經』4-490b)
〔王は彼らの話(=バラモンたちの話)を聞くと、本当にそうである(=王の見た夢が不吉であり、このままでは災いがもたらされる)と思ひこみ、益々悩みを深め、彼ら(=バラモンたち)にたずねて言った「(災いを)払い除く場合、何が必要なのだろうか。〕
- (12-35) 王問夫人言：「為_[生]何物。」答言：「純生麵段。」(『雜寶藏經』4-452a)
〔王は夫人(=鹿女)にたずねた「(卵から) 何が生まれたのか。」夫人は答えて言った「全部が麦粉の塊でした。〕

¹⁹²ただし、次のようなに中古初期に前置語順をとる例外も絶無ではない。この少数の例外をどのように解釈するかについては保留しておきたい。

・王問*憂_[三本、金剛寺本「優」]陀：「悉達在家，吾為作床，精寶四種。於今*所坐_[三本、金剛寺本「坐床」]，_[何物]用作。」(『中本起經』4-154c)

〔王は憂陀にたずねた「悉達が家にいたときには、私が(彼のために)美しい四種の宝石(で装飾された)腰掛けを用意した。今、腰掛けるものは、どんな物によって作られているのか。〕

「何處」

(12-36) 于時迦葉忽見如來，心大驚喜，即問佛言：「汝近七日遊行何處而不相見。」(『過去現在因果經』 4-649a)

[その時、迦葉は如来が来るのをみると、大いに驚き喜んで、仏 (=如来) にたずねて言った「お前はこの七日間どこに行っていて、(私に) 会いに来なかったのか。」]

(12-37) 彼二比丘，而問之言：「汝識尊者祇夜多不。」答言：「我識。」彼比丘言：「今在何處。」(『雜寶藏經』 4-483c)

[その二人の比丘は、彼 (出会った比丘) に問うて言った「あなたは尊者・祇夜多をご存知か。」(彼は) 答えて言った。「存じております。」その比丘が言った「今、どこにおられるのか。」]

(12-38) 生天之法法，有三念。一者念本所從來。二者念定生何處。三者念先作何業，得來生天。(『雜寶藏經』 4-488c) ¹⁹³

[天界に生まれた種々の因について、三つの念が生じた。一つには、元々どこから来たのかという念であり、二つには、結局、どのようなところで生まれたのかという念であり、三つには、以前、どのような行いをして天界に生まれることができたのかという念である。] ¹⁹⁴

(12-39) 便問夫言：「日日恒向何處來還。」夫答婦言：「佛邊去來。」(『雜寶藏經』 4-473c)

[(妻は) そこで夫にたずねた「毎日、いつもどこに行って来ているのですか。」夫は妻に答えて言った「仏のところまで行っているのだ。」]

(12-40) 初生天時，具作三念。…二者自念，從何處終而來生天。知從人道中生於天上。(『雜寶藏經』 4-475b)

[(その下女は) 天界に生まれて間もなく、三つの念が生じた。…第二には、(私は)

¹⁹³ 『雜寶藏經』における動詞「生」は、場所目的語を直接とることができると考えられる。

・天白佛言：「我於今日得生天宮，五欲自娛。所須之物，應念輒至。真實快樂，無諸憂惱。

…」(『雜寶藏經』 4-466b)

[天神は仏に言上した「私は今、天宮に生まれることができ、五欲はいずれも満たされ、必要なものは念ずればすぐに手に入ります。本当に楽しく、あらゆる憂いがありません。…]

ただし、下例のような「生+於+場所目的語」という統語形式もみとめられる。そして「生+場所目的語」と「生+於+場所目的語」のいずれかが、文章における四字・六字句の区切りに合わせるために修辭的に用いられたにすぎないという可能性も捨てきれない。すなわちいずれかが純粹に書面語レベルの言語成分である可能性も排除できないであろう。本論文ではこの両者の嚴密な生起条件の問題については保留しておきたい。

・比丘問佛：「以何因緣生於天宮。」(『雜寶藏經』 4-472c)

[比丘たちは仏にたずねた「(その天女は) どのような因緣によって天宮に生まれたのでしょうか。」]

¹⁹⁴ 用例(12-38)の「生天之法法有三念」の箇所は、統語構造の解釈・意味解釈が難しい。ここではかりに辛嶋(1998:120)が『正法華經』における「法法」を“Dharma and Dharma, all the Dharma”と意味解釈することを踏まえ、「生天之法法」を「有三念」に対する主題とみなし、また「法」を「因」と意味解釈したうえで、文脈を考慮した意味解釈を示しておいた。

どこ(の世界)から(命が)尽きて天界に来て生まれたのだろうか、という念である。(すると)人界から天上に生まれたことが分かった。]

「何許」

(12-41) 便*答[三本「告」]之曰:「吾是子親摩因提也。」問曰:「卿生何許。奚為此問。」
〔『中本起經』4-156b〕

〔(空中の声が須達に)答えて言った「私はそなたの親族、摩因提である。」(須達は)たずねて言った「あなたは何処で生まれたのですか。どうして此処にいるのですか。〕

(12-42) 其夫答言:「我所得財,今已舉著堅牢藏中。」婦時問言:「堅牢之藏,今在何許。」
夫言:「乃在僧中。」〔『雜寶藏經』4-468a〕

〔夫は答えて言った「私が手に入れた財宝(=金)は、すでに堅牢な蔵の中に置いてしまったのだ。」(妻は)たずねて言った「堅牢な蔵というのは、今どこにあるのですか。」夫は言った「僧たち(の教団)の中にある。〕

(12-43) 爾時太子而答之言:「…此諸王等今在何許。以愛欲故,或在地獄,或在餓鬼,或在畜生,或在人天。…」〔『過去現在因果經』4-631b〕

〔その時、太子は彼(=優陀夷)に答えて言った「…それらの王(=古の王たち)は今、どこにいるだろうか。愛欲のために、ある者は(五道のうちの)地獄に、ある者は餓鬼に、ある者は畜生に、ある者は人・天にいる。…〕

ただし「何處」は特殊であり、主に移動を含む行為の起点・終点を表す場合に、前置語順がみとめられる(用例(12-44)(12-45))¹⁹⁵。近古資料にも移動を含む行為の起点・終点を表す「何處」が前置された用例がみとめられる(用例(12-46)(12-47))。

(12-44) 問諸比丘言:「諸大德,欲何處去,不說戒耶。」〔『四分律』22-819a〕(魏培泉(2004:237)所引の用例)

〔(眠っていて説戒を行わなかった比丘が)他の比丘たちにたずねて言った「大徳たちよ、どこに行こうとしているのか。説戒(=戒を読み上げ違反がないか確認すること)を行わないのか。〕

¹⁹⁵ 以下のような行為の場所を表す「何處」が動詞に前置された用例もみられるが、「安居」は原則として場所目的語をとらない動詞であるために、この「何處」は連用修飾語とみなすべきである。

・王問迦梅延言:「尊者此夏何處安居,今方來耶。」尊者具說以外生女賣髮買錢,供養眾僧。
〔『雜寶藏經』4-490a〕

〔王は迦梅延にたずねて言った「尊者はこの夏どこで安居され、いまになって(こちらに)来られたのか。」尊者はめいが髪を売って金に換え、僧侶たちに(飲食などを)供えていたことをつぶさに述べた。〕

- (12-45) 帝釋及三十三天聞佛教已，即至佛所，頂禮佛足，在一面立。白佛言：「世尊，當何處坐。」佛言：「坐此座上。」(『雜寶藏經』 4-476c)

[帝釋と三十三天は仏の言葉を聞き終わると、すぐに仏のところにやって来た。仏足に(跪いて)頂礼し、傍らに立ち、仏に言上した「世尊、(我々は) どこにすわるべきでしょうか。」仏は言った「この座にすわりなさい。】

- (12-46) 余問五嫂曰：「十娘何處去，應有別人邀。」五嫂曰：「女人羞自嫁，方便待渠招。」(『遊仙窟』 60-462~463)

[私は五嫂にたずねた「十娘はどこへ行かれたのでしょうか。他の誰かが引き留めているのでしょうか。」五嫂は言った「女の人は自分からおしかけるのを恥かしがるものです。わざとあなたに招かれるのを待っていらっしゃるのです。】

- (12-47) 不知弟今何處去，遣吾獨自受恓惶。(『伍子胥變文』 5)

[今、弟はどこへ行ったのか分からない。私は一人残され、悲しみにくれる。]

これらは、前置されていた「何所」などへの類推によって生じたものである可能性も皆無ではないが、本論文は、これらの前置語順は、後置語順から動詞ないし介詞の脱落によって生じた「見かけ上の目的語前置」であると考え。この点については、すでに魏培泉(2004:237)が、用例(12-44)をあげつつ、これは「[[往(至)v+何處 o]+去 v]」から動詞「往(至)」が省略されたものだと指摘しており、本論文もこのような「省略」という考えに賛成するものである。用例(12-45)についても、「於何處坐」などから介詞「於」が省略された可能性が想定できよう。すなわち、これらは上古の前置語順を保つ「何所」などへの類推から生じたものではなく、後置語順をとっていた状態から、動詞ないし介詞の省略によって生じたのである。本論文がこの考えをとる積極的な根拠は、「何處」の前置例は動詞の(見かけ上の)目的語となった例に限られ、介詞目的語となったものが見出し難いからである（「介詞+目的語」構造の「從何處」はあるが、「*何處從」は見出しがたい）。かりに「何所」など前置を保つ疑問代詞目的語に類推したのであれば、介詞目的語の前置例もみられてしかるべきである（「何所從」は多くみられる）。

よって中古以降にみられる、動詞に前置された「何處」は、それを本来支配していた動詞ないし介詞の省略を経て、後続する動詞句の連用修飾語に再分析されたものであると考える。

12.2.2 語順維持のメカニズム

上述のように、中古新出の「何 X」疑問代詞目的語は、中古期においてそれが出現した時点で、すでに後置語順をとっていたのである。とは言え、中古期においても、「何」などの非禪母系単音節疑問代詞目的語は前置語順を維持していたのであり、それらへの類推が働いて前置に転ずることがなかった原因については確認しておく必要がある。

この点については、「何 X」疑問代詞目的語は、内部構造・意味・文法機能のいずれの面

においても、前置の「何」など非禅母系単音節疑問代詞目的語との類似性が低く、後置の「何-X」疑問フレーズ目的語との類似性が高かったため（【図表 12-3】参照）、「何-X」疑問フレーズ目的語への類推の方がより強く働いた結果、元来の後置語順を保ち得たのだと考える。

【図表 12-3】各疑問代詞の類似性

	非禅母系単音節疑問代詞	「何 X」 (<「何-X」) 疑問代詞	「何-X」疑問フレーズ
例	何	何物	何罪
目的語としての原則的語順	前置	後置	後置
内部構造	(一形態素)	修飾結構 (語構成レベル)	修飾結構 (統語レベル)
指示可能な対象	あらゆる事物	X (=「物」と関係する事物)	X (=「罪」と関係する事物)
他動詞文の主語を担い得るか	不可	可	可

* 「何 X」疑問代詞 (<「何-X」)とは、「何-X」疑問フレーズに由来する「何 X」疑問代詞を指す。

* 単音節疑問代詞「何」は原則として二/三項他動詞の主語を担い得ないが、以下のような文(節)末に「者」を伴う構文においては主語となり得る。但しこの「何」は統語上は主語とみなし得るものの、意味上は論理目的語である。

・胡亥曰：「固也。吾聞之，明君知臣，明父知子。父捐命，不封諸子，何可言者。」(『史記』(秦漢部分) 2548)
 [胡亥は言った「(始皇帝が遺言で長男以外の子を王に封じていないのは) 当然である。私はこのように聞いている。明君は臣下を知り、明父は子を知る、と。父が命をなくそうとしている時に、子供たちを王に封じなかったとしても、どんな言うべきことがあるか。」]

第十三章 結論

13.1 語順変化の内実

本論文では第九章から第十二章にかけて、各疑問目的語の語順概況および語順変化メカニズムについて、順次、検討してきた。その結果を整理すると、古漢語における疑問目的語の語順変化の過程は、実際には以下の三種類の変化が複合的に関連しつつ進行したものと考えることができる。

(i) 同一の疑問目的語の前置から後置への変化：質的变化

この類の変化を生じたものに「誰」・「何-X」疑問フレーズ・「何等」・「何所〈+場所〉」・介詞目的語「何」がある。

(ii) 後置語順をとる疑問目的語の増加：量的変化

この類の変化を生じたものに中古新出の「何X」疑問代詞（「何物」「何處」「何許」など。上古既出のものは除く）、近古の「甚」がある。

(iii) 前置語順をとる疑問目的語およびそれを含む構文の減少：量的変化

この類の変化を生じたものに非禪母系単音節疑問代詞「何」（動詞目的語）・「焉」・「奚」・「何/-X o +之+V」構文がある。

よって同一の疑問目的語が前置から後置へ転ずるという狭義の語順変化——これを「質的变化」と呼んでおく——を起こしたのは、上述の(i)類だけなのである。以下、それぞれの類の語順変化をもたらした要因を整理した上で（本章 13.2）、これらの変化が何故に主に上中古間に生じたのかを論じていく（本章 13.3）。

13.2 語順変化の要因

まず、前章までに述べた語順変化の要因について、ここで質的变化（上記(i)）と量的変化（=上記(ii)(iii)）とに分けた上で、疑問目的語ごとに簡潔にまとめる。

13.2.1 質的变化をもたらした要因

13.2.1.1 「誰」の語順変化

禪母系疑問代詞「誰」は、上古中期では主に目的語として生起し、主語として生起するには種々の制限があった。これは上古中期漢語の統語規則に従って目的語「誰」が文法関係を結ぶ二／三項他動詞に前置された場合、その「誰+V2/3」という統語形式に重大な統語的曖昧性が内在することになる——「誰」が主語であるのか目的語であるのかという曖昧性が生

ずることになる——ために、「誰」が主語として生起することが極力回避されたからである。上古中期において主語位置に生起した禪母系疑問代詞は主に「孰」であり、このような二／三項他動詞の前の統語的位置における「孰」「誰」の交替が、実質的にある種の格標示機能——「孰」による主語標示、「誰」による目的語標示——を果たすことにより、「誰+V2/3」構造に内在する統語的曖昧性が軽減され、目的語「誰」の前置が実現されていた。

これが上古後期に至ると、「誰」が主語となり得る条件が拡大し、「孰」「誰」の交替による格標示機能が弱化し始めた。その結果、「誰」が複雑な統語構造を有する文の目的語（兼語動詞の目的語・三項動詞目的語・介詞目的語）を担った場合には、これが後置に転ずることにより、語順によって主語と目的語を標示するようになった。ここに一部分ではあるが、目的語「誰」の語順変化が実現することとなった。しかしながら、「誰」が目的語として生起した文のうち、述語動詞句が二項他動詞であるものなど項構造が比較的単純なものについては、目的語「誰」は依然として前置語順を維持していた。なぜなら、「誰」が主語となった場合にのみ、「誰 s+V(+O)+者」という文末に「者」が生起する構文が出現し、動詞に前置された「誰」が主語であることを標示するという「者」の有無による間接的な主語・目的語表示がなされるようになり、統語的曖昧性が一定程度は軽減されていたからである。

ところが中古期に至ると、上述の「誰 s+V(+O)+者」構造も衰退の途を辿ったため、「誰」が目的語である場合に、これを後置することによって統語関係を標示する方法が普遍的に用いられるようになり、結果として目的語「誰」の語順変化が大凡、完成することとなった（以上は本論文第九章の内容に基づく）。

なお、この「誰」の語順変化の実現は、上古中期では厳格な統語規則であった疑問目的語の前置規則に例外が許容されるようになったことをも意味する。このことにより、他の疑問目的語についても、個別的な要因があれば、後置の語順をとることを許容する言語的背景が形成されたと考えられる（以上、本論文第九章の内容に基づく）。

13.2.1.2 「何-X」疑問フレーズの語順変化

上古中期においては、「何/-X」疑問フレーズが目的語となった場合、原則として動詞或いは介詞に前置されたが、この「何/-X」疑問フレーズが前置された「何/-X o +之+V」（或いは「何/-X o +P」）という統語形式は、〈事物の種類・性質〉に疑問の焦点があり、反語・感嘆などの修辞疑問を表す場合に生起する傾向があった。純粹疑問を表す場合は、単音節疑問代詞「何/」が目的語となった「何/o+V」という統語形式や述語動詞が省略された「何/-Xo+ \emptyset v」という統語形式が生起するのが一般的であった。

上古後期に至ると、「何/-X o +之+V」の機能面での有標性が一層進展し、専ら修辞疑問のみを表す明確な有標構文となった。これにより、純粹疑問を表す場合、「何/-X o +之+V」ではなく、単音節の「何/o+V」が生起するようになった（ただし述語動詞が省略可能な文脈では「何-Xo+ \emptyset v」が生起した）。その一方、この変化とは別に、古漢語語彙が複音節化する趨勢を背景に、〈事物の種類・性質〉を問う文脈では、複音節の疑問目的語「何

-Xo」の生起が促されるようになった。ところが前述のように、「何/-Xo」を動詞に前置した「何/-X o +之+V」という統語形式は、純粹疑問を表現することができなくなってしまっていた——この構文が修辭疑問専用の構文となっていた——ため、述語動詞が省略され難い文脈では、複音節目的語「何-Xo」を動詞に後置した形式が選択されることになり、前置から後置へという語順変化が引き起こされるに至った。以上を要すれば、「何-X」疑問フレーズ目的語の語順変化には、「何/-Xo +之+V」が修辭疑問のみを表す構文へと変化するという「統語形式の構文化による機能の限定」、さらに純粹疑問を表す「何/」の一部が「何-X」に取り替えられるという「単音節疑問目的語の複音節化」という二種の変化を言語的背景としつつ、純粹疑問と修辭疑問との「意味的曖昧性を回避しようとする欲求」により、実際の語順変化が引き起こされたということになる。

中古期になると、介詞目的語「何-X」にも後置語順が出現しはじめた。中古期の段階では、上述の動詞目的語「何-X」を後置した統語形式がすでに大量に出現していたため、この動詞目的語「何-X」への類推が働いたことによると考えられる（以上、本論文第十章の内容に基づく）。

13.2.1.3 「何等」及び「何所〈+場所〉」の語順変化

「何 X」疑問目的語のうち「何等」および「何所〈+場所〉」は、それぞれ「何-等」「何-所」という修飾構造フレーズに由来する。いずれも上古期に出現したものであり、上古後期の段階においてすでに固定化を経て一語となっていた。そのため、上古期に存在していた大多数の疑問目的語と同様に、前置規則に支配され、動詞或いは介詞に前置されることとなった。ところが中古期に至ると、動詞或いは介詞に後置される「何 X」疑問代詞目的語が大量に出現し（本章 13.2.2 参照）、後置語順が勢力を持ち始めた。こうした状況を背景として、目的語となった「何等」および「何所〈+場所〉」は、後置語順の「何 X」疑問代詞目的語への強い類推が生じ、後置語順へと転じていったのである。この類推は、「何等」の「等」・「何所〈+場所〉」の「所」がいずれも実質語たる名詞に由来し、中古に至ってもその性質を一定程度、保存していたため、語彙の意味・内部構造・文法機能といった点において他の「何 X」疑問代詞目的語との相似度が高かったことを条件として生じたものと考えられる（以上、本論文第十一章に基づく）。

13.2.1.4 介詞目的語「何」の語順変化

「何」は上古期では動詞目的語・介詞目的語とを問わず前置語順をとっていた。このうち「何」が介詞目的語となった「何 o+P」疑問フレーズは、中古期に至る間に、固定化の過程を経て一語化し、元来その構造が有していた意味（例えば「何從」であれば〈起点・経由点〉を問う意味）の他に、抽象的な派生的意味（「何從」であれば〈理由〉を問うという抽象的意味）をも獲得した。その結果、元来「何 o+P」が有していたところの当該の介詞と疑問目的語とが統語関係を結ぶことで直接得られる意味を表す場合には（「何從」であれば

〈起点・経由点〉を問う場合)、疑問代詞目的語「何」を後置に転ずることにより、「何」を前置した「何 o+P」との形式上の区別をつけ、当該の介詞句がどの意味を表しているのかを明示するようになった。よって、介詞目的語「何」の語順変化を促した直接的な要因は「意味的な曖昧性を回避しようとする欲求」であったと推定する。近古前期に至ると、後置の「P+何 o」における介詞が新たな語彙に交替する変化をも生じて、意味的曖昧性の回避が一層強化されることとなった（以上、本論文第十章 10.3、10.4 の内容に基づく）。

13.2.1.5 疑問目的語の語順の質的变化をもたらした要因一覧

以上のことは、【図表 13-1】のように整理できる。

【図表 13-1】疑問目的語の質的語順変化を促した背景と直接の要因

疑問目的語	語順変化の背景	語順変化を引き起こした直接の要因
「誰」	(1) 「孰」と「誰」の交替による格標示体系の崩壊 (2) 「誰 s+V(+O)+者」構造の衰退 (3) 「誰+V2/3」の統語的曖昧性の増加	統語的曖昧性（「誰+V2/3」の「誰」が主語か目的語かという統語的曖昧性）を回避しようとする欲求
「何-X」 疑問フレーズ (動詞目的語)	(1) 前置規則に従わない疑問目的語「誰」の存在 (2) 単音節疑問代詞の複音節化の趨勢の拡大（純粹疑問を表す「何/」の一部が「何-X」に取り替わる） (3) 「何-Xo+之+V」の修辞疑問専用の有標構文への変化	純粹疑問と修辞疑問との意味的曖昧性を回避しようとする欲求
「何-X」 疑問フレーズ (介詞目的語)	(1) 前置規則に従わない疑問目的語「誰」の存在 (2) 前置規則に従わない動詞目的語「何-X」疑問フレーズの存在	類推（動詞目的語となった「何-X」疑問フレーズ目的語への類推）
「何」 (介詞目的語)	(1) 前置規則に従わない疑問目的語「誰」の存在 (2) 「何 o+P」フレーズの抽象的意味の獲得	意味的曖昧性（「何 o+P」が元来備えていた具体的意味と、一語化の後に獲得した抽象的意味との曖昧性）を回避しようとする欲求
「何等」 「何所〈+場所〉」	(1) 前置規則に従わない疑問目的語「誰」の存在	類推（後置語順の「何 X」疑問代詞目的語への類推）

	(2) 前置規則に従わない「何 X」疑問代詞目的語の存在	
--	------------------------------	--

13.2.2 量的変化をもたらした要因

13.1 で述べた量的変化 ((ii)(iii)) の要因について整理しておく。この量的変化を促した要因とは、後置疑問目的語の出現頻度を増加せしめ、前置目的語の出現頻度を低下せしめた要因に他ならない。

まず「(ii) 後置語順をとる疑問目的語の増加」のうちの、中古新出の「何 X」疑問代詞目的語の出現頻度の急増は、上中古間に発生した古漢語語彙体系の複音節化の趨勢がもたらしたものと言ってよい。なお、ここで確認しておくべきは、中古新出の「何 X」疑問代詞目的語は、後置語順へと転じた後の「何-X」疑問フレーズ目的語が一語化により生成されたものであるため、元来の語順が後置であったことである。

次に、「(iii)前置語順をとる疑問目的語およびそれを含む構文の減少」についても、衰退した前置の疑問目的語はいずれも単音節であり、やはり複音節化の趨勢の反映とみなされる。また、「/何/-X o +之+V」構文の衰退も複音節化との関係を見出し得る。すなわち上古後期の「/何/-X o +之+V」構文は、「X」の音節数の長さに一定の制限が存在していたのであるが、中古以降は複音節化の趨勢の影響により、より多音節の X 部分を表現することを求められるという文法上の欲求が生じ、「何 ad+V+Xo」という、より多音節の X 部分を許容し得る形式に取り換えられていったと考えられるからである。

13.3 語順変化が上中古間に発生した理由

前節までの内容を踏まえると、何故に疑問代詞目的語の語順変化が主として上中古間に生じたのかという問題についても、解答を与えることができよう。すなわち、疑問目的語の質的な語順変化を促した言語的背景（【図表 13-1】「語順変化の背景」）の多くが、syntagmatic な側面における複音節化の趨勢、或いは paradigmatic な側面における複雑な代詞体系の崩壊という上中古間に生じた二種の言語変化（本論文第一章を参照）によって、直接的あるいは間接的にもたらされたものであったからである。そして量的変化を促した要因も、やはりこれら二種の変化によってもたらされたものであった。 疑問目的語語順の質的变化を引き起こした直接的な要因自体は（【図表 13-1】「語順変化を引き起こした直接の要因」）、「統語的曖昧性を回避しようとする欲求」「意味的曖昧性を回避しようとする欲求」或いは「類推」であり、これらは時期に拘わらず、言語体系の中に恒に潜在しているものである。

さて、上述の複音節化の趨勢と複雑な代詞体系の崩壊という二種の言語変化を、より大きな視点でとらえるならば、第一章で言及したところの「上古後期以降、総合的な表現から分析的な表現へという方向で発展した」という漢語の体系的な変化が具現化された現象とみなし得よう。上古の単音節疑問代詞から構成される複雑な疑問代詞体系の崩壊の後、新たに

興隆したのは「何 X」という分析的な複音節疑問代詞だったからである。

本章を終えるにあたり、一点補足しておきたい。それは、本論文では疑問代詞の複音節化の趨勢が疑問目的語の語順変化をもたらした要因の一つであると主張したが、この複音節化という現象は疑問代詞それ自身の文法機能にも影響を与えたということである。上古漢語の疑問代詞は、その統語分布が実質語たる名詞のそれと大きく異なっており、統語機能の点では機能語としての性質が顕著であった。ところが、中古以降に出現した多くの「何 X」疑問代詞は、その統語機能は名詞のそれに近くなっている。その原因は、「何 X」疑問代詞の多くが「何-N」疑問フレーズに由来するからであり、この「何-N」疑問フレーズの内部構造は、名詞性形態素を **head** とする修飾構造であった。よって多くの「何 X」疑問代詞が、いわば名詞をその内部にとり込むことによって、名詞と近い統語機能を有することになったのである。

第十四章 附録：主要資料における疑問代詞体系と

疑問目的語一覧

本章は、本論文で選定した主要資料における疑問目的語の語順についての悉皆調査の結果を示したものである。具体的には、『書経』（西周部分）、『詩経』（西周部分）（以上、上古初期資料）、『論語』『孟子』『戦国縦横家書』（以上、上古中期資料）、『史記』（秦漢部分）（以上、上古後期資料）、『中本起経』、『六度集経』（A部分）、『雑宝蔵経』、『過去現在因果経』（以上、中古資料）、『遊仙窟』、『伍子胥変文』、『舜子変』、『降魔変文』（以上、近古前期資料）の各言語資料について、まず当該の資料にみられる疑問代詞の統語的文法分布を表形式で示した後、疑問目的語の一覧を提示し、前置・後置の語順の具体例を挙げていく。

14.1 上古初期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順状況

14.1.1 『書経』（西周部分）における状況

14.1.1.1 『書経』（西周部分）の疑問代詞体系

【図表 14-1】『書経』（西周以前部分）の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	6	0	2	0	0	「/如(X)何/」構文 1
曷(割/害)	0	1	0	17	0	0	0
台	0	0	0	0	0	0	「/如(X)台/」構文 1

* 「曷(*gât)」には「割(*kât)」(連用修飾語 1 例)・「害(*gâts)」(連用修飾語 1 例)が含まれる。後二者は、「曷」の仮借とみなしておく。

・王若曰：「…爾庶邦君越庶士、御事罔不反曰『…王^害不違ト。』…」(「周書」「大誥」235)

[成王はどのように言った「…しかしお前たち諸国の君主・諸々の官吏らは(私に答えて)『…王はどうしてト兆に背かれぬのか。』と言上してくる。…」]

・公曰：「君奭！在昔上帝^割申勸寧王之德、其集大命于厥躬。…」(「周書」「君奭」351)

[周公は言った「君奭よ、昔、上帝はどうして文王の美德を何度も褒め励まし、天命をその身に降したのであろうか。」]

* 「/如(X)何/」構文、次の「奈何」(連用修飾語 1 例)の例である。

・嗚呼、曷其^{奈何}弗敬。(「周書」「召誥」288)

〔(太保の周公に対する発言) ああ、どうして慎まずにいられましょうか。〕

*「/如(X)台/」構文は、「如台」(述語1例)の例である(「台(*lə)」は「何(*gâi)」とは異なる疑問代詞とみなしておく)。

・卜稽曰其如台。(「商書」「盤庚上」142)

〔(盤庚の遷都を喜ばない人々への発言) もし互いに助け合って生きていけなければ、占卜の結果を検討したとして、いったいどうなるというのか。〕

14.1.1.2 『書経』(西周部分)の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-2】に、『書経』(西周部分)にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(x)何/」構文および「/如(X)台/」構文における「何」「台」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-2】『書経』(西周部分)の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	6	0	0	0
曷(割/害)	1	0	0	0

以下は、上表に示した『書経』(西周部分)の疑問代詞目的語の具体例である。

「何」(動詞目的語：前置甲類：6例) 王曰：「嗟。四方司政典獄，非爾惟作天牧。今爾何監，非時伯夷播刑之迪。其今爾何懲。惟時苗民匪察于獄之麗。…」(周書・呂刑 423) / 王曰：「嗟。四方司政典獄，非爾惟作天牧。今爾何監。非時伯夷播刑之迪。其今爾何懲，惟時苗民匪察于獄之麗。…」(周書・呂刑 423) / 王曰：「吁，來，有邦有土。告爾祥刑。在今爾安百姓。何擇非人。何敬非刑。何度非及。…」(周書・呂刑 427) / 王曰：「吁，來，有邦有土。告爾祥刑。在今爾安百姓。何擇非人。何敬非刑。何度非及。…」(周書・呂刑 427) / 王曰：「吁，來，有邦有土。告爾祥刑。在今爾安百姓。何擇非人。何敬非刑。何度非及。…」(周書・呂刑 427) / 王曰：「嗚呼，嗣孫。今往何監，非德。于民之中。尚明聽之哉。…」(周書・呂刑 436)

「曷」(動詞目的語：前置甲類：1例) 王其效邦君越御事：「厥命曷以，引養引恬，自古王若茲監，罔攸辟。」(周書・梓材 279)

14.1.1.3 『書経』(西周部分)の疑問フレーズ目的語一覧

本論文で扱った『書経』(西周部分)には、疑問フレーズ目的語は存在しない。

14.1.2 『詩経』（西周部分）における状況

14.1.2.1 『詩経』（西周部分）の疑問代詞体系

【図表 14-3】『詩経』（西周部分）の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	20	6	5	14	2	「/如(X)何/」構文 11
胡	0	1	2	19	0	0	
安	0	1	0	0	0	0	
遐	0	0	0	3	0	0	
曷	0	0	0	6	0	0	
爰	0	0	0	2	0	0	
盍（蓋）	0	0	0	4	0	0	
誰	14	2	0	0	1	0	
胡然	0	0	0	1	0	0	
伊何	0	1	0	0	0	2	
云何	0	0	0	3	0	0	

* 「/如(X)何/」構文は、述語（10例）或いは連用修飾語（1例）となる。

・ 厥初生民，時維姜嫄。生民^{如何}。克禋克祀，以弗無子。（「大雅」「生民」2-875~876）

〔はじめに（周の）民を生んだのは姜嫄であった。民を生んだのはどのようなであったのか。心を込めて（天を）をまつり祭祀をとり行い、子をあらしめたのである。〕

* 「遐」（*grā：魚部）は「胡」（*gâ：魚部）の仮借の可能性が高い。いずれも「遐不+動詞」の形で用いられ、理由を反語的に問う。

・ 心乎愛矣，^遐不謂矣。中心藏之，何日忘之。（「小雅」「隰桑」2-810）

〔ここから愛してしまったからには、どうして言わずにおれましょう。心奥深くに彼をかくしても、いつになったら忘れられというのでしょうか〕

* 「云何」の例は以下のようなものである（連用修飾語の用例）。

・ 隰桑有阿，其葉有沃。既見君子，^{云何}不樂。（「小雅」「隰桑」2-809）

〔湿地の桑は柔らかで美しく、その葉はつややかなさま。あなたに会うことができたからには、どうしてうれしくないことなどありませんか。〕

* 「盍（蓋）」は「何不」に相当し、「どうして～しないことがあろうか」と反語的に用いられる。

・ 我任我輦，我車我牛。我行既集，^盍云歸哉。（「小雅」「黍苗」2-806）

〔我々は荷を背負い、車を牽き、（荷を）車で運び、牛で運んだ。この行役がなし遂げられたからには、どうして帰るなどと言うだろうか。〕

14.1.2.2 『詩経』（西周部分）の疑問代詞目的語一覽

【図表 14-4】に、『詩経』（西周部分）にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」構文における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-4】『詩経』（西周部分）の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	8	3	0(12)	0(3)
胡	0	2	0	0(1)
安	1	0	0	0
誰	2	0	0	0
伊何	0	0	0(1)	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である（外数として扱う）。

* 「何」には以下のような「維何」の形式をとったものが 11 例みられる。この「維」は准繫辞とみなすため、通時的意味のある後置例とはしない。

・之子於釣，言綸之繩。其釣維何，維魴及鱖。。（「小雅」「採芣」2-805）

〔あなたが釣りをするのなら、私はあなたのために釣り糸をよりあわせましょう。釣れたのは何。（釣れたのは）魴と鱖。〕

* 「爰」に以下のような用例があり、意味役割からすれば動詞目的語と解釈できそうである。しかし動詞「歸」が到着点を表す場所名詞（国名など）をその後ろに伴う場合、しばしば当該の場所名詞との間に「于」が挿入されるため、統語的にはその場所名詞は目的語ではなく補語だと分析される。このことを踏まえると、下例の「爰」は前置目的語ではない可能性が高い（かりに連用修飾語とみなしておく）。

・秋日淒淒，百卉具腓。亂離瘼矣，爰其適歸。（「小雅」「四月」2-735）

〔秋の日は寒々として、草木はみな枯れしぼむ。（国は）乱れて（人々は）離散し、苦しみにさいなまれた。私はいったいどこに身を寄せればよいだろうか〕

以下は、上表に示した『詩経』（西周部分）の疑問代詞目的語の具体例である。

「何」（「可」）（動詞目的語：前置甲類：8 例）國步滅資，天不我將。靡所止疑，雲徂何往。（大雅・桑柔 2-943） / 維莫之春，亦又何求。如何新畚。（周頌・臣工 2-1019） / 民莫不穀，我獨於罹。何辜於天。我罪伊何。（小雅・小弁 2-698） / 鮮民之生，不如死之久矣。無父何怙，無母何恃。（小雅・蓼莪 2-724） / 鮮民之生，不如死之久矣。無父何怙，無母何恃。（小雅・蓼莪 2-724） / 楚楚者茨，言抽其棘，自昔何為，我蔕黍稷。（小雅・楚茨 2-750） / 君子

來朝，何錫予之。(小雅・採菽 2-790) / 路車乘馬。又何予之。(小雅・採菽 2-790)

(動詞目的語：後置乙類：12例) 節彼南山，有實其猗。赫赫師尹，不平謂何。(小雅・節(南山) 2-659) / 彼爾維何，維常之華。(小雅・採薇 2-582) / 吉夢維何。維熊維羆，維虺維蛇。(小雅・斯干 2-651) / 有頍者弁，實維何期。(小雅・頍弁 2-777) / 其釣維何，維魴及鯿。(小雅・采綠 2-805 / 其告維何。(既醉 2-889) / 其類維何。(既醉 2-890) / 其胤維何。(既醉 2-891) / 其僕維何。(既醉 2-891) / 其穀維何 (韓奕 2-977) / 其蔌維何 (韓奕 2-977) / 其贈維何 (韓奕 2-977)

(介詞目的語：前置甲類：3例) 何以舟之。維玉及瑤，鞞琫容刀。(大雅・公劉 2-899) / 天何以刺，何神不富。(大雅・瞻印 2-993) / 糾糾葛屨，可以履霜。(小雅・大東 2-728)

(介詞目的語：後置乙類：3例) 民之無辜，并其臣僕。哀我人斯，于何從祿。(小雅・正月 2-666) / 彼月而食，則維其常。此日而食，于何不減。(小雅・十月之交 2-675) / 彼人之心，于何其臻。(小雅・菀柳 2-801)

「誰」(動詞目的語：前置甲類：2例) 既克有定，靡人弗勝。有皇上帝，伊誰云懣。(小雅・正月 2-667) / 伊誰云從，維暴之云。(小雅・何人斯 2-710)

「胡」(介詞目的語：前置甲類：2例) 維號斯言，有倫有脊。哀今之人，胡為虺蜴。(小雅・正月 2-668) / 抑此皇父，豈曰不時。胡為我作，不即我謀。(小雅・十月之交 2-679)

(介詞目的語：後置乙類：1例) 我視謀猶，伊于胡底。(小雅・小旻 2-688)

「安」(動詞目的語：前置甲類：1例) 天之生我，我辰安在。(小雅・小弁 2-700)

「伊何」(動詞目的語：後置乙類：1例) 有頍者弁，實維伊何。(小雅・頍弁 2-776)

14.1.2.3 『詩經』(西周部分)の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-5】に、『詩經』(西周部分)にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-5】『詩經』(西周部分)における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「誰之 X」疑問フレーズ	0	0	0	0(1)

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である(外数として扱う)。

以下は、『詩經』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

通常は動詞目的語の用例とみなされるが、かりに「於」の前に動詞が省略された介詞目的

語の用例をみなしておく。

「誰之X」疑問フレーズ（介詞目的語：後置乙類：1例）瞻烏爰止，於誰之屋。（小雅・正月 2-666）

14.2 上古中期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順

14.2.1 『論語』における状況

14.2.1.1 『論語』の疑問代詞体系

【図表 14-6】『論語』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	60	8	17	4	4	「/如(X)何/」構文 22
奚	0	4	1	6	0	0	0
盍	0	0	0	2	0	0	0
安	0	0	0	1	0	0	0
惡	0	0	1	0	0	0	0
焉	0	2	0	23	0	0	0
孰	16	0	0	0	0	0	0
誰	1	9	1	0	1	0	0

* 『詩経』などの上古初期文献を直接引用した部分は言語資料としない。

14.2.1.2 『論語』の疑問代詞目的語一覽

【図表 14-7】に『論語』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-7】『論語』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	59	8	0(1)	0
奚	4	1	0	0
焉	2	0	0	0
惡	0	1	0	0
孰	0	2	0	0

誰	7	1	0(2)	0
---	---	---	------	---

*「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である（外数として扱う）。

以下は、上表に示した『論語』の疑問代詞目的語の具体例である。

「何」（動詞目的語：前置甲類：59例）子貢曰：「貧而無諂，富而無驕，何如。」子曰：「可也。未若貧而樂，富而好禮者也。」（1-54） / 孟懿子問孝。子曰：「無違。」樊遲御，子告之曰：「孟孫問孝於我，我對曰『無違。』」樊遲曰：「何謂也。」（1-81） / 哀公問曰：「何為則民服。」孔子對曰：「舉直錯諸枉，則民服；舉枉錯諸直，則民不服。」（1-117） / 子曰：「以吾一日長乎爾，毋吾以也。居則曰：『不吾知也。』如或知爾，則何以哉。」（3-798） / 「求，爾何如。」對曰：「方六七十，如五六十，求也為之，比及三年，可使足民。如其禮樂，以俟君子。」（3-800） / 「赤，爾何如。」對曰：「非曰能之，願學焉。宗廟之事，如會同，端章甫，願為小相焉。」（3-801） / 「點，爾何如。」鼓瑟希，鏗爾，舍瑟而作，對曰：「異乎三子者之撰。」（3-805） / 子曰：「何傷乎。亦各言其志也。」（3-806） / 三子者出，曾皙後。曾皙曰：「夫三子者之言何如。」子曰：「亦各言其志也已矣。」（3-814） / 季康子問：「仲由可使從政也與。」子曰：「由也果，於從政乎何有。」（2-379） / 曰：「賜也可使從政也與。」曰：「賜也達，於從政乎何有。」（2-379） / 曰：「求也可使從政也與。」曰：「求也藝，於從政乎何有。」（2-380） / 子貢曰：「如有博施於民而能濟眾，何如。可謂仁乎。」（2-427） / 子曰：「默而識之，學而不厭，誨人不倦，何有於我哉。」（2-436） / 曰：「怨乎。」曰：「求仁而得仁，又何怨。」（2-462） / 曰：「不憂不懼，斯謂之君子已乎。」子曰：「內省不疚，夫何憂何懼。」（3-827） / 子夏曰：「…君子敬而無失，與人恭而有禮。四海之內，皆兄弟也。君子何患乎無兄弟也。」（3-830） / 子曰：「足食，足兵，民信之矣。」子貢曰：「必不得已而去，於斯三者何先。」（3-837） / 子貢曰：「必不得已而去，於斯二者何先。」（3-837） / 棘子成曰：「君子質而已矣。何以文為。」〔《七經考文》：一本「文為」作「為文」〕（3-840） / 季康子問政於孔子曰：「如殺無道，以就有道，何如。」（3-866） / 子張問：「士何如*斯可〔定州漢墓本「斯」〕謂之達矣。」〔《七經考文》：古文無「斯」字，無「矣」字。〕（3-867） / 樊遲退，見子夏曰：「鄉也吾見於夫子而問知。子曰：『舉直錯諸枉，能使枉者直。』何謂也。」（3-873） / 孔子與之坐而問焉，曰：「夫子何為。」對曰：「夫子欲寡其過而未能也。」（3-1005） / 或曰：「以德報怨，何如。」子曰：「何以報德。以直報怨，以德報德。」（3-1017） / 子張曰：「《書》云：『高宗諒陰，三年不言。』何謂也。」（3-1036） / 子曰：「無為而治者其舜也與。夫何為哉。恭己正南面而已矣。」（4-1062） / 子曰：「予欲無言。」子貢曰：「子如不言，則小子何述焉。」（4-1227） / 子曰：「天何言哉。四時行焉，百物生焉，天何言哉。」〔《釋文》：《魯》讀天為夫，今從《古》。翟氏《考異》：兩「天何言哉」宜有別，上一句似從《魯論》所傳為勝。…按：劉恭冕云：「鄭以『四時行，百物生』皆說天，不當作『夫』，故定從《古》。翟氏灝《考異》謂從《魯論》為勝，誤也。〕（4-1227） / 子貢曰：「…仲尼日月也，無得而踰焉。人雖欲自絕，其何傷於日月乎。…」（4-1340） / 子張問於孔子曰：「何如斯可以從*政〔定州漢墓本「正」〕矣。」子曰：「尊五美，屏四惡，斯可以從*政〔定州漢墓本「正」〕矣。」子張曰：

「**何***謂〔定州漢墓本「胃」五美。〕（4-1370）／子曰：「君子惠而不費，…」子張曰：「**何**謂惠而不費。」（4-1371）／子張曰：「**何***謂〔定州漢墓本「胃」四惡。〕（4-1373）／子夏問曰：「『巧笑倩兮，美目盼兮，素以為絢兮。』**何**謂也。」（1-158）／王孫賈問曰：「與其媚於奧，寧媚於竈，**何**謂也。」（1-178）／出曰：「二三子**何**患於喪乎。天下之無道也久矣，天將以夫子為木鐸。」（1-219）／子曰：「能以禮讓為國乎。**何**有。不能以禮讓為國，如禮何。」〔《後漢書·劉般傳》：賈逵上書曰：「孔子稱能以禮讓為國，於從政乎何有。」《列女傳》：曹世叔妻上疏曰：「《論語》曰：『能以禮讓為國，於政乎何有。』』（1-255）／子曰：「參乎。吾道一以貫之。」曾子曰：「唯。」子出，門人問曰：「**何**謂也。」（1-263）／子貢問曰：「賜也**何**如。」子曰：「女器也。」曰：「何器也。」曰：「瑚璉也。」〔《七經考文補遺》：古文作「如何」。《史記·弟子傳》作「賜何人也。」〕（1-292）／「求也**何**如。」子曰：「求也，千室之邑，百乘之家，可使為之宰也，不知其仁也。」（1-304）／「赤也**何**如。」子曰：「赤也，束帶立於朝，可使與賓客言也，不知其仁也。」（1-306）／宰予晝寢。子曰：「朽木不可雕也。糞土之牆不可朽也。於予與**何**誅。」（1-310）／子曰：「臧文仲居蔡，山節藻梲，**何**如其知也。」（1-328）／子張問曰：「令尹子文三仕為令尹，無喜色。三已之，無慍色。舊令尹之政，必以告新令尹。**何**如。」（1-331）5-19／「崔子弑齊君，陳文子有馬十乘，棄而違之。…則又曰：『猶吾大夫崔子也。』違之。**何**如。」（1-335）／子聞之，謂門弟子曰：「吾**何**執。執御乎。執射乎。吾執御矣。」（2-570）／子曰：「出則事公卿，入則事父兄，喪事不敢不勉，不為酒困，**何**有於我哉。」（2-609）／冉有曰：「既庶矣，又**何**加焉。」曰：「富之。」（3-905）／曰：「既富矣，又**何**加焉。」曰：「教之。」（3-905）／子曰：「苟正其身矣。於從政乎**何**有。不能正其身，如正人何。」（3-911）／子貢問曰：「**何**如斯可謂之士矣。」（3-927）／曰：「今之從政者**何**如。」子曰：「噫，斗筲之人，何足*算〔定州漢墓本「數」〕也。」（3-927）／子貢問曰：「鄉人皆好之，**何**如。」子曰：「未可也。」「鄉人皆惡之，**何**如。」子曰：「未可也。…」〔《陸忠宣公集·請許臺省長官舉薦屬吏狀》引此節文，兩「何如」皆作「如何」〕（3-937）／子路問曰：「**何**如*斯可〔定州漢墓本「斯」〕謂之士矣（皇本「何如斯可謂之士矣」，無「之」字。）」（3-941）／孔子曰：「…夫顓臾，昔者先王以為東蒙主，且在邦域之中矣，是社稷之臣也。**何**以伐為。」〔皇本作「何以為伐也」。按孔注「何用滅之為」，則伐、為字不可倒矣，皇本恐誤。〕（4-1132）

（動詞目的語：後置乙類：1例）子夏之門人問交於子張。子張曰：「子夏*云**何**」〔定州漢墓本「曰何」〕。對曰：「子夏曰『可者與之，其不可者拒之。』」〔舊文「拒」作「距」。《釋文》：距，本作「拒」…。漢石經為「距」。又「可者下「者距」上凡闕四字，今此間有五字，疑漢文本無其字。皇本「拒」皆為「距」〕（4-1302）

（介詞目的語：前置甲類：8例）**何以**子游問孝。子曰：「今之孝者，是謂能養。至於犬馬，皆能有養；不敬，**何**以別乎。」（1-85）／子曰：「人而無信，不知其可也。大車無輓，小車無軌，其**何**以行之哉。」（1-126）／或曰：「以德報怨，何如。」子曰：「**何**以報德。以直報怨，以德報德。」（3-1017）／子曰：「居上不寬，為禮不敬，臨喪不哀，吾**何**以觀之哉。」（1-224）3-26／子貢問曰：「孔文子**何**以謂之『文』也。」（1-325）**何為**宰我問曰：「仁者，雖告之曰：『井有仁焉。』其從之也。」子曰：「**何**為其然也。…」（2-415）／微生畝謂孔子曰：「丘**何**為是栖栖者與。無乃為佞乎。」〔《釋文》或作「某何栖栖」，鄭作「某何是」，今作「某何是」〕（3-1014）／子曰：「莫我知也夫。」子貢曰：「**何**為其莫知子也。」（3-1019）

「奚」(動詞目的語：前置甲類：4例)子曰：「『相維辟公，天子穆穆』，奚取於三家之堂。」(1-140) / 子路曰：「衛君待子而為政，子將奚先。」(3-885) / 子曰：「誦《詩》三百，授之以政，不達。使於四方，不能專對。雖多，亦奚以為。」[高麗本「為」下有「哉」字。《七經考文補遺》：古本「為」下有「哉」字。《天文論語校勘記》：《考文補遺》引古本、一本、正平本「以為」下有「哉」字。](3-900) / 子路宿於石門。晨門曰：「奚自。」子路曰：「自孔氏。」(3-1029)
 (介詞目的語：前置甲類：1例)子曰：「由之瑟奚為於丘之門。」(3-770)

「惡」(介詞目的語：前置甲類：1例)子曰：「…君子去仁，惡乎成名。君子無終食之間違仁，造次必於是，顛沛必於是。」(1-234)

「焉」(動詞目的語：前置：2例)柳下惠為士師，三黜。人曰：「子未可以去乎。」曰：「直道而事人，焉往而不三黜。枉道而事人，何必去父母之邦。」(4-1254) / 子曰：「因民之所利而利之，斯不亦惠而不費乎。擇可勞而勞之，*又[定州漢墓本「有」]誰怨。欲仁而得仁。又焉貪。…」(4-1371)

「誰」(動詞目的語：前置甲類：7例)子謂顏淵曰：「用之則行，舍之則藏，唯我與爾有是夫。」子路曰：「子行三軍，則誰與。」(2-451) / 病間曰：「久矣哉，由之行詐也。無臣而有臣。吾誰欺，欺天乎。…」(2-600) / 從者曰：「子慟矣。」曰：「有慟乎。非夫人之為慟而誰為。」[皇本、高麗本「為」下有「慟」字。《論語古訓》：「《文選·夏侯常侍誄》曰：『非子為慟，吾慟為誰。』是古本有「慟」字。《論衡·問孔篇》引作「吾非斯人之慟而誰為」。](3-758) / 子曰：「吾之於人也，誰毀誰譽。*如有所譽者[定州漢墓本「若有何譽者」]，其有所試矣。…」(4-1107) / 夫子憮然曰：「鳥獸不可與同群，吾非斯人之徒與而誰與。天下有道，丘不與易也。」(4-1270)[足利本「誰與」下有「之」字。《七經考文》：一本「誰與」下有「之」字。《史記·世家》述此章文，獨無「吾非斯人之徒與而誰與」一句。] / 子曰：「因民之所利而利之，斯不亦惠而不費乎。擇可勞而勞之，*又[定州漢墓本「有」]誰怨。欲仁而得仁。又焉貪。…」(4-1371)

(動詞目的語：後置乙類：2例)長沮曰：「夫執輿者為誰[定州漢墓本「誰子」]。」子路曰：「為孔丘。」[漢石經「輿」作「車」，「誰」下有「子」字…。皇本「誰」下有「乎」字…。高麗本同。《史記·世家》「夫」作「彼」。](4-1267) / 問於桀溺。桀溺曰：「子為誰。」曰：「為仲由。」(4-1267)

(介詞目的語：前置：1例)曰：「滔滔者天下皆是也，而誰以易之。…」擾而不輟。(4-1268)

14.2.1.3 『論語』の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-8】に、『論語』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-8】『論語』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	3	0	0	0

以下は、『論語』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」（動詞目的語：前置甲類：3例）衛公孫朝問於子貢曰：「仲尼焉學。」子貢曰：「文武之道，未墜於地，在人。賢者識其大者，不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。夫子焉不學。而亦何常師之有。」（4-1335） / 或曰：「陋，如之何。」子曰：「君子居之，何陋之有。」（2-605） / 「唐棣之華，偏其反而。豈不爾思。室是遠而。」子曰：「未之思也，夫何遠之有。」
〔皇本「有」下有「哉」字。天文本論語校勘記：古本、足利本、唐本、津藩本、正平本「夫何遠之有」下有「哉」字（2-632）〕

14.2.2 『孟子』における状況

14.2.2.1 『孟子』の疑問代詞体系

【図表 14-9】『孟子』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	46	36	31	18	35	「/如(X)何/」構文 26
奚	0	4	3	13	0	0	0
盍(蓋)	0	0	0	10	0	0	0
惡	0	6	4	14	0	0	0
焉	0	1	0	12	0	0	0
孰	24	0	0	0	0	0	0
誰	3	3	3	0	0	3	0

* 『詩経』『書経』などの上古初期文献から直接引用した部分は資料とはしない。「夏諺」（6例）として引用された部分も、上古中期より古い記載に基づく可能性が高いために資料としない。

14.2.2.2 『孟子』の疑問目的語一覧

【図表 14-10】に『孟子』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-10】『孟子』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	46	36	0	0
奚	4	3	0	0
焉	1	0	0	0
惡	6	4	0	0
誰	3	3	0	0

以下は、『孟子』の疑問目的語の具体例である。

「何」(動詞目的語：前置甲類：46例) 孟子對曰：「…填然鼓之，兵刃既接。棄甲曳兵而走。或百步而後止，或五十步而後止。以五十步笑百步，則何如。」(1-52) / 曰：「德何如則可以王矣。」曰：「保民而王。莫之能禦也。」(1-79) / 曰：「臣聞之胡齧曰，『王坐於堂上，有牽牛而過堂下者，王見之，曰：『牛何之？』…』」(1-80) / 莊暴見孟子曰：「暴見於王，王語暴以好樂，暴未有以對也。」曰：「好樂何如。」(1-99) / 昔者齊景公問於晏子曰：『吾欲觀於轉附、朝舞，遵海而南，放於琅邪，吾何脩而可以比於先王觀也。』(1-119) / 對曰：「…王如好貨，與百姓同之，於王何有。」(1-137) / 對曰：「…王如好色，與百姓同之，於王何有。」(1-139) / 孟子謂齊宣王曰：「…王曰『姑舍女所學而從我』，則何如。…」(1-147) / 宣王問曰：「…不取必有天殃，取之何如。」(1-150) / 乃屬其耆老而告之，曰：「狄人之所欲者，吾土地也。吾聞之也，君子不以其所以養人者害人。二三子何患乎無君。…」(1-164) / 曰：「我知言，我善養吾浩然之氣。」「敢問何謂浩然之氣。」(1-200) / 「何謂知言。」(1-209) / 「…敢問所安。」曰：「姑舍是。」曰：「伯夷、伊尹，何如。」〔(注)：丑曰，伯夷之行何如，孟子心可願比伯夷不。(正義曰)：阮氏元校勘記云：「盧文弨《抱經堂文集》云『依趙氏注，經文但云伯夷何如，無伊尹二字。』按此說極確，趙注本慄然，丑問伯夷一人，孟子乃及伊尹。』」(1-215) / 曰：「不同道。…何事非君，何使非民；治亦進，亂亦進，伊尹也。…」(1-215) / 曰：「…曾子曰：『晉楚之富，不可及也。彼以其富，我以吾仁；彼以其爵，我以吾義。吾何慊乎哉。』…」(1-259) / 曰：「夫既或治之，予何言哉。」(1-274) / 夷子曰：「儒者之道，古之人若保赤子，此言何謂也。…」(1-403) / 曰：「梓匠輪輿，其志將以求食也；君子之為道也，其志亦將以求食與。」曰：「子何以其志為哉。…」(1-429) / 孟子曰：「…苟行王政，四海之內皆舉首而望之，欲以為君。齊楚雖大，何畏焉。」(1-437) / 曰：「是何傷哉。彼身織屨，妻辟纊，以易之也。」(1-467) / 王曰：「禮，為舊君有服，何如斯可為服矣。」(2-547) / 徐子曰：「仲尼亟稱於水，曰：『水哉，水哉。』何取於水也。」(2-563) / 曰「…其僕曰：『庾公之斯，衛之善射者也。夫子曰吾生，何謂也。』…」(2-582) / 曰：「…君子曰『此亦妄人也已矣。如此，則與禽獸奚擇哉。於禽獸又何難焉。』…」(2-596) / 「敢問或曰放者，何謂也。」(2-631) / 孟子曰「…湯使人以幣聘之，囂囂然曰：『我何以湯之聘幣為哉。我豈若處畎畝之中，由是以樂堯舜之道哉。』…」(2-654) / 孟子曰：

「…伊尹曰：『何事非君，何使非民。』治亦進，亂亦進，曰…」（2-671） / 曰：「往役，義也。往見，不義也。且君之欲見之也，何為也哉。」¹⁹⁶（2-720） / 曰：「敢問招虞人何以。」（2-721） / 孟子曰：「…萬鍾於我何加焉。為宮室之美、妻妾之奉、所識窮乏者得我與。…」（2-785） / 孟子曰：「於，荅是也何有。不揣其本而齊其末，方寸之木可使高於岑樓。…」（2-806） / 宋棼將之楚，孟子遇於石丘，曰：「先生將何之。」（2-823） / 曰：「軻也請無問其詳，願聞其指。說之將何如。」曰：「我將言其不利也。」（2-825） / 白圭曰：「吾欲二十而取一，何如。」（2-855） / 陳子曰：「古之君子，何如則仕。」孟子曰：「所就三，所去。…」（2-863） / 孟子謂宋句踐曰：「子好遊乎。吾語子遊。人知之亦囂囂；人不知亦囂囂。」曰：「何如斯可以囂囂矣。」（2-890） / 王子墊問曰：「士何事。」孟子曰：「尚志。」曰：「何謂尚志。」曰：「仁義而已矣。…」（2-926~927） / 王子有其母死者，其傅為之請數月之喪。公孫丑曰：「若此者何如也。」（2-940） / 孟子曰：「不仁哉梁惠王也。仁者以其所愛，及其所不愛；不仁者以其所不愛，及其所愛。」公孫丑問曰：「何謂也。」（2-953） / 浩生不害問曰：「樂正子，何人也。」孟子曰：「善人也，信人也。」何謂善，何謂信。」（2-994） / 「敢問何如斯可謂狂矣。」曰：「如琴張、曾皙、牧皮者，孔子之所謂狂矣。」（2-1026） / 曰：「何如斯可謂之鄉原矣。」（2-1029）

（介詞目的語：前置甲類：36例）[何以] 孟子對曰：「…王曰：『何以利吾國。』大夫曰：『何以利吾家。』士庶人曰：『何以利吾身。』上下交征利而國危矣。…」（1-37） / 曰：「不為者與不能者之形，何以異。」（1-85） / 曰：「…以一服八，何以異於鄒敵楚哉。…」（1-91） / 「…今王鼓樂於此，百姓聞王鍾鼓之聲，管籥之音，舉欣欣然有喜色而相告曰：『吾王庶幾無疾病與，何以能鼓樂也。』今王田獵於此，百姓聞王車馬之音，見羽旄之美，舉欣欣然有喜色而相告曰：『吾王庶幾無疾病與，何以能田獵也。』…」（1-105） / 王曰：「吾何以識其不才而舍之。」（1-143） / 孟子謂齊宣王曰：「…至於治國家，則曰：『姑舍女所學而從我』，則何以異於教玉人彫琢玉哉。」（1-148） / 諸侯將謀救燕，宣王曰：「諸侯多謀伐寡人者，何以待之。」（1-152） / 孟子曰：「…有仕於此，而子悅之，不告於王而私與之吾子之祿爵，夫士也亦無王命而私受之於子，則可乎。何以異於是。」（1-288） / 儲子曰：「王使人瞞夫子，果有以異於人乎。」孟子曰：「何以異於人哉。堯舜與人同耳。」（2-605） / 孟子曰：「…若孔子主癰疽與侍人瘠環，何以為孔子。」（2-662） / 告子曰：「食、色，性也。仁，內也，非外也；義，外也，非內也。」孟子曰：「何以謂仁內義外也。」（2-743） / 孟季子問公都子曰：「何以謂義內也。」曰：「行吾敬，故謂之內也。」（2-745） / 公孫丑問曰：「高子曰：《小弁》，小人之詩也。」孟子曰：「何以言之。」（2-817） / 曰：「《凱風》，何以不怨。」曰：「《凱風》，親之過小者也。《小弁》，親之過大者也。…」（2-820） / 高子曰：「禹之聲尚文王之聲。」孟子曰：「何以言之。」曰：「以追蠡。」（2-983） / 孟子曰：「死矣盆成括。」盆成括見殺，門人問曰：「夫子何以知其將見殺。」（2-1003） / 曰：「如琴張、曾皙、牧皮者，孔子之所謂狂矣。」何以謂之狂也。」（2-1028） / 曰：「『何以是嚶嚶也。言不顧行，行不顧言，則曰，古之人，古之人。行何為踽踽涼涼。生斯世也，為斯世也，善斯可矣。』闔然媚於世也者，是鄉原也。」（2-1029）

¹⁹⁶ 「何為也哉」における「為」は介詞が述語動詞として用いられたものと解釈する。

【何為】曰：「王如善之，則何為不行。」(1-137) / 孟子曰：「…當在宋也，予將有遠行，行者必以贖；辭曰：『餽贖。』予何為不受。當在薛也，予有戒心；辭曰：『聞戒。故為兵餽之。』予何為不受。…」(1-262) / 曰：「…得之為有財，古之人皆用之。吾何為獨不然。」(1-283) / 曰：「…今以燕伐燕，何為勸之哉。」(1-288) / 曰：「…夫天未欲平治天下也，如欲平治天下，當今之世，舍我其誰也。吾何為不豫哉。」(1-311) / 且許子何不為陶冶，舍皆取諸其宮中而用之，何為紛紛然與百工交易，何許子之不憚煩。(1-371) / 孟子曰：「湯居亳，與葛為鄰。葛伯放而不祀，湯使人問之曰：『何為不祀。』…湯使遺之牛羊。葛伯食之，又不以祀。湯又使人問之曰：『何為不祀。』…」(1-431~433) / 孟子曰：「子亦來見我乎。」曰：「先生何為出此言也。」(1-529) / 曰：「…庾公之斯至，曰：『夫子何為不執弓。』曰：『今日我疾作，不可以執弓。』…」(2-582) / 萬章問曰：「舜往于田，號泣于旻天，何為其號泣也。」(2-609) / 公孫丑問曰：「膾炙與羊棗孰美。」孟子曰：「膾炙哉。」公孫丑曰：「然則曾子何為食膾炙而不食羊棗。」(2-1021) / 曰：「『何以是嚶嚶也。言不顧行，行不顧言，則曰，古之人，古之人。行何為踽踽涼涼。生斯世也，為斯世也，善斯可矣。』闔然媚於世也者，是鄉原也。」(2-1029) 【何由】曰：「若寡人者，可以保民乎哉。」曰：「可。」曰：「何由知吾可也。」(1-80)

「奚」(動詞目的語：前置甲類：4例)：「許子冠乎。」曰：「冠。」曰：「奚冠。」曰：「冠素。」(1-370) / 孟子曰：「昔齊景公田，招虞人以旌，不至，將殺之。志士不忘在溝壑，勇士不忘喪其元。孔子奚取焉。取非其招不往也。…」(1-420) / 「…齊景公田，招虞人以旌，不至，將殺之。志士不忘在溝壑，勇士不忘喪其元，孔子奚取焉。取非其招不往也。」(2-721) / 「交聞文王十尺，湯九尺。今交九尺四寸以長，食粟而已，如何則可。」曰：「奚有於是。亦為之而已矣。…」(2-812)

(介詞目的語：前置甲類：3例) 樂正子入見曰：「君奚為不見孟軻也。」曰：「或告寡人曰：『孟子之後喪踰前喪』是以不往見也。」(1-168) / 曰：「許子奚為不自織。」曰：「害於耕。」(1-370) / 「然則奚為喜而不寐。」曰：「其為人也好善。」(2-861)

「惡」(動詞目的語：前置甲類：6例) 曰：「…獸相食，且人惡之；為民父母行政，不免於率獸而食人，惡在其為民父母也。…」(1-62) / 「…為民父母，使民盼盼然，將終歲勤動。不得以養其父母，又稱貸而益之，使老稚轉乎溝壑，惡在其為民父母也。…」(1-340) / 「…他日歸，則有饋其兄生鵝者，己頻顛曰：『惡用是駢駢者為哉。』…」(1-468) / 孟子曰：「敬叔父乎。敬弟乎。彼將曰：『敬叔父。』曰：『弟為尸，則誰敬。』彼將曰：『敬弟。』子曰：『惡在其敬叔父也。』…」(2-746) / 曰：「何謂尚志。」曰：「仁義而已矣。殺一無罪，非仁也。非其有而取之，非義也。居惡在，仁是也。路惡在，義是也。…」(2-927)

(介詞目的語：前置：4例) 孟子見梁襄王，出，語人曰：「…卒然問曰：『天下惡乎定。』…」(1-71) / 「敢問夫子惡乎長。」曰：「我知言，我善養吾浩然之氣。」(1-199) / 孟子曰：「…辭尊居卑，辭富居貧，惡乎宜乎。抱關擊柝。…」(2-708) / 孟子曰：「君子不亮，惡乎執。」

(2-860)

「焉」(動詞目的語：前置甲類：1例) 孟子曰：「…二老者，天下之大老也，而歸之，是天下之父歸之也。天下之父歸之，其子焉往。…」(1-513)

「誰」(動詞目的語：前置甲類：3例) 「鄉人長於伯兄一歲，則誰敬。」曰：「敬兄。」「酌則誰先。」曰：「先酌鄉人。」(2-746) / 孟子曰：「敬叔父乎。敬弟乎。彼將曰，『敬叔父。』曰，『弟為尸，則誰敬。』彼將曰，『敬弟。』…」(2-746)

(介詞目的語：前置甲類：3例) 曰：「…子謂薛居州，善士也。在於王所者，長幼卑尊皆薛居州也，王誰與為不善。在王所者，長幼卑尊皆非薛居州也，王誰與為善。一薛居州，獨如宋王何。」(1-439) / 子思居於衛，有齊寇。或曰：「寇至，盍去諸。」子思曰：「如伋去，君誰與守。」(2-603)

14.2.2.3 『孟子』の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-11】に、『孟子』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-11】『孟子』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	4	0	0	0

以下は、『孟子』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：前置甲類：4例) 孟子曰：「不仁者可與言哉。安其危而利其菑，樂其所以亡者。不仁而可與言，則何亡國敗家之有。…」(1-497) / 曰：「…今也為臣，諫則不行，言則不聽，膏澤不下於民；有故而去，則君搏執之，又極之於其所往；去之日，遂收其田里，此之謂寇讎，寇讎何服之有。」(2-548) / 齊宣王問卿。孟子曰：「王何卿之問也。」王曰：「卿不同乎。」(2-728) / 孟子曰：「恥之於人大矣。為機變之巧者，無所用恥焉。不恥不若人，何若人有。」(2-887)

14.2.3 『戦国縦横家書』における状況

14.2.3.1 『戦国縦横家書』の疑問代詞体系

【図表 14-12】『戦国縦横家書』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文	保 留
何	0	5	3	7	1	7	「/如(X)何/」構文 5	1
奚	0	1	0	1	0	0	0	0
胡	0	0	1	1	0	0	0	0
孰	3	0	0	0	0	0	0	0

* 「保留」としたのは次用例である。前後の文字が欠損しているため、どの統語成分を担うものなのかを判別しがたい。

・韓是之兵不用而得地[於楚]，□□□□□□□□何。(第二十二章 3-107)

[韓は兵を用いることなく、(楚から)領土を得る……]

14.2.3.2 『戦国縦横家書』の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-13】に『戦国縦横家書』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-13】『戦国縦横家書』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	5	3	0	0
奚	1	0	0	0
胡	0	1	0	0

以下は、上表に示した『戦国縦横家書』の疑問代詞目的語の具体例である。

「何」(動詞目的語：前置甲類：5例) 奉陽君怨臣，臣將何處焉。(第四章 2-44) / 王不棄與國而先取秦，不棄箒而反曩也，王何患於不得所欲。(第十二章 2-70) / 齊必取大樑以東，勺必取河內，秦案不約而應，王何患於梁。(第十二章 2-70) / 須賈說穰侯曰：「…秦兵苟全而君制之。何索而不得，奚為而不成。…」(第十五章 2-79) / 「所道攻燕，非齊則魏，齊魏新惡楚，唯欲攻燕，將何道(哉)。」(第二十三章 3-111)

(介詞目的語：前置甲類：3例) [何為] 邯鄲君曰：「子使，未將令也。人許子兵甚俞，何為而不足待也。」(第二十七章 3-123) / (麴)皮曰：「…主君何為亡邯鄲以敵魏氏，而兼為楚人禽(哉)。故箕和為可矣。」(第二十七章 3-123) [何以] 而封之以膏腴之地，多予之重器，而不汲今令有功於國，一旦山陵崩，長安君何以自托於趙。(第十八章 3-948)

「奚」（動詞目的語：前置甲類：1例）須賈説穰侯曰：「…秦兵笥全而君制之。何索而不得，奚為而不成。…」（第十五章 2-79）

「胡」（介詞目的語：前置甲類：1例）王曰：「然則仁義不可為與？」對曰：「胡為不可。人無信則不徹，國無義則不王。…」（第五章 2-53）

14.2.3.3 『戦国縦横家書』の疑問フレーズ目的語一覧

【図表 14-14】に、『戦国縦横家書』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-14】『戦国縦横家書』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	1	0	0	0

以下は、『戦国縦横家書』にみえる疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」（動詞目的語：後置甲類：1例）夫秦何厭之有（哉）。（第十五章 3-78）

14.3 上古後期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順状況

14.3.1 『史記』（秦漢部分）における状況

14.3.1.1 『史記』（秦漢部分）の疑問代詞体系

【図表 14-15】『史記』（秦漢部分）の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述 語	特殊構文	保留
何	1	91	75	129	52	78	「/如(X)何/」構文 80 「何與」構文 1	1
奚	0	0	0	1	1	0	0	0
曷	0	0	3	7	0	0	0	0
胡	0	0	0	4	0	0	0	0
安	0	14	2	69	0	0	0	0
惡	0	0	0	15	0	0	0	0
烏	0	0	0	2	0	0	0	0
焉	0	0	0	4	0	0	0	0
孰	20	0	0	0	0	0	「孰與」構文 18	0

誰	17	11	1	0	1	3	0	0
何等	1	0	0	0	0	0	0	0
何故	0	0	0	8	0	2	0	0
何乃	0	0	0	9	0	0	0	0
何渠	0	0	0	1	0	0	0	0
何如	0	0	0	0	0	9	0	0
何所 <+場所>	0	1	1	0	2	0	0	0
何所 <-場所>	0	1	0	0	0	0	0	0
何誰	0	1	0	0	0	0	0	0
何者	0	0	0	0	0	8	0	0
云何	0	0	0	0	0	2	0	0
安所	0	0	0	10	0	0	0	0
誰何	0	0	0	0	0	3	0	0
誰者	1	0	0	0	0	0	0	0

*「居無何」における「何」は疑問数詞の一種とみなし（12例）、表中の数字に含めない。

*「何+必」（9例）、「何+其」（6例）は一語化しているとみなし、全体で一つの疑問副詞として扱う（上表には含めない）。

*本論文では、以下の用例における「何」について、どのような統語成分であるのか判断を保留しておく。表中では（保留）の欄に示した。

- 書奏天子，天子憐悲其意，乃下詔曰：「蓋聞有虞氏之時，畫衣冠異章服以為僂，而民不犯。何則。至治也。…」（孝文本紀 427）

〔淳于意の娘達が）皇帝に奏上すると、皇帝は彼女らの心を憐れみ、詔を下して言った「聞くところにとれば、有虞氏の時代は、（罪人の）衣冠に（特殊な標識を）描き、衣服（の色や模様を）を異なるものにして、辱めしるしとただけで、民衆は罪を犯さなかったという。何によってだろうか。政治が至上であったためである。〕

*表中に示した「何如」とは以下のような連体修飾語を担った疑問代詞を指すこととする。

- 曰：「君知張耳、陳餘何如人也。」（張耳陳餘列伝 2577）

〔（趙の雑役の兵が燕の将軍に）言った「あなたは張耳、陳餘がどのような人物をご存じか。〕

一方、以下のような「何如」は、「何（＝目的語）＋如（＝動詞）」という動詞句の一種とみなし、「何」は目的語として扱う。

- 於是張良至軍門，見樊噲。樊噲曰：「今日之事何如。」（項羽本紀 313）

〔そこで張良は（沛公の従者たちのいる）軍門に来ると、樊噲に会った。樊噲は言った「今日の事態（の成り行きは）どのようなであるか。〕

*表中の「何所<-場所>」は、以下のような「何（＝述語）＋所字構造（＝主語）」と分析され得るものを

含まない（本論文 11.2.2 を参照のこと）。

- ・信再拜賀曰：「…今大王誠能反其道：任天下武勇，何所不誅。以天下城邑封功臣，何所不服。以義兵從思東歸之士，何所不散。…」〔淮陰侯列伝〕 2612〕

〔韓信は二度礼拝して（漢王を）称えて言った「…今、大王がもし彼（＝項王）の道と反対のを行い、天下の武勇の者を任用されるなら、誅殺できない敵などありましようか。天下の城邑によって功臣を封ぜられたら、帰服しない者がなどありましようか。正義の軍隊として東帰を願う士（の心）にそわれるのなら、瓦解しない敵などありましようか。…〕

* 「云何」は以下のように一語化をみとめ得る「云+何」を指すものとする。

- ・大將軍問其罪正閔、長史安、議郎周霸等：「建當云何。」霸曰：「自大將軍出，未嘗斬裨將。今建棄軍，可斬以明將軍之威。」〔衛將軍驃騎列伝〕 2927〕

〔大將軍（＝衛青）は彼（＝蘇建）の罪を軍正の閔、長史の安、議郎の周霸等に問うた「蘇建（の罪）は何とすべきか。周霸は言った「大將軍の軍が出撃してより、副將を斬ったことはありません。このたび、蘇建は軍を捨てました。（彼を）斬って大將軍の威厳を示すのがよいでしょう。〕

* 「誰」の動詞目的語の出現数は、兼語となった 1 例を含む。

* 表中の「何與」構文とは、以下のように比較を表す構文的意味を持つ構造を指す。

- ・子虛曰：「…願謂僕曰：『…楚王之獵何與寡人。』」（司馬相如列伝） 3003〕

〔子虚が言った「…（齊王は）私を顧みて言うには『楚王の狩獵は私と比べてどうであるか。』…〕

14.3.1.2 『史記』（秦漢部分）の疑問代詞目的語一覽

【図表 14-16】に『史記』（秦漢部分）にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-16】『史記』（秦漢部分）の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	84	75	0/(7)	0
曷	0	3	0	0
安	14	2	0	0
誰	4	0	3/(4)	1
何所<+場所>	1	0	0	0/(1)
何所<-場所>	1	0	0	0
何誰	1	0	0	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である（外数として扱う）。

以下は、『史記』（秦漢部分）の疑問目的語の具体例である。

「何」(動詞目的語：前置甲類：84 例) 將閻曰：「闕廷之禮，吾未嘗敢不從賓贊也。廊廟之位，吾未嘗敢失節也。受命應對，吾未嘗敢失辭也。何謂不臣。願聞罪而死。」(268) / 於是張良至軍門，見樊噲。樊噲曰：「今日之事何如。」(313) / 項王按劍而跽曰：「客何為者。」(313) / 良問曰：「大王來何操。」曰：「我持白璧一雙，欲獻項王，玉斗一雙，欲與亞父，會其怒，不敢獻。公為我獻之。」(314) / 項王乃馳，復斬漢一都尉，殺數十百人，復聚其騎，亡其兩騎耳。乃謂其騎曰：「何如。」(335) / 烏江亭長檣船待，謂項王曰：「江東雖小，地方千里，眾數十萬人，亦足王也。願大王急渡。今獨臣有船，漢軍至，無以渡。」項王笑曰：「天之亡我，我何渡為。…」(336) / 高祖醉，曰：「壯士行，何畏。」乃前，拔劍擊斬蛇。(347) / 後人來至蛇所，有一老嫗夜哭。人問何哭，嫗曰：「人殺吾子，故哭之。」(347) / 有謁者十人持戟衛端門，曰：「天子在也，足下何為者而入。」(411) / 上曰：「百金中民十家之產，吾奉先帝宮室，常恐羞之，何以臺為。」(433) / 上曰：「文成食馬肝死耳。子誠能修其方，我何愛乎。」(462) / 所忠視其書不經，疑其妄書，謝曰：「寶鼎事已決矣，尚何以為。」(467) / 上聞之，制詔御史曰：「…議者咸稱太古，百姓何望。…」(1161) / 子貢見師乙而問焉，曰：「賜聞聲歌各有宜也，如賜者宜何歌也。」(1233) / 上曰：「文成食馬肝死耳。子誠能修其方，我何愛乎。」(1390) / 所忠視其書不經，疑其妄書，謝曰：「寶鼎事已決矣，尚何以為。」卿因嬖人奏之。(1393) / 使者曰：「苟如此，子何欲而然。」(1431) / 荊王劉賈者，諸劉，不知其何屬。(1993) / 灌將軍熟視笑曰：「人謂魏勃勇，妄庸人耳，何能為乎。」乃罷魏勃。(2004) / 紀太后大怒，曰：「…且主父偃何為者。乃欲以女充后宫。」(2007) / 漢十二年秋，黥布反，上自將擊之，數使使問相國何為。(2018) / 孝惠曰：「曹參何如。」何頓首曰：「帝得之矣。臣死不恨矣。」(2019) / 漢王方食…其以酈生語告，曰：「於子房何如。」(2040) / 上在雒陽南宮，從復道望見諸將往往相與坐沙中語。上曰：「此何語。」(2042) / 上怪之，問曰：「彼何為者。」四人前對，各言名姓，曰東園公，角里先生，綺里季，夏黃公。(2047) / 人或謂陳平曰：「貧何食而肥若是。」(2051) / 面質呂嬃於陳平曰：「鄙語曰『兒婦人口不可用』，顧君與我何如耳。無畏呂嬃之讒也。」(2060) / 罷酒出，帝召袁盎諸大臣通經術者曰：「太后言如是，何謂也。」(2091) / 帝曰：「於公何如。」皆對曰：「方今漢家法周，周道不得立弟，當立子。…」(2091) / 景帝曰：「何如。」對曰：「言梁王不知也。…」(2092) / 制曰：「…朕之不德，海內未洽，乃以未教成者彊君連城，即股肱何勸。其更議以列侯家之。」(2107) / 請問于服兮：「予去何之。吉乎告我，兇言其菑。淹數之度兮，語予其期。」(2497) / 桓公與莊公既盟於壇上，曹沫執匕首劫齊桓公，桓公左右莫敢動，而問曰：「子將何欲。」(2515) / 丹曰：「然則何由。」對曰：「請入圖之。」(2528) / 荊軻曰：「今有一言可以解燕國之患，報將軍之仇者，何如。」(2532) / 斯乃上書曰：「…此四君者，皆以客之功。由此觀之，客何負於秦哉。(2542) / 高乃謂丞相斯曰：「…所賜長子書及符璽皆在胡亥所，定太子在君侯與高之口耳。事將何如。」(2549) / 夫不能行聖人之術，則舍為天下役何事哉。(2556) / 吏去，張耳乃引陳餘之桑下而數之曰：「始吾與公言何如。…」(2572) / 武信君曰：「何謂也。」(2575) / 燕將見之，問燕將曰：「知臣何欲。」(2577) / 曰：「知其志何欲。」(2577)

／上召諸將問曰：「布反，為之柰何。」皆曰：「發兵擊之，阬豎子耳。何能為乎。」（2604）／薛公對曰：「布反不足怪也。使布出於上計，山東非漢之有也；出於中計，勝敗之數未可知也；出於下計，陛下安枕而臥矣」上曰：「何謂上計。」（2604）／薛公對曰：「布反不足怪也。使布出於上計，山東非漢之有也；出於中計，勝敗之數未可知也；出於下計，陛下安枕而臥矣」…「何謂中計。」（2604）／薛公對曰：「布反不足怪也。使布出於上計，山東非漢之有也；出於中計，勝敗之數未可知也；出於下計，陛下安枕而臥矣」…「何謂下計。」（2604）／上曰：「是計將安出。」令尹對曰：「出下計。」上曰：「何謂廢上中計而出下計。」（2604）／於是信問廣武君曰：「僕欲北攻燕，東伐齊，何若而有功。」（2617）／廣武君曰：「…故善用兵者不以短擊長，而以長擊短。」韓信曰：「然則何由。」（2618）／…齊人蒯通知天下權在韓信，欲為奇策而感動之，以相人說韓信曰：「僕嘗受相人之術。」韓信曰：「先生相人何如。」（2623）／韓信曰：「善。先生相寡人何如。」對曰：「願少閒。」（2623）／通曰：「相君之面，不過封侯，又危不安。相君之背，貴乃不可言。」韓信曰：「何謂也。」（2623）／信曰：「陛下不過能將十萬。」上曰：「於君何如。」曰：「臣多多而益善耳。」（2628）／高祖已從豨軍來，至，見信死，且喜且憐之，問：「信死亦何意。」呂后曰：「信言恨不用蒯通計。」（2629）／陸生往請，直入坐，而陳丞相方深念，不時見陸生。陸生曰：「何念之深也。」陳平曰：「生揣我何念。」（2700）／聞吏至門，平原君欲自殺。諸子及吏皆曰：「事未可知，何早自殺為。」（2703）／盎弗信，曰：「公何為者。」司馬曰：「臣故為從史盜君侍兒者。」（2743）／盎乃驚謝曰：「公幸有親，吾不足以累公。」司馬曰：「君弟去，臣亦且亡，辟吾親，君何患。」（2743）／后文帝崩，景帝立，釋之恐，稱病。欲免去，懼大誅至；欲見謝，則未知何如。（2756）／唐對曰：「尚不如廉頗、李牧之為將也。」上曰：「何以。」（2757）／高祖與語，愛其恭敬，問曰：「若何有。」對曰：「奮獨有母，不幸失明。家貧。有姊，能鼓琴。」（2763）／詔問故太倉長臣意：「…醫藥已，其病之狀皆何如。具悉而對。」（2796）／上方與晁錯調兵卒軍食，上問袁盎曰：「君嘗為吳相，知吳臣田祿伯為人乎。今吳楚反，於公何如。」（2830）／於是上嘿然良久，曰：「顧誠何如，吾不愛一人以謝天下。」（2831）／漢將弓高侯積當遺王書曰：「奉詔誅不義，降者赦其罪，復故；不降者滅之。王何處，須以從事。…」（2835）／天子嘗欲教之孫吳兵法，對曰：「顧方略何如耳，不至學古兵法。」（2939）／徐樂曰：「臣聞天下之患在於土崩，不在於瓦解，古今一也。何謂土崩。秦之末世是也。…」（2956）／徐樂曰：「臣聞天下之患在於土崩，不在於瓦解，古今一也。…何謂瓦解。吳、楚、齊、趙之兵是也。…」（2956）／徐樂曰：「…臣聞圖王不成，其敝足以安。安則陛下何求而不得，何為而不成，何征而不服乎哉。」（2957）／於是大司馬進曰：「…若然辭之，是泰山靡記而梁父靡幾也。亦各並時而榮，咸濟世而屈，說者尚何稱於後，而云七十二君乎。…」（3067）／又使徐福入海求神異物，還為偽辭曰：「臣見海中大神，言曰：『汝西皇之使邪。』臣答曰：『然。』『汝何求。』曰：『願請延年益壽藥。』…」（3086）／王曰：「…據三川之險，招山東之兵，舉事如此，公以為何如。」（3090）／天子問治亂之事，申公時已八十餘，老，對曰：「為治者不在多言，顧力行何如耳。」（3122）／大宛聞漢之饒財，欲通不得，見騫，喜，問曰：「若欲何之。」（3158）／宛貴人皆以為然，共殺其王毋寡，持其頭遣貴人使貳師，約曰：「…至，我居內，康居居外，與漢軍戰。」

漢軍熟計之，何從。」(3177) / 優孟曰：「馬者王之所愛也，以楚國堂堂之大，何求不得，而以大夫禮葬之，薄，請以人君禮葬之。」(3200) / 優孟曰：「馬者王之所愛也…而以大夫禮葬之，薄，請以人君禮葬之。」王曰：「何如。」(3200) / 乃與使者馳而問豫且曰：「今昔汝漁何得。」豫且曰：「夜半時舉網得龜。」(3230) / 元王見而怪之，問衛平曰：「龜見寡人，延頸而前，以何望也。縮頸而復，是何當也。」衛平對曰：「…今延頸而前，以當謝也，縮頸而卻，欲亟去也。」(3230) / 由是觀之，神者生之本也，形者生之具也。不先定其神[形]，而曰「我有以治天下」，何由哉。(3292) / 壺遂曰：「…今夫子上遇明天子，下得守職，萬事既具，咸各序其宜，夫子所論，欲以何明。」(3299)

(動詞目的語：後置乙類：7例) 問陳平，平固辭謝，曰：「諸將云何。」上具告之。(2056) / 上過欲宿，心動，問曰：「縣名為何。」(2584) / 時醫秦信在旁，臣意去，信謂左右閣都尉曰：「意以淳于司馬病為何。」曰：「以為迴風，可治。」(2810) / 漢中尉至，王視其顏色和，訊王以斥雷被事耳，王自度無何〔集解〕：如淳曰：「無何罪。」，不發。(3084) / 轅固生曰：「…湯武與天下之心而誅桀紂，桀紂之民不為之使而歸湯武，湯武不得已而立，非受命為何。」(3123) / 優孟曰：「請歸與婦計之，三日而為相。」…王曰：「婦言謂何。」孟曰：「婦言慎無為，楚相不足為也。…」(3201) / 王先生曰：「天子即問君何以治北海令無盜賊，君對曰何哉。」對曰：「選擇賢材，各任之以其能，賞異等，罰不肖。」(3210)

(介詞目的語：前置甲類：75例) [何以] 博士齊人淳于越進曰：「臣聞殷周之王千餘歲，封子弟功臣，自為枝輔。今陛下有海內，而子弟為匹夫，卒有田常、六卿之臣，無輔拂，何以相救哉。…」(254) / 二世曰：「吾聞之…今朕即位二年之間，群盜並起，君不能禁，又欲罷先帝之所為，是上毋以報先帝，次不為朕盡忠力，何以在位。」(271) / 項王曰：「此沛公左司馬曹無傷言之；不然，籍何以至此。」(312) / 項羽曰：「此沛公左司馬曹無傷言之。不然，籍何以生此。」(364) / 項羽…乃曰：「懷王者，吾家項梁所立耳，非有功伐，何以得主約。本定天下，諸將及籍也。」(365) / 上曰：「…其既不能導，又以不正之法罪之，是反害於民為暴者也。何以禁之。朕未見其便，其孰計之。」(419) / 上曰：「…今法有誹謗妖言之罪，是使眾臣不敢盡情，而上無由聞過失也。將何以來遠方之賢良。其除之。…」(424) / 後二年，上曰：「…夫久結難連兵，中外之國將何以自寧。…」(431) / 曰：「…漢大將軍霍子孟名光者，亦黃帝後世也。此可為博聞遠見者言，固難為淺聞者說也。何以言之。古諸侯以國為姓。霍者，國名也。…」(506) / 桓公曰：「…昔三代受命，亦何以異乎。」(1361) / 是歲，制曰：「…聞者比年登，朕之不德，何以饗此。…」(1381) / 一曰：「…薪不屬兮衛人罪，燒蕭條兮噫乎何以御水。」(1413) / 竇皇后言之於文帝，召見，問之，具言其故，果是。又復問他何以為驗。(1973) / 左右侍御者曰：「今大將軍姊為皇后，三子為侯，富貴振動天下，主何以易之乎。」於是主乃許之。(1983) / 尹夫人前見之，曰：「此非邪夫人身也。」帝曰：「何以言之。」(1984) / 乃謂宦曰：「若歸，試私從容問而父曰：『高帝新棄群臣，帝富於春秋，君為相，日飲，無所請事，何以憂天下乎。』…」(2030) / 丞相亞夫曰：「彼背其主降陛下，陛下侯之，則何以責人臣不守節者乎。」(2078) / 太史公曰：絳侯周勃始為布衣時，鄙樸人也…。雖伊尹、周公，何以加哉。(2080) / …齊如魏其侯竇嬰之正言也，何以有後禍(2090) / 竇嬰在前，據地言

曰：「漢法之約，傳子適孫，今帝何以得傳弟，擅亂高帝約乎。」於是景帝默然無聲。(2090) / 趙王亦非之，曰：「中山王徒日淫，不佐天子拊循百姓，何以稱為藩臣。」(2099) / 於是襄子乃數豫讓曰：「…智伯亦已死矣，而子獨何以為之報讎之深也。」(8-2521) / 齊人淳于越進諫曰：「…今陛下有海內，而子弟為匹夫，卒有田常、六卿之患，臣無輔弼，何以相救哉。」(2546) / 高曰：「安可危也，危可安也。安危不定，何以貴聖。」(2550) / 范陽令曰：「何以弔之。」(2574) / 舍中皆笑曰：「使者往十餘輩，輒死，若何以能得王。」(2575) / 隨何直入，坐楚使者上坐，曰：「九江王已歸漢，楚何以得發兵。」(2601) / 王曰：「丞相數言將軍，將軍何以教寡人計策。」(2611) / 成安君，儒者也，常稱義兵不用詐謀奇計，曰：「…今如此避而不擊，後有大者，何以加之。…」(2615) / 范陽辯士蒯通說信曰：「將軍受詔擊齊，而漢獨發間使下齊，寧有詔止將軍乎。何以得毋行也。…」(2620) / 漢王亦悟，因復罵曰：「大丈夫定諸侯，即為真王耳，何以假為。」(2621) / 叔孫生奏事，因請問曰：「陛下何自築複道高寢，衣冠月出游高廟。…」(2725) / 齊王曰：「天下何所歸。」曰：「歸漢。」曰：「先生何以言之。」(2695) / 曹丘至，即揖季布曰「楚人諺曰『得黃金百(斤)，不如得季布一諾』，足下何以得此聲於梁楚間哉。…」(2731) / 樂布哭彭越，趣湯如歸者，彼誠知所處，不自重其死。雖往古烈士，何以加哉。(2735) / 釋之免冠頓首謝曰：「…今盜宗廟器而族之，有如萬分之一，假令愚民取長陵一抔土，陛下何以加其法乎。」(2755) / 上以胡寇為意，乃卒復問唐曰：「公何以知吾不能用廉頗、李牧也。」(2758) / 上曰：「…公何以言孟舒為長者也。」(2776) / 宦者平即往告相曰：「君之舍人奴有病，病重，死期有日。」相君曰：「卿何以知之。」(2806) / 無文書，口報曰：「吳王不肖，有宿夕之憂，不敢自外，使喻其驩心。」王曰：「何以教之。」(2825) / 上曰：「吳王即山鑄錢，煮海水為鹽，誘天下豪桀，白頭舉事。若此，其計不百全，豈發乎。何以言其無能為也。」(2830) / 竇嬰引卮酒進上，曰：「天下者，高祖天下，父子相傳，此漢之約也，上何以得擅傳梁王。」(2839) / 中行說曰：「匈奴明以戰攻為事，其老弱不能鬪，故以其肥美飲食壯健者，蓋以自為守衛，如此父子各得久相保，何以言匈奴輕老也。」(2899) / 自是之後，漢使欲辯論者，中行說輒曰：「漢使無多言，顧漢所輸匈奴糴絮米糶，令其量中，必善美而已矣，何以為言乎。…」(2901) / 於是中大夫莊助詰蚡曰：「…今小國以窮困來告急天子，天子弗振，彼當安所告愬。又何以子萬國乎。」(2980) / 伍被曰：「天下治。」王意不說，謂伍被曰：「公何以言天下治也。」(3088) / 王曰：「…今吾國雖小，然而勝兵者可得十餘萬，非直適戍之眾，鑣鑿棘矜也，公何以言有禍無福。」(3090) / 單于留之，曰：「月氏在時北，漢何以得往使。時欲使越，漢肯聽我乎。」(3157) / 東方生曰：「…聖帝在上，德流天下，諸侯賓服，威振四夷，連四海之外以為席，安於覆盂，天下平均，合為一家，動發舉事，猶如運之掌中。賢與不肖，何以異哉。…」(3206) / 王先生曰：「天子即問君何以治北海令無盜賊，君對曰何哉。」(3210) / 司馬季主捧腹大笑曰：「…今夫子所賢者何也。所高者誰也。今何以卑汙長者。」(3216) [何為] 人曰：「姬子何為見殺。」(347) / …信乃仰視，適見滕公，曰：「上不欲就天下乎。何為斬壯士。」滕公奇其言，壯其貌，釋而不斬。(2610) / 曰：「臣多多而益善耳。」上笑曰：「多多益善，何為為我禽。」(2628) / 上曰：「誠可，何為不能。顧為柰何。」(2719) / 王數使人請相休，終不休，曰：「我王暴露苑中，

我獨何為就舍。」(2777) / 任少卿曰：「某子甲何為不來乎。」諸人皆怪其見之疾也。(2779) / 將軍怒曰：「今兩君家自為貧，何為出此言。鞅鞅如有移德於我者，何也。」(2781) / 是時武帝在甘泉，使御史大夫暴君下責丞相「何為縱太子」…。(2782) / 武安已罷朝，出止車門，召韓御史大夫載，怒曰：「與長孺共一老秃翁，何為首鼠兩端。」(2839) / 烏有先生曰：「…先生又見客，是以王辭而不復，何為無用應哉。」(3015) / 軹有儒生侍使者坐，客譽郭解，生曰：「郭解專以姦犯公法，何謂賢。」¹⁹⁷(3188) / 上使善相者相通，曰「當貧餓死」。文帝曰：「能富通者在我也。何謂貧乎。」(3192) / 龜能行氣導引。問者曰：「龜至神若此，然太卜官得生龜，何為輒殺取其甲乎。」(3228) / 上大夫壺遂曰：「昔孔子何為而作春秋哉。」(3296) [何從] 文侯曰：「敢問溺音者何從出也。」(1224) / 太后曰：「帝倦矣，何從來。」(1982) / 元王曰：「…漁者利其肉，寡人貪其力，下為不仁，上為無德。君臣無禮，何從有福。寡人不忍，柰何勿遣。」(3231) [何自] 酒罷，呂媼怒呂公曰：「公始常欲奇此女，與貴人。沛令善公，求之不與，何自妄許與劉季。」(344) / 上乃大驚，曰：「吾求公數歲，公辟逃我，今公何自從吾兒游乎。」(2047) / 安陵富人有謂盜曰：「吾聞劇孟博徒，將軍何自通之。」(2744) / 唐以孝著，為中郎署長，事文帝。文帝輦過，問唐曰：「父老何自為郎。家安在。」〔索隱〕按：崔浩云：「自，從也。帝詢唐何從為郎。」(2757) / 田叔取其渠率二十人，各笞五十，餘各搏二十，怒之曰：「王非若主邪。何自敢言若主。」(2777) [何道] 未終，師曠撫而止之曰：「此亡國之聲也，不可遂。」平公曰：「何道出。」(1235) [何於] 二世曰：「吾聞之…明法，下不敢為非，以制御海內矣。夫虞、夏之主，貴為天子，親處窮苦之實，以徇百姓，尚何於法。…」(271) / 召入，至于殿下，有詔問之曰：「何於治北海，令盜賊不起。」(3210)

「曷」(介詞目的語：前置甲類：3例) 天子曰：「聞者河溢，歲數不登，故巡祭后土，祈為百姓育穀。今年豐庶未有報，鼎曷為出哉。」(465) / 天子曰：「聞者河溢，歲數不登，故巡祭后土，祈為百姓育穀。今歲豐庶未報，鼎曷為出哉。」(1392) / 君臣易位，尊卑失序，父兄不辜，幼孤為奴，係纍號泣，內向而怨，曰：『蓋聞中國有至仁焉，德洋而恩普，物靡不得其所，今獨曷為遺己。』(3051)

「安」(動詞目的語：前置甲類：14例) 項王曰：「沛公安在。」良曰：「聞大王有意督過之，脫身獨去，已至軍矣。」(314) / 項王見紀信，問：「漢王安在。」曰：「漢王已出矣。」項王燒殺紀信。(326) / 少帝曰：「欲將我安之乎。」滕公曰：「出就舍。」(411) / 書奏天子，天子憐悲其意，乃下詔曰：「…今法有肉刑三，而姦不止，其咎安在。非乃朕德薄而教不明歟。…」(427) / 數月，張耳大怒，怨陳餘，使張騫、陳澤往讓陳餘曰：「始吾與公為刎頸交，今王與耳旦暮且死，而公擁兵數萬，不肯相救，安在其相為死。…」(2579) / 蒯生曰：「…今足下戴震主之威，挾不賞之功，歸楚，楚人不信；歸漢，漢人震恐：足下欲持是安歸乎。…」(2625)

¹⁹⁷本論文は、この「何謂」の「謂」(*was)は仮借字で、本字は介詞「為」(*waih)だと考える。中國社會科學院語言研究所古代漢語研究室(1999:211)「何謂2」條では、このような仮借により「為什麼」(どうして)の意味を表す「何謂」に言及している。

／文帝輦過，問唐曰：「父老何自為郎。家安在。」(2757)／景帝曰：「梁有之乎。」叔對曰：「死罪！有之。」上曰：「其事安在。」(2777)／書奏天子，天子召見三人，謂曰：「公等皆安在。何相見之晚也。」(2960)／「…為棺槨衣衾，葬之肥陵邑，謾吏曰：『不知安在。』…」(3077)／治鄭二十六年而死，丁壯號哭，老人兒啼，曰：「子產去我死乎。民將安歸。」(3101)／帝曰：「今安在。」對曰：「在宮府門外。」(3210)／使者曰：「今龜安在。」曰：「在籠中。」(3230)／由此觀之，賢人深謀於廊廟，論議朝廷，守信死節隱居巖穴之士設為名高者安歸乎。(3271)

(介詞目的語：前置甲類：2例) 姬侍王，從容語次，譽赫長者也。王怒曰：「汝安從知之。」具說狀。王疑其與亂。(2603)／相工曰：「此子貴，當封。」韋丞相言曰：「我即為丞相，有長子，是安從得之。」(2686)

「誰」(動詞目的語：前置甲類：4例) 袁盎等入見太后：「太后言欲立梁王，梁王即終，欲誰立。」太后曰：「吾復立帝子。」(2091)／訊曰：已矣，國其莫我知，獨堙鬱兮[索隱：《漢書》作「壹鬱」，意亦通。]其誰語。(2494)／二世曰：「…且朕少失先人，無所識知，不習治民，而君又老，恐與天下絕矣。朕非屬趙君，當誰任哉。且趙君為人精廉彊力，下知人情，上能適朕，君其勿疑。」(2559)／安國曰：「…今大王列在諸侯，*悅[索隱：「悅」，《漢書》作「誅」]一邪臣浮說，犯上禁，撓明法。天子以太后故，不不忍致法於王。太后日夜涕泣，幸大王自改，而大王終不覺寤。有如太后宮車即晏駕，大王尚誰繫乎。」(2860)

(動詞目的語：後置甲類：3例) 已而呂后問：「陛下百歲後，蕭相國即死，令誰代之。」(391)／於是上亦問左丞相平。平曰：「有主者。」上曰：「主者謂誰。」(2061)／於是王乃使人馳而往問泉陽令曰：「漁者幾何家。名誰為豫且。豫且得龜，見夢於王，王故使我求之。」(3230)

(動詞目的語：後置乙類：4例) 乃遂西至濮陽，見嚴仲子曰：「…仲子所欲報仇者為誰。請得從事焉。」(2524)／營衛止噲，噲直撞入，立帳下。項羽目之，問為誰。張良曰：「沛公參乘樊噲。」(2654)／意家居，詔召問所為治病死生驗者幾何人也，主名為誰。(2796)／吏以此責解，解實不知殺者。殺者亦竟絕，莫知為誰。(3188)。

(介詞目的語：後置甲類：1例) 「…今復六國，立韓、魏、燕、趙、齊、楚之後，天下游士各歸事其主，從其親戚，反其故舊墳墓，陛下與誰取天下乎…」(2041)

「何所<+場所>」(動詞目的語：前置甲類：1例) 曰：「王知天下之所歸，則齊國可得而有也。若不知天下之所歸，即齊國未可得保也。」齊王曰：「天下何所歸。」曰：「歸漢。」(2698)

(介詞目的語：後置乙類：1例) 帝曰：「雖然，意所欲，欲於何所王之。」王夫人曰：「願置之雒陽。」(2115)

「何所<-場所>」(動詞目的語：前置甲類：1例) 馮驩曰：「聞君好士，以貧身歸於君。」孟嘗君置傳舍十日，孟嘗君問傳舍長曰：「客何所為。」(2359)

「何誰」(動詞目的語：前置甲類：1例) 吳王聞袁盎來，亦知其欲說己，笑而應曰：「我已為東帝，尚何誰拜。」不肯見盎而留之軍中，欲劫使將。(2831)

14.3.1.3 『史記』(秦漢部分)の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-17】に、『史記』(秦漢部分)にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-17】『史記』(秦漢部分)における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	6	1	2	0
「奚-X」疑問フレーズ	1	0	0	0

以下は、『史記』(秦漢部分)の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：前置甲類：6例) 項羽曰：「將戮力而攻秦，久留不行。今歲饑民貧，士卒食芋菽，軍無見糧，乃飲酒高會，不引兵渡河因趙食，與趙并力攻秦，乃曰『承其敝』。夫以秦之彊，攻新造之趙，其勢必舉趙。趙舉而秦彊，何敝之承。…」(305) / 毅對曰：「…夫先主之舉用太子，數年之積也，臣乃何言之敢諫，何慮之敢謀。」(2568) / 趙高曰：「人臣當憂死而不暇，何變之得謀。」(2553) / 群臣百姓救過不給，何變之敢圖。(2557) / 周曰：「三尺安出哉。前主所是著為律，后主所是疏為令，當時為是，何古之法乎。」(3153)

(介詞目的語：前置乙類：1例) 又使徐福入海求神異物，還為偽辭曰：「…於是臣再拜問曰：『宜何資以獻。』海神曰：『以令名男子若振女與百工之事，即得之矣。』」(3086)

(動詞目的語：後置甲類：2例) (司馬季主曰)「…自伏羲作八卦，周文王演三百八十四爻而天下治。越王句踐放文王八卦以破敵國，霸天下。由是言之，卜筮有何負哉。…」(3218) / 二年，東擊項籍而還入關，問：「故秦時上帝祠何帝也。」對曰：「四帝，有白、青、黃、赤帝之祠。」高祖曰：「吾聞天有五帝，而有四，何也。」莫知其說。於是高祖曰：「吾知之矣，乃待我而具五也。」乃立黑帝祠，命曰北畤。(378)

「奚-X」(動詞目的語：前置甲類：1例) 遺詔曰：「…朕既不敏，常畏過行，以羞先帝之遺德；維年之久長，懼于不終。今乃幸以天年，得復供養于高廟。朕之不明與嘉之，其奚哀悲之有。…」(434)

14.4 中古期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順状況

14.4.1 『中本起経』における状況

14.4.1.1 『中本起経』の疑問代詞体系

【図表 14-18】『中本起経』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文	保 留
何	0	28	9	16	21	4	「/如(X)何/」構文 3 「何如」構文 2	0
奚	0	1	0	2	0	0	0	0
誰	5	1	1	0	0	0	0	0
若	0	1	0	0	0	0	0	0
如	0	1	0	0	0	0	0	0
那	0	1	0	2	0	0	0	0
所	0	3	0	0	0	0	0	0
何等	4	3	0	0	1	1	0	0
何故	0	0	0	5	0	0	0	0
何所 <+場所>	0	0	2	0	0	0	0	0
何所 <-場所>	0	1	0	0	1	0	0	0
何物	0	4	1	0	0	0	0	0
何許	0	1	0	0	0	0	0	0
云何	0	0	0	3	0	3	0	0
ゼロ疑問 代詞	0	2	0	0	0	0	0	0

*偈の中にみえる疑問代詞は資料とはしない。

*「何+但」(2例)、「何+得」(2例)は、句ではなく、一つの疑問副詞として扱う(表には含めない)。

*「何從」「何因」は一語化がみとめられるが、疑問目的語の語順の議論と関わるために、便宜的にこれらを介詞句として扱い、これらの語に含まれる「何」を介詞目的語に含めておく。

*「何如」構文というのは、次のように〈比較〉を表す文型を指す。

・又告五人：「汝觀*吾〔三本、金剛寺本「我」〕身，何如樹下。」五人答佛：「爾時憔悴，今更光澤。…」(4-148a)

〔(仏は) さらに五人に言った「お前たち、私の様子をみるに、(鹿園の) 木の下 (に居た時) と比べてど

うであるか。」五人は仏に答えた「あの時は憔悴していたのに、今は光り輝やくようです。…」

14.4.1.2 『中本起経』の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-19】に『中本起経』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-19】『中本起経』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	28	7	0	2
奚	1	0	0	0
誰	0	0	0/(1)	1
若	1	0	0	0
如	1	0	0	0
那	1	0	0	0
所	3	0	0	0
何等	0	0	2(1)	0
何所<+場所>	0	1	0	1
何所<-場所>	1	0	0	0
何物	0	1	4	0
何許	0	0	1	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である（外数として扱う）。

* ゼロ疑問代詞は語順を特定できないので、上表には示さない。

以下は、『中本起経』の疑問目的語の具体例である。

「何」(動詞目的語:前置甲類:28例) 佛告五人:「共議勿起,今作禮何*譚[三本、金剛寺本無]。」(4-148a) / 身口自恣:「何譚為道。」(4-148b) / 佛告五人:「世有二事,以自侵欺。何譚為二。…」(4-148b) / 「…何譚取中。…」(4-148b) / 「…若能斷貪,精進修明,可得泥洹。何譚泥洹。…」(4-148b) / 「…先知四諦。何譚為四。…」(4-148b) / 「…法眼*以[三本「已」]朗,解彼四諦,稍入道跡。何譚為苦。…」(4-148b) / 「…要*因[金剛寺本「從」(?)]五陰受盛為苦。何譚為*習[三本「集」。…」(4-148c) / 「…所愛著*習[三本「集」,不愛亦*習[三本「集」。何譚為盡。…」(4-148c) / 「…其所有愛,覺知有滅,不*愛[三本「受」]不*念[三本「集」、金剛寺本「得」(?)],而覺皆盡。何譚入道。八正為*真[三本、金剛寺本「道」。…」(4-148c) / 佛*告[三本「言」]長者:「若子在斯,何憂不見。」(4-149b) / 佛告眾人:「且自觀身,觀他何為。色

欲無常，合會有離。如*泡[金剛寺本「雹」]如沫，愚者戀著，殃禍由生。身為苦器，眾生皆然。」(4-149c) / 「*瞿曇被害[三本、金剛寺本「世尊無常」]，我生何為。」(4-150b) / 葉受教，顧謂弟子：「汝*問[三本、金剛寺本「聞」]與我共睹神化，吾始信解，當作沙門。汝等何趣。」(4-151c) / 二弟聞此，各謂弟子：「*吾[宋本「告」]欲從兄，汝等何趣。」(4-151c) / 六情所*愛[三本、金剛寺本「受」]為衰，衰不止便苦生。何謂苦生。(4-152a) / 便告弟子：「彼大沙*門[金剛寺本「所」]，有甘露仙。化壞裂俗*網[金剛寺本「罔」]，息心寂行。吾欲啟*請[金剛寺本「精」]，窮微反真。汝將何趣。」(4-154a) / 王問*憂[三本、金剛寺本「優」]陀：「悉達眠時，吾欲*令覺[三本、金剛寺本「覺之」]，彈琴絃歌，然後乃覺。今在深山，何用覺*乎[三本「子」]。」(4-154c) / 善溫問曰：「何謂大賓。為是婚姻國節會耶。」(4-156a) / 祇謂：「價高，子必不及，戲言決*耳[三本「矣」]。復何疑哉。」(4-156b~c) / 梵志暮還，奉齋不餐。婦怪而問：「不審何恨。」(4-156c) / 佛告阿難：「假使女人欲作沙門者，有八敬之法，不得踰越。當以盡壽，學而行之。譬如防水。善治堤塘，勿漏而已。其能如是*者[三本無]，可入我律戒。何謂八敬之法。…」(4-158c) / 佛答王曰：「小有四事，皆不可輕。何謂為四。…」(4-159c) / 於是波斯匿復白佛言：「何謂自愛，何謂自護。」(4-160c) / 女*白[三本「曰」]長者子：「無以豪強威力加弱也。今乞四事。若見惠者，不敢在先。何謂*四事[三本「為四事」]。…」(4-161c) / 尼捷語曰：「汝往難沙門瞿曇一事，當令如噎。」*拔[元本、明本「跋」]提弗言：「何謂一事乃令不對乎。」(4-162a) / 又告長者：「財有八危，損而無益。何謂為八。…」(4-162b)

(介詞目的語：前置甲類：7例) [何緣] 佛言：「彼人長衰。甘露當開，不得受聞。生死往來，何緣得息。五道輪轉，痛矣奈何。」(4-147c) / 恨不*熟[三本、金剛寺本「諦」]觀，何緣復見。(4-150b) / 迦葉問佛：「何緣先到。」(4-150c) / 怪而問佛：「何緣有此。」(4-151a) [何從] 答曰：「不悲，吾齋故耳。」婦重質之：「何從齋來。」(4-156c) [何因] *該[三本「該」]容聞說佛聲，悚然心歡*喜[三本「即」]自念曰：「吾心喜踊，何因得聞無量法乎。」(4-157c) / 賢者阿難見*伯母[宋本「母人」]大愛道如是，即問言：「瞿曇彌，何因弊衣徒跣，面垢衣塵，疲勞悲啼。」(4-158b)

(介詞目的語：後置甲類：2例) [從何] 迦葉問佛：「復從何來。」(4-150c) / 迦葉遊觀見池邊兩石，怪而問佛：「今此池邊兩石妙好。此從何*出[三本、金剛寺本「來」]。」(4-151b)

「奚」(動詞目的語：前置甲類：1例) 便*答[三本「告」]之曰：「吾是子親摩因提也。」問曰：「卿生何許。奚為此問。」(4-156b)

「誰」(動詞目的語：後置乙類：1例) 諸長者子復白佛言：「不審請主姓字是誰。」(4-161c)

(介詞目的語：後置甲類：1例) 憂陀自念：「今為弟子，無緣復還。王須消息，因誰報命。」(4-154b)

「若」(動詞目的語：前置甲類：1例) 樹神人現，問梵志曰：「道士那來，今若*行耶[三本「欲行」]。」同聲答曰：「欲詣神池澡浴，望仙。今日飢渴，幸哀矜濟。」(4-157a)

「如」(動詞目的語：前置甲類：1例) 優*吁 [元、明本「呼」] 問佛：「瞿曇如行。」(4-148a)

「那」(動詞目的語：前置甲類：1例) 迦葉大*喜 [宋本「善」]：「適念欲相供養來何快*耶 [三本、金剛寺本「也」]，問者那行，今*從何 [三本、金剛寺本「所從」] 來。」(4-151b~c)

「所」(動詞目的語：前置甲類：3例) 美音問曰：「道士何來，今欲所之。」具陳彼澤樹神功德：「欲詣舍衛，造*孤獨 [三本「給孤」] 氏，*攢 [三本「浪」] 採法齋，冀遂本志。」(4-157a) / * [三本「時」] 阿耆達聞佛聖德，五情內慘，*即 [三本「即便」] 問曰：「*佛今 [三本「今為」] 所在，可得見不。」(4-162c) / 阿耆達見阿難*來 [三本無]，意猶未悟，即問阿難：「如來今為所在。」阿難報曰：「世尊在此，爾來三月。…」(4-163a)

「何等」(動詞目的語：後置甲類：2例) 王問*憂 [三本「優」] 陀：「吾子在宮，茵*褥 [宋本、元本「蓐」，明本「褥」] 綉縵，錦繡細軟。今所坐具，皆有何等。」(4-154b) / 王問*憂 [三本「優」] 陀：「吾子在國，思陳正治，助吾安民，動*順 [金剛寺本「慎」(?)] 禮節，莫不承風。今者獨處，思憶何等。」(4-154c)

(動詞目的語：後置乙類：1例) 比丘歡喜，前禮佛足，退席白佛：「此示現者，名曰何等。」(4-152a)

「何所<+場所>」(介詞目的語：前置甲類 1例) 二人俱前，相逢中路，便問頽*陞 [三本、金剛寺本「俾」]：「*章 [金剛寺本「彰」(?)] 服反常，何所從出。豈有師宗可得聞乎。」(4-153c)

(介詞目的語：後置甲類 1例) 佛問王言：「從何所來，衣弊形瘦乎。」(4-160b)

「何所<場所>」(動詞目的語：前置甲類：1例) 王問*憂 [三本「優」] 陀：「悉達在家，若其出遊，車有四品，牛羊象馬，以充騎乘。於*今 [金剛寺本無] 出處，何所駕乘。」(4-154c)

「何物」(動詞目的語：後置甲類：4例) 王問*憂 [三本「優」] 陀：「悉達在家，吾為作廚，甘肥眾美。今所飯食，*復 [三本、金剛寺無] 有*何物 [三本「何等物」，金剛寺本「何等口」]」(4-154b) / 王問*憂 [三本「優」] 陀：「吾子在宮，若其*澡 [金剛寺本「洗」] 浴，八種香汁。若今澡浴，皆有何物。」(4-154c) / 王問*憂 [三本「優」] 陀：「悉達在國，栴檀蘇合，以塗子身。今*者為道，為 [金剛寺本無] 有何物。」(4-154c) / 王問憂陀：「吾子行觀，幢麾羽*揚 [金剛寺本「保」(?)]，以為光飾。今者*慄 [三本「慄」、金剛寺本口]，幟復有何物。」(4-154c)

(介詞目的語：前置甲類：1例) 王問*憂 [三本「優」] 陀：「悉達在家，吾為作床，精寶四種。於今*所坐 [三本、金剛寺本「坐床」]，何物用作。」(4-154c)

(介詞目的語：後置甲類：1例) 王問*憂 [三本「優」] 陀：「悉達在家，吾為作床，精寶四種。於今*所坐 [三本、金剛寺本「坐床」]，何物用作。」(4-154c)

「何許」(動詞目的語：後置甲類：1例) 便*答 [三本「告」] 之曰：「吾是子親摩因提也。」問曰：

「卿生^{何許}，奚為此問」(4-156b)

〈ゼロ疑問代詞〉(動詞目的語：2例) 王*性 [三本、金剛寺「素」] 妒害，惡心內發，便問道人：「何故誘*他 [三本「他人」] *妓 [三本、金剛寺「婦」] 女。*著 [三本、金剛寺「在」] 此坐為。卿是何人。」(4-148c) / 行人答曰：「頻頭王子，得道號佛，*今日當來。王及臣民供養故耳。」道士答言 [三本「王今供養道士答曰」]：「世人甚迷。捐棄甘饌，食此人為。如卿所說，人者應食馬麥。」(4-163b)

14.4.1.3 『中本起經』の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-20】に、『中本起經』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-20】『中本起經』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	0	0	10(2)	2

*「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である (外数として扱う)。

以下は、『中本起經』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：後置甲類：10例) 舉聲歎曰：「威靈感人，儀雅挺特。本事^{何*師} [金剛寺本口]，乃得斯容。」(4-148a) / 王問*憂 [三本、金剛寺本「優」] 陀：「吾子在宮，士眾衛侍。今者侍從，*復 [三本、金剛寺本「皆」] 有^{何人}。」(4-154c) / 王問*憂 [三本、金剛寺本「優」] 陀：「悉達每出，椎鍾鳴鼓，觀者填路。今*者 [金剛寺本「若」(?)] 遊止，有^{何音響}。」(4-154c) / 王問*憂 [三本、金剛寺本「優」] 陀：「悉達今者欲領^{何國}。」(4-154c) / 王時大懼，惶怖解焉，而問之曰：「汝有^{何術}，乃至是耶。」(4-157c) / 佛問梵志：「有^{何愁憤}，顏色*憔 [明本「樵」] 悴。」(4-160a) / 便白佛言：「恩愛之樂，有^{何憂悲}。」佛言：「不然。」(4-160a) / 妻聞家議，便以語夫：「我家勢強，必當奪卿。當作^{何計}。」(4-160b) / 大眾僉念：「此老道士有^{何異德}，乃令世尊分*坐 [三本「座」] 命之。此人*僂 [三本「後」] 又，唯佛明焉。」(4-161a) / 時有梵志，清潔德高。從諸弟子，因事入城。顧問眾人：「有^{何異節}，光飾乃爾。」(4-163b)

(動詞目的語：後置乙類：2例) 王*性 [三本、金剛寺本「素」] 妒害，惡心內發，便問道人：「何故誘*他 [三本、金剛寺本「他人」] *妓女 [三本、金剛寺本「婦女」]。*著 [三本、金剛寺本「在」] 此坐為。卿是^{何人}。」(4-148c) / 空中聲曰：「善哉須達。心至乃爾。」即問空聲：「為是^{何神}。」(4-156b)

(介詞目的語：後置甲類：2例) 迦葉問佛：「大道人從^{何徑}來。」(4-150c) / 迦葉問佛：「復從^{何*面} [三本「而」] 來。」(4-150c)

14.4.2 『六度集經』(A部分)における状況

14.4.2.1 『六度集經』(A部分)の疑問代詞体系

【図表 14-21】『六度集經』(A部分)の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文 (その他)
何	0	52	20	26	65	1	「/如(X)何/」17 動詞用法3例
奚	0	1	0	1	0	0	0
胡	0	2	1	2	0	0	0
安	0	3	0	0	0	0	0
焉	0	1	0	11	0	0	0
孰	19	0	0	0	0	0	「孰如」1
誰	10	4	2	0	0	0	0
如	0	5	0	0	0	0	0
所	0	3	1	0	0	0	0
何故	0	0	0	1	0	0	0
何所<+場所>	0	0	1	0	0	0	0
何所<-場所>	0	1	0	0	0	0	0
何物	0	0	1	0	0	0	0
云何	0	0	0	0	0	9	0
ゼロ疑問代詞	0	10	10	0	0	0	0

* 偈中にみえる疑問代詞は言語資料とはしない。

* 「何+嘗」(1例)、「何+但」(2例)、「何+當」(1例)、「何其」(1例)は、一つの疑問副詞として扱う(上表には含めない)。

* 「何以」「何從」は一語化がみとめられるが、疑問目的語の語順の議論と関わるために、便宜的に介詞句として扱い、これらの「何」を介詞目的語に含めておく。

* 「孰如」構文とは、〈比較〉を表す構文的意味を持つ以下のような構造を指す。

・佛告胞闍:「五百車聲, **孰如**雷震之響。」對曰:「千車之聲, 猶不比雨之小雷。豈況激怒之霹靂乎。」(3-42c)
 [佛は胞闍に言った「五百の車の音は、大きな雷鳴の響きと比べてどうであるか。」(胞闍は)答えて言った「千の車の音でさえも、雨の時に鳴る小さな雷にも及ばない。ましてやどうして激烈な霹靂と比べられようか。】

* 「何」の動詞用法としての用例は以下のようなものを指す。

・世尊告曰:「夫民先修德而退崇邪, 治國之政其法何之。」對曰:「先貴後賤, 正法治之。」(3-23b)

〔世尊は（国王に）告げた「もしある民が徳を積んでいたのに（それを）破棄してしまい、邪悪（な行い）を尊ぶようになったとすれば、国の政治として、正しい法ではでその人をどのようにするか。」（国王は）答えて言った「はじめに貴く後に卑しければ、正しい法ではその人を処罰します。〕

14.4.2.2 『六度集経』（A部分）の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-22】に『六度集経』（A部分）にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-22】『六度集経』（A部分）の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	52	15	0	5
奚	1	0	0	0
胡	2	1	0	0
安	3	0	0	0
焉	1	0	0	0
誰	1	0	1(2)	2
如	5	0	0	0
所	3	1	0	0
何所<+場所>	0	0	0	1
何所<-場所>	1	0	0	0
何物	0	0	0	1

*「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である（外数として扱う）。

*ゼロ疑問代詞は語順を特定できないので、上表には示さない。

以下は、『六度集経』（A部分）の疑問目的語の具体例である。各版本の異同は、原則として引用内容の理解、および語順の問題に関わるものに限って示す。金剛寺本は誤字が多いため、明らかな誤字（「乎」を「于」に誤るなど）については逐一示すことはしない。また同本は一部欠損がある点に注意されたい（主な箇所は、『大正蔵』で七巻（74）話から（76）話（3-39a～41a））。

「何」（動詞目的語：前置甲類：52例）何謂為六。一曰布施。…（3-1a）/天帝驚曰：「愚謂大王欲奪吾位，*故〔三本、金剛寺本「是以」〕相擾耳。將何救護。」（3-1c）/等人僉曰：「眾皆慈惠眾皆慈惠。爾將何施。」（3-1c）/忽然之王所，曰：「將欲何求，勞志若茲。」（3-3a）/心*甚〔金剛寺本「其」〕欣豫，還宮憶之，曰：「斯諸理家何益於國乎。…」（3-3b）/曰：「何謂私

財。」(3-3b) / 王曰：「仙歎何之。」對曰：「去國即別，不知所之。」(3-3c~4a) / 曰：「屬夢長生欲斬吾首，將何以也。」(3-5c) / 對曰：「山有強鬼，喜為灼熱。臣自侍衛，將何懼矣。」(3-5c) / 仁王慘然而曰：「…一口再食一身數衣。與時何諍，而去春天之德，取豺狼之殘乎。…」(3-6b) / 僉曰：「斯象猛力之雄，國恃以寧。敵仇交戰，輒為震奔，而今惠讎國，將何恃。」(3-8a~b) / 妻曰：「細靡眾寶，帷帳甘美，何益於己，而與太子生離居乎。…」(3-8c) / 又曰：「…今欲何願，恣求必從。」(3-10b) / 王呼欲抱，兩兒不就，王曰：「何以。」(3-10c) / 曰：「汝父處山，何食自供。」(3-10c) / 雀即翔飛昇樹重曰：「天下有三癡。」王曰：「何謂三。」(3-13b) / 王曰：「何謂。」妃具陳之。(3-18a) / 世尊告曰：「第六魔天獻吾三女，變為*嫗[元本·明本「老」]鬼。今爾屎囊，又來何為。」(3-20a) / 對曰：「斯為不祥也。端正不言，何益大王。…」(3-20b) / 王曰：「…如吾今為人主，從心所欲，不奉正法，終當何之乎」(3-20c) / 時諸沙門，閑居深惟：「世人習*邪[金剛寺本「耶」]樂欲，自始至終無厭五樂者。何謂五樂。…」(3-21a) / 王又念曰：「吾有西土今獲南土，天人眾寶何求不有。…」(3-22a) / 群臣諫曰：「…若崇上德即昌，好殘賊則亡。二義臧否，惟王何之。」(3-22b~c) / 樹神人現顏華非凡，謂阿群曰：「爾為無道，以喪王榮。今復為元酷，將欲何望乎。」(3-22c) / 王曰：「不懼喪身，恨毀吾信耳。」阿群曰：「何謂耶。」(3-22c) / 佛告阿群：「…不睹三尊，未受重戒，猶兒處胎，雖其有目，將亦何睹。有耳何聞。故曰未生也。」(3-23c) / 王愴然曰：「爾復何哀乎。」(3-27a) / 天帝釋即化為*獼[三本、金剛寺無]猴，身病疥*瘡[三本、金剛寺本「癩」]來進曰：「今士眾之多，其*踰[三本、金剛寺本「喻」]海沙，何憂不達於彼洲乎。…」(3-27a) / 道士曰：「吾為國王，國大民多。宮寶嫁女，諸國為上，願即響應，何求不得。…」(3-28a) / 佛告諸比丘：「…調達雖先知佛*偈[金剛寺本無]，猶盲執燭*炤[三本、金剛寺本「照」]，彼不自明，何益於己。」(3-32b) / 人王睹其體殘，血流丹地，不見鹿眾曰：「斯者何以。」(3-32c) / 眾對之，曰：「見拘處籠，將欲何冀[宋、元、明本作「異」]乎。」(3-34b) / 行逢菩薩，問曰：「子何行乎。」答曰：「教民奉佛，修上聖德。」(3-37a) / 佛問女：「爾來何願。」(3-38a) / 躬為坏舟，我神載之，猶獲月影望天寶者也。勞心苦身，何益於己。(3-38b) / 何謂十惡。眼樂色、耳音、鼻香、口味、身好，并上五蓋，謂之十惡。(3-39c) / 何謂五善。一計、二念、三愛、四樂、五曰一心，斯五善處內。(3-39c) / 思十六事，一其心得禪。何謂十六。…(3-40c) / 「何謂為老。」曰：「四大根熟，餘命無幾。」(3-41a) / 太子曰：「吾謂尊榮與凡有異，而俱不免，榮何益己。」(3-41a) / 曰：「何謂為病。」「飲食不節，臥起無常，故獲斯病，或愈或死。」(3-41b) / 「何謂為死。」「命終神遷，形骸*分散[三本、金剛寺本「散矣」]，長與親離，痛夫難處。」(1-41b) / 有一人至吾所，吾問之曰：「眾將何觀乎。」(3-42c) / 人曰：「佛時何之。」答曰：「獨在*屋下[金剛寺本無]。」(3-42c) / 梵志答曰：「爾年東始，智將何逮。而難吾等。」(3-45b) / 天王曰：「斯國眾諸，今以付子，而去何為。」(3-46a) / 七國興禮，造國親迎，俱會相勞：「*翔[金剛寺本「詳」]茲何為。」(3-46c) / 時諸比丘，中飯之後坐於講堂，私共講議：「…違於佛教，後悔何益。」(3-49b~c) / 世尊即起，至比丘所，就*座[金剛寺本「坐」]而坐，曰：「屬者何議。」(4-49c) / 宮女訛曰：「大王光華有損何為。」(3-51c) / 佛告諸比丘：「…下種以時，應節而生，芸除草穢，又無災害，何懼不獲。…」(3-52a)

（介詞目的語：前置甲類：15 例）[何緣] 王曰：「何緣空還乎。」對曰：「不遇。」（3-4a） / 梵志驚曰：「天王何緣若茲乎。」（3-5b） / 王曰：「爾盜乎。」盜者曰：「實盜。」王曰：「爾何緣盜乎。」（3-11b） / *嫡〔三本、金剛寺本「適」〕妻得華，欣懌曰：「冰寒尤甚，何緣有斯華乎。」（3-17a） / 家羊日就而乳，牧人尋察睹兒，即歎曰：「上帝何緣落其子於茲乎。」（3-25c） / 牛躓不進，商人察其所以，睹兒驚曰：「天帝之子，何緣在茲乎。」（3-25c） / 獼猴曰：「…嗟*乎〔三本、金剛寺本「呼」〕無訴，子今何緣翔茲山岨乎。」（3-27a） / 王曰：「爾何緣若茲乎。」（3-32c） [何以] 「…今處山澤，臥*則〔三本、金剛寺本「即」〕草蓐，食*則〔三本、金剛寺本「即」〕*果蓏〔金剛寺本「菓菜」〕，非人所忍，何以堪之乎。」（3-8c） / 王曰：「太子眾寶布施都盡，今處深山，衣食不充，何以惠子。」（3-9b） / 慈心悲愍眾生苦，輪轉三界，何以濟之。（3-16a） / 「…王曰：『如有問，王何以喪身。答如所睹，以貪獲病，遂致喪身。…』…」（3-22b） / 於是富姓妻問曰：「君住吾前，含笑不止。吾屬搏兒，意興由子，子何以笑。」（3-37c） [何從] 王寤曰：「分國不受，豈當盜哉。」問：「子何國人，以何見為沙門乎。何從獲珠。行高乃然，忽罹斯患，將以何由。」（3-28c） [何由] 疾邁見道士若茲，叩頭問曰：「何由致此。」道士具陳厥所由然。（3-28b）

（介詞目的語：後置甲類：5 例）[以何] *兔〔金剛寺本「菟」〕深自惟：「吾當以何*供〔三本、金剛寺本「供養」〕道士乎。」（3-13c） / 抗聲哀曰：「象以其牙，犀以其角，翠以其毛。吾無牙角光目之毛，將以何死乎。」（3-24c） [自何] 道過佛所，曰：「王自何來，身蒙塵土。」（3-23b） / 還山睹鳥，呼名曰：「鉢」。鳥問曰：「自何來耶。」曰：「獵者所來。」（3-28b） / [從何] 王曰：「汝從*何〔三本作「誰」，金剛寺本無〕得斯寶乎。」（3-28b）

「奚」（動詞目的語：前置甲類：1 例）鳥曰：「爾等奚求乎。」曰：「人王亡其正妃，吾等尋之。」（3-27a）

「胡」（動詞目的語：前置甲類：2 例）王即遣使者，就*誥〔三本「詰」〕之曰：「象是國寶，惠怨胡為。不忍加罰，疾出國去。」（3-8b） / 臨壙呼曰：「爾等胡為。」（3-20b）

（介詞目的語：前置甲類：1 例）四姓曰：「子展力致此寶，*胡〔三本、金剛寺本「故」〕為相還。」（3-19a）

「安」（動詞目的語：前置甲類：3 例）妻數有言，*愛婦〔三本「婦愛」，金剛寺本「婦口」（口=判誑不可能）〕難違，即用其言，到葉波國。詣宮門曰：「太子安之乎。」（3-9b） / 王曰：「日之不出，其咎安在。」（3-44a） / 婦曰：「自無數*去〔金剛寺本「劫」〕，誓為室家，爾走安之。」（3-47c）

「焉」（動詞目的語：前置甲類：1 例）常悲菩薩從定寤，左右顧視，不復*視〔金剛寺本「觀」〕諸佛，即復心悲，流淚且云：「諸佛靈耀自何所來。今逝焉如。」（3-43c）

「誰」（動詞目的語：前置甲類：1 例）菩薩伯叔，自相謂曰：「吾之本土，三尊化行，人懷十

善，君仁臣忠，父義子孝，夫信婦貞，比門有賢。吾等將復誰化乎。…」(3-37a)

〔動詞目的語：後置甲類：1例〕婦還睹太子獨坐，慘然怖曰：「…今兒不來，又不睹處，卿以惠誰。可早相語。…」(3-10a)

〔動詞目的語：後置乙類：2例〕王曰：「爾為誰耶。」曰：「吾忍辱人。」(3-25b) / 王曰：「若為誰乎 [三本、金剛寺本無]。」曰：「吾忍辱人。」(3-25b)

〔介詞目的語：後置甲類：2例〕常悲菩薩仰視報曰：「當由誰聞斯尊法乎。以何方便，之何國土，厥師族名」(3-43b) / 兩道士進稽首曰：「斯音絕世，將為誰樂。」(3-44c)

〔如〕〔動詞目的語：前置甲類：5例〕婦還睹太子獨坐，慘然怖曰：「吾兒如之，而今獨坐。…」(3-10a) / 哀慟呼天，動一山間，云：「吾子如之，當如行求乎。」(3-10a) / 王問道士：「*獸跡 [金剛寺本「狩迹」] 歷茲，其為如行乎。」(3-25a) / 父心*忪忪 [宋本「忪忪」、金剛寺本「忪」] 而怖遣使索兒，使睹兄曰：「弟如之乎。」兄如狀對。(3-26a)

〔所〕〔動詞目的語：前置甲類：3例〕曰：「爾所之乎。」答曰：「之仙歎所，庶全餘命。」(3-3c) / 太子聞之，欣然馳迎，猶子睹親，稽首接足，慰勞之曰：「所由來乎。苦體如何。欲所求索，以一腳住乎。」(3-8a) / 其妻年豐，顏華端正，提瓶行汲，道逢年少，遮要調曰：「…彼翁學道內否，不通教化之紀，*希 [三本「稀」] 成一，專愚」*慳 [金剛寺本「籠」] *悞 [宋本「戾」] 爾將所食乎。…」(3-9a)

〔介詞目的語：前置甲類：1例〕太子聞之，欣然馳迎，猶子睹親，稽首接足，慰勞之曰：「所由來乎。苦體如何。欲所求索，以一腳住。」(3-8a)

〔何所<+場所>〕〔介詞目的語：後置甲類：1例〕常悲菩薩從定寤，左右顧視，不復*視 [金剛寺本「觀」] 諸佛，即復心悲，流淚且云：「諸佛靈耀自何所來。今逝焉如。」(3-43c)

〔何所<場所>〕〔動詞目的語：前置甲類：1例〕一龍重曰：「化為小蛇耳。若路無人，尋大道戲，逢人則隱，何所憂乎。」(3-27c)

〔何物〕〔介詞目的語：後置甲類：1例〕王曰：「…當以何物，令*汝 [三本、金剛寺本「爾」] 置鴿，歡喜去矣」(3-1c)。

〈ゼロ疑問代詞〉〔動詞目的語：10例〕〔動詞=為 a〕現于其前曰：「布施濟眾，命終，魂靈入于*太 [金剛寺本「大」] 山地獄，燒煮萬毒為施受害也。爾惠為乎。」(3-1a) / 獵士素知太子逐所由，勃然罵曰：「吾斬爾首，問太子為乎。」(3-9b) / 母惟之曰：「斯怪甚大，吾*用果 [三本「以果」，金剛寺本「以蓮」] 為。急歸視兒，將有他乎。」(3-10a) / 育兒數月，而婦*妊 [金剛寺本「任」] *身 [三本「娠」]，曰：「*吾 [金剛寺本無] 以無嗣，故育異*姓 [金剛寺本「族」]，天授余祚，今*以 [元、明本「用」] 子為。」(3-25c) / 又生*毒 [金剛寺本「毒毒」] 念曰：「吾無嗣已，不*以 [元、

明本「用」斯子為，必欲殺之。」(3-26a) / 王曰：「*龍 [元、明本「爾」] 等來*為。」*對 [三本、金剛寺本「龍對」] 曰：「天王仁惠*接臣等 [宋本「接等吾」，元本、明本「接等」，金剛寺本「接等」]，王欲以貴女為吾王妃。故遣臣等來迎。」(3-29a) / 母還為陳：「天龍、鬼神、帝王、臣民聽經，或得沙門四道者，或受菩薩決者。佛時難值，經法難聞，爾還為。」(3-38a) / 兩道士入水，解其上衣以縛之。女曰：「爾等將以吾為。」(3-45a) / 時有青衣出汲水，開士問曰：「爾以水為。」答曰：「給王女浴。」(3-46a) / 【動詞 = 為 c】曰：「爾不殺*為 [元、明本「烏」] 乎。」(3-19a)

(介詞目的語：10 例) [介詞 = 從] 菩薩存想，吟泣無寧。曰：「吾從得天師經典，翫誦執行，以致為佛，愈眾生病，令還本淨乎。」(3-32a) [介詞 = 緣] 王曰：「吾聞帝釋普濟眾生，赤心惻愴，育過慈母。含血之類莫不蒙祐，爾為無惡緣獲帝位乎。(3-3a) / 婿曰：「吾貧，緣獲給使乎。」(3-9b) / 梵志曰：「吾老氣微，兒捨遁適之其母所，吾緣獲之乎。太子弘惠，縛以相付。」(3-9c) / 兒曰：「昔為王孫，今為奴婢。奴婢之賤，緣坐王膝乎。」(3-10c) / 問梵志曰：「緣得斯兒。」對之如事。(3-10c) / 閑居憶曰：「吾本乞兒，緣致斯賄乎。」(3-14a) / 四姓覺知，誥曰：「緣竊*湏 [明本「瀆」] 乎。」(3-25c) / *從 [三本「夜」] 寢不寐，展轉反側，曰：「吾是補蹠翁耶。真天子乎。若是天子，肌膚何羸。本補*蹠 [金剛寺本「履」(?)] 翁，緣處王宮。…」(3-51c) [介詞 = 為 c] 天神下曰：「爾為*忍 [金剛寺本「仁」] 苦，其可堪*哉 [三本「乎」]。…」(3-2a)

14.4.2.3 『六度集經』(A 部分)の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-23】に、『六度集經』(A 部分)にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-23】『六度集經』(A 部分)における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	6	0	16	5

*「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である(外数として扱う)。

以下は、『六度集經』(A 部分)の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：前置甲類：6 例) 昇背隨焉半*谿 [三本、金剛寺本「溪」]，鯨曰：「吾妻思食爾肝，水中何樂之有乎。」(3-19c) / 答曰：「世尊之言，三界希聞，吾今懷之，何國命之可惜乎。」(3-23a) / 昔者有國，名摩天羅，王名難，學通神明，靡幽不睹，覺世非常曰：「吾身當朽，為世糞壤，何*國 [三本無] 之可保。」(3-28a) / 王告曰：「斯自然之水，不實之物。何罪之有乎。」(3-30a) / 曰：「夫身即四大也。命終四大離，靈逝變化，隨行所之，何賂之有。…」(3-36c) / 商人又曰：「…夫眾生之心，其為無恒，古憎今愛，何常之有。…」(3-37c)

(動詞目的語：後置甲類：16 例) 帝釋邊王稽首于地，曰：「大王，欲何志尚，惱苦若茲。」

(3-1c) / *王〔金剛寺本無〕悔過曰：「…今欲返國，由何道也。」(3-6a) / 妻驚而起，視太子淚出，且云：「將有何罪，乃見迸逐，捐國尊榮，處深山乎。」(3-8b) / 執手入宮，並坐而曰：「賢者說何書。懷何道。而為二儀之仁，惠逮眾生乎。」(3-15c) / 親驚怛曰：「吾子何罪而殺之乎。子操仁惻，蹈地常恐地痛，其有何罪而王殺之。」(3-24c) / 王寤曰：「分國不受，豈當盜哉。」問：「子何國人，以何見為沙門乎。何從獲珠。行高乃然，忽罹斯患，將以何由。」(3-28c) / 世尊曰：「禍福非真，當有何常。…」(3-35b) / 有一除饑，稽首佛足，叉手質曰：「斯老除饑，其雖*匙〔金剛寺本「匙」〕明，戒具行高，然燈供養，後獲何福。」(3-38c) / 菩薩心端，獲彼四禪，群邪眾垢，無能蔽其心，猶若淨繪，在作何色。(3-39b) / 又如陶家埏埴為器，泥無沙礫，在作何器。(3-39b) / 常悲菩薩仰視報曰：「當由誰聞斯尊法乎。以何方便，之何國土，厥師族名。」(3-43b) / 第一弟子*鷲鷲子〔三本、金剛寺本「秋露子」〕，前稽首長跪白言：「車匿宿命，有何功德〔金剛寺本「功德」〕。…」(3-44b) / 國有梵志四萬餘人，王*現〔三本、金剛寺本「視」〕之曰：「吾欲昇天，將以何方。」(3-44b) / 皇孫聞之，慙然不悅，難梵志曰：「斯祀之術，出何聖典乎。」(3-45a) / 又為大臣賃養馬，馬肥又調，曰：「爾悉有何*伎〔三本作「技」〕乎。」(3-46c)

(介詞目的語：後置甲類：5例) 菩薩問曰：「爾以何緣處地獄乎。」(3-1a) / 象王見沙門，即低頭言：「和南道士，將以何事賊吾軀命。」(3-17b) / 王寤曰：「分國不受，豈當盜哉。」問：「子何國人，以何見為沙門乎。何從獲珠。行高乃然，忽罹斯患，將以何由。」(3-28c) / 常悲菩薩仰視報曰：「當由誰聞斯尊法乎。以何方便，之何國土，厥師族名。」(3-43b) / 受命退隱，議曰：「斯梵志道德之靈，吾等當以何方致天女乎。」(3-45a)

14.4.3 『雜寶藏經』における状況

14.4.3.1 『雜寶藏經』の疑問代詞体系

【図表 14-24】『雜寶藏經』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	16	53	21	103	14	「何如」構文 2
胡	0	0	2	0	0	0	0
安	0	1	0	0	0	0	0
誰	30	9	3	0	0	1	0
所	0	1	3	0	0	0	0
何處	0	4	4	4	0	0	0
何等	1	3	0	0	4	0	0
何故	0	0	0	18	0	1	0

何所<+場所>	0	1	0	0	0	0	0
何所<-場所>	0	3	0	0	0	0	0
何物	4	5	0	0	0	0	0
何許	0	2	0	0	0	0	0
如何	0	0	0	3	0	2	0
奈何	0	0	0	1	0	0	0
云何	2	0	0	48	0	18	0
何以故	0	0	0	2	0	2	0
阿誰	0	1	0	0	0	0	0
ゼロ疑問代詞	0	2	0	0	0	0	0

* 偈にみえる疑問代詞は資料とはしない。

* 「何得」(1例)は句とみなし、一つの疑問代詞とはしない(この「何」は連用修飾語とみなす)。

* 「何以」は一語化がみとめられるが、疑問目的語の語順の議論と関わるために、便宜的に介詞句として扱い、この「何」を介詞目的語に含めておく。

* 『雑宝蔵経』における「如何」「奈何」は一つの疑問代詞として扱う。それぞれ二つの形態素の中間に他の形態素の生起を許さないため、上古のものと異なりすでに一語化していると考えられる。

* 「何如」構文とは、〈比較〉を表す構文的意味を持つ以下のような構造を指す。

・ 即隨彌勒，往僧坊中，問上座言：「有人得金滿十萬斤，何如歡喜聽人說法。」(4-470b)

〔(真珠裝飾品の着付け師は) すぐに弥勒に従って僧坊のなかへ行くと、上座和尚にたずねた「金十萬を得た人がいたとして、歡喜して説法を聞くのと(比べると)、どうでありましょうか。〕

* 次の例の「何處」は前置目的語ではなく、連用修飾語とみなす。その理由については、本論文 12.2.1 を参照。

・ 帝釋及三十三天聞佛教已，即至佛所，頂禮佛足，在一面立。白佛言：「世尊，當何處坐。」佛言：「坐此座上。」(4-476c)

〔帝釈および三十三天は仏の教えを聞き終わると、すぐに仏のところに来た。仏足の下に拝礼し、傍らに立ち、仏に言上した。「世尊よ。(私は) どこにすわるべきでしょうか。」仏は言った「この座にすわりなさい。〕

14.4.3.2 『雑宝蔵経』の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-25】に『雑宝蔵経』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-25】『雑宝蔵経』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	11	48	5	5
胡	0	2	0	0
安	1	0	0	0
誰	0	0	3(6)	3
所	1	3	0	0
何處	0	0	4	3(1)
何等	0	0	3	0
何所<+場所>	1	0	0	0
何所<-場所>	3	0	0	0
何物	0	0	4(1)	0
何許	0	0	2	0
阿誰	0	0	0(1)	0

*「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である（外数として扱う）。

*ゼロ疑問代詞は語順を特定できないので、上表には示さない。

以下は、『雑宝蔵経』の疑問目的語の具体例である。各版本の異同は、原則として引用内容の理解、および語順の問題に関わるものに限って示す。なお、金剛寺本は全七巻であるが、内容上は大正蔵本所収の物語に相当するものを原則としてすべて収めるものと考えられる。ただし現存の金剛寺本は巻第五を欠いており、これは大正蔵本の巻第四の一部、巻第六、巻第七の一部に相当すると推定される。金剛寺本は誤字が多いため、明らかな誤字については逐一示すことはしない。

「何」（動詞目的語：前置甲類：11例）比丘言：「尚有如此名徳，何憂不能於先來此。」（4-483c）／王復問言：「若二俱得。何用出家。」（4-493a）／龍即現身，而語王言：「我既不食，何用殺生而祠我為。」（4-461c）／有夜叉鬼，化作年少。…語賈客言：「不疲極也。載是水草，竟何用為。近在前頭，有好水草，從我去來，當示汝道。」（4-465c）／答言：「…又有三事。傾敗王國。」王復問言：「何謂三事。」（4-485b）／即到力士所，語力士言：「我等作要，新取婦者，奉上力士。為二事故，一者欲得好子，使似力*士〔三本、金剛寺本「士之力」〕，二者以報力士*之恩〔三本、金剛寺本「恩」〕。」力士答言：「何用是為。」（4-487a）／後王問尊者言：「我所施食，不問麤細，皆言充足。此事何謂也。」（4-489c）／時毘摩天化作其弟，至其兄邊。兄瞋弟言：「何不墾殖，來此何為。」（4-491c）／於是毘摩天，還復天像，而語之言：「…今雖日夜精勤，求我富饒財寶，將何可獲。…」（4-491c~492a）／時梟答言：「今以困苦，來見投*造〔金剛寺本「我」〕，一身孤單，竟何能為。」遂便*畜養〔金剛寺本「養」〕，*給〔三本「恒」、金剛寺本「給

恒]與殘肉。(4-499a) / 烏詐歡喜，微作方計，銜乾*樹 [金剛寺本「草」] 枝，并諸草木，著梟穴中，似如報恩。梟語烏言：「何用是為。」(4-499a)

(介詞目的語：前置甲類：48 例) [何以] 時弟羅漫語其兄言：「兄有勇力，兼有扇羅，何以不用，受斯恥辱。」(4-447b) / 慈童女語獄卒言：「汝道此輪不曾有墮，今何以墮。」(4-451c) / 諸子*白 [三本、金剛寺本「白王」] 言：「何以愁*惱 [三本、金剛寺本(?)「慘」]。」(4-452a) / 千子問言：「何以為驗得知我母。」(4-453a) / 釋提桓因即向鸚鵡所，而語之言：「此林廣大，數千萬里。汝之翅羽所取之水，不過數滴。何以能滅如此*大火 [金剛寺本「火大」]。」(4-455a) / 弟言：「豈可不留與兄*耶 [金剛寺本「也」]。」兄言：「何以與我。」(4-456c) / 道人得妙，語貧人言：「何以極少，何以極*小 [金剛寺本「少」]。」(4-467a) / 道人復言：「何以極少，何以極小。」(4-467a) / 又作念言：「若此道人是淨持戒得道人者，使我現得領四小國王。」道人復言：「何以極少，何以極小。」(4-467a) / 而語之言：「汝非某甲子耶。」答言：「我是。」問言：「何以*褻褻 [三本「經纏」、金剛寺本「藍纏」] 乃至爾*也 [三本「耶」]。」(4-467b) / 諸下坐等深生*慊 [金剛寺本「嫌」(?)] 心，而作此念：「得彼乞女兩枚小錢，上座自輕，為其咒願。如常見錢，何以不爾。」(4-467c) / 時斷事人問其夫言：「何以爾也。」(4-468b) / 婦問夫言：「何以落淚。」答言：「見他修福，常得快樂。自鄙貧賤，無以修福，是以落淚。」(4-468b) / 王怪所以，自至僧坊，語彼人言：「汝今何以不後日作，共我諍日。」(4-468c) / 答言：「唯一日自在，後屬他家，不復得作。」王即問言：「何以不得。」(4-468c) / 婦聞此語，極大瞋恚，自絕瓔珞，著垢膩衣，在地而坐。夫從外來，問言：「何以爾*耶 [三本、金剛寺本「也」]。」(4-485a) / 王語鸚鵡：「何以罵我。」鸚鵡答言：「說王非法，乃欲相益，不敢罵也。」(4-485b) / 佛問剃髮者：「何以不剃。」答言：「畏故，不敢為剃。」(4-485c) / 難陀往問言：「諸宮殿中，盡有天子，此中何以獨無天子。」(4-486a) / 佛已來至，夫白佛言：「此食不可食。」佛言：「何以不可食。」(4-487c) / 王問素摩：「何以默然。」(4-489a) / 王復問言：「不審此鉢為自然出，為有從來。」尊者答言：「而此鉢者非自然有，從恒河水龍宮中來。何以知之。…」(4-491c) / 即如天語，往問彼牛：「汝今何以*以 [宋、元、明本作「似」] 為苦為樂。」(4-492b) / 王復問言：「日之在上，其體是一。何以夏時極熱，冬時極寒，夏則日長，冬則日短。」(4-493b) / 時有釋女，名曰電光。…瞋恚呵罵耶輸陀羅：「汝於尊長所親，何以自損。…」(4-496b) / 於此樹下，更經少時，見一外道出家之人，身服納衣，安行徐步，去去眾*生 [三本「蟲」]。老婆羅門而問之言：「何以並行，口唱「去去」。」(4-498a) [何緣] 王聞歡喜，…將詣佛所，而白佛言：「世尊，此女何緣生於深宮，身體醜惡，人見驚怪。復以何因今卒變好。」(4-458a) / 深生歡喜，更問餘義：「欲從何因生，何緣增長，云何得滅。」佛言：「欲因覺生，緣覺觀增長。有覺觀則有慾，無覺觀欲則滅。」(4-477b) / 深生歡喜，更問餘義：「覺觀因何而生，何緣增長，云何而滅。」[覺觀從調戲生，緣調戲增長，無調戲覺觀則滅。](4-477b) / 弟子白言：「不審尊者，何緣微笑。願說其意。」尊者答言：「時至當說。」(4-483b) / 諸弟子等，長跪白言：「不審向者何緣微笑，復慘然變色。」(4-483b) / 諸獼猴眾，皆共瞋*呵 [三本「呵責」、金剛寺本「呵讀」]：「此姪獼猴，眾所共有，何緣獨當。」(4-486b~c) / 時梟憐愍，欲存養畜。眾梟皆言：「此是怨家，不可親近。何緣養畜，以長怨敵。」(4-498c) [何為] 兄語婆羅陀言：「弟

今何為將此軍眾。」(4-447b) / 眾人見其聰明福德，而勸之言：「汝父在時，常入海採寶。汝今何為不入海也。」(4-451a) / 子白父言：「我無過罪，王唯有一子，何為殺我。」(4-456c) / 兒即向母，懺悔而作是言：「唯有我一子，亦無過罪。何為殺我。」(4-456c) / 鸛雀語言：「何為作此語。來共作親善。」(4-464a) / 長者子食竟，自來還*歸 [三本、金剛寺本「家」]，語其婦言：「今日送食，何為極晚。」(4-475b) / 取是商主所棄珍寶，擔飛在前。既得出海，以還商主。*諸 [金剛寺本「語」] 商人言：「我等何為不於寶所，即自并命，見是苦惱。」(4-488b) [何由] 母即語言：「我唯一子，當待我死，何由放汝。」(4-451a) / 母見子意正，前抱腳哭，而作是言：「不待我死，何由得去。」(4-451a) / 往到仙人所，語仙人言：「國有大難，何由攘*卻 [三本、金剛寺本「卻仙人」]。」(4-452a) / 兄語弟言：「卿不耕田下於種子，財*繫 [三本、金剛寺本「富」] 豐有，何由可獲。」(4-491c) / 時王答言：「今我父頭，死來多日，顏色不變。自非得道，何由有是。…」(4-495c)

(介詞目的語：後置甲類：5 例) [以何] 其弟見已，倍懷嫉妒。…而語之言：「汝父輔相，先看我厚。今彼比丘至止已來，不知以何幻惑汝父。今於我薄。…」(4-460c) / 佛行見之，即往到邊，而問言曰：「汝於今*日 [三本、金剛寺本「者」]，以何為苦。」(4-482a~b) [因何] 深生歡喜，更問餘義：「貪嫉因何而生。何因何緣得生貪嫉。何因緣生，何因緣滅。」(4-477a) / 深生歡喜，更問餘義：「覺觀因何而生，何緣增長，云何而滅。」「覺觀從調戲生，緣調戲增長，無調戲覺觀則滅。」(4-477b) / 深生歡喜，更問餘義：「調戲因何生長，云何而滅調戲。」(4-477b)

「胡」(介詞目的語：前置甲類：2 例) 時尊者祇夜多即語王言：「貧道今者，未堪為王作福田也。胡為躬自枉屈神駕。」(4-484a) / 王答言：「我先作惡，喻彼熱鑊，今修諸善，慚愧懺悔，更不為惡，胡為不滅。三塗可止，人天可得，即時解悟。」(4-484c)

「安」(動詞目的語：前置甲類：1 例) 問長者子言：「誰教汝此語。」答言：「我父教我」王言：「汝父安在。」(4-455c)

「誰」(動詞目的語：後置甲類：3 例) 兄問言：「*更欲 [三本、金剛寺本「欲更」] 與誰。」(4-456c) / 婦答之言：「今日三過，為君送食。何故遲晚。」便喚婢問：「汝朝三過，取食與誰。」(4-475b) / 於其一夜，多失財物。時王聞已，問長者言：「有誰來去，*致令 [三本、金剛寺本「令致」] 亡失。」(4-498a)

(動詞目的語：後置乙類：6 例) 時盲父母聞王行聲索索，心生恐怖：「非我子行，為是誰也。」(4-448b) / 婦言：「汝為是誰，勸諫於我。」(4-473c) / 彼沙門婆羅門，問我是誰。我言：「是帝釋。」(4-477c) / 夜至塚間，聞喚王聲，即便喊言：「叱，汝是誰。」(4-493c) / 爾時光明遍滿王宮，時王問言：「今此光瑞為是誰耶。願見告示。」(4-495b) / 比圖醯*言 [三本、金剛寺本「云」]：「若其殺我，擔*心 [三本、金剛寺本「我心」] 血去，一切之人，心血一種，知是誰許。…」(4-488a)

〔介詞目的語：後置甲類：3 例〕阿難語言：「汝從誰得鉢，還與本處。」於是持鉢，逐佛至尼拘*屢〔金剛寺本「婁」〕精舍。（4-485c）／時有釋女，名曰電光。…瞋恚呵罵耶輸陀羅：「…悉達太子出家學道，已經六年。生此小兒，甚為非時。從誰而得。…」（4-496b）／悅頭檀王聞是語已，瞋恚而言：「…諸釋所知，我子悉達，本在家時，聞有五欲，耳尚不聽，況當有欲而生於子。如斯之言，深為鄙媠。從誰得子。毀辱我等。…」（4-497a）

〔所〕（動詞目的語：前置甲類：1 例）既到家已，其婦問言：「三年客作，錢財所在。」（4-468a）

〔介詞目的語：前置甲類：3 例〕見彼人舍有七重蓮華，怪而問*之〔金剛寺本無〕：「爾舍所以有此蓮華。」（4-451c）／婦言：「我是君婦賴提。」夫怪而問之：「所以卒爾。」（4-458a）／生天之法，法有三念。一者念本所從來。二者念定生何處。三者念先作何業，得來生天。（4-488c）

〔何處〕（動詞目的語：後置甲類：4 例）夫生天者，法有三念，自思惟言：「本是何身，自知人身。今生何處。定知是天。昔作何業。來生於此。…」（4-474b）／初生天時，具作三念。一者自念，我今生在何處。自知生天。（4-475b）／彼二比丘，而問之言：「汝識尊者祇夜多不。」答言：「我識。」彼比丘言：「今在何處。」（4-483c）／生天之法，法有三念。一者念本所從來。二者念定生何處。三者念先作何業，得來生天。（4-488c）

〔介詞目的語：後置甲類：3 例〕〔向何處〕便問夫言：「日日恒向何處來還。」夫答婦言：「佛邊去來。」（4-473c）／波斯匿王遇到佛所，常見五百鴈羅列佛前，是日不見。便問佛言：「此中諸鴈，向何處去。」（4-488c）／〔從何處〕初生天時，具作三念。…二者自念，從何處終，而來生天。知從人道中生於天上。（4-475b）

〔介詞目的語：後置乙類：1 例〕佛語帝釋：「汝於何處，得是不壞信。」（4-478a）。

〔何等〕〔動詞目的語：後置甲類：3 例〕諸子問言：「欲作何等。」時王答言：「欲貢獻彼梵豫國王。」（4-453a）／時王問言：「汝欲求何等。」答言：「更無所求，唯願大王去此惡法。」（4-455c）／昔日有一婆羅門，事摩室天，晝夜奉事。天即問言：「汝求何等。」婆羅門言：「我今求作此天祀主。」（4-492b）

〔何所<+場所>〕（動詞目的語：前置甲類：1 例）鄰比問言：「汝父母為何所在。」（4-455b）

〔何所<-場所>〕（動詞目的語：前置甲類：3 例）答言：「我聞汝名，故來欲戰。」問言：「汝何所能。」即捉弓箭而射是鬼。（4-487c）／鴈王白王言：「…一切眾生及與人鬼，悉皆微*滅〔三本「滅」〕。無可逃避，無可恃怙，不可救濟。當於爾時，何所恃賴。惟念如是，宜應慈心普育一切，修行正法，作諸功德。…」（4-489a）／梟聞*聲〔金剛寺本「其聲」〕已便出*語〔三本「問」〕言：「*今爾〔三本「爾今」〕何故破傷頭腦，毛羽毀落，來至我所。悲聲極苦，欲何所說。」（4-498c）

「何物」(動詞目的語：後置甲類：4例) 王問夫人言：「為生何物。」(4-452a) / 王遣人問：「為生何物。」(4-452c) / 問獵師言：「汝須何物而射於我。」答言：「我無所須。梵摩達王募索汝牙，故來欲取。」(4-454a) / 王聞其語，信以為然，益增憂惱，即問之言：「若襪厭時，當須何物。」(4-490b)

(動詞目的語：後置乙類：1例) 王問之言：「彼音聲者，為是何物。」(4-494a)

「何許」(動詞目的語：後置甲類：2例) 王復問言：「汝盲父母，今在何許。」(4-448b) / 其夫答言：「我所得財，今已舉著堅牢藏中。」婦時問言：「堅牢之藏，今在何許。」(4-468a)

「阿誰」(動詞目的語：後置乙類：1例) 仇伽離問言：「汝是*阿誰」[金剛寺本「何誰」]。(4-461a)

〈ゼロ疑問代詞〉(動詞目的語：2例) [動詞=為 a] 子言：「我今望*得[三本「得父」] 現世安樂、後世安樂。不用我語，用是活為。」(4-481b) / 時一比丘即求決疑而問之言：「尊者有如此威德，自然火為。」(4-483c)

14.4.3.3 『雜寶藏經』の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-26】に、『雜寶藏經』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-26】『雜寶藏經』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	0	0	45/(3)	37
「何等-X」疑問フレーズ	0	0	3	0

*「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である(外数として扱う)。

以下は、『雜寶藏經』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：甲類後置：45) 聞是語已，而白母言：「我父在時，恒作何業。」(4-451a) / 慈童女問言：「我作何福，復作何罪。」(4-451b) / 王言：「薩耽善王有五百力士。皆將軍眾，欲來伐我。我今乃至無是力士，與彼作對。知何方計，得卻彼敵。」(4-452a) / 諸比丘白佛言：「此女有何因緣，生鹿腹中，足下生蓮華。復有何因緣。為王夫人。」(4-453b) / 諸比丘疑怪問佛：「此賢比丘尼，何以故從出家以來不見佛。今日得見佛懺悔，有何因緣。」(4-454a) / 象王問言：「著何衣服。」答言：「身著袈裟。」(4-454a) / 釋提桓因以天眼觀：「有何因緣。我宮殿動。」(4-455a) / 國王得已，促問：「國中誰解此者。若有解者，欲求何事，皆滿所願。」(4-455c) / 時諸比丘，即便問佛：「駝驃比丘有何因緣，而被誹謗，復以何*因[三本無]緣，得是大力。復以何因*緣[三本無]，逮得羅漢。」(4-457a) / 王往問佛：「此女

先世作何功德，得生王家。」(4-458b) / 七日安隱，相師見過七日，怪其所以，問王言：「作何功德。」(4-469a) / 得過七日，婆羅門見，怪其所以，而問之言：「汝修何福。」比丘答言：「我無所修，唯於昨日入僧*房 [三本、金剛寺本「坊」] 中，見壁有孔，補治而已。」(4-469a) / 市邊有一大富長者，雇其客作。長者問言：「汝今能作何事。」答言：「是作皆能三年客作。」(4-469b) / 長者問言：「汝今得金，用作何事。」答言：「我欲供養佛僧。」(4-469b) / 即還歸家，至寂靜處，共相問言：「汝聞何語。」(4-470a) / 諸比丘等怪其所以，即問佛言：「世尊，今此天女作何功德，獲此天身，端*政 [三本、金剛寺本「正」] 殊特。」(4-471c) / 時諸比丘即問佛言：「此女往昔作何行業，得報如是。」(4-472a) / 時諸比丘即問佛言：「此天往昔作何福業，得生天*中 [三本、金剛寺本無]，而獲聖果。」(4-472b) / 婆羅門女言：「汝作佛齋，得何功德。」(4-474a) / 夫生天者，法有三念，自思惟言：「本是何身，自知人身。今生何處。定知是天。昔作何業。來生於此。…」(4-474b) / 諸比丘問言：「昔作何福，得生天中，身若此香。」(4-475a) / 帝釋白佛言：「此三人為得何法，能作此種種神變，來見世尊。」(4-477a) / 命猶未斷，賈客語言：「汝濟拔我，欲求何願。」答言：「唯求作佛，度一切人。」(4-478b) / 時彼國中，諸相師等咸言：「大早應十二年，作何方計，攘卻此災。」(4-479b) / 時摩訶羅，重被打已，過問打者言：「我有何愆，見打乃爾。」(4-480a) / 時摩訶羅，復問之言：「我有何罪，橫加打棒。」(4-480a) / 佛語諸比丘：「利養者是大災害，能作障難。乃至羅漢，亦為利養之所障難。」比丘問言：「能作何障。」(4-481c) / 比丘問言：「昔作何業，生於彼天。」(4-482c) / 比丘問言：「昔為何業，生此天宮。」(4-482c) / 比丘問言：「往作何業，今得生天。」(4-483a) / 時王問言：「有何非法。」答言：「有七事非法，能危王身。」(4-485b) / 女人答言：「女人還在*女 [三本「汝」] 前而裸小便，有何等恥。一國都是女人，唯大力士是男子耳。若於彼前，應當慚愧，於汝等前，有何羞恥。」(4-487a) / 佛言：「世間有毒，不過三毒，我尚消除。有何小毒能中傷我。」佛即食其食，都無有異。(4-487c) / 比圖醯問夜叉言：「索我來者，有何意故。」夜叉不答。(4-488a) / 生天之法，法有三念。一者念本所從來。二者念定生何處。三者念先作何業，得來生天。(4-488c) / 迦*栴 [三本、金剛寺本「旃」] 延白王言：「我有何過，乃欲見害。」(4-489c) / 王素聰明，聞其語已，即領其意。*放 [金剛寺本「於」] 迦栴延，不興惡心，密遣二人，尋逐其後。觀其住止，食何飲食。(4-489c) / 即問尊者：「有何因緣，如此諸國，各以所珍，奉獻於我。」(4-491a) / 羊便咽咽笑而言曰：「而此樹者有何神靈。…」(4-492b) / 乘是善緣，得生天上。即生三念。一念憶本為是何身，二念本緣修何功德，三念現今定是天生。(4-495a) / 而彼大臣共有心者，地道而出，向尊者所，而白之言：「感惟此城，一*日 [金剛寺本「旦」(?)] 覆沒，雨土成山，君民并命。先有何緣，同受此害。」(4-496a) / 爾時諸女而問女言：「爾*作 [三本、金剛寺本「因」] 何緣，得此良匹。」(4-496a) / 既至城已，尊者迦栴延，而白佛言：「*好 [三本無] 音聲長者，有何因緣，有好音聲，巨富無量，財寶盈溢。」(4-496a~b) / 時執杖釋，作色瞋忿，罵耶輪陀羅：「叱爾凡鄙，可愧之甚。辱我種族，有何面目，我等前立。」(4-496c~497a) / 眾鳥答言：「如汝所說，當作何方，得滅讎賊。」(4-498c)

(動詞目的語：後置乙類：3 例) 夫生天者，法有三念，自思惟言：「本是何身，自知人身。」

今生何處。定知是天。昔作何業。來生於此。…」(4-474b) / 五百群鴈，在王殿上，空中作聲。時王問言：「此是何鴈。」(4-489a) / 時聞*子 [三本、金剛寺本「于」] 宮中，舉聲大哭，王倍驚怖，謂太子死，問前走使女言：「是何哭聲，將非我子死耶。」(4-496c)

(介詞目的語：後置甲類 37 例) 諸比丘疑怪，白佛言：「世尊，以何因緣繫屬於他。復以何緣得阿羅漢。」(4-450c) / 釋提桓因宮殿震動，而自念言：「今以何因緣宮殿震動。」(4-454c) / 又問：「復以何緣得見諦道。」(4-455b) / 時諸比丘，即便問佛：「駝驃比丘有何因緣，而被誹謗，復以何*因緣 [三本、金剛寺本「緣」]，得是大力。復以何*因緣 [三本、金剛寺本「因」]，逮得羅漢。」(4-457a) / 王即問言：「以何業緣，在於獄中受苦經年。」(4-457b) / 王聞歡喜，…將詣佛所，而白佛言：「世尊，此女何緣生於深宮，身體醜惡，人見驚怪。復以何因今卒變好。」(4-458a) / 仇伽離問言：「汝是阿誰。」答言：「我是婆伽梵。」「為何事來。」(4-461a) / 爾時比丘白佛言：「世尊，以何因緣尊者舍利弗、目連等為他重謗。」(4-461c) / 比丘問佛：「以何因緣，生於天宮。」(4-472c) / 比丘問言：「以何業緣，生此天中。」(4-473a) / 比丘問言：「此天女者以何因緣，得受天身。」(4-473a) / 比丘問言：「以何因緣，生此天中。」(4-473b) / 夫在天上，自觀察言：「我以何*緣 [三本、金剛寺本「因」]，生此天上。」(4-473b) / 比丘問言：「以何因緣，得生此天。」(4-473c) / 比丘問言：「以何因緣，生於天中。」(4-474a) / 比丘問言：「今此天女以何因緣，生於天上。」(4-474a) / 比丘問言：「此天女者以何業行，得生於天。」(4-474b) / 諸比丘言：「以何因緣，令此女人生天得道。」(4-474b) / 比丘白言：「以何因緣，得生於天。」(4-474c) / 比丘問言：「以何業緣，受是果報。」(4-475a) / 諸比丘問佛言：「今此天女以何因緣，得生天上。」(4-475b) / 比丘問佛：「今此天女以何因緣，生於天上。」(4-475b) / 比丘問言：「今此天子以何業緣，得生天宮。」(4-475c) / 比丘問言：「此天子往日以何因緣，得生天宮。」(4-475c) / 比丘問言：「此天昔日以何業*因緣 [三本、金剛寺「緣」]，得生天上。」(4-476a) / 深生歡喜，更問餘義：「欲從何因生，何緣增長，云何得滅。」佛言：「欲因覺生，緣覺觀增長。有覺觀則有慾，無覺觀欲則滅。」(4-477b) / 帝釋歡喜，復問餘義：「欲滅調戲，能修八正道。此八正道，比丘復因何法，而得增長。」(4-477b) / 比丘問言：「以何業緣生於天宮。」(4-482a) / 比丘問言：「以何業行，生於天上。」(4-482b) / 比丘問言：「以何業行得生天上，威德如此。」(4-482b) / 比丘問言：「以何因緣生於天宮，乘此寶車。」(4-482b) / 比丘問言：「以何業緣生於天上。」(4-483a) / 王問佛言：「此諸群鴈，以何業緣墮於畜生，命終生天，今日得道。」(4-488c) / 時復問言：「汝以何緣受是牛形。」(4-492b) / 募人問言：「明日來時，我當以何事共相承迎。」(4-493c)

「何等+X」(動詞目的語：後置甲類：3 例) 見諸女人共聚齋食，問言：「汝等今作何等吉會。與汝親厚，而不命我。」(4-474a) / 女人答言：「女人還在*女 [三本「汝」] 前而裸小便，有何等恥。一國都是女人，唯大力士是男子耳。若於彼前，應當慚愧，於汝等前，有何羞恥。(4-487a) / 初生天時，具作三念。…三者自念，乘*何等業緣 [三本、金剛寺本「何業緣」]，而得生天。知由施食獲此果報。(4-475b)

14.4.4 『過去現在因果経』における状況

14.4.4.1 『過去現在因果経』の疑問代詞体系

【図表 14-27】『過去現在因果経』の疑問代詞一覧

	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	6	18	3	30	7	「/如(X)何/」構文 1
安	0	0	0	1	0	0	0
焉	0	0	0	1	0	0	0
誰	5	1	0	0	0	0	0
何處	1	1	2	0	0	0	0
何等	0	7	0	0	8	0	0
何故	0	0	0	12	0	0	0
何所<+場所>	0	2	1	0	0	0	0
何所<-場所>	0	3	0	0	0	0	0
何許	0	3	0	0	0	0	0
何者	1	0	0	0	0	0	0
云何	0	0	0	57	0	5	0
何以故	0	0	0	0	0	3	0

* 偈にみえる疑問代詞は資料としない。

* 「何+獨」(1例)は句とみなし、一つの疑問代詞としては扱わない(「何」は連用修飾語とする)。

* 「何從」は一語化がみとめられるが、疑問目的語の語順の議論と関わるために、便宜的に介詞句として扱い、この「何」を介詞目的語に含めておく。

14.4.4.2 『過去現在因果経』の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-28】に『過去現在因果経』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「/如(X)何/」における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-28】『過去現在因果経』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	6	6	0	12
誰	0	0	1	0

何處	0	0	1	0(2)
何等	0	0	7	0
何所<+場所>	2	0	0	1
何所<-場所>	3	0	0	0
何許	0	0	3	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である（外数として扱う）。

*ゼロ疑問代詞は語順を特定できないので、上表には示さない。

以下は、『過去現在因果経』の疑問目的語の具体例である。

「何」（動詞目的語：前置甲類：6例）王還宮内，即敕宮中聰明有智舊宿女人：「汝可往至摩訶那摩長者之家，瞻看其女容儀禮行為何如耶。可停於彼至滿七日。」（3-629b）／從者答曰：「此老人也。」太子又問：「何謂為老。」（3-629c）／從者答曰：「此病人也。」太子又問：「何謂為病。」（3-630a）／太子又問：「何謂為死。」（3-631a）／比丘答言：「我是比丘。」太子又問：「何謂比丘。」（3-631c）／各自念言：「…我等今者復何願戀不出家耶。」（3-645c）
（介詞目的語：前置甲類：6例）[何緣] 諸臣答言：「…不知何緣忽有病人。非是我等之罪咎也。」（3-630b）／深感其意，即答王言：「…我今既捨轉輪王位，亦復何緣應取王國。王以善心捨國與我，猶尚不取。何緣以兵伐取他國也。…」（3-637b）／是時二弟奔競相就而共議言：「我兄，今者若復不為惡人所害。諸物何緣從水而來。」（3-649c）／[何從] 爾時王問諸從者言：「汝等並見病人在路，何從而至。」（3-630b）／[何為] 爾時太子聞王師語，以深重聲答王師言：「…若令恩愛終日合會，又無生老病死苦者，我復何為來至於此。…」（3-636c）／
（介詞目的語：後置甲類：12例）[從何] 優陀夷言：「出城不遠，逢見死人。亦不知其從何而來。…」（3-631b）／爾時菩薩至第三夜，…又觀三有業從何而生，即知三有業從四取。又觀四取從何而生，即知四取從愛而生。又復觀愛從何而生，即便知愛從受而生。又復觀受從何而生，即便知受從觸而生。又復觀觸從何而生，即便知觸從六入生。又觀六入從何而生，即知六入從名色生。／又觀名色從何而生，即知名色從識而生。又復觀識從何而生，即便知識從行而生。又復觀行從何而生，即便知行從無明生。（3-642a~b）／心懷驚怪而往問佛：「年少沙門，汝此樹間有四方石及大石槽。從何而來。」（3-648c）／[以何] 於是菩薩，則自思惟：「過去諸佛，以何為座，成無上道。」（6-639c）

「誰」（動詞目的語：後置甲類：1例）即大驚悟，心自念言：「我今此夢非為小緣，當以問誰。宜入城內，問諸智者。」（3-621c）

「何處」（動詞目的語：後置甲類：1例）于時迦葉忽見如來，心大驚喜，即問佛言：「汝近七日遊行何處而不相見。」（3-649a）

（介詞目的語：後置乙類：2例）舉邑人民，見此驚愕，無不懊惱，悉皆競來，問車匿言：「汝

送太子，置於^{何處}，今與捷陟而獨還耶。」(3-635a) / 詰車匿言：「寧與智者而作怨讎，不共愚人以為親厚。汝癡頑人，盜送太子，置於^{何處}，令此釋族不復熾盛。」(3-635a)

「何等」(動詞目的語：後置甲類：7例) 即問之言：「欲持此花用作^{何等}。」(3-622a) / 青衣又問：「供養如來，為求^{何等}。」(3-622a) / 太子含笑而問之言：「以此與我，欲作^{何等}。」(3-628b) / 太子問言：「汝夢^{何等}。」耶輸陀羅即便具說所夢之事。(3-632c) / 菩薩問言：「汝名^{何等}。」答：「名吉祥。」菩薩聞之，心大歡喜。(3-639c) / 即便問言：「…欲有所問，唯願見答。汝今大師其名^{何等}。有所教誡，演說何法。」(3-652a) / 既到其所而問之言：「…欲有所問，唯願見答。汝今大師其名^{何等}，有所教誡，演說何法。」(3-652b)

「何所<+場所>」(動詞目的語：前置甲類：2例) 外道問言：「師^{何所}趣。」(3-621c) / 思惟良久，流淚而言：「…云何於此後夜之中而忽索馬，欲^{何所}之。」(3-633a)

(介詞目的語：後置甲類：1例) 于時迦葉忽見如來相好莊嚴，心大歡喜而作是言：「年少沙門，從^{何所}來。」(3-646a)

「何所<場所>」(動詞目的語：前置甲類：3例) 見於路傍人眾聚看，即便問曰：「此諸人輩，為^{何所}看。」(3-628c) / 時優陀夷即答王言：「…太子獨自在於樹下，遙見一人，剃除鬚髮，著染色衣。來太子前而共言語，言語既畢，騰虛而去。竟亦不知^{何所}論說。…」(3-632a) / 太子答曰：「父王遣汝，欲^{何所}道。」(3-636c)

「何許」(動詞目的語：後置甲類：3例) 「…此諸王等，今在^{何許}。以愛欲故，或在地獄，或在餓鬼，或在畜生，或在人天。…」(3-631b) / 時白淨王，愛念情深，語車匿言：「我今當往尋求太子。不知即時定在^{何許}。…」(3-636a) / 又問天言：「世尊今者為在^{何許}。」(3-643b)

14.4.4.3 『過去現在因果經』の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-29】に、『過去現在因果經』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-29】『過去現在因果經』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	0	0	5(7)	7
「何等-X」疑問フレーズ	0	0	6(1)	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である(外数として扱う)。

以下は、『雑宝蔵經』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」フレーズ（動詞目的語：後置甲類：5例）問諸比丘：「汝等共集，欲說何法。」（3-620c）／王及夫人，見彼仙人悲泣流淚，舉身戰怖，生大憂惱。如大波浪動於小船，問仙人言：「我子初生，具諸瑞相，有何不祥而悲泣耶。」（3-627a）／忽見其兄并及弟子，所事火具，悉逐流來，心大驚愕而自念言：「我兄今者有何不祥。…」（3-649c）／即便問言：「…欲有所問，唯願見答。汝今大師其名何等。有所教誡，演說何法。」（3-652a）／既到其所而問之言：「…欲有所問，唯願見答。汝今大師其名何等，有所教誡，演說何法。」（3-652b）

（動詞目的語：後置乙類：7例）太子即便問從者言：「此為何人。」從者答曰：「此老人也。」（3-629c）／太子即問：「此為何人。」從者答曰：「此病人也。」（3-630a）／「…太子問言『此為何人。』我亦不覺答『是死人。』…」（3-631b）／太子見已，即便問言：「汝是何人。」比丘答言：「我是比丘。」（3-631c）／時白淨王，既聞此語，心生狐疑，亦復不知是何瑞相。（3-632a）／跋伽仙人，遙見太子，而自念言：「此是何神。為日月天，為帝釋耶。」（3-634b）／王便驚問：「此是何聲。」（3-637a）

（介詞目的語：後置甲類 7例）爾時白淨王心自思惟：「阿私陀仙人，居在香山。途逕嶮絕，非人所到。當以何方*請〔元本、明本作「詣」〕來至此。」（3-626c）／時諸仙人白太子言：「仁者來此，我皆歡喜。令我人眾，威德增盛。今者何故而忽欲去。為是我等失於威儀，為此眾中相犯觸耶。以何因緣，不住於此。」（3-634c）／爾時菩薩，至第三夜，觀眾生性以何因緣而有老死，…。（3-642a）／迦葉後來見佛已坐，即便問言：「年少沙門，從何道來而先至此。」（3-647b）／迦葉後來見佛已坐，即便問言：「年少沙門，從何道來而先至此。」（3-647b）／迦葉後來見佛已坐，即便問言：「年少沙門，從何道來而先至此。」（3-647c）／迦葉後來見佛已坐，即便問言：「年少沙門，從何道來而先至此。」（3-648a）

「何等-X」フレーズ（動詞目的語：後置甲類：6例）王見太子有如此瑞，即召諸臣，共集議言：「太子初生，有此奇特。當為太子作何等名。」（3-621a）／白婆羅門言：「願為占之，有何等異。」（3-624b）／抱太子出，即便白諸婆羅門言：「當為太子，作何等名。」（3-626b）／又復問言：「此阿一字，有何等義。」師又默然亦不能答。（3-628a）／爾時世尊即便思惟：「我今應度何等眾生而能廣利一切人天。…」（3-646a）／佛即答言：「如是如是。迦葉汝於我法見何等利，棄捨火具而出家耶。」（3-650c）

（動詞目的語：後置乙類：1例）太子既見如此苦行，即便問於跋伽仙人：「汝等今者修此苦行，甚為奇特。皆欲求於何等果報。」（3-634b）

14.5 近古前期における疑問代詞体系と疑問目的語の語順状況

14.5.1 『遊仙窟』における状況

14.5.1.1 『遊仙窟』の疑問代詞体系

【図表 14-30】『遊仙窟』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	1	7	8	7	0	「何用」構文 1
誰	10	1	0	0	0	0	0
那	0	0	0	1	0	0	0
何處	3	1	1	4	0	0	0
何曾	0	0	0	4	0	0	0
何如	0	0	0	0	0	2	0
何須	0	0	0	6	0	0	0
何用	0	0	0	1	0	0	0
如何	0	0	0	1	0	3	0
誰家	1	0	0	0	1	0	0
那許	0	0	0	1	0	0	0
若箇	1	0	0	0	0	0	0
若為	0	0	0	6	0	0	0

* 上古文献である『詩経』『論語』などからの直接引用された箇所或いは、それを踏まえた箇所については資料としない。例えば下例は/如(X)何/の用例であるが、『詩経』を引用した個所であるので資料としない（「折薪如之何。匪斧不克。取妻如之何。匪媒不得。」〔薪を割るにはどうするか。斧がなければ割れない。妻を娶るにはどうするか。仲人がいなければ娶ることはできない。〕（『詩経』「国風」「齊風」「南山」1-386）。

・五嫂曰「折薪如之何。匪斧不克。娶妻如之何。匪媒不得。」（32-234~235）

〔五嫂は言った「薪を割るにはどうするか。斧がなければ割れない。妻を娶るにはどうするか。仲人がいなければ娶ることはできない。〕

* 「若為」は次のように「方法・様態」を問う疑問代詞である。

・僕答曰：「下官不能賭酒，共娘子賭宿。」十娘問曰：「若為賭宿。」（34-256~35-257）

〔私は言った「私めは酒を賭けることができません。あなたと宿をかけましょう。」十娘はたずねて言った「どのように宿をかけるのですか。〕

* 「何用」構文は、中古の「何用…為」から「為」が省略された統語形式が固定化されて一語化したものと考えられる。全体として他動詞相当の機能を担い、「～でどうするとか」という意味を表す。

- ・下官詠曰「向來知道徑，生平不忍欺。但令守行跡，**何用**數圍棋。」(44-335~337)
[私は歌を詠んで言った「かねてより筋は知るところ。欺くことには堪えられない。筋道に従うだけならば、何度も指してどうするというのか。」]
- * 「如何」は歴史的には特殊構文に由来するが、『遊仙窟』では（上古文献の引用個所以外は）すでに一語化しているとみなす。
- * 以下の用例は、前置された動詞目的語ではなく連用修飾語とみなす（本論文 12.2.1 の議論を参照）。
- ・余問五嫂曰：「十娘**何處**去，應有別人邀。」五嫂曰：「女人羞自嫁，方便待渠招。」(60-462~463)
[私は五嫂にたずねた「十娘はどこへ行かれたのでしょうか。他の誰かが引き留めているのでしょうか。」
五嫂は言った「女の人は自分からおしかけるのを恥かしがるものです。わざとあなたに招かれるのを待っていらっしゃるのです。」]

14.5.1.2 『遊仙窟』の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-31】に、『遊仙窟』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-31】『遊仙窟』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	1	5	0	2
誰	0	0	1	0
何處	0	0	1	1

- * 以下のように、前置の「何/X」疑問フレーズ目的語がみとめられるが、上古文献である『論語』の「未之思也。夫何遠之有。」[思い焦がれてはいないのだ。(本当に思い焦がれていたなら) どうして遠いなどということがあろうか)] (『論語』「子罕」2-632) の箇所を踏まえたものであるため、資料とはしない。
- ・五嫂笑曰：「張郎心專，賦詩大有道理。俗諺曰：『心欲專，鑿石穿。』誠能思之，**何遠**之有。」(32~33-239~241)
[五嫂は笑って言った「張さまは切に思っていていらして、(作った) 詩がずいぶん大げさですね。世俗のことわざで『切に思えば、岩をも通す』と申します。もし本当に思い焦がれているのであれば、どうして遠く離れるなどということがありましょか。」]

以下は、『遊仙窟』の疑問代詞目的語の具体例である。

- 「何」(動詞目的語：前置甲類：1例) 僕因問曰：「主人姓望何處。夫主**何在**。」(17-116~117)
- (介詞目的語：前置甲類：5例) [何為] 五嫂曰：「**何為**不盡。」(28-202) / 五嫂曰「**何為**即休。」(44-335) / [何因] 五嫂曰：「娘子向來頻盼少府，若非情想有所交通，…**何因**眼詠朝來頓引。」(37-275~277) / 答曰：「若其不能，**何因**百獸率舞。」(49-370~371) / [何由]

五嫂罵曰：「何由叵耐。女婿是婦家狗，打殺無文。…」(28-203~204)

(介詞目的語：後置甲類：2 例) [從何] 古老相傳云「…每有香果瓊枝，天衣錫鉢，自然浮出，自然浮出，不知從何而至。」(4-14~16) / 十娘答曰：「…不知上客從何而至？」(18-124~125)

「誰」(動詞目的語：後置甲類：1 例) 十娘答曰：「得便不能與，明年知有誰。」(51-387~388)

「何處」(動詞目的語：後置甲類：1 例) 十娘詠曰：「天涯地角知何處，玉體紅顏難再遇。」(74-569)

(介詞目的語：後置甲類：1 例) 渠未相撩撥，嬌從何處來。(29-216)

14.5.1.3 『遊仙窟』の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-32】に、『遊仙窟』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-32】『遊仙窟』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	0	0	2(1)	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である(外数として扱う)。

* 近古前期以前の文献の文章を直接引用した個所、或いはそれを踏襲した個所は、資料とはしない。次の用例は前置の「/何/-X」疑問フレーズ目的語がみとめられるが、上古文献である『論語』の「未之思也。夫何遠之有。」[思い焦がれてはいないのだ。(本当に思い焦がれていたなら) どうして遠いなどということがあろうか。](『論語』「子罕」2-632)の箇所を踏まえたものであるため、資料とはしない。

・五嫂笑曰：「張郎心專，賦詩大有道理。俗諺曰：『心欲專，鑿石穿。』誠能思之，何遠之有。」(『遊仙窟』32~33-239~241)

[五嫂は笑って言った「張さまは切に思っていていらして、(作った)詩がずいぶん大げさですね。世俗のことわざで『切に思えば、岩をも通す』と申します。もし本当に思い焦がれているのであれば、どうして遠く離れるなどということがありましようか。]

以下は、『遊仙窟』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：後置甲類：2 例) 十娘問曰：「上客見任何官」(19-134) / 十娘問曰：「笑何事。」(46-369)

(動詞目的語：後置乙類：1 例) 下官曰：「僕は何人，敢當此事。」(26-187~188)

14.5.2 『伍子胥変文』における状況

14.5.2.1 『伍子胥変文』の疑問代詞体系

【図表 14-33】『伍子胥変文』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	6	8	13	2	0	「何如」構文 1
誰	4	1	0	0	0	0	0
若	0	0	0	2	0	0	0
何處	0	2	0	1	0	0	0
何得	0	0	0	1	0	0	0
何故	0	0	0	2	0	0	0
何所 <-場所>	0	0	0	0	1	0	0
奈何	0	0	0	1	0	5	0
如何	0	0	0	5	0	6	0

* 「如何」は歴史的には特殊構文に由来するが、『伍子胥変文』ではすでに一語化しているとみなす。

* 「何如」構文とは、〈比較〉を表す構文的意味を持つ、以下のような構造を指す。統語機能の面では他動詞相当の機能を備えるものと考えられる。

- ・子欲寶劍相讎（酬），何如平王之物。（8）

[あなたは宝劍で私に報いようとされるが、（それとて）平王のもの（＝報酬）とどうして比べられようか。]

* 以下の用例は、前置された動詞目的語ではなく連用修飾語とみなす（本論文 12.2.1 の議論を参照）。

- ・不知弟今何處去，遣吾獨自受恚惶。（5）

[今、弟はどこへ行ったのか分からない。私は一人残され、悲しみにくれる。]

14.5.2.2 『伍子胥変文』の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-34】に、『伍子胥変文』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「何如」構文における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-34】『伍子胥変文』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	5	4	1	4

誰	0	0	1	0
何處	0	0	2	0

以下は、『伍子胥変文』の疑問目的語の具体例である。

「何」（動詞目的語：前置甲類：4例）子尚臨死之時，仰面向天嘆而言曰：「吾當不用弟語，遠來就父同誅，奈何，奈何。更知何道。…」(2) / 歌清風而問曰：「君子今欲何去，迴在江傍浦側。…」(7) / 棲（淒）愴依然：「…今遭落薄，知復何意。」(9) / 思憶帝鄉，乃為歌曰：「…父兄冥莫知何在，零丁遣我獨恹惶。…」(9)

（動詞目的語：後置甲類：1例）子胥乃問船人曰：「先生姓何名誰。鄉貫住在何州縣。」(8) / 王曰：「何為。」(16)

（介詞目的語：前置甲類：5例）[何為] 今乃讎楚，回軍相見，望同往日，何為閉門相卻，不睹容光？(14) / [何為] 恥胥不受？(14) / [何因] 「我若見楚帝取賞，必得高遷。逆賊今既至門，何因不捉？」(5) / [何由] 楚帝聞此語，怕（拍）陛（髀）大瞋：「勃逆小人，何由可耐。一寸之草，豈合量天！…」(2)

（介詞目的語：後置甲類：4例）[從何] 子胥答曰：「…今游會稽之路，從何可通。…」(3) / 怨結啼聲而借問：「妾家住在荒郊側，四迴無鄰獨棲宿。君子從何至此間，面帶愁容有飢色。…」(5) / [將何] 子胥答曰：「…蒙賜一餐堪充飽，未審將何得相報。…」(4) / [緣何] 乃喚：「…緣何急事，步涉長途，失伴周章，精神愧惚。…」(3)

「誰」（動詞目的語・後置甲類・1例）子胥乃問船人曰：「先生姓何名誰。鄉貫住在何州縣。」(8)

「何處」（動詞目的語・後置甲類：1例）昭王棄城而走，遂被伍相擒身，返（反）縛昭王：「你父墳陵，今在何處？」(12) / 姊問弟曰：「今乃進發，欲投何處？」子胥答曰：「欲投越國。…」(5)

14.5.2.3 『伍子胥変文』の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-35】に、『伍子胥変文』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-35】『伍子胥変文』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	0	0	9	1
「何所〈-場所〉-X」疑問フレーズ	0	0	1	0
「何物-X」疑問フレーズ	0	0	1	1

*上表で言及したものの他、以下のように「[[何-X]-X]」型疑問フレーズ目的語の用例が確認される。この形式は、本論文の調査の限りでは上古における存在が確認できなかったため、通時的な位置づけが困難である。いずれにせよ、『伍子胥変文』の例では、動詞が「是」であるために、時代に関わりなく後置されていたものと考えられる。

・乃喚：「遊人且住。劍客是何方君子、何國英才，相貌精神、容儀聳幹。…」(3)

〔(女は伍子胥に近寄ると) 声をかけた「旅のお方、しばらくお待ち下さい。あなたはどちらの君子・どの国の英才でいらっしゃるのですか。力みなぎるご様子、堂々としたお姿でいらっしゃいます。…〕

以下は、『伍子胥変文』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：後置甲類：9例) 王即驚懼問曰：「有何不祥之事。」(2) / 自撲捶凶(胸)：「…曠大劫來有何罪，如今孤負阿耶娘。…」(5) / 妻答曰：「君莫急急路遙長。縱使從來不相識，錯相識認有何方(妨)。…」(6) / 子胥乃問船人曰：「先生姓何名誰？鄉貫住在何州縣。」(8) / 魚(漁)人問曰：「只今逃逝，擬投何國？」(8) / 燕山勒頌知何日，冒染蓬塵雙鬢秋。(9) / 鄭王得信，忙怕異常，莫知何計。(13) / 其鄭王閉卻城四門，城頭遙看設何方計卻得吳軍。(13) / 越王即共范蠡平章：「吳國安化治人，多取宰彼之言，共卿作何方計，可伐軍。」(16)

(介詞目的語：後置甲類：1例) 左右問曰：「王緣何事，抱此怒蝸(蛙)。」(17)

「何所-X」(動詞目的語：後置甲類：1例) 魚(漁)人息身，乃報子胥言曰：「君莫造次，大須三思。一惠之餐，有何所直。…」(8)

「何物+X」(動詞目的語：後置甲類：1例) 遂作悲歌而嘆曰：…先生恨胥*何勿(何物)事，遂向江中而覆船。(9)

(介詞目的語：後置甲類：1例) 王曰：「將何物貨求。」(16)

14.5.3 『舜子変』における状況

14.5.3.1 『舜子変』の疑問代詞体系

【図表 14-36】『舜子変』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語
何	0	0	0	0	2	0
誰	0	0	0	0	0	1

甚	0	0	1	0	5	0
阿誰	1	0	0	0	1	0
何似	0	0	0	0	0	1
如何	0	0	0	2	0	0

* 「如何」は歴史的には特殊構文に由来するが、『舜子変』ではすでに一語化しているとみなす。

14.5.3.2 『舜子変』の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-37】に、『舜子変』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-37】『舜子変』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
甚	0	0	0	1

以下は、『舜子変』の疑問代詞目的語の具体例である。

「甚」(介詞目的語：後置甲類：1例) 瞽叟喚言舜子：「阿耶暫到遼陽，遣子勾當家事，緣^甚於家不孝。」(201)

14.5.3.3 『舜子変』の疑問フレーズ目的語一覧

【図表 14-38】に、『舜子変』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-38】『舜子変』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	0	0	0(1)	1
「甚-X」疑問フレーズ	0	0	3(1)	1
「阿誰-X」疑問フレーズ	0	0	0(1)	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である(外数として扱う)。

以下は、『舜子変』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：後置乙類：1例) 妻牽叟詣市，還見糶米少年，叟謂曰：「君是^何賢人，數見饒益。」(203)

(介詞目的語：後置甲類：1例) 舜子即忙出門：「老人〔萬〕福尊體，老人從^何方而來。」

(200)

「甚-X」(動詞目的語：後置甲類：3例)「又不是時朝節日，又不是遠來由喜，政(正)午間跪拜四拜，學得甚媿(鬼)禍述靡(術魅)。」(200) / 後阿孃亦見舜子，五毒嗔心便起。「...買(賣)卻田地莊園，學得甚鬼禍術魅。...」(201) / 後阿孃又見舜子，五毒惡心便起。「...夜夜伴涉惡人，不曾歸來宅裏。買(賣)卻田地莊園，學得甚崇禍術魅。大杖打又(不)殺。三具火燒不死 ...」

(202)

(動詞目的語：後置乙類：1例)帝釋變作一黃龍，引舜通穴往東家井出。舜叫聲上報，恰值一老母取水，應云：「井中是甚人乎。」(202)

(介詞目的語：後置甲類：1例)瞽叟便即與大石填塞。後母一女把著阿耶：「殺卻前家歌(哥)子，交與甚處出頭。」(202)

「阿誰-X」(動詞目的語：後置乙類：1例)瞽叟喚言舜子：「...阿孃上樹摘桃，樹下多埋惡刺，刺他兩腳成瘡，這個是阿誰不是。」(201)

14.5.4 『降魔變文』における状況

14.5.4.1 『降魔變文』の疑問代詞体系

【図表 14-39】『降魔變文』の疑問代詞体系

疑問代詞	主語	動詞 目的語	介詞 目的語	連用 修飾語	連体 修飾語	述語	特殊構文
何	0	0	7	3	12	0	「何如」構文 2 「何用」構文 2
誰	2	1	0	0	0	0	0
何處	0	1	0	0	0	0	0
何得	0	0	0	1	0	0	0
何所 <- 場 所 >	0	1	0	0	0	0	0
何須	0	0	0	1	0	0	0
何得	0	0	0	1	0	0	0
阿誰	0	1	0	0	0	0	0
誰家	0	0	0	0	2	0	0
誰人	1	0	0	0	0	0	0
如何	0	0	0	3	0	0	0
若為	0	0	0	3	0	14	0

* 「如何」は歴史的には特殊構文に由来するが、『降魔變文』ではすでに一語化しているとみなす。

* 「若為」については、14.5.1.1【図表 14-30】の注を参照。

* 「何如」構文については、14.5.2.1【図表 14-33】の注を参照。

* 「何用」構文については、14.5.1.1【図表 14-30】の注を参照。「何用」全体で他動詞相当の統語機能を担い、その後ろに目的語(=X)を伴い、「Xでどうするのか」といった意味を表す構文を指す(二番目の例は目的語が省略されている)。以下に『降魔変文』の用例を補足しておく。

・善惡有理，何用諍。 (556)

[善惡には道理というものがあります。言い争いなどしてどうするのですか。]

・太子(曰)：「卿今輕財如土，重德猶珍，志意買園。欲將何用。」 (557)

[太子は言った「あなたはいま財産を土であるかのように軽んじ、徳を宝物のように重んじ、その庭園を買おうと心に決めてしておられる。(その庭園で) でどうしようというのか。」]

14.5.4.2 『降魔変文』の疑問代詞目的語一覧

【図表 14-40】に、『降魔変文』にみえる疑問代詞目的語の語順の統計を示す。なお、「何如」構文における「何」については、これを特殊構文における統語成分として処理したため、下表の数字には含めていない。

【図表 14-40】『降魔変文』の疑問代詞目的語の語順

疑問代詞	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	0	0	0	7
誰	0	0	0(1)	0
何處	0	0	1	0
何所<-場所>	1	0	0	0
阿誰	0	0	0(1)	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である(外数として扱う)。

以下は、『降魔変文』の疑問代詞目的語の具体例である。

「何」(介詞目的語：後置甲類：7例) [因何] 驚怪問其所以：「為當親姻聚會。為復延屈帝王。因何大小匆忙，嚴麗鋪置。」(553) / 沈吟之次，太子便疑，報言長者：「心生猶預，悔亦不遲；下手施功，因何停滯。」(557) / 此乃詩書所載，非擅胸襟，因何行李忽忽，輕身單騎。(558) / 因何從騎不過十，簪口(轡)途呈(程)來至此。(558) / 掩擒須達問根由，「數日因何不相見。…」(560) / 怪而問曰：「長者因何憂懼，顏貌改常。」(561) / [憑何] 有君闕臣，社稷憑何安立。(557)

「誰」(動詞目的語：後置乙類：1例) 王問：「弟子是誰，對得我和尚？」(561)

「何處」(動詞目的語・後置甲類：1例) 須達曰：「…佛者有何神異？僧者有何德能。令我聞

名，交流戰汗。住在何處。…」(533)

「何所<-場所>」(動詞目的語：前置甲類：1類) 肋骨粉碎作微塵，六師莫知何所道。(566)

「阿誰」(動詞目的語：後置乙類：1例) 喚得園人來借問：「園主當今是阿誰。…」(555)

14.5.4.3 『降魔變文』の疑問フレーズ目的語一覽

【図表 14-41】に、『降魔變文』にみえる疑問フレーズ目的語の語順の統計を示す。

【図表 14-41】『降魔變文』における疑問フレーズ目的語の語順

疑問目的語	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
「何-X」疑問フレーズ	0	0	9(1)	1(0)
「誰家-X」疑問フレーズ	0	0	0(1)	0

* 「()」内の数字は、その語順が通時的に無意味な用例の出現頻度である(外数として扱う)。

以下は、『降魔變文』の疑問フレーズ目的語の具体例である。

「何-X」(動詞目的語：後置甲類：8例) 須達曰：「佛者有何神異。…」(533) / 須達曰：「…僧者有何德能。…」(533) / 須達布金欲了，殘功計數非多，心中思忖忸怩，料度當開何藏。(557) / 王問「須達緣何事，輒爾買園將作寺。(560) / 先代有沒家門？學道謔稟何人。(560) / 在身有何道德。(560) / 先代有沒家門？學道謔稟何人。(560) / 在身有何道德。(560) / 舍利弗即昇寶座…告四眾言曰：「…勞度又有何變現，即任施張。」(563)

(動詞目的語：後置乙類：1例) 小子曲躬啟言阿翁：「…身披赤色之衣，樹下端然坐睡，不知是何色類。…」(560)

(介詞目的語：後置甲類：1例) 太子曰：「卿是輔國重臣，每吾君之所有；因何忽務，非時忽見寡人。」(555)

「誰家-X」(動詞目的語：後置乙類：1例) 佛是誰家種族。(560)

II 部：附論

第十五章 上古漢語における人称代詞の「格屈折」

をめぐって

15.1 目的

十九世紀に古典的言語類型論が勃興して以来、上古漢語は孤立語の典型例として扱われてきた。ところが二十世紀初頭、近代中国語学の創始者とも称すべき B.Karlgren が、上古漢語に属する先秦魯方言の人称代詞について、印欧語のような「格屈折」が見出されるとする説を提出した。Karlgren はさらに、この人称代詞の格屈折は、上古以前の原始漢語——記録時代以前の漢語——に存在していた屈折的特徴の遺留であるとみなし得るため、原始漢語は印欧語のように豊富な形態変化を有する屈折言語であったということまで主張したのである。

この Karlgren 説は学界に大きな影響を与えたと同時に、猛烈な反論をも引き起こすこととなった。新たな解釈が次々と模索され、結果として中国語学史に残る一大論争にまで発展した。この間多くの知見が積み重ねられたが、この問題は上古漢語の形態論という難問と直接的に繋がることもあり、未だに解決されたとは言い難い状況にある。

本章の目的は、上古漢語の人称代詞体系に関する主要な学説について、Karlgren 氏の主張を基軸としながら各論者の論点を整理し、一連の論争において如何なる言語現象が議論の俎上に載せられ、それに対して如何なる解釈が試みられてきたのかを明らかにすることである。本論文でこの問題をとりあげるのは、これが I 部で論じた各疑問代詞の統語機能の差異の問題と関連するからである。

なお、本章は、Karlgren 氏の主張の根拠となった言語現象を合理的に解釈すること自体は、その任に含めていない。現状では、それは筆者の能力を超える要求であると認めざるを得ない。よって、本章では、この問題に対する現時点での筆者なりの見通しを、15.7 において述べることで、学説史のまとめとするに止めたい¹⁹⁸。

¹⁹⁸ 上古人称代詞の所謂「格屈折」をめぐるとする学説史については、周法高(1959)が Karlgren 氏の格屈折説や Kennedy 氏の重説説を簡明に紹介している。また、Graham(1969)では両説についての詳細な検討がされている。本章 15.2.~15.4 はこれらの先行研究に負うところが少なくない。

15.2 Karlgren 以前

15.2.1 主要な学説

上古漢語の人称代詞について、その統語的文法的分布にある種の偏差が存在することを最初に指摘したのは、管見の及ぶ限りでは、十九世紀末に成立した古漢語文典の二つの名著、Gabelentz(1881)と馬建忠(1898)であった。両者は、上古漢語に常見する人称代詞について、統語的文法分布、文体的価値(stylistic value)などの点から、各人称代詞に相違がみられることを指摘した。ついで胡適(1917ab)が、人称代詞のうち多くの文献において共存する一人称代詞「吾」「我」、二人称代詞「汝」「爾」を取り上げ、Gabelentz(1881)や馬建忠(1898)が注目した観点以外に「数」の概念を加えながら詳細な記述を行った。これら三氏の記述は、相互に異なる見解を含みながらも、基本的な立場は共通していると言ってよい。すなわち、人称代詞の統語的文法分布に言及する際、いずれも「格」に相当する用語を用いることがあるものの、「格屈折」という格関係の表示を第一義的な機能とする形態論レベルでの語形変化——それが接辞の付加であれ、母音交替などの所謂「内部屈折」であれ——がみられるということ積極的に主張しているのではない。よってある人称代詞が某格に用いられるというとき、その意味するところは、格屈折を有する言語では某格形が用いられる統語的位置に生起する、ということに過ぎない。個々の人称代詞は、少なくとも共時レベルでは単なる別語として認識されていた可能性が高い。これは、当時にあつては上古音の体系的な再構が実現されていなかったため、形態論レベルでの議論が事実上不可能であったことに因るのであろう。

以下、三氏が言及する人称代詞のうち、上古中期に常見されるものを中心に取り上げ、三氏の考えるそれらの統語的文法分布を【図表 15-1】としてまとめておく。また、その具体例を主に馬建忠(1898)の挙げる例文を中心に示しておく¹⁹⁹。

【図表 15-1】 Karlgren 以前の研究による人称代詞の統語機能

	Gabelentz(1881)			馬建忠(1898)			胡適(1917ab)				
		吾	我	予 余		吾	我 予	余		吾	我
一人称代詞											
主語	Subject	/+	+	+	主 次	++	+	++	主 次	+	/+
連体修飾語	Genitiv	+		+	偏 次	++	+	+	偏 次	+	+

¹⁹⁹文脈の把握の便のため、本論文では馬建忠(1898)よりも長い部分を引用した部分が少なくない。以下、他の論者の挙げる例文を紹介する場合も、同様の処置を適宜行ったが、逐一注記することはない。

	述語動詞目的語	Object		+	+	賓次	/+	+	+	賓次	-	+
	介詞目的語			+?		賓次	(+)	+	(+)	賓次		+
二人称代詞			汝 女 若	爾 而* [乃]			汝 爾	若	而		汝	爾
	主語	Subject	++			主次	+	+	++	主次	+	+
	連体修飾語	Genitiv		++		偏次	+	/+	/+	偏次		+
	述語動詞目的語	Object	++			賓次	+	+	(+)	賓次	+	+
	介詞目的語		?			賓次	+	?	?	賓次		
三人称代詞			其	之	[厥]		其	之				
	主語	Subject				主次	+					
	連体修飾語	Genitiv	+			偏次	+					
	述語動詞目的語	Object		+	++	賓次		+				
	介詞目的語			+		賓次		+				

* 「+」は当該の語が当該の文法成分として生起可能なこと、「++」は生起する頻度が高いことを示す。
また「/+」は一定の条件のもとでは当該の語が当該の文法成分とし生起可能なこと、「(+）」は生起することがあるがその頻度が低いことを示す。

* 「-」は当該の語が当該の文法成分に生起しないことを示す。

* 最左列の「主語」「連体修飾語」「述語動詞目的語」「目的語」は、それぞれ Gabelentz(1881)の“Subject”
“Genitiv”“Object”、馬建忠(1898)・胡適(1917ab)の「主次」「偏次」「賓次」の指す実質的な内容を考慮し、かつ以降の議論において混乱が生じないように筆者が意識したものであり、直接的な訳語ではない。

* 表中に示した統語的生起条件のほかに、文体的価値など(胡適氏の場合はその他「数」という文法範疇)における差異にも言及するが、ここでは割愛する。

* 馬建忠(1898)は人称代詞が「Np+所+V」構造(本論文中言う「所」構造)のNp(=論理主語)を担った場合、これを「主次」とみなすが、胡適(1917ab)は「偏次」とみなす。

* 「[厥]」など [] を付した代詞は、これが主として上古初期以前において普遍的に使用されたものであることを示す。

(15-1) 燕人畔。王曰：「吾甚慚於孟子。」(『孟子』「公孫丑下」 1-291)

[吾＝主語]

[燕人が(齊に)背い(て独立し)た。王(＝齊の宣王)は言った「私は孟子に対して全く面目が無い。」]

(15-2) 孟子對曰：「…王曰何以利吾國，大夫曰何以利吾家，士庶人曰何以利吾身，上下交征利而國危矣。」(『孟子』「梁惠王上」 1-37)

[吾＝連体修飾語]

[孟子は答えて言われた「…王は王でいかにして自分の国を利するのか(ばかり)言い、大夫は大夫でいかにして自分の家を利するのか(ばかり)言い、役人や庶民は彼らでいかにして自分の身を利するのか(ばかり)言い、(このように)上下の者ものがみな互いに利益(ばかり)を求めるようでは、国家は危うくなります。」]

(15-3) 樊遲御，子告之曰：「孟孫問孝於我，我對曰『無違』」(『論語』「為政」 1-81)

[我＝主語]

[樊遲が(孔子のために)車を御していた。先生は彼に言われた「孟孫が私に孝についてたずねてきた。私は『(礼に) 違わないことだ』と答えておいたよ。」]

(15-4) 王說曰『『詩』云『他人有心，予忖度之。』夫子之謂也。夫我乃行之，反而求之，不得吾心。夫子言之，於我心有戚戚焉。…』(『孟子』「梁惠王上」 1-84)

[我＝連体修飾語]

[王は喜んで言った『『詩経』に『人に思うところあらば、私はこれをおしはかる。』とあるが、まさに先生のことを言ったかのようだ。私は確かにそのようにした(＝祭りのために殺されようとする牛を羊に換えさせた)のだが、(何故にそのようにしたのか)自分に問うてみても、どうしてもその気持ちを言い表すことができなかった。今、先生が言い当ててくださり、私のころには、はっと思い当たるところがあった。』…]

(15-5) 王曰：「吾惛，不能進於是矣。願夫子輔吾志，明以教我。我不敏，請嘗試之。」(『孟子』「梁惠王上」 1-93)

[我＝目的語]

[王は言った「私は物分りが悪く、とてもそこ(＝仁政)までは理解できそうにない。どうか先生、私の志の達成をたすけるべく、(私に)明確なかたちで教えていただきたい。私は敏くはないけれども、私にその教えを実行させていただきたい。』]

(15-6) 子反懼，與之盟，而告王。退三十里，宋及楚平，華元為質。盟曰：「我無爾詐，爾無我虞。」(『左伝』「宣公十五年」 2-761)

[爾＝目的語(前置)，主語]

〔子反は恐れて、彼（＝華元）と盟約を結び、王（＝楚の荘王）に報告した。（楚は兵を）三十里退け、宋と楚との講和が成った。華元は（楚の）人質となった。誓いを立てて言うには「我は汝をいつわることなく、汝も我を欺くことなかれ。〕

(15-7) 曰：「…女為惠公來求殺余。命女三宿，女中宿至。…」〔『左伝』「僖公二十四年」1-414〕

[女＝主語，目的語，主語]

〔(文公は) 言った「…お前は惠公に命じられ、わたしを殺しにやってきた。(惠公はお前に) 三泊がかり (で行け) と命じたのに、お前は二晩でやってきた。…〕

【図 15-1】から、三氏の見解は互いに異なるところも少なくないが、一人称「吾」が通常は目的語、とりわけ述語動詞目的語を担い得ないという点では一致していることが知られる。なお、馬建忠(1898)は一定の条件では述語動詞目的語を担うことができるとするが、その条件とは、以下のように否定文において動目関係を構成する述語動詞に前置された場合である。

(15-8) 諸大夫曰：「不從晉，國幾亡。楚弱於晉，晉不吾疾也。晉疾，楚將辟之。…」〔『左伝』「襄公十一年」3-988〕

[吾＝目的語 (前置)]

〔大夫たちは言った「晋に従わなければ、国はほとんど滅んだも同然です。楚は晋よりは弱いし、晋はわが国を奪おうとせいてはけません。晋が (わが国を) 奪おうと急げば、楚はこれ (=晋) を避けるでしょう。…〕

例文(15-8)は、「我」と「吾」の選択条件には、述語動詞との統語関係だけでなく、これらの代詞と統語関係を結ぶ述語動詞との継起的な前後関係も関与していることを示す例である。そしてまさにこの現象が、後述する重説、強調説などにおいて大きな意味を有することになる。

以上、Karlgren(1920)以前の諸説を概観した。胡適(1917ab)、Gabelentz(1881)、馬建忠(1898)といった研究では、各人称における各語の統語的文法分布の認定に関して少なからぬ差異を含むものの、同一の人称を指示する各語を少なくとも共時的には別語として扱っているで、共通の観点を有していると言ってよい。

15.3 格屈折説

15.3.1 説の概要

Karlgren(1920)の主張の要点は、以下の二点に集約される。すなわち、①上古中期の魯方

言においては一人称代詞「吾」「我」と二人称代詞「汝」「爾」とが「格屈折」の体系を成すという点、さらに②この人称代詞の格屈折は原始漢語に存在した格屈折体系の残存現象であるとみなし得るという点である。以下、それぞれについて、Karlgren(1920)の挙げる根拠を紹介し、検討を加えていく。

15.3.2 人称代詞の「格屈折」現象

Karlgren(1920)が上古中期の人称代詞に格屈折がみられるとする主な根拠は、①『論語』『孟子』『左伝』における一人称「吾」「我」及び二人称「汝」「爾」の統語的文法分布と、②一・二人称の各代詞にみられる音形の平行性である。

前者①の具体的内容は、例文(15-9)(15-10)のように、同一文中（複文）の一人称代詞が、それぞれの担う文法成分によって、主語・連体修飾語（Karlgren1920の表現では「主格」「属格」）であれば「吾」が、目的語（Karlgren1920の表現では「目的格」）であれば「我」が生起する傾向がみとめられる、ということである。そして人称代詞の文法分布は、統計的には【図表 15-2】のようにまとめられる。

(15-9) 季氏使閔子騫為費宰。閔子騫曰：「善為我辭焉。如有復我者，則吾必在汶上矣。」
 (『論語』「雍也」 2-380)

[我＝介詞目的語，我＝述語動詞目的語，吾＝主語]

[季氏が閔子騫を費の長官にしようとした。閔子騫は（その使いに）言った「私に代わって上手に辞退してください。もしまた私をたずねてくるものがあれば、私はきっと汶水の北に（渡って）いることでしょう。』]

(15-10) 「臣請為王言樂。今王鼓樂於此，百姓聞王鍾鼓之聲、管籥之音，舉疾首蹙頰而相告曰『吾王之好鼓樂，夫何使我至於此極也。父子不相見，兄弟妻子離散。』」
 (『孟子』「梁惠王下」 1-101)

[吾＝連体修飾語，我＝述語動詞目的語（兼語）]

[(孟子が齊の宣王に言った)「(それでは) 臣に音楽について語らせてさせて下さいませ。もし、王がここで音楽を演奏されれば、民衆は、鐘を鳴らし鼓を打つ音、(さらに) 籥を吹き笛を奏でる音を聞き、みな頭痛を感じつつ眉をひそめ、このように言い合うでしょう『我が王はこのように音楽を好まれるのに、どうして我らをこのような極限にまで追い込むのか。父と子とが会うこともできず、兄弟・妻子は、ばらばらになってしまっている。』]

【図表 15-2】 Karlgren(1920)による人称代詞の統語的文法分布の統計

		論語		孟子		左伝	
一人称		吾	我	吾	我	吾	我
(主語)	Nominatif	95	16	76	68	369	231

(連体修飾語)	Génitif	15	4	47	16	223	126
(目的語)	Régime	3	26	0	53	4	257
二人称		女(汝)	爾	女(汝)	爾		
(主語)	Nominatif	14	9	3	5		
(連体修飾語)	Génitif	0	3	2	2		
(目的語)	Régime	2	6	0	3		

*最左列の「主語」「連体修飾語」「目的語」は、その右列に配した Karlgren(1920)の用語の指す実質的な内容を考慮しつつ、【図表 15-1】との対照が容易なように筆者が意識したものであり、直接的な訳語ではない。

そして、さらに隋代の再構音により、一人称代詞「吾」「我」、二人称代詞「爾」「汝」の音形を示し、【図表 15-3】のごとき格屈折体系が存在したと推定する。

【図表 15-3】 Karlgren(1920)の格屈折体系

格		一人称	二人称
主格・属格	Nom.-Gém	吾 *nguo	女(汝) *ńzi ^w o
目的格	Régime	我 *nga	爾*ńziq

Karlgren(1920)は、一人称「吾」～「我」、二人称「爾」～「汝」は、一見全くの別語であるけれども、各人称における主格・属格形たる前者と目的格形たる後者とが、韻母*uo～*aを語形変化の条件とする形態論的な「格屈折」のパラダイム——この場合いわゆる内部屈折ということになる——を形成していると主張したのである。

なお、Karlgren氏がこの格屈折説を最初に提出したのは、氏による上古音の体系的な再構成以前であるため、【図表 15-3】の再構音は6世紀の隋代音に拠っている。そして氏による上古音再構成が実現された後にも、いくつかの修正が加えられるものの、「格屈折」説の論旨自体に大きな変更は加えられず、以降の氏の著作にそのまま引き継がれていく。例えば、Karlgren(1949)では、『論語』『孟子』などの上古漢語における人称代詞は、【図表 15-4】の如き格屈折体系をなすとされる。ここでは、一人称・二人称は、主母音*o～*aの交替による格屈折、三人称は、声母*g'～*t'による格屈折が存在したとみなされている²⁰⁰。

【図表 15-4】 Karlgren(1949)の格屈折体系

格		意味	語形
主格—属格	Nom.-Gen	I, my	吾 ngo

²⁰⁰ただし Karlgren(1920)の段階では、三人称「其」「之」は格屈折のような狭義の形態変化ではなく、いわゆる suppletion (原文 “la déclinaisonsupplétive”) であるとみなしている。

与格－対格	Dat.-Acc	me	我 nga
主格－属格	Nom.-Gen	thou, thy	汝 níjō
与格－対格	Dat.-Acc	thee	爾 níǎ
属格	Gen.	his	其 g'ǐǎg
与格－対格	Dat.-Acc	him	之 t'ǐǎg

15.3.3 人称代詞の「格屈折」の通時的意味

Karlgren(1920)の主張が大きな反響を引き起こしたのは、何よりも人称代詞にみとめられる以上のような格屈折について、これを原始漢語が屈折言語であったことの証拠とみなしたことに因る。この仮説の傍証として、Karlgren氏はラテン語からフランス語への通時的変化に言及する。すなわちラテン語は体系的な形態変化を有していたが、フランス語に至る間に、人称代名詞だけに格屈折が残されたという現象である。そして漢語においても同様の変化が生じたと考えるのである。

ところがこの Karlgren 説は、言語事実との符合という面で大きな困難が存在する。すなわち、氏の説によれば、歴史的により古い言語には【図表 15-4】のような体系がより完全な形でみられるはずであるが、実際には格屈折の根拠とした『論語』『孟子』よりも時代的に古い『書経』『詩経』には、一人称「吾」がほとんどみとめられないのである。例えば、『書経』の一人称代詞は「朕」「予」「我」、『詩経』の一人称代詞は「我」「予」であり、「吾」はほとんど存在しない。また『書経』『詩経』よりさらに古い層を含む甲骨文や金文においても同様なのである（周法高 1959 等）。

Karlgren氏は以上の困難を「方言」によって説明しようとする。すなわち、『論語』『孟子』の魯方言は保守的な方言であり、そのために時代的により古い『書経』『詩経』ではすでに失われてしまっていた人称代詞の「格屈折」が依然として保持されていたと解釈するのである。そしてこのことは、『書経』のうち最も新しい部分である「周書」（～紀元前 627 年）にも「吾」が見えないことによって裏付けられるとする。もし、『書経』と『論語』『孟子』における人称代詞体系の差異が純粋に時代的差異に限られるとしたら、「周書」部分には「吾」が少なからず見えなければ不自然であると主張するのである。

15.3.4 特徴と問題点

Karlgren氏の「格屈折」説の学史的意義と影響は極めて大きい。こと古代漢語文法研究の分野に限定しても、語が漢字によって表示されるために閉ざされていた形態論・語構成論レベルにおける研究の可能性を切り開いたこと、上古漢語内部における文法面での方言差異を指摘したこと、さらに上古漢語の類型論的研究の再検討を喚起したことなど、重要な貢献が幾つも挙げられよう。

しかしながら、下述する問題の存在により、現在では、Karlgren説をそのままのかたちで受け入れる論者はほとんど存在しない。そしてこの Karlgren 説の問題点が、後に多くの説

を生み出すことにもつながっていったのである。Karlgrén 説への諸家の批判は、①「例外」の問題、②上古初期文献言語との整合性の問題、③音形の問題、という三点に要約できよう。

15.3.4.1 「例外」の問題

Karlgrén 氏の「格屈折」説に対する最も多い批判は、例外が多すぎるということである。特に二人称代詞については、例えば馬建忠(1898)が「爾」「汝」の文法的分布に顕著な差異をみとめないように、「汝」＝主格・属格形、「爾」＝与格・対格形という仮定に完全に符合する上古文獻言語は、Karlgrén 氏自身が根拠とする『論語』『孟子』をはじめ、他の文献にもまずみあたらない(周法高 1959/1990:40「附表」)。また一人称代詞にしても、実際は「我」が主語を担うことも少なくなく、「吾」＝主格・属格形、「我」＝与格・対格形という仮定は、「吾」が述語動詞目的語を担うことが稀少である点を別にすれば、正確に言語事実を反映したものとは言い難い。

無論、Karlgrén(1920)もこの点は認識している。氏は自説に符合しないこれらの例外のうち、統計的に無視できない比重を占める「我」が主格となった例について、二つの解釈を提出する。

一つは、「同化」(assimilation)による解釈である。具体例として(15-11)～(15-13)のような文を挙げる。

- (15-11) 樊遲御，子告之曰：「孟孫問孝於我，我對曰『無違』」(『論語』「為政」1-81)
[樊遲が(孔子のために)車を御していた。先生は彼に言われた「孟孫が私に孝についてたずねてきた。私は『(礼に) 違わないことだ』と答えておいたよ。]
- (15-12) 子貢曰：「我不欲人之加諸我也，吾亦欲無加諸人。」(『論語』「公冶長」1-316)
[子貢が言った「私は人が私に何かを強いるのを望みませんし、私自身が人に何かを強いるのも望みません。]
- (15-13) 子曰：「吾有知乎哉。無知也。有鄙夫問於我，空空如也。我叩其兩端而竭焉。」(『論語』「子罕」2-585)
[先生が言われた。「私に知恵などがあるだろうか。知恵などはない。ある田舎者が私に教示を請うたことがあったが、(彼の問いに対する答えは)全く浮かんでこなかった。私はただ物事の(正反、首尾などの)両端を突き詰めて、それらをすべて答えるだけだ。]

上例において何故に同化が生じているのか、つまり同化の生ずる具体的な条件はどのようなものかについては、Karlgrén(1920)では明確には提示されていない。(15-11)は二つの一人称代詞が隣接していること、(15-12)はそれらが同一の単文に存在することを条件として同化が生じているということのようにも受け取れる((15-13)については不明)。仮にそれがKarlgrén 氏の意図であれば、この同化による解釈は説得的とは言えない。なぜならそのよう

な条件を満たしていながら同化が生じていない例を挙げるのは難しいことではないからである。下例(15-14)は二つの一人称代詞が隣接しており、(15-15)はそれらが同一の単文に存在している。

(15-14) 息侯聞之，怒，使謂楚文王曰：「伐我，吾求救於蔡而伐之。」楚子從之。（『左傳』「莊公十年」1-184）

[息侯はそのこと（＝蔡の哀公が息侯の妻に対して礼を失した対応をしたこと）を聞くと、立腹し、楚の文王に人を派遣して申し入れた「わが国を討伐する兵を起こしてください。わが国は蔡に救援を求めますので、そうすれば貴国は彼らを討つことができるでしょう。」楚の文王はこれを聞き入れた。]

(15-15) 鬬伯比言于楚子曰：「吾不得志於漢東也，我則使然。我張吾三軍，而被吾甲兵，以武臨之，彼則懼而協以謀我。故難間也。」（『左傳』「桓公六年」1-110）

[鬬伯比が楚の武王に進言した「わが国が漢水の東の地域に勢力を得ていないのは、わが国自身がそのようにさせているのです。わが国は（自らの）三軍を拡大し、鎧甲と兵器で身を固め、武力によって彼らに対するが故に、彼らは恐れ、連合してわが国に対抗しようとしています。そのために（彼らを）離反させることが難しいのです。]

以上のような「同化」による解釈は、Karlgren(1949)の段階では言及されていない。おそらくは氏自身が放棄したとみるべきであろう。

さて、Karlgren(1920)において、格屈折の「例外」を解釈するための、もうひとつの概念が、「強調の」(emphatique)用法である。下例における「我」は、この強調のために本来主格形が用いられるべき主語位置に生起しているというのである。(15-16)は「爾」との対比で強調され、(15-17)ではやはり「不知而作之者」との対比で強調されているということであろう。

(15-16) 子貢欲去告朔之餼羊。子曰：「賜也，爾愛其羊，我愛其禮。」（『論語』「八佾」1-195）

[子貢が、新月を迎える祭りに用いる羊の犠牲をやめようとした。先生は言われた「端木賜や、お前はその羊を惜しむが、私はその礼の方を惜しむのだ。]

(15-17) 子曰：「蓋有不知而作之者，我無是也。多聞，擇其善者而從之。多見而識之，知之次也。」（『論語』「述而」2-409）

[先生が言われた「あることを理解していないのに、それを行うような者もいるだろう。私はそのようなものではない。多く聞き、良いものを選んでそれを受け入れる。（自ら）多く見、それを知るというのは、次善の方法なのである。]

そして Karlgren 氏によれば、目的格形は「強力な」(vigoureuse)ために、主格などの他の格

に進入していく現象がしばしばみられ、例えばフランス語における一人称代名詞 *moi* もそのような歴史的変遷を経たものだという。

Karlgren(1920)の「強調」による説明では、強調された場合に「我」が主語位置に生起するという共時現象が、どのような条件のもとで固定化されていき、歴史的には「我」が主語位置に漸次的に侵入していくという変化を呈することになるのか必ずしも明らかではない。そして Karlgren(1949)の段階では、専ら通時的な観点から「例外」を解釈しており、共時レベルでの強調による「我」の主語位置への生起には言及されていない。

15.3.4.2 上古初期文献言語との整合性

Karlgren 説への第二の批判は、一人称「吾」「我」のうち「吾」が、『論語』『孟子』より古い、上古初期の『書経』『詩経』などにおいてはほとんどみられないという点である (Kennedy1956 など)。この点に対して Karlgren 氏は、前述のように「方言」の観点からの解釈を試みているが、『書経』『詩経』のみならず甲骨文、金文などのいずれにも、氏の説に完全に符号する人称代詞の体系がみられないことは、蓋然性の点で Karlgren 説にとって不利な材料であることは否めない。

15.3.4.3 音形の問題

Karlgren 説の第三の問題は、上古人称代詞の音形に関するものである。例えば Karlgren(1949)に対する書評である Bodman(1950)が、董同龢(1948)の上古再構音を引用しつつ、仮に董氏の再構に拠れば主母音の交替による格屈折が成立し難くなると指摘するように、他の研究者の再構音では一人称代詞と二人称代詞との音形間に必ずしも平行性が生じない。このように平行性が生じない場合、内部屈折の根拠が失われることになる。以下に、近年の研究も含めた諸家の再構音の例を【図表 15-5】として示す。

【図表 15-5】一人称・二人称代詞における機能と音形の平行性

	甲類	乙類	甲類	乙類
	吾	我	汝	爾
Karlgren1940	ngo	ngû	ńjo	ńja
1949	ngo	ngû	ńjo	ńja
1957	ngo	ngû	ńjo	ńja
董同龢 1948	ngâg	ngâ	ńja	ńjer
王力 1985	ŋa	ŋai	ńja	ńjai
李方桂 1980	ngag	ngarx	njagx	njidx(?)
藤堂 1980	ŋag	ŋar	niag	nier
鄭張尚芳 1987	ŋa	ŋai	nja	njai
2003	ŋaa	ŋaal?	nja?	njel?

Baxter1992	nga	ngajʔ	njaʔ	njaʔʔ
潘悟雲 2001	ŋa	ŋai· < ŋal·	na·	něi· < nəl·
Schuessler 2009	ŋâ	ŋâiʔ·	naʔ	neʔ

*最上行の「甲類」は Karlgren(1920)が主格・属格形とした人称代詞を指し、「乙類」は Karlgren(1920)が与格・対格形とした人称代詞を指す。

*郭錫良(1986)により、各語(字)の中古音韻地位と上古声韻を補足しておく。なお本論文でも以下に述べるように、「爾」の上古韻部については歌部とみなす論者も存在する。また、鄭張尚芳、Baxter、潘悟雲、Schuessler の諸氏は、伝統的な韻部とは異なる体系を採用している。

	[上古声韻]	[中古音韻地位]
・「吾」	疑母魚部	五乎切 疑模合一平遇
・「我」	疑母歌部	五可切 疑哿開一上果
・「汝」	日母魚部	人渚切 日語開三上遇
・「爾」	日母脂部	兒氏切 日紙開三上止

*李方桂(1980)は、「爾」については、直接には上古音価を推定していない。ここでは、かりに「爾」を脂部とみなした上で、李方桂(1980)の体系に基づいた推定音価を示す。なお、李氏の「我」「汝」「爾」の再構音における最末尾の“x”は具体的な音価を示すものではなく、上声を示す符号。

再構音であることを示す「」は省略した。

【図表15-5】から、他の多くの研究者の再構では、少なくともKarlgren(1949)の設定したそのままの形での内部屈折、すなわち主母音*o~*aの交替による格屈折は、成立し難いことが知られる。

無論、条件は異なっても甲類と乙類の間に主母音或いは韻尾に関しての何らかの平行性が存在しさえすれば、内部屈折自体はその成立を妨げない。但しその場合、伝統的には脂部所属とされている「爾」の主母音・韻尾の両方もしくはいずれかを、歌部「我」と共通せしめ、且つその共通要素が「吾」「汝」のいずれとも異なるような再構音を設定する必要がある。ところが、「爾」を脂部と認定した場合、その主母音として歌部「我」の主母音と同じく *aないし*aのような広母音を再構することはまず無理であり、何らかの措置が必要となる。

Karlgren(1940)は、「爾」などの「爾」声字を伝統的な韻部とは異なる分類によるClass VIに所属せしめ、これに「我」の所属するClass Iと類似の主母音を再構する。そして氏は、Class VIに通常は韻尾*-rを再構するにもかかわらず、二人称としての「爾」にはこれをみとめないことにより、「我」との平行性を高めている²⁰¹。

²⁰¹Karlgren(1957)は、二人称代詞の「爾」をゼロ韻尾としているが、この二人称代詞「爾」と中古音では同音である副詞接尾辞や文末助詞としての「爾」、やはり中古音でこれらと同音の「邇」については、上古音をいづれも *njər* のように韻尾*-rを有するかたちで再構する。Karlgren氏が如何なる音韻的根拠により、これらと二人称代詞の「爾」との韻尾を区分しているのかは不明である(『詩経』『楚辞』における「爾」字の押韻例は「邇」に通ずる『詩経』

また、王力(1958)(1985)や鄭張尚芳(1987)は、「爾」を歌部と認定し、その主母音を*aないし*aと再構する。本論文では「爾」を歌部とすることの是非を論ずることはしないが、董同龢(1948/1997:56)が『詩経』の押韻や諧声字、仮借などの状況から「爾」などの字は*a母音字とは関係を持ち得ないと主張するように、仮に上古からの中古への規則的音韻変化という観点を排除して、上古の共時的な状況だけから判断すれば、これを歌部と判断するのは一般的ではないとは言い得よう²⁰²。王氏の「爾」声字の所属韻部に関する説も必ずしも一貫しておらず²⁰³、鄭張氏も鄭張尚芳(2003)では甲類の「我」と「爾」の主母音が一致する再構を放棄している。両氏以外に、Baxter(1992)も「爾」に主母音*aを再構するが、その際、音韻的根拠以外に二人称代詞「汝」との体系性が考慮されている点は注意されてよい²⁰⁴。

以上、Karlgren(1949)そのままの形での内部屈折は成立し難いこと、そして異なる条件の内部屈折についても、Karlgren氏以降の研究者の再構では、内部屈折の成立が許容されない音形が再構されることが少なくないことなど、音形面における問題を確認した。

15.4 重読説

15.4.1 概要

金守拙(1956) (以下、Kennedy1956) は、Karlgren 氏の格屈折説には例外が多すぎることを批判した上で、「吾」「我」の区別は、実は同じ語彙の「重読」(stressed)と「非重読」(unstressed)の別だとする説を提出した。以下、これを「重読説」と呼ぶことにする。

Kennedy(1956)は、先ず漢語においては文中の「位置」——これは統語的位置ではなく単なる継起的関係における位置という意味合いが強い——が重要であり、この位置というものは“pause”の存在と密接に結びついていると指摘する。そしてこの pause を基準にして、直後に pause を有する位置を「phrase final」と名づけ、上古漢語の「吾」「我」に関して、この phrase final に位置し得るか否かという調査——phrase final は実際の調査では句読点の直

「大雅」「行葦」の一例だけだと思われる)。

²⁰² 筆者には「爾」を歌部とみなす根拠は不明である。敢えて推定すれば、一つは『詩経』「邶風」「新台」において「爾」声の「瀾」が、元部「鮮」と押韻しているともみなし得る例があること、もう一つには「爾」声字を脂部とした場合、「爾」が中古紙韻(相配する平声は支韻)へと入る変化が不規則的となってしまうこと、の二点であると思われる。なお、董同龢(1948)は、「爾」を脂部とみなすが、一般の脂部の韻尾を*-dと再構する一方、「爾」のように中古支韻に入る類の字には*-rを再構することによって、この不規則変化を処理している。

²⁰³ 例えば、上古韻部そのものを論じた王力(1937)、また『詩経』の押韻を論じた王力(1980)では、「爾」を脂部とする。そして音韻史に重点をおいた王力(1957)、同(1985)では、これを歌部とみなす。

²⁰⁴ Baxter(1992:453)は、「爾」声の「邇」を*njij?と再構するが、二人称代詞としての「爾」は、「汝」の再構音*nja?と対応させるために、*njaj?と再構する。

前ということで判別される——を行った。

そして氏は【図表 15-6】に見られるような一人称代詞「吾」「我」の「位置」に関する分布を示し、「吾」は phrase final を担い得ない非重読形であり、「我」は phrase final を担い得る重読形であると結論する。つまり、重読形の後にはしばしば pause があるが、非重読形の後には pause がないため、【図表 15-6】のような分布は、「吾」が非重読形式、「我」が重読形式であることを反映したものだと考えるのである。

【図表 15-6】「吾」「我」と phrase final 位置との関係 (Kennedy1956)

	吾			我		
	総数	phrase final の位置	phrase final 以外の位置	総数	phrase final の位置	phrase final 以外の位置
論語	112	0	112	46	有	有
孟子	127	0	127	158	有	有
春秋	660	0	660	—	—	—
莊子	381	0	381	—	—	—
荀子	71	0	71	—	—	—

* 数字は当該の条件を満たす「吾」「我」の用例数。

* 「有」は当該の条件を満たす用例数の存在は認定されているものの、具体的な用例数が示されていないことを表す。

Kennedy(1956)は、phrase final 以外に topic の後ろの位置も、その後ろに pause が置かれるため (ただし topic の後ろの pause は、助詞を介して置かれることがあるために直後とは限らない)、重読形たる「我」が生起すると主張する。例えば『論語』における二句、「回也不愚」[顔回は愚かではない] (為政) と「回雖不敏」[私 (=顔回) は聡くはありませんが] (顔淵) については、前者は「也」の後ろに pause があり、「回」 (=顔回) が topic であることを表しているが、後者には pause があるか否かは窺い知れない。よって前者は「我不愚」に交換され、後者は「吾雖不敏」に交換される可能性があるのだという。そしてこの理論によれば、Karlgren 氏の「格屈折」説では「例外」となる「我」が主語位置に生起する現象も、容易に解釈できるとする。

また、Kennedy(1956)は、重読説のもう一つの根拠として、「吾」「我」の出現比率の時代的変遷を挙げる。『書経』『詩経』から『論語』『孟子』へと至る間に、「吾」が増加していくことを指摘し、これはもともと「我」の字だけがあてられていた語が、非重読の場合にその音声上の差異を表現するために「吾」が使用されるようになったと解釈すべきだと主張するのである。

なお、Kennedy(1956)においては直接の言及はないのであるが、重説によれば、本章 15.2 で挙げた例文(15-8)にみられる現象——一人称代詞が述語動詞目的語となる場合、通常「吾」は生起し得ないのであるが、否定文において目的語として動詞に前置された場合には「吾」が生起し得るという現象——を合理的に説明できることも、この説にとっては有利な材料であろう。すなわち、述語動詞の後という目的語の位置は *phrase final* であるので「我」だけが生起することが可能であるが、述語動詞に前置された目的語の位置は *phrase final* ではなくするため、「吾」が生起し得る、というように解釈できるからである。

このような Kennedy(1956)の主張は、Karlgren 説と同様に、上古漢語の機能語体系の全体像まで視野に入れたスケールの大きな説と言ってよい。Kennedy(1956)はさらに、上古漢語の少なからぬ代詞・機能語において、①*phrase final* を担い得るものと、②*phrase final* を担い得ないもの、という系統的な区別があったと主張するからである。そして、前者は声調上では平声、後者は仄声であると指摘し、①と②との交替が純粹に音声上の区別である「吾」～「我」、「不」～「否」の類と、①と②との交替が疑問式～非疑問式という機能上の区別にも対応する「與」～「也」などの類とがあった主張する。

15.4.2 特徴と問題点

Kennedy(1956)の重説は、上古漢語の「吾」「我」に関する言語事実に照らし合わせたとき、相当程度は符合すると言ってよく、現在でもその価値を失ってはいない²⁰⁵。しかしながら、この Kennedy(1956)の重説によってすべてが解決されたわけではなく、以下のような問題点が存在する。

15.4.2.1 二人称代詞の問題

第一には、Kennedy(1956)が、二人称代詞の「爾」と「汝」には全く言及しない点である。よって両者が機能と音形の両面において類似するという現象を説明できない。他にも機能と音形の近似する代詞・機能語のうち、重説に符合しないものには言及しないのであり、少なくともこの説だけで上古漢語に特有の代詞体系の成立がすべて明らかになるわけではない。

無論、以上のことは「吾」「我」の選択に関して重説が成立すること自体を否定するものではないが、Karlgren(1920)が提出した原始漢語は屈折語であったとする説に否定的な立場をとる以上、二人称代詞体系についても、屈折説に替わる解釈が存在することが望ましい。

²⁰⁵ただし、尾崎(1960)も指摘するように、Kennedy(1956)の主張には言語事実と符号しない点もみとめられる。例えば Kennedy 氏の理論によれば、「斯」は *phrase final* に位置し得ない類に属するが、これは言語事実と符合しない。

15.4.2.2 上古中期以降の言語事実に対する解釈力の問題

Kennedy(1956)の重読説は、「重読－非重読」以外の条件を全く含まない極めて単純な共時理論と言ってよい。しかし、上古中期以降の状況をも考慮に入れた場合、「吾」と「我」の選択に「重読－非重読」以外の如何なる下位条件も関与していないと考えるのは蓋然性の点で大いに疑問が残る。

例えば前漢の『史記』では、「吾」が述語動詞目的語を担うことが極めて稀であるという上古中期以来の傾向がそのまま維持されている。しかしながら同時に、「吾」が述語目的語（動詞に後置された目的語）を担い、その直後で文終始する例、すなわち「吾」が **phrase final** を担った例も、極めて少数ではあるが、出現するようになる（漆権 1984）。つまり、全体としては上古中期式の統語的文法分布を維持しながらも、少数ではあっても「吾」が **phrase final** を担い得る共時態が存在するのである。無論、『史記』は言語的に均質性が低いため、「吾」が **phrase final** を担う例を、「重読－非重読」による上古的体系が崩壊した後の異質な成分の混入とみることも可能であろう。ところが、例えば三世紀に成立した漢訳仏典『六度集経』における言語的均質性の極めて高い部分においても、『史記』と類似の現象がみられるのである。すなわち、「吾」と「我」とが文体的価値の面では差異が見出されず、且つ「吾」の目的語の用例がその主語としての用例よりも圧倒的に少ないという統語的文法分布の傾向は維持されたまま²⁰⁶、これが述語動詞目的語となり **phrase final** を担う次のような例が存在するのである。

(15-18) 兒出抱父戰慄涕泣，呼號且言：「…今日定死為鬼所噉。母歸索吾，當如牛母索其犢子，狂走哀慟。父必悔矣。」（『六度集経』（A部分）3-9c）

[子供たちは父に抱きついて、震えながら泣きじゃくり、叫んだ「…（父親がこの化け物のようなバラモンに自分たちを引き渡したら）今日（僕たちは）きっと死んでしまって、この化け物に食べられてしまう。母さんが帰ってきたら僕たちを探して、母牛がその子牛を探すように、狂ったように走り回って悲しみ嘆くはずだよ。父さんは必ず後悔するよ。]

(15-19) 婦還睹太子獨坐，慘然怖曰：「吾兒如之，而今獨坐，兒常望睹吾以*果〔金剛寺本〔菓〕〕歸，奔走趣吾，躡*地〔金剛寺本「*□(?)」〕復起，*跳〔金剛寺本「*□(?)」〕跟喜笑，曰：『母歸矣。…』」（『六度集経』（A部分）3-10a）

²⁰⁶用例(15-18)(15-19)はいずれも『六度集経』所収の「須大拏経」における用例である。筆者の調査では、この「須大拏経」における「吾」の用例は、主語 39 例、連体修飾語 14 例、介詞目的語 2 例、述語動詞目的語 2 例、「所」構造の意味上の主語 1 例、である。「我」の用例は、主語 39 例、連体修飾語 14 例、介詞目的語 2 例、述語動詞目的語 2 例、「所」構造の意味上の主語 1 例である。

なお、『六度集経』（A部分）における一人称代詞体系のあり方は、三世紀の漢訳仏典言語としては一般的ではなく、多くの二～三世紀成立の漢訳仏典（とりわけ洛陽地域成立の漢訳仏典）では、「吾」がやや尊大な言い方に変化し、「我」との文体的価値の違いが顕著になっている。

〔妻は帰ると、太子が一人で座っているのが見えた。(彼女は) 痛々しいまでも恐怖しながら言った「子供たちは何処へ行ってしまって、今あなたは一人で座っているのです。あの子たちはいつも私が果物を持って帰ってきたのをみると、(私に) 駆け寄ってきて、倒れ込んで起き上がり、飛びまわっては笑って言うのですよ『お母さんが帰ってきた。…』〕

本論文の疑問は、『六度集経』のごとき共時態において「吾」が目的語に用いられることが少ないという統語的文法分布の偏差を生み出している要因は何であろうか、ということである。漢語の動目構造では目的語が重読されることが多いという点に歴史的変化が無かったとすれば²⁰⁷、非重読形式が *phrase final* にも生起できるのであるから、Kennedy(1956)の理論だけでは拠って解釈することが難しく、これらの言語体系における「吾」と「我」の交替には「重読－非重読」以外の要素も関与していると考えざるを得ない。そうであれば、上古中期の言語における「吾」と「我」だけが「重読－非重読」をその交替の唯一の条件にしているという仮定が、蓋然性の点で疑われることになる。

15.4.2.3 生起条件の規定の問題

Kennedy(1956)の重読説は、これに明確に符合しない「例外」は総じて少ないようであるが、しかしながら実際に検討してみると、如何なる場合に「吾」と「我」のいずれが生起するかのも明確な規定がされていないことが、その一因ではないかという疑いが生じてくる(この点に関しては Graham1969 も参照)。

まず、Kennedy(1956)は、上述のように「吾」が生起し得ない位置として *pause* の直前たる *phrase final* と *topic* とを挙げる。ここで重要なことは「我」の方はこれらの位置以外にも生起し得ることである(【図表 15-6】参照)。つまり一般の主語、連体修飾語の位置には両者が生起し得ることになるが、その場合の両者の選択条件が明確ではない。例えば、Kennedy(1956)は、「我」が主語となった以下の例文を挙げて「我」が重読の位置にあるのは明らかであると説く。この場合「我」は *phrase final* に位置しておらず、その意味するところは文脈において——Kennedy 氏自身はそう明言していないが、恐らくは「彼」との対比的ニュアンスによって——意味上強調されている要素であるということであろう。

(15-20) 曰：「豈謂是與。曾子曰：『晉楚之富，不可及也。彼以其富，我以吾仁；彼以其爵，我以吾義，吾何慊乎哉。』夫豈不義而曾子言之。…」(『孟子』「公孫丑下」1-259)

〔(孟子が) 言った「どうしてそんなこと(=君主が臣下を召す時のこと)であろうか。曾子が言うには『晋や楚の富には(我らは)とうてい及ばない。(しかし)』

²⁰⁷上中古間に漢語の韻律構造に大きな変化があったとすれば、Kennedy(1958)の理論は成立しないことはない。但し、それを検証するのは容易ではない。

彼らは彼らの富に拠っているが、私は私の仁に拠っているのである。彼らは彼らの爵位に拠っているが、私は私の義に拠っているのである。私はどうして彼らに比べて自分のことを遺憾に思おうか。』いったいどうして道理がないにもかからわず、曾子がこのことを口にするだろうか。…」]

よって *phrase final* や *topic* 以外の位置に「我」が生起するのは、そこが文脈において重読されるべき位置ということだと推定される。しかしながら、仮にそうだとすれば、Kennedy(1956)の理論に符合することが疑わしい例は皆無ではない。例えば Karlgren(1920)が格屈折説の例外について「同化」により解釈した上述の例文(15-12)(15-13)において、「吾」よりも「我」の方が重読される位置にあると断言し得るかどうかは疑問である。実は、この重読説は、夙に Karlgren(1920:213(1))がその可能性について検討を加えているのである。そしてそこで Karlgren 氏は自ら反例を提示することで、即座に否定している。具体的には、以下のように「吾」でも重読されると推定される場合(例文(15-21))や、「我」でも重読されないと推定される場合(例文(15-22))がみとめられるためだと言う(Karlgren 1920は『論語』から前者の例として3例、後者の例として2例挙げる)。

(15-21) 子曰:「先進於禮樂, 野人也; 後進於禮樂, 君子也。如用之, 則吾從先進。」(『論語』「先進」3-735)

[先生が言われた「礼樂を学ぶことを(官職につくことよりも)優先したのが²⁰⁸、官位のない在野の人であり、礼樂を学ぶことを(官職につくことよりも)後にしたのが、卿大夫の子弟である。もし人材を用いるのなら、私は(礼樂を)学ぶことを優先する人を用いよう。]

(15-22) 子曰:「從我於陳、蔡者, 皆不及門也。」(『論語』「先進」3-739)

[先生が言われた「私に付き従って陳や蔡に行った者は、(今では)みな門下になくなってしまった。]

Karlgren(1920)の提出した上例についての解釈は、その判断が主観的であることを免れないために、必ずしも万人がみとめ得るものではないであろう。しかし少なくとも Kennedy(1956)の例外とも疑われる例が存在することは否定し難い。そしてこのような例外とみなし得る例の存在は、何らかの条件の下では別の要素が関与していることを強く示唆している。Kennedy(1956)のように単一の共時理論だけによって説明を試みることの不利は、山崎(1991)によって理論的に解決されるまで、問題としてひきつがれることになる。

²⁰⁸ 用例(15-21)における「先進」「後進」という語句の意味解釈には、従来より諸説ある。本論文は劉宝楠『論語正義』の説を踏まえた楊伯峻『論語訳注』の訳を参考にしつつ、「先進於…」「後進於…」をそれぞれ「…を先にする」「…を後にする」という意味に解釈しておく。

15.5 強調説

15.5.1 概要

本章で言う強調説とは、必ずしも特定の個人の説を言うのではなく、一人称「我」と「吾」との差異が機能上の「強調—非強調」の差異に他ならないとする一連の説を指すものとする。

この説の原型となる考えは、上述のように Karlgren(1920)において格屈折の「例外」を解釈する際に部分的に導入されている。さらに Kennedy(1956)の理論も、機能面に着目すれば、この強調説と極めて近いものとみなし得るであろう。しかしながら強調説を支持する各論者は、Kennedy(1956)とは異なり、「吾」「我」の本質的な区別は音声上の相違ではなく、機能上の強調箇所（焦点 focus）であるか否かという区別であると主張しているのであり、この点において理論上は同一とは言えない。さらにこの強調説が、現在、おそらくは最も支持者が多いと推測されるということも重要である。

強調説としてまとめられる諸説は、特にその理論の根拠とする言語現象の点で差異がみとめられるが、結論としては、以下にみる鈴木(1987)、鄭張尚芳(1987)・潘悟雲(2001)のいずれかとほぼ同様であるとみなし得るため、本章ではこれらの説を強調説の代表としてとりあげる。

15.5.2 鈴木(1987)

鈴木(1987)は、上古漢語における一人称代詞「我」「吾」の用法を検討し、一人称の「我」には「話し手が、強くはっきりと自分を指示する」或いは「自己強調の用法」といった第一的用法と、「自他あい対立している自分を指している」という第二的用法とがあり、また「吾」には「単にゆるやかに自分を指示する」という第一的用法があるという結論を導き出した。鈴木(1987)自身はその語を用いてはいないが、ここから氏の説を「強調説」と表現することが許されよう。鈴木氏は、発話の重点というものは、動目構造においては、通常、目的語に置かれていたと考えており、このことによって、「吾」が述語動詞目的語になることが少ないという現象を解釈するのである。そして「我」が主語など目的語以外に用いられる際、基本的には特に強調された用法であると説く。下例は鈴木氏自身が挙げるものである。

(15-23) 司馬牛憂曰：「人皆有兄弟，我獨無。」（『論語』「顔淵」3-829）

〔司馬牛が沈み込んで言った「他の人にはみな兄弟がいるのに、私にだけはそれがない。」〕

(15-24) 子貢欲去告朔之餼羊。子曰：「賜也，爾愛其羊，我愛其禮。」（『論語』「八佾」1-195）

〔子貢が、新月を迎える祭りに用いる羊の犠牲をやめようとした。先生は言われた

「端木賜よ、お前はその羊を惜しむが、私はその礼の方を惜しむのだ。」]

この鈴木(1987)の一人称代詞に関する主張は、単に上古漢語の用例が挙げられるだけでなく、『説文解字』などの記載をも根拠にしており²⁰⁹、様々な文献的な根拠に支えられたものではある。そしてこの説のすぐれた点は、鈴木(1987)自身も言及するように、一人称代詞が否定文において目的語を担い文法関係を結ぶ動詞に前置されるとき、「我」ではなくむしろ「吾」が生起することが多いという本章 15.2.1 の例文(15-8)にみられる現象を——Kennedy(1956)の重説説と同様に——合理的に解釈できる点にあらう。この現象を本論文の用語で表現し直せば、動目構造においては一般に目的語に焦点が置かれるために強調形式である「我」が生起し得るが、否定文ではしばしば目的語が焦点とならず動詞の方が焦点となるため非強調形式である「吾」が生起する、ということになる。

鈴木(1987)は、さらに藤堂(1957)の上古再構音に基づき、上古の代詞体系における機能と音形式の平行性に着目し、上古漢語には次のような体系が存在したと考える。

【図表 15-7】鈴木(1987)による上古一人称代詞・遠称指示代詞の体系

韻部／指示の強弱	歌部／強調形式	魚部／非強調形式
指示機能		
一人称代詞	我* <i>ŋar</i>	吾* <i>ŋag</i>
遠称代詞	彼* <i>piar</i>	夫* <i>biag</i>

【図表 15-7】のように、鈴木氏は、一人称代詞「吾」と「我」の他に、遠称代詞「彼」と「夫」の間にも同様の「強調—非強調」の区別があったと主張するのである。この他、二人称代詞の「爾」(**nier*)と「汝」(**niag*)の差異についても、春秋戦国時期では「爾」がしばしば「我」と対応する位置に生起し、「汝」がしばしば「吾」に対応する位置に生起するため、「爾」の指示機能が強く(＝強調形式)、「汝」の指示機能は相対的に弱かった(＝非強調形式)と考えている。

15.5.3 鄭張尚芳(1987)・潘悟雲(2001)

鄭張尚芳(1987)は、上古音の音価を論じたもので、上古の人称代詞についての専論ではないが、歌部の韻尾の再構を検討した箇所、人称代詞の問題に言及している。まず、歌部の韻尾を**i*と再構した上で、上古の代詞体系においては、魚部**a*のものと歌部**ai*のものとの機能的な対立が存在したのだとして、「吾**ŋa*」～「我**ŋai*」、「汝**nja*」～「爾**njai*」、

²⁰⁹鈴木(1987)によれば、『説文解字』の「我」の項は、「施身自謂也」であり、段注はこの箇所を「謂用己廁於衆中而自称，則為我也」〔己を衆のなかにまじえて、自分のことを言えば、それが「我」である〕と解説する。なお「吾」の条には単に「我自稱也」〔「我」である。自分のことを言うのである〕とだけある。

「夫**pǎ*」～「彼**pǎi*」、「胡**ga*」～「何**gai*」の各組を挙げ、それぞれの後者である歌部**ai*式が「強調式」であり、処置や対比の場合、多数の聴衆に対して話をする場合など、凡そ強調が必要な際に用いられたとする²¹⁰。注意すべきは、このような主張が、特定の文献言語を網羅的に調査した結果を提示されることなく（少なくとも鄭張尚芳1987においてはそうである）、主に音形面の平行性から導き出されていることである。

但し、鄭張尚芳(1987)ではもう一つの根拠が挙げられる。それは少数民族語である独龍語の代詞体系である。孫宏開(1982)によれば、独龍語の一人称代詞は、*ŋa*～*ŋai*、二人称代詞は、*na*～*nǎi* であり、後者が強調（原文「施動」）式であるという。そして鄭張氏は、「独龍語は、漢・藏、から苗瑶、壮侗に至るまでの多くの同源成分を保存しており、漢藏言語の中心的言語の性質を備えるといつてよい」²¹¹という認識のもと、獨龍語における一、二人称代詞の状況を、上古一、二人称代詞体系に「強調－非強調」による対立が存在したことの証拠とみなすのである。

潘悟雲(2001)は、基本的には鄭張尚芳(1987)の主張をそのまま継承しつつ、それをさらに発展させたものと言えよう。具体的には、上古漢語の代詞体系には、①歌部(**ai*)と魚部(**a*)との交替を条件とする強調式(歌部)と非強調式(魚部)との対立と、②之部(**u*)・微部(**ul*)と歌部(**ai*)・魚部(**a*)との交替を条件とする「弱化式」(之部・微部)と非弱化式(歌部・魚部)との対立、という二種類の対立が存在したという考えを提出し²¹²、さらにこれらの対立を有する代詞の範囲を大幅に拡大したのである。

潘氏は、上古の一人称代詞「吾**ŋa*」～「我**ŋai*・<*ŋal*・」、二人称「汝**ŋa*・」～「爾**něi*・<*něi*・」の交替は²¹³、強調－非強調の対立によるものであり、一人称代詞「余**lǎ*」～「台**lǔ*」、二人称代詞「汝**na*」～「而**nǔ*」、おなじく二人称代詞「女**nǎ*」～「乃**nǔ*」、三人称代詞「渠**gǎ*」～「其**kǔ*」の交替は弱化形式と非弱化形式の対立によるものであると考える。そして、これら韻尾の交替(①の「強調式－非強調式」)や主母音の交替(②の「弱化式－非弱化式」)が「形態変化」であると明言する。

²¹⁰ 鄭張尚芳(1987)は、強調が必要ではない「一般の場合」では**a*を用いることが多いものの、**ai*を用いることもできるとしており、**ai*を有標の強調形式とみなしているようである。

なお、池田巧氏のご教示によれば、独龍語の人称代詞の*ai*の*i*は、*ergative*を表すものとのことである。

²¹¹原文は以下の通り。

獨龍語保留了漢、藏以及苗瑶、壯侗的許多同源成份，可說具有漢藏語言中心語言的性質。

²¹² 潘悟雲(2001)は、「強調式」「弱化式」という表現は使用するものの、「非強調式」「非弱化式」といった表現は使用していない。後二者は、本論文が、叙述の便のために潘氏の意図を推し量った上で敢えて用いた表現であることに注意されたい。

²¹³ 潘悟雲(2001)の再構音によれば、二人称代詞「爾」の主母音は**a*ではなく**ə*となる。潘氏はこの問題について独自の解釈を提出している。すなわち、東周以降、「爾」が近称指示にも用いられるようになり、このことにより母音が**a*から**e*へと変化したのだというのである。そして、近称指示代詞「斯、此、是」の上古主母音はどれも**e*であり、遠称指示代詞の主母音はいずれも**a*であると指摘する。

15.5.4 特徴と問題点

強調説は、Kennedy(1956)の重説説の観点と類似する点が多く、その問題点も重説説と重なる点が多い。しかしほとんどの論者が、「強調—非強調」という対立を、二人称代詞にまで持ち込むこと、また論者によっては少数民族語など非漢語の言語現象を根拠にしていることなどが注目される。

但し、強調説を支持する論者の中にも、大きな認識の違いがあることは確認しておく必要がある。例えば、鈴木(1987)は、「吾」は「余」から歴史的に派生してきたものと考えており、「吾」と「我」とは共時的なパラダイムを成すものの、別語の交替とみなしているのであって形態変化であるとは考えていない。それに対し、潘悟雲(2001)は、形態変化であると明言し、その音形面での条件も提示している。

以下、この強調説の問題点について述べるが、本章 15.4.2 において重説説の問題として挙げた「上古中期以降の言語事実に対する解釈力の問題」(15.4.2.2)、「生起条件の規定の問題」(15.4.2.3)がほとんどそのまま強調説の問題点ともみなし得るため、まずこれらの問題点について簡単に触れておく。

15.5.4.1 上古中期以降の言語事実に対する解釈力の問題と生起条件の規定の問題

「上古中期以降の言語事実に対する解釈力の問題」については、全体としては上古中期と同様の統語的分布を示す上古後期・中古初期の共時態において、非強調形たる「吾」が述語動詞目的語となった例が存在することが問題になる。歴史的に漢語の動目構造においては目的語に焦点が置かれることが多いという点に変化がなかったとすれば、少なくとも純粹に「強調—非強調」という条件だけによって「吾」「我」が選択されているとは考え難く、そのこと踏まえれば、上古中期における「吾」「我」の選択にも「強調—非強調」以外の要因が関与していたことが強く疑われる。

また、「生起条件の規定の問題」については、「強調—非強調」の定義・規定が曖昧なことがあげられる。文の中で強調される要素は一箇所だけなのか、或いは複数の強調箇所がみとめられのか、ということである。仮に複数の強調箇所をみとめるのであれば、どのような場合に「吾」が生起し、どのような場合に「我」が生起するのか、といったことが問題となる。さらには情報構造における「新情報」との関係も、明確に規定されるべき問題であろう。

以下は、強調説特有の問題点である。

15.5.4.2 二人称代詞の問題

鈴木(1987)及び、鄭張尚芳(1987)・潘悟雲(2001)の強調説に共通する問題点は、少なくとも二人称代詞については、「爾」＝強調形式、「汝」＝非強調形式という彼らの主張が言語事実と符合するとはみとめ難いということである。

例えば、下例(15-25)では、「女」(＝「汝」)が「我」との対比される場面で用いられている。この「女」よりも同一発話における二つの「爾」の方が強調されていると考えることは困難であろう。また、例文(15-26)では、「女」(＝「汝」)が「諸侯、縣公」と対比的に用いられている。

(15-25) 登諸樓車，使呼宋而告之。遂致其君命。楚子將殺之，使與之言曰：「爾既許不穀，而反之，何故。非我無信，女則棄之。速即爾刑。」(『左伝』「宣公十五年」2-760)
〔(そこで解揚を)物見やぐらのついた車に乗せ、宋人に呼びかけさせ、そのこと(君命とは逆のことを)を告げさせようとしたが、(解揚は)すぐさま(晋の)君命を伝えてしまった。莊王は立腹して彼[解揚]を殺そうとして、(臣下の者に)命じて解揚に言わせた。「(お前は)わたしと約束しておきながら、これにそむいたのはどういうわけか。わたしが信義を守らないのではなく、お前が信義を破ったのだ。早々、(お前が受けるべき)刑罰を受けよ。〕

(15-26) 冬。楚子為陳夏氏亂故，伐陳。謂陳人無動，將討於少西氏。遂入陳，殺夏徵舒，轆諸栗門，因縣陳。陳侯在晉。申叔時使於齊，反，復命而退。王使讓之曰：「夏徵舒為不道，弑其君。寡人以諸侯討而戮之，諸侯、縣公皆慶寡人，女獨不慶寡人。何故。」(『左伝』「宣公十一年」2-714)

〔冬。楚王(＝莊王)は陳の夏氏の乱を理由として陳を討った。陳人には、怖がる必要はない、少西氏を討とうとしているのだ、と言って、ただちに陳に入り、夏徵舒を殺し、栗門において彼の遺体を車ぎきにされた。かくして陳を(楚の)県とした。(時に)陳侯は晋にあった。その時、申叔は齊に使者として赴いていたが、(楚に)帰国した。(楚王に)使命の完了を報告しただけで退いた。楚王は人を遣って申叔に言わせた「夏徵舒は(臣下の)道に合わないことを行い、その君主を殺した。私は諸侯を率いて彼を討伐し、これを殺した。諸侯、県公はみな私を祝福してくれているのに、お前だけが私を祝ってくれない。何故であるのか。〕

以上のような、強調説に対する二人称代詞の反例を上古中期漢語において探し出すことは決して難しくはない。さらに、「汝」と「爾」の統語的文法分布について言えば、周法高(1959)が指摘するように、両者の統語的文法分布は文献によって相当に異なり、全体としては目的語を担うのはむしろ「汝」の方が多い、という状況である。SVO 言語である上古中期漢語では、何らかの有標の構文が用いられない限り目的語に焦点がくることが多いと考えるのが、最も蓋然性の高い推定であろうから、上述のような「汝」と「爾」の統語的文法分布も、強調説が二人称代詞体系には適用し難いことを間接的に示すものとみなしてよい。

15.6 「格表示の分裂現象」の観点

15.6.1 説の概要

前節まで概観してきた諸説は、Karlgren 氏の説を除いて、上古漢語における人称代詞の機能的差異を一つの原理で説明しようとしている点で共通している²¹⁴。その場合、問題となるのが、①二人称代詞「爾」「汝」の文法分布が文献ごとに異なるということ、そして②一人称代詞「吾」「我」が上古後期から中古初期にかけては全体として上古中期の状況を維持しながらも、同時に「吾」が述語目的語として文末に生起し得るという変化がみられることであった。

このような問題点を合理的に説明する道を切り開いたのが、山崎(1991)である。この論文は直接には『左伝』における一人称代詞「吾」「我」の生起条件だけを検討したものである

²¹⁴本論文で検討した諸説以外にも、上古漢語の人称代詞の「格屈折」の問題に関する仮説は、少なからず提出されている。その中でも、まず杉田(1993)に言及しておきたい。杉田(1993)は、『論語』における一人称代詞「吾」「我」の生起条件を議論したものである。その中で、新たに「主語が動作を行う動機或いは原因が主語自身に由来するか否か」(原文:「主語做動詞的動機或原因是否出自主語自己」という「積極性」・「消極性」という概念——前者は当該の性質を備えるもので、後者はそれを備えないもの——を導入した上で、次の二つの規則を提出する(下記の規則は筆者が杉田 1988:31 を基に日本語訳し、表現に多少の調整を加えたもの)。

規則A: 一人称代詞は述語動詞の意味の相違による使い分けがある。すなわち、積極性述語では「吾」が主語となり、消極性述語では「我」が主語、目的語となる。

規則B: 一人称代詞は動詞に対する位置による使い分けがある。すなわち、動詞の前では「吾」を用い、動詞の後ろでは「我」を用いる。

そして二つの規則が衝突するとき、いずれの規則に従うかが「吾」「我」で異なり、「吾」は規則B(形態統語レベル)に忠実であるが、「我」は規則A(意味機能レベル)に忠実であると主張する。そして以上の主張を次の様に整理している。

	積極性主語	消極性主語	目的語
動詞の前	吾	吾/我	吾/我 (否定文における目的語前置)
動詞の後	—	我(動詞「有」「無(毋)」に限られる)	我

杉田(1993)の説の他、近年の研究に市原(2018)がある。市原(2018)は、上古中期の一人称代詞「吾」「我」の生起条件について、『論語』『孟子』『左傳』さらに一部の出土資料を資料として、各種の統語位置において両者が担う意味役割の傾向を、当該の文の述語の意味的類型(出来事的・状態的といった意味特徴による類型)との関係を踏まえながら詳細に記述している。そして「吾」は動作主や経験者役割を担う、実感の伴った主体的・個別的な代名詞であり、「我」は主題者・対象者役割を担う主体性の薄い、他者を視野に入れた相対的・客体的な代名詞であったと結論している。

以上の杉田(1993)にせよ、市原(2018)の研究にせよ、今後の研究の重要な方向性を示すものと考えられるが、いずれも上古中期の一人称代詞だけを対象とした共時的な理論であり、これらの説だけでは、本論文が「一つの原理で説明しようとしている」とみなす諸説と同じように、①二人称代詞「爾」「汝」の文法分布が文献ごとに異なるということ、そして②一人称代詞「吾」「我」が上古後期から中古初期にかけては全体として上古中期の状況を維持しながらも、同時に「吾」が述語目的語として文末に生起し得るという変化がみられること、を合理的に説明することは難しい。

が、議論にあたり、以下の点を確認したことが、学史上重要であろう。

- (i) 格変化の形態、個々の形式の分布（どの位置にどの格に現れるか）なども、当然、通時
的变化を被る。
- (ii) 格体系のパラダイムが持つ機能は一つではない。そして、その機能に対する我々の知
識は、まだ十分ではない。
- (iii) 格表示の分裂現象は多くの言語に見られる現象である²¹⁵。

このような点は、言語学的には当然のことであるが、以前の諸説においてはなおざりにさ
れてきた事柄でもある。そして以上を踏まえれば、上述②の一人称代詞「吾」「我」が上古
後期から中古初期にかけては全体として上古中期の状況を維持しながらも、同時に「吾」が
述語目的語として文末に生起し得るという変化がみられる現象も合理的に解釈し得ること
になる。すなわち、格標示体系は第一義的には格標示を行うことがその機能であるが、その
他に付帯的機能を有しており、その付帯的機能の違いによって各様に格標示の分裂が生じ
得るのであるから、上古後期・中古初期の「吾」の文法分布の変化は、格標示体系の付帯的
機能の差異として解釈され得る、ということである。以下に、山崎(1991)の結論を要約して
おく。

『左伝』において、「吾」「我」は、主語位置と名詞の限定語の位置において、格表示の分
裂現象を見せる。分裂の条件は以下のごとく。

- (i) 主語位置においては、「我」は無標であるが、「吾」は、否定文、疑問文（反語文も含む）、
「其」構文などの、現実性の低いムードに出現しやすい。
- (ii) 限定語位置においては、「吾」は、①話し手ひとり、話し手個人の所有物に言及する
とき、そして②自己と同一の集団に属する聞き手に対して、その集団の所有物に言及する
ときに生起する。「我」は、自己と異なる集団に属する聞き手に対して、話し手の集団
の所有物に言及するときに生起する。

以上から看取されるように、山崎(1991)は、調査対象の同質性に配慮するなど、はじめて
の本格的な言語学的方法による研究とみなし得るものであり、特に方法論面での功績が大
きい。

²¹⁵山崎(1991)は、「格表示」という表記を用いるが、本論文の地の文では「格標示」と表記する
ことにする。ただし、山崎(1991)の引用をする場合や、また本論文の地の文であっても同説の
名称を表現する場合には、「格表示」という山崎氏自身の表記に従うこととする。

15.6.2 特徴と問題点

山崎(1991)は学史上重要な研究であるが、上古漢語の人称代詞に関するすべての問題を解決したわけではなく、以下のような不足な点もある。

まず第一点は、『左伝』における共時面での一人称代詞の格標示体系の機能は明確にし得たが、代詞の音形の問題を全く扱っていないため、その格標示体系が語形変化を伴う形態論的な「格屈折」であるかどうかには言及しない点である。

そしてより大きな問題は、格標示体系の歴史的な来源については全く議論していない点である。Karlgren 氏の格屈折説が大きな反響を引き起こしたのは、何よりも原始漢語が屈折言語であったと主張したためなのである。しかしこの最も重要な問題に対して、山崎(1991)の成果は、直接には新しい材料を提供してはいない。

15.7 「格標示の個別的生成」説の可能性

山崎(1991)によって、「格表示」「強調—非強調」といった概念の関係性を整理し、上古における文献言語ごとの人称代詞の共時的選択条件をさぐっていく理論的基礎が築かれたと言ってよい。しかしながら、前述したごとく、それによって Karlgren 氏の提出した問題に対して完全に解答が与えられた訳ではない。

Karlgren 説において最も重要であり、かつ多くの批判を受けた点は、上古中期魯方言にみられる人称代詞の「格屈折」を、原始漢語が屈折原語であった——すなわち原始漢語には体系的な格屈折が存在した——証拠だと主張したことにある。Karlgren 氏が人称代詞に「格屈折」がみとめられるとした根拠は、各人称における統語的文法分布と音形との平行性であり、この平行性は、鄭張尚芳(1987)など強調説を唱える論者にも引き継がれている。今後、我々が論ずべき問題は、このような機能と音形との平行性が、どのように形成されたのか、という点であろう。

以上のことは、今後の課題であり、本論文はこの問題の解決までをその任とはしていない。しかしながら、上古漢語における人称代詞の格屈折説をめぐる学説史を終えるにあたり、現時点での筆者なりの見通しを提示しておく必要はあろう。

本論文は、この問題は、人称代詞だけでは直接的な回答は得られないと考える。今、視点を変え、本章 9.1 で議論した禅母系疑問代詞にみられる格標示体系の生成過程を参照すべき現象として取り上げる。

15.7.1 禅母系疑問代詞の上古中期における共時的状況

本論文九章の【図表 9-5】において示したように、『論語』『孟子』において、禅母系疑問代詞が〈+人〉(＝人または人の集団)を指示する場合、「孰」と「誰」との交替が格標示体系を構成するという現象——「孰」による主語標示、「誰」による目的語標示という体系—

一がみとめられる。「孰」「誰」の再構音はそれぞれ*duk と*dui であるために、文法機能と音形とが平行性を有している点において、前述した一人称代詞「吾」「我」の状況と類似している。そこで、以下、この禪母系疑問代詞における格標示体系の成立過程を検討することによって、一人称代詞「吾」「我」の交替が如何なる文法現象であったのかを解明するための手がかりとしたい。

まず検討すべきは、「孰」「我」による格標示現象は、韻尾*-k と*-i の交替を条件とした「形態変化」なのかという問題である。この点を踏まえつつ、本論文 9.1 で述べた上古中期の各文献における禪母系疑問代詞の共時的状況について、下記(i)~(iv)の条件を満たすか否かを指標として整理しておく。結果は【図表 15-8】のようにまとめられる。

- (i) 禪母系疑問代詞が〈+人〉を指示し、かつ統語的曖昧性の高い統語形式（「孰/誰+V2」「孰/誰+V3(+O)」など）のなかに生起する場合、「孰」は主語になるが目的語にはならず、「誰」は目的語になるが主語にはならないという統語的相補分布がみとめられるか。 [=統語的曖昧性の高い統語形式において「孰」「誰」の交替による格標示がみられるか]
- (ii) 禪母系疑問代詞が〈+人〉を指示し、かつ統語的曖昧性が低い統語形式のなかに主語として生起する場合（「孰/誰+V2+O」「孰/誰+V3+O+O」など）、「孰」だけが生起し、「誰」は生起しないという統語的相補分布がみとめられるか。 [=統語的曖昧性の低い統語形式においても「孰」「誰」の交替による格標示がみられるか]
- (iii) 「孰」の出現頻度が「誰」よりも高いか。
- (iv) 「孰」について、〈+人〉を指示する用法だけに偏る傾向がみられるか。

【図表 15-8】 上古中期の禪母系疑問代詞の分布

	α 型		β 型		γ 型
	左伝	国語	論語	孟子	呂氏春秋
(i)	—	—	+	+	+
(ii)	---	---	+	+	—
(iii)	---	—	±	+	+
(iv)	—	+	++	+	++

*表中の(i)~(iv)は上記(i)~(iv)の各条件を示す。

*「+」は当該の条件を満たすことを表し、「—」は、当該の条件を満たさないことを表す。

*「++」は当該の条件を満たすだけでなく、その傾向が強くみられることを表し、「---」は、当該の条件を満たさないだけでなく、その傾向が全くみとめられないことを表す。

*「±」は、当該の条件を満たすのか否か判然としないこと（中間的であること）を表す。

【図表 15-8】から、五文献における禪母系疑問代詞の体系はα型、β型、γ型の三類に整

理し得ることが知られる。そしてその時、 α 型と β 型における条件(i)(ii)(=「孰」「誰」による格標示の成立に関する条件)と、条件(iii)(iv)(=すなわち「孰」「誰」の指示対象・出現率に関する条件)との間には、ある種の含意関係が存在することが看取される。つまり、もし(i)(ii)が「-」或いは「--」であれば、(iii)(iv)も「-」或いは「--」であり、(i)(ii)が「+」であれば、(iii)(iv)も「+」或いは「++」(「±」)のいずれかとなる、ということである(但し『国語』の(iv)項は例外)。ここで重要な点は、共時的にみた場合、(i)(ii)と(iii)(iv)との間には、直接的な因果関係が想定し難いということである、よってこのような含意関係は、歴史的に生成されたものと考えられる。以下、本章ではこの含意関係の生成に着目しながら、「孰」と「誰」の交替による格標示体系の来源の問題について仮説を提出する。

15.7.2 禪母系疑問代詞における相補的統語分布の生成過程

はじめに確認しておくべきは、上古中期の『論語』『孟子』にみられる禪母系代詞「孰」「誰」の交替による格標示体系は、上古初期には出現していなかったということである。そもそも「孰」自体が甲骨文や西周金文、『詩経』『書経』といった上古初期文献にはみとめられず、上古中期に至って出現しはじめたものなのである(周法高 1959、王海棻 1982 等)。よって『論語』『孟子』にみられる禪母系疑問代詞の格標示体系は「原始漢語に存在した形態変化の残存」ではあり得ない。本論文は、この禪母系疑問代詞の格標示体系は、上古中期において、次の【図表 15-9】に示したような過程を経て生成されたものとする。

【図表 15-9】 β 型の生成過程に関する仮説

	(i)	(ii)	(iii)	(iv)
第一段階 $\div \alpha$ 型	-	-	-	-
第二段階	- \sim +	-	- \sim +	- \sim +
第三段階 $\div \beta$ 型	+	- \sim +	+	+

* 「(i)(ii)(iii)(iv)」は【図表 15-8】の「(i)(ii)(iii)(iv)」の各条件を表す。

* 「+」「-」の意味するところも【図表 15-8】のそれと原則的には同じである。ただし、本表の「-」は【図表 15-8】の「--」を含むものとする。

* 「- \sim +

仮説を述べる前に、【図表 15-9】には明示されていないが、第一段階から第三段階までを通じて、「孰」「誰」のうち「孰」だけが目的語になり得ず、さらに「誰」だけが〈+人〉のみを指示するという、両者の機能面での差異は一貫して存在していた点を、確認しておきたい。

さて、第一段階は『左伝』の状況に相当する。この段階では、「孰」と「誰」は談話機能面での差異が顕著であった。「孰」は原則として「複数項から一つを選択する」用法に限ら

れていたのである。よって〈+人〉を指示する禪母系疑問代詞が主語を担い、かつ「複数項から一つを選択する」用法に用いられなかった場合、「孰」は生起し得ず、専ら「誰」が生起していた。その結果、この段階においては、「孰」の出現率が「誰」よりも低かったのである（上表(iii)が「-」）。そして注意すべきは、この段階では「誰+V2」「誰+V3(+O)」といった統語形式には大きな統語的曖昧性——「誰」が主語なのか目的語なのかという曖昧性——が存在していたということである。

第二段階では、「誰+V2」「誰+V3(+O)」といった統語的曖昧性の高い統語形式において、構造内部に存在する統語的曖昧性を軽減しようとする欲求に動機づけられて、「誰」が「孰」に取り替えられはじめた（上表(iii)が「-~+」となる）。その結果、〈+人〉を指示する「孰」の出現頻度が高くなり、「孰」の〈+人〉を指示する用法と、〈-人〉を指示する用法のうち、前者だけが急増することとなった（上表(iv)が「-~+」）。この変化の実現は、第一段階から第二段階へと至る過程で、「孰」が「複数項から一つを選択する」用法に限定されなくなるという変化が並行して生じていた、と仮定してはじめて成立することになる。

第三段階は、『論語』『孟子』にみられる状況（=β型）に相当する。この段階では「誰+V2+O」「誰+V3+O+O」といった統語的曖昧性の低い統語形式においても「誰」が「孰」に取り替えられはじめた。この変化は、第二段階を経て、「孰」が主語を担った統語形式が増加した結果、それらの形式への類推を動機として生じたものだと考えられる。以上のような過程を経て、『論語』『孟子』においてみられる「孰」と「誰」の交替による格標示体系が出現することとなったと推定する。換言すれば、このように仮定してはじめて【図表 15-8】における条件(i)(ii)と条件(iii)(iv)の間の含意関係を合理的に解釈し得ると考えるのである。

そして以上の仮説が事実であるとするれば、『論語』『孟子』（=β型）にみられる「孰」と「誰」の交替を条件とする格標示体系は、二つの代詞の談話レベルの機能差異に基づく交替が、格標示という統語機能を獲得した結果ということになる。この格標示は共時的には形態変化ではなく、ある種の *suppletion* だと言えよう。ただし、「孰」「誰」は同一の声母を有するため、歴史的に何らかの関係を有すると考えられる。具体的にどのような関係であったのかを確定することは難しいが、ここで幾つかの可能性に触れておきたい。一つには、「孰」が「誰」から直接的に派生したという可能性であり（この場合、派生の際に「誰」(**dui*)から「孰」(**duk*)へと韻母が変化したことになる)、もう一つは、「孰」と「誰」とは本来は語源的に無関係であったが、機能上の共通性を有するが故に両者の間に類推が働き、「孰」の声母（元来の声母の音価は不明）が「誰」の声母（すなわち **d*）に取り替えられた（「孰」(**Xui* > **duk*)という変化が生じた）と言う可能性である²¹⁶。

²¹⁶ 「孰」(**duk*)と「各」(**kâk*)・「或」(**wâk*)・「莫」(**mâk*)等がいずれも音形と機能において共通点を有することは注目に値する。Pulleyblank(1995:92)が明確に指摘するように、これらの機能語は、いずれも韻尾として **-k* を有し、機能上も共通点を有する。或いは、「孰」と「莫」「各」との間には何らかの語原上の関係があるのかもしれないが、具体的なことは不明である。

なお、上述【図表 15-8】に示した『呂氏春秋』における状況(=γ型)は、一見すると【図表 15-9】の第二段階に相当するとみなし得るようであるが、その生成過程については多くの未解決の問題があると考え。本論文では、『呂氏春秋』にみられる状況の生成過程については結論を保留しておきたい²¹⁷。

15.8 小結

最後に、上述した禪母系疑問代詞「孰」「誰」の交替による格標示体系の生成過程に関する仮説を踏まえた上で、上古漢語にみられる代詞一般の「格変化」の問題についての見通しを述べることで本章のまとめとしたい。

まず、本論文 15.7 で述べた本論文の仮説が正しいとすると、禪母系疑問代詞「孰」「誰」による格標示体系の来源は、原始漢語まで遡るものではなく、上古漢語以降の比較的短い期間に、禪母系疑問代詞の体系内において、ある種の広義の文法化の過程——両者の交替が表す機能が、談話レベルのものから統語レベルのものに変化するという過程——を経て個別的に生成されたということになる。仮にそうであるとすれば、人称代詞についても禪母系疑問代詞と同様の歴史的変遷を辿った可能性もあることになる。

つまり上古中期漢語の人称代詞体系において、幾つかの代詞の交替による格標示現象がみとめられたとしても、それは必ずしも原始漢語に体系的な格屈折があったことに結び付くわけではない。このような格標示体系は、まさに禪母系疑問代詞体系にみられたように、個別的にも発生し得るからである。その場合、例えば、一人称代詞体系には「吾」「我」の交替による格標示が成立していたが、二人称代詞体系では専ら談話レベルでの機能的差異によって各代詞が選択されていた、といった状況もあり得ることになる。また、人称代詞体系における一人称代詞と二人称代詞の格標示のパラダイムが、音形面において平行する必要もない。同一の人称を指示する代詞間の声母の共有については、①歴史的に同源関係にあり、派生時に、どちらかの韻母が変化したことにより生じた、②語源的には無縁な別語が、機能面での類推に起因して声母の「とりかえ」が生じ、結果として音形面での共通性が生じた、といったいくつかの可能性を想定し得るからである。

さて、仮に、以上のような「格標示体系の個別的生成」が上古漢語の一、二人称代詞体系において生じたと仮定すると、『論語』『孟子』などにみえる人称代詞体系に関わる多くの現

²¹⁷ γ型の生成過程については、これが通時的にはβ型(『論語』『孟子』にみられる状況)よりも新しい段階に位置するものであり、一旦β型の状態を経た後、「孰」が主語となる用法が衰えはじめてγ型の状態が出現したのではないか、という見通しを持っている。この見通しは、①『左伝』『論語』『孟子』『呂氏春秋』のなかでは、『呂氏春秋』だけに「孰與」構文という漢代に至って普遍化した上古中期としては新しい構文がみとめられること、さらに②『呂氏春秋』におけるすべての「孰」が〈+人〉を指示する用法となっていること、を踏まえたものである。以上の二点は、『呂氏春秋』が他の四文献に比して相対的に新しい言語層に属する可能性を示唆するものである。

象も、比較的矛盾無く説明することができるように思われる。一人称代詞「吾」「我」が、各上古漢語資料において、一定の傾向を持ちつつも各様の分布をみせていることも合理的に説明できるであろう。この現象が一人称「吾」と「我」の交替による格標示体系の付帯的機能の相違として説明されるからである。また、一人称のみならず二人称、三人称、さらに他の機能語の状況も、それぞれに音形面と機能面での平行性が存在する必要があるため、それぞれに異なった文法分布を呈しているとしても何の矛盾も生ずることがない。そして従来から問題となってきた、「吾」が上古初期の文献にみえない現象も説明可能である。例えば、①「我」(*ŋâi?)から「吾」(*ŋâ)へ、まずは談話レベルでの機能の相違を条件として分化・派生が生じ、上古中期の特定の方言では両者の交替が格標示という統語レベルの機能を獲得するに至っていた、或いは②一人称代詞「余」(*la)において、同じく一人称代詞の「我」(*ŋâi?)への類推が働き、声母が*ŋに取替えられて韻母も変化した結果、「吾」(*ŋâ)という語形が出現した、といった幾つかの可能性が想定され得るであろう。

但し、以上の「格標示の個別的生成」説は、禪母系疑問代詞についての仮説から類推したものに過ぎないのであり、これを人称代詞に対してそのまま取り入れるのは危険な側面もある。例えば、疑問代詞は上古漢語において目的語となる場合に原則的に前置されるなど、その統語機能は人称代詞とは異なっていた。上述の格標示体系の成立についての仮説は、疑問代詞目的語のこの前置の語順を前提としている。よって、今後、上古の多くの文献言語における人称代詞の機能を詳細に記述した後に、「格標示の個別的生成」説の成否を判断することが可能となるであろう。それは、今後の課題としておきたい。

第十六章 上古中期漢語の否定文における代詞目的語前置現象

象の生起条件

16.1 問題の所在

上古中期漢語は SVO 型を基本語順とする言語であるが、第四章で述べたように、特定の条件のもとでは SOV 型の語順を呈することがある。この SOV 型が生起する統語的条件は、①疑問代詞或いは疑問代詞フレーズが目的語を担う場合（本論文 4.1 及び 4.2）、②否定文において代詞が目的語を担う場合（本論文 4.3）、③その他、特定の時期において目的語が「是」である場合、「惟+X」型の有標形式の場合、目的語が「之」「是」によって照応指示された場合（本論文 4.4）などであった。本章では、このうちの②について、上古中期における共時的な生起条件を解明することを目的とする。本章でこの否定文における代詞目的語前置現象をとりあげるのには、この現象の生起メカニズムを明らかにすることが、疑問目的語前置現象の文法体系内における位置づけを明確にすることに繋がると考えるためである。またこれら二種の目的語前置現象の共時的な生起条件の違いを明確にしておくことは、様々な目的語前置現象の歴史的来源の問題を論ずる際にも重要だと考える。

本章で主資料としたのは、『論語』²¹⁸『孟子』を中心とする上古中期漢語資料であり、甲骨文や『書経』『詩経』といった上古初期漢語資料は用いない。これは、大西(1988)が指摘するように、上古初期漢語は必ずしも上古中期漢語に直接的に繋がるものではない可能性があり、共時的な研究の際には両者は別に論ずる必要があるために、ひとまずは資料が豊富で文意の把握が比較的容易な上古中期漢語を分析対象とすることにしたためである。なお上古中期漢語のうち『論語』『孟子』といった魯方言資料を主資料としたのは、この現象の生起条件が方言により少しく異なる可能性があることによる。方言の問題については本章の最後に改めて言及する。

²¹⁸本章では、上古中期漢語における否定詞の種類を問題とするが、その際に注意すべきは、字と語との対応関係の問題である。具体的には、大西(1988)が、現行本『老子』の「不」が漢代初期のテキスト（馬王堆帛書）ではしばしば「弗」に作ることを踏まえ、これは漢の昭帝劉弗の諱を避けた結果ではないかと推定していることが挙げられる。大西氏はさらに、「現在の『論語』は、元帝（松江注：漢の元帝）の頃皇太子に『論語』を教えていた安昌侯張禹の伝えたテキストが原流をなすとされる。してみると現行本『論語』に「弗」の用例が僅少であるのは、張禹が皇太子に教える際に、漢室の諱を避ける必要があったからではあるまいか」と『論語』にもこの問題が関わると指摘する（大西 1988:239）。幸いにも、『論語』には定州漢墓竹簡本のように「弗」字の避諱がなされる前の状態を反映する価値の高い出土資料があるため、これと底本との異同を例文中に積極的に示すこととする。

16.2 先行研究

16.2.1 記述的研究

まず、上古漢語の否定文における代詞目的語前置現象に関する共時的研究について、簡単に振り返っておきたい。

本論文 4.3 で述べたように、最も包括的な記述的研究は周廣午(1959)であり、周氏は先秦の十六文献および六朝・唐代のいくつかの資料における否定文の代詞目的語前置現象を詳細に記述した上で、代詞目的語の語順と否定詞の種類とに相関関係があることを指摘している(周廣午 1959:180)。その相関関係は、上古中期に限定した場合、次のように整理できよう(用語は本論文のものに変更する)。

- (i) 「莫」文と「未」文においては、代詞目的語が前置される傾向が明確である。
- (ii) 「弗」文、「勿」文、「毋」文、「無」文では、代詞目的語が後置された用例が優勢である。
- (iii) 「不」文では、代詞目的語は前置と後置のいずれの語順もあり得る(歴史的には後の時代に後置が優勢となる)。

周廣午(1959)の指摘は非常に重要であるが、このような傾向を生ぜしめた要因については明らかにし得てはいない。本論文は、まさにこの点を議論するものである。

16.2.2 前置現象の生起メカニズムに関する研究

上述のように、上古中期漢語では否定文におけるすべての代詞目的語が前置されたのではなく、この現象の生起は何らかの条件により制限されていた。その具体的条件および生起のメカニズムを論じた代表的な研究には次のようなものがある²¹⁹。

鈴木(1976)は古代漢語における「強調」の表現を包括的に論じ、古漢語の強調表現を、前置によるもの、後置によるもの、その他の強調表現の三種に整理している。そのなかで否定文の代詞目的語前置現象を後置による強調であるとみなしている。すなわち代詞目的語と文法関係を結ぶ動詞の方を後置した現象であると主張している。

徐傑・李英哲(1993)は「疑問」「否定」「焦点」といった非線性文法範疇と、それらの各言語における表現方法とその類型とを整理している。徐・李氏は、上古漢語は現代ハンガリー語と同じく焦点成分を動詞の前に前移することにより焦点位置であることを示すタイプの言語に属し、上古漢語の否定文における代詞目的語前置現象と疑問代詞目的語前置現象は、いずれも「強式焦点成分」を動詞の前に前移するという焦点表現が文法化されたものと分析している。

傅京起・徐丹(2009)は「焦点」および「旧情報／新情報」という点から古漢語や白語とい

²¹⁹本章で紹介する先行研究のうち、鈴木(1976)および徐傑・李英哲(1993)については、本論文 5.3 においても言及したが、叙述の都合上、敢えて重複を避けない。

った SVO 言語にみられる目的語前置現象を論じている。SVO 言語の目的語前置現象を、通言語的な視点から「焦点前移」と「旧情報前移」との二種に分け、古漢語の目的語前置現象を「旧情報前移」に属せしめている。

以上のように諸説が提出されているが、上述のいずれの説にしても、周廣午(1959)が指摘したところの、代詞目的語前置現象の出現頻度が否定詞の種類によって大きく異なるという現象を合理的に解釈することが難しいという点で、十全なものとは言えない。本章では、否定文の代詞目的語を前移せしめた要因については傅京起・徐丹(2009)の見解に同意するものであるが、両氏の説を踏まえた上で、否定文における代詞目的語前置現象のより具体的な生起条件を検討し、周氏の指摘する言語事実を合理的に解釈することを試みる。

16.2.3 前置目的語の統語的位置

本論文の仮説を提出する前に、否定文において前置された代詞目的語の統語的位置について、魏培泉(1999)、傅京起・徐丹(2009)などによりつつ整理しておきたい。

否定文において前置された代詞目的語は、動詞目的語であるか介詞目的語であるかに拘わらず、原則として否定詞の直後に後接する（用例(16-1)=動詞目的語、(16-2)=介詞目的語）。同一文中に助動詞がある場合も、代詞目的語はこれらの前に生起し、やはり否定詞の直後に後接する（用例(16-3)）。否定詞と動詞との間に副詞が存在する場合、当該の副詞が単音節であればその副詞の前に生起し、否定詞に直接後接することが多い（用例(16-4)）。ただし副詞の後ろに生起したかのような場合もあり（用例(16-5)）²²⁰、代詞目的語と副詞との前後関係を決定する条件は明らかではない。

(16-1) 子曰：「以吾一日長乎爾，毋吾以也。…」〔『論語』「先進」3-797~8〕

〔先生が言われた「私はお前たちよりも年長のゆえに誰も私を用いようとしない。…」〕

(16-2) 初，懿氏卜妻敬仲，其妻占之曰：「吉。…有媯之後，將育于姜。五世其昌並于正卿。八世之後，莫之與京。」〔『左伝』「莊公二十二年」1-221~2〕

〔これより先、懿氏は（娘を）敬仲に娶らせることの吉凶を占わせた。懿氏の妻が卦を見て言った「めでたいことです。…媯氏の子孫は姜姓（=齊）に育てられることになるでしょう。五世の後に繁栄し（官位は）正卿と肩を並びます。八世の後はこれにならぶ者はいないでしょう。〕

(16-3) 子路有聞，未之能行，唯恐有聞。〔『論語』「公冶長」1-328〕

〔子路は（何かを）聞き、（それを）実行できないでいる場合は、さらに（他のこと

²²⁰ ただし用例(16-5)については、後漢の趙岐注に「陳良生於楚，北遊中國，學者不能有先之也」とある。これを踏まえると、この「或」が動詞「有」に通ずるものとみなす立場も有力だと考えられる。その場合、用例(16-6)と同じく、主文が否定文の補文において、動詞が代詞目的語を伴った用例ということになる。

を) 聞くことをひたすらに恐れた。]

- (16-4) 「從許子之道，則市賈不貳，國中無偽；雖使五尺之童適市，莫之或欺。…」
〔『孟子』「滕文公上」1-398〕

〔(陳相は言った)「許子の道に従えば、市場における(様々な)物の価格が一律になり、國中(の市場)でごまかしがなくなります。たとえ(身長が)五尺しかない子供を市場へ行かせたとしても、その子をだます者はいなくなるでしょう。…〕

- (16-5) 「…陳良楚産也，悦周公，仲尼之道，北學於中國。北方之學者，未能或之先也。…」
〔『孟子』「滕文公上」1-393〕

〔(孟子は言った)「…陳良は楚の生まれでありながら、周公や孔子の道を悦び、北上して中土で学んだのである。北方の学者たちでも、彼を超え得るものはいなかったほどである。…〕

なお、補文の動詞が代詞目的語を伴い、主文が否定文である場合も、補文の代詞目的語が前置され得る。この時、当該の代詞目的語は補文内の範囲で動詞に前置されて否定詞には付着しないことが多いようであるが(用例(16-6))、補文の代詞目的語が主文の否定詞に直接後接する現象もみられる(用例(16-7))。後者の現象は、補文主語がゼロ形式であり、なおかつ補文述語動詞と主文の否定詞との間に副詞が存在しない場合に限って生起するようである。

- (16-6) 孟子曰：「教亦多術矣，予不屑之教誨也者，是亦教誨之而已矣。」〔『孟子』「告子下」2-893〕

〔孟子は言った「教育にも様々な方法がある。わたしがある人を教え導こうとしなかったとしても、これもまた教え導くことの一つなのである。〕

- (16-7) 孔子適楚，楚狂接輿遊其門曰：「…福輕乎羽，莫之知載；禍重乎地，莫之知避。…」〔『莊子』「内篇」「人間世」1-183〕

〔孔子が楚に行った時、楚の狂人、接輿が彼(=孔子)の(宿の)門前を通りすぎながら(次のように)歌った「…幸福は羽毛より軽いのに、これを手にすることを知る者はいない。災難は大地より重いのに、これを避けることを知る者はいない。…〕

16.2.4 合音否定詞をめぐる問題

否定文における代詞目的語前置現象を論ずる際、「弗」と「勿」という二つの否定詞が否定詞と代詞目的語「之」の合音(fusion)に由来する形式か否かという問題については言及し

ておく必要があろう²²¹。かりにこの説を肯定する立場にたてば、「弗」と「勿」からなる否定文は、前置された代詞目的語「之」が否定詞の中に包含されていることになるからである。

この合音説は、二つの現象を根拠としている。一つは、不定詞「弗」或いは「勿」が、それぞれ機能の面では「不+之」「毋（無）+之」に相当するという点、もう一つは両者が音形の面でも「不+之」「毋（無）+之」に対応しているという点である。前者については、夙に丁声樹(1935:991-992)が詳しく論じている。丁氏は『左伝』、『礼記』等の上古資料における「弗」と「不」の生起状況を調査し、次のような結果を得ている。

- (i) 「弗」は目的語が省略された他動詞或いは目的語が省略された介詞の前にもみ用いられる。
- (ii) 自動詞、目的語を伴った他動詞、目的語を伴った介詞は、その前には「不」のみが用いられ、「弗」は用いられない。
- (iii) 状態語（形容詞・副詞）の前にも「不」のみが用いられ、「弗」は用いられない。
- (iv) このような状況から見ると、「弗」は「代詞性の目的語」を含む否定詞のようであり、おおよそ「不之」に相当する。（これに対して）「不」は単純な否定詞である（丁声樹 1935:991-992）²²²。

丁声樹(1935)以外に、Boodberg(1937)²²³、Graham(1952)といった研究者も「弗」が文法機能上「不+之」に相当することを指摘し、さらに「勿」が機能上「毋（無）+之」に相当することにも言及している。そしてここで重要なのは、Boodberg(1937)・Graham(1952)は、機能上の議論にとどまらず、「弗」と「不+之」、「勿」と「毋（無）+之」とが音形面でも対応していることを指摘し、機能面・音形面での根拠を踏まえた上で、「弗」は「不」と「之」との合音、また「勿」は「毋（無）」と「之」との合音により発生したものであると主張したことである²²⁴。Boodberg(1937)らのような立場を合音説と称することにする。

²²¹ 「弗」「勿」の合音説に関する先行研究状況については、主に大西(1988)の紹介を参考にした。

²²² 原文は以下のとおり（ただし符号などには調整を加えた）。

- (i) 「弗」字只用在省去賓語的外動詞或省去賓語的介詞之上。
- (ii) 内動詞，帶有賓語的外動詞，帶有賓語的介詞，上面只用「不」字而不用「弗」字。
- (iii) 狀詞（形容詞、副詞）之上也只用「不」字而不用「弗」字。
- (iv) 由這種情形看起來，「弗」字似乎是一個含有「代名詞性的賓語」的否定詞，略與「不之」相當；「不」字則是一個單純的否定詞。

なお、Graham(1952)は、夙に Gavelenz(1881:449)が文法機能上は「勿」が「無之」に相当するという説を提出していることを紹介している。

²²³ Boodberg 氏は、これより早く 1934 年に「弗」「勿」が合音によって生じたものである可能性について簡単に言及している（Boodberg 1934/1979）。

²²⁴ 例えば、Graham(1952)は、「弗」(*PĪWƏT)は「不」(*PĪUG)と「之」(*ĪWƏG)の合音、「勿」(*MĪWƏT)は「無（毋）」(*MĪWO)と「之」(*ĪWƏG)の合音だと考えている。

なお、Schuessler(2009)の再構音では、「弗」(*pət)は「不」(*pə)と「之」(*tə)の合音、「勿」

合音説に対する研究者たちの見解は未だ一致をみておらず、同説に異を唱える論者も少なくない。例えば甲骨文を含む秦漢以前の文献における「弗」・「不」否定文を詳細に調査した黄景欣氏もその一人である。黄景欣(1958)の合音説に対する反論の要点は、以下の三点に要約し得よう²²⁵。

- (i) 秦漢以前の「弗」・「不」は様々な形式の述語句を修飾し得るが、それらの中の動詞が目的語を伴うか否かは、動詞の文法的な性質（他動詞か自動詞か）と言語的な習慣によるのであり、「弗」「不」の文法的な性質によるのではない。
- (ii) 古漢語の一般的な習慣では、「弗」・「不」否定文における動詞句は、目的語を代詞「之」によって補われることはなく、目的語を強調する場合などの特殊な状況においてのみ目的語「之」が補われたのである。
- (iii) 「弗」は否定副詞としての用法のみであるが、「不」はその他に文末の否定語気詞としての用法、あるいは述語句の中心的な文法成分を担う用法なども備えているなど、両者は異なる機能を有している。
- (iv) 「之」と「於」とが合音により「諸」になるなど、公認されている古漢語の合音の通則によれば、「弗」と「不」とが声母を同じくする双声の関係、「弗」と「之」とが韻母を同じくする疊韻の関係にあることが求められるが、Boodberg の想定する合音では後者の関係は成立せず、かりに「之」の韻母が失われたとする仮定を受け入れたとしても、「弗」と「不」とでも疊韻の関係は成立しないため、「弗」を「不+之」の合音とみなすことができない（黄景欣 1958:21）。

本論文は、この問題について、現在、最も説得力があるのは大西(1988)の見解だと考える。大西氏の説は、合音説に対する批判説における問題点を次のように指摘する（字句は本論文の筆者が調整を加えた）。

- (i) 「弗」は目的語「之」を伴った他動詞の否定にも用いられ得るが、これは合音説を否定する確実な根拠とは言えない。「不+之>弗」という合音が発生した後、「弗」が「之」を含んでいるという語源意識がしだいに希薄になり、「之」の意味を強調する必要がある場合に「弗+動詞+之」或いは「弗之+動詞」といった形式が出現した、とも解釈し得るからである。
- (ii) 黄景欣(1958)の指摘した例外の大部分は『書経』の中にみえるものであるが、『書経』の言語はおそらく甲骨文・金文と同じく最も古い言語層に属する。先秦漢語と『書経』

(*mət)は「毋」(*mə)と「之」(*tə)の合音ということになる。

²²⁵ここでの(i)から(iv)の記述は、黄景欣(1958:21)の「結論」部分を中心にまとめたものであるが、当該部分の直接の翻訳ではなく、筆者が当該論文の他の部分の内容を適宜補足した上で、表現・用語も一般的なものに変更するなど、様々な調整を経たものである。これは黄氏の記述を直接に翻訳しただけでは、文意が理解され難いと判断したことによる。

の言語とは、同じ祖語に由来するものだとしても、両者の間に直接的な派生関係はなく、先秦漢語は『書経』言語とは異なる方言系統に由来する可能性も排除できない。

- (iii) 『論語』『老子』といった現行文献において「弗」の出現は相当に少ないが、これは恐らく避忌と関係がある。すなわち前漢の昭帝(=劉弗)に対する避忌により「弗」が「不」に改められた可能性があり、この点を考慮に入れる必要がある。
- (iv) 「弗」(*pjət) = 「不」(*pjæg) + 「之」(*tjæg)という合音説をみとめた場合、「不」の*-g韻尾が妨げになるかのようなのである(上古推定音価は李方桂 1971による)。しかしこの点は、例えば「不」が「之」の同化作用を受け、「不」の韻尾*-gが*tに変化した、或いは「不」の軽読によって「不」の*-g韻尾が脱落した、といったいくつかの可能性を想定することで、問題とはならない。同様に、「勿」と「毋」の主母音が同一ではない点も、例えば「毋」が軽読されて主母音に変化が生じた、或いは「不」からの類推を受けて主母音に変化が生じた、といったいくつかの可能性を想定することができる。

大西(1988)は、さらに馬王堆出土帛書資料(『老子乙本』、『老子甲本卷前古佚書』の『経法』、『称』、『道原』、『老子甲本卷後古佚書』の『五行』、『戦国縦横家書』)について詳細な調査を行い、これらの資料においては「弗」 = 「不之」、「勿」 = 「毋之」という合音説は原則的に成立し得ると指摘した²²⁶。

その後、魏培泉(2001)も、先秦文献に対する体系的な調査を行った結果、以下の点を指摘しつつ、「弗」「勿」が合音(原文「併合」)により生成された否定詞であるとの主張を改めて支持している。

- (i) 合音説によれば、否定詞「弗」「勿」の前置代詞との共起関係、およびその他の名詞性語句との排斥関係、および動詞の共起条件などのいわゆる生起上の不平衡現象を合理的に解釈することができる。
- (ii) 「弗」「勿」には丁声樹(1935)の提出した説に符合しないかのような用例がみられるが、しかしそのうちの少なからぬ用例は例外とみなすべきものではない。
- (iii) 黄景欣(1958)の指摘した「不」が「弗」のように用いられる現象も、習俗的要素(主に避諱により「弗」を「不」に改めたこと)と言語内部的要素の両方の点から合理的に解釈することができる。
- (iv) 甲骨文・金文・『書経』における「弗」は往々にして合音説に符合しないが、しかし甲骨文・金文・『書経』とその他の先秦文献とは、おそらく方言の点では直接的な継承関係にはない。よって甲骨文などと他の先秦文献言語の間における「弗」の用法上の差異

²²⁶大西(1988)はさらに、もし1973年に八角廊漢墓(一般には中山懷王劉修が葬られた地である考えられている)から出土した『論語』の状況が明らかになれば、氏自身の仮説の成否が判明するかもしれないと述べている。その後、古屋(1998)は1997年に文物出版社から出版された『定州漢墓竹簡・論語』に拠りつつ大西(1988)の仮説を検証し、大西(1988)の仮説が原則的に肯定され得ると指摘している。

も解釈できないということはない。

本論文は、大西(1988)、魏培泉(2001)らの合音説を支持する諸説は、十分に説得的である
と考える。よって合音説を支持する立場をとりつつ、否定文における代詞目的語前置現象の
生起条件を検討することにする。

16.3 本論文の仮説

本論文は、上古中期の否定文における代詞目的語前置現象について、代詞目的語が旧情
報を担うことを条件として生じた目的語前移によるものと解釈する説に賛同する。その上
で、その生起条件は、原則的には当該の文の事態の事象構造によって異なると考える。具
体的には、統語的に前置と後置のいずれの語順も許容される条件下においては、原則的に
当該の文が非有界的事態を表す場合は前移が生じて前置語順を呈し、有界的事態を表
す場合には前移が起らずに後置語順をとる、と考えるのである。ただしこれはあくまで
も統語的にいずれの語順も許容される条件下での原則であり、代詞目的語の前移を妨げる
統語的な要因があれば、非有界的事態を表す場合でも、後置語順をとることも少なくない。

以上の「原則」は、否定詞の種類と代詞目的語前置現象との出現頻度とにある種の相関関
係がみられること、および前置文と後置文のそれぞれと共起する文末助詞の種類に明確な
差異が見られること（【図表 16-1】を参照）、の二点を手がかりとして提出したものである。
以下、まずこの「原則」について検討し、さらにこの原則に反する状況を生み出す統語的・
談話的条件について検討していく。

【図表 16-1】『論語』『孟子』における否定文の代詞目的語の語順

文献 否定詞	論語						孟子					
	前置			後置			前置			後置		
	総数	…也	…矣	総数	…也	…矣	総数	…也	…矣	総数	…也	…矣
莫	6	5	0	0	0	0	13	7	0	0	0	0
未	6	4	0	2	1	0	15	14	0	2	2	0
不	7	2	0	11	2	2	4	3	0	10	1	1
毋	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
未	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弗	1	0	0	3	0	3	0	0	0	1	0	1
勿	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
無不	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0

*表中の欄の数字は当該の文型の出現頻度を表す。例えば縦の『論語』・「前置」・「～也」の列と、横の「莫」の行とが交差する欄に「5」とあるのは、『論語』の「莫」否定文のうち、代詞目的語前置文型が文末に「也」を伴っている用例が5例あるという意味である。他は類推されたい。

16.3.1 原則

16.3.1.1 前置文＝非有界的事態を表す文

【図表 16-1】から、『論語』『孟子』においては、「莫」(*māk)否定文は例外なく、「未」(*mæs)否定文はその多数が前置語順を呈することが知られる。上古中期では前者は主に「動作者・変化主体が存在しない」という事態を、後者は主に「(参照時に) まだある動作・変化が実現していない」といった事態を表し、これらが内部に完了点を含まない非有界的事態——内部構造が均質的である事態——であるためだと考える。

- (16-8) 子曰：「莫我知也夫。」子貢曰：“何為其莫知子也。”(『論語』「憲問」3-1019)

[先生が言われた「私を理解してくれるものなどいない。」子貢が言った「どうして先生のことを理解する人がいないのです。」]

- (16-9) 吾言*易知_[甲本「甚易」]也，易行也；而*天下_[甲本「人」] 莫之能知也，*莫_[甲本「而莫」] 之能行也。(帛書『老子』(乙本) 173)

[私の言葉は、理解するのも容易であれば、実行するのも容易である。しかし天下にそれ(=私の言葉)を理解し得るものはいないし、それ(=私の言葉)を実行し得るものもないのである。]

- (16-10) 有子曰：「其為人也孝弟，而好犯上者，鮮矣。不好犯上，而好作亂者，未之有也。…」(『論語』「學而」1-10)

[有子が言った「その人柄が孝行・悌順でありながら、目上に逆らうのを好むような者はほとんどない。目上に逆らうのを好まないのに、乱を起こすのを好むような者はめったに無い。…」]

「不」否定文が表す事態は多様であるが、次のように一般的事実(用例(16-11))或いは状態(用例(16-12))といった非有界的事態を表すことがあり、その場合は前置語順をとる。否定詞「毋」を用いた前置語順の文も(用例(16-1))、原則的にはやはり非有界的事態を表すと解釈できる。

- (16-11) 曰：…「日月逝矣，歲不我與。」(『論語』「陽貨」4-1176)

[(陽貨は孔子に) 言った「…時間はすぎてゆくものです。年月は自分を待ってくれはしません。」]

- (16-12) 謂然友曰：「吾他日未嘗學問，馳馬試劍。今也父兄百官不我足也，恐其不能盡

於大事，子為我問孟子！」(『孟子』「滕文公上」1-328-9)

〔(滕の太子が) 然友に言った「私はかつて礼について学んだことがなく、馬に乗ったり剣を振るってばかりいた。(そのために) 今、一族の長老や官吏たちは私に任せておけないと思っているのであり、(このままでは) 恐らく私は心を尽くしてこの大事(=三年の喪)を行うことができないだろう。私に代わって孟子にたずねてきてはくれまいか。〕

以上の仮説は文末助詞の分布によっても支持される。それはこれら前置語順の文がしばしば「也」を伴い、「矣」を伴うことは極めて少ない、ということである。両者の具体的な機能の解明は、本論文の任を越える問題であるために詳しく論じることはしないが、例えば李佐豊(2002)が、「也」は主に静態に対する論断を表し、「矣」はしばしば動態に対する説明を表すと考えるように、「也」を伴う文は非有界的事態を表すことが多いと推定される。

なお、以下の16.3.1.2でみるように、「不」否定文が、単に「動作・変化が実現しなかった」という事態を表す場合は、これが一定程度の有界性を備えた事態であるために(ある種の「出来事」とも言い得る)、後置語順をとることが多い。しかし、例文(16-13)のように原因や条件を表す複文の従属節に生じた場合は、前置語順をとる傾向が強い。解釈の難しい現象であるが、仮に、主節以外に生起するということは、事態が背景化されることに繋がり、結果として有界性が低下したためである、と解釈しておきたい。

(16-13) 曰：「…王如改諸，則必反予。夫出晝，而王不^予追也，予然後浩然有歸志。…」(『孟子』「公孫丑下」1-307)

〔(孟子は) 言った「…もし王が考え直してくださるのなら、きっと私を呼び戻すにちがいない(と考えていた)。ところが(私が) 昼晝をたち去ってからも(王は) 私を追い戻そうとはされなかったのであり、そこで私は思い残すことなくきっぱりと(国へ) 帰る気持になったのだ。…〕

なお、前述のように(本論文16.2.4)、否定詞のうち「弗>(*pət)と「勿>(*mət)とは、それぞれ「不(*pə)+之(*tə)」、「毋(*mə)+之(*tə)」の合音であるとする説が有力である。これらが合音形式であるとの観点を踏まえると、「弗」「勿」は動詞が目的語を伴わない場合でも、それ自体が前置の代詞目的語を含んでいることになり、本論文の「原則」によれば、これらの否定詞からなる否定文は非有界的事態のみを表すはずである。ところが、実際には、下例のように必ずしも非有界的とはみなし難い事態を表す例もみとめられる。

(16-14) 孟子之滕，館於上宮。有業屨於牖上，館人求之弗得。(『孟子』「盡心下」2-1004)

[孟子は滕に行き、(滕の文公の) 離宮に泊まった。(もともと) 窓の上に編みかけのわらじがあったのだが、離宮の人がそれ (=わら靴) を探しても見つからなかった。…]

この現象については、いくつかの解釈が考えられる。例えば、「弗」「勿」が合音によって一つの否定詞として成立した後、「弗」否定文・「勿」否定文が他の否定詞からなる代詞目的語前置文とは異なる機能を有するようになり、原則として非有界的事態を表すという制限を受けなくなったといった可能性である。よって(16-14)のような用例の存在が、本論文の仮説を覆すことに直接的に繋がるわけではないと考える。

16.3.1.2 後置文=有界的事態を表す文

「不」(*pa)否定文は、後置語順をとることが少なくない。最も典型的には「～しないことになる／する」といった「新局面への移行」とも言うべき事態を表す場合であり、これは有界的事態——内在的な完了点を含む事態——であるために後置語順を呈する。

- (16-15) 子曰：「聖人，吾*不得而見之矣 [定州漢墓本「弗得而見之矣]；得見君子者，斯可矣。」子曰：「善人，吾*不得而見之矣 [定州漢墓本「弗得而見之矣]。得見有恆者，斯可矣。…」 (『論語』「述而」4-487~8)

[先生がおっしゃった「聖人 (という存在) には、もう会うことができなくなってしまった。君子に会うことができれば、それでよいのだ。」先生がおっしゃった「善人 (という存在) には、もう会うことができなくなってしまった。節操を備えた人に会うことができれば、それでよいのだ。…」]

- (16-16) 祭於公，不宿肉。祭肉，不出三日。出三日，不食之矣。(『論語』「鄉黨」2-698)

[国家の祭典に参加したときは、(主君から分け与えられた) 肉を宵越しにはしない。(国家以外の) 祭りの肉は、三日は超えないようにする。三日をこえたら、もうそれ (=その肉) は食べない。]

- (16-17) 子曰：「禘自既灌而往者，吾不欲觀之矣。」(『論語』「八佾」1-164)

[先生がおっしゃった「禘の祭典では、灌の儀式 (=禘がはじまって最初に酒をつぎ、それを地にそそぐ儀式) を行ってからあとのことは、私は見たいとは思わない。」]

このことは、これら後置文にしばしば文末助詞「矣」が生起することからも支持される。「矣」の機能については、上述のように李佐豊(2002)が、しばしば動態に対する説明を表すとしており、このことから、「矣」を伴う動詞述語文は有界的事態を表すことが多いと推定される。

また、『論語』『孟子』においては、単に「動作・変化が実現しなかった」という事態を表す場合も後置の語順をとることが多い。とりわけ複文の主節に生起し、かつその従属節が原因や条件・仮定を表す場合などに、その傾向が強いようである。

(16-18) 孟子曰：「…獻子之與此五人者友也，無獻子之家者也。此五人者，亦有獻子之家，則不與之友矣。…」(『孟子』「萬章下」2-690~1)

[孟子は言った「…(孟) 獻子がこの五人と交わりを持った時、(獻子は) 自身の(大夫という)家柄に関する意識がなかった。この五人の者についても、もし(獻子に) 自身の家柄についての意識があったとすれば、彼(=獻子)を友とはしなかっただろう。…」]

「弗」否定文と「勿」否定文にも、「新局面への移行」いった有界的事態を表す用法があり、この場合は後置語順となる。

(16-19) 孟子曰：「…使弈秋誨二人弈，其一人專心致志，惟弈秋之為聽。一人雖聽之，一心以為有鴻鵠將至，思援弓繳而射之，雖與之俱學，弗若之矣。…」(『孟子』「告子上」2-791)

[孟子は言った「…碁打ち(名人)の秋をして二人(の弟子)に碁を教えさせたとする。一人は専念して打ち込み、ひたら碁打ちの秋(の教え)を聞いているが、もう一人はこれ(=秋の教え)を聞いているものの、一方でまもなく白鳥がやってくるころだと考えて、弓をとってそれ(=白鳥)を射てやろうと思っている。(その場合)二人がともに学んでいたとしても、それ(=もう一人の碁に専念している者)にはかなわなくなるのだ。」]

前節では、「莫」否定文は一般に非有界的事態を表すために、原則的に前置語順となると主張したが、用例(16-20)のように後置語順の例も皆無ではない。解釈は難しいが、仮に「莫能與之爭」(彼と争うものがない)という主節自体はある種の状態を表しているものの、前に「夫唯不爭」(争うことがない)という原因を表す従属節が置かれており、文全体としてはその原因の結果として「莫能與之爭」という局面が出現した、という有界的事態として表現されているのだと解釈しておきたい。文の表す事態の事象構造は談話的要因によって変わり得ると考えられる。

(16-20) 不自伐，故有功，弗矜，故能長。夫唯不爭，故莫能與之爭。(帛書『老子』(乙本) 149)

〔(聖人は)自ら功績を吹聴することがないために、(本当の)功績を得ることができる。傲慢にならないために、進歩することができる。争うということがないために、彼と争い得るものはなくなるのである。〕

代詞目的語を有する否定文が命令文である場合、しばしば後置語順となる。命令文は、未実現の事態を表すのであるから、一般に平叙文に比して有界性は低いと考えられるため、これをどのように解釈するのかは問題である。ただし、否定命令文の場合、実現が有力視される可能性(用例(16-21)では「毀諸」)を現局面と見立て、それに反する局面への移行を求めているのだと解釈すれば、有界的事態だとみとめられよう。

(16-21) 齊宣王問曰：「人皆謂我毀明堂。毀諸，已乎。」孟子對曰：「夫明堂者，王者之堂也。王欲行王政，則勿毀之矣。」(『孟子』「梁惠王下」1-132)

〔齊の宣王がたずねて言った「ある人が私に明堂をすべて取り壊すべきだと言っているが、壊すべきだろうか。やめるべきだろうか。」孟子は答えて言った「そもそも明堂というものは、天下に王たる者の堂なのです。王が王道政治を実行されるおつもりなら、これ(=明堂)を取り壊してはなりません。〕

16.3.2 代詞目的語の前移を阻害する統語成分の存在による例外

上で論じた「原則」は、文の表す事態の有界性という意味的要因であったが、否定文における代詞目的語の語順は、この他に統語的要因、また修辭的要因とも関連を有しており、このことが「原則」に対する例外を生ぜしめていると考える。

16.3.2.1 介詞句が存在する場合

上古漢語の否定文における代詞目的語が介詞句を超えて前移できないことは、すでに魏培泉(1999:268)が指摘するところである。否定文において、代詞目的語と、それと文法関係を結ぶ動詞との前に介詞句が存在している場合、有界性の高低に拘わらず、後置の語順となる。

(16-22) 子曰：「富與貴，是人之所欲也；不以其道得之，不處也。貧與賤，是人之所惡也；不以其道得之，不去也。…」(『論語』「里仁」1-232)

〔先生がおっしゃった「財産と高い地位とは、人が誰しもほしがらるものだ。しかしそれに相応しい方法で得たのでなければ、そこにとどまらない。貧乏と低い地位とは、人が誰しも嫌うものだ。しかしそれに相応しい(人格の卑劣や怠惰による)方法で得たのでなければ、そこから去らない。…」〕

16.3.2.2 複合的否定表現の一語化

上古中期には否定副詞が連用され二重否定を表す「無不」「莫不」といった形式が常見される。多くの文献においては慣用による固定化を経て、すでに一語化しているようである。そのために二つの形態素の間に前置代詞目的語の出現を許容せず（「*無之不」「*莫之不」）、代詞目的語は動詞の後に置かれる²²⁷。

(16-23) 孟子曰：「…今國家間暇，及是時，般樂怠敖，是自求禍也。禍福無不自己求之者。…」(『孟子』「公孫丑上」1-224)

〔孟子が言われた「…今、国家は平穩であるが、そうであるからと言って享樂を尽くし、怠け遊ぶことは、禍を自ら招くことに他ならない。禍福というものは、自ら招いたものでないものなどないのだ。〕

16.3.2.3 「否定詞+副詞」の一語化

『論語』『孟子』では、「未」否定文に代詞目的語が生起し、かつ副詞「嘗」が共起していれば、非有界的事態を表す文であっても後置の語順をとる。これは「未+嘗」が一語化したことによるのであろう。

(16-24) 曰：「…有諸内，必形諸外。為其事而無其功者，髡未嘗覩之也。」(『孟子』「告子下」2-831)

〔(淳于髡は) 言った「…(このように) 何か内があれば、必ずそれは外にあらわれてくるものです。何か事を為して何の功績もあらわれないなどということは、私は未だ嘗て見たことはありません。…〕

ただし上古中期の否定詞と副詞の一語化は、文献言語によってその進展の程度が異なるようである²²⁸。

²²⁷ただし、あらゆる二重否定形式が一語化しているわけではない。下例の「未不」では両者の間に「之」が生起している。

・吾觀夫俗之所樂，舉羣趣者，諛諛然如將不得已，而皆曰樂者，吾未之樂也，亦*未之〔陳碧虛『闕誤』引江南古藏本「未知之」] 不樂也。(『莊子』「外篇」「至樂」3-611)

〔私が世俗の人が楽しんでいるのを見るに、群をなして押し寄せ、一心不乱にやめられない様子が、誰もが楽しいと言う(といった具合である)。私はそのようなことを楽しんだことはない。(しかし) 楽しまなかったということでもない。〕

²²⁸例えば『管子』では、「未」否定文に代詞目的語と副詞「嘗」が共起する場合、代詞目的語は一般に「未」と「嘗」の間に現れる。「未嘗」の一語化は生じていなかったと考えられる。

・上下亂，貴賤爭，長幼倍，貧富失，而國不亂者，未之嘗聞也。(『管子』「五輔」1-198)

〔上位の者と下位の者(との礼節)が乱れ、身分の高い者と低い者とが互いに争い、年長の者と年少の者とが互いに背き、貧しい者と富める者と(の差)が限界を失った場合、(その)国が乱れないなどということは、聞いたことがない。〕

16.3.2.4 「否定詞＋動詞」の一語化

『論語』『孟子』では、否定詞が「不」で、代詞目的語と文法関係を結ぶ動詞が「如」「若」である場合は後置の語順を呈する。これは「不＋如/若」の一語化によるものだと解釈したい。「不＋如/若」はしばしば「…に及ばない」という意味を表すが、これは単に「不」と「如/若」が結合した意味（「…のようではない」とは同一でなく（太田1964:135-136）、このことは「不如」「不若」が一語化していることを強く示唆する。そして一語化の後、「…のようではない」という元来の意味の場合であっても、両者の間に代詞目的語が生起することが許容されなくなったのだと考える。

(16-25) 子曰：「主忠信，毋友不如己者。過則勿憚改。」（『論語』『子罕』2-618）

〔先生がおっしゃった『忠』と『信』とを重んぜよ。自分に及ばない者を友とするな。あやまちをおかしたら、憚ることなく改めよ。〕

但し、上古中期漢語における「不＋如/若」の一語化の進展は、文献言語によって差異がみられる²²⁹。

16.3.2.5 「動詞＋代詞目的語」の一語化

『論語』『孟子』において動詞が「若」「如」であり、代詞目的語が「是」の場合は前置語順とはならない。これは「若是」「如是」が一語化しているためであると考えられる。

(16-26) 曰：「…故將大有為之君，必有所不召之臣；欲有謀焉，則就之。其尊德樂道，不如是，不足以有為也。…」（『孟子』『公孫丑下』1-260）

〔（孟子は）言った「…だから大いに（事業を）為しとげようとする君主には、必ず呼び出すことができない臣下がおります。彼と相談しようとする場合は、（自ら）彼のところに向向いて行ったのです。これらの君主は道德（を備えた者）を尊重し、仁政を楽しんで行ったのです。もしこのようであれば、（ともに大きな事業を）成し遂げるには足りません。〕

16.3.2.6 修辭的要因

当該の否定文の表す事態の有界性の程度の如何に拘わらず、その前後の密接に関係する動目構造の語順への類推から「原則」にはずれた語順を呈することがある。これが口語レ

²²⁹例えば以下の用例では「不＋如/若」の間に代詞目的語が生起することが許容されている。

・曰：「不可。其為人絜廉善士也，其於不己者不比之，又一聞人之過，終身不忘。…」（『莊子』『雜篇』『徐無鬼』4-845）

〔（管仲は）言った「それは（＝鮑叔牙に国事を任せることは）いけません。彼の人となりは清廉潔白であり、自分に及ばないものとは親しくせず、一度でも他人の過ちを聞けば、一生忘れることはありません。…〕

ベルでの現象であるのか、書面語としての修辞によるものかは判断が難しい。いずれの場合もあり得よう。下例では前にある「苟能充之」の語順の影響を受けていると推定する。

- (16-27) 孟子曰：「…凡有四端於我者，知皆擴而充之矣，若火之始然，泉之始達。苟能充之，足以保四海。苟不充之，不足以事父母。…」(『孟子』「公孫丑上」1-235)
〔孟子は言った「…凡そ四つの芽生えが自分に具わっている者は、それを大きく育てるということを理解すれば、ちょうど火が燃え出したばかりのようであり、泉が湧きだしたようである。もしもそれを大きく育てることができれば、天下を安んずることができるほどになるが、もし大きく育てなければ、父母に（満足に）つかえることさえできないのである。…」〕

16.3.3 説明の難しい例外

遺憾ながら、『論語』『孟子』のなかにも、本論文の仮説では合理的に解釈することが難しい用例が存在する。用例(16-28)は自然な解釈ではある種の状態を表していると考えられるが、後置語順をとっている。或いは、『分からなかった』という出来事があり、その結果状態が発話時まで継続している」といったパーフェクト的表現と理解すれば、有界的事態と解し得るのかもしれない。

- (16-28) 子曰：「狂而不直，侗而不愿，忞忞而不信，吾*不知之矣〔定州漢墓本「弗智之矣」。〕」(『論語』「泰伯」2-545)
〔驕り高ぶっているのに率直でなく、幼稚であるのに素朴でなく、誠実な様子であるのに信用を重んじない。私にはどうしてそのようなものであるのか分からないでいる。〕

16.4 小結

以上から、次のように結論する。

- (i) 傅京起・徐丹(2009)が指摘するように、否定文における代詞目的語前置現象は、代詞目的語が旧情報であることを条件として生ずる目的語前移現象だと考えられる。しかしこの前移が生ずるのは、当該の文が非有界的事態を表す場合のみに限られ、有界的事態を表す場合は後置の語順を保つのが原則であった。
- (ii) 上記(i)が原則であるが、代詞目的語の前移を阻害する統語的要因により、非有界的事態を表す場合であっても後置の語順をとった用例が少なからずみられる。その条件とは、代詞目的語と否定詞との間に、代詞目的語が「越えられない」統語成分が存在

する場合、あるいは否定詞が他の統語成分と一語化したことにより、代詞目的語が否定詞に直接に後接することが不可能となった場合などである。その他、修辭的要因によって(i)に対する例外が生じていると覺しき用例もみとめられる。

- (iii) 上記(i)(ii)は原則的には上古中期漢語一般に適用し得るものだと考える。しかし、その一方、上古中期内部での時間差、方言差による差異も存在する。例えば(ii)で挙げた否定詞が他の統語成分と一語化した場合については、しばしば文献によって一語化の進展が異なっている。

上記(iii)の具体的な状況については、本論文ではほとんど検討することができなかつた。この上古中期内部における時間差・方言差の問題は、本論文の「原則」に関しても考えられることである。例えば、銀山漢墓竹簡『晏子』では、「不」否定文に代詞目的語が生じた場合、いずれも後置の語順を呈する。或いはこの文献の基礎方言が、他の上古中期よりも通時的には新しい体系に属することによるのかもしれない。

(16-29) 景公問於晏子曰：「明王之教民何若？」晏子合(答)曰：「……守□□□□以利，立法義不犯之以邪。苟(苟)所求於民，不以……。□事以任民，中聽以禁邪，不窺之以勞，不害之以實。 …」(銀山漢墓竹簡《晏子》九)

[景公が晏子にたずねて言った「明王が民衆を教化する(方法)は、どのようであるのか。」晏子は答えて言った「… […]法律・規範を定め、邪(な考え)によってそれを犯すようなことはしません。もし民衆に求めることがあるとしても、[…]ことはしないので、[…。]事柄を[…]した上で民衆に任せ、(裁判では)公正に(訴えを)聞き入れて邪(な行為)を禁じ、彼ら(=民衆)を労苦によって困窮させるようなことはせず、彼ら(=民衆)を実情によって害することがないようにします。 …」]²³⁰

代詞目的語の前移の生ずる有界性の高さの程度に時間差・方言差があつた可能性も十分にあろう。この問題は今後の課題としたい。

²³⁰ 当該箇所(『晏子春秋』)における対応箇所は以下のものである。

・景公問晏子曰：「明王之教民何若？」晏子對曰：「…守于民財，無虧之以利，立于儀法，不犯之以邪，苟所求于民，不以身害之，故下之勸從其教也。稱事以任民，中聽以禁邪，不窺之以勞，不害之以實。 …」(『晏子春秋』「内篇問上」第十八) 1-1)

[景公が晏子にたずねて言った「明王が民衆を教化する(方法)は、どのようであるのか。」晏子は答えて言った「…民衆の財産を守り、(自らの)利益によってそれ(=彼らの財産)を減らすようなことはせず、法律・規範を定め、邪(な考え)によってそれを犯すようなことはしません。もし民衆に求めることがあるとしても、自らは彼らに害することはしないので、下のものも進んで教化に従います。事柄(の軽重・性質)を考慮した上で民衆に任せ、(裁判では)公正に(訴えを)聞き入れて邪(な行為)を禁じ、彼ら(=民衆)を労苦によって困窮させるようなことはせず、彼ら(=民衆)を実情によって害することがないようにします。 …」]

最後に、原始漢語の基本語順の問題にも言及しておきたい。本章で検討した範囲では、原始漢語が SOV 型言語であったと積極的に主張する根拠は得られなかったと言える。上古中期漢語の否定文における代詞目的語前置現象は、SVO 型の基本語順の枠内で解釈し得る。

ただし、本論文 5.4 で論じたように、筆者は上古以前のある段階の漢語では、少なくとも代詞目的語については SOV 型が基本語順であったとする説に肯定的である。この立場にたつと、上古中期の否定文における SOV 型語順は、代詞目的語の基本語順が SOV 型から SVO 型へと転換した後、歴史的には元来の SOV 型語順に繋がる前置語順が、基底構造における SVO 語順からの前移現象によるものへと再分析されたのだ、と解釈されることになる。

16.5 『論語』『孟子』の否定文における代詞目的語一覧

以下に、本章に関する資料として、『論語』『孟子』の否定文において代詞が目的語となった文・フレーズの一覧を提示しておく。凡例は次のとおりである。

- (i) 「Y」は有界的事態を表す文を、「F」は非有界的事態を表す文を表す。「?」はいずれであるのか不明であることを表す。「Y」「F」の直後に(?)を付したものは、有界的・非有界的という判断の確実性が低いことを表す。
- (ii) 「j」「c1」「c2」「c3」「c4」「x」は、上記「F」に属する文が、「原則」に反して後置語順をとった場合に、その原因の類型を示したものである。それぞれ順に、介詞句の存在(j)、複合的否定表現の一語化(c1)、「否定詞+副詞」の一語化(c2)、「否定詞+動詞」の一語化(c3)、「動詞+代詞目的語」の一語化(c4)、修辭的要因(x)を表す。また、これらの直後に(?)を付したものは、その判断の確実性が低いことを表す。

16.5.1 『論語』の否定文における代詞目的語一覧

(i) 代詞目的語前置文：23 例

- ・「莫」文：7 例 F 莫我知也夫（憲問）／F 唯其言而莫予違也（子路）／F 如其善而莫之違也（子路）／F 如不善而莫之違也（子路）／F 莫己知也（憲問）／F 不患莫己知（里仁）／F 自經於溝瀆而莫之知也（憲問）
- ・「未」文：6 例 F 未之有也（學而）／F 未之思也（子罕）／F 未之能行（公冶長）／F 未之學也（衛靈公）／F 則吾未之有得（述而）／F 我未之見也（里仁）
- ・「不」文：7 例 F 不患人之不己知（學而）／F 不吾知也（先進）／F 歲不我與（陽貨）／F 不病人之不己知也（衛靈公）／F 不患人之不己知，患其不能也（憲問）／F 豈不爾思（子罕）／F 雖不吾以（子路）

- ・「毋」文：1例 F 毋吾以也（先進）
- ・「弗」文：1例 F(?)亦可以*弗畔 [定州漢墓本「弗之畔」] 矣夫（雍也）
- ・「未」文：1例 F(?)未之難矣（憲問）

(ii) 代詞目的語後置文：16例

- ・「未」文：2例 Fx 其未得之也（陽貨） / (?)言*未及之 [定州漢墓本「謂之及」]（季氏）
- ・「不」文：11例 Y 不食之矣（鄉黨） / Fc3 無友不如己者（學而） / Fc3 毋友不如己者（子罕） / Y 吾不欲觀之矣（八佾） / Y 不得與之言（微子） / Y 文不在茲乎（子罕） / Fj 不以禮節之（學而） / Fj 不以其道得之（里仁） / Fj 不以其道得之（里仁） / Fc4 言不可以若是其幾也（子路） / Fc4 言不可以若是其幾也（子路）
- ・「弗」文：3例 Y(?)吾*不知之 [定州漢墓本「弗智之」] 矣（泰伯） / Y 吾*不得而見之 [定州漢墓竹簡本「弗得而見之」] 矣（述而） / 吾*不得而見之 [定州漢墓本「弗得而見之」] 矣（述而）

なお「吾斯之未能信」（公冶長）は否定文における代詞目的語前置現象とはみなさない。また「可與言而不與之言」（衛靈公）、「*仁不能守之」[定州漢墓本「仁弗守」]（衛靈公）は版本上の問題があるため用例に含めない。

16.5.2 『孟子』の否定文における代詞目的語一覽

(i) 代詞目的語前置文：32例

- ・「莫」文：13例 F 而民莫之死也（梁惠王下） / F 吾宗國魯先君莫之行（滕文公上） / F 吾先君亦莫之行也（滕文公上） / F 莫之或欺（滕文公上） / F 莫之能禦也（梁惠王上） / F 莫之為而為者，天也（萬章上） / F 莫之致而至者，命也（萬章上） / F 莫之能禦也（公孫丑上） / F 莫之能違也（公孫丑上） / F 莫之禦而不仁，是不智也（公孫丑上） / F 莫之敢禦（盡心下） / F 沛然莫之能禦也（盡心上） / F 謂夫莫之禁而弗為者也（盡心上）
- ・「未」文：15例 F 未能或之先也（滕文公上） / F 未之有也（梁惠王上） / F 臣未之聞也（梁惠王上） / F 未之有也（梁惠王下） / F 未之有也（公孫丑上） / F 仁智周公未之盡也（公孫丑下） / F 吾未之學也（滕文公上） / F 未之有也（離婁上） / F 吾未之聞也（離婁上） / F 未之有也（離婁下） / F 望道而未之見（離婁下） / F 而良人未之知也（離婁下） / F 未之有也（告子下） / F 未之有也（告子下） / F 未之有也（盡心下）
- ・「不」文：4例 Y 而王不予追也（公孫丑下） / F 父母之不我愛（萬章上） / F 今也父兄百官不我足也（滕文公上） / F 予不屑之教誨也者，是亦教誨之而已矣（告子下）

(ii) 代詞目的語後置文：15例

- ・「未」文：2例 Fc2 髡未嘗觀之也（告子下） / Fc2 未嘗與之言行事也（公孫丑下）
- ・「不」文：10例 Fx 苟不充之（公孫丑上） / Fx(?)吾不為是也（梁惠王上） / Y 則不與之友矣（萬章下） / Y 則不往見之（萬章下） / Fx 聖而不可知之之謂神（盡心下） / Fj 不以君命將之（萬章下） / Y 則不得亟見之（盡心上） / Fc4 不如是（公孫丑下） / Fc4 其設心以為不若是（離婁下） / Fc4 為不若是恕（萬章上）

- 「勿」文：1例 Y 則勿毀之矣（梁惠王下）
- 「弗」文：1例 Y 弗若之矣（告子上）
- 「無不」文：1例 Fc1 福無不自己求之者（公孫丑上）

第十七章 『六度集經』言語の口語性について

——疑問代詞体系を例として

17.1 問題の所在

本論文第 I 部において各時代の疑問目的語の語順を記述した際、同時期に成立した文献言語であっても通時的に異なる段階を反映するという現象がみられた。とりわけ中古初期の『六度集經』(A 部分)は、しばしば通時的に「古い」段階の状態を反映する傾向が顕著であった。例えば、①「何-X+之+V」という疑問目的語前置構文を保存しており(本論文 11.3.1)、②禅母系目的語「誰」の前置用例がみとめられる(本論文 9.3.1)。これらは同時期の『中本起經』をはじめとする口語色の強い諸文献にはみられない。そうすると、この通時的に「古い」段階の状態を反映するという現象が、地域方言の差異に起因するという可能性が考えられる。本論文 I 部ではまさにそのような前提のもとに議論を進めてきた。

そして『六度集經』(A 部分)にみられる以上の現象が、方言差異に基づくものであれば、今後、『六度集經』(A 部分)を三世紀江南方言を反映する資料として位置づけた新たな上中古間文法史が構築されていく必要があるだろう。しかしながら、『六度集經』(A 部分)に保存されている通時的に「古い」現象が当時の江南方言を反映したものと断定するのは容易なことではない。この文献の撰者が擬古的な表現を用いたにすぎないという可能性が俄かには排除できないからである。よって本章では、『六度集經』(A 部分)における疑問代詞の口語性——それらが方言を反映したものか、擬古的な言語であるのか——と、この文献言語の上中古間文法史における位置づけの問題を論じ、さらにそれを踏まえて「区域拡散」という観点から、上古疑問代詞体系の崩壊過程に地域的な差異がみられることを指摘する。

本章で以上の問題を論ずるのは、本論文 I 部において疑問目的語の語順変化の通時的変遷を記述した際に採った立場——『六度集經』(A 部分)に反映された通時的に「古い」段階に属する言語成分を方言的成分とみなす立場——に問題がないかどうかを確認しておく必要があると考えるためである。

17.2 『六度集經』について

『六度集經』は三国呉・康僧会の編訳による所謂「本生經」に属する仏教文献である。現存の版本は八八巻であり、九十一の本生譚或いは仏伝物語が収められ、これらが原則として「六度」——布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧——の順に従って配される。思想的には、大乘的な菩薩行思想を宣揚することに主眼があるとみなし得ようが、同時に「仁政」或いは

「孝道」といった儒家的な思想観念をも含まれている。このことから、「仏教思想をかくも鮮やかに儒家思想と調和させ、とりわけ仏教における脱世俗的、消極・頹廢的な要素を、儒家の治世安民の精神にも許容され得るように改めた。康僧会は中国仏教史上における特殊な人物である」（任繼愈主編 1981：436-437）²³¹、或いは「康僧会は仏教初傳時期において儒家の社会政治倫理哲学を仏教に『溶かし』こんだ。その後、これは一貫して中国仏教的倫理哲学の重要な特色となった」（方立天 2002：35-36）²³²といった評価が与えられている。

『六度集經』の言語的特徴については、すでに多くの研究があり、夙に中古漢語の口語成分が豊富に含まれることが指摘される（曹小雲 2001、方一新・王云路 1993、梁曉虹 1990 等）。とりわけ、並列接続詞「逮」の頻出（李維琦 1993:185-186）、直接目的語を担い文末に位置する「其」の存在（兪理明 1993:72）、或いは統括副詞「都」の高頻度での出現（遇笑容・曹広順 1998）といった文法現象は、この文献言語に特徴的なものであり、漢語史とりわけ文法史・語彙史の点から大いに注視される場所である。

ところが、『六度集經』には口語成分が豊富に含まれる一方、指示代詞「斯」「厥」、指示代詞「焉」、人称代詞「余」、文末助詞「乎」といった多くの所謂「文言成分」も存在する（兪理明 1993:18 等）。これらの文言成分は、おおよそ上古中期漢語（春秋戦国期）に頻出する語彙であり、中古期に至ると衰退し、口語的性格が強いとされる中古初期（後漢・魏晉）の漢訳仏典に頻出することは多くない。『六度集經』にこれら文言成分が生起するのは、一般には康僧会が儒家經典に精通していたためであると解釈されている（兪理明 1993:18-19 等）。

しかしながら、この解釈は再検討する必要がある。そもそも文言成分とは、一般には上古中期漢語を模倣した後世の言語成分を指すのであるから、当該の文献の基礎方言とは乖離した純粋に書面語的な成分ということになる。しかしながら『六度集經』にみえる文言成分が本当に編訳者・康僧会の口語と乖離したものであったのかは、俄には断定しがたい複雑な問題である。『六度集經』は江南（恐らくは建業）で成立した漢訳仏典であり、江南方言を一定程度反映するとも推定される。当時の江南方言には、中原方言では失われた「古い」言語成分が口語として残存していた可能性も排除できない。すなわち、従来、文言成分とされてきたものであっても、実はそれが『六度集經』の基礎方言に由来するという可能性も十分に考えられるのである。この問題を解決するのに最も有効な方法は、中古期（後漢魏晉南北朝）に成立した他の文献言語を対照資料として、漢語史の視点から『六度集經』との比較検討を行うことであろう。

本章は、『六度集經』における疑問代詞体系を題材として、他の中古資料における疑問代詞体系と比較検討することにより、『六度集經』の特徴的な言語成分が基礎方言から乖離し

²³¹原文は以下の通り。

把佛教思想如此鮮明地同儒家思想調和起來，尤其是佛教中的出世的消極頹廢因素改造成為可以容納儒家治世安民的精神，康僧會是中國佛教史上的一個很特殊的人物。

²³²原文は以下の通り。

康僧會在佛教初傳時期將儒家社會政治倫理哲學融入佛教，此後這就一直成為中國佛教倫理哲學的重要特色。

たものであったかという文体的価値 (stylistic value) の分析を行うものである。これにより、康僧会の言語選択の方針を考察し、その上で『六度集経』の上中古間文法史上における位置づけについて改めて検討することを目論むものである。

17.3 「口語性」による言語成分の分類

本論文は、『六度集経』言語の口語性を論ずることを目的とするものであるが、その前に「口語性」の意味するところを明確にしておく必要がある。本論文では、主に池上(1971)の議論に基づき、「口語性」を各言語成分 (=語、フレーズ、構文など言語体系を構成する諸要素) の文体的価値(stylistic value)を決定する要素の一つだと定義する。そして、口語性の程度の低い順に、①純粹書面語成分、②書面語成分、③口語成分、④俗語成分といった分類を設ける。このうち「純粹書面語成分」とは口語とは乖離した言語成分のことであり、例えば文献言語の著者が擬古的表現を採用した場合などに出現することになる。「書面語成分」は、主に書面語に用いられるものの、口語——そのうち多くは改まった表現——の中にも出現し得るものである。「口語成分」は、口語性の程度が「一般的」であるものを指し、書面語から一般の会話まで広く用いられ得る。この「口語成分」は、これだけで完全な言語体系を構成し得る点において、他の文体的価値を有する言語成分とは異なる。「俗語成分」は、非公式のいわば砕けた口語にのみ用いられるもの。漢語では、しばしば「本字」を持たない語がこれに相当し、近古(唐~清代)以前の文献に現れることは極めて稀である。

「純粹書面語成分」と「書面語成分」「口語成分」「俗語成分」との間には、自然言語である口語に由来するか否かという点で本質的な差異があると言える。一方、「純粹書面語成分」を除く三者は、「口語性」の程度により連続体を成しているのであり、それぞれの境界は必ずしも明確に区切られ得るものではない。また、ある言語成分、例えば一つの語の口語性というものは、その用法によって異なることがある点に注意されたい。

17.4 『六度集経』における疑問代詞体系

17.4.1 疑問代詞体系概況

前述のように、上古漢語における疑問代詞体系は、中古以降のそれに比して際立った特徴を有していた。すなわち、類似の指示機能を備えた単音節の疑問代詞が複数存在し、かつこれらが声母を同じくするという音形上の共通性をも備えていた。例えば、上古中期に常見される疑問代詞には、影母系「惡」(*ʔâ)・「安」(*ʔân)・「焉」(*ʔan)、匣母系「何」(*gâi)・「曷」(*gât)・「奚」(*gê)・「胡」(*gâ)・「盍」(*gâp)、禪母系「誰」(*dui)・「孰」(*duk)などがあり、これら各系統の疑問代詞が、各共時態において何らかの条件により選択されていたのであ

る（本論文 I 部の 14.2.1.1【図表 14-6】、14.2.2.1【図表 14-9】に上古中期の『論語』『孟子』の疑問代詞一覧が示してある）。

しかし中古初期（後漢魏晋朝）に至ると、上述の疑問代詞体系が崩壊し始めた。すなわち、①「何」と「誰」以外の上古疑問代詞が衰退し始め、②上古には存在しなかった新出の二音節疑問代詞が大量に出現し始めたのである。本論文で依拠した中古の『中本起経』、『六度集経』（A 部分）、『雑宝蔵経』、『過去現在因果経』を資料とすると（本論文 I 部の 14.4.1.1【図表 14-18】、14.4.2.1【図表 14-21】、14.4.3.1【図表 14-24】、14.4.4.1【図表 14-27】に各文献の疑問代詞一覧が示してある）、この重要な変化の過程について、さらに次の二点が見出される。第一点は、四文献間はいずれも中古期に成立したものであるが、中古内部においても疑問代詞体系の通時的変遷がみとめられるということである。例えば、「如」「若」は中古前期の『中本起経』『六度集経』（A 部分）にはみとめられるが、中古後期の『雑宝蔵経』『過去現在因果経』には存在しない。第二点は、『六度集経』（A 部分）の成書時期は『中本起経』よりもやや遅れるものの、『六度集経』（A 部分）は『中本起経』よりもむしろ「古い」状態をより多く保存しているということである。例えば『六度集経』（A 部分）は上古に既出の疑問代詞を保存することが『中本起経』よりも多く、また、疑問代詞の二音節化の進展が『中本起経』よりも遅れている。以上から、『六度集経』（A 部分）における疑問代詞体系が、他の三文献よりも全体的に「古い」状態を保存していることが確認されるが、この現象がその基礎方言を反映したものであるのか、或いは編訳者が擬古的な言語成分を多く用いたにすぎないのかについて検討していく。

17.4.2 「焉」

「焉」は上古期に常見される疑問代詞である。目的語として主に場所を問い、連用修飾語として理由・方法などを問う。しかし中古期の『中本起経』『雑宝蔵経』にはみられず、『過去現在因果経』に 1 例がみとめられるだけである。また、同じく中古期に成書した『仏説成具光明定意経』『修行本起経』『賢愚経』などにも全く存在しないなど、「焉」は中古期に成立した仏教文献にはほとんどみられなくなっている（魏培泉 2004）。

ところが『六度集経』（A 部分）には以下のように 10 例がみとめられる。

- (17-1) 人曰：「焉有寤而不聞乎。志道甚深，自今之後，願師事世尊，奉五淨戒爲清信士，終身守眞。」（『六度集経』（A 部分） 3-42c~43a）

[焉＝連用修飾語・反語用法]

〔その人は言った「どうして目覚めていて（あのような大きな音が）聞こえないことがあるか。（仏が）道を志すことのなんと深いことよ。今より後、世尊に師事し、五淨戒を奉じて居士となり、終生、眞道を守っていくことを願います。〕

- (17-2) 王以慈忍*心〔金剛寺本無〕願鴿活，又命近臣曰：「爾疾殺我，*秤〔金剛寺本「稱」〕髓令與鴿重等。吾奉諸佛，受正眞之重戒，濟眾生之危厄。雖有眾邪之惱，猶若

微風，焉能動*太〔元本、明本「大」、金剛寺本「金」〕山乎。〕（『六度集經』（A 部分）3-1c）

[焉＝連用修飾語・反語用法]

〔国王は慈忍であるために、鳩を活かそうとして、従者に命じていった「はやく私を殺して、その骨髓を鳩と同じ重さまではかり取りなさい。私は諸仏を奉じて真の重戒を受け、衆生を危難から救っている。たとえ諸々の邪悪な煩惱であっても、（私にとっては）微風のようなものであり、（そんなもので）どうして泰山を動かすことができようか。〕

- (17-3) 皇孫將妃辭親而退，還國閉閣廢事相樂。眾臣以聞曰：「不除其妃，國事將朽矣。」父王曰：「祖王妻之，焉得除乎。」（『六度集經』（A 部分）3-45c）

[焉＝連用修飾語・反語用法]

〔(尼呵遍国の) 国王の孫は妃をつれて親族に別れを告げて退き、(自分の国に帰った) 太子の妃を除かなければ、(国の) 政治は墮落してしまうでしょう。〕父王は言った「わが父が(彼女を) 息子に娶せたのだ。どうして除くことなどできようか。〕

- (17-4) 鹿曰：「王重元后，勞躬副之，吾終不免矣。天王處深宮之内，焉知微蟲之處斯乎。」（『六度集經』（A 部分）3-33b）

[焉＝連用修飾語・純粹用法(?)]

〔鹿(の王)は言った「王は后を大切にされ、自らお出ましになり(私を)彼女に与えようとなされている。私は決して逃れることができませんでしょう。大王は王宮の奥深くにお住まいなのに、どうして私のような獣がここにいることをご存じだったのでしょうか。〕

- (17-5) 常悲菩薩從定寤，左右顧視，不復視諸佛，即復心悲，流淚且云：「諸佛靈耀自何所來。今逝焉如。」（『六度集經』（A 部分）3-43c）

[焉＝動詞目的語・純粹疑問用法]

〔常悲菩薩は禪定から覚めると、左右を顧みましたが、すでに諸仏は見えなかった。心悲しみ、涙を流しながら言った「あの諸仏の靈光は何処から来て、今どこに行ってしまったのだろうか。〕

上述のように「焉」が同時期の他の漢訳仏典にはほとんどみられないということを踏まえると、これら『六度集經』（A 部分）の「焉」は、口語を反映したものではなく、擬古的な成分（純粹書面語成分）であることが疑われよう。しかしながら、『六度集經』（A 部分）における「焉」は、その大部分が連用修飾語となった反語用法に限られ（ただし用例(17-4)は例外的）、明確な純粹疑問用法は述語動詞目的語となった1例（用例(17-5)）だけである。本論文は、このような現象はこれら『六度集經』（A 部分）の「焉」が、その基礎方言と乖離した純粹書面語成分ではなかったことを示唆するものだと考える。この「焉」のように上古

に既出の疑問代詞が、ある中古資料において特定の統語成分を担う場合には反語用法に限られ（純粹疑問用法が消失しており）、別の統語成分を担う場合には純粹疑問用法を保存しているというような状況は、詳細な調査の後に見出し得る相当に複雑な文法規則であり、このような複雑な文法規則は擬古という人為的な方法によって容易に生みだし得るものではないと考えるからである。さらに、この現象は、広義の「疑問」——純粹疑問の他、反語や感嘆などの修辭的疑問を含めた疑問範疇——を表す用法のうち、機能上、無標性の高い純粹疑問が新形式によって担われるようになり、有標性の高い修辭疑問の方は依然として旧形式によって担われるという通時変化の表れであると解釈できる。これは自然言語における言語変化を反映したものと仮定した時に合理的に解釈し得るものであり、このことも上述の推定を支持するものである。以上から、ある上古に既出の疑問代詞について、「中古資料で特定の統語成分を担う場合には修辭的疑問用法に限られ（＝純粹疑問用法が消失しており）、別の統語成分を担う場合には純粹疑問用法を保存している」という規則が見出されるのであれば、その疑問代詞は純粹書面語成分である可能性は低いと推定する（仮説1）。

ただし、『六度集經』（A部分）の連用修飾語或いは目的語となった「焉」が口語成分であるのか書面語成分であるのかを判断することは難しい。本論文ではかりに書面語成分であったと推定しておく。なぜなら①「焉」が連用修飾語となる場合、多くが「焉得…」「焉能…」「焉知…」「焉有…」といった固定的フレーズの形式で出現しており、パラディグマティックな面における結合の範囲が相当に狭いからであり、②『六度集經』（A部分）体系内に「焉」より出現頻度が高く、類似の機能を有する連用修飾用法の「何」が存在し、この連用修飾用法の「何」が口語成分であったと推定されるからである。この他、「焉」が目的語となった場合、『六度集經』（A部分）の体系では書面語成分であったと推定される動詞「如」（「行く」）とだけ組み合わされることも、上述の推定を間接的に支持するものであろう²³³。

17.4.3 純粹疑問を表す連用修飾語「何」

「何」は上中古間の文献言語において極めて普遍的に出現し、中古漢語でもその出現頻度は高い。

「何」は中古の『中本起經』『過去現在因果經』『雜寶藏經』においては、連体修飾語を担った場合は純粹疑問にも修辭的疑問にも用いられ得るが、連用修飾語を担った場合は、原則として修辭疑問用法に限られる²³⁴。ここから、上述の「仮説1」によって、これらの文献に

²³³ 『六度集經』（A部分）において「行く」意を表す動詞のうち、最も普遍的なものは「之」であり、「如」は極めて少ない。

²³⁴ 『中本起經』と『過去現在因果經』には以下のごとく連用修飾語の「何」が純粹疑問を表す例外も存在する。ただし、これらの用例における「何」はいずれも動作の「起点」を問うものであり「方法・理由」を問う用法とは区別して論ずる必要があると思われる。

・*梵志 [三本「梵志過」] *眾等往造求 [三本無] 宿。美音問曰：「道士何來，今欲所之。」具陳彼澤樹神功德：「欲詣舍衛，造*孤獨 [三本「給獨」] 氏，*攢 [三本「攢」] 採法齋，冀遂本志。」（『中本起經』 4-157a）

おける「何」は純粹書面語成分ではなかったと推定できる。そしてこれらの文献には、連用修飾語「何」と類似する統語機能・意味機能を有する「云何」「何故」などの新形式が存在し、純粹疑問はこれら新形式によって担われている。以上のことから、これらの文献における連用修飾語の「何」は恐らく書面語成分であったと推定したい。

- (17-6) 王問*憂 [三本、金剛寺本「優」] 陀：「悉達每出，椎*鍾 [三本、金剛寺本「鐘」] 鳴鼓，觀者填路。今*者 [三本、金剛寺本「若」] 遊止，有[何]音響。」*憂 [三本、金剛寺本「優」] 陀答王：「佛始得道，往詣波羅奈国，擊甘露法鼓。…」(『中本起經』 4-154c)

[何＝連体修飾語・純粹疑問用法]

[王は憂陀にたずねた「悉達が外出する時には、鍾をつき太鼓を鳴らして、觀衆が道を埋めたものだ。今、遊樂する際、どのような音楽を伴っているのか。」憂陀は王に答えた「仏は道を得たばかりに波羅奈国を訪れた時、甘露の法鼓を打ち鳴らしました。…」]

- (17-7) 佛言：「苦哉，阿蘭迦蘭。甘露当開，汝[何]不聞。」(『中本起經』 4-147c)

[何＝連用修飾語・反語用法]

[仏は言った「何とつらいことか、阿蘭迦蘭よ。甘露のごとき教えがまさに説かれようとしているのに、お前はどうして聞くことができないのか。」]

- (17-8) 五人*悉对 [金剛寺本口(?)] 曰：「吾坐悉達更*歷 [金剛寺本「磨」(?)] 勤苦。悅頭檀王暴逆違道，皆由於卿。」佛告五人：「汝莫*卿 [三本「輕」] 無上正真、如来、平等覺也。無上正覺不可以生死意待*也 [三本佛、金剛寺本無]。 [何]得对吾面*稱 [宋本「說」] 父字。」(『中本起經』 4-148a)

[何＝連用修飾語・反語用法]

[五人はみな答えて言った「我らは悉達のせいで苦勞することになったのだ。悅頭檀王の暴虐非道もみなあなたによるものだ。」仏は五人に言った「おまえたち、無上正真、如来、平等覺を輕んじてはならない。無上正覺は生死にとらわれた心で相對してよいものではない。どうして私の面前で父の名を呼んでよいものか。」]

- (17-9) 象王問言：「著[何]衣服。」答言：「身著袈裟。」(『雜寶藏經』 4-454a)

[何＝連体修飾語・純粹疑問用法]

[象王はたずねて言った「(その人は) どんな服を着ているか。」(善賢は) 答えて言

[何＝連用修飾語、純粹疑問用法]

[梵志たちは行って宿を求めた。美音がたずねて言った「道士は何處から来て、今どこに行こうとされているのか。」(梵志たちは) かの沢の樹神の功德をつぶさに述べ、「舍衛に行き孤獨氏に赴いて佛戒を得て、本願を遂げることが願っております。」]

・從者答曰：「無有蹤跡，不知[何]來。」(『過去現在因果經』 3-630b)

[何＝連用修飾語、(間接) 純粹疑問用法]

[從者達は答えて言った「どこから來たのか分かりません。」]

った「袈裟をつけています。』

- (17-10) 於其中路，心窃生念：「我今為王，王於天下，一切人民靡不敬伏。自非有大德者，**何**能堪任受我供養。」（『雜寶藏經』 4-484a）

[何＝連用修飾語・反語用法]

〔祇夜多に会いに行く）道すがら、（月氏国王は）心中にひそかにある思いが生じた「私は今、王である。王というものは天下にあつて、敬服しない人など一人もない。大徳のある者でなければ、どうして私の供養を受けるのに値しようか。』

- (17-11) 時摩訶羅，復問之言：「我有何罪，橫加打棒。」麦主答言：「汝遶麦溝，**何**不右旋咒言『多入』。違我法故，是以打汝。」（『雜寶藏經』 4-480a）

[何＝連用修飾語・反語用法]

〔その時、摩訶羅はまたその男（＝麦の持ち主）にたずねて言った「私にどんな罪があつて、棒で殴りつけたのか。」麦の持ち主は答えて言った「お前は麦の山をまわる時、どうして右側からまわつて『豊作となりますように』と祈らなかつたのか。我々のきまりに違反したから、お前を殴つたのだ。』

- (17-12) 太子即問：「此為**何**人。」從者答曰：「此病人也。」（『過去現在因果經』 3-630a）

[何＝連体修飾語・純粹疑問用法]

〔太子はたずねた「これは**何**者か。」從者は答えていった「病人です。』

- (17-13) 時白淨王，愛念情深，語車匿言：「我今當往尋求太子，不知即時定在何許。其今既已捨我學道，我復**何**忍獨生獨活。便當追逐隨其所在。」（『過去現在因果經』 3-636a）

[何＝連用修飾語・反語用法]

〔その時、白淨王は（太子への）思いが強く、車匿に（次のように）言った。「私はこれから太子を探しにいこうと思うが、（彼は）いったい今何処にいるのだろうか。彼は私を捨てさり道を学んでいる。私はどうして一人で生きていくことができようか。彼の居場所を追い求めるべきであろう。』

- (17-14) 爾時魔王，左手執弓，右手調箭，語菩薩言：「汝刹利種，死甚可畏。**何**不速起。宜應修汝轉輪王業，捨出家法。…」（『過去現在因果經』 3-640a）

[何＝連用修飾語・反語用法]

〔その時、魔王は左手に弓を執り、右手で矢を触りながら、菩薩に言った「クシャトリアよ。死とは恐ろしいものだ。どうしてすぐに立ち上がらないのか。お前の（修めるべき）轉輪王の業を修めて出家の法を捨てるがよい。…』

ところが、『六度集經』（A部分）における連用修飾語の「何」は『中本起經』『雜寶藏經』『過去現在因果經』におけるそれとは用法の面で異なっている。すなわち「何」が『六度集經』（A部分）において連用修飾語を担う場合、純粹疑問と修辭疑問（反語および感嘆）のいずれの用法にも用いられるのである。この『六度集經』（A部分）の連用修飾語「何」は、

連用修飾語として多様な語・フレーズを修飾することができ、また出現率も高い。本論文は、『六度集経』(A部分)における連用修飾語の「何」は書面語成分ではなく口語成分であった可能性が高いと考える²³⁵。

- (17-15) 第一弟子*鷲鷲[宋本、金剛寺本「秋露」]子，前稽首長跪白言：「車匿宿命有^何功德。…佛歎曰：「善哉善哉。*鷲鷲子所問甚善。車匿累世功勳無量。爾等諦聽，吾將說之。」（『六度集経』(A部分) 3-44b)

[何=連体修飾語・純粹疑問用法]

〔第一の弟子の鷲鷲子が前に進んで稽首し、体を直ぐにして跪き、言上した「車匿は過去世にどのような功德を積んでしょうか。…」仏は嘆じて言った「よきことかな。鷲鷲子の問いはもつともだ。車匿の何世にもわたる功德は計りしれない。お前たち、しっかりと聞くがよい。これからそのことについて話そう。〕

- (17-16) 諸沙門曰：「四姓貧困，常有飢色，吾等不可受彼常食。経説『沙門一心守真，戒具行高。志如天金，不珍財色，*唯[三本、金剛寺本作「惟」]経是宝，絶滅六飢』故誓除饑，^何恥分衛而不行乎。」（『六度集経』(A部分) 3-11c~12a)

[何=連用修飾語・反語用法]

〔沙門たちは言った「彼ら四姓は貧しく、いつも食べる物も足りていない表情をしている。彼らがいつも食べている物を受け取るべきではない。経典に『沙門は一心に道を守り、戒律が備わり行いが高尚であらねばならない。志は天界の黄金のように（純粹で堅く）、財物や女色を惜しまず、ただ経のみを宝として六飢を滅

²³⁵ 本論文は、『六度集経』(A部分)における目的語の「何」についても、同一文中に助動詞「欲」が共起していれば必ず「欲+何(O)+動詞」という語順をとる、という以下のような文法現象の存在を根據に、口語成分あるいは書面語成分であったと推定する。

・樹神人現，顔華非凡，謂阿群曰：「爾爲無道，以喪王榮。今復爲*元[宋本・金剛寺本「無」]酷，將欲^何望乎。」（『六度集経』(A部分) 3-22c)

[何=動詞目的語]

〔樹神が人の姿を現した。容貌は輝いており凡人と違っていた。(彼は)阿群に言った「お前は無道を行ったが故に、國王という榮華を失ったのに、今またさらにこの上なく殘酷なことをして、いったい何を望んでいるのか〕

・謂諸鴿曰：「佛經眾戒，食爲元首。貪以致榮者，猶餓夫獲毒飲矣。得志之樂，其久若電。眾苦困己，其有億載。爾等捐食，身命可全矣。」眾對之曰：「見拘處籠，將欲^何*冀[三本「異」]乎。」（『六度集経』(A部分) 3-34b)

[何=動詞目的語]

〔(鳩の王は)鳩たちに言った「佛典のあらゆる戒律のうち食欲の戒めが第一である。食欲のために榮華を極めるのは、飢えた男が毒の飲み物を得るようなものだ。楽しい気持ちでいられるのは、稻妻の間だけのことであらゆる自分自身を苦しめることが何億年も続くのである。お前たち、食を断てば自身を全うできるのだ。」鳩たちは答えて言った「籠の中に閉じ込められているのに、いったい何を望むというのでしょうか。〕

この「欲+疑問代詞目的語+動詞」という疑問代詞目的語が助動詞の後・動詞の前に生じる文法現象は、上古中期にはみとめられず、上古後期(前漢代)以降になって生じたものであるため(本論文 10.2)、この語順が擬古により生じたものとは考え難い。よって『六度集経』(A部分)の目的語「何」は、少なくとも純粹書面語成分ではなかったと考える。

す。』とある。もとより（六情を断ち）比丘となることを誓ったのであり、どうして乞食することを恥じて行わないことがあるか。」]

- (17-17) 王抱両孫，坐之于膝。*王〔三本無〕曰：「属不就抱，今来何疾乎。」对曰：「属是奴婢，今为王孫。」（『六度集経』（A 部分）3-10c）

[何＝連用修飾語・純粹疑問用法]

〔王は二人の孫を抱くと、彼らを膝に座らせた。王は言った「先ほどは抱きついて来なかったのに、今どうしてそんなにすぐに（私のところに）来たのか。」（孫たちは）答えて言った「先ほどは下僕でしたが、今は王の孫となったからです。〕

- (17-18) 阿群曰：「命危在今，何欣且笑。」答曰：「世尊之言，三界希聞。吾今懷之，何国命之可惜乎。」（『六度集経』（A 部分）3-23a）

[何＝連用修飾語・純粹疑問用法（？）]

〔阿群は言った「命が今日にも無くなるというのに、どうして喜んで笑っているのか。」（普明王は）言った「世尊のお言葉は、三界を通じてほとんど聞くことのできない（貴重な）ものだ。私は今これを得ることができた。国でも命でも何の惜しいことがあるか。〕

- (17-19) 有頃迴還，稽首長跪，如事啟焉。又質其原：「彼意無恒，何其疾乎。」仏即為具說如上。（『六度集経』（A 部分）3-16b）

[何＝連用修飾語・純粹疑問用法]

〔（阿難は）しばらくして帰ると、稽首して体を直ぐにして跪き、彼（＝仏）にことの次第を報告した。そしてその原因をたずねた「かれの心変わりは、どうしてあのように早いのでしょうか。」すると仏は彼にさきほどの因縁をつぶさに話した。〕

- (17-20) 妻曰：「太子求道，厥勞何甚。夫士家尊*在〔金剛寺本無〕于妻子之間，靡不自由。豈況人尊乎。」（『六度集経』（A 部分）3-10a）

[何＝連用修飾語・感嘆用法]

〔妻は言った「太子の求道は、なんと苦しみが大きいことでしょうか。そもそも士人というのは家では遠慮することなど何一つありません。ましてや貴人（であるあなた）においては（思い通りにならないことなどありませんか。〕

以上の推測が正しいとすれば、『六度集経』（A 部分）における連用修飾語の「何」は、『中本起経』『雑宝蔵経』『過去現在因果経』のそれよりも相対的に古い用法——純粹疑問と修辭的疑問のいずれにも用いられる用法——を口語成分として保存していたということになる。

17.4.4 「孰」

「孰」は上古中期漢語において頻出する疑問代詞があるが、多くの文献においては主語のみを担うという統語機能面での制約がみられる。中古漢語期に至ると、ほとんどの文献にお

いてその出現率が大幅に低下し、『中本起経』『過去現在因果経』『雑宝蔵経』には全く存在しない。ところが『六度集経』(A部分)には20例も出現する。これが擬古的なもの、すなわち純粹書面語成分であるか否かが問題となる。「孰」は上古漢語においては、その統語機能・談話機能が指示対象の相違——人或いは人の集団か、他の事物か——によって異なっていた(本論文9.1参照)。中古においても原則的には同様であるので、それぞれの用法に分けて検討していく。

17.4.4.1 「孰」が〈+人〉を指示する場合

「孰」が〈+人〉すなわち「人およびその集団」を指示する場合、『六度集経』(A部分)では二つのタイプの構文がみられる。一つは「孰 [=S] +V(+O)+者」或いは「孰者 [=S] +V」といった「孰」のあとに「者」を伴う構文であり、もう一つは「者」を伴わないものである。そして前者は純粹疑問に用いられ、後者は多く修辭疑問(一般には反語)に用いられる。ここから、本論文17.4.2の「仮説1」により、これらの構文における「孰」は純粹書面語成分ではなかったと推定したい。

また、このうち「孰」のあとに「者」を伴う構文が口語成分であったのか書面語成分であったのかについては、これが上古後期になってから出現した形式であること、かつこの用法の3例がいずれも純粹疑問を表すことから、口語成分であったと推定しておきたい。

- (17-21) 王即募曰：「孰能*襁[三本、金剛寺本「攘」]斯禍者，妻以月光，育以*元[大正蔵「原」，三本、金本に拠る]福。」(『六度集経』(A部分)3-47a)

[孰(…者)=主語・純粹疑問用法]

[王は(智者を)募って言った「この災難をうち払い得るものは誰か。(その者には)月光を娶らせ、この上ない幸福を享受させよう。」]

- (17-22) 王以閑日，由私門出，麤衣*自[三本「白」、金剛寺本「曰」]行，就補履翁，戲曰：「率土之人，孰者樂乎。」(『六度集経』(A部分)3-51b)

[孰(者)=主語・純粹疑問用法]

[王は暇な日に家の門から出かけた。粗末な服をつけ、一人で行った。靴直しの老人に近づくと、(彼を)からかって言った「この国すべての人の中で、誰が(最も)楽しく暮らしているか。」]

「孰」の後ろに「者」を伴わない構文は、上古中期の段階で既に相当に普遍的であり、かつ『六度集経』(A部分)においては修辭疑問に限られる傾向が顕著である。また、その多くが「孰能…」「孰有…」「孰不…」といった固定的な統語形式に中でのみ生起し、パラダイグマティックな面における結合の範囲が狭い。よってこの文型における「孰」は書面語成分であったと推定しておく。

- (17-23) 曰：「爾還吾珠，不者吾竭爾海。」海神答曰：「爾言何虛。斯之巨海，深広難測。**孰**能尽之。天日可殞，巨風可卻，海之難竭，猶空難毀也。」（『六度集經』（A 部分）3-4c）

[孰=主語・反語用法]

〔（普施は）言った「私の真珠を返しなさい。さもなくばお前の海を涸らしてしまうぞ。」海神は答えて言った「おまえの話はなんと虚妄であることか。この大海の深く広いこと、測り難いほどだ。誰がこれを涸らすことができようか。空の太陽は落とすことができ、大風も退けることができるが、海を涸らすことなどできない。天空を壊すことができないように。〕

- (17-24) 誨諭之曰：「睹世皆死，**孰**有免之。尋路念佛，仁*教〔宋、元、明本「孝」〕慈心，向彼人王，慎無怨矣。」（『六度集經』（A 部分）3-12c）

[孰=主語・反語用法]

〔（鹿王は）それら（別れを告げに来た鹿たちを）教え諭して言った「世の中のものはすべて死ぬのだ。誰がそのこと（=死）を免れられようか。道すがら仏を念じ、仁愛・慈悲の心でもってあの人王に應對するように。慎んで（彼を）恨むことなどないように。〕

- (17-25) 对曰：「吾自彼来，舉身*惱〔三本「疼」〕痛，又大飢渴。太子光馨，八方歎懿，巍巍遠照，有如太山。天神地祇，**孰**不甚*善〔元本、明本「喜」〕。今故*遠〔三本、金剛寺本無〕帰窮，庶延微命。」（『六度集經』（A 部分）3-9c）

[孰=主語・反語用法]

〔梵志は答えて言った「私は遠くからやって来たので、体中痛く苦しい。そのうえ喉は渴き、飢えております。太子のご威光は、四方あらゆるものが賞賛するところであり、高々とそびえて遠くまで輝いていること、まさに太山の様です。天神地神で誰が賞賛しないでしょうか。（私は）今そのために遠くから帰順したのです。どうかこの微命を延ばしていただきたい。〕

17.4.4.2 「孰」が〈一人〉を指示する場合

「孰」が〈一人〉すなわち「人およびその集団以外の事物」を指示する場合、『六度集經』（A 部分）では主語を担った用例と、「孰如…」という統語形式で「…と比べてどうか」といった意味を表す構文に用いられた用例とが各 1 例ずつみとめられるだけである。主語を担ったものは、純粹疑問（ただし間接疑問）に用いられたものであるが（用例(17-26)）、用例があまりに稀少であるため、「孰」の文体的価値の判断は保留しておきたい。一方、「孰如…」構文については、中古新出の構文であり、『六度集經』（A 部分）にみえるもの（用例(17-27)）が最初期の用例の一つと言ってよい。当時の書面語としては普遍的なものではなか

ったと考えられるため、口語を反映したもの（口語成分）と推定しておく。なお、この構文は用例(17-28)のように他の中古文献にもみとめられる。

- (17-26) *夜 [大正蔵「従」,三本、金剛寺本に拠る] 寢不寐,展転反側,曰:「吾是補蹠翁耶,真天子乎。若是天子,肌膚何麤。本補*履 [大正蔵「蹠」,三本、金剛寺本に拠る] 翁,緣処王宮。余心荒矣,目*睛 [三本、金剛寺本「精」] 乱乎。二処之身,不照^{孰真}。」(『六度集経』(A部分) 3-51c)

[孰=主語・純粹疑問用法(間接疑問)]

〔(靴直しの老人は)夜寝ようとしても眠ることができず、のたうち廻って言った「わしは靴直しの老人だろうか、それとも天子だろうか。もし国王なら、どうして皮膚がこんなにも粗いのか。もし元々靴直しの老人であるのなら、どうして王宮に住んでいるのか。私は心が乱れて、目がおかしくなったのではないか。二つの身分のうち、どちらが本当なのかかわからない。〕〕

- (17-27) 佛告胞闍:「五百車声,^{孰如}雷震之響。」対曰:「千車之声,猶不比雨之小雷。豈況激怒之霹靂乎。」(『六度集経』(A部分) 3-42c)

[孰=「孰如」構文・純粹疑問用法]

〔仏は胞闍に言った「五百の車の音は、大きな雷鳴の響きと比べてどうであるか。」(胞闍は)答えて言った「千の車の音でさえも、雨の時に鳴る小さな雷にも及ばない。ましてやどうして激烈な霹靂と比べられようか。〕〕

- (17-28) 魚豢曰:「昔孔子歎顔回以為三月不違仁者,蓋覩其心耳。^{孰如}孫、祝菜色於市里,顛倒於牢獄,捫有実事哉。…」(『三国志』「魏書」「閻温伝」「裴注」553)

[孰=「孰如」構文の構成部分・純粹疑問用法]

〔魚豢が言うには、「昔、孔子が顔回に感嘆し、三ヶ月仁に違ふことがないとしたのは、つまりは彼の心を見てのことだけであつた。孫(賓碩)、祝(公道)の場合は、市場での(趙岐の)ただならぬ様子であつたり、(賈逵が)牢獄で転がっていたりというように、実際の拠るべき事実があつたが、これは(孔子が顔回に感嘆した場合と)どうであろうか。…〕〕

17.4.5 「ゼロ疑問代詞」目的語

中古期の仏教文献には、以下のごとく機能的に疑問詞疑問文に相当するものの、文中で疑問機能を担っているはずの疑問代詞が生起していないという特殊な特定疑問文がみとめられる。

(17-29) 獵士素知太子*迸[元、明本「屏」]逐所由，勃然罵曰：「吾斬爾首，問太子為乎。」(『六度集經』(A部分) 3-9b)

[獵師は元々太子が放逐されたことの次第を知っていたので、顔色を変えて罵ったお前の首を斬ってやろうか。太子のことを聞いてどうするのか。]

(17-30) 母惟之曰：「斯怪甚大，吾*用[三本、金剛寺本「以」] *果[金剛寺本「蓮」] 為。急婦視兒，將有他乎。」(『六度集經』(A部分) 3-10a)

[母はこのこと(雨もないのに雷鳴が聞こえ、右目の皮が動き、左腋が痒くなり、両乳房から乳が流れ出てきたこと)を考えて言った「これは全く奇妙なことだ。果物など(採っていて) どうするのか。急いで子供に会いに帰らなくては。何か予期せぬことがあったのだろうか。]

(17-31) 王*性[三本、金剛寺本「素」]妒害，惡心內發，便問道人：「何故誘*他[三本、金剛寺本「他人」] *妓女[三本、金剛寺本「婦女」]。 *著[三本、金剛寺本「在」]此坐為。卿是何人。」(『中本起經』 4-148c)

[王は嫉妬深い性格であり、悪意が生じた。(彼は)道人にたずねて言った「どうして他人の歌女を誘惑するのか。ここに座って何をしているのか。君は何者か。]

(17-32) 父告子言：「汝欲作仙人*也[三本「耶」]。生活之法，云何避虫。」子言：「我今望*得[三本「得父」]現世安樂、後世安樂。不用我語，用是活為。」(『雜寶藏經』4-481b)

[父は子に言った「お前は仙人になろうとしているのか。生活していくなかで、どうやって虫を避けるというのか。」子は言った「私は今、現世の安樂を得ることも、後世の安樂を得ることも望んでいます。私の言うことが聞き入れられないのなら、生きていていったい何になるというのでしょうか。]

中古漢語にみられるこのような特殊な特定疑問文については、その統語構造の解釈、或いはその通時的生成過程といった点について議論が積み重ねられてきた。一般には、これらの特定疑問文は「何(=前置目的語)+動詞」という動詞句に由来し、そこから疑問代詞「何」が消失することによって——ただし音形だけが消失して「何」の疑問機能は保存されて——生成されたものとされている。例えば述語動詞が「為」である場合、「何(+以)+為」>「為」の前置目的語「何」の消失>「(+以)+為」のような過程が推定されている(太田 1988:95-98 など)。本論文も上述の特殊な特定疑問文がこのような生成過程を経て生成されたとの見方に賛同する。その上で、元々「何」が存在した統語的位置に音声形式を欠いた疑問代詞——ゼロ疑問代詞——が存在するとみなし、これを「ゼロ疑問代詞」と称することにする。『六度集經』(A部分)にはゼロ疑問代詞が介詞「緣」「從」の目的語となった用例がみとめられる。

(17-33) 婿曰：「吾貧，緣獲給使乎。」(『六度集經』(A部分) 3-9b)

[ゼロ疑問代詞=介詞「縁」の目的語]

[夫は言った「私は貧しい。どうしたら召使いが手に入れられるだろうか。]

- (17-34) 兎曰：「昔為王孫，今為奴婢。奴婢之賤，**縁**坐王膝乎。」問梵志曰：「**縁**得斯兎。」
〔『六度集經』(A部分) 3-10c)

[ゼロ疑問代詞=介詞「縁」の目的語]

[(太子の) 子供は言った「以前は王の孫でしたが、今は (バラモンの) 奴隷です。奴隷という卑しい身分にありながら、どうして国王様の膝に座れましょうか。」(王は) バラモンにたずねた「どうやってこの子たちを手に入れたのか。」]

- (17-35) 菩薩存想，吟泣無寧。曰：「吾**従**得天師經典，翫誦執行，以致為仏，愈眾生病，令*還〔三本「逮」本浄乎。〕〔『六度集經』(A部分) 3-32a)

[ゼロ疑問代詞=介詞「従」の目的語]

[菩薩は (仏のことを) 思い、苦しむうめいて安まることがなかった。(そして) 言った「私はどこから天師の經典を得、(これを) 誦んじて実行し、仏となり、衆生の苦しみを癒し、(彼らを) 元々の清浄に戻らせることができるだろうか」]

このゼロ疑問代詞が介詞「縁」「従」の目的語を担う現象は、『中本起經』『過去現在因果經』『雜寶藏經』には全く存在せず、他の中古文献においても極めて稀少である。そのためこれを当時の口語を反映したものではなく編訳者である康僧会の個人的な「創造」によるもの——その場合、擬古によるものではないが純粹書面語成分に相当することになる——とする考えもあり得る。しかしここで重要なことは、このゼロ疑問代詞の出現には地域的偏差がみとめられるということである。この点について兪理明(1993:163)は、三国呉の仏典では「何縁」は「縁」に、「何従」は「従」に簡略化され得ると指摘し、支謙『大度經』の1例と『六度集經』の8例とを挙げる。そして兪氏が指摘するように、これら介詞「縁」「従」の目的語としてゼロ疑問代詞が生起するのは、三国呉地域に限定されているようである。兪氏自身は、この現象が直接に基礎方言を反映したものであるか否かについては明言していないが、本論文ではこれを口語の反映だと推定しておきたい。この現象を自然言語に由来しない人為的なレベルにおける「省略」だと仮定すると、どうして三国時代の呉地域においてだけそのような「省略」がなされたのか、解釈し難いからである。そしてそもそもこのような人為的な「省略」を行わなければならない動機自体が想定し難いであろう。仏典の一句の字数を四字或いは六字毎に揃えることを目的としたものだとしても、その場合は「何縁」はむしろ「何」と簡略化されるのが自然である。以上から、本論文は、このゼロ疑問代詞が介詞「縁」「従」の目的語となる現象は、『六度集經』(A部分)の基礎方言の反映である(「口語成分」と推定する。

そして上の推定は『六度集經』(A部分)の基礎方言がどの地域の方言かという重要な問題に関わってくる。つまり、以上の本論文の推定が正しければ、『六度集經』(A部分)の基礎方言は三国時期の建業方言であった可能性が高いことになる。

17.4.6 「何等」の欠如

「何等」は上古後期（前漢）に至ってから出現した疑問代詞であり、『中本起経』『過去現在因果経』『雑宝蔵経』にも少なからずみられ（『中』18例、『過』30例、『雑』6例）、他の中古期の漢訳仏典にも常見される。主に目的語・連体修飾語・判断文の主語を担い、事物或いは事物の種類を問う²³⁶。

- (17-36) 王問*憂〔三本、金剛寺本「優」〕陀：「吾子在国，思陳正治，助吾安民，動*順〔金剛寺本「慎」(?)〕礼節，莫不承風。今者独处，思憶何等。」（『中本起経』4-154c）

〔何等＝動詞賓語〕

〔王は憂陀にたずねた「わが息子は国にあつては、正しい政治を広めることに考えをめぐらし、私を助けて民を安んじ、ふるまいは礼節にかない、その教化を受けないものはなかった。（息子は）今一人でいながら、どんなことを考えているのか。。〕

- (17-37) 王見太子有如此瑞，即召諸臣，*共〔元、明本「兵」〕集議言：「太子初生，有此奇特。当為太子作何等名。」（『過去現在因果経』3-621a）

〔何等＝連体修飾語〕

〔王は太子にこのような瑞相を備えているのをみると、臣下を召して一同に会し（彼らに）諮って言った「太子は生まれたばかりであるのに、かくも喜ばしい相を備えている。この子にどのような名をつけるべきであろうか。。〕

- (17-38) 女人答言：「女人還在*女〔三本「汝」〕前而裸小便，有何等耻。一国都是女人，唯大力士是男子耳。若於彼前，应当慚愧，於汝等前，有何羞耻。」（『雑宝蔵経』4-487a）

〔何等＝連体修飾語〕

〔女は答えて言った「女が女の前で裸になって小便をしたとて、どうして恥ずかしいことがありますでしょうか。國中みな女であつて、ただ大力士だけが男なのです。かりに彼の前なのであれば、もちろんきまり悪く思いますが、あなたたちの前で何の恥じることがありますか。〕

²³⁶ 魏培泉(2004)は、「「何等」の「等」は元々「等級」「たぐい」といった意味を含んでおり、前漢の紀元前後一世紀に至ってもおそらくこのような語彙的意味を保存していた。この時の「何等」は「どのような」「どんな」「どの側面」といった意味合いを含んでいた。「何等」は、その後、現在漢語の「什麼」のように用いられるようになり、事物についての類別や内容、さらには行為の方式であってもよいようになったに違いない」と推定している。原文は以下の通り。

「何等」的「等」原含有「等第」「等類」的意思，到了西漢前後的一世紀時可能還保有實義，此時的「何等」就含有「什麼樣的」「哪樣」「哪個方面」的意思。無疑的，「何等」後來用如現代的「什麼」，可以是有關於事物的類別、內容、甚至行為的方式。（魏培泉 2004:242）

しかし『六度集経』には3例しか生起せず、かつ下例のようにいずれも異質な部分(『六度集経』(C部分))と異質成分を多く含む部分(『六度集経』(B部分))だけに出現するのである²³⁷。

- (17-39) 王言：「大善。所欲得者，莫自疑難。今我名為一切之施，欲求^何等。」(『六度集経』(C部分)「薩和檀王経」3-7b)

[何等=動詞目的語]

[王は言った「よろしい。(あなたが)手に入れたいと望むものは、(私は)渋ったり躊躇したりはしない。現在、私は「一切之施」(すべてのものを施す)と称しているのだ。(あなたは)いったい何を望んでいるのか。」]

- (17-40) 長者問言：「此^何等病。」比丘報言：「無有病也。但説深経，甚有義理。疑此夫人所懷妊兒是佛弟子。」(『六度集経』(B部分)「小兒聞法即解経」3-35c)

[何等=連体修飾語]

[長者はたずねて言った「これはどのような病気ですか。」比丘は答えて言った「病気ではありません。ただ深遠な経を説いているだけです。(それは)道理に満ちております。婦人が身ごもった子は仏家の弟子ではないでしょうか。」]

- (17-41) 長者問言：「此為^何等。」比丘答曰：「真仏弟子，慎莫驚疑。好養護之，此兒後大當為一切眾人作師。吾等悉當*從^何。」(『六度集経』(B部分)「小兒聞法即解経」3-36a)

[何等=動詞(准繫辞)目的語] [長者はたずねて言った「これ(=この赤子)はいったい何者でしょうか。」比丘は答えて言った「真の仏の弟子です。決して恐れたり疑ったりせず、しっかりと護り育ててください。この子は長ずるに及んであらゆる衆生の導師となるでしょう。我々はみな彼につき従って啓示を受けることでしょう。」]

つまり「何等」は『六度集経』(A部分)には全く出現しない²³⁸。『六度集経』(A部分)

²³⁷ 同様な例として、疑問代詞「那」が、『六度集経』(A部分)には全く存在しないが、『六度集経』(B部分)と『六度集経』(C部分)の部分にそれぞれ1例ずつみられるという現象がある。これも『六度集経』(A部分)と『六度集経』(B部分)・『六度集経』(C部分)間の基礎方言の違いを反映したものと推定される。なお「那」の語源については種々の議論があるが本論文では論じない。

・夫人悲言：「汝為婢使，^那得此兒。促取殺之。」(『六度集経』(C部分)「薩和檀王経」3-7c)
[夫人は怒って言った「お前は婢女であるのに、どうしてその子を手元においてよいものか。すぐにその子を連れて行き、殺してしまいなさい。」]

・長者甚愁，不知夫人^那得此病。(『六度集経』(B部分)「小兒聞法即解経」3-35c)
[長者は大変心配したが、夫人がどうしてこのような(訳のわからないことを言い続ける)病を得てしまったのか分からなかった。]

²³⁸ 康僧會は「安般守意経序」の中では「何等」を使用している。次の箇所がそれであるが、当該の部分は『安般守意経』において「世尊」が二つの身に変化した理由を説明したものであ

において意味機能の面で「何等」に相当する疑問代詞は「何」ということになる²³⁹。

このように「何等」が全く存在しない疑問代詞体系は、中古初期においては極めて珍しい。このような珍しい状況を生み出した要因についてはさしあたり二つの可能性が考えられる。一つはこれが康僧会の口語を反映しているという可能性、すなわち彼の操る口語には「何等」という語が存在しなかったという可能性である。もう一つは、康僧会（或いは彼を中心とした翻訳集団）の口語には「何等」という語が存在していたものの、当時の「何等」が俗語成分であったため、書面言語としては避けられたという可能性である。この二つの可能性のいずれも完全に排除すること難しいであろうが、本論文では康僧会の口語を反映したものという解釈を採っておきたい。『六度集経』（A部分）には「如」「所」「ゼロ疑問代詞」など、「何等」よりも新しい時期に出現し、かつ非仏教文献には稀少な疑問代詞が存在する。よって「何等」だけがとりわけ俗語的で、その使用が避けられたという解釈にはやや無理がある。例えば『中本起経』などではこれら「如」「所」「ゼロ疑問代詞」と「何等」とが併存している。以上から、「何等」が『六度集経』（A部分）にみられないのは、康僧会の口語に存在しなかったことによると考えておきたい。

17.4.7 「云何」が述語のみを担う現象

「云何」は中古期に広く用いられた疑問代詞である²⁴⁰。『中本起経』『過去現在因果経』『雑宝蔵経』においても少なからず出現する（とりわけ後二者に頻出する）。述語として性質・状態を問う用法と、また連用修飾語として方法・理由を問う用法とがある²⁴¹。

(17-42) 夫人問曰：「彼方二郡，一名迦夷，二名拘達盧。若有白王云，彼二国，他王劫取，王当云何。」（『中本起経』4-160b）

[云何＝述語]

[婦人はたずねて言った「かの地方の二郡、一つは迦夷、もう一つは拘達盧と言いますが、もしかの二国が他の王に強奪されてしまったと言上するものがいたら、王（のお気持ち）はいかがでしょうか。」]

り、この「何等」は、実際には『安般守意経』本文の語句を引用しただけである。

・於是世尊化爲兩身，一*曰〔元本・明本「白」何等〕，一尊主，演于斯義出矣（15-163b）

[そこで世尊は二つの身に變化し、一方は「何であるか」と言い、もう一方の尊主はその内容を敷衍したのである]

²³⁹ 他の文献における「何等」の意味機能すべてを『六度集経』の「何」が担うことができると主張しているわけでないものの（例えば、判断文の主語となった「何等」などは、『六度集経』の「何」には変換できないはずである）、原則としては「何等」の意味機能の方が限定的であったと推定される。

²⁴⁰ 「云何」は『詩経』などの上古文献にすでにみられるが、用例は稀少である（周法高1958）。中古の「云何」が『詩経』のそれに直接的に由来するものであるかは疑わしい。

²⁴¹ 『雑宝蔵経』では「云何」が判断文の主語となった用法もみとめられる。

- (17-43) 即各語其諸弟子言：「我今欲同大兄於佛法中出家*学 [三本、聖語藏本「修」] 道。汝意云何。」(『過去現在因果經』 3-650a)
 [云何 = 述語]
 [(迦葉の弟は) 自分の弟子たちに言った「私はこれから兄と共に仏法において道を 修めようと思う。お前たちの気持ちはどうであろうか。」]
- (17-44) 阿難白佛言：「世尊，過去之世，供養父母。其事云何。」(『雜寶藏經』 4-447c)
 [云何 = 述語]
 [阿難は仏に言上した「世尊よ。(あなたが) 過去世において、どのようにに父母を養われたのでしょうか。」]
- (17-45) 而問言：「阿難，是諸長老比丘尼，皆久修梵行，且已見諦。云何當使為新受大戒幼小比丘僧作禮。」(『中本起經』 4-159a)
 [云何 = 連用修飾語]
 [(大愛道は) たずねて言った「阿難よ、これら長老の比丘尼たちはみな久しく清浄な行いを修め、すでに真理を見ています。どうして新たに大戒を受けた幼小の比丘僧に礼を行わなければならないのでしょうか。」]
- (17-46) 其中眾生各得相見，共相謂言：「此中云何忽生眾生。」(『過去現在因果經』 3-624b)
 [云何 = 連用修飾語]
 [その(三千大世界の中の暗処の) 中にいたすべての生き物たちはお互いが見えるようになり、言い合った「どうしてここに突然生き物が生まれたのか。」]
- (17-47) 第二夫人來受募言：「我能卻之。」問言：「云何得攘卻之。」(『雜寶藏經』 4-453a)
 [云何 = 連用修飾語]
 [第二夫人は呼び掛けに応じて言った「私が彼ら (= 烏耆延国の軍隊) を退けることができます。」(国王は) たずねて言った「どのようにして (お前が) 彼らを退けられるというのか。」]

『六度集經』(A 部分) においては「云何」は全部で 9 例出現するが、述語を担い性質・状態を問う用法に限られており、連用修飾語となった用法は存在しない。『過去現在因果經』『雜寶藏經』などでは、むしろ連用修飾語を担う用法の方が優勢であり、『中本起經』においても連用修飾語用法と述語用法とが同程度で出現する。『六度集經』(A 部分) における統語分布は相当に特徴的だと言えよう。

- (17-48) 禪度無極者云何。端其心，壹其意，*合 [宋本「舍」] 會眾善，內著心中，意諸穢惡，以善消之。(『六度集經』 3-39a)
 [云何 = 述語]

[禪定に勤しみ彼岸に到るとは、どのようなことを言うのか。その人の心を正しくし、その人の思いを専一にし、諸々の善を集めて（それを）心に置き、思いの中にある諸々の汚れ・悪を善によって滅すことである。]

(17-49) 即*輦[元本、明本「捷」]眾宝，於上立刹，稽首*白[宋本「曰」]言：「願我得仏教化若今。今所立刹，其福云何。」（『六度集經』3-48b）

[云何＝述語]

〔（賢乾は）すぐに様々な宝物を運びこみ、（その場所の）上に寺を建立すると、稽首して言った「願わくば、仏の教化を今のごとく受けられんことを。今、寺を建立したことには、どのような福があるのでしょうか。〕〕

(17-50) 翁曰：「*唯[三本「惟」]王者樂耳。」曰：「厥樂云何。」（『六度集經』3-51b）

[云何＝述語]

〔老人は言った「ただ王だけが楽しく暮らしている。」（王は）言った「どうして彼が楽しく暮らしているといえるのか。〕〕

通時的に見れば、「云何」の述語用法は連用修飾語用法よりも早くに出現したものである（魏培泉 2004:252）。よって『六度集經』（A部分）の状況は『中本起經』のそれよりも相対的に古い状況を反映していると推定できよう。「云何」の連用修飾語用法の生成過程は、まず「云何」が述語用法だけを有した段階においてしばしば連動構造の前項を担うようになり、そこから連用修飾語用法が派生したものと推定される。

この現象と口語との関係については、本論文は、『六度集經』（A部分）に「云何」の連用修飾語用法がみられない点は、編訳者である康僧会の口語を反映したものであると考えておきたい。康僧会が「云何」の連用修飾語用法だけを回避しなければならなかった動機が想定し難いからである。ただし『六度集經』（A部分）における「云何」が書面語成分であったか口語成分であったかについては、判断を保留しておきたい。

17.5 小結

康僧会が『六度集經』（A部分）を編訳した際の疑問代詞の使用原則は以下のように帰納し得る。

- (i) 康僧会自身の口語に存在する疑問代詞のうち、既存の文献（上古文献および先行する中古の仏教文献も含む）にみえる疑問代詞については、彼の口語における用法が先人の文献におけるそれと一致するか否かに拘わらずその使用を妨げなかった（「何」、「孰（…）者」等）。その際、書面語色彩の強い疑問代詞（「書面語成分」）を採用することもあった（「焉」、「孰」など）。
- (ii) 康僧会自身の口語に存在する疑問代詞であっても、既存の文献に見られないも

のは使用しなかった。

- (iii) 中古時代の他の仏教文献に常見される疑問代詞であっても、それが康僧会自身の口語に存在しなければ使用しなかった（「何等」、連用修飾語の「云何」等）。

以上のことは、康僧会が『六度集経』(A部分)を編訳する際に、自身の使用する口語（「口語成分」および正式なスタイルの会話では使用され得る「書面語成分」）に存在し、かつ既存の文献に出現したことのある疑問代詞だけを選択した、と整理できよう。このことは、康僧会が主観的には書面語的表現を一定程度は意識していたこと（上記(ii)）、しかし口語から乖離した擬古的表現の使用までは意図していなかったことを意味しよう（上記(iii)）。もう一点、注目に値するのは、康僧会は当該の疑問代詞が既存の文献に存在するか否かについては注意を払ったようであるが、用法上、それが既存の文献のものと一致しているか否かについてはまではほとんど意識しなかったということである。よって、例えば、「孰」を「孰如」構文に用いるような用法は、『六度集経』(A部分)にみえるものが最初期の用例の一つであるが、このような用法面での「革新」が『六度集経』(A部分)には多くみとめられるのである。そして以上のような見解に基づけば、何故に『六度集経』(A部分)は書面語的色彩が強くと同時に、口語成分も——とりわけ用法面において——豊富に含まれているのかということも合理的に解釈できると考える。

なお、上記(ii)についてはその根拠を補足しておく必要がある。この点は、「本字」の同定しがたい——上古文献に出現しない語源不明の——俗語成分が、『六度集経』(A部分)に初めて出現するということが稀少であることを踏まえたものである²⁴²。同じく口語成分を多く含むとされる文献言語でも、例えば「子夜歌」など、そもそも書面語的意識のもとに書かれたわけではないものには、「底」などの語源不明な疑問代詞が出現する現象がみられるが、このようなことが『六度集経』(A部分)にはほとんどみられないのである。

17.6 余論：『六度集経』の上中古間文法史における地位

『六度集経』(A部分)の基礎方言に関しては、筆者はすでに魏晋時代の建業一帯の江南方言に属するものと推測したことがある（松江1999）。その根拠は、一般論として早期漢訳仏典の翻訳者は自らが使用し得る方言のうち文化的地位の最も高いものを選択したと考えるのが自然だということである。康僧会は交趾の出身であったが、交趾方言よりも翻訳に従事した建業方言のほうが文化的地位は高かったと推定される。そして本論文の検討を踏ま

²⁴²なお、本論文が口語成分とみなした疑問代詞についても、そのいくつかは「本字」のない俗語成分が訓読によって他の字を借りて出現したものだという可能性も完全には排除できない（この点は、楊秀芳教授からご指教をいただいた）。ただし、少なくとも本論文で扱った疑問代詞については、その語源を「当該の漢字が上古文献で一般的に表示する語」だと解釈しても無理なく説明できるため（本字用法だとみなし得る）、訓読されたものである可能性はほとんどないと考える。

えると、より積極的かつ重要な根拠として、例えばゼロ疑問代名詞が介詞「縁」の目的語となる現象など、『六度集経』(A部分)が魏晋期の江南地域において成立した他の仏教文献と共通する言語上の特徴を有していたことも挙げられることになる。

さて、以上の『六度集経』(A部分)の基礎方言を建業方言とする推定が成立するのであれば、従来の上中古間語彙・文法史に対して語彙・文法項目の地域拡散という観点から、以下の三点を付け加えることができる。

- (i) 魏晋時期の建業方言においては、同時期の洛陽方言(或いは他の中原地域)に比べて上古疑問代詞体系の崩壊の進行過程が緩慢であった。「孰」を口語として保存していたこと(但し「孰」が主語を担う場合は、後ろに「者」を伴わなければ書面語成分となった)、「何」が連用修飾語となり純粹疑問を表す用法が保たれていたこと、「何等」「云何」等の二音節疑問代詞もそれほど発達していなかったこと、などがその例である。
- (ii) 疑問代詞のうちのいくつかは魏晋期の建業方言において独自の発展を遂げていた。例えば同時期の洛陽方言と比べてゼロ疑問代詞が発達しており、その出現率が相対的に高く、かつ介詞「縁」の目的語を担うといった特徴的な用法をも有していた。
- (iii) 上述の(i)(ii)の現象は、南北朝以降に南朝地域で成立した文献の言語からは明確には見出し難い。

以上をまとめると、少なくとも疑問代詞の体系について言えば、三世紀の建業方言は、同時期の洛陽方言等の中原方言よりも相対的に古い状態を保存していたのであるが、五世紀以降になると、建業(建康)方言と中原方言との差異は、それほど明確ではなくなっていたということになる。このことは、或いは建業(建康)方言が、三世紀中葉以降に永嘉之乱等の政治・社会的事件を経て中原方言の影響を大きく受けたことを示唆するものであるのかもしれない²⁴³。

最後に、本章を終えるにあたり、漢訳仏典にはその「訳者」の基礎方言がどの程度反映されるのか、という問題について簡単に補足しておきたい。本章で取り上げた『六度集経』言語の場合、「訳者」である康僧会の言語背景を踏まえ、「訳者」の基礎方言が反映していることを前提とした上で、漢語文法史を合理的に解釈することができた。しかしながら、このことは、すべての漢訳仏典の言語に、それらの「訳者」とされる人物の基礎方言が直接的に反映しているということを保証するものではない。個々の早期漢訳仏典の基礎方言の問題は、その具体的な翻訳の状況——訳場の構成員、役割分担、翻訳過程など——

²⁴³ このような疑問代詞体系の建業方言における史的変遷のパターンが、一人称・二人称代詞体系の史的変遷とのパターンとほぼ平行している点(松江2005など参照)は注意されてよい。但しこのような現象が口語と全く無関係であった可能性も完全には排除できないであろう。漢訳仏典の文体は三世紀以降(特に鳩摩羅什以降)に規範化される傾向をみせるため、上述のような史的変遷は、或いは漢訳佛典が規範化された結果生じたものにすぎない可能性も完全には排除できない。

を踏まえ、さらに具体的な言語現象の分析を行った上で、解決され得るものであろう²⁴⁴。

²⁴⁴ 早期漢訳仏典の「訳者」は、翻訳に携わった複数の人々の代表者のように位置づけられる可能性もある（この観点は、辛嶋静志教授のご教示による）。よって同一の「訳者」により翻訳された複数の漢訳仏典が、異なる言語的特徴を示すことも十分にあり得るだろう。しかしこのことは、ある複数の漢訳仏典が漢語史上の特徴を共有していれば、同一の「訳者」による翻訳の可能性が高いと推定することの合理性を完全に否定するものではない。

第十八章 結び——新形式の「拡散序列」

18.1 全章の総括

本論文 I 部 (第一章～第十四章) では、上中古間に生じた疑問目的語の語順変化について、その変化過程を記述した上で、語順変化のメカニズムを解明することを試みた。第十三章に示したものがその結論である。また、II 部の第十五章から第十七章では、この疑問目的語の語順変化と密接に関連する三種の問題について論じた。第十五章では上古漢語における所謂「格屈折」をめぐる問題につき、研究史を振り返りつつ問題解決の方向性について見通しを述べた。第十六章では上古漢語の否定文における代詞目的語前置現象を取り上げ、その前置現象の生起条件の解明を試みた。第十七章では、三世紀江南で成立した漢訳仏典『六度集経』の疑問代詞体系をとりあげ、その口語性の問題を論じ、併せて上中古間文法史を再構成する際に方言差を考慮することの重要性を指摘した。

本章は、如上の一連の検討を通じて浮かび上がってきた新旧形式の交替過程に関わる理論的問題の存在を指摘し、今後の本格的な研究の必要性を提起することで、本論文の結びとするものである。

18.2 疑問代詞・疑問フレーズの新旧交替における「拡散序列」

18.2.1 機能的条件による拡散序列：純粹疑問から修辭疑問へ

本論文 I 部は疑問目的語の語順変化を論じたものである。その際、多くの疑問代詞・疑問フレーズ、および疑問構文の新旧形式の交替過程について記述を行った。そこで浮かび上がってきたのは、新旧のこれらの形式が交替する際、まず純粹疑問を表す用法に新形式が生起し、修辭疑問を表す用法に旧形式が残存するという一般的な傾向である。このような傾向が存在すること自体は、漢語史研究者にとって或いは経験的に常識に属することかもしれない。しかしこの傾向を正面から取り上げ、当該の傾向の一般性の程度、例外の出現条件、他の言語学的条件との関連性といった問題について、包括的に論じられることはほとんどなかったのではないだろうか。以下、本章では、本論文で触れた疑問代詞・疑問フレーズ、疑問構成を題材として、この問題についての初歩的な記述を試みたい。

18.2.1.1 修飾語位置における疑問代詞・疑問フレーズの新旧形式交替

本論文でも幾度も言及したように、上中古間においては、疑問代詞・疑問フレーズが単音節形式から複音節形式へと取り替わるという変化が生じた。修飾語位置 (連用修飾語および連体修飾語の位置) のこれらの形式についても同様であるが、この時、まず純粹疑問を表す用法において、「何」などの単音節形式から「何故」「何等」などの複音節形式への交替が進行し、修辭疑問を表す用法においてはこの交替の進行が遅れる、という変化の拡散に関わる

序列性ないし順次性がみとめられる。この現象は、複音節化が一定程度進展した中古期の文献における共時的状況を精査することにより、確認することができる。【図表 18-1A】は、中古文献の修飾語位置の疑問代詞・疑問フレーズについて、音節数を基準に分類し、その疑問機能との対応関係を示したものである。

【図表 18-1A：修飾語位置における単・複音節形式の疑問代詞・疑問フレーズの出現頻度】

疑問代詞・疑問 フレーズ	連用修飾語				連体修飾語			
	純粹疑問		修辭疑問		純粹疑問		修辭疑問	
	複音節	単音節	複音節	単音節	複音節	単音節	複音節	単音節
中本起經	12	3	2	15	1	20	0	1
六度集經	12	8	6	27	0	46	0	17
雜寶藏經	87	1	40	15	3	100	1	2
過去現在因果經	30	1	40	4	8	29	0	2
世說新語	78	5	50	65	8	22	0	7

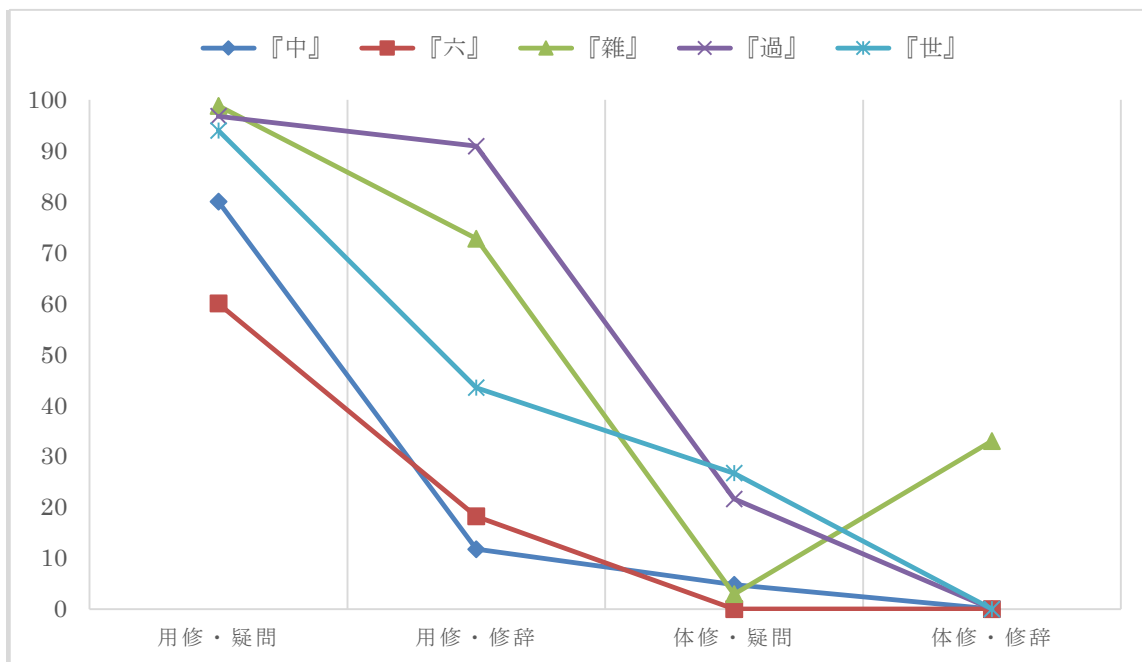
*表中の数字は、当該の統語成分（連用修飾語／連体修飾語）および各用法（純粹疑問／修辭疑問）を担う疑問代詞・疑問フレーズ（単音節／複音節）の用例数。

【図表 18-1A】から、修飾語位置については、新形式たる複音節の疑問代詞・疑問フレーズが勢力を拡大する際、まず、純粹疑問用法において単音節形式に取り替わり、修辭疑問用法ではその勢力拡大が遅れるという、新形式の言語体系内での拡散に関する序列性・順次性——これをかりに「拡散序列」と称する——が見出されることが知られる。この複音節疑問代詞・疑問フレーズに関する拡散序列は、「純粹疑問用法→修辭疑問用法」のように表記することができよう。そしてこの拡散序列は、連体修飾語よりも連用修飾語位置の方に明確に認められる。以上を総合すると、疑問代詞・疑問フレーズの複音節化には、①連用修飾語・純粹疑問用法→②連用修飾語・修辭疑問用法→③連体修飾語・純粹疑問用法→④連体修飾語・修辭疑問用法、という拡散序列が見いだされることになる。この序列をグラフとして示したものが【図表 18-1B】であり、ここから①から④の順に複音節形式が減少することが確認される²⁴⁵。そしてそれと同時に、三世の言語を反映する『中本起經』『六度集經』よりも、

²⁴⁵ 修飾語位置にある疑問代詞・疑問フレーズの「①連用修飾語・純粹疑問用法→②連用修飾語・修辭疑問用法→③連体修飾語・純粹疑問用法→④連体修飾語・修辭疑問用法」という新形式の拡散序列に関しては、本論文で扱った五文献のうち、『雜寶藏經』のみが修辭用法において複音節形式の占める割合が相対的に高く、上記③→④の例外となっている（【図表 18-1B】参照）。ただし、この『雜寶藏經』における連体修飾語・修辭疑問（④）の用例は全部で3例しかなく、そのうちの1例が複音節であるために、複音節が大きな比率を占めるに至っていることは注意を要する。そして当該の例外は「何等」の用例であり（用例(18-4)）、この疑問代詞は上古後期（前漢）に出現したものであり（本論文 12.1.1 参照）、多くの複音節疑問代詞が中古以降に出現したのに比べ、出現時期が相対的に早いことが関係している可能性が高い。

主に五世紀の言語を反映する『雑宝蔵經』『過去現在因果經』『世説新語』の方が（ただし『世説新語』はそれ以前に成立した文献言語の影響を強く受けている）、相対的に複音節化が進展していることも看取される。

【図表 18-1B：修飾語位置の疑問代詞・疑問フレーズにおける複音節形式の割合】



* 図表の縦軸は当該の統語成分（連用修飾語／連体修飾語）および各用法（純粹疑問／修辭疑問）を担う疑問代詞・疑問フレーズのなかで、複音節形式が占める割合（百分率）。横軸は、疑問代詞・疑問フレーズが担う統語成分（連用修飾語／連体修飾語）および用法（純粹疑問用法／修辭疑問用法）の類型。

* 図表における略称は以下の通り。

- ・ 言語資料：『中』＝『中本起經』、『六』＝『六度集經』、『雑』＝『雑宝蔵經』、『過』＝『過去現在因果經』、『世』＝『世説新語』。
- ・ 文法用語：用修＝連用修飾語、体修＝連体修飾語、疑問＝純粹疑問、修辭＝修辭疑問

以下は、連用修飾語・連体修飾語位置における複音節形式の用例である。

(18-1) 王意不悟，猶嗤此言，復謂*末 [大正藏本、元本「未」] 利：「瞿曇何故正作此語。」夫人白王：「欲啟一事，願見採省。」（『中本起經』 4-160b）

[複音節疑問代詞・連用修飾語・純粹疑問]

[王は心が醒めることなく、やはりその言葉（＝恩愛が憂いや悲しみをもたらすだけでなく、相手を殺すことにもなり得る、という仏の言葉）を嘲笑して、末利に言った「瞿曇はどうして選りに選ってそんなことを言ったのか。」夫人は王に言上した「申し上げたいことが一つございます。お分かりいただければ幸いです。】

(18-2) 于時太子答車匿言：「我違父母，及捨國土，遠來在此，爲求至道。云何當復受此餉耶。」(『過去現在因果經』3-639a)

[複音節疑問代詞・連用修飾語・修辭疑問(反語)]

[そこで太子は匿言に答えて言った「私は父母に背き、国土を捨て、はるかこの地に来たのは、至道を求めるためである。どうしてその食糧を受け取ることができようか。」]

(18-3) 君章云：「不審公謂謝尚何似人。」桓公曰：「仁祖是勝我許人。」(『世説新語』「規箴」2-671)

[複音節疑問代詞・連体修飾語・純粹疑問]

[羅君章(=羅含)が(桓温に)言った「あなたは謝尚をどのような人だとお考えでしょうか。」桓公(=桓温)は言った「謝仁祖は我々より優秀な人だ。」]

(18-4) 女人答言：「女人還在*女[三本「汝」]前而裸小便，有何等恥。一國都是女人，大力士是男子耳。若於彼前，應當慚愧，於汝等前，有何羞恥。」(『雜寶藏經』4-487a)

[複音節疑問代詞・連体修飾語・修辭疑問(反語)]

[その女は答えて言った「女が女の前で裸になって小便をしたところで、どんな恥がありますでしょうか。國中ことごとく女で、あの大力士だけが男なのですから。もしあの人の前であれば、恥すべきでしょうが、あなたたちの前でどんな恥辱があるのでしょうか。」]

上述の【図表 18-1A】【図表 18-1B】は、修飾語位置の疑問代詞・疑問フレーズについて、単音節形式／複音節形式という音節数を基準として、新旧形式交替の拡散序列の状況を示したものであった。以下においては、疑問代詞・疑問フレーズからなる各種の疑問形構文についても、この拡散序列が見出されることを指摘する。

18.2.1.2 疑問構文の新旧形式交替

新形式の勢力拡大に関して「純粹疑問用法→修辭疑問用法」という拡散序列がみられるのは、上述の修飾語位置の複音節形式の疑問代詞・疑問フレーズに限らず、疑問代詞からなる各種の疑問構文でも同様である。「誰(…)+者」構造、「孰(…)+者」構造、「何如」構文を例に確認してみたい。

「誰(…)+者」構造は上古後期に出現したが、出現初期には純粹疑問のみに用いられる(本論文 9.2.2、用例(9-67)～(9-69)参照、用例(18-5)=(9-67))。

(18-5) 廷尉以貫高事辭聞，上曰：「壯士。誰知者，以私問之。」中大夫泄公曰：「臣之邑子，素知之。此固趙國立名義不侵為然諾者也。」(『史記(秦漢部分)』「張耳陳餘列傳」2584)

[廷尉が貫高の様子や言葉を報告した。高祖は言った「まさに壮士である。彼を知

っているのは誰か。私的な関係によって彼に問うのだ。」中大夫の泄公が言った。
「私の同郷人です。平素より存じております。彼はもともと趙国で名誉・道義を重んじ、諾言に背くことのない人物でした。』」

「孰(…)者」構造は、中古初期に出現したが、出現初期にはやはり純粹疑問のみに用いられる（本論文 17.4.4.1、用例(17-21)(17-22)参照、用例(18-6)=(17-21)）。

- (18-6) 王即募曰：「孰能*襁 [三本、金剛寺本「攘」] 斯禍者，妻以月光，育以*元 [大正本「原」，三本、金本に拠る] 福。」（『六度集經』（A部分）3-47a）
〔王は（智者を）募って言った「この災難をうち払い得るものは誰か。（その者には）月光を娶らせ、この上ない幸福を享受させよう。』〕

「何如」構文も、中古初期に新出した比較を表す疑問構文であるが、出現初期の用例はいずれも純粹疑問である。

- (18-7) 又告五人：「汝觀*吾 [三本、金剛寺本「我」] 身，何如樹下。」五人答佛：「爾時憔悴，今更光澤。…」（『中本起經』4-148a）
〔（仏は）さらに五人に言った「お前たち、私の様子をみるに、（鹿園の）木の下（に居た時）と比べてどうであるか。」五人は仏に答えた「あの時は憔悴していたのに、今は光り輝やくようです。…』〕
- (18-8) 即隨彌勒，往僧坊中，問上座言：「有人得金滿十萬斤，何如歡喜聽人說法。」（『雜寶藏經』4-470b）
〔（真珠裝飾品の着付け師は）すぐに彌勒に従って僧坊のなかへ行くと、上座和尚にたずねた「金十万を得た人がいたとして、歡喜して説法を聞くのと（比べると）、どうでありましょうか。』〕

以上は、新形式が純粹疑問用法に偏る現象であるが、旧形式が修辭疑問用法のみに残存する現象も確認される。例えば「/何/-X+之+V」という疑問フレーズからなる統語形式は、上古中期以前では純粹疑問にも修辭疑問にも用いられたが、上古後期の『史記』では修辭疑問専用の構文となっている（本論文 11.2.1、用例(11-6)～(11-11)参照。用例(18-9)=(11-8)）。一方、同時期には、「V+/何/-Xo」という後置語順の新形式が出現しており、これは純粹疑問に用いられている（用例(11-12)(11-13)参照。用例(18-10)=(11-13)）。

- (18-9) 趙高曰：「人臣當憂死而不暇，何變之得謀。」（『史記』（秦漢部分）「李斯列伝」2553）
〔趙高は（二世皇帝に）言った「臣下たちは（自らの）死を心配することだけでい

とまがない状況でありますのに、どんな反乱を謀ることができましょうか。」]

(18-10) 二年，東擊項籍而還入關，問：「故秦時上帝祠何帝也。」對曰：「四帝，有白、青、黃、赤帝之祠。」(『史記』(秦漢部分)「封禪書」1378)

〔(漢高祖)二年、(高祖は)東進して項籍を撃つと、戻って関中に入り、(臣下に)たずねた「昔、秦の時代、上帝としてどのような天帝を祭ったのか。」(臣下は)答えて言った「四帝で、白帝、青帝、黄帝、赤帝の祠があります。〕

この他、中古の『六度集経』における単独で出現した、〈十人〉を指す「孰」(「孰…者」構造以外に生じた「孰」、本論文 17.4.4.1 用例(17-23)~(17-25))、上古中期の『左伝』『国語』における主語としての「誰」(本論文 9.1.2.2、用例(9-55)(9-56)参照)なども、旧形式が修辭疑問用法のみに残存した例である可能性が高い。

以上、疑問代詞・疑問フレーズ、或いは疑問代詞から構成される疑問構文に関して、「純粹疑問用法→修辭疑問用法」という「拡散序列」がみられるということを確認した²⁴⁶。

18.2.2 統語的条件による拡散序列：連用修飾語から連体修飾語へ

上述の「純粹疑問→修辭疑問」という機能的条件による拡散序列は、原則的にはすべての疑問代詞・疑問フレーズに関わるものであるが、このような拡散序列以外に、統語的条件による拡散序列もみとめられる。すなわち 18.2.1 で触れた修飾語位置の疑問代詞・疑問フレーズの複音節化現象について、「連用修飾語→連体修飾語」という拡散序列をも明確にみとめられるのである(本論文 18.2.1.1 【図表 18-1A】【図表 18-1B】参照)。

この「連用修飾語→連体修飾語」という統語的条件による拡散序列を生ぜしめた要因は必ずしも明確ではない。敢えて推測を述べれば、当該の疑問代詞・疑問フレーズが位置する統語的階層の高低と関わっている可能性がある。疑問代詞・疑問フレーズが連体修飾語となる場合、その大多数が動詞目的語を修飾する統語的位置にあり、連用修飾語となる場合、その大多数が動詞句全体を修飾する統語的位置にある。階層構造における位置からみると、前者は相対的に低く、後者は相対的に高い。古代漢語の場合、統語関係を表す構造助詞が現代漢語に比べ未発達であり、階層構造の低い位置に複雑な構造を許容すれば、当該の文に統語的曖昧性が生ずる可能性が高くなるため、連体修飾語位置に相対的に複雑な構造物である複音節疑問代詞・疑問フレーズが置かれることが回避される傾向があつたのかもしれない。こ

²⁴⁶ この「純粹疑問用法→修辭疑問用法」という拡散序列を生ぜしめた要因については、現段階では不明とせざるを得ない。ただ、前者は機能的には無標的であり、後者は有標的であることは確認されてよいであろう。なお、疑問数詞の生成については、松江(2019)が、疑問数詞「多少」の生成過程を論じており、元来は不定数量を表していた「多少」が、疑問の語気を帯びたコンテキストに頻出することにより、まず自問疑問文・間接疑問文などの話し手の〈疑念〉を表す疑問文に現れるようになり、その数世紀後に聞き手に直接問いかける〈質問〉機能をも獲得し、疑問数詞へと変化したと主張している。これが事実であれば、「不定→純粹疑問」という経路を経て、新たな疑問数詞が生成されたことになる。疑問数詞・代詞の生成・衰退の過程における疑問機能の変化のメカニズムについては、今後の研究による解明が俟たれる。

のような統語的条件による拡散序列についても、今後の本格的な研究が俟たれる。

18.2.3 言語的変異成分

本論文 18.2.1.1 に掲げた【図表 18-1A】【図表 18-1B】からは、拡散序列以外にも、歴史言語学の点から興味深い現象が見出される。それは『世説新語』と『過去現在因果経』という成書時期がほぼ重なり、いずれも南朝において成立した文献に着目すると、両者の連用修飾語・修辭疑問用法における複音節形式のしめる割合に大きな差異が存在するというのである。『世説新語』と『過去現在因果経』とでは、文体的価値の面で後者の方が相対的に口語性が強い。そのため、両者の連用修飾語・修辭疑問用法における複音節形式の占める割合の顕著な違いは、文体的価値の相違によりもたらされた可能性があると考ええる。つまり、五世紀南朝の言語共同体(speech community)においては、連用修飾語・修辭疑問用法を担う複音節疑問代詞・疑問フレーズが極めて口語的な言語成分であったため、より口語的な『過去現在因果経』に頻出することになったのではないかということである。仮にこの解釈が成り立つのであれば、文体(style)によりその生起が規則的に制限されるという点で、五世紀南朝の連用修飾語・修辭疑問用法を担う複音節疑問代詞・疑問フレーズは、Weinreich, Labov and Herzog (1968:166-183)が言うところの言語的変異成分 (linguistic variable) に相当するものであったとみなし得るのではないだろうか。

ただし、以上の観点は絶対的なものではない。『過去現在因果経』における連用修飾語位置・修辭問用法の複音節疑問代詞・疑問フレーズは、原典言語の影響を強く受けた漢訳仏典において見かけ上増加したにすぎず、五世紀南朝の言語共同体において連用修飾語となった修辭疑問用法の複音節疑問代詞・疑問フレーズが実際に勢力を増しつつあったわけではない、といった可能性も否定できないからである。『過去現在因果経』における連用修飾語・修辭問用法の複音節疑問代詞の多くは「云何」であるが、漢訳仏典における「云何」は、用法上、サンスクリットの *kim* の影響を受けているとの指摘もある (遇笑容 2003 など)。この点については、原典言語との対照研究による解明が必要である。今後の課題としておきたい。

参考文献目録

[言語資料]

- ・「*」を付したものは、本論文で底本として採用した版本。
(上古資料)
- ・(甲骨文)*: 郭沫若主編・胡厚宣總編輯・中国社会科学院歴史研究所編『甲骨文合集』(第1冊-第13冊). 北京: 中華書局, 1977-1982年.
- ・(金文類)*: 中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』(修訂增補本)(全8冊). 北京: 中華書局, 2007年.
- ・(金文類): 高澤浩一編『近出殷周金文考釈』(二松学舎大学学術叢書)(第一集~第四集). 東京: 研文出版, 2012~2015年.
- ・易經*: 十三經注疏整理委員會整理『周易正義』(十三經注疏整理本). 北京: 北京大学出版社, 2000年.
- ・書經*: 『尚書校詁』. 北京: 雒江生中華書局, 2018年.
- ・書經: 十三經注疏整理委員會整理『尚書正義』(十三經注疏整理本). 北京: 北京大学出版社, 2000年.
- ・詩經*: 王先謙撰・吳格點校『詩三家義集疏』. 北京: 中華書局, 1987年.
- ・詩經: 十三經注疏整理委員會整理『毛詩正義』(十三經注疏整理本). 北京: 北京大学出版社, 2000年.
- ・逸周書*: 黃懷新・張懋鎔・田旭東『逸周書彙校注』(修訂本)(上・下冊). 上海: 上海古籍出版社, 2007年.
- ・左伝*: 楊伯峻編著『春秋左傳注』(修訂本)(中国古典名著譯注叢書). 北京: 中華書局, 1990年.
- ・論語*: 程樹德撰・程俊英・蔣見元點校『論語集釋』(新編諸子集成第一輯). 北京: 中華書局 1990年.
- ・論語: 十三經注疏整理委員會整理『論語注疏』(十三經注疏整理本). 北京: 北京大学出版社, 2000年.
- ・論語: 河北文物研究所定州漢墓竹簡整理小組『定州漢墓竹簡・論語』. 北京: 文物出版社, 1997年.
- ・論語: 金谷治編『唐寫本鄭氏注論語集成』. 東京: 平凡社, 1978年.
- ・論語: 李方錄校『敦煌《論語集解》校證』(敦煌文獻分類錄校叢書). 南京: 江蘇古籍出版社, 1998年.
- ・孟子*: 焦循撰・沈文倬點校『孟子正義』(新編諸子集成第一輯). 北京: 中華書局, 1987年.

- ・孟子：十三經注疏整理委員會整理『孟子注疏』（十三經注疏整理本）。北京：北京大學出版社，2000年。
- ・老子*：朱謙之撰『老子校釋』（新編諸子集成第一輯）。北京：中華書局，1984年。
- ・老子：高明撰『帛書老子校注』（新編諸子集成）。北京：中華書局，1996年。
- ・老子：國家文物局古文獻研究室編『馬王堆漢墓帛書(壹)』。北京：文物出版社，1980年。
- ・十問*：國家文物局古文獻研究室編『馬王堆漢墓帛書(肆)』。北京：文物出版社，1985年。
- ・晏子春秋*：吳則虞編著『晏子春秋集釋』。北京：中華書局，1962年。
- ・呂氏春秋*：王利器著『呂氏春秋注疏』（第一冊～第四冊）。成都：巴蜀書社，2002年。
- ・國語*：徐元誥・王樹民・沈長雲『國語集解』。北京：中華書局，2002年。
- ・戰國策*：范祥雍箋證・范邦瑾協校『戰國策箋證』（中華要籍集釋叢書）。上海：上海古籍出版社，2008年。
- ・管子*：黎翔鳳撰・梁運華整理『管子校注』（新編諸子集成第一輯）。北京：中華書局，2004年。
- ・莊子*：郭慶藩撰・王孝魚點校『莊子集釋』（新編諸子集成第一輯）。北京：中華書局，1961年。
- ・荀子*：王先謙撰・沈嘯寰・王星賢點校『荀子集解』（新編諸子集成第一輯）。北京：中華書局，1988年。
- ・荀子：王天海校釋『荀子校釋』（中華要籍集釋叢書）。上海：上海古籍出版社，2005年。
- ・韓非子*：陳奇猷校注『韓非子新校注』。上海：上海古籍出版社，2000年。
- ・史記*・漢書*：『史記』『漢書』（二十四史縮印本）。北京：中華書局，1997年。
- ・說文解字*：『說文解字』（附檢字）。北京：中華書局，1963年。
- ・說文解字注*：許惟賢整理『說文解字注』（『段玉裁全集』之一）（上）（下）。南京：鳳凰出版社，2007年。
- ・『戰國縱橫家書』*：馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書[叁]』第一冊～第三冊。北京：文物出版社，1978年。（本論文での引用個所の冊数・頁数は、図版の該当部分ではなく、釈文部分の該当箇所とする。なお、底本の釈文は簡体字であるが、繁体字に変更して引用する。）

(中古資料)

- ・三國志*・晉書*・南史*：『三國志』『晉書』『南史』（二十四史縮印本）。北京：中華書局，1997年。
- ・論衡*：黃暉撰『論衡校釋』（新編諸子集成第一輯）。北京：中華書局，1990年。
- ・搜神記*：李劍國輯校『新輯搜神記・新輯搜神後記』（古體小說叢刊）（上）。中華書局，2007年。
- ・世說新語*：余嘉錫箋疏『世說新語箋疏』。北京：中華書局，1983年。
- ・(仏典類)*：『大正新脩大藏經』。高楠順次郎他。東京：大藏出版社，1924-1934年。

- ・中本起經・六度集經・雜寶藏經：金剛寺本『中本起經』『六度集經』『雜寶藏經』。東京：国際仏教学大学院大学「日本古写経データベース」所収デジタル画像版。
- ・廣韻*：『廣韻』。台北：臺灣中華書局，1987年。

(近古前期資料)

- ・遊仙窟*：築島裕・杉谷正敏・丹治芳男編『醍醐寺蔵本遊仙窟総索引』（古典籍索引叢書13）。東京：汲古書院，1995年。
- ・舜子変*・伍子胥変文*・降魔変文*：黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』。北京：中華書局，1997年。
- ・舜子変・伍子胥変文・降魔変文：北京愛如生數字化技術研究中心『敦煌變文』（拇指數據庫）。(写本画像データ・ベース)
- ・舜子変・伍子胥変文・降魔変文：『法藏敦煌西域文獻』第8冊・第17冊・第22冊。上海：上海古籍出版社，1998年・2001年・2002年。

[研究論著]

[論文]

(日本語)

- ・池上嘉彦 1975. 『意味論』。東京：大修館書店。
- ・池田知久著・馬王堆出土文獻訳注叢書編集委員会編 2006. 『馬王堆出土文獻訳注叢書・老子』。東京：東方書店。
- ・市原靖久 2018. 上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”について. 『中国語学』265, 43-61 頁。
- ・伊藤千賀子 2006. 『六度集經』第 81 話「常悲菩薩本生」と『般若經』の異相一三十二相八十種好を手がかりとして一. 『印度佛教学研究』54(2), 964-959 頁。
- ・牛島徳次 1971. 『漢語文法論・中古編』。東京：大修館書店。
- ・太田辰夫 1958. 『中国語歴史文法』。東京：江南書院。
- ・太田辰夫 1964. 『古典中国語文法』。(出版地不明) 大安；1984. 『古典中国語文法』(改定版)。東京：汲古書院。
- ・太田辰夫 1988. 『中国語史通考』。東京：白帝社。
- ・大西克也 1988. 上古中国語の否定詞“弗”“不”の使い分けについて—批判説の再検討—。『日本中国学会報』40, 232-245 頁。
- ・大西克也 1992a. 殷周時代の一人称代名詞の用法をめぐって——殷周漢語研究の問題点——。『中国語学』239, 115-124 頁。
- ・大西克也 1992b. 出土資料から見た秦漢以前の「若」と「如」について. 『人文研究』(神奈川大学人文学会) 112, 1-39 頁。

- ・大西克也 2003. 古代漢語における地域的差異と相互交流—秦楚の出土資料を中心に—. 『長江流域文化研究所年報』(早稲田大学) 2, 83-103 頁.
- ・大西克也・大櫛敦弘 2015, 馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会(編)『戦国縦横家書』(馬王堆出土文献訳注叢書). 東京: 東方書店.
- ・大原信一・辻井哲男・相浦杲・西田龍男訳 1958.『中国の言語』. 東京: 江南書院. (Karlgren1949の日本語訳)
- ・小方伴子 1997. 古漢語研究における使動用法の扱いについて. 『開篇』 16, 81-98 頁.
- ・丘山新 1983. 漢訳仏典の文体論と翻訳論. 『東洋学術研究』 22(2), 82-96 頁.
- ・丘山新・小川隆・河野訓・中条道昭訳 1992. 『定本・中国仏教史 I』. 東京: 柏書房株式会社. (任繼愈主編 1981 の日本語訳)
- ・尾崎雄二郎 1960. 「吾」「我」の使い分けについて. 『立命館文学』 180 ; 1980. 『中国語音韻史の研究』, 14-27 頁. 東京: 創文社.
- ・影山太郎編 2001. 『日英対照・動詞の意味と構文』. 東京: 大修館書店.
- ・梶浦晋 2004. 金剛寺一切経調査の経緯. 落合俊典『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』(平成 12 年度～平成 15 年度科学研究費補助金・基盤研究(A), (1)研究成果報告書), 9-16 頁.
- ・嘉瀬達男 2005. 諸子としての『史記』——『漢書』成立までの『史記』評価と撰続状況の検討——. 『立命館文学』 590, 1-18 頁.
- ・辛嶋静志 1994. 『『長阿含経』の原語の研究—音写語分析を中心として—』. 東京: 平河出版社.
- ・辛嶋静志 1996. 漢訳仏典の漢語と音写語の問題. 『東アジア社会と仏教文化』, 201-218 頁. 東京: 春秋社.
- ・辛嶋静志 2006. 『佛教漢語詞典』の構想. 京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』, 21-30 頁. 京都: 臨川書店.
- ・辛嶋静志 2007. 漢訳仏典の言語の研究. 『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』 18(10), 445-460 頁.
- ・辛嶋静志・裘雲青訳 2007. 「浮屠」と「佛」再論. 『創価大学・国際仏教高等研究所年報』 18(10), 461-470 頁. (季羨林 1992 の日本語訳)
- ・木村英樹 2002. アメリカにおける中国語文法研究の動向. 『中国語学』 249, 285-306 頁.
- ・木村英樹 2008. 中国語疑問詞の意味機能—属性記述と個体指定—. 『日中言語研究と日本語教育』 創刊号, 12-24 頁.
- ・桑原隲藏 1929. 司馬遷の生年に関する一新説. 『史学研究』 1(1); 1968. 『桑原隲藏全集』 2 (東洋文明史論叢), 235-245 頁. 東京: 岩波書店.
- ・慶谷寿信 1980. 歌・戈・魚・虞・模の音価をめぐって. 『中国語』 7(246), 20-22 頁. 東京: 大修館書店.
- ・慶谷寿信 1997. 歌戈魚虞模古読論争の概略. 『古田敬一教授頌寿記念中国学論集』, 63-82

- 頁. 東京：汲古書院.
- ・工藤元男 1984. 馬王堆出土『戦国縦横家書』と『史記』. 早稲田大学文学部東洋史研究室 (編)『中国正史の基礎的研究』, 1-26 頁. 東京：早稲田大学出版部.
 - ・バーナード・コムリー著・松本克己・山本秀樹訳 1992. 『言語普遍性と言語類型論』. 東京：ひつじ書房. (Comrie1981 の日本語訳)
 - ・清水誠 2012. ゲルマン語類型論から見たドイツ語の語順変化 (1) 一名詞句成分一. 『北大学文学研究科紀要』138, 1-29 頁.
 - ・志村良治 1967. 中古漢語の語法と語彙. 牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編『中国文化叢書・1 言語』, 254-295 頁. 東京：大修館書店.
 - ・志村良治 1984. 『中国中世語法史研究』. 東京：三冬社.
 - ・下地早智子 2000. 日本語と中国語の受身表現について. 『人文学報』311, 75-91 頁.
 - ・白川静 1970. 一八一 毛公鼎. 『白鶴美術館誌』第三〇輯; 『白川静著作集別巻・金文通釈 3 [下]』, 637-700 頁. 東京：平凡社, 2004 年.
 - ・エドゥアール・シャヴァンヌ著・岩村忍訳 1974. 『司馬遷と史記』(新潮選書). 東京：新潮社. (Chavannes1895 の日本語訳)
 - ・鈴木直治 1976. 古代漢語における強調の表現について. 『中国語学』223; 1994. 『中国古代語法の研究』, 68-95 頁. 東京：汲古書院.
 - ・鈴木直治 1987. 「我」「吾」について. 『金沢経済大学論集』21(2)/(3); 1994. 『中国古代語法の研究』, 396-422 頁. 東京：汲古書院, 1994 年.
 - ・藤堂明保 1957. 『中国語音韻論』. 東京：江南書院; 1980. 『中国語音韻論—その歴史的研究—』. 東京：光生館.
 - ・長尾光之 1989. 古中国語の語順変化をめぐる問題—疑問代名詞を中心に—. 『集刊東洋学』62, 37-51 頁.
 - ・西田太郎 1981. 「為」の字の特異な用法. 『漢文教室』138, 23-30 頁.
 - ・西田龍雄 2000. 『東アジア諸言語の研究 I : 巨大言語群—シナ・チベット語族の展望』. 京都：京都大学学術出版会.
 - ・橋本貴子 2004. トルファン出土の難字音注断片に反映されるウイグル漢字音について—ベルリン所蔵の二断片 Ch/U6781 と Ch2369 の分析—. 『外国語研究』(神戸市外国語大学外国学研究所) 58, 17 - 44 頁.
 - ・藤田勝久 1993. 馬王堆出土『戦国縦横家書』について. 佐藤武敏 (監修) 工藤元男・早苗良雄・藤田勝久 (訳注)『戦国縦横家書』, 11-21 頁. 京都：朋友書店.
 - ・船山徹 2013. 『仏典はどう漢訳されたのか—スートラが経典になるとき』. 東京：岩波書店.
 - ・古屋昭弘 1998. 『定州漢墓竹簡・論語』と大西氏の予言. 『開篇』17, 35-38 頁.
 - ・牧田諦亮 1960. 康僧会. 下中邦彦 (編)『アジア歴史事典』3, 272 頁. 東京：平凡社.
 - ・松江崇 1999. 『六度集経』『仏説義足経』における人称代詞の—複数形式上中古間語法

- 史の一側面。『中国語学』246, 11-21 頁。
- ・松江崇 2000. 中古初期二地域における二人称代詞。『人文学報』311, 147-164 頁。
 - ・松江崇 2003. 古漢語における禪母系疑問代詞の語順変化。『北海道大学文学研究科紀要』111, 25-49 頁。
 - ・松江崇 2005. 上古漢語における人称代詞の“格屈折”をめぐる。『饜饕』13, 138-168 頁。
 - ・松江崇 2006. 古漢語における匣母系疑問代詞目的語の語順変化。『東ユーラシア言語研究』1, 117-139 頁。東京：好文出版。
 - ・松江崇 2007. 馮勝利氏の韻律文法理論について——古漢語疑問代詞目的語語順変化についての馮説の検討——。『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』, 100-124 頁。東京：好文出版。
 - ・松江崇 2012. 『六度集経』言語の口語性について一疑問代詞体系を例として。佐藤鍊太郎・鄭吉雄編著『中国古典の解釈と分析』（日本・台湾の学术交流）, 95-126 頁。札幌：北海道大学出版社。（松江 2010 の日本語訳（修正を含む））
 - ・松江崇 2013. 上古中期漢語の否定文における代詞目的語前置現象の生起条件。『木村英樹教授還暦記念・中国語文法論叢』, 474-494 頁。東京：白帝社。
 - ・松江崇 2014. 唐五代における不定名詞目的語の数量表現による有標化——敦煌変文を主資料として。『中国語学』261, 26-45 頁。
 - ・松本克己 2006. 『世界言語への視座—歴史言語学と言語類型論—』。東京：三省堂。
 - ・宮崎展昌 2007. 『阿闍世王経』(T626)の漢訳について。『印度哲学仏教学研究』14, 57-71 頁。
 - ・山崎直樹 1991. 『左伝』における“吾”“我”による格表示の分裂の条件。『中国語学』238, 106-114 頁。
 - ・吉川幸次郎 1962 『漢文の話』。東京：筑摩書房；1986. 『漢文の話』ちくま文庫。
 - ・U. ワインライクほか著・山口秀夫編訳補説 1982. 『言語史要理』（ワインライク・ラボヴ・ハーゾグの理論）. 95-188 頁。東京：大修館書店。（Weinreich, U., Labov, W. and Herzog, M. I. 1968 の日本語訳）

(中国語)

- ・白平 1996. 談《左傳》中的三種“何…之…”式。『中國語文』1996(2), 145-146 頁。
- ・貝羅貝・吳福祥 2000. 上古漢語疑問代詞的發展與演變。『中國語文』4, 311-326 頁。
- ・曹小雲 2001. 《六度集経》語詞札記。『語言研究』2001(4), 76-82 頁。
- ・陳文芷 1981. 談重音。『中國語學』228, 126-133 頁。
- ・陳昭容 1992. 先秦古文字材料中所見的第一人称代詞。『中國文字』新 16(4), 181-218 頁。
- ・程湘清 1992. 《世說新語》復音詞研究。『魏晉南北朝漢語研究』, 1-85 頁。濟南：山東教育出版社。
- ・儲泰松 1998. 梵漢對音與中古漢語研究。『古漢語研究』1998(1), 45-52 頁。

- 崔宰榮 2001. 漢語“吃喝”語義場的歷史演變. 『語言學論叢』24, 151-190 頁.
- 慈怡主編 1988. 『佛光大辭典』. 高雄: 佛光出版社; 2004. 北京: 北京圖書館出版社.
- 大西克也 2004. 施受同辭芻議——《史記》中的“中性動詞”和“作格動詞”. *Meaning and Form: Essays in Pre-Modern Chinese Grammar* (意義與形式—古漢語語法論文集). Ken-ichi Takashima & Jiang Shaoyu (eds.). 375-394. München: LINCOM.
- 大西克也 2005. 「人之所畏, 不可不畏」和「人之所畏, 亦不可以不畏人」——從語法的角度來品論郭店『老子』乙本 5 號簡的斷句和含義. 『第二屆儒道國際學術研討會—兩漢論文集』, 151-165 頁. 台北: 臺灣國立師範大學.
- 大西克也 2019. 論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能. 『歷史語言學研究』13, 269-283 頁.
- 丁邦新 1975. 論語、孟子、及詩經中並列語成份之間的聲調關係. 『中央研究院歷史語言研究所集刊』47, 17-52 頁. 台北: 中央研究院歷史語言研究所.
- 丁邦新 1997. 漢語詞序問題札記. 『中國境內語言暨語言學』4 (中央研究院歷史語言研究所會議論文之二), 155-162 頁. 台北: 中央研究院歷史語言研究所.
- 丁聲樹 1935. 釋否定詞‘弗’‘不’. 『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』(下冊)(中央研究院歷史語言研究所集刊外編第一種), 967-996 頁. 台北: 中央研究院歷史語言研究所.
- 丁喜霞 2006. 『中古常用並列雙音詞的成詞演變研究』. 北京: 語文出版社.
- 董同龢 1948. 上古音韻表稿. 『中央研究院歷史語言研究所集刊』18, 1-249 頁. 台北: 中央研究院歷史語言研究所.
- 董秀芳 2002. 『詞彙化: 漢語雙音詞的衍生和發展』. 成都: 四川民族出版社.
- 方立天 1988. 『中國佛教與傳統文化』. 上海, 上海人民出版社.
- 方一新·王雲路 1993. 『中古漢語讀本』. 長春: 吉林教育出版社; 2006. 『中古漢語讀本』(修訂本). 上海: 上海教育出版社.
- 方一新 1996. 東漢語料與詞彙史研究芻議. 『中國語文』1996(2), 140-144 頁.
- 馮春田 1992. 魏晉南北朝時期某些語法問題探究. 程湘清(主編)『魏晉南北朝漢語研究』, 179-239 頁. 濟南: 山東大學出版社.
- 馮利(馮勝利) 1994. 論上古漢語的重音轉移與賓語後置. 『語言研究』1994(1), 79-93 頁.
- 馮勝利 1997. 『漢語的韻律、詞法與句法』. 北京: 北京大學出版社.
- 馮勝利 1998. 論漢語的自然音步. 『中國語文』1998(1), 40-47 頁.
- 馮勝利 2000. 『漢語韻律句法學』(中國當代語言學叢書). 上海: 上海教育出版社.
- 馮勝利 2005. 『漢語韻律語法研究』(語言學前沿叢書). 北京: 北京大學出版社.
- 傅京起·徐丹 2009. SVO 語言裏的賓語前置. 『民族語言』2009(3), 3-15 頁.
- 耿振生 2004. 『20 世紀漢語音韻學方法論』. 北京: 北京大學出版社.
- 顧頡剛 1926. 論今文尚書著作時代書. 『古史辨』第一冊; 1982. 『古史辨』第一冊. 200-206 頁, 上海: 上海古籍出版社.
- 郭錫良 1994. 遠古漢語的句法結構. 『古漢語研究』1994(增刊 S1), 13-21 頁.

- 郭錫良 1986. 『漢字古音手冊』. 北京: 北京大學出版社.
- 郭錫良 1992. 漢語歷代書面語和口語的關係. 『程千帆先生八十壽辰紀念文集』. 南京: 江蘇古籍出版社; 2005. 『漢語史論集』(增補本), 606-618 頁. 北京: 商務印書館.
- 郭錫良 2007. 『古代漢語語法講稿』. 北京: 語言出版社.
- 關鍵 1987. 《世說新語》的疑問句. 『鞍山師專學報』1987(3), 73-91 頁.
- 管錫華 2000. 從《史記》看同義詞“孰”“誰”在上古的發展演變. 『古漢語研究』2000(2), 85-90 頁.
- 何樂士 1988. 《左傳》中的“何”字, 張之強·許嘉璐編『古漢語論集』2. 長沙: 湖南教育出版社; 2004. 《左傳》的“何”. 何樂士『左傳虛詞研究』(修訂本), 265-304 頁. 北京: 商務印書館.
- 何樂士 1992. 《史記》語法特點研究. 『兩漢漢語研究』, 1-261 頁. 濟南: 山東教育出版社.
- 胡敕瑞 2002. 『《論衡》與東漢佛典詞語比較研究』. 成都: 巴蜀書社.
- 胡適 1917a. 爾汝篇. 『留美學生季報』春季 1; 1998. 歐陽哲生編『胡適文集 2·胡適文存』, 172-175 頁. 北京: 北京大學出版社.
- 胡適 1917b. 吾我篇. 『留美學生季報』春季 1; 1998. 歐陽哲生編『胡適文集 2·胡適文存』, 176-179 頁. 北京: 北京大學出版社.
- 荒見泰史 2010. 『敦煌變文寫本的研究』. 北京: 中華書局.
- 黃景欣 1958. 秦漢以前古漢語中的否定詞“弗”“不”研究. 『語言研究』3, 1-23 頁.
- 黃盛璋 1963. 古漢語人身代詞研究. 『中國語文』1963(6), 443-472 頁.
- 黃志強·楊劍橋 1990. 論漢語詞雙音節化的原因. 『復旦學報』(社會科學版)1990(1), 98-101 頁.
- 李學勤.1995/2007. 序言. 黃懷新·張懋鎔·田旭東『逸周書彙校注(修訂本)』(上冊), 2-3 頁. 上海: 上海古籍出版社.
- 季羨林 1948. 浮屠與佛. 『中央研究院歷史語言研究所集刊』20(上), 93-105 頁.
- 季羨林 1957. 論梵文 的音譯. 『中印文化關係史論叢』, 31-74 頁. 北京: 人民出版社; 1996. 『季羨林文集』4, 12-53 頁. 南昌: 江西教育出版社. |
- 季羨林 1992. 再談浮屠與佛. 『中華文學學報』1992(5), 19-30 頁. 台北: 中華佛學研究所; 1998. 『季羨林文集』7, 345-360 頁. 南昌: 江西教育出版社.
- 賈齊華 2003. 疑問句尾的“為”詞性演變探略. 『中國語文』1979(6), 449-455 頁.
- 江藍生·曹廣順 1997. 『唐五代語言詞典』. 上海: 上海教育出版社.
- 蔣紹愚 1989. 『古漢語詞彙綱要』. 北京: 北京大學出版社.
- 蔣紹愚 2001. 『世說新語』『齊民要術』『洛陽伽藍記』『賢愚經』『百喻經』中的“已”“竟”“訖”“畢”. 『語言研究』2001(1); 2005. 朱慶之編『中古漢語研究』(二), 309-321 頁. 北京: 商務印書館.
- 蔣紹愚 2007. 語言接觸的一個案例——再談“V(O)已”. 『語言學論叢』36; 20013. 蔣紹愚·胡敕瑞主編『漢譯佛典語法研究論文集』, 271-287 頁. 北京: 商務印書館.

- Karlgren, Bernhard 著・馮承鈞譯 1929. 原始中國語為變化語說. 『東方雜誌』5. 77-89 頁. (Karlgrén1920 の中国語訳)
- Kennedy, G. A (金守拙) 著・李保均譯 1956. 再論吾我. 『中央研究院歷史語言研究所集刊』28 (上), 273-281 頁.
- 李方桂 1971. 上古音研究. 『清華學報』9(1)/(2); 1980. 『上古音研究』. 北京: 商務印書館.
- 李維琦 1993. 『佛教釋詞』. 長沙: 岳麓書社.
- 李焯 2011. 『早期漢譯佛經的來源與翻譯方法初探』. 北京: 中華書局.
- 李佐豐 2002. 上古漢語的“也”, “矣”, “焉”. 『上古漢語語法研究』, 223-254 頁. 北京: 北京廣播學院出版社.
- 李宗江 2004. “完成”類動詞的語義差別及其演變方向. 『語言學論叢』30, 147-168 頁.
- 李佐豐 1983. 先秦漢語的自動詞及其使動用法. 『語言學論叢』10, 117-144 頁; 2002. 『上古漢語語法研究』, 142-172 頁. 北京: 北京廣播學院出版社.
- 李佐豐 1994a. 『文言實詞』. 北京: 語文出版社.
- 李佐豐 1994b. 先秦的不及物動詞和及物動詞. 『中國語文』1994(4); 2002. 『上古漢語語法研究』, 194-214 頁. 北京: 北京廣播學院出版社.
- 梁曉紅 1990. 『六度集經』語詞札記. 『古漢語研究』1990(3), 27-31 頁.
- 梁曉虹・徐時儀・陳五雲 2005. 『佛經音義與漢語詞匯研究』. 北京: 商務印書館.
- 梁麗玲 1998. 『《雜寶藏經》及其故事研究』(中華佛學研究所論叢 15). 台北: 法鼓文化出版社.
- 梁麗玲 2002. 『《賢愚經》研究』(中華佛學研究所論叢 34). 台北: 法鼓文化事業股份有限公司.
- 劉承慧 2003. 古漢語實詞的複合化. 何大安主編『古今通塞: 漢語的歷史與發展』, 107-139 頁. 台北: 中央研究院語言學研究所.
- 柳士鎮 1992. 『魏晉南北朝歷史語法』. 南京: 南京大學出版社.
- 盧烈紅 2005. 佛教文獻中“何”系疑問代詞的興替演變. 『語言學論叢』31, 242-264 頁.
- 陸儉明 2002. 漢語句法研究的新思考. 『語言學論叢』26, 263-279 頁.
- 呂東蘭 1998. 從《史記》《金瓶梅》等看漢語“觀看”語義場的歷史演變. 『語言學論叢』21, 143-173 頁.
- 呂叔湘 1941. 論毋與勿; 1955. 『漢語語法論文集』. 北京: 科學出版社; 2002. 『呂叔湘全集』2 (漢語語法論文集), 69-97 頁. 瀋陽: 遼寧教育出版社.
- 呂叔湘 1944. 『中国文法要略』. 北京: 商務印書館; 1990. 『呂叔湘文集』1. 北京: 商務印書館.
- 羅炳良 2005. 范曄『後漢書』紀傳與司馬彪『續漢書』志分合考辨. 『華中科技大學學報』(社會科學版) 2005(4), 101-107 頁.
- 羅常培・周祖謨 1958. 『漢魏晉南北朝韻部演變研究』1. 北京: 科學出版社.
- 馬建忠 1898. 『馬氏文通』. 上海: 商務印書館; 1983. 『馬氏文通』(商務印書館文庫). 北

京：商務印書館。

- 馬慶株 1988. 自主動詞和非自主動詞. 『中國語言學報』3, 157-180 頁; 2002. 《著名中年語言學家自選集·馬慶株卷》, 160-191 頁. 合肥：安徽教育出版社.
- 馬祖毅等 2006. 『中國翻譯通史』(古代部分). 武漢：湖北教育出版社.
- 梅廣 2003. 迎接一個考證學和語言學結合的漢語語法史研究新局面. 『古今通塞·漢語的歷史與發展』, 23-47 頁. 台北：中央研究院語言學研究所.
- 梅祖麟 1983. 跟見系字諧聲的照三系字. 『中國語言學報』1, 114-126 頁.
- 梅祖麟 1997. 漢語七個類型特徵的來源. 鄭秋豫編輯『中國境內的語言暨語言學』4(中央研究院歷史研究所會議論文集之二), 81-103 頁. 台北：中央研究院歷史研究所.
- 梅祖麟 1999. 先秦兩漢的一種完成貌句式——兼論現代漢語完成貌句式的來源 『中國語文』1999(4), 284-294 頁.
- 南開大學中文系語言學教研組 1960. 『古代漢語讀本』. 北京：人民教育出版社.
- 潘悟雲 2001. 上古指代詞得強調式和弱化式. 『語言問題的再認識』; 2002. 『著名中年語言學者自選集潘悟雲卷』, 293-311 頁. 合肥：安徽教育出版社.
- 平田昌司 1994. 略論唐以前的佛經對音. *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*. eds. Hajime Kitamura, Tatsuo Nishida and Yasuhiko Nagano, The Organizing Committee, The 26th International Conference On Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 144-150. Osaka. 2009. 朱慶之編《佛教漢語研究》, 211-222 頁. 北京：商務印書館.
- 齊航福 2015. 『殷墟甲骨文賓語語序研究』. 上海：中西書局.
- 漆權 1997. 《史記》中的人稱代詞. 『語言學論叢』12, 171-193 頁.
- 裘錫圭 1979. 談談古文字資料對古漢語研究的重要性. 『中國語文』1979(6), 437-442 頁·458 頁.
- 裘錫圭 1981. 談談地下材料在先秦秦漢古籍整理工作中的作用. 『古籍整理出版情況簡報』1981(6); 1992. 『古代文史研究新探』, 45-60 頁, 南京：江蘇古籍出版社.
- 任繼愈主編 1981. 『中國佛教史』(第一卷). 北京：中國社會科學出版社.
- 杉田泰史 1993. 《論語》的第一人稱代詞‘吾’與‘我’的區別, 《古漢語研究》1993(4), 27-32 頁.
- 沈家煊 1995. “有界”與“無界”. 『中國語文』1995(5), 367-379 頁.
- 石鏡 1997. 論疑問詞“何”的功能滲透. 『古漢語研究』1997(4), 89-95 頁.
- 松江崇 2006. 上古中期禪母系疑問代詞系統中句法分佈的互補現象. 『漢語史學報』6, 71-89 頁.
- 松江崇 2009. 也談早期漢譯佛典語言在上中古間語法史上的價值. 『漢語史學報』8, 114-133 頁; 2010. 早期漢譯佛典言語の上中古間漢語文法史資料としての価値. 『饕餮』18, 112-141 頁.
- 松江崇 2010. 略談《六度集經》語言的口語性——以疑問代詞系統為例. 鄭吉雄·佐藤鍊太郎主編『臺日學者論經典詮釋中的語文分析』, 129-166 頁. 台北：臺灣學生書局.

- 松江崇 2006. 漢代方言中的同言線束——也談根據方言的方言區劃論. 華學誠匯證·王智群·謝榮娥·王彩琴協編『揚雄方言校釋匯證』(下), 1509-1533 頁. 北京: 中華書局.
- 松江崇 2015. 談《舊雜譬喻經》在佛教漢語發展史上的定位. 『中文學術前沿』8, 44-53 頁.
- 松江崇 2019. 漢語疑問數詞“多少”的生成機制—兼談中古疑問數詞系統的複雜性. 『中國語言文學研究』2019 年春之卷(總第 25 卷), 6-17 頁.
- 宋亞雲 2006. 漢語從綜合到分析的發展趨勢以其原因初探. 『語言學論叢』33, 66-102 頁.
- 宋祚胤 2000. 『周易』. 長沙: 岳麓書社.
- 孫朝奮·彭睿 2005. 從句法、語義和語用的界面來看漢語句子融合和動詞虛化. 『漢語史學報』5, 50-63 頁.
- 孫宏開 1982. 『獨龍語簡志』(中國少數民族語言簡直志叢書). 北京: 民族出版社.
- 孫良明 1998. “何 P 之 V” 補說. 『古漢語研究』1988(1), 12-14 頁.
- 孫錫信·楊永龍 2014. 『中古近代漢語語法研究述要』. 上海: 復旦大學出版社.
- 湯可敬主編·匡裕群·朱維德編 1992. 『古代漢語』(上). 北京: 北京出版社.
- 萬金川 2006. [補記]『金剛經·笈多譯本』的語言景觀—以「法會因由分」為例. 「漢訳仏典の言語の諸相 (Aspects of the Language of Buddhist Translations) 研討會」(2006.11.11-13 於日本創價大學) 提出論文.
- 汪啟明 2003. 古漢語語法漫談. 『漢小學文獻語言研究叢稿』, 228-290 頁. 成都: 巴蜀書社.
- 汪維輝 2000. 『東漢—隋常用詞演變研究』. 南京: 南京大學出版社.
- 汪維輝 2003. 漢語“說類詞”的歷時演變與共時分佈. 『中國語文』2003(4), 329-342 頁; 2007. 『漢語詞彙史新探』, 1-25 頁. 上海: 上海人民出版社.
- 王国維 1917. 太史公繫年考略; 1997. 姚淦銘·王燕編『王國維文集』4, 309-326 頁. 中國文史出版社. (『王國維文集』所收の当該論文の原題は「太史公行年考」。但し脚注に 1917 年の「太史公繫年考略」に基づいたとある。かりに「太史公繫年考略」を原題としておく。)
- 王海棻 1982. 先秦疑問代詞“誰”與“孰”的比較. 『中國語文』1982.1, 42-47 頁.
- 王海棻 1987. 《公羊傳》《穀梁傳》疑問詞語的比較研究. 中國社會科學院語言研究所古代漢語研究室編『古漢語研究論文集』3, 85-103 頁. 北京: 北京出版社.
- 王紅生 2018. 論句尾動詞“為”的疑問語氣化. 《貴州大學學報》(社會科學版)34(4), 151-158 頁.
- 王景丹 2003. 《祖堂集》的“何”及其語體色彩. 『古漢語研究』2003(1), 48-52 頁.
- 王力 1937. 上古韻母系統研究, 『清華學報』12(3), 433-540 頁.
- 王力 1957. 『漢語史稿』(上冊). 北京: 科學出版社; 1980. 『漢語史稿』(上冊)(修訂本). 北京: 中華書局.
- 王力 1980. 『詩經韻讀』. 上海: 上海古籍出版社; 2004. 『詩經韻讀·楚辭韻讀』(王力別集). 北京: 中國人民大學出版社.
- 王力主編 1981/1998. 『古代漢語』(校訂重排本). 北京: 中華書局.
- 王力 1982. 『同源字典』. 商務印書館.

- 王力 1983. 『漢語語法史』; 1990. 『王力文集』(十一卷). 濟南: 山東教育出版社.
- 王力 1985. 『漢語語音史』. 北京: 中国社会科学出版社.
- 王雲路·方一新編 2000. 『中古漢語研究』. 北京: 商務印書館.
- 魏培泉 1999. 論先秦漢語運符的位置. *Linguistic Essays in Honor of Mei Tsu-Lin : Studies on Chinese Historical Syntax and Morphology*. ed. Alain Peyraube and Chaofen Sun, 259-297. Paris: Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales.
- 魏培泉 2000. 東漢魏晉南北朝在語法史上的地位. 『漢學研究』18 (特刊), 199-230 頁.
- 魏培泉 2001. 「弗」、「勿」拼合說新證. 『中央研究院歷史語言研究所集刊』72.1, 121-215 頁.
- 魏培泉 2003. 上古漢語到中古漢語語法的重要發展. 何大安主編『古今通塞: 漢語的歷史與發展』, 75-105 頁. 台北: 中央研究院語言學研究所.
- 魏培泉 2004. 『漢魏南北朝稱代詞研究』(『語言暨語言學』專刊甲種之六). 台北: 中央研究院語言學研究所.
- 辛島靜志 2000. 漢譯佛典的語言研究. 北京大學中國傳統文化研究中心編『文化的饋贈』(語言文學卷), 512-514 頁. 北京: 北京大學出版社.
- 邢公畹 1948. 《論語》中的否定詞系. 『國文月刊』66; 2000. 『邢公畹語言學論文集』, 168-185 頁. 北京: 商務印書館.
- 邢公畹 1949. 《論語》中的對待指別詞. 『國文月刊』(開明版) 75; 2000. 『邢公畹語言學論文集』, 186-211 頁. 北京: 商務印書館.
- 徐傑·李英哲 1993. 焦點和兩個非線性語法範疇: “否定” “疑問”. 『中國語文』1993(2), 81-92 頁; 李英哲 2001. 『漢語歷時共時語法論集』(新世紀語言學與應用語言學叢書), 67-88 頁. 北京: 北京語言文化大學出版社.
- 徐通鏘 1991. 『歷史語言學』. 北京: 商務印書館.
- 許理和著·蔣紹愚譯. 1987. 最早的佛教譯文中的東漢口語成份. 『語言學論叢』14, 197-225 頁. (Zürcher 1977 の中国語訳)
- 許世瑛 1973. 『論語二十篇句法研究』. 台北: 台灣開明書店.
- 許威漢 2001. 複音詞的產生是應詞彙內部調節需要. *Collected Essays in Ancient Chinese Grammar* (『古漢語語法論文集』), ed. Redouane Djamouri, 63-66. Paris: École des Hautes Études en Sciences Sociales, Centre de Recherches Linguistiques sur l'Asie Orientale.
- 閻若璩(清代). 尚書古文疏證; 2010. 閻若璩撰·黃懷信·呂翊欣校點『尚書古文疏證 (附: 古文尚書冤詞)』(清代學頁術名著叢刊)(上)(下). 上海: 上海古籍出版社.
- 楊伯峻·何樂士 1992. 『古漢語語法及其發展』. 北京: 語言出版社.
- 楊樹達 1928/1983. 『詞詮』. 上海: 上海古籍出版社.
- 楊秀芳 2005. 論閩南語「若」的用法及其來源. 『漢學研究』23(2), 355-388 頁.
- 衣川賢次 2007. 以敦煌寫經校訂『大正藏』芻議. 『轉型期的敦煌學』, 403-434 頁. 上海: 上海古籍出版社
- 陰法魯 1984. 詩經. 文史知識編輯部編『經書淺談』, 29-41 頁. 北京: 中華書局.

- 殷國光 1985. 先秦漢語帶語法標識的賓語前置句初探. 『語言研究』 2, 162-171 頁.
- 尹君 1989. 關於“何所…”這一形式. 『古漢語研究』 1989(2), 68-75 頁.
- 余志鴻 1984. 論古漢語補語的移位. 『語言研究』 1984(1), 104-113 頁.
- 俞理明 1993. 『佛教語言研究』. 成都: 巴蜀出版社.
- 俞敏 1981. 倒句探源. 『語言研究』 創刊號, 78-82 頁.
- 遇笑容·曹廣順 1998. 也從語言上看《六度集經》與《舊雜譬喻經》的譯者問題. 『古漢語研究』 1998(2), 4-7 頁; 遇笑容·曹廣順 2006. 『中古漢語語法史研究』(西南師範大學漢語言文字學研究叢書 2), 121-129 頁. 成都: 巴蜀書社.
- 遇笑容 2003. 說“云何”. 『開篇』 22, 48-50 頁; 遇笑容·曹廣順 2006. 『中古漢語語法史研究』(西南師範大學漢語言文字學研究叢書 2), 73-78 頁. 成都: 巴蜀書社.
- 袁毓林 1998. 『漢語動詞的配價研究』. 南昌: 江西教育出版社.
- 章惠康 2000. 記述三國史的著名史籍——《三國史》述評. 『衡水師專學報』 2000(2)(2), 15-20 頁.
- 張儒 2000. 也說疑問句尾“為”. 『中國語文』 2000(2), 168-170 頁.
- 張聞玉 1996. 試論何有·何 P 之有. 『古漢語研究』 1996(3), 30-33 頁.
- 張幼軍 2004. 『道行般若經』中“何所”的用法. 『古漢語研究』 2004(3), 54-57·93 頁.
- 張永言主編 1992. 『世說新語辭典』. 成都: 四川人民出版社.
- 張玉金 2006. 『西周漢語代詞研究』. 北京: 中華書局, 2006 年.
- 張振德·宋子然主編 1995. 『《世說新語》語言研究』. 成都: 巴蜀書社.
- 趙金銘 1995. 《遊仙窟》與唐代口語語法. 『語言研究』 1995(1)(28), 89-100 頁.
- 鄭之洪 1997. 『史記文獻研究』. 成都: 巴蜀書社.
- 鄭張尚芳 1987. 上古韻母系統和四等、介音、聲調的發源問題. 『溫州師範學院學報』(社科版) 1987(4), 67-90 頁.
- 鄭張尚芳 2003. 『上古音系』(中國當代語言學叢書). 上海: 上海教育出版社.
- 中國社會科學院語言研究所古代漢語研究室 1999. 『古漢語虛詞詞典』. 北京: 商務印書館.
- 周法高 1959. 『中國古代語法·稱代篇』. 台北: 台聯國風出版社; 1990. 『中國古代語法·稱代篇』(上)(下). 北京: 中華書局.
- 周光午 1959. 先秦否定句代詞賓語位置問題. 『語法論集』 3, 128-192 頁, 北京: 商務印書館.
- 周一良 1991. 說宛, 『魏晉南北朝史論集續編』. 294-299 頁. 北京: 北京大學出版社.
- 朱德熙 1985. 『語法答問』. 北京: 商務印書館; 1999. 『朱德熙文集第 1 集』. 北京: 商務印書館; 朱德熙著·中川正之·木村英樹編譯 1986. 『文法のはなし—朱德熙教授の文法問答』(基本中國語學雙書). 東京: 光生館.
- 朱冠明 2013. 漢譯佛典語法研究述要. 蔣紹愚·胡敕瑞主編『漢譯佛典語法研究論文集』, 3-45 頁. 北京: 商務印書館.
- 朱慶之 1992a. 『佛典與中古漢語詞匯研究』. 台北: 文津出版社.

- 朱慶之 1992b. 試論佛典翻譯對中古漢語詞彙發展的若干影響. 『中國語文』 1992(4), 297-305 頁.
- 朱慶之 1993. 漢譯佛典語文中的原典影響初探. 『中國語文』 1993(5), 379-385 頁.
- 朱運申 1979. 關於疑問句尾的“為”. 『中國語文』 1979(6), 443 頁.
(英語)
- Baxter, William H. 1992. *A Handbook Old Chinese Phonology*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bybee, Joan L., Perkins, Revere and Pagliuca, William. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Bodman, Nicholas C. 1950. Reviews of Karlgren's *The Chinese Language*. *Language* 26(2). 339-346.
- Bodman, Nicholas C. 1980. Proto-Chinese and Sino-Tibetan: Data towards Establishing the Nature of Relationship. *Contribution to Historical Linguistics: Issues and Materials*, ed. Frans van Coetsem and Linda R. Waugh, 34-99. Leiden: E.J. Brill.
- Boodberg, Peter. A. 1934/1979. Note on Chinese Morphology and Syntax. *Selected Works of Peter A. Boodberg*, ed. Alvin P. Chohen, 430-435. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Boodberg, Peter. A. 1937. Some Proleptical Remarks on Evolution of Archaic Chinese. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 2(3)(4). 329-372.
- Cheung, Samuel Hung-nin. 1977. Perfective Particles in the Bian-Wen Language. *Journal of Chinese Linguistics* 5. 55-71.
- Cikoski, John S. 1978a. An Outline Sketch of Word Classes and Sentence Structures in Classical Chinese—Tree Essays on Classical Chinese Grammar I. *Computational Analyses of Asian & African Languages* 8.17-152.
- Cikoski, John S. 1978b. An Analysis of Some Idioms Commonly Called 'Passive' in Classical Chinese—Tree Essays on Classical Chinese Grammar III. *Computational Analyses of Asian & African Languages* 9. 103-208.
- Comrie, Bernard 1981. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Oxford: Basil Blackwell.
- Culpeper, Jonathan. 2015. *History of English* (3rd edition). London and New York: Routledge.
- Dobson, W.A.C.H. 1964. *Late Han Chinese: A Study of the Archaic-Han Shift*. Toronto: University of Toronto Press.
- Feng, Shengli. 1996. Prosodically Constrained Syntactic Changes in Early Archaic Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* 5(4). 323-371.
- Graham, Angus.C. 1952. A Probable Fusion--word: 勿 wuh = 毋 wu + 之 jy. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 14(1). 139-148.
- Graham, Angus.C. 1967. The Archaic Chinese Pronouns. *Asia Major* 15(1). 17-61.

- Inkelas, Sharon and Zec, Draga. 1990. Prosodically Constrained Syntax. *The Phonology-Syntax Connection*, eds. Sharon Inkelas and Draga Zec, 365-378. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Karashima, Seishi(辛嶋静志)1998. *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* (正法華經詞典), Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica1. Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.
- Karlgren, Bernhard. 1926a. *On the Authenticity and Nature of the Tso Chuan*. Göteborgs Högskolas Årsskrift 32(3) .1-65.
- Karlgren, Bernhard.1926b. *Philology and Ancient China*. Instituttet for Sammenlignende Kulturforskning, Serie A: Forelesninger. Oslo: H. Aschehoug & co.
- Karlgren, Bernhard. 1929. The Authenticity of Ancient Chinese Texts. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 1.165-183.
- Karlgren, Bernhard.1940. Grammata Serica: Script and Phonetic in Chinese and Sino-Japanese. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 12. 1-471.
- Karlgren, Bernhard.1949. *The Chinese Language, An Essay on its Nature and History*. New York: The Ronald Press Company.
- Karlgren, Bernhard. 1951. Excursions in Chinese Grammar. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 23. 107-133.
- Karlgren, Bernhard.1957. Grammata Serica Recensa. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 29. 1-332.
- Kennedy, George .A. 1939. Metrical “Irregularity” in the Shih Ching. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 4(3)(4). 284-296.
- Lass, Roger1994. *Old English: A Historical Linguistic Companion*. New York: Cambridge University Press.
- Lehmann, Winfred P. 1973. A Structural Principle of Language and Its Implications. *Language* 49(1). 47-66.
- Li, Charles N.(ed.) 1977. *Mechanisms of syntactic change*. Austin: University of Texas Press.
- Liberman, Mark. & Prince, Alan. 1977. On Stress and Linguistic Rhythm. *Linguistic Inquiry* 8(2). 249-336.
- Meisterernst, Barbara. 2001. The Position of Interrogatives in Han-Time Text. *Collected Essays in Ancient Chinese Grammar* (古漢語語法論文集), ed. Redouane Diamouri, 265-287. Paris: École des Hautes Études en Sciences Sociales, Centre de Recherches Linguistiques sur l'Asie Orientale.
- Nattier, Jan.2008. *A Guide to the Earliest Chinese Buddhist Translations: Texts from the Eastern Han 東漢 and Three Kingdoms 三國 Periods*. Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica 10. Tokyo : The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.

- Nishida, Tatsuo 1976. Some Problems of Morpheme Stock in Sino-Tibetan: A Preliminary Observation. *Genetic relationship, diffusion and typological similarities of East & Southeast Asian Languages : papers for the 1st Japan-US Joint Seminar on East & Southeast Asian Linguistics*. 30-38. Tokyo :Japan Society for the Promotion of Science.
- Norman, Jerry. 1988. *Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Peyraube, Alain. 1997. On the Word Order and Word Order Change in Pre-Archaic Chinese. 『中國境內語言暨語言學』4 (中央研究院歷史語言研究所會議論文之二), 105-124 頁. 台北 : 中央研究院歷史語言研究所.
- Pulleyblank, E.G. 1995. *Outline of Classical Chinese Grammar*. Vancouver: UBC Press.
- Rochemont, Michael S. 1986. *Focus in Generative Grammar*. Studies in generative linguistic analysis v. 4. Amsterdam and Philadelphia: J. Benjamins Pub. Co.
- Rosemont, Henry Jr. 1974. On the Representing Abstractions in Archaic Chinese. *Philosophy East and West* 24(1). 71-88.
- Schuessler, Axel. 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese, A Companion to Grammata Serica Recensa*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Stockwell, R. P. 1977. Motivations for exbraciation in Old English. *Mechanisms of Syntactic Change*, ed. Charles N. Li, 291-316. Austin: University of Texas Press.
- Vennemann, Theo. 1974. Topics, Subjects, and Word Order: from SXV to SVX via TVX. *Historical linguistics*. North-Holl and Linguistic Series 12, eds. Anderson, John M. & Jones, Charles, 339-376. Amsterdam : North Holland.
- Weinreich, U., Labov, W. and Herzog, M. I. 1968. Empirical Foundations for a Theory of Language Change, eds. W. P. Lehmann and Yakov Malkiel. *Directions for Historical Linguistics*, 95-188. Austin and London: University of Texas Press.
- Zürcher, Erik. 1977. Late Han Vernacular Elements in the Earliest Buddhist Translations. *Journal of the Chinese Language Teaching Association* 12(3). 177-203.

(フランス語)

- Chavannes, Édouard. 1895. *Les Mémoires Historiques de Se-ma-Ts'ien*, t.1. Paris: Ernest Leroux Éditeur. (Web 上の図書館 American Libraries (下記サイト) に所収のものを参照した)
<https://archive.org/details/lesmmoireshisto05chgoog> (最終アクセス日 2022 年 2 月 28 日)
- Karlgren, Bernhard. 1920. Le Poto Chinois, Langue Flexionelle. *Journal Asiatique*. 11(15). 205-232.

(ドイツ語)

- Gabelentz, Georg von der. 1989. *Chinesische Grammatik*. Leipzig: T.O. Weigel. 1953. Berlin: Deutsche Verlag der Wissenschaften.

- Wackernagel, Jacob. 1892. Über ein Gesetz der indogermanischen Wortstellung. *Indogermanische Forschungen* 1. 333-436.